
君がいる世界【改稿版】

みなわ彌生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいる世界【改稿版】

【Nコード】

N9904T

【作者名】

みなわ彌生

【あらすじ】

目覚めると見知らぬ世界にいた少女は、何故か姫の代理として過ごす事になってしまう。

砂漠の中で魔力によって生き長らえている国、出会いと共に増えていく謎。

帰りたくとも何をすべきなのかはわからぬまま、待ち望まれていた痕跡だけが現われる。

身代わりだけではいられない？

序章・夢じゃない世界（一）

「起きてください」

気持ちよく眠っていた蘭は、妨げる声に不満を覚える。

（今日は休みなんだから、もう少し眠っていてもいいじゃない）

ぼんやりとそう思い、首元までかかっていた布団を頭が隠れるまで引っぱり上げた。普段、寝坊をしようが気にも留めず放っておくはずの家族が何を今更起こしに来るのかと、中途半端な目覚めのまに新たな眠りを求める。

（なんか声色まで違うし）

そこでふと疑問を抱く。

（声？）

蘭が考えていた相手は母なのだが、今聞こえてきた声はどうも男性のように思えた。

家族は両親のみであり、普段から自由に自室へ入って来るのは母だけだ。父は何か用事があれば扉越しに声をかけてくるはずであり、間近にいるなどありえない。

第一、聞こえてきた声は父とは全く似ていない。

布団を被ったままの覚醒しきらない頭が必死に動き出す。

昨夜は普段と変わらず自宅で眠りに付いた。残念ながら蘭には現在付き合っていると言える男性はいない為、泊まりに行くという事もない。絶対にここは自分の部屋であり、耳に入った声の持ち主がいるはずなどないのだ。

「蘭、どうなされたのです？ 体調が優れないのですか？」

見えはしないが再び聞こえた声は、蘭の名を呼んだ上で体調すらも気遣っている。どうやらこちらを知っている人物のようだが、残念ながら声だけでは思い出せそうもない。

（何？ どういう事？）

まさか覚えもしないうちに誰かを家へ呼び込んでしまったのだろ

うか？ それとも蘭が誰かの家へ入り込んでいるのか？ 疑問ばかりが頭の中を回り続ける。

（でも、どこにも出かけてなんていないし……）

我が家へやってきた誰かがいるのかと考えつつも、このままで疑問が解けるとは到底思えない。

被ったままの布団のおかげで蘭の視界は闇しか見えないのだ。引っぱり上げる前は確かに光を感じていた事を考えると、室内は明るいはずだった。

（なんだか、この布団すら知らないような気がする）

とにかく蘭は今布団の中にいるが、どうも感触が日頃馴染んでいるものではないようにも感じられてきた。この柔らかさは心地良いが、見知ったものとは言いがたい。

思い切って声の主を確認するのが一番なのだろう。恐る恐る両手でかけ布団を掴むと、ゆっくりと動かし瞳を覗かせる。柔らかな光が飛び込んでくるかと思えば、何故か視界は暗かった。

声をかけられたにも関わらず潜ってしまった為か、相手が覗き込むようにしていたらしい。

蘭はその顔を見て驚く。

さらさらとした黒い髪に透き通るような白い肌、そこにある穏やかそうな黒い瞳が心配そうにこちらを見つめている。随分と整った顔立ちではあるが、まったく見覚えがない。

「だ……誰？」

おかしい事態だと考えてはいたが、どうやら想像以上の状況が目の前には広がっている。蘭の口から飛び出した言葉はそれだけであり、目の前の青年は一瞬不思議そうな表情を浮かべはしたがすぐに柔らかに微笑んだ。

「どうしたのです？」

（知らない人、だよな？）

見知らぬ者へ向けているとは思えない表情に蘭は戸惑う。こうした笑みは信頼できる人物に向けるべきものであり、どうにも落ち着

かない。

こちらの反応を待っているのか覗き込んでいた格好を止めた青年の動きを追えば、自分はベッドに横たわっているらしいと知る。馴染んだシングルベッドよりもずっと幅のある布団の側に、青年が姿勢よく立っていた。

黒に金の刺繍が入った長いコートのようなものを羽織っている事は確認できる。まるで芝居でもしているような服装が、蘭に更なる違和感を覚えさせた。

（変な格好）

だがこれでどうやら自室にはいないようだとの確信を持ち、ようやく聞くことができる。

「ここはどこでしょう……？」

向こうは自分を知っているようだがこちらは全く覚えがないのだ。とにかく一つずつ質問をしようとすれば、青年は不思議そうに目を瞬かせた。

「貴女のお部屋でしょう？　蘭」

（わたしのお部屋？）

名を呼ばれているからには、青年は蘭を知っているのだろう。しかし、自分の部屋と言われたものの違和感は拭えない。

青年から視線を横へずらしてみると、見て取れたのは随分と広い室内に豪華な家具が置かれている事だった。

（全然知らない）

ただ、彼が言ったように名は蘭なのだ。まるで顔見知りのように話しかけてくるが、蘭は彼を知らないとはっきり思えた。

「確かにわたしは蘭だけれど、この部屋は知りません。そしてあなたも」

とにかくそう言うのと体を起こし、寝ていたのはやはりベッドだったのかと思いいながら立ち上がる。随分と大きな赤い絨毯が敷かれている床には驚いたが、まずは自分の姿だと確認すれば服装は寝る前に着替えたパジャマのままだ。

（やっぱり家にいたんだよね？）

記憶は違ってはいないはずだと蘭がパジャマに触れていると青年が息を飲んだように思えた為、瞳は自然とそちらを向く。

とにかく見知らぬ場所で見知らぬ人がいる状況だ。後ろをベッドに阻まれている為、数歩横へ移動し距離を取って青年と向かい合う。先程までの柔らかな表情を潜めた青年は、まず蘭の顔をじっくり見つめたかと思えば視線をゆっくりと下へ降ろして行き、足先まで見ると再び瞳を合わせてきた。

まるで値踏みをされているような落ち着かない状況ではあったが、蘭もどうしようもない。とにかく相手は自分を知っているのだろうと言葉を待った。

しかし、蘭の考えは間違っていたらしい。急に眉を寄せた青年は素早くこちらへ近づくと、突然腕を掴み身動きが取れないように後ろへ回された。

「とてもよく似ていますが、私の知っている方ではないようですね」声色すらも冷たくなった青年の手は蘭の両腕を後ろ手に掴んだままであり、出会った事のない状況にとにかく声を上げる。

「痛い、痛いってば！ 何なの？」

振りほどこうにも蘭の力ではびくともしない。動きの止められない頭と足で抵抗を試みるが、背後からはただ冷めた声が聞こえるばかりだった。

「貴女は敵ですか？ それとも、まさか味方とでも言うのでしょうか？ 彼女と同じ顔で何を企んでいるのでしょうか？」

優しい笑顔で接してきた為に気を抜いたのは間違いだったのかと、蘭は混乱したままに叫ぶ。

「ちょっと！ な……につ。やめて！ やめてってば！」

「何とはどういった意味なのでしょう？ 質問するべきはこちらであり貴女は真実を語るだけで構わないのですよ。被害者のような口ぶりはやめていただけますか？」

どうやら相手の求めている言葉を返せなかったらしく、腕にぎり

ぎりと力が込められた。

「い、痛っ。ちょっと、待って！ 敵とか味方とか何の事ですかっ。わたしはどうしてここにいるのかも知らないんです。あなたが何か知っているんじゃないですか？ お願いだから離して！」

とにかく自分の状況を告げるしかないと思死にわめくが、何故か鼻で笑われるような反応を得た。

「本来いるはずの人物がいなくなり、見知らぬ貴女がいる。さて、どういう事でしょうね？ 彼女はどこにいます？ 早く口にしてしまいなさい」

こちらの発言など信用してはいないらしい。青年の声は蘭こそが理由を知っているのではないかと告げる。

（もうなんなの？ 意味がわかんない）

このままでは腕がどうにかなくなってしまいそうだと、蘭は泣き声交じりで訴える。

「それはわたしも聞きたい事です。家で寝ていたはずなのに何でこんな知らない所にいるのか！ 本当に知らないの。ここはどこなの？」

どうしようもない状況に蘭の瞳から涙が溢れるが、掴まれている腕の力が緩む事はない。

「気付いたら見知らぬ場所で寝ていたと？」

そんなふざけた事があるかと言いたげな抑揚に、蘭は頭だけで思い切り振り向く。

その瞬間、青年の瞳は何故か驚きで見開かれた。

蘭自身、こんな話を突然されても信じられないだろう。しかし、実際にそうした状態になってしまっているのだ。信じたくないと言われても、信じてもらうほかはない。

「本当に自分の部屋で眠ったはずなのに、起きたらここにいたの！ お願いだから信じてよ」

背の高い青年を見上げながらも言い切れば、その瞳がどこか迷いを感じさせた。

「信じられると思いますか？」

しかし返ってくる言葉は否定であり、蘭はどうすれば相手の信用を得られるのかと思考を巡らせる。

（このままじゃ駄目。とにかく何かを言わないと）

すると突然、扉を開く大きな音と共に新たな声が割って入ってきた。

「ユージン！ 遅いぞ」

広い室内の為に蘭から扉までの距離は随分と遠かった。だが、相手を判別できない程ではなく浅黒い肌をした金髪の少年が現れたと認識はする。少々形は違うようだが青年のものと似た黒と金の衣服を着ており、腰に巻いた同色の布をはためかせながらこちらに近づいてきた。

ユージンと呼ばれた青年とその目の前に腕を掴まれ立つ蘭、二人の視線は少年へ向いており相手は勿論こちらを眺めている。

「なんだ？」

訝しげに眉を潜めながら近寄ってきた少年はまず蘭を見上げ、次にユージンへ視線を移した。

「誰だこいつ？」

「どなたでしょうね」

ユージンの素っ気ない返答を耳にしつつも少年の瞳は再び蘭へと向く。

少々遠慮しても良いのではないかと思う程のぶしつけな視線に蘭がどうする事もできないでいると、何故か名を呼ばれた。

「蘭みてえだな」

「そう思いますか？」

しかしどうも知られているような物言いにも聞こえず、蘭はただ二人を眺める。

「見た目はな、それ以外は似ていない。だが、近いんじゃないか？」
少年の発言にユージンの顔色が悪くなったように見えた。

「近いとはどういった意味でしょう？」

「さあな、俺は勘で言ってるだけだからな。だが、こいつは蘭じゃねえが蘭に近い。ところで、その蘭はどこにいる？」

少年が辺りを見回す仕草から、この部屋には誰かがいたらしいと蘭は知る。

「ランっていう人がいたんですか？ 私も蘭って言ってますが」

とにかく話に割り込もうと口を開けば、二人の視線が一気に注がれたじろいだ。

「お前もランなのか？」

「は……はい」

随分と年下に見える少年ではあるが、何故か圧力すらも感じてしまのおどおどと頷く。

「貴女もラン……しかし、随分と似ていますね」

「ああ、こんなに似ている奴がいるのかと思うくらいだな」

確か先程もユージインに似ていると言われたのだ。二人が呼ぶランという人物に蘭は似ているのだろう。しかし、近いとは何なのかとも思う。

質問すべきかと口を開こうとした瞬間、少年は蘭の額に手のひらを合わせた。突然の事にびっくりと体を震わせ首を引こうとしたが、少年は意地悪そうな笑みと共に告げる。

「別に酷い目に合わせるわけじゃねえよ。じっとしてろ」

何をしたのか全く分からなかったが少年はすぐに手を離し、今度はその手で自身の髪をかき上げた。

「やっぱり似てるってよりは、近いつて感じだな。どういうこった？ ユージイン、あいつは何か言ってたのか？」

どうやら別人のランという人物の話がされているらしいのだが、口を挟めるような雰囲気でもない。蘭はただユージインに腕を掴まれたまま、交互に二人の顔を眺める。

「そういえば、見えない時期があると言っていましたね」

首を捻りながらの様子からユージインにとっては曖昧な言葉らしい雰囲気を感じられたのだが、少年の視線が厳しいものへと変化し

た。

「見えない？ あいつがそう言っていたのか？ いった？」

「昨夜ですよ。限りなく近い先は見えない、しかし少し遠い先は見えるような気がする……と。意味がありそうですか？」

「なるほどな」

随分と年上に見えるユージインが敬語を使い、少年がぶっきらぼうに喋る姿は不思議な関係にしか見えない。だが、その蘭には全くわからない会話が二人には何かを与えたらしい。

少年の瞳が鋭くこちらを見据えてくると、ユージインも同じように蘭を眺める。

「お前がその限りなく近い先ってやつか」

「やはり、そうなりますか？」

「そうなるだろうな。ったくランの奴は肝心な事は口にしねえからな。ユージインもそれ以上は聞いていないんだろう？」

「ええ。しかし、ラン自身もはっきりとはわからない様子でしたよ」少年はただ言葉に対しての意見を述べているようであり、ユージインは何かに対する不安を示すような表情を見せている。限りなく近い先という言葉が指しているのは蘭だとは言われたが、やはり意味がわからず困惑する。

こういう事かはわからないが今ならば大丈夫だろうと口を開きかけた時、今度は掴まれていた腕が突然解放された。

「え……？」

驚いて見上げるとユージインは穏やかに微笑んでおり、急な行動にいったいどうしたのかと蘭は瞳をしばたたく。

「どうやら敵ではなさそうですね。痛かったですね？ すみませんね。セルア、この方自身何故ここにいるのかはわからないようですよ」

何がどうなって敵ではなくなったのかわからないが、状況は変化したらしい。

「知らねえか」

難しい顔をしているセルアを蘭が眺めれば、ユージンが提案する。

「とりあえず、落ち着いて話す事にしましょう」

序章・夢じゃない世界（二）

蘭はすすめられたソファに座ると、こちらに視線を向ける少年を気にしつつも部屋中に瞳を泳がせる。

目覚めたベッドが一番奥に置かれ、付近に衣服等を収納する為らしい家具が置かれているように見えた。その手前の窓際には机と椅子を置き周りを本棚が囲んでおり、更に扉に近い手前には低いテーブルを囲むように四方にソファが置かれている。蘭はそのソファに体を預けながら溜息をつく。

（お金持ちの家って事かな？ でも、なんでここにいるんだろ）

目覚めたら見知らぬ場所というのは困った自体だが、今ひとつ状況が把握できないままだ。

現時点でわかっているのは、色白な肌にさらさらとした黒髪と穏やかな黒い瞳の細身の青年がユージイン。浅黒い肌に癖のある金髪と鋭い碧の瞳の少年がセルアという事だけだった。

その二人も、色白の肌に黒い瞳で肩程までに黒髪を伸ばしている自分の名前が蘭だと認識しているだけのようには見える。

無駄に豪華とも言えそうな内装を眺めていると、扉が開きユージインが入ってきた。手にはティーポットとカップを載せたトレイを持っており、それらは静かに目の前へ並べられる。

低いテーブルを挟んだ向かいにユージインは腰を下ろし、右手のソファには先程からセルアが腰かけていた。

（いったいなんなのかしら？）

ユージインがいない間にセルアへ何かを聞いてみようかとも思ったのだが、少年は睨みつけるようにこちらを見ているだけであり、どこか会話を拒まれているような印象があった。

だから言葉もないままに部屋を見回していたのだが、ユージインが口を開く事で状況は変化する。

「セルア、何か聞いてはみなかったのですか？」

「どうせユージンが戻ってくりや説明が必要だろ？ 面倒だから聞いてねえよ」

ソファの上でだらしなくあぐらをかいている少年は、心底嫌だと言わんばかりに眉を潜めるとこちらに言葉を投げかけてくる。

「格好も変わってるし、こちら辺の奴ではねえんだよな。シェラルドとアンヘリカのどっちだ？」

「シェラルド？ アンヘリカ？」

耳覚えのない名称をぶつけられ聞き返せば、更に機嫌を損ねたらしい大きな溜息を吐かれた。

「それもわかんねえのか？ ここはウィルナ。ウィルナとシェラルドは国で、アンヘリカは町の名前だろうが」

もう少しわかるように話してはもらえないかと思いつつも、再び聞く。

「国ですか？」

「砂漠の中の国ウィルナですよ」

何を言われているのかがわからないという蘭の反応に、ユージンが補足をしてくれたようなのだが聞き覚えがない。そもそも何故突然に国名を言われなくてはならないのだろうか。蘭はこの場所にいる理由が知りたいだけであり、不要なものに感じられる。

「ウィルナという国は知りません。それよりもどうしてわたしがここにいるのかを知りたいんですか？ ここはどこなんでしょう？」

「だからウィルナだって言ってるだろうが。お前がここににいる理由なんて俺達も知らねえよ」

随分といらついた声に驚けば、ユージンが言葉を挟む。

「セルア、どうやら本当に伝わっていないようですよ。もっと優しく話せないのですか？」

「うるせえな。俺は常々こうだろうがよ。ったく何だってんだ？」

ウィルナを知らねえならお前はどこからきたんだよ？」

「どこからって日本に決まっているじゃないですか。わたしは日本の自分の家で眠って起きたんです。どうしてここにいるのかはわか

らないけれど、ウィルナなんて場所のはずはないでしょう？」

おかしいな会話には思えたが、二人がウィルナは国名だと告げるのだ。ならばこちらもと日本と返答したが、望むような反応はない。

「ニホン？ 何だそりゃ」

まるで聞いた事がないとでも言いそうな響きを耳にしながらも、蘭は言葉を続ける。

「こうして話もしているんだし、二人は日本語がわかるって事ですよね？ いったい何なの？ お芝居か何か？」

「芝居だと？ こんなしょうもない事をして誰に得があるっていうんだよ。勝手に人の家に入っているお前の方が問題だろうが、ランをどこへやった？」

セルアが背もたれから身を起こしテーブルへ手を着く姿に、ユージンが声を上げた。

「セルア、私達の間には根本的な問題があるようです。そこから話さなければ駄目でしょう？ そして貴女も感情的にはならずに着いてください」

少年の次にこちらへ目を向けてくる青年は不思議な程に落ち着いている。穏やかな笑みを浮かべ、静かに言葉を紡いだ。

「貴女はウィルナを知らない。これは本当ですね？」

「はい」

「そして先程言っていた、自宅で眠ったはずが目覚めるとあのベッドの上にいたというのも真実なのですね？」

「そうです」

セルアの押し付けるようなものとは違うユージンの言葉に、蘭は素直に頷いた。

「ならばニホンという場所から来たと考えましょう。私が不思議に思ったのはニホンゴといったものの意味なのですが、説明はできますか？」

「土地によって言葉は違うじゃないですか？ 私は日本語しか話せないんです。だからここは日本なんでしょう？ どうしてこんなお

かしな会話をする必要があるの？」

何とも不思議な質問ではあったが必死に応えれば、ユージンは困っているらしく眉を下げる。

「よくはわかりませんが、不思議ではありませんね。貴女の常識では土地によって言葉が違いますが、私達にそうした感覚はありません」

「感覚がない？」

「ああそうだ。言葉なんて皆同じだろうが？」

セルアの相槌にユージンは頷くが、やはり蘭には理解ができない。

（何がしたいのよ、いったい）

どうにも会話になっていくようで嘯みあわない部分があると思いつながら、蘭は立ち上がる。

「窓の外を見てもいいですか？」

「ええ、構いませんよ」

パジャマ姿のままに見知らぬ部屋におり、見知らぬ人物と会話をしているのだ。確かにおかしい事態ではあるが、窓の外は当然のものが広がっているに違いないと足を向ける。

最も近くにある窓へ近づいた蘭は、ガラス越しに外を見た。

まばらな木々と草花、小さな池が飛び込んでくる様子から庭であると確認する。しかし、その先を見通す事が叶わない。

「壁？」

見慣れている外壁とは違い、随分と高さのある壁が庭の先を完全に遮ってしまっている。石を積み上げた壁ばかりが見える景色に戸惑っている、ユージンが隣に並んだ。

「ここから町を見る事は叶いけませんよ。もし見たいのならば外へ出なければなりません。気になりますか？」

「そう……ですか」

気になるからこそ外を眺めたのだが、確かにこれではここがどこなのかを確認するのは難しい。

「なら、外へ出る事はできますか？」

見上げてでも石ばかりでは答えは見つからないと蘭は言ったのだが、隣にいるユージンは難色を示す。

「困りましたね。見られる事を考えると、そのままでは都合が悪いのですよ」

「え？」

何が困るのかと思っていれば、セルアも同意する。

「ああ、そのままじゃ無理だ」

「実はすでに困っているのですよ。通りかかった誰かが貴女を見たならば、卒倒してしまうかもしれません」

卒倒とは随分大げさなものだが、蘭を眺める二人の様子にふざけたものは感じられない。

「セルア、本当の状況を話しても構いませんね？」

「いいんじゃないか？ どうせそいつしか痕跡がないんだ」

外へ出たいと言ったはずが、状況は更におかしな方向へと進み始めていた。

本当の状況という不思議な発言をしたユージンは、そのまま説明を始めるのかと思えばセルアと共に室外へ出て行ってしまった。

一人残された蘭はすっかり冷めた茶を飲みながら室内を眺め、現状について必死に考える。

（こんなに広い部屋に、外が見えない壁？）

しかしあまりに情報が少ない為、思い浮かぶものもない。

何故か外から見られてはならないと、ソファに座っている事を義務付けられてしまっていた。特に気にせぬままに動き回ろうかとも思ったのだが、パジャマ姿を誰かに見られるのも気恥ずかしく、とにかくおとなしく座り二人の帰りを待つ。

「本当にどこなんだろう？」

この部屋には一つ扉があり、木製ではあるが随分と細やかな模様

を掘り込んだ品である事がわかる。おそらく廊下にでも繋がっているのだろうが、外へは出ていない為に真実はわからない。

（勝手に出てみた方がいいのかな？）

考えはしたものの腕を捻り上げられた経験からあまりに反抗する態度をとる勇気もわからず、静かに扉を眺めていると程なくしてユージンは現れた。

「お待たせしました」

何やら布に包まれたものを手にしているが、それについては触れずにユージンは正面のソファへ腰を据える。そして、こちらをじっと見つめたかと思うと、思いもしない事を口にした。

「貴女にはウィルナの姫の代わりとして、ここで暮らしていただきましょう」

「は？」

前触れもなく現れた台詞に蘭は声を上げはしたが、言葉にはならない。だがユージンはこちらの反応など気にしてはいないらしく話を続ける。

「ここは砂漠の中の国ウィルナ、名の通り砂に囲まれた国です。そしてこの国を治めているのはウィルナ王なのですが現在は病に伏せておられ、代わりを務めているのが王の娘ランになります。この部屋にいたはずなのは、その姫であるラン様なのですよ」

穏やかな笑みを向けられてはいるが、内容は決して凡庸ではない。いったい何を言い始めたのかと蘭はとにかく口を開く。

「な、何ですか急に？ わたしは外に出たいって言うただけで、どうして姫なんて言い出すの？ このままでは出れないって話だったでしょう？」

会話が変な方向に進んでいるとしか思えないのだが、ユージンはふざけた様子も見せずに頷いた。

「事情を知らない貴女には不思議なものに聞こえるかもしれませんが、しかし、姫であるランは昨夜あの寝台で眠りについたはずだというのに、今朝になれば貴女がいた。それが私達の認識している現状な

のですよ」

「お姫様がなくなって、わたしがいた……？」

真偽はわからぬままに繰り返せば、ユージンは困ったように眉を下げる。

「はい。同じ名で説明するとわかりづらくはありませんか？ 私が知っているランは姫、貴女をランと呼ぶ事にしましょう。構いませんか？」

実際、ランと言われると少し自分のような気がしてしまう蘭は素直に受け入れた。

「何故姫がいなくなりランがここにいるのかは正直わかりません。ただ、姫がいらないという状況は私達にとって大きな問題です。そして、貴女は驚く程姫に似ています。だから、代わりをしていただきたい。それだけの事なのですよ」

「それだけって……」

「仕方がないでしょう？ これが現実なのですから。初めは私も本人だと思った程にランは姫に似ているのです。見た目の違いは姫の方が貴女よりも随分と髪が長いというくらいでしょうね。性格はおそらく違うと思いますよ？」

わからない事や時間が欲しい時は止めてくださいね、と言うとなおユージンの話は続いたが、蘭は驚くばかりで口を挟む余裕もなかった。

「ウィルナには代々、その時生存する王家の一人に未来を見る力が備わっています。それはウィルナにとって吉か凶かを知る事ができる力であり、先視み（さきよみ）と呼ばれこの国をずっと支え続けてきた力です。それを今保有しているのは姫になります」

何も知らない相手に説明する為にはどうするべきかと悩んでいるのだろうか、時折間が空く。

「昨夜、姫は限りなく近い先が見えない、しかし少し遠い先は見える。と言っていました」

限りなく近い先とは先程にも聞いたものであり、まるで蘭がそれ

のような発言を二人はしていた。

「どういう意味ですか？」

「わかりません。しかし、ランがここにいる事と関係があるのだろうとは思っていますよ」

「わからないもので、何かがわかったんですか？」

質問がおかしな気もしたが、じゅうぶん伝わったらしい。

「先視みの力はその人物が国の為に良いか悪いかを見る事ができるだけです。自分の事を見ようとしても見えません。未来も遠い先、寿命より先は見えないと言われています。姫の言葉を考えると、姫自身が大きく関わる出来事で国の未来が変化しその間が見えない。そして終わった後の未来が見えると考えるのが妥当でしょう」

未来が見える、本当にそんな事があるのだろうか。

「わたしにはその先視みというものも信じられないんですが？ 未来が見えるなんておかしいと思います」

何故このような事態になっているのかもわからないままだが、とにかく今は話に合わせた質問をぶつける。壮大ないたずらでも仕組まれているのかと思ひもするが、目の前のユージンは真剣に言葉を紡ぐのだ。

「姫以外には見えないものですからね、疑ってしまうのも仕方ありません。しかし、先視みによってウィルナは成り立っている為、そう考えるほかはないのです。自室にいたはずの姫がいなくなり、代わりに貴女がいた。姫、ウィルナどちらにも関わる事だから先視みする事ができなかった。いいえ、先視みは確かに何かを告げていたのかもしれませんがね。姫は途中が見えないという不思議な言葉を口にしていたのですから」

「わたしがここにいる理由はわかりませんか？」

ランという姫がいなくなり、その理由が限りなく近い先が見えないという不思議な発言だと言葉上は理解している。だが、それがどうして自分に関わっているのかは全く見えてこない。

「それはわかりません。わかるのはランがここにいる事と、いませ

んが姫は確実に生きているという事でしようね」

初めて見た時程ではないが柔らかに微笑むユージンは、確かに蘭を敵とは思っていないのかもしれない。だが、蘭はこの状況を素直に受け入れようと思えなかった。

いない人間をはつきり生きていると言うユージンの話は本当なのだろうか？　そもそもランという人物はいるのか？　ただ単にこちらを騙そうとしているだけではないのか？

わかるのは自分自身が見知らぬ豪華な部屋にいるという事だけだ。そうした中、ユージンの話は続いていく。

「とにかく、ランにはこの衣服に着替えていただきたいのです。必要な事が終われば外を見せるとお約束しますよ」

何かを持っているとは思っていたが、どうやら着替えだったらしい。

序章・夢じゃない世界（三）

見た事のない服装でいられるのは困るという理由で、ユージンに姫の物だという衣服を渡された。

着替え終わるまでは扉の外にいろと言われた為に、蘭はとにかくパジャマを脱いだのだがどうにも落ち着かない衣装にとまどう。

（どうしてこんなにお腹が出るような服なんだろう）

黒のチューブトップ、そして赤いミニスカート。その上にチャイナドレスを思い出させる雰囲気赤い上着を羽織る、それが後身頃は膝裏の辺りまであるのだが、前身頃は胸の下辺りまでしかないのだ。チューブトップも前身頃と似たような位置までしかない。

腹が冷えないのかと思いつながら黒いブーツを履き、白い手袋をはめた。左腕と言われた方には金の腕輪が付いている。

もっと地味なものがいいと言え、とにかく今はこれを着てくたさいと強引に推し進められた。パジャマ姿のままも嫌ではあったが、こうも派手な服装も納得はできない。

二人が舞台衣装のような服装をしていたのだから、これも仕方がないのかと溜め息をつく。

「聞いた事もない国、いなくなったお姫様。そしてここにいろわたし……か」

本当にそうなのだろうかと疑問は拭えなかったが、流れに任せて着替えてしまっている。

（何かのイベントみたいなのとか？）

散々悩ませた後に真実を明かされるのか、笑われる為にこうした事をさせられているのか。

正直、頭が追いつかないままに物事が進んでしまっている。

「どうやったら、帰れるんだろう……？」

とりあえず見知らぬ場所にいるのだから、帰る方法を考えるべきだと蘭は目的を決めた。

（今はこのまま様子を見るべきよね？）

情報が足りないのだと無理やり自分に言い聞かせる事にして、蘭は扉を軽くノックする。

「ユージンさん？」

まだ二人以外には見られない方がいいと言われた為、蘭が扉の外を知る事はできない。それがさらに不信感を煽っているのだが、無理な行動で危険な目に合うのも嫌だと蘭はとりあえずユージンを呼び込む。

扉が開かれるとユージンだけではなくセルアも入って来たのだが、何故か少年は一抱えもある黒い糸の束を抱えていた。

お疲れ様です、とユージンは声をかけると先程と同じようにソファを勧めてくれた。蘭が素直に腰をかければ、側へセルアがやって来る。

「やっぱり似てんな」

「そうですね、似ている方がここにいる理由もつけ易いですし、良い事なのでしょう」

二人にはわかる会話がされる中、蘭は似ているというランについてを考えるがやはり情報が足りなかった。

（いなくなってるのと似ているって事しかわからないんだよね）

性格は違うようだと言われたが本当に見た目は似ているのかと聞こうとすれば、ソファの後ろへ周ったセルアが蘭の髪に触れる。

「最後の仕上げをするか」

そうして放たれた台詞はどこか不穏なものがあり、蘭は振り向こうとするのだがセルアが両手で頭を押さえた。

「動くな、作業がしづらい」

「な、何？」

小さな手ではあるが随分と力があるらしい。動けぬままに蘭が声を上げると、ユージンが咎めるように口を挟む。

「説明もなしに触るからでしょう？」

「ああ、悪い。これから髪を伸ばすからじっとしてろ」

「はい、……って、伸ばす？」

謝られた事に返事をした蘭だったが、その後の言葉に大きな声を上げてしまった。

「なんだよ、伸ばすって言っても術で付けるだけだぞ」

驚いたのかわずかに緩んだセルアの手の間隙を縫って蘭が振り向けば、目の前には黒い糸の束が差し出される。

「これをくつつける？ 術で？」

エクステの事かと思いつながらも、この糸が髪の毛の代わりをするとはとても思えない。二人の着ている衣服に似た色の糸は無造作に束ねられており、とてもではないが髪の毛の代用品とは言えないものだ。何よりも術という胡散臭い言葉が蘭を警戒させた。

「そうに決まってるだろ。あんまり見れるもんでもないから驚くのも仕方がねえか」

術そのものに対する説明がされないままに、セルアの手は再び髪に触れてくる。蘭はとにかくかぶりを振って聞いた。

「術っていったい何ですか？」

跳ね除けるような動きを蘭はしたが、セルアは髪に触れ不思議そうな声を出すだけだ。

「魔力を使ってに決まってるだろ、何を当たり前の事を言っ」

「待って、待ってください！ 魔力って何ですか！」

セルアが言い終わるのも待たず言葉を挟めば驚きの表情を返される。

「もしかして、術そのものを知らないのか？」

「知りません！ いったい何をするつもりなの？」

ようやく意識の違いを認識したかと思ったが、セルアの様子は変わらない。

「そうか。でもここにはあるんだよ。必要だからとにかくおとなしくしてろ」

どうにも怪しげな事をされるのではないかと思えてきた蘭は首を振るのみならず、腕も使って抵抗する。

「嫌よ！ 何なのよ胡散くさい」

蘭がセルアの手を振り払った事により、荒げた声が返された。

「胡散臭いとはなんだ。こっちは面倒だがやってやるんだよ」

「わたしはそんなの望んでません！ もう、そんな糸をくつつけるなんて信じられない」

「動くな、やりづらいだろうが」

しかしこちらの意見を聞き入れる気はないらしい、何が何でもとセルアが髪を掴んでくる。

「やめて、嫌よ！」

折角伸ばそうと手入れをしていた髪に、そんなものを付けられてたまるかと蘭はソファから立ち上がり逃げようとした。そこへようやく止める声が挟まれる。

「セルア、一旦止めましょう」

こちらの会話をただ眺めるだけだったユージインが移動し、セルアから糸を取り上げた。

「ランは本当に術を知らないようです。見知らぬ物を怖がるのは当然の反応でしょう？ 術師に出会わぬままに生きる者も多いのは確かですよ。もっと考えて対応なさい。貴方はこれだから」

「なんだよ」

まだ続きそうなユージインの言葉をセルアが遮る。元からきつく睨みつけるような瞳をした少年ではあったが、更に怒りが加わったように蘭には感じられた。

「俺が子供みたいだって言いたいのか？」

不服そうな姿にユージインははっきりと言い放つ。

「そうです。ランは城内の者とは違うのですから、気をつけてください」

「まったく……悪かったな」

不機嫌そうに言葉を漏らしたセルアの姿に溜め息をついたユージインは、今度は蘭の正面にやってくる。

「セルアが無理をしてすみませんね。貴女のいた所には術がなかっ

たのでしょうか？」

蘭が頷けば、ユージンは笑みと共に元のソファを勧めてきた。

「お座りください。貴女が納得するまでは何もしません」

「本当に？ わたしは髪を伸ばす意味もわからないんですが？ どうしてそんな事をしなければいけないの？ このままでも構わないでしょう？」

警戒し立ったまま疑いの言葉を向けてみれば、ユージンは表情を困ったものへと変化させるだけだ。

「姫の代わりをしていただく為にはその長さでは大事になってしまふのですよ。髪はとても重要な存在なのです。術は怖いものではありません。貴女がここに在る為に必要な事であり、体に害のあるものでもありません」

「だってそれを付けるんでしょう？ 取れるものなの？」

ユージンがセルアから取り上げた一掴みの糸へ目を向ければ、やはり髪 of 代わりにはなりそうにもなかった。

「今の髪型に戻したい時も大丈夫ですよ。本当に危ない事などありません。申しわけありませんが、どうしても髪を伸ばしていただきたいのです。座っていれば終わってしまう簡単なものですからね」

納得するまではしないと云いつつも、ユージンも髪を伸ばせと告げてくる。

（あんなもの付けるのなんて嫌よ。それにここがどこかもわかってない）

「もしそれを付けるのだとしても、一度外を見せてもらえませんか。窓から見える壁だけじゃ何もわからないもの」

するとユージンの表情は更に困ったものへとなってしまう。

「外へ出るのなら、なおさら髪を伸ばしていただきたいのです」

「意味がわからないわ」

「そうかもしれないませんが、伸ばしていただけないのなら外出はできません」

「長いものが短くなる分には切ったと言えは済むじゃない。逆の方がよっぽどおかしい状況だと思います」

「それができねえから伸ばせと言っているんだ。俺が説明もしなかったのは認めるが、この場に留まるには譲れない条件なんだよ。恨むなら全部俺に向けとけ」

そう口にしたセルアが蘭の髪にもう一度手をかけ、ユージンが顔を向ける。

「セルア、そこまでは言っていないでしょう？」

「ああ、わかってる。それでも俺が適任なんだよ。ちょっと髪が長くなるだけなんだ。お前今度は動くなよ」

何となく口を挟みづらい雰囲気、蘭は必要と言うなら受けてやろうと腹を括った。

（でも髪が長くないと外に出れないって、そんな事あるのかしら？）

どうやら直せるものらしいのだ。ならば構わないだろうと背筋を伸ばしソファに座りなおす。

「動きません」

「なら、いい。別に怖くないからおとなしくしてろ。綺麗にくっつけてやる」

セルアは蘭の髪に糸の束を当て、静かに梳くように手を動かしているようだった。ゆっくりとその動きを繰り返し、しばらくすると新たな束を当てる。そして、また静かに梳く。何度も何度も繰り返す。他にも何かしら道具があるのかと思えば、そうした様子は見られない。

（こんなので付くわけがないじゃない）

何の茶番かと思いいながらも、徐々に髪が重くなっていくように感じられるのだから不思議なものだ。

（気分的なものかしら？）

「終わりだ」

大事には至らないだろうとおとなしくしていれば、セルアは急に手を離すと部屋から出て行ってしまった。その素早い動きは声をか

ける暇もなく、蘭はただ驚くばかりだ。

「え？」

閉められた扉を眺めていると、ソファに座りこちらの様子を眺めていたユージインが苦笑する。

「私が機嫌を損ねてしまったようですね。貴女は気にしなくても大丈夫です、セルアは子供扱いをされるのが嫌いなだけですから」

「子供扱い？」

「難しい年頃なのでしょうかね」

あまり背も高くなく細い体、そして幼く見える顔を思うと十一、二歳程に思える。見るからに子供ではないかとも思ったが、あのくらしい頃はそうだったのかもしれないとも蘭は考える。

「それよりも自分の髪をご覧になったらどうです？」

ユージインの言葉に蘭は髪へと手を伸ばす。上から下へ動かし辿って行くと、普段は肩程でなくなるはずの髪が続いていた。それは、座っているソファの背もたれにかかり裏側へ下がっている。

全貌を確かめようと立ち上がった蘭は驚く。膝裏まで届きそうなそれは、本当の髪と変わらぬ色、艶、手触りで、継ぎ目も見当たらない。まるで、最初からこの長さだったかのように流れている。

「糸……じゃない？」

とても髪の代わりにはならない糸だったはずだと我が目を疑った。「セルアはこの国一番の使い手です、ただの糸を本物の髪に見せてしまう程にその力は強い」

ユージインが赤い紐を取り出し、両耳の上辺りの髪に結びつける。そして、広がった髪全体をゆったりとさせたまま毛先付近で一つに纏めた。その後、左右から数本ずつ髪を引き出し散らす。

「これで、貴女は姫と瓜二つ。いなくなった姫が代わりに置いたといえ、疑う者はいないでしょう。まあ、実際にそれを知らせる者はわずかですがね」

見知らぬ場所ではあるが、あくまで何かの余興だと蘭は思っていた。誰かが自分を驚かす為になにかをしたのであって、決して見知ら

ぬ場所だとは本当に思っていなかったのだ。

しかし、糸は何故か自分の髪となり艶やかにびびっている。

「本当に……魔法、なの？」

散らされた数本を手に取り眺めればユージンが小さく笑う。

「貴女の言葉ではマホウですか？ 私達は魔力を行使している事を術と呼ぶのですよ」

「……術」

魔法だろうが術だろうが蘭には関係がなかった。どうしてありえない事が起きるのか、それこそが問題なのだ。しかし、目の前のユージンには伝わりそうもない。

「ウィルナの姫、ランとしてここにいてくださいね」

穏やかそうな笑みではあるがどこか有無を言わせぬ雰囲気戸惑いながら、蘭は改めて周囲を見渡した。

序章・夢じゃない世界（終）

理由もわからぬままに姫の代わりをしろとは言われたが、蘭は本当に信じているわけではない。

あくまでこの場所にふさわしい服装にされただけであり、何故か髪の毛も長くはなってしまったが状況を把握しきれていないだけだ。とにかく姫としてこの部屋にいるとは言われたが、はいそうですと従うばかりもおもしろくない。

「私は外が見たいんです。この部屋だけでは納得できません！ 着替える前は外へ出してくれるって言ったじゃない」

着慣れない服装のままに訴えかければ、ソファに陣取る二人の反応は芳しくなかった。姿勢を正して座るユージィンは困った表情を見せる。

「姫はあまり外へは向かわれませんでしたからね。とにかく帰られるまでここにいていただければ良いのですよ？ まだわずかな時間しか経っていませんしね」

かたやだらしなくソファにあぐらをかいているセルアも、こちらに視線を向けはするが乗り気ではないらしい。一度部屋から出たにも関わらず呼び戻された事もおもしろくないといった素振りも見せている。

「ああ、基本的にあいつは外に出ねえからな」

二人の意見はぶつけてくるが、こちらの考えを聞き入れる様子は感じられない。

（いったい何なの？）

ウィルナという国の姫が外へは出ないという理由で蘭の意見は反対されていた。ある程度は従っていれば何かがわかるだろうと思っただが、どうにも埒が明かず声を荒げる。

「姫が外へ出ないのは関係なく、わたしが出たいんです。ここは本当にどこなのかを知りたいから言ってるんです。伸ばしたら外へ出

れるって言ったじゃない！」

おとなしくしているばかりでは何も解決しないと、蘭は身を乗り出して目の前のテーブルに勢いよく手をつく。

「何も見ないままに知らない場所だなんて決められません！ お願いだから外へ出して、いいえ出してもらえないなら一人でも出て行きます」

一箇所に留められるばかりでは意味がない。とにかく立ち上がろうとすれば、セルアが本当に仕方なさそうに溜息をついた。

「わかった、とにかく外へ行けばいいんだろ？ ユージン、行ってきたらどうだ？」

押し付けるように向けられた視線にユージンの瞳が見開かれる。

「私ですか？」

「ああ、お前の方が説明に向いている。俺はこの通りだからな」

どの通りなのがわからぬ台詞に、今度はユージンが笑みをセルアへ向けた。

「残念ながら私はこれからするべき事があります。セルア、貴方がお付き合いしてはどうですか？」

「俺がか？」

立場が逆になったセルアが嫌そうにする姿に、蘭はどうやら自分が二人に歓迎されているわけではないらしいと悟る。

「ええ、ここまでおっしゃるのですから店がある辺りにでも向かってはどうです？ 実際にランがどう思うのかを知るのも大切かもしれません。貴方こそが適任に思えますよ」

「ちっ、仕方ねえな……あいつが昔使ったやつがどこかにあるはずだ」

立ち上がったセルアがベッドの側にある引き出しを開ける姿を眺めながら蘭は考える。

（どういう事なのかしら？）

勝手知ったるといったセルアの動きを見てみると、本当にこの部屋の主は誰なのだろうかとも思えてくるのだ。よくよく考えると姫

は女性のはずであり、どうして男二人ばかりがここにいいのかという疑問も沸く。

セルアは乱雑に中身を取り出しているらしく、不要な品を床に投げ出していく姿にユージインが眉を潜めた。

「セルア、もっとやりようがあるでしょう？」

「うるせえな、出かけてる間にハンナに片付けさせろ。ランの筆筒の中身なんてよく知らねえんだよ」

（やっぱり違う？）

手馴れているのならばすぐに目的の品を見つけるはずなのだ。セルアはああでもないこうでもないとかを探しており、随分と床を散らかした後に新たな衣服を蘭に投げて寄こした。

「これなら出かけられる」

現在の服装で出かけるのは確かに気が引けたが、今度は随分とあっさりとした物を渡された。

「ねえ、どうしてこのままの格好じゃいけないの？」

「当然だろうが？ それはあくまでもランとしての服装であって、外に出るのはさすがに認められねえ。とにかくそいつに着替えろ」

何か理由があるようなのだが、セルアは説明するのも面倒だとユージインを伴って室外へと向かっていってしまう。

「また、声をかけてくださいね」

ユージインには優しくそう言われたものの、現状に不満を覚える蘭は苛々と座っていたソファから立ち上がる。

（ああもう、なんなのよ。脱いだり着たり無駄じゃない。何をさせたいわけ？）

とにかく外を知りたいと袖を通した衣服は麻のような素材でできたワンピースだった。袖のない膝に被る程の長さのそれと、皮製のサンダルを合わせた真夏のような格好ができ上がる。

再び呼び入れたユージインの手により、髪は一つに纏め高い位置に結び直された。本物の髪の毛に見えるだけはある、随分と長さのあるポニーテールが蘭の背では揺れている。

同行するセルアも似た素材の半袖の上着とズボン、サンダルという姿をしており、どこかで着替えてきたらしい。

「俺達はどうして外へ出るべきってこった。納得しろよ？」

こちらの質問にはもう答えたくない、少年は嫌そうな表情で蘭を扉へ促す。

この一室だけでは答えが出ないと思っていた扉の外は、同じように赤い絨毯の引かれた廊下であり片面に扉が四つあると蘭は確認する。

（部屋は随分と広かったけれど、あまり大きな家でもないのかな？）
恐ろしく大きな屋敷を想像していた程ではないと思っていれば、セルアに手首を掴まれ引っ張られた。

「俺の側から離れないのが条件だからな？」

自分よりもずっと小さな子供に手を引かれる姿は不思議なものだったが、とにかく外へ出られるのだから構わないと蘭は頷く。

（本当に、ここって何なのかな？）

初めに腕を捻り上げられはしたが、凄く酷い目に会ったわけでもない。もしかすると姫という立場にさせてくれる場所なのだろうか、世の中にある様々なコンセプトの店を思い浮かべる。

（なら最初からそれらしく扱ってもらえるはずよね？ 姫だもの）
少し違ふかと思ひながらも歩く廊下の先には扉があり、どうやら玄關らしい。セルアと共に屋外を目指す。

「どうしたの？」

先に土を踏んだセルアが振り返りこちらを真剣に眺めている姿に聞くと、素っ気ない返事だけがある。

「いいや、なんでもねえよ」

「そう？」

詳しい理由はわからぬままに扉を抜けると、窓から眺めた庭があり壁が立ちはだかった。しかし、視線を横へと向ければ更に驚くような建物があり、蘭は大きな声を上げる。

「な……なな、何これ！」

首が痛くなる程に高い建物がそびえ、とにかく全貌を見ようと上下左右へ目を走らせていると隣にいるセルアに馬鹿と言われた。

「でかい声を出すんじゃないやねえ。気付かれるだろうが」

小声での注意に困りながらも潜めるべきかと蘭も倣う。

「だって、これってお城でしょ？」

「見るからにそうだろうが？」

何を当然の事を言っているのだとセルアの目は語るが、蘭にとっては初めて見るものであり驚かずにはいられない。遊園地等にある城というものを見た事はあったが、記憶の中のどれよりも大きい。

「凄く大きい。何なの、ここって遊園地？」

早く事実を知りたいとは思っていたが、どうやらテーマパークのような場所らしいと隣を見れば、訝しげな表情が見える。

「なんだそのユウエンチってやつは？」

「遊園地は遊園地でしょ？ ジェットコースターとかお化け屋敷とか」

「じゃえっと……？」

「知らないの？」

「知らねえよ、そんなもん」

時折伝わらない言葉があるとは思っているが、本当に遊園地を知らないのだろうか？と蘭はセルアを見下ろす。簡素な服装は劇で言うなれば平民一とでも呼ばれそうな雰囲気であるが、それは自分も同じ事だった。

（よくわからないわ）

どうしてこのような流れになっているのかと再び考えていると、セルアが今まさに出てきた扉を指差す。

「お前、一人でここへ入れるか？」

「どういう意味？ 開けて入って事？」

何故再び戻らねばならないのかと思ひながら聞き返すと素直に頷かれてしまい、とにかく開ければいいのかと蘭はドアノブを掴んだ。室内は豪華であったが、玄関の扉は特に目新しいものも感じない

木製である。内側へと開くそれはわずかな音と共に動き出し、蘭の視界には赤い絨毯を敷いた廊下が飛び込んでくる。

「わかった、行くぞ」

するとセルアはただそう言って掴まれたままである蘭の片手を引っ張るのだ。

「何なの？」

「少し確かめただけだ」

ぶっきらぼうな物言いはユージンに対しても変わらない。こうした口調の少年なのだと思っただけはいるが、扉を開かせるという行為は不思議だった。

そして何故かセルアは口端を上げて見せたのだ。

「お前、変わってるな」

本当に意味のわからない発言に首を捻りながらも、蘭は壁の外へと向かい始めていた。

部屋の窓から見えていた庭は随分さっぱりとしているものだった。実際はとても広い空間を使い切りもせずに、窓から見える範囲にのみまばらに木を植えている。合間には小さく浅い池があり、高さのない草花が存在していた。

（眺める部分だけに欲しかったって事？）

室内からはそれなりに見えるのだが、実際に側へ寄るとあまり完成されているようには見えない。

蘭は不思議に感じているがセルアは見慣れているのか気にも止めない。こちらの腕を引っ張りながら足をどんどん進めていく。

外を見たいと訴えたのは自分である為、蘭も素直に従いしばらく壁伝いに歩かされる。

「大きな声を出すなよ？　あと、誰かに会っても喋るな。何かあったら俺がどうにかする」

人との遭遇を嫌がるセルアに頷いていると、今度は小さな木製の

扉が目に入った。ひっそりと隠れるように存在している扉に少年は何故か手のひらを当て、そしてすぐに手前に引く姿は蘭には見慣れないものであったが、どうやら鍵もなく簡単に開くらしい。腰を屈めてようやく通り抜けられる程の空間ができる。

「さっさとこいよ」

手を引かれながらも先を目指せば、蘭の眼前にはまたもや想像以上のものが広がった。

「な……っ」

何なの！ と叫ぼうとしたのだがセルアの腕が蘭を引っ張り、意識が逸れる。

「いちいち騒ぐな。気付かれたら面倒な事になるんだよ」

優しさの欠片もなくこちらを睨む瞳と共に言葉は続く。

「絶対に騒ぐなよ。面倒はごめんだ」

「わかったわよ。もう、大きな声は出さないから」

理由があるからこそ声を出すなど言われたのだろうと、蘭は小声で答えながらも辺りに視線を巡らせた。

まず目に入るのは美しい色の石を敷き詰めた道だ。幅は自動車を通れるようなものではなく、徒歩や自転車での移動がせいぜいだろうと思える。鮮やかな石は全て青で統一されており、目の前を真っ直ぐに流れていく川のようにも見えた。

そしてその片側が蘭が今ぐり抜けてきた壁だった。振り返り見上げると壁越しに城の上部が目に入り、更に高く寄り添うように塔が一つ存在している事に気付く。

「この壁ってあのお城を囲んでいるの？」

「そうだ」

自分のいた場所は確かにこの壁の中である。しかし姫というからには城の中にいるべきではないのかと疑問が浮かんだが、そこは今は必要ないだろうと更に景色を眺めた。

道も壁も石で造られていたが、城も塔も同じような石材らしい。白っぽい石ばかりが目につく中で青く彩る道だけが不思議な程に目

立つ。

城と壁がある反対へと目を向ければ、同じように白っぽい石で造られた家屋が立ち並んでいた。それは蘭が目覚めた部屋のある屋敷とよく似た大きさと外観を持っており、きっちり配置されているように感じられる。

(何……ここ?)

おかしい場所にいるとは思っていたが、とてもではないが規模が大き過ぎると蘭は眩暈すら起こしそうになった。

「おい、大丈夫か?」

血の気が引いたのかくらくらとする自身に戸惑いながらも、手を掴むセルアを見ればさすがに心配されているらしい表情がある。

「うん……大丈夫、かな。もう少し違う所にも行きたい、かも」

外へ出れば答えが見えるはずだと思っていたものが、更に深まるばかりなのだ。蘭の思考はままならない。それでも先を指そうと思えたのは、どこかに現実的な何かがあると信じているからだった。「本当か? とりあえず行くからな?」

手を引きながら目の前を歩くセルアに続いてはいたが、蘭の目は景色を見てはいたものの不安ばかりが増していた。どれだけ進めど見知ったものには出会えず、今の自分と似たような服装をした人々とすれ違ふ。会話は聞こえてくるがそこで話されている内容も聞いた事のない名称が入り混じり、安堵できるようなものではなかった。ユージンが言っていたように店のある通りへセルアは連れて行ってくれたらしいが、蘭が知るような建物は一切存在せず、売られている品も見知らぬものばかり。どれだけ歩こうとも気持ちが晴れる事はなく、しまいにはセルアに引きずられるように足を進めているだけだった。

言葉を発する余裕もない為、蘭は自ら質問もできない。セルアは時折振り返っては訝しげに見上げてはくるが、率先して何かを伝えようとも思っていないらしい。

道順もわからぬままに連れまわされていると、いつの間にか元の

位置へと帰ってきており蘭は促されるままに屋敷へ戻った。

「お帰りになられましたか」

今のところ最も滞在時間の長い部屋には、ソファに座り本を眺めるユージインの姿がある。蘭はただセルアに引っぱられるようにソファへ向かわされ、強引に座るように勧められた。

「ユージイン、城に行っていないじゃねえか」

こっちは面倒事に付き合わされたと含むような口ぶりと共に、セルアは蘭の右側に当たるソファへと寝転ぶ。正面にいるユージインは開いていた本を閉じると、わざとらしく笑みを浮かべるだけだ。

「一度は行ってきましたよ。今日はこちらにいるべきだろうと色々手配をしてきたのです。セルアの分も言付けてきました。必要な事でしょう？」

「それくらいわかってる、俺は言いたいだけだ。こっちはこいつがすぐに大声を上げそうになるから大変だったんだぞ」

どうやらしっかりと分担した行動だったらしい。ユージインは仕方ありませんねと言った後に、何故か不思議な言葉を少年に向けた。「ならば、セルアにとっては随分と新鮮だったのではありませんか？」

「変な言い方をするな。ったく、外に出た途端に様子がおかしくなりやがって」

何やら意味合いがあったように見えたのだが、セルアはすぐに話を変えてしまう。ユージインもそれで構わないのか、蘭へ目を向けると首を傾げた。

「どうかなされたのですか？ 随分と顔色が悪いようですよ」

「さあな、城を見れば驚く。城壁と外を見ても驚く。見てるこっちも疲れるくらいだったな」

蘭よりもセルアが先を越したが、決して間違った言葉ではない。「だって、本当に知らない景色ばかりだったんだもの……驚かないなんて無理よ」

外にさえ出れば真実が見えると思っていたはずが、疑問が大きく

膨れ上がってしまったのだ。舗装された道路もなければ、見慣れた建築物もない。店に並ぶ品は見た事もなく、人々の肌も髪も様々な色があり統一感がなかった。

驚いたとは発言できたが、それ以上が浮かばなかった蘭は暗い表情で二人を見比べる。

セルアの金髪と褐色の肌はここでは決して珍しいものではないらしい。あまりにも色数が多かった為に覚えきれない程、様々な人種が入り混じっているように見えた。ユージンは黒髪ではあるが、肌が透き通るように白い。やはり何かが違うのかと思わされる雰囲気を持ってはいる。

「そうですか、ならばやはりランはここを知らないと?」

「見た限りではそうらしいな。そうなんだろう?」

二人は顔を見合わせてはいるが、蘭にこれといった情報を与えない。

「全然知らない、どこなのよここ?」

苛々と言えば、こちらを見つめるセルアの眉が潜められた。

「ウィルナだって言っただろう?」

「そのウィルナが何なのかもわからないのよ! わたしこんなに大きなお城がある場所なんて知らないし、車も走らないような道も知らないわよ。服装だって見た事ないし、どういう事? テーマパークかなんかじゃないの?」

真実があるならば教えて欲しいと訴えているのだが、セルアには全く伝わらないらしい。訝しげに見つめられるばかりだ。

「なんだよ? さっきはそこまで慌ててなかっただろうが、てーま何とかも俺達にはわからねえ」

「だって、本当に知らない所なんだもの。何かに騙されてるんだと思ってたのに!」

「騙されてるってなんだよ。こんな大げさないたずらがあったたまるか。こっちだって一人いなくなってるんだよ!」

「わたしはそれも嘘だと思ってたの!」

会話をしているのが自分よりもずっと年下の少年だとはわかって
いるが、感情を抑えられないままに蘭は言葉をぶつけてしまう。す
るとセルアも応戦するように反論してくるのだ。

「嘘とはなんだ嘘とは！ 知らねえ奴に親切にしている側の身にも
なれ」

「わたしだって知らない場所にいるんだからわかってよ。そっちは
二人いるだけ条件がいいじゃない。場所だって知ってるみたいだし」
更に言ってやろうと蘭は思っていたのだが、ユージインが割り込
む。

「セルア！ 相手は姫ではないのですから程々になさってください。
ラン、貴女も落ち着きなさい。騒いでも何も変わらないでしょう？」
大きな声に二人が勢いを失うと、ユージインの呆れているらしい
瞳がランとセルアを交互に眺め溜息をついた。

「二人の気が合うのは構いませんが、今は実りのある会話をしてく
ださい」

「気が合うってのはなんだよ？ ふざけんな」

今度はユージインに噛み付こうとセルアが口を開いたが、相手は
そんな気もないらしい。冷笑を浮かべると強引に話を始める。

「ランがウィルナを知らないというのは信じるほかないのでしょうか。
セルアとそうやって会話ができる時点でわかります。貴方もそれが
わかっているのでしょうか、もっと上手く立ち回りなさい」

答えはいらないという素振りですらセルアに視線をぶつけたユージ
インは、次に蘭へ目を向けてくる。

「そしてラン、貴女も騒ぎ立てないでください。何もわからないと
いう条件は皆一緒のようです。冷静に必要な事を見極めましょう」

強引に割り込まれたが、確かに騒ぎ立てたところで解決する
ような状況でもない。蘭は素直にはいと頷き、ユージインの更なる
発言を待った。

「確かに、どうしてランがいて姫がいなくなったのかはわかりませ
ん。しかし、姫を思うところした事態もないとは言い切れないので

はないですか？」

現時点では蘭は二人と共通の知識を持っていないように思える。だからなのかユージインはセルアへ姫に関しての話題を向けた。

「……確かに。だが、するなら俺達は巻き込まれるはずだろうか？ あいつはあいつで予想外の状態になっていると考えるべきだ」

「ですがセルアは姫が無事だと思っているのでしょうか？」

「当然だろう？ 俺がいられるって事はあいつもどこかにはいる」

「それだけが救いですね。心配ではありますが、とにかくこちらのランがいる事にも意味はあるのでしょうか？」

「そりゃそうだろう。何もしてねえのに自由に出入りができるんだ。意味がなかったら困っちまう」

その発言に何故かユージインの瞳がはつきりと驚きを示す。

「それは、弾かれないという意味ですか？」

「ああ。俺もどうなるかと思ったんだが、普通に通りやがった」

セルアは首をすくめるだけの反応だったが、ユージインの眉は酷く寄せられた。

「試させたと？ 危険だったのでは？」

「危険だろうが見極めないわけにもいかねえだろう？ とにかくこいつは自由に出入りができる存在だ」

「自由に……それは私や姫のようだという意味ですね？」

「当たり前だ。近いってのが関係してんのかもな」

本当に理解できない会話が蘭の前では続けられている。出入りをした場所は屋敷と壁に設えられた扉くらいのも物だったが、何故議題になるのかすらわからない。

「それで、何の為にわたしはここにいるんですか？」

意味があると二人が告げているからこそ聞いたのだが、セルアはまたも首をすくめるだけだ。

「それはわからねえ」

「全く困ったものです。姫もどこへ行かれていますのか」

二人の困りきった表情を見る限り、蘭と同じく理由がわからない

のかと思える部分はある。だが、本当にランという人物がいたのかさえわからない。服装もまるで自分の為に挑めたのかと思える程にじっくりとくるものであり、違和感ばかりが残った。

「本当に二人共、理由がわからないんですか？」

何か隠してはいないかと蘭の疑いは拭えないままであり、棘のある発言の為かセルアの瞳もきつくなる。

「ああ、何度もそう言ってるだろうが？ 繰り返そうが変わらねえよ」

「そんな事言ったって納得できないんだから仕方ないじゃない。もつとわかりやすく説明がして欲しいんです」

応戦したくなる物言いに蘭の語気が強まれば、ユージインがまたも言葉を挟む。

「セルア！」

見知っている分の差なのか少年だけが注意を受け、蘭もさすがに思い留まる。

「こうも似てるとおかしな気がするんだよ。まったく中身だけ別人になったみたいじゃねえか」

片手で髪をかき上げながら眉を潜めるセルアに、ユージインの声がわずかに荒れた。

「まさかランだと言うのですか？」

「いいや別人だ。あいつは好き勝手な事はするが芝居は向いちゃいねえ。ここまで見事に別人を演じられると思うか？」

二人の瞳が蘭へ向き、すぐにユージインが苦笑する。

「それはありませんね」

セルアも大きく頷き、すると今度は強制する発言が蘭に向けられた。

「だからお前はランであってランではねえんだろう。そして、その理由はお互いにわかんねえ。それだけは納得しろ」

二人の不躰な瞳に晒されながら、蘭は理不尽だと訴える。

「何よそれ」

「仕方がないでしょう？ 私もセルアも貴女も何故こうなっているのかかわらないのですから。とにかくこの部屋でしばらく過ごしてくださいね。徐々に何かかわかるかもしれませんよ。この屋敷にいる限りは貴女の身の保証はします。本当にわからないのならこのまま姫としてここにいてください。それがお互いに為になるでしょう？」

「お互いの為？」

「ああ、こっちは一人いなくなっただよ。そして、代わりにお前がいた。理由はわからねえが放り出せる状況とは言えないんだ。しばらくはここにいろ」

ただ二人はここにいろと言うばかりだが、確かに蘭は行ける場所がなかった。セルアに連れられた限りでは、見知らぬ土地であるという結論しか生み出せないのだ。

随分と広い場所のようであり、更に先には何かがあるのかもしれないのだが現時点では個人行動を取る勇氣もない。

蘭がどうしようもない状況に言葉を出せずにいると、ユージンが告げた。

「貴女はここで姫のふりをしている。私達はその間に理由を探し出す。勿論、必要があればランの手も貸していただきます。それで構いませんね？」

構う構わないではなく、今の蘭には他の選択肢が与えられてはいない。

「仕方がない……とは思っています」

「ならば、姫の姿をしてこの屋敷に留まってください」

蘭はこれから、城を離れる事となった姫の代わりに住まわされた者として扱われるらしい。

一章・砂礫と岩の狭間（一）

蘭がウィルナへ来て、すでに二ヶ月が経とうとしていた。見慣れはしたが、それでも珍しいと思える景色に目を奪われていると足は小さな段差に引っかかる。

「わわ……っ」

ぐらりと傾いだ体は地面に向かう事はなく、何かによってその場に留められた。

石畳に叩きつけられずに済んだと安堵しながら見上げれば、蘭を支えていたのは背の高い青年だった。日焼けをした肌に力仕事でもしているのさであろうか衣服越しでもわかるがっしりとした体。灰色の短髪に、青い瞳という見慣れぬ色合いが印象的だ。

「大丈夫？」

どうやら正面から歩いてきた人に倒れ込んでしまったらしい。すっかり寄りかかる格好になっている姿勢を正すと、蘭は慌ててお辞儀をしようとしたが思いとどまり言葉だけを向けた。

「すみません。ありがとうございます」

「気にしないで、足元に気をつけていないとまた転ぶよ」

ぶつかってしまった事への不快感も見せぬ笑顔は魅力的なものであり、蘭の瞳は吸いつけられるように青年を眺める。しかし、相手はこちらに興味もないのか羽織っている厚手のコートを揺らしながら先へと進んでいってしまう。

（なんだか格好いい人だったな）

そう思いながら遠ざかる姿を追っていれば、聞き慣れた声が降りかかる。

「おい！」

目の前にやって来たのはセルアなのだが、蘭の方が背が高い為に視界を阻まれる事はない。人ごみの中で頭一つ分飛び出ている青年の姿を見せないように、セルアの手のひらが目前へ現れた事でよう

やく気付く。

「あ、セルア」

明らかに不機嫌な表情の少年に視線を落とすと、手首を強引に掴まれ引つ張られる。

「勝手にいなくなるなって言っただろうが？」

セルアが進み始めた方向は青年とは逆の為、蘭は目で追う事をやめ体の向きを変えた。

「ごめんね、気になるお店があつて。今ね、転びそうになったところを支えてくれた人がいたんだ」

とりあえず離れた理由と出来事を口にするれば、セルアの眉は更に潜められる。

「それは俺も見てた。お前足が上がってないんじゃないのか？」

「そんな事ないよ！ 上がってるって」

セルアと一緒にいるならばと許された外出にも関わらず、勝手な動きをした自分を怒っているように見えた瞳が細められる。

「なら転ばないだろうが」

口端を上げる仕草に安堵しながらも、蘭はセルアと共に街を歩き始めた。

理由もわからぬままに姫の代わりをする事となり、何をさせられるのかと内心怯えながら過ごし始めたのだが、ユージンとセルアが蘭に求めたのはただいる事だった。

食事、睡眠をきちんと取り、規則正しい生活をしていればいい。その他に求められたのは、敬語を使わず、ユージン、セルアと名だけで呼ぶ事と絶対に頭を下げないというものだった。

お辞儀をするなどというのは不思議に思えたが、この場所では滅多に使うものではないらしく、蘭の動きの中で最も気にしなければならぬ点だと注意されている。

更には勝手に屋敷から出ないという条件もつけられたが、蘭は素

直に受け入れていた。見知らぬ場所で単独行動をする勇氣もなく、とにかく居場所があるのならと従ったのだ。

屋敷には身の回りの世話をしてくれる女性が一人いる。ハンナは蘭の母親程の年齢で長い間王宮に仕えているらしい。姫の代わりに住まわせると聞いて驚いた顔をしていたが、すぐにラン様のお望みなんですねと納得していた。

通常ならば騒ぎ立てるべきではないかとも思えたのだが、ハンナはラン様は何をしだすかわかりませんからねと笑うばかりだ。今回は何をお考えなのでしょうと、蘭には随分と呑気な発言をする人物にも見えている。

よく似ている蘭にまるで本物のラン様のようにだと言いながらも、しっかり別人のランとして扱ってくれている。姫の代役ではあるが、それは見た目と屋敷にいる部分であり蘭らしくしていて構いませんよと笑う。

そのハンナは空いた時間に話し相手になってくれたりもするが、やはり忙しいらしく微々たるものだ。

ユージインは毎日顔を見せはするのだが仕事が多いらしくあつという間に帰っていき、セルアは氣が向くと一日中いてくれたりもするが数日置きにしか現れない。

何日かは屋敷内を歩き回り、眺めているだけでも時間が経った。しかし、その物珍しさも次第に飽きが出始める。本でも読めるのであればどうか頑張れそうな氣もしたが、文字が読めない。初めは五十音と照らし合わせればある程度読めるのではないかと頑張ってもみたが、何か色々と法則があるようでうまく当てはめる事はできなかった。

外へ出るには付き添いを必要とされるがセルアとユージインの都合は付かず、屋敷内でもはっきりとするべき事はない。与えられた範囲で興味のあるものへ意識を向けるだけであり、安穩と過ごしているだけなのだ。

どうにか家へ帰りたいとは思っても、周りは日本を知らないと言

い放つ。蘭自身もウィルナという国は聞いた事もなく、景色や服装を見る限りでは見知っているとも言えはしない。

これは夢であり、寝て覚めれば当たり前前の空間が広がると期待して床につく日が幾度もあった。しかし、蘭は姫の為に置かれているというベッドで目覚めるばかりであり、泣こうが焦ろうが喚こうが、ウィルナという国だけが目の前に現れる。

理由があるに違いないと二人は言い、蘭もわずかに納得はしていた。初めのうちは何かに騙されていてすぐにからくりが現れると思いましたが、そういったものでもないらしい。食べ物も知らない食材が使われているのを厨房で目にしており、日々違和感ばかりが増している。

ただ屋敷にいるという約束は、初めは本当に簡単に思っていた。しかしするべき事がないというのは思っていた以上に大変だったのだ。とにかく時間ばかりが過ぎていくのだが、できる事が少な過ぎる。そこへ見知らぬ土地にいて、何をどうすれば帰れるのだろうかと不安も募っていく。まるで閉じ込められているような状況に息が詰まりそうだと溜息ばかりがこぼれる。

二週間もすると蘭はすっかり元気がなくなり、ぼんやりとしていくようになった。外にも出ず屋敷の中にばかりいるせいか気が滅入って仕方がない。

その姿を見かねたセルアがようやく屋敷の外へ連れ出してくれるようになり、今日は五度目の外出だった。

さすがに屋敷で過ごしている服装ではなく、初めて外へ出た時と同じくウィルナで一般的らしいワンピースを着ている。髪を一つに纏め高い位置で結うのも変わらず、セルアと並んで街へと向かってきたのだ。

赤と黒は王宮にいる者のみが身に着けられる色らしく、あの髪型にも意味があるという。本物の姫であればそのままの姿で出かけるのだが、さすがに似ているだけの蘭は許されないらしい。あくまで姫は国内にいたいと思わせる為に、あの服装で屋敷に置かれているよ

うだった。

姫は何かに没頭すると何ヶ月も屋敷に閉じ籠ったままという事も珍しくなく、蘭がただ屋敷にいるだけでも不自然には見えないらしい。そのせいもあってか、外出させるという発想が生まれなかったとユージンが散々謝ってくれた。

セルアもあいつに必要なものが揃っているだけだから、確かに大概の奴は暇になるに違いないと、より気にかけてくれている。

蘭が似ている顔を出して歩いても大丈夫なのかと聞くと、雰囲気があまりに違う為、誰も気付かないだろうとセルアに言われた。前は庶民向きだと馬鹿にされているような口調も付随していたが、ユージンも否定はしないという反応だった。

何故城の中ではなく小さな家屋にいるのかと不思議に思えば、姫本人が望んで建て住んでいたものだと言明を受ける。

決して無下に扱われているわけではないのだが、優遇されているわけでもない。姫の格好をして屋敷の中にいるのなら、邪険にはされないといった状況だった。

ウィルナは蘭が見知った世界とは大きく違っている。城を中心にたくさんの家屋が立ち並び、その中を蜘蛛の巣状に道が広がる。更にはその周りを驚く程高い壁が国を丸ごと囲んでいるのだ。城よりも高い壁の外には砂漠が広がっており、砂が入り込まない為にも高さが必要とされているらしい。

建造物は全てが白い石を積み上げた造りであり、道は様々な色合いの石を並べている。ただ、道の石の高さが揃っていない為に先程のようにけつまずいてばかりいた。

そして、石と同じ位に存在するのが木と水だ。どの家の周りにも木があり池がある。外は砂漠らしいというのに、内側はそんな事を忘れさせてしまう程に緑と水が多い。何か全てが輝いて見えるような美しい街だと、初めて見渡す余裕を得られた時に蘭は思ったものだった。

ここには魔力があり術があるとは言いが、そのわりには皆何をす

るにも自分の手で作業をしている。不思議に思った蘭がセルアに問うと、誰にでもあるもんじゃないからだ、と簡潔に言われた。

魔力というものは限られた人にしか宿らない力で、あまり頻繁に使って良いものでもないらしい。素質があると認められた者は王宮で働くのが一般的であり、城下に使い手はいない。

町の中にはそれぞれの区画毎に、作物を育て家畜を飼う場所もあるようだった。それは個人であったり共同であったり多少の違いは見られたが、自宅の近くにありそこで得たものを市場で売ったり交換する事で町は成り立っているらしい。

今、蘭がいるのは市場だ。露店を置く為なのか他の道よりも幅が広い。道路の両脇に様々な店が建ち並び、たくさんの人で活気に満ちていた。見知らぬ野菜や果物、肉はさすがに切り身になっている為どんな生き物かはわからないが、ハンナの作ってくれる料理で食べた物のどれかだろうとは思える。それ以外にもアクセサリーや衣服を並べている店舗も見えた。

道を埋め尽くす程の人垣を縫うように移動しなければならず、セルアはいつも蘭の腕を掴んで進んでいくのだ。

日替わりなのか週替わりなのか、来る度に店の種類が違っている。様々な物に目を惹かれる蘭はセルアが手を離れた隙に移動してしまう事も度々あった。

「お前、思っていた以上に落ち着きがねえな」

混雑した場所を抜けたセルアが溜息まじりに見上げてくる姿に、蘭は首を傾げる。

「そう？」

「そう？　じゃねえだろうが、よく転ぶ、いなくなる、ぼんやりする。もっとしっかりしてろ」

セルアが疲れたと言わんばかりの表情を見せ、自分の行動を思い返すと確かに否定はできないと蘭は頷く。

「努力はする」

「努力しないと無理って事かよ。危険な目にあっても知らねえぞ。」

お前んとこじゃそれが普通なのか？」

蘭は十九歳。本来ならば専門学校へ通っているはずが、何故かうイルナにいる。

学校へ行き、終わればバイトに向かう。その後は真っ直ぐ帰宅する事もあれば少々寄り道する事もある。一人の時もあれば友人達との時もあり、それらが生活の主でごく普通の学生だと思っていた。

時折友人達にどこか抜けていると言われたりもしたが、生活に支障が出る程のものではないはずだと自分では思っている。

「少しうつかりしているのは認めるけれど、普通のはず。セルアがしっかりと過ぎなんじゃない？　時々、お兄ちゃんみたいな感じがするんだよね」

兄と言ったのが気に入ったのか、少年は声を上げて笑う。

「ああ、それは言えてるな。俺はお前よりしっかりとしてる。だから言う事は聞いとけ」

「それを否定できないのも嫌になるのよね。わたしの方がずっと年上のはずなのに」

実際セルアと喋っていると年上の人物と話しているような錯覚に陥る事が度々あった。もちろん子供っぽい時もあるのだが、大抵蘭よりも落ち着いて構えている。

セルアは十二歳。ウィルナには読み書きを覚える施設があり、まだそこへ出入りしていてもおかしくない年齢らしいのだ。城という場所で姫の側にいる事が異例であるとは蘭ですら感じるものだった。

しかし不自然なのは王宮ににいるという部分だけであり、働くのは当たり前のようだった。ウィルナの子供達は大人に混じって仕事をしている。親や近所の者達と一緒に農作業をし家畜を育て、市場にも顔を出す。その合間に文字を覚えたり遊んだりしているようだった。大人達も毎日市場にいるわけでもなく昼間から酒を飲んでいたりする姿も見える事から、あまり年代による生活の違いはないのか

もしれない。

（セルアとの会話もあまり子供扱いをしていない感じがするし、意識の違いかな？）

ユージン、ハンナとのやり取りを見ての感想ではあったが、確かに三人は対等であると感じられた。

蘭が長年暮らして来た場所とはやはり違うらしいと思いながら話を続ける。

「ユージンもしっかりしてるよね？」

「あいつは年寄りくさいと思うぞ？ 二十四であれば気持ちわりい。いや、あいつの場合は口調が原因か？」

「そう？」

喋り方や態度は違うが、蘭からすると二人共あまり変わらないように思えるのだが、これは口にしないでおいた。

手を引かれながら歩く姿はすっかり習慣になってしまっている。

離せばいなくなると思われるからなのだが、この人ごみの中ではすぐにはぐれてしまいそうになるのも事実だ。

強引に引っ張りながら進んで行くが、歩幅は蘭の方が広い為に急かされるという程でもない。勝手知ったるといった様子で前を歩くセルアは、突然足を止めると振り返る。

「何か必要な物があるんじゃないかねえのか？」

「うん、ハンナに買い物を頼まれてる」

セルアが大事な用件を思い出させてくれた。ただ見て周るのも良かったが、そこにわずかでもできる事を与えてくれるのはハンナの優しさなのだろう。聞き慣れない食材名を忘れないようにとメモも預かっていた。

「とは言っても、わたし読めないんだよね。言葉が通じているのに文字が読めないっておかしいと思わない？」

ウィルナの文字は蘭の目には謎めいた記号にしか見えない。横書きでつづられていく羅列を丸暗記するしかないのかと思っていると、セルアは首を傾げる。

「前からそう言ってるが、おかしな事か？」

「普通、同じ言葉を話せるなら同じ文字になるんじゃないかな？」

「俺にはわからねえ感覚だな。しかしお前の覚えが悪いとは思ってるぞ」

意地悪そうな笑みに含まれる馬鹿にした雰囲気、蘭はただむくれた。

「何よそれ、だって凄く難しいんだよ？」

「ああ、俺も嫌という程にわかってる。お前に文字を教えている時が一番話が噛み合わせねえからな。だから仕方がねえと考えるしかないだろうが」

セルアが言うように文字についてを語ると、おかしくらいに会話が噛み合わなくなっている。

何故か意味合いの違う言葉に同じ記号を書かれたかと思うと、似たような単語に全く別の記号を示されてしまう。前後の単語により意味合いが変わる雰囲気は感じられたが、法則が掴めず本を読めるような段階には至れそうもない。

「何でも仕方がないで済ませるのもどうかと思うよ？」

どうして姫の屋敷で目覚めたのかと言えば、わかりはしないが仕方がないのだろうと言われる。国の外を見たいと願えば、危ないから諦める仕方がないんだと告げられる。

疑問や不満があっても仕方がないと一蹴され、どうにも釈然としない状況ばかりが続いていた。

しかしセルアもそれがわかってはいるらしく苦笑する。

「理由を知りたいのは俺達も一緒なんだよ。まあ、そのうち読めるようになるかもしれないだろ？ とにかくこれは俺が一緒だから書いたんだ。さて近場から周って行くか」

蘭の手からメモを取り上げると、セルアはこちらの腕を引っ張りながら新たな店へと足を向けた。

屋敷へ帰ってくるとセルアはしばらくソファに寝転んでいたが、何やら用事があるらしく城へと戻って行った。蘭はやけに長く感じる一人の時間を過ごし、夕食はハンナと共にする。

寝泊りをしている部屋の隣は食堂であり、毎日夕飯を済ませた頃にユージーンが立ち寄っていくのが習慣になってしまっていた。

隣室程ではないが広い室内は中央にテーブルと椅子が置かれている。食器棚等が壁際には立ち並ぶが、狭苦しい印象ではない。十人でも余裕がありそうな大きさのテーブルは二人だけには勿体ないようにも思えたが、常々少人数で使っていたものらしい。

目の前に座るユージーンは蘭の過ごした内容を必ず聞いてくる。ほとんどが屋敷の中をうろつき文字を目にしては悩むような生活なのだが、小さな変化でも構わないと事細かに確認していた。

今日は街へ出かけるという出来事があり、蘭は普段よりも饒舌に一日の説明をする。

「それは良かった。しかし、セルアの側を離れるのはやめてくださいね」

柔らかく微笑んでいるユージーンだが、その目はあまり優しさを含まない。

穏やかで優しい印象の青年ではあるが、実際は腹の底で色々と考えている人物というのはセルアからの情報だ。蘭も日々会話をしている中でその意味がわかるような気はしている。

優しく言葉をかけてはくれるが、厳しい面もしっかりと示してくる。褒めるべき時は褒め、叱るべき時は叱る事のできる人なのだろう。

蘭は精々たしなめられる程度の為、本当に怒っている姿は想像ができない。

「は……い」

セルアと同じく一人になるなどとは言われたが、正直少しは離れて歩きたいという気持ちもあるのだ。屋敷内を自由に動けるだけ良いのかもしれないが、ぐいぐいと引っ張られるような外出ばかりもつ

まらなく思える。もしかするとどこかに重要な何かがあるのかもしれないと、期待と共に足を進めてしまっていた。

「その自信のない返事はなんです？ 私もセルアも心配しているのですよ。平和な街ですが危険がないわけでもありませんからね。貴女にいなくなられてはこちらも困ってしまうのです。わかっているでしょう？」

あくまで蘭が見ているのは華やかな街の一部であり、それ以外の部分もあるとは前から言われていた。確かにそうなのだろうとは蘭も思っている。世の中に善のみで成り立っている場所があるとは考えにくい。

そして、蘭がいなくなつては困るという意味もわかっていた。

（いなくなつた姫様に繋がる手がかりかもしれないから置いてもらえるんだもの）

実在しているのかもわからないウィルナの姫、その人物がいなくなり蘭がいたからこそ屋敷に置かれているのだ。ユージインも目的を持っているが為に、こちらの動きを把握したがっている。

「気をつけます」

見知らぬ場所でこれだけの生活ができているなら良いのだろうと、蘭は不満を自身の中へとしまい込む。

姫が不在の代わりに何かと動かなければならぬらしいユージインは、ほんの短時間蘭と会うのが精一杯のようだった。今日のように外出した日は目新しいものに出会った刺激で蘭がよく喋る為、話を聞くだけで帰ってしまう事がほとんどだ。そうではない時はウィルナの事を教えてくれたり、他愛もない会話をして過ごす。

初めの頃の蘭はどうしたら帰れるのか、本当に必要があつてここにいるのならば何をするべきなのかと不安ばかりを漏らしていた。ユージインとセルアも姫がいなくなつた事に関係があるのだろうと、何やら情報を集めたりと動いてくれていたようなのだ。

しかし最近は気負うよりも時期を待ちましようというユージインは言い、セルアもあまり話題にしようとはしなかった。蘭も同じ事を言

い続けても不毛な氣もし、誰もが触れない状態になってしまっている。

（時期……か。結局は何もわかってないって事なんだよね）

確かに騒ぐばかりではどうにもならないのだが、蘭自身が情報を得られる立場でもなかった。もしかすると皆に真実を隠されているのではないかと、疑いたい気持ちもいまだに存在はしている。

だが決して酷い扱いをされているわけでもない。

（どうしてこんな事になっちゃってるんだろう）

不思議な服装で一つの建物に留まらされたままであり、外出する際には同伴を必要とし全く別の衣装に着替えさせられる。町だけではなく国を覆う壁の外にも興味はあったが、危ないと連れて行ってはもらえない。

室内にはたくさんの書物が置かれてはいるが、読めるにはまだまだ知識が足りない状態だ。この中に得るものはないかと考えつつも、結果は芳しくない。

「どうしました？」

黙り込んだ蘭を気にしたらしいユージンに素直に言葉を返す。

「なんでここにいろのかなって考えてるだけ。言わなくてもいつも思っではいるんだけどね」

「私達も何も見つけられないままですからね。不安でしょうが、このまま生活していただきたいと思っていますよ。何か辛いですか？」

蘭が必要としているのは情報だった。どうしてこの屋敷内で目覚めたのか？ ウィルナという場所は日本ではないのか？ もしや近隣なのではという疑惑も拭えないでいる状態だ。この建物の中と、たくさんの人にあふれる商店街が蘭の行動範囲なのであり、それ以外の状況はどこか曖昧なままだった。

「帰るにはどうしたらいいのかを知りたい。そして、帰りたい。そうするとユージンにも希望があるんでしょ？」

蘭だけではなくユージン達も求めている事があるのだ。

「ええ。姫がいたはずの場所にランがいたのですから、なんとなく

逆の事が起きるのではないかと思っはいますね」

「でも、私が帰れたら姫様が戻ってくるっていうのは本当なのかな？」

すでに幾度も繰り返された会話だが、新たなものはないのかとわずかな希望が常に生まれる。

「あくまでセルアによる予想であり、確証のあるものではありませんせんよ。それでも姫が生きておられる事はわかっているので、不安も少なくいられるのです」

「その姫様が生きてるって状態もわからないのよ。わたしの家族はどうしているんだろうって思うけれど、連絡のしようもないし確証なんて持てないもの」

いなくなってしまった姫をユージンとセルアは必ず生きていると言うのだ。何の手がかりもないままの人物に対する発言とは思えない。

「不思議に思うのは当然でしょうね。しかしセルアがいる限りは大丈夫と考えるほかはないのですよ。私はセルアのようにはっきりと知れるわけではないのですが、信じなくてはならないのです」

どうやらセルアによって姫の生存は決められているようなのだが、詳しく教えてはもらえない。とにかく無事なのだろうと思っておくのが精一杯だった。

「まあ、大丈夫と言えるのなら構わないんだけど……」

自分の代わりにいなくなった人が死んでいては気分も悪い。理由はわからずとも生存しているという言葉を信じていた方が良く、蘭は認める事で自身を慰めてみる。

（進展もしないし、どうしたらいいんだろう？）

理由を探っても見つからない。時期を待てとは言われるが生活にも変化は起こせそうもない。

ある時ふと強い不安感に煽られもするが、何の答えも出ないままに二ヶ月が過ぎている。

「不安ですか？」

ついぼんやりとしてしまった蘭は慌てて視線をユージンに戻した。そんなにも不安そうな顔をしてしまったのかと思いがらも、今更否定をしても仕方がないと頷く。

「確かに不安はずつとあるよ、よくわからないでここにいるんだし。でも最近はこちらにいるのが少し楽しいとも感じてるの。それが怖いっていうのもあるかも」

「怖い？」

「こうしてユージンは話をしてくれるし、セルアも言葉はきついけれど凄くわたしを気にしてくれるでしょ？　ハンナだって優しいし……生活できてるだけでもありがたいのに、恵まれているとは思っているの」

あの町の中に放られていないだけでも運はいいはずなのだ。勝手もわからぬ場所で上手く立ち回れる自信はない。

「私達もランがいなくては困るのですよ？　姫に繋がる手がかりは貴女のみ。今はまだわかりませんが、何かがあるように思えてならないのです。一方的な利益ではないでしょう？」

「確かにそうなんだけれどね。――早く、帰りたいな」

蘭は最近、本当にそう思っている。自分の意思ではなく決められた場所へ置かれていような生活であるのにも関わらず、愛着が湧きつつあるのだ。ユージン、セルア、ハンナと親しくなった人がいるせいなのか、退屈や不安は常に付きまといつつも嫌とは言い切れない。

「それは」

ユージンが何を言おうとしているのかは蘭にもわかる為、遮るように続けた。

「時期が来る。何かのきっかけがあるはず？　だよね」

「そうです」

「ただいるだけで何かが起こるのを待つっていうのは虫が良すぎない？」

「それでも待ちましょう」

何を確信しているのかはわからない。だが、ユージンは必ずその時が来ると思っているようなのだ。

「居心地が悪いよりは良い方がいいでしょう？　それに、嫌われていないようで私は嬉しいですよ。不安や恐怖もあるでしょうが、できる事をして過ごしましょう」

何も起きないまま時間は過ぎて行くだけであり、蘭は帰りたいたい願いながらも目的の見つけられない事態が恐ろしかった。

（本当に、時期なんてくるのかしら？）

こうして優しい言葉を残し帰って行くユージン達がまた居心地を良くさせるんだと思いながら、蘭はまた新たな一日をウィルナで迎える事になる。

一章・砂礫と岩の狭間（二）

三週間後、事件は起きた。

「お嬢さん」

「え？」

声をかけられ振り向いた先にいたのは、逆立った灰色の髪に日焼けをした肌、青い瞳の青年だった。人懐っこい笑みを浮かべている姿に、何故かはわからないが見入ってしまう程に惹きつけられる。

「覚えてる？」

振り向いたとき何も言わない蘭に首を傾げて聞いてくる仕草が、見た目にはそぐわないが随分と可愛らしい。

「ああ。覚えてます、あの時はありがとうございました」

以前、転びそうなところを支えてくれた青年だと蘭は礼を述べる。人目を引く姿も手伝ってはっきりと覚えていた青年は、以前と変わらず厚手のロングコートを羽織りその隙間から長袖の上着とズボンの裾の中に入れた革のブーツが覗いていた。

街にいる人の大半が涼しさを求めた服装だ。袖は短く、足元も首元も外気にさらされるような形が多い。その中にたまに暑苦しいと思うような服装の人が混じる。それは仕事等で国から出る人達、もしくは砂漠から戻って来た人だと言う。この青年もそのどちらかなのだろう。

「お礼はその時言ってくれたからいいよ、オレの事を覚えているか知りたかったただだから」

「はあ」

「あの時は用事があって急いでいたから話もできなくて残念だなあって思ってたんだよね」

両手を掴み、握手をするように動かす。こつこつと大きな手に蘭の手はすっぽりと隠れてしまっている。

「それはどうも」

青年が何をしたいのかがわからず蘭はされるがままだ。

ここは市場の外れ、規模の小さな店が立ち並ぶ場所である。食料品のような万人に向けた物を取り扱うのではなく、限られた人に向けた商品が多く並んでいた。日光に当たるのが良くない物もあるように、ここには露店以外に家屋を使った店もある。

今日の蘭は珍しくユージンと街へ来ていた。

たまには私も休暇が必要なのですよと誘われたのだが、様子を見ている限りでは仕事に必要な物を買ひ揃えているように思っている。ウィルナの生活に詳しいわけではないが、あまり日常的商品を買っているようには見えなかったのだ。

普段セルアと来る場所とはまた違った雰囲気、蘭は目を輝かせユージンにあれは何かと説明を求める。そして、そうかと思うとすぐに側を離れようとする為、後でそこへ行くから待つようにと諭されたりしていた。セルアの気持ちが変わりますね、と小言もいただいている。

今、ユージンは蘭が立っている真後ろの建物にいる。蘭もほんの少し前まではその中にいたが、そろそろ買ひ物が終わりそうなユージンに先に外で待っていると言ひ出て来たところだった。ユージンにはあまり良い顔をされなかったが、無理に出てきたのである。

その結果が、この状況だ。青年は手を握んだまま蘭の顔を覗き込む。

「なんだか凄く君の事が気になってね。また会えないかなって思っていたんだ。オレはクロード、君の名前は？」

どうやらナンパをされているようだと思ひ付き対応に困る。嫌という程ではないのだがどうしたものかと蘭が押し黙っていれば、目の前の笑顔が一瞬で悲しそうなものへと変わった。

「教えてはもらえない？ 駄目？」

そして、ねだるような仕草が妙に心をくすぐる。

「……えっと」

名乗ってもいいのだろうかと思っていると、後ろから声が降りかかる。

「どうしました？」

振り返ればユージインが購入した物を入れた布袋を抱え、扉を開いていた。

「ユージイン」

名を呼んだが返事はなく、ユージインは静かに扉を閉め蘭の隣にやって来ると空いた片手でクロードの腕を掴む。

「私の連れに何のご用でしょう？」

その動きが離せと言っているのがわかるだろうにも、クロードは蘭の手を離す気はないらしい。むしろ力が加わったように感じられた。

「それを今話しているところだけど、この子に」

何故か牽制するような瞳を見せるクロードに、ユージインの眉も潜められる。

「お話は私が聞きましょう、その手を離してください」

「どうして？ この子は自分で話せるでしょう。あんたは関係ない」
今度は不機嫌そうな表情になったクロードを見た為か、ユージインの面持ちも更に険しくなる。

「関係がないのは貴方の方でしょう」

「もしかして、こいつと付き合ってる？」

クロードは顔の向きを蘭へと変えた。一瞬前の鋭い目付きはどこへやら優しい顔つきだ。

蘭は突然の質問に、素直に頭を横へ振って否定をした。だよね、とクロードは笑みを浮かべユージインを見やる。勿論表情はまた鋭いものへと変わってしまった。

「だったらいいじゃん。オレはこの子が気になって話しかけてるんだから邪魔しないで」

「邪魔しているのはそちらでしょう、この方は私と一緒にここへ来ているのです」

明らかにクロードの発言がおかしいのだが、全く気にしていないらしい。ユージインが珍しく大きな声を上げ、あまり多くはない通行人が蘭達に視線を向ける。

蘭も二人の会話をどうにかしたいとは思ったが、どうにも口を挟む隙が見つけられないままにクロードの話は続いた。

「うるさいなあ、ねえ一緒に食事でも行こうよ」

さすがに付いて行こうという考えのない蘭はすぐに否定を向ける。

「それは無理、わたしはこれから帰らなきゃいけないんです」

「ええっ」

まさか、と言った表情を浮かべたクロードの手が緩んだ隙に、蘭は自分の手を引き抜く。そしてユージインが蘭の腰を抱くようにして引き寄せた為に、今度はその行動に驚いてしまった。

「申しわけありませんが、諦めてください」

おそらく隣にいるユージインはにっこりと笑っているのだろう、そして目は絶対に笑っていない。確信の持てる声色を耳にしながらクロードを見れば、何も言わずこちらを見つめていた。

「行きますよ」

抱き寄せられたまま無理やり引きずられるようにして蘭は歩き出した。このまま離れてしまえば仕舞いかと思っていると、後ろから声がかけられる。

「またね」

クロードの声は妙に明るいものであり、蘭は不思議に思うだけだった。

「やはり一人になるのはよくありませんね」

振り返りクロードが見えないのを確認すると、ユージインは腰から手を離してくれた。さすがに腰を抱かれて歩くのは恥ずかしく、蘭もようやく安堵の息をつく。

この様子に気付いたらしいユージインが穏やかな笑みと共に詫び

てくる。

「すみません。あのまま貴女を連れて行かれそうな気がしてしまったので」

「ううん、いいの。ありがとう。わたしが外に出たのが原因だし……ごめんなさい」

蘭が離れさえしなければクロードに話しかけられる事もなかったのだ、ユージンが謝る必要など一切ない。

「それも問題ではありませんね。今後はいけませんよ?」

こちらから言い出した為か目の前の瞳は柔らかく笑い、蘭も笑みを浮かべてユージンを見上げる事ができた。

「うん、もう勝手には動かないから。まさかあんな風に声をかけられるとは思っていなかったんだよね」

「一人の女性に声をかける輩は多いのですよ。ランのいた場所にはいなかったのですか? 貴女はこの土地に疎いのですから、誰よりも警戒するくらいが良さそうですね。しかし、連れが来ても諦めないのは珍しいかもしれません」

「変わった人だった気がするかな? ユージンがきたところで話が終わると思ったのに」

実際どうしたら良いのか困っていた気もするが、あつという間の事で何が何だかわからないというのが正直な感想だ。とにかくクロードという背の高い青年だとは理解したが、あのままついて行くには不安の残るような人物だった。

「否定はできませんね」

蘭の素直な感想にユージンは頷いたのだが、表情がどこか優れないように見え聞いてしまう。

「大丈夫?」

「どうかしましたか? 早く戻りますよ」

しかし本人はそう思っていないらしく、何事もなく歩き始める。蘭は追いかけるようにするが、ユージンはこちらの歩く速度に合わせてくれている為すぐに並ぶ事ができた。

「何だか疲れてない？」

「そんな事はないと言いたいのですが、私は先程のような人は苦手ですね」

静かに溜め息を付くユージインに蘭は思わず笑ってしまう。

「わたしがすぐに断らなかつたせいもあるけれど、会話になつてなかつた気はする」

「でしょう？　しかし、貴女には随分興味があるようでしたね」

短時間なのに疲れました、とユージインは空いた手で肩を叩く。

あいつは年寄りくさいという、セルアの言葉を思い出させる仕草に蘭は内心で楽しみながらも答える。

「一度見ただけだと思ふんだけどね」

何気ない呟きにユージインがこちらへ目を向けた。

「初めてではないのですか？」

「うん、前に転びそうになつた時の話をしたよね？　その人」

「ありましたね。あの日セルアの機嫌が悪かつたのは彼のせいですか」

何を思い出したのか楽しそうなユージインの声と共に蘭は首を傾げる。

「そうだった？」

確かにぼんやりするなしっかりしろ等色々と言われた気はするなと思ひ返していると、ユージインの瞳は更に細められた。

「ランが思っている以上にセルアは貴女を気に入っているんです。

勿論、私もですよ」

「ふうん、わたしだって……わ！」

ちょうど二人は幅の狭い十字路を真っ直ぐ通り過ぎるところだつた。蘭はユージインの左側を並んで歩いていたのだが、左腕を誰かが急に掴み引っ張つたのだ。そのままバランスを崩しそちらに体が倒れるようになったが、道に叩きつけられはしなかつた。何故かあつという間に抱えられた拳句、誰かの肩に担ぎ上げられてしまつたのだ。

「ごめんね、オレ諦めが悪いから」

そう言うのと蘭の体は大きく揺れはじめ、どうやら運ばれているらしいと気付く。この声は先程のクロードに違いないと声を上げる。

「降ろして！ 何なの！」

何とか降りようと手足をばたつかせるが、全く気にはしていないようだ。蘭が叩こうが蹴ろうがお構いなしに足を進める。がっちり腰を抑え付けられているためクロードの肩に当たる腹が痛み、更には押さえつけてくる片手に何か掴んでいるのか硬い物が当たる感覚もある。

「待ちなさい！」

そこへユージインの声が加わった。どうやら追いかけてくれたらしいと、蘭はそちらを眺めようと頑張る。

クロードの背中側に上半身がぶら下がる形になっている蘭が何とか頭を持ち上げると、ちらりとユージインの姿が見えた。人ひとりを担いで走っている男に負けるはずもない。程なくして追いつく、と思った刹那。

クロードが振り返り、何かを地面に投げつけた。

大きな破裂音。

耳をつんざくような音と衝撃に蘭の頭はくらくらとした感覚を受け、そして狭い路地を埋め尽くすように粉塵が舞う。

「ラン！」

じんじんとする耳の奥に名を呼ぶユージインの声が微かに聞こえたが、クロードが再び走り出した事によってすぐに聞こえなくなる。今の爆発でユージインは怪我をして追って来られないのか、それともすぐに角を曲がった事で見失ってしまったのだろうか。

無造作に担がれた蘭は逆さまで血が上りそうな頭でぼんやりと、どこへ連れて行かれるのかと考えていた。

一章・砂礫と岩の狭間（三）

「ごめん！」

クロードが深々と頭を下げた、というよりはもう土下座に近い格好だ。

肩に担がれたままどのくらい走ったのかはわからない。だが決して短くはない時間辛い体勢のままだった蘭は意識が朦朧としていた。現在は壁らしき物に寄りかかり座っているが、何の上なのかはたがたという音と共に床が揺れた。

気持ちが悪く喋りたい気分ではない。蘭は苦しさに顔を歪め、息を吐く。

「水飲む？」

クロードが水筒を差し出し、素直に受け取ると口を付ける。二口飲むだけでも幾分楽になったように思えた。

「ありがとう」

「オレが考えなしに走ってばかりで、ごめん。でも、どうしても君を連れてこなきゃと思ったんだ」

目の前に座り込んだクロードは泣きそうに見える。どちらかと言えば、泣きたい立場なのは自分ではないだろうかと思ふ。担がれて運ばれた挙句、どこにいるのかもわからないのだ。

億劫な口をどうにか動かして情報を得ようとする。

「ここはどこ？」

「乗り合いだよ」

「乗り合い？」

「乗った事がないの？」

クロードが首を傾げている姿から、どうやらウィルナの一般常識らしいが蘭は知るはずもない。

「ない。わたしこの事あまり知らないから」

「そっか、乗り合いはウィルナからアンヘリカへ歩かなくても行け

るようにって、ウィルナの姫が作ってくれた物なんだ」

その説明ではわからない部分もあったが、とにかく歩かずに行けるという事から今は何かしら乗り物の上なのだろう。そして、それにはいなくなってしまうた姫が関わっている。

（じゃあ、やっぱりお姫様はいたんだ）

ユージンやセルア、ハンナの口から聞いているだけであり、どこか現実味のなかった人物。それをクロードからも知れた事が、蘭にウィルナという国の姫というものをわずかに感じさせた。

だがクロードが言ったのはそれだけではない。

ウィルナからと言うからには、蘭は壁の外へ出てしまっているらしい。わかっていながらも確認せずにはいられない。

「……ウィルナの外？」

心配そうにこちらを見つめているクロードが申しわけなさそうに眉を下げたまま告げる。

「……アンヘリカに向かってる」

「アンヘリカ？ 町だっけ？」

「そう、来るのは初めて？」

確かウィルナとシェラルドが国であり、アンヘリカは町だと説明を受けていた。しかしそれがどれ程の距離で位置しているのかもわからない蘭は、色々聞こうとする。

しかし、いまだにぐらぐらと揺れるような感覚は薄れず、そのまま瞼を閉じてしまったのだった。

目覚めるとそこはアンヘリカだったという事はなく、蘭はまだ乗り合いの中にいる。

一眠りして目覚めるとすっかり調子も戻り、自分がどんな物に乗っているのかを確認する余裕も出て来た。乗り合いとは馬車のような物らしく、車の付いた荷台に幌をかけその中に客が乗る。それを何か生き物が引いているようだったが、中から見る事はできなかった

た。砂の上を簡単に走れるものなのかとクロードに聞けば、うまく走れるように術が使われていると教えてくれた。

ならば術が使える人がいるのかと思えば、魔力を込めた石が付いており術師が何かを施す事によって効果を得ているらしい。常に術師がいるわけではなく、ウィルナで必要な作業さえすれば大丈夫だという。

蘭は荷台の壁に背を預けて座っている。中はがらんとしているわけではなく、前から中程まではベンチ状の椅子が設置され、そこには他の客が腰かけていた。十人程が座れるであろうそこには、ほとんど空きが見られない。ベンチに座れなければ直接床に座るようであり、持ち運びができるような敷物の上でくつろいでいる者が何人かいる。

蘭とクロードは出発寸前に乗車したらしかった。それに加え蘭はベンチに座れる状態ではなく、横になれるよう敢えて床を選んだらしい。下にはクロードのコートが敷かれている。

木の板そのものに座るよりは衝撃がないのだろうと蘭はそのままおとなしくしているのだが、クロードも同じように並んでいた。

体勢を崩す程ではない振動を感じながら、蘭は左隣にいるクロードへ顔を向ける。

「そのアンヘリカへはいつ着くのか？」

「あと二日かな」

力のない表情を見せられ蘭は思わず溜息をこぼす。

クロードは大人しく座っているというよりは、うな垂れていると表現すべき状態だった。ここに連れて来た張本人だというのに、落ち込みようは蘭以上である。

「もう、途中で引き返せないのはわかってるんでしょ？ 着いてからの事を考えようよ」

戻れないのかと聞いた蘭へクロードは絶対に無理だと言ったのだ。とにかくアンヘリカという場所へ一度着かなければ帰れない。それはこの乗り合いというものの乗り降りが許されているのが、ウィル

ナとアンヘリカの二箇所だけと聞き納得した。

（バス停みたいなものよね？）

セルアに遊園地が伝わらなかったように、バスと言っても無駄だろうと蘭はとにかく終点を目指している。まずはこれから下りて考えなければいけない。

しかし、二日もかかる道のりというのは決して近い場所でもない。本当ならば蘭が喚き、クロードがなだめるべきではないのかと思いつながらも、隣にいる青年を改めて眺める。

初めて見た時は男らしくて格好良いように見えたのだが、どうもそうではないらしい。見た目とは裏腹、可愛らしい性格のようだ。膝を抱え、大きな体を小さく丸めるようにしている。

先程から蘭を連れてきたかったのは確かだが、何故か自分を止められなかったといった言いわけを何度も聞かされた。

「オレいつも考えなしって言われるんだよね。あの時も折角話せるのに何で邪魔するんだよって思ったら、つい」

そんな理由で担がれたのかと思うと蘭は頭を抱えたくなる。

「どうしたら人を持っていこうなんて思うのよ？ わたしにだってそれなりに事情があるんだから。というより、人さらいなの？」

「違う、違うから。オレもどうしたんだろうって思ってるくらいなんだよ」

よくわからないが日常的な行為ではないと思う事にはした。連れ去った挙句にうな垂れるという行動は、確かに本意ではなかったようにも見える。

「とにかく、わたしはこのままアンヘリカに行く。それで構わないから、クロードはわたしをウィルナに帰して」

「うん……そうだよ」

クロードの返事はどこか歯切れが悪い。

「どうかしたの？ まだ何かあるの？」

まさかすぐにウィルナには戻れないのかと心配になりクロードの顔を覗き込む。するとクロードは照れたような表情を見せながら、

思いもしない事を告げるのだ。

「すぐ帰るのももったいないと思わない？」

ユージンとセルアに蘭はすっかりしていないと言われこの人はそんなにも違うのかと思っていたが、今ならはつきりと思えた。二人がすっかりしているだけであり、決して蘭が変わっているわけではないのだ。

この申しわけないと言いつつも、すぐに帰すのはもったいないと告げる男は適當過ぎる。

「そんなわけないでしょ！」

蘭は睨み付け、そう怒鳴りつけてやった。

乗り合いはそのままアンヘリカを目指すわけではなく、途中に点在するオアシスに立ち寄った。

硬い板の上にならずと腰かけているのも疲れ、気分転換に歩く事も必要だ。何より用を足したり、水を補給したりとしなければならぬ事も多いらしい。

「ロバかなラクダかな？」

必要な事を済ませた蘭は、乗り合いを引いている生き物を目の前に呟いた。言葉通りラクダなのかロバなのか、何やら混ざっているように思える。どっちつかずと言いたいところだが、ここではこの生き物が当たり前で砂漠を越える為に必要なのだらうと思うしかなかった。

あまり離れてはいけないと、わずかに足を進める蘭の目に映るのは本当に砂漠だ。

どこまでも続いていきそうな程に広がる砂の海。そして本当に小さな水の湧く池のようなものの周りにだけ木や草が茂っている。

乗り合いが通ってきたとわかる道はなく、本当に砂の上を走っていたらしい。車輪ではとても身動きが取れないように見える乗り物は、外観とは違う性能なのかと首を捻る。

（本当に術って事なのかしら？）

セルアによって伸ばされた髪は違和感なく蘭に馴染んでおり、今も歩くたびに揺れている。

信じられないとは思っても突きつけられている事実があり、術という不思議な力を信じるべきなのかとも思えた。

ぶらりと歩きながら、蘭は更に呟く。

「砂漠なんだなあ」

ウィルナを囲む壁の外は砂漠だと言われていたが、どこか真実味がなかった。しかしこうして自分が砂漠の中にいるとわかれば否定のしようはないのだ。

（やっぱり日本じゃないと考えるしかないのよね？）

じりじりと照り付ける日差しは肌が痛む程であり、クロードが羽織るようにと薄い布をくれていた。本来ならば砂漠へ出るべき服装があるにも関わらず、青年は蘭を強引に乗り合いへと押し込んだのだ。誰よりも自分が目立っているのがわかる程に軽装だった。

「ウィルナではこんなに日差しが強くなかったような気がする」

布越しに感じる日差しに疑問を漏らせば、思いがけず言葉が返ってくる。

「それは術のせいだよ」

声の方へと首を向ければクロードが近づいてくる。ここに降りてからはまず別行動だと教えられたのだ。男女別に必要な事を済ませ、また落ち合うのが規則らしい。

「術？」

またも耳にする事になった単語を聞き返せば、クロードが手をかざしながら眩しそうに太陽を見上げる。

「ウィルナには魔力のある人がいるから、それを使って調節しているみたいだよ」

「魔力を使って日差しが弱くなるの？」

「直接日差しをもって事ではないよ。ウィルナを囲う壁の範囲だけを魔力で覆ってるって話、それがうまく抑えてくれるらしい」

「ふうん、便利なのね」

乗り合いにも術を使っている、ウィルナの日差しも術で抑えている。ここでは術というものは生活を良くする為に使うものらしい。

「何となく攻撃するイメージだったなあ」

たぶんこれはゲームのせいだなと蘭が思っていると、何故かクロードに咎められた。

「そんな事を言ったら駄目だ、まだ八年しか経っていないんだよ？」
「八年？」

意味がわからずにいる蘭へクロードは不思議そうな顔をする。

「知らないの？」

「何を？」

「ずっと戦争があって、八年前に停戦したって事。だから攻撃するなんて言ったら駄目だよ。子供だってそうした事は口にしないんだから」

戦争、それは蘭がいる世界にもある。今もその世界のどこかでは起こっているであろう事もわかる。しかし、蘭は直接戦争というものを実感する機会に出会った事はない。

クロードが口にするなど言うからには、まだその傷跡が残っていて触れてはいけなのだろうと蘭は思ったが、これはただの想像であって本当の事はわからない。

そもそも自分の世界とは思っても、この場所もそのうちのどこかかもしれないのだ。

（あんまり勉強しなかったからな）

テストに必要な範囲を覚えはしたが、世界情勢に興味を持ったりはしなかった。もしかするとウィルナという国名を知る機会もあったのかもしれないと、今更ながらの後悔を覚える。

ユージンとセルアは戦争については何も言わなかった。しかし、それも蘭が余計な心配をしない為への配慮かもしれないし、直接関係のない事だから口にしなかったのかもしれない。

本当に外へ出るには知識が少ないのだと、蘭は素直に言葉を向け

る。

「ごめんね。わたしこの事は本当に知らないの」

「どうして？ 記憶がない……とか？」

忘れてしまっていると思われるのかクロードの表情が曇る。

「そうじゃないの、本当に知らないの。覚えていないとかじゃない、それをわかってもらうのは難しい……と思う。けれど本当に知らない」

理由もわからず違う場所から来たと言っても、信じてもらえるはずもない。ただ知らない、そう言う事しか蘭にはできないのだ。

それにクロードは何故か納得をしてくれた。

「そっか、よくわからないけどランはこの事を知らない。それでいい？」

「ありがとう。あと、他にも色々教えてもらえるといいんだけど？」

無理やり連れてこられた人物ではあるが、今の蘭が頼れるのはクロードしかない。とにかく必要な情報を手に入れながら、ユージンとセルアの元を目指さなければと覚悟を決める。

「勿論、何かあったらオレに聞いて」

どうにもこちらを連れ去ったという感覚が薄そうに見えるクロードの返事に呆れていると、出発時間が近づいたらしく呼びかける声が聞こえた。

乗り合いには商人が乗っていて必要な物があれば売ってくれる。

そもそも商人達に向けた乗り物であるらしく、別件の者の方が少ないという。クロードは必要だからと様々な物を購入しており、羽織った布もその一つだった。

本来は荷物を包むのが目的らしい布を羽織りながらクロードのコートを敷き、蘭は考える。

（とにかくアンヘリカって場所に向かうのは認めるしかない。そして、その後はウィルナへ戻ればいいって話なのよね？）

「このままこれに乗っていたら、すぐに引き返すんじゃないの？
そうじゃなかったら別の便があるとか？」

蘭は朝食後にユージンと買い物に出ていた為、乗り合いは昼前にはウィルナから出発していた。聞くところによると本当に丸二日という道程らしく、明後日の昼前がアンヘリカ到着となる。

先程のオアシスは毎回寄るのかと問えば、砂漠の天候に合わせて決めており絶対と言える場所はないと教えられたのだ。

（始発と終点しかないって事なのよね）

途中下車が可能ならばそこから引き返したいところだが、どうやら叶いそうもない。

「さすがにぶっ通しで運行はしないから、ウィルナに向かうのは四日後。それまでは待って」

「そっか」

どうやら毎日運行されている乗り物でもないのかと、蘭はその間についても思案し始める。

片道二日という行程ならば食料も必要であり、通貨を持たない蘭はクロードにまかなくてもらわなければならないだろう。

（まあ、クロードが原因なんだから気にしないとして）

しかしこれまでいたウィルナの屋敷では随分と恵まれていたのだと改めて気付く。

何故か目覚めると見知らぬ場所ではあったが、酷い目にも合わず大切に扱われていた。姫がいなくなった代わりという理由があり、衣食住に困る事もない。

もしも砂漠の中で目覚めたのならどうの昔に死んでしまったのだろう。乗り合いの中にいる限りは平気だろうが、蘭の服装は夜の砂漠には耐えられないらしいのだ。

ユージンとセルアは心配しているのだろうか、二人の姿が思い浮かぶ。限りなく近い先という酷く曖昧な言葉を理由に、必要があるのだろうと屋敷へ置いてくれた。それがいなくなった姫の代わりだからとしても、早く戻るべきだと蘭は思っている。原因がわか

らずとも蘭はあの場所で目覚めたのだ。帰るのもあそこからはないのかと、何かが訴えているようにも思えた。

このままアンヘリカへ到着し、四日後の朝にウィルナへと向かう。もし二人が探してくれているのならどうか伝えたい。だが、その方法は思いつかない上に、そもそもないのだろう。クロードが最も早い移動手段は乗り合いだと言っている。それ以外に何かあるのかと聞くと、徒歩かガナという乗り合いを引いている生き物に乗るかどうかという。

六日後にウィルナへ戻れる勘定ではあるが、知らせる事はできそうもない。

いっその事、生まれ育った場所まで走ってはくれないかとも思ったが、さすがに夢のような話だと蘭は力なく呟く。

「早く……帰りたいな」

「ごめんね」

時折心配そうに瞳を向けてくるクロードの表情が更に暗くなる。

ウィルナへ帰りたいと思われているのだろう。蘭としては元の世界の事も含んでいるが、それをわかるのは無理というものだ。

「アンヘリカもいい所だから、その間は楽しもうよ。ウィルナには必ず帰れるから、オレも一緒に行くし」

励まそうとした発言らしいが、どうにも事の重要性をわかっていないように感じられると溜息が一つこぼれる。

「当たり前でしょ？ それにこうして連れてこられたんじゃないかなければたぶん楽しめてるから」

勝手に連れて来たくせに、帰りは一人にする気かと強く言っている。この世界の知識が余りにも乏しいまま単独で行動する事は絶対に避けたい蘭は、何が何でもクロードと共にいなければならぬのだ。

クロードは印象だけなら格好良い。背が高く逞しい体、逆立つ程

短く切った灰色の髪に切れ長の青の瞳。服装は機能性を重視した砂漠用の物だが、おそらく大抵の服を着こなしてしまう均整のとれた体に見えた。

ユージィンはクロード程ではないが背が高く細身だ。柔らかい物腰でこちらの話を聞いているばかりかと思えば、必要と感じれば注意もするし叱りもする。セルアは荒っぽい口調で言いたい放題のように思えるが、何だかんだと世話を焼いてくれる優しい少年だった。そのどちらとも違った印象を持った姿と性格に、この世界の人の法則性は見つけられずにいた。

（状況が普通じゃないから、仕方ないのかも）

屋敷にいて細々と世話を焼いてくれていたハンナは年齢だけではなく、本当に母親のように接してくる人物である。ふくよかな体と朗らかな笑顔と口調、不思議と安らぎを覚えるような蘭にとっては重要な存在だ。

おそらく三人は頼りになると言える人物であり、蘭は幸運だったのだろう。

果たしてこの者はどうなのかと隣にいる青年を眺めた。

情けない表情を浮かべて膝を抱えている姿から、とにかく見た目と性格が一致しないのが嫌でもわかる。本人にしてみればそれが普通なのだろうが、蘭にはどうも頼りなく感じられるのだ。

話しかけてきたかと思えば、強引に担いでここまで運んで来た。

ならばそれらしく振舞って欲しいものだ、少々の不満すらも覚える。どうやら相当反省しているらしく何度も謝っているのを思うと、その時の感情で動く傾向があるのだろうか？ 考えなしたと本人も言っている為に、ぶつけきれない感情が蘭の中ではくすぶっている。（セルアみたいにえらそうなくらいの方が意見しやすいのよね）

ずけずけと物を言う少年は少々の発言を気にしないように思える。しかしクロードはきつく言葉を向ければ更に落ち込んでしまうのだろう。

ユージィンならばそもそも言い合うような状況にもなりはしない。

ハンナも同様だった。

（自分からどうにかしないと話が進む気がしない）

「そろそろアンヘリカなんだよね？ どういったところなの？」

二日という期間はそろそろ終わりを迎える予定であり、蘭は目的地の情報を得ようと声をかける。すると随分と嬉しそうな笑みがクロードには浮かんだ。

「アンヘリカはいいところだよ。ランも気に入ると思う」

大きな湖がある町だという発言を皮切りに、クロードはアンヘリカを説明し始める。

少し前までの落ち込みはどこへ行ってしまったのかと思う程の楽しげな笑みを見た蘭は、どうやら気持ちの切り替えが早い人物なのかと認識する。

笑顔でアンヘリカ到着を心待ちにしている姿は、随分と可愛らしいものに見えた。

一章・砂礫と岩の狭間（四）

蘭が荷台から降りると足元は砂地だった。アンヘリカもウィルナと同じような所と思っていたのだが、どうやら違うらしい。

湧き出る水を中心に草木が生い茂る姿は、ここへ来る間に立ち寄ったオアシスと変わらない。ただ規模が違っており、随分と大きな湖を中心に町が形成されていた。とてもではないが泳いで渡れる大きさではない湖を囲むようにたくさんの木々がある。ウィルナが国を壁で覆っているように、ここでは木がその役目を果たしているらしい。

建物の造りもあまり変わらないようだが、ウィルナはどれも欠ける事のない美しい形をしていたのに対し、アンヘリカはどうも風化してしまっているように見える。湖と木々の間に建物が立ち並んではいるが、区画が整えられていると言える配置でもない。道は特に整備されていないらしく、建物の合間の砂地をざくざくと音を立てて歩く事になる。

町をぐるりと囲む木々を切り取るようにして門が設えられており、そこから乗り合いは中へ入り込む。停留所のような扱いなのか門の側の広場に乗り合いは停まり、蘭はアンヘリカという町へ降り立ったのだ。

待合所と呼ぶべきなのか小さな建物と並ぶように乗り合いは停まっており、そこから町を眺めつつもクロードに先導される形で蘭は足を進めていた。

「ウィルナとはだいぶ違うでしょ」

「そうだね、でもなんだかい感じ」

ウィルナが美しく整えられた造りならば、ここは自然を生かした造りだと言える。規模はウィルナが圧倒的に大きく、アンヘリカはかなり小規模な町のようにだった。

「なら、良かった」

クロードはここで生まれ育ち、暮らして来たらしい。なんとなくのどかな雰囲気心地よい。

（おかしな場所ではなさそうだし、なんとか帰りまで過ごせるといいんだけど）

どこへ向かっているのかはわからないが、蘭はクロードと並んで歩いていた。道が整備されず家屋がまばらに立ち並ぶ景色のせいで、見通しが良いとは言えない状態なのだ。とにかくクロードについて行く以外にはどうしようもなかった。

乗り合いから降りるとすぐにクロードはたくさんの人に声をかけられている。皆におかえりと言われ、その娘はどうしたのか？　とうとうクロードも女を連れてくるようになったかと囁し立てられており、その度に違うとクロードは答えている。

乗り合いの中にも知り合いはいたようなのだが、こちらの不穏な空気を察していたのか下車するまでは口を挟んでこなかったらしい。何やら揉めている様子もあったと更なる情報を与え、人々の会話は妙な盛り上がりを見せている。

これらの発言からもクロードが女性を連れてくるという行動は珍しいものかと蘭は思った。

（やっぱり人さらいではないって事なのよね？）

「みんな知り合いなの？」

何を聞くべきかが難しかった為、蘭は無難にそう質問をした。

「町自体が家族みたいなものだからね。知らない人はいないよ。ラン、あそこがオレの家」

たいした距離も歩かぬうちに指で示されたのは、町の中でも大きな建物だった。石を積み上げた二階建てらしい家屋には木の扉が設えられており、クロードは手馴れた様子で押し開くと中に声をかける。

「ただいま」

すると中からたくさんのおかえりと言う声が聞こえた。大人も子供もいるようだと言判別しながら、クロードに招かれるままに建物へ

と一歩足を踏み入れる。

「兄ちゃんおかえり」

「クロード！」

「おみやげは？」

目の前に立つクロードは、あつという間に子供達に囲まれた。一斉に話しかけられるのも慣れた様子で、ちよつと待ってと言うと手にしていた荷物の中から菓子を取り出し渡す。乗り合いにいた商人から買っていたのはこの為だったのかと蘭はただ眺めるばかりだ。

「今回は少なくてごめんな、またすぐウィルナに行くから次はもっと買ってくる」

「本当？ やった！」

子供達はそれぞれありがとうと口にする、今度は部屋中に素早く散って行く。そのうちの一人がクロードの側で立ち止まったまま、不思議そうに入り口にいる蘭を見上げた。

「クロード、このお姉ちゃんは誰？」

「ああ、この人はね……」

素直にぶつけられた質問にぼつの悪そうな表情を浮かべたクロードの声を、誰かがさえぎる。

「それはあたしも聞きたいね」

ここは扉を開くとすぐに大きな部屋が広がっており、テーブルと椅子が何組も並んでいる。奥には厨房も見え食堂のような造りだ。

軽く見渡した限りでは大人が十人、子供が十五人程いる。

その中の一人。褐色の肌に短く切り揃えた黒髪のおそらく三十代と思われる女が、中央のテーブル席に足を組んで腰かけていた。

気の強そうな瞳でこちらを見据えたままに、女は立ち上がると蘭の目の前にいるクロードの所までやって来る。すらりとした体で女性にしては背が高い、動き易さを意識しているのかパンツスタイルではあるが、不思議と色気を感じさせる人物を蘭はただ見上げた。

「すぐにウィルナへ行くつても、どういう事だい？」

質問ではあったが語気はすでに叱っているような調子である。

「マルタ……実は」

困ったように言葉を詰まらせているクロードの姿に、マルタと呼ばれた女が子供達を振り返った。

「とりあえず子供達は奥に行ってな。後からきちんと説明はするから、いいね」

はい。と素直に返事をする子供達はあつという間に部屋から出て行ってしまふ。するとマルタは何も言わずに座っていた席へと戻り、仕草でテーブルを挟んだ向かいの椅子へ座れと示してくる。

「クロードがそんな顔をしている時は、ろくな事じゃないのはわかってる。話しな」

これは従うしかないのだろうと蘭も並んで腰かけると、クロードが重い口を開く。

「つい無理やり連れて来ちゃったというか」

そして、一つ一つここまでの流れを説明し始めた。

「あんた、何て事をしてくれたんだい！」

怒鳴り声を上げたのは、マルタだ。苛々とテーブルを人差し指で何度も叩いている。

「馬鹿な子だとは思っていたけれど、まさか人をさらって来るような真似をするなんて。最近はウィルナとの関係もいいてのに」

溜め息を付き、苦々しく顔をしかめる。

「あんたが色々な物を持って帰って来るのには、慣れたつもりだったんだけどね。さすがに人は予想できなかったよ。娘さん名前は？」

「蘭です」

口を挟む間もない上に、マルタの表情がどんどん険しくなっていくのを見ていた為、蘭は大人しく座っていた。これがここに来て初めて言葉だ。

「ウィルナの姫様と同じ名前だね。まあ珍しい名前ではないし、同じ年頃の子はあやかっけて名づけた親も多いから」

じつと蘭の顔を見つめたマルタが、更に覗き込む。

「それにしても似ているね」

三人のやり取りを聞いているだけだった者達の視線が蘭に集中する。ユージンやセルアが似ているというくらいなのだから、そう思われても仕方がない。蘭は慌てて否定をする。

「違います、似ているみたいですけど違いますから！」

「本当かい？」

「わたしは姫様じゃありません。凄く似ているとは言われるのですが、とんでもないです」

姫様と呼ばれるあたりからあまり酷い言いようにもできないかと、蘭はとにかく謙遜をする。

しかし半信半疑といったところなのだろう、マルタの表情は相変わらず厳しい。

「確かに雰囲気は違うねえ、あたしは何度か会ってるし違うとは思うんだけど……。姫様はそんな格好もしないはずだしね。まあ、よく似ているもんだ」

「はい、とても似ていると言われるんですよ」

実際の姫は知らないが、ユージンやセルアが似ていると口にしていたのだ。蘭もしっかりと主張を試みる。

どうにか納得してくれたらしい。マルタはもう何度目かわからない溜め息を付くと話を進めた。

「とにかくあんたをウィルナに帰さないと、変なとばっちりをくらいそうだ。町で騒ぎになってなきや良いんだが、ってそれは無理かね。どこらへんに住んでるんだい？」

住んでいる場所を聞かれたものの、ウィルナには何か区画ごとに名前でも付いているのだろうか。どう説明したものかと悩んでいるところにクロードの声が加わった。

「ランはあまりウィルナの事に詳しくないんだよね？ 大体どこら辺かを教えてくれればいいよ」

北や南という事かと、とにかく町の造りを考えると場所は中央に

なる。しかし、このままそれを言っても良いのだろうかと思いを
回した。姫ではないかと聞かれた事や、ウィルナとの関係という発
言から考えると何やらあまり好ましい返答には思えないのだ。

「どうしたんだい？」

マルタが気にせず言っただけで、初めて笑みを見せた。だから
こそ、蘭も言うしかないと思いを決める。

「たぶん、中央です」

この発言にはマルタの表情がまたも変わってしまう。目を大きく
見開いたかと思うと、すぐに眉が潜められた。

「真ん中って言ったなら城だよ？ あんた似てるだけって言ったじゃ
ないかい」

確かに似ているだけなのだ。それは本当である。

「似ているほかに色々ありまして、お城の敷地内に置いてもらっ
てるんです」

室内が急に張り詰めたように感じられた蘭は体を強張らせた。こ
ちらの様子を伺っている他の大人達の視線が突き刺さるようで、何
かまずい事を口走ったのかと返答を待つ。

「じゃあ。誰かと一緒にいたってのは、城の人間かい？」

しかしマルタは表情を強張らせながらも会話を続けてはくれる。
どうやら大丈夫らしいと、蘭は素直に名を告げた。

「城の人間なのは確かです。ユージンと言うのですが」

「ユージン！」

マルタの声はもう悲鳴に近い。思いもしない反応に蘭は驚くだけ
であり、クロードがどうしたのかと声をかける。

「姫直属で動いている奴だよ。いや、むしろ今は姫とあの男がウィ
ルナを動かしているのに近い。クロード、アンヘリカとウィルナの
関係を壊したいのかい！」

怒鳴りつけられてしまったクロードは、目を丸くしながらも口だ
けは動かす。

「さすがにオレもそんな事は思っていないよ。格好も王宮の人っぽく

なかったから声をかけたんだし」

セルアもユージンも蘭に合わせて服装を変えていた。本来ならば王宮の人間が庶民的な服装で出歩くという事がないのかもしれない。二人が王宮の者だとわかる服装で出歩き、その隣に蘭がいたならばこうした事態にはならなかったとも考えられた。

「ああもう。ただ、ウィルナに連れて行けば良いって事にはならなさうだね。あの男は油断ならない、うまい事交渉するにもやっかいなんだよ、隙がなくて」

マルタのユージンに対する印象はこうらしい。それに対してクロードはまた違わらしかった。

「隙がない？ オレとしてはいつも一緒にいる男の子の方がそんな気がしたけどな」

「いつも一緒にいる？」

初めてクロードに会った時、セルアは離れた場所にいた。おそらく見ていないと思っていたのだが、どうやら違うようだと言は問う。「ぶつかる前にも何度か見かけてるんだ。声をかけようとしても、あの子がすっかり見張ってますって感じで、ほんと無理だった。絶対に近づいてくるなよって雰囲気で諦めていたんだけど、今回一緒にいたお兄さんはそうでもなかったからね」

「そうでもなかったって……」

セルアは何かと口うるさくはあったが、しっかりと意味があったらしい。クロードの発言を聞いている限りでは、蘭を守ってくれていたともとれるのだ。そして、ユージンではなくセルアと一緒にだったのならここには来なかったという事にもなる。

「あんた、計画的に連れてくるつもりだったのかい！」

マルタの声にクロードがしまったと表情を変える。周囲にいる大人達も見える範囲ではあるが、鋭い瞳でクロードを見つめ針のむしろのような状態になってしまった。

「そりゃあどうも。随分と視線をくれるお前が不快だったからな」
そこでふいに混じった声は、思いがけないものであり蘭は勢いよ

く振り返る。

話に夢中になっていたせいかな。それともマルタが大きな声を上げていた為か、誰も扉が開いたとは気付かなかったらしい。

何故か入り口にはセルアとユージインが並んで立っていたのだ。

「セルア！ ユージイン！」

蘭が名を呼ぶのと同時にセルアはこちらへ向かってくる。年齢にはそぐわない物言いと振る舞いは変わらぬままに、側まで来ると頭を軽く叩かれた。

「お前を探すのにどれだけ手間がかかったと思ってる。一人になるなど言っただろうが」

「……ごめんなさい」

散々注意を受けたのにも関わらず、迂闊な行動を取った自分を思い返す。本当に申しわけないと、蘭が座っている為に似た高さになった目線を合わせればセルアはわずかに笑みを浮かべる。だが、顔色は酷く悪いような気がした。

「まあ、お前にも原因はある。が、それよりもその野郎だな」

セルアの視線の先にいるのは勿論クロードだ。現在、クロードだけではなく皆が突然の来客に驚いたのだろう、何も言えずにセルアを眺めているばかりだった。

蘭自身も安堵感を得てはいるが、落ち着いていると言えるのはセルアとユージインだけに思える。

ユージインもちちらへ歩いては来たのだが、目的は蘭よりもマルタらしい。迷わずにマルタの側で足を止め見下ろす。

「さて、ここに私が来ているというだけでも、この方がウィルナに取って価値のある人物だとおわかりでしょう？ マルタ」

笑みを浮かべている姿と低く静かな声色は不気味な程に似つかわしくなく、マルタは渋い表情を見せる。何か思案しているのだろう、随分と間を置いた。

「あの子を連れて来たのを申しわけないとは思っている。だが、これはアンヘリカの意志ではないよ。このクロードが単独でやらかし

た事だ」

マルタがクロードを顎で示すとユージンの視線はそちらへ移り、その瞳の余りの冷たさに周囲の空気が凍りついたようにすら感じられる。

「目の前で連れて行かれるのを見ていたのでそれは認めましょう。このような事をしてもアンヘリカの得は何一つありませんね。随分な問題児を抱えているという事ですか？」

（怖い）

怒らせると怖いとは聞いていたが、冷めた瞳でありながらも笑みを貼り付け怒気のこもった声をぶつけていく姿は何とも言えないものだった。冷静なのかも曖昧に感じられる雰囲気は、確かに恐ろしい。

（わたしなんて全然怒られていなかったんだわ）

たしなめる程度ではない様は、後に自分にも向けられるのかと蘭は息を飲んで流れを見守る。

正面切って向かい合うのは避けたい視線だったが、マルタは怖気づきもしないらしい。むしろ問題児という発言に同意したように口端を上げたのだ。

「当たり前だよ。事の説明はクロードがする、もちろんあたしも同伴でだ」

「結構ですね。たっぷり聞かせていただきましょう」

何やらさらわれただけとは言えない雰囲気、蘭は固唾をのんでいた。

一章・砂礫と岩の狭間（五）

まず蘭とセルア、ユージインが並び、テーブルを挟んでマルタとクロードのいる形で会話が行なわれた。事の次第を見届けたいといった素振りの者達もいたのだが、マルタによって全員が外へと出されてしまっている。

会話とは言っても大半がクロードによる説明であり、蘭はそれに頷きながら時折三人の質問に答えていたくらいだ。

とにかくクロードが蘭を連れ去った理由と、二人きりの間に何があったのかをはっきりとさせた。どうやらそれが本当らしいと納得すると、今度は蘭とセルアが部屋から出されてしまう。

「二人は休んでいて構いませんよ。後は私に任せてください」

ユージインの優しいが恐ろしさの潜む声色には同意するほかはなく、蘭とセルアは同じ建物の二階へと通された。

ここはどうやら宿泊ができる場所らしく、廊下を挟んだ両側には扉が十ばかりある。その一室を使うといいと言われ、二人で入り込んだところだった。

狭い室内には簡素なベッドが片側を壁に押し付けるようにして置かれている。テーブルと椅子二脚はわずかな空間の中央に陣取り、それ以外の物は見当たらない。

小窓が一つ付いており外が見渡せるようではあったが、今はそういった時ではない。蘭は椅子に腰を預け、セルアはベッドにだるそうに座り込んだ。

「本当に後はないんだな？」

この部屋に来る間にも聞かれたが、アンヘリカに来る道中クロードに何かをされたという事はない。担がれて運ばれた以外は特に辛い目にもあわず乗り合いに揺られていただけだった。

「ないよ、一番酷かったのは最初に連れて行かれた時だから」

あの時の体調の悪さを思うと嫌になる。目くらましを目的とした

爆薬を叩きつけた衝撃がより拍車をかけたようなのだが、護身用として一般的なものだというのが蘭は驚かされた。

「ユージンなら大丈夫だと思っていたんだがな。あいつは実戦向きじゃねえのを忘れてた俺の落ち度もあるっちゃあるな」

普段のように強く言われるのかと思えば、セルアは自身にすら落ち度があったと言い始める。

蘭は驚いて見返すのだが、少年は普段のような意地悪そうな笑みを浮かべるばかりだ。

「あほ面してんじゃねえよ」

「酷い……でも、ありがとう」

こうした状況でなければ言い合いを始めるところなのだが、蘭は素直に礼を述べる。

確かに酷い目にはあったのだが特に怪我もなく、こうしてセルアとユージンがすぐに来てくれた。クロードに帰してもらおうと約束はしてもらったが、どこまでを信じるべきかは難しい。かといって一人で行動できる程の知識もなければ先立つものもなかった。

追いかけてきてくれた上で、こちらを強く責めもしない少年は蘭にとって本当に心強い存在だった。

「本当だ。感謝しろ」

セルアはふてぶてしく笑ったが、どうもその顔色は悪い。いつものきつく煌く碧の瞳もどこかかげったように見える。

普段からだらしくなくソファにあぐらをかいたりねそべったりしているセルアではあるが、今の体勢には違和感を覚えた。ベッドに座るだけではなく両手をしっかりと布団に乗せて、まるで腕で支えているような姿勢で辛そうにこちらへ顔を向けてくる。

先程も思った事だが、体調でも悪いのだろうかと蘭は聞く。

「セルア、具合悪い？」

「ん？ ああ」

何故かそのまま椅子を持って近くまで来いと言われ、蘭はベッドの側まで移動して座りなおす。するとセルアはベッドへ横になり、

片手で蘭の手首を掴んでしまったのだ。

「何？」

「疲れたから、寝る」

よくわからない行動に首を傾げる蘭を気にせずに、セルアはあつという間に瞼を閉じてしまう。

「寝るの？」

しかし答えはなく、セルアは本当に眠ってしまったらしい。青白い顔色が不安になり空いている手でセルアの頬に触れてみた。

温もりはあり寝息も聞こえる為に、大事ではないのかと思いがながら幼い少年の寝顔を眺める。

蘭よりもずっと小さな体は、普段の振る舞いでは忘れがちだが十二という年齢を思い出させる。腕も手もまだまだ細く小さく、蘭の手首を掴んではいるが一周する程の大きさも持ち合わせてはいない。
(しっかりしているけど、子供なのよね)

七つも下の少年に世話を焼かれている自分が恥ずかしくもなったが、過ぎてしまった事は仕方がない。これからについてを考えようと、瑞々しく滑らか頬から手を離す。

(でも、随分と疲れてるみたい？)

寝ると言った瞬間に眠ったようにすら見えた少年は、蘭を掴む腕にだけ力を込めて横たわっている。

セルアは蘭を探すのに手間がかかったと言っていた。情報を伝える手段などないと思っていたが、何かしらの方法で二人は蘭の位置を知ったようなのだ。

(術とか？)

国一番の使い手だと称されるセルアなら、何かできるのではないか。そんな考えも浮かんだが、とにかく今は見守るべきかと蘭はセルアを眺めている事に決めた。

しばらくするとわずかに軋む音と共に扉が開かれた。蘭が目を向

けるとマルタとクロードとの話がついたらしいユージンの姿が見える。

「随分と可愛らしい事をしていますね」

それは蘭の腕を握り締めぐっすりと眠り込んでいるセルアを見ての言葉だ。

「わざわざこうしてから寝たのよ？」

側に呼ばれた経緯を簡単に説明すると、ユージンは珍しく声を上げて笑いかける。

「そう……でしたか。また貴女がいなくならないか心配だったのでしょね」

「さすがに今は大丈夫だと思いたいんだけどな」

いまだにしっかりと掴まれている腕を見下ろしながら、軽く引く張ってはみるがびくともしない。

あまりに長時間同じ体勢でいるのはつらくなり、どうにか外そうと試みてはいた。しかし想像以上にセルアの力は強く、蘭は諦めておとなしくしていたのだ。

「私も来た事ですし、そろそろ離しても良さそうですね」

事情を理解したらしいユージンが手を貸してくれた為、蘭の片腕はようやく自由を得る。動かせなかった為に痛む関節を気にしながらも、数度曲げ伸ばしながらセルアについて聞く。

「疲れたから寝るとは言ってたけど、大丈夫なの？」

先程の蘭と同じようにユージンがセルアの様子を確認する。青白い肌で眠っている姿に少々心配はしていたが、静かな寝息に安心はしたらしい。蘭を掴んでいた腕をそっと移動させると、しっかりと布団をかけ直す。

「少し、無理をしましたからね」

「もしかしくなくても、ここへ来るために？」

そうですと言い、もう一脚あった椅子に腰かけたユージンに手招きをされる。

セルアの邪魔にはならないように、離れた位置で蘭が連れ去られ

てからの説明をしてくれた。

あの爆発でクロードと蘭を見失ったユージインはすぐに屋敷へと戻った。そして、城にいたセルアを呼び事情を説明する。セルアが術を使えば蘭の場所を特定できると言い探し始め、どうやらアンヘリカの方角へ移動している事だけはわかった。

そこで、すぐに追いかけてようとセルアは言ったのだが、さすがに急にウィルナから離れるわけにもいかない。まず、数日ウィルナを離れられるだけの準備をしようとユージインが提案し、その日は色々動き回っていたらしい。その間にもセルアは蘭の位置を確認し続けてくれたようだ。

そうして翌日、二人はウィルナから出発したという。丸二日かかる道程を一日遅れで出たのに、どうして蘭のすぐ後に到着できたのかと聞けば術のせいらしい。

乗り合いには魔力を込めた石を使い、大した力をかけずとも荷台を引けるようにしている。それは魔力が多ければ多い程効果を発揮できるらしい。石だけではなく、セルア自身の魔力も消耗して来たのが早さの理由とユージインは言い切った。

「今回、セルアは相当な魔力を使いました。おそらく現在は空に近いのでしょう。更にランの居場所を見失わないように睡眠時間も削っています。眠ってさえいれば平気なはずですよ」

「わたしの為に……」

「ランは必要があつてウィルナにいるのですから、探すのは当然でしょう？ セルアはおそらく数日で普段通りになります。あまり気にしないでください」

眠っているセルアだけではなく、ユージインも相当無理をしているに違いないのだ。詳しい内容はわからないが、姫がいなくなってしまった事実を隠そうと動き回っているらしいセルアとの会話をよく耳にしている。

「ありがとう」

ごめんなさいと言おうか迷ったのだが、こうして追いかけてくれ

ただ。感謝をしようと蘭は改めて礼を述べる。

しかしセルアと同様ユージインもそれ程怒りはしないのだ。クロードやマルタに向けていた冷たい瞳が蘭を見つめる事はない。

「貴女も災難でしたね、結局はあの人が無理に連れ去ったのですからランが気にする必要はありません。ただし、一人で出歩く事だけは絶対に禁止します。おそらくこれまで以上にセルアが見張ってくれるはずですよ」

いつも通りだと思える笑みを浮かべているユージインに安堵しながら、蘭はしっかりと頷く。

「わたしも二度とあんな目には遭いたくないし、側を離れたりはしないわ」

どこか大丈夫だろうと思っていた部分があったのは否定できず、蘭は見知らぬ土地の危険性について改めて自覚しようとする。

「それなら安心ですね。セルアは貴女というのを楽しんでいるようですし、付き合ってあげてください」

「わたしが付き合ってもらっていると思うんだけど？」

セルアは何も知らずにいる自分のお守りをしているようなものだ。あれは何だ？ これは何だと連れまわしてしまっている。ユージインもさらわれる直前までを知っているのだから、おかしい発言だと蘭は思う。

「そうでもない私は思っていますよ。セルアはなかなか気軽に歩ける立場でもないのです。遊び相手を得たのは向こうとも言えるのかもしれない。良い刺激になるのではないのでしょうか」

この言葉は本人に伝えてはいけませんよとユージインは釘を刺す。子供扱いを嫌う少年には確かに不向きな言葉に聞こえた蘭は、頷きで答える。

「まだ働く年齢には見えないもん。わたしがセルアくらいの時は学校か遊ぶかで、家の手伝いくらしかしてなかった」

「それが普通でしょう？ 私達だって似たようなものですよ」

二人で眠るセルアに視線を向けながらも会話は続く。

「なのはどうしてセルアはお城にいるの？ もっと遊べるような環境でもいいんじゃない？」

するとユージンは困った表情を見せた。

「魔力を持っている者は皆城に入るのですよ。その中でも突出した才能を持っているセルアは当たり前前の生活では許されないのです。詳しい説明は難しいのですが、とにかく変わった環境にいると思うてください」

子供らしい事ができないのだろうかと考えながら、蘭も自分の思いを告げる。

「乗り合いの中だけでも色々な事を知れた気がするし、一緒に街へ出るのも私には勉強みたいなものなのよね。セルアがそれで楽しんでくれるならいいんだけど……それで本当に大丈夫？」

もっとすべき何かがあるのではと思ったのだが、ユージンは嬉しそうに同意した。

「ええ、それで構いませんよ。ただ普通に行っているのが一番なのですから。しかし、ランはクロードが言う理由に納得したのですか？」
セルアについてはもうじゅうぶんらしい。あまり気にせず一緒にいればいいのだと蘭は受け入れ、今度はクロードについてを考える。

「納得したというよりは、諦めた感じかな？ わたしはずっと一緒にいたけれど、本当に何て事をしたんだろうって反省はしてたように思える。たまに疑っている部分もない事はないにしてもね」

どうしても蘭を連れてこなければならぬと思ったとクロードは強く訴えていたのだ。何が何でもアンヘリカへ連れて行きたいと、自分でも驚く程に思ったと何度も繰り返した。

誰もおかしな理由だといった反応を示したが、深く反省している様子も感じられる。ユージンはあまり変わらない感想なのか苦笑するだけだ。

「確かに反省をしているようには見えませんでしたね。そして、それだけでもなさそうなのも同意です。何かをされたわけではないのでしょ

う？」

セルアと同じ質問に思わず蘭は笑う。

「大丈夫。担がれた以外は普通に乗り合いにいただけ。二人共心配し過ぎ……とは言っても運が良かったただけなんだよね」

「ええ、こうして無事だから笑っていられるのですよ。しかし話を聞く限りではセルアならば貴女がさらわれる事態にはならなかったようです。もっと気を配るべきでした」

やはり己の失態だったと言い始めるユージインはセルアと変わらない。

「ユージインのせいじゃないわ。だって、普通はさらうなんて駄目でしょ？」

「そうはなるのですがね。謝りあったとしても、どこか納得もできないようにも思えますね」

迂闊にユージインの側を離れてしまった蘭。そして、その隙を狙ったクロード。更にはセルアではなかったから可能だったと言葉が続き、様々な理由が現れてはいる。

「確かにそうなんだよね。結局はクロードがわたしを連れてこうとさえしなければ何も起きなかったのに」

「でしょう？」

これ以上は何を言っても仕方がないと二人で割り切る事にし、ユージインとの間にわずかなくつるぎの瞬間が生まれる。

しかし、すぐに扉を叩く音に遮られた。

「どなたです？」

ユージインが問うと、今まさに話題になっていた人物の声が聞こえる。

「クロード。開けてもいい？」

「いいえ。こちらが開けるまで待ってください」

珍しく嫌そうな表情を見せたユージインが立ち上がると扉を開けに行く。

「何のご用でしょう」

ユージインのクロードに対する態度は明らかに冷たい。爆薬を投げつけられた相手だと考えると仕方ないのかもしれない、クロードもわずかに怯えた様子を見せる。蘭とセルアがいなくなった後の事はわからないが、もしかするとユージインが何かをしたのだろうかとも思える反応だった。

「マルタが今日明日はここに泊まるというって。隣二つも使って」「それはありがとうございます」

用件を聞き終えるとユージインはすぐに扉を閉じようとしたが、隙間からクロードが手を振りながら笑顔を見せる。

「ラン、また後でね」

その晴れやかな笑みを見た為かユージインは随分と疲れた様子で戻って来ると、溜め息を付きながら椅子に座り直す。

「何というか、あまり懲りていないように思えますね」

「確かにね……でも、あれだけ反省してるって言ってたんだし同じ事はしないと思うよ？」

「それは当然です」

今の状況では帰るわけにもいかず、三人はアンヘリカで過ごす以外の方法は持っていない。クロードの様子も気にはなったが、深入りしなければ平気だろうと蘭は考えていた。

一章・砂礫と岩の狭間（六）

翌日、クロードが蘭にアンヘリカを案内したいと言いだした。セルアの魔力が使えない今、ウィルナへ帰る方法は明日出発する乗り合いを使うのが最短になる。

ユージンとセルアが乗ってきた乗り合いは魔力を込めた石が空になっており、砂漠を走れる状態ではなかった。術師であるセルアは眠ったままであり、目覚めても無理はさせられない。必要な作業をする術師と御者を後日派遣し引き取ると決められたのだ。

蘭はあくまで秘密裏に置かれている存在である為、セルアが御者の役割を果たしてきたらしい。私よりも器用なんですよとユージンには説明されたが、蘭は驚きを隠せなかった。

その為、三人は明日の昼までアンヘリカで過ごさなければならぬ。

昨日の蘭は眠っているセルアの側でユージンと話してばかりだった。時折窓から景色を眺めていると今日はおとなしくしてしましようとうージンが言い、蘭もそれに同意した。

二日間座るような格好で眠っていた為、疲れが溜まっているような気もする。その上身支度も特にできる状態でもなく、着の身着のままの姿も落ち着かない。与えられた個室で体を拭き、替えのアンヘリカの衣服を纏って過ごしていたのだ。

アンヘリカはウィルナと違い日差しが強く照りつけてくる。肌を焼かない為に露出は極力控えるらしい。素材はやはり麻のようであったが、長袖のチュニクに長ズボンを合わせた姿を蘭はしている。

姫の代役を果たすには日焼けは厳禁だと、外出時には顔や首も守らなければならないとユージンに告げられた。乗り合いでの二日間ですでに焼けてしまった部分はあるのだが、とにかくこれ以上はならないとしっかり身を包む衣服を義務付けられる。

（あんまり外には出ないって言ってたしな）

ウィルナの姫に似ている事が蘭が屋敷にいられる理由なのだ。とにかく守るべきだろうと、日焼けに対し気を配ろうと受け入れる。

食事の時は一階へと行き、クロードやマルタだけではなく他の者達とも一緒に過ごし色々な話をした。詳しい事はわからないがこの建物にいる人達は皆、身寄りがなくここで共同生活をしているらしい。その中で最年長がマルタであり、色々と取り仕切っているようだった。マルタの役割はそれだけではなく、アンヘリカ全体の代表としても行動しているようで立場上ユージンとの面識があったようだ。

今は朝食で一階におり、右隣にはユージン、左隣にはクロードが座っている。

「折角、アンヘリカに来たんだから色々見て行きなよ」

クロードはあっという間に朝食を平らげ蘭を外へ誘い出そうとしていたが、ユージンが口を挟む。

「ならば私も一緒に構わないでしょう？ アンヘリカへ来た事はあってもなかなか出歩く機会はありませんでしたからね。詳しく知れるのならばお願いしたいくらいです」

ユージンは当然ではあるがクロードを好んでいないらしい。何かにつけてこちらへ話しかけてくる全てを阻もうとしている。

「ええ！ どうして」

はつきりと嫌そうな表情をするクロードだが、ユージンは素知らぬ振りをしているらしい。

「一人くらい増えても構わないでしょう？」

「それじゃ意味ないよ。ユージンはウィルナでランと一緒にいられるのに、少しは気を使って。オレはアンヘリカを案内するって約束したんだ」

納得できないと訴えかけるクロードにユージンが冷めた瞳のまに微笑む。

「何の意味がないのでしょうか？ それにその約束とやらは私達がないからこそ成り立ったのでしょうか？」

疑問系ではあったが肯定以外を求めてはいない口調をぶつけられ、蘭も頷く。

「まあ、知り合いもない中で一人になる勇氣はなかったもの」

酷いとクロードが声を上げたが蘭は全ての会話にいちいち反応しては疲れると、その後は黙々と食事を進め始める。昨日の夕食も似た状態だった事もあり、このうるさはもう仕方がないと諦めた。

ここにセルアが加わったらどうなるのだろう、そんな考えが頭をよぎる。セルアはまだ二階で眠ったままだった。先程、昨日寝ると言っただけ一度も起きていない様子が心配になり声をかけてみると目を開けはした。だが、もう少し寝ると不機嫌そうに言い再び眠ってしまったのだ。

ある程度魔力が戻ったら起きてくるとユージンには言われたが、本当に食事摂らずに眠っていて大丈夫なのだろうかと思える。(寝ていてもエネルギーは消費されるのに、魔力はどうやって戻るものなのかしら?)

魔力だ術だと耳にしてはいるが、目に見えはしない。確かに乗り合いが砂の上を走ったり、ウィルナの日差しが弱まっていたりと体感はしたが納得できる程でもなかった。

病気とはまた違うのかと思いつながら、コップに注がれた果物のジュースを口にする。

「ランってば、話聞いてる?」

ぼんやりと考えていた為に気付かなかったが、どうやら数度クロードに呼ばれていたようだ。

「ごめん、何?」

いまだにユージンと言いつているだけだと思っていたが、何か用事があるらしい。

「ランはオレと二人よりユージンもいた方がいいの?」

こうした時のクロードの表情は可愛らしい。しかし、ここでクロードを優先させるのも考え物だと蘭は思う。ユージンもセルアも

クロードの事を気に入っていないこの状況、二人で出歩くと言うわけにはいかない。何より蘭自身も二人きりになるのは避けたいと感じるものがあった。

「三人でいいでしょ。信頼度で言うならユージインが上だもの」

「そんなあ」

肩を落としたクロードに周りから様々な声かけられる。そんなんじゃ当分無理そうだな、お兄ちゃん振られてる、だってクロードだよ等、結構な言われようだ。更に落ち込んだらしいクロードだったが、その切り替えは早いのか笑顔で周りに答える。

「まだ出会ったばかりだからオレ達。下がりようがないものは上げるだけだよ」

自信有りげに放たれた言葉は、クロードが自らどうしようもないと表しているようで誰もが呆れながらも笑い声を上げる。

蘭をさらってきたと知っているのは大人達だけであり、子供達がいる状態で真実には触れられない。あくまでもクロードが蘭と知り合い、そこから城の人間に繋がった程度に思われているらしい。

ユージインもマルタとの間で何かしらの約束事があるらしく、クロードを邪険にはするが追い払いもしない。

（詳しい説明は帰ってからかな？）

幾つかの疑問は残されたままだが、アンヘリカにいる限りはクロードとそれなりに接して過ごすと言明された。ウィルナの人間がアンヘリカにさらわれたという噂はお互いに不要なものであり、一時ならば仕方がないと話はまとまったらしい。

蘭とクロードは友人という設定になっており、町の案内を拒むのもおかしい。このままユージインと共に向かう事になるかと周囲を眺めていれば、マルタの声が全てを収めた。

「もう少し、まともであって欲しいものだね。クロード！ 迷惑をかけない程度に案内をするんだよ」

案内を認めはしたが決して適任とは思われない響きに、蘭とユージインは顔を見合わせて苦笑するだけだった。

アンヘリカはあまり広さがなく、ぐるりと一周するだけならば一時間程だろう。三人は湖のほとりを周るように砂地を音を立てて歩いていた。今はちょうど四分の一を過ぎた辺りだ。

どうやらクロード達のいる宿付近が小さいながらも様々な品の並ぶ店が何軒かあり、最も賑わっている場所のようだった。それ以外は民家である。特別目につく物もなくユージンと共にクロードの話を聞いていた。

門の周辺が宿や店であり、次に民家が置かれる。そうすると畑や家畜の為の場所となっており、更に進めば空き地とも言えそうな広場があった。広場から外壁代わりの木々へ向かう奥まった場所にはたくさんの墓標らしきものが見える。

（町の規模に対しては多くない？）

素直に思い浮かんだ感想だったのだが、さすがに口に出せる内容ではない。このまま広場を突っ切れば再び畑があり、次に民家で更には店があるとクロードは教えてくれる。

不思議な作りに疑問を漏らせば、どうやら入り口となる門が二つあるらしい。

「シェラルドから来る人は向こうから入らなきゃいけないからね。ウィルナとアンヘリカとシェラルドは直線状に並んでいる感じだから、二箇所の方が使い勝手もいいんだ。同じように配置しているのもどちらかを優遇しているように見せない為だよ。ちなみにマルタが仕切ってる宿は向こうにもあって、代表者の居場所が偏らないようにもしてる」

どちらかを最優先してはならないのかと思いつながらも、簡単な知識だけを蘭は求める。

「二つの国の真ん中って事なの？」

「距離もほとんど変わらないはずだよ。今は乗り合いがある分、ウィルナに行く人が多くなってるけどね」

ウィルナの姫により造られた乗り物はウィルナとアンヘリカを繋ぐものであり、シェラルド国の人は使えないらしい。

（なんか色々あるって事よね？）

戦争があったと言ったくらいなのだ。とにかくそういうものなのだろうと受け入れていると、ユージンがクロードに聞いた。

「この服装ではあちらは避けるべきですかね？　引き返しますか？」

蘭はアンヘリカ製の衣服を着ているが、ユージンは屋敷や城にいる時と同じ黒のコート姿である。はつきりとウィルナの王宮に仕えていると示す衣服は好ましくないらしい。

「んー、その格好でさえなければ連れて行けるんだけどな。オレ達は危害を加えないはずだけど、シェラルドの人はわかんないもんな。でも、もう少し進むくらいなら平気だよ。あとランだけなら一周もできるよ？」

ユージンだけが戻ってはどうかという台詞に、冷たい言葉が返される。

「貴方は自分の立場を理解しているのですか？　こうして一緒にいるだけでもじゅうぶんでしょう？」

マルタもこれ以上馬鹿な事はしないはずだと釘を刺してはいたものの、クロードを信用しきる事もできない。

「オレだってわかってるよ。もう少し進んだら戻ろうか？」

そうして三人で足を進めはしたが、本当に逆の配置が続くだけであり目新しいと言える程でもなかった。どこまで行くのかと蘭が思っているれば、突然にクロードの足が止まる。

「……あ」

何を見つけたのか驚いた声を上げ、視線の先を蘭も窺う。

だいぶ先ではあるが小さく反対側の門が見え、そこにガナを連れた数人が到着した様子がわかる。

「どうしたの？」

あまり良いとは思われない声色に思え蘭は聞いたのだが、クロードは眉を寄せて向こうを見つめているばかりであり返事がない。

「あれはシェラルドの方では？」

クロードではなくユージンが言い、目を向ければ何やら神妙な面持ちだ。入り口へ視線を向けたまま眉を潜めている。

（どうしたのかしら？）

これまでのんびりとした口調で話していたクロードも、どこか張り詰めたような雰囲気が変わっており急に体を反転させた。

「たぶん第二王子だ。二人は外にいない方がいいよ、帰ろう」

ユージンも理解したらしい蘭の背を押すようにして促される。

「とにかく今は戻るべきです」

足早に歩かされながら蘭は疑問を覚えるのだが、話しかけられる雰囲気でもない。慌しく宿への道をせかされ続けるばかりだ。

二人は何かに納得しているようなのだが、蘭には何一つわからない。どうして急に引き返すような事になるのか、足早に歩きながらどうにか隙を見てユージンに聞く。

「どうしたの？ 第二王子って？」

「戻ってからにしましょう。とにかく今は余裕がありません。クロード、私達の乗り合いがそのままでしょう？ 目に付かぬようにできますか？」

「一時的に外に出してもらっておくよ。あれを見られたらまずいからね」

大丈夫とでも言いたげな笑顔を見せてはくれたが、それもどこか引きつっているように思える。とにかく姿を見られたくないという事なのかと蘭も従い先を急いだ。

宿に着くとクロードはごめんまた後でね、と言いどこかへ行ってしまった。ユージンは変わらず蘭の背を押しながらセルアの眠る部屋を目指している。

扉を開き中を覗くと、セルアは壁に寄りかかつてはいるものの体を起こしてベッドの上に座っていた。

「セルア！」

「目覚めたのですね。体調はいかがです？」

二人で側へ向かい様子を窺う。昨日に比べると顔色はずっと良くなっているが、表情はいまだ疲れているように見える。

「まだ悪い。ユージン、何か食い物くれ」

痛みでもあるのか頭を押さえながらこちらを見る表情も険しい。

「そうですね。下へ行つて来ます」

ユージンはすぐに階下へ降りて行き、蘭は布団に両手を着く格好でセルアの顔を覗きこむ。

「頭痛いの？」

眉を寄せている表情も、力なく壁に背中を預けている体勢も、とても回復しているとは思えない。

セルアは頭を手で押さえたままに弱々しい笑みを浮かべる。

「ん、痛いつてわけじゃねえよ。重い感じはするけどな」

「本当に？ 凄く辛そうに見えるよ？」

「そんなに心配しなくても大丈夫だ、別に」

魔力を使い過ぎるという症状がどんなものか想像すらできないが、丸一日寝続ける程消耗しているのだから心配にもなる。

セルアは頭に触れていた手を下ろすと、壁から背中を離しあぐらをかいて座りなおした。そして、蘭と瞳を合わせると不敵な笑みを浮かべる。

「んな顔する必要なんてない、このくらい慣れてんだよ。折角助けに来てやったんだからお前は普通にしろ、辛気くせえ」

こちらに気を使つたのか強気な発言をするセルアにも驚いたが、それ以上に内容が引くかかる。

「慣れてるの？ そんな状態を」

すると笑みが苦笑へと変化してしまう。

「不本意ながら、な」

決して望んでいるのではないというセルアの様子は、不思議に感じられるものだった。

一章・砂礫と岩の狭間（七）

ユージインは軽い食事を手にし、すぐに戻って来た。まずはセルアが食べ終わるのを待ち、それから本題に入る。

「今、シェラルドの第二王子が来ています」

腹が膨れたらまた眠くなったと言いながら、再び壁に寄りかかっていたセルアが驚いた表情を見せ姿勢を正した。

「理由はわかりませんが、アンヘリカにいます。私達はちょうど到着したところを目にしただけで戻ってきた為、目的はわかりません」クロードと三人で周囲を見て歩いた事を交えて伝えると、セルアの表情は陰しくなるばかりだ。

「まあ、戻ってきて正解だろうな。こいつはともかく、ユージインの格好では危ねえ」

ユージインとセルアはウィルナの者としてアンヘリカへ来た為、いつもの黒を基調とした衣服を身につけている。それがどう危ないに繋がるのかはわからないが、とにかく今蘭は二人の会話を聞いているしかない。

「今、向こうが何かをしてくるとは思えません？」

「確かにそうだが、きっかけを作っちゃう可能性はある。そして、今はランがいらない」

「帰られるまでに何かが起きるのは避けたいですね」

今二人が言うランは本当のラン、いるべき姫の事だ。お互いに思案しているらしくしばし会話が止まる。

その沈黙を破ったのはセルアだ。

「まあ、今はほっとくしかないだろうな」

乱暴に髪をかき上げながらどうせ想像じゃ何もわかんねえよと言、蘭に目を向ける。

「あほ面」

「ちよっと！ 急に何？」

二人の話がわからず聞いていたのは確かだが、そんなにも間拔けな顔をしていたとも思えない。あまりにも失礼だと蘭が憤慨すれば、セルアは声を立てて笑う。

「必死に話に追いつこうと考えてるみたいだったが、無理だったんだろ？」

「それはそうでしょ、知らないんだもの。ユージンも笑ってないの」

セルア程ではないものの、笑みを浮かべていたユージンにも文句を言う。

「失礼しました、説明をする約束でしたね」

ウィルナ国、シェラルド国、そしてその二国に挟まれるように存在している町アンヘリカ。

シェラルドというのはアンヘリカから見てウィルナと間逆の位置、距離もほぼ同じ所にあるらしかった。どこまでも続くかに見える砂地も、先へ進んで行くとごつごつとした岩に変わり大きな岩山へと繋がる。その岩山をくり抜いたかのように存在するのがシェラルド国。

そのシェラルドとウィルナは、どのくらいなのかもわからない程の昔から争いが絶えなかった。どれだけの王がいたのかも忘れてしまふ期間、戦いは続きたくさんの血が流れた。その目的はお互いの領地を手に入れると言うよりは、アンヘリカを手に入れる為らしい。「ここを手に入れる？」

蘭は一つひとつを納得しようと、疑問をぶつける。それにユージンも応じてくれた。

「はい。確かにアンヘリカは両国から見て、ちょうど中心。他国へ侵攻する為の足固めの意味では重要な位置取りです。しかし、ウィルナに残っている記録を見る限り、アンヘリカを手に入れる事のみが重要であり、その先のシェラルドまでを手に入れようとは思っていない節があります。そして八年前に停戦している為、直接戦いには関係していない私達は詳しい理由も知りません。……いえ、お

そらくですが誰も理由を知らないのでしょうか」

「誰も知らない？」

何の理由もなしに戦争をした挙句、人の命を奪うと言うのだろうか。訝しげな顔を見せた蘭にセルアが続く。

「長い間戦っているうちに忘れちゃったんじゃないか、って事だ」

「忘れてしまっても戦っていた……？」

「だから、戦いが止まったとも言えます」

八年前、長く続く戦いのさなかシェラルド国王が急死した。それは戦いの中ではなく自国での病による急死だったらしい。

それをきっかけにシェラルド側から停戦を持ちかけられ、ウィルナも合意した。

「ウィルナとしては渋々受け入れたって噂もあるぞ。本当はシェラルドが何もしないのなら、そのうちに手に入れたかったってな」

過去にも二国間の停戦はあったらしく、それはある程度の期間は効果を発揮して来たという。しかしそれも、いずれ破られる。同じような事を何度も何度も繰り返して来たというのだ。

「そこで疑問を覚えるのは、お互いの国が機能しなくなるのは望んでいないということですか」

知る限り停戦するきっかけはどちらか一方の国が機能しにくくなった時、そこを好機と捉えてもおかしくないはずなのだが、それだけは破られる事がない。ある程度機能するまでは待っているように見えるらしい。まるで暗黙の了解のようだ、とユージンは言う。

「今回はシェラルド王が亡くなり、その世継ぎが確か十五、六でしたかね。とにかく、まだ国を治めきれ年頃ではないという理由だったはずですよ」

「言いかえりや、また戦いますと取れなくもない。その上、十五にもなつてりや普通は王の名乗りも上げるし戦だつてするはずだ」

セルアがうんざりした表情を浮かべ、ユージンが頷く。

「そうとも取れますね。ですが今のところは何も起きてはいません。あれから八年、過去を思えば何かが起きてもおかしくはないはずで

す」

「だからこそシェラルドの奴らとは関わりたくねえ。だからここへ戻って来た、わかったか？」

セルアに聞かれ蘭は頷き、また別の疑問をぶつける。

「不思議だったんだけど、アンヘリカは国ではなくて町でしょう？ どうして？」

二国が欲しがっているアンヘリカ、それはどこの国のものでもないのだろうか。

「それはアンヘリカがウィルナ、シェラルドにいられなくなった人が集まってできた場所だと言われているからでしょうかね」

「いられなくなった？」

「はい、アンヘリカは昔からウィルナ、シェラルドどちらも交流があります。しかし、ウィルナとシェラルド間には直接の交流はありません」

二国が互いの国の品を必要とする場合、アンヘリカで購入するのが唯一の手段となる。

二国の物を入手するアンヘリカでは、ここでのみ加工する事ができる物も発生しなかつこの土地特有の品もある。それを求めてウィルナ、シェラルドの人間は出入りし出会う。仲たがいをする者が多い中、意気投合する者もいるし、恋仲になる者もいるという。恋仲の場合二人が一緒にいれる土地はアンヘリカになるという。ウィルナもシェラルドも他国民を入れる事を良しとしていない為らしい。もちろんアンヘリカの人間が他国へ移り住む事もできなかったが、受け入れる事は厭わなかった。

そうしてでき上がったのがアンヘリカだという。

「そうなるウィルナとシェラルドは元から戦っていて、その結果アンヘリカができたって事になるんじゃない？」

アンヘリカが目的というのがおかしくなる。それは二人共重々承知らしい。

「そうなのです、あくまでもそうやって住む者もいるという事であ

り、昔からこの土地に住んでいる人達の理由は違うのでしょうか」

「結局はよくわかんねえって事だ」

「ふうん」

何やらややこしいが、とにかくウィルナとシェラルドは仲が悪い。そして、その間に挟まれているのがアンヘリカという事か、と言うとユージンが頷いた。

「その程度の認識で構いませんよ。折角ですし、停戦してから現在までについても説明しましょう」

停戦後、シェラルドの情報は限りなく零に近いという。第一王子と第二王子がおり、その二人が国政を動かしているのだろうという予測しかできない状態らしい。

「何を考えてんだか、気持ち悪いくらいのだんまりだ」

そしてウィルナは停戦後五年間、三年前まではシェラルド同じようにアンヘリカに何かをするというわけでもなくいた。そこで今度はウィルナ王が病床へ伏せる。現在でも生きてはいるが寝たきりであり、会話ができるような状態ではないという。

「あの時は城内にシェラルドの者がいて、毒を盛ったのではないかという話もできましたね」

「そういやそうだったな、それも結局はわからず終い。最後には、毒ではなく病だって落ち着いたけどな」

「とにかくそこが転機でした」

王が病気になる事が転機になるのかと思っていると、ユージンは話を進めた。

「国政を取り仕切る役目が姫に移りました。そこで姫が最初にした事が、ウィルナ、アンヘリカ間の乗り合いの設置です」

それまでも交流はあったものの、あくまで自力で辿り着かなければならなかった。そこへ姫は魔力により移動できる乗り合いを提供すると言い出したらしい。それに加えアンヘリカの者がウィルナの者と婚姻する場合のみ、ウィルナへの定住も認めた。

「婚姻に関しては反対意見も多く出ましたね、今までウィルナの人

間だけで来た国を壊すのかと」

「頭の固い連中も多いしな、まあそれがその時までの常識だった。そのくせアンヘリカを手に入れたって言うのだからおかしな話だ」
確かに先程から、変な矛盾があるように思える。

「しかし、姫は国にとって有益な人間が外に流れていくのはおかしいと言いつつ、押し通しました。初めは小さな小競り合いが起きたりもしましたが、現在はうまく機能しているので不満も聞かなくなってきましたね」

「アンヘリカ側も以前よりもずっとウィルナの人間を受け入れてくれるようになった。そりゃ、自分達の住む土地を荒らす連中に優しくなんてするわけもねえはずだ。あいつの提案はウィルナの為とは言いつつながらも、結局はアンヘリカにも恩恵をもたらしてんだよ」

「恩恵？」

「ええ、アンヘリカはウィルナとシェラルドによって荒らされては復興するを繰り返してきたのです。商人以外は基本的に受け入れられなかったのですよ。そこに姫が無理に魔力を押し付けたというのがきっかけですね」

「押し付けた？」

「ウィルナの民が楽に砂漠を越える為に乗り合いを造ったので、止める場所が欲しい。これが初めだな」

「そして、商人同士なら問題がないだろうとアンヘリカの民も使えば良いと言いました。しかし、アンヘリカは反発ししばらくは使わない姿勢を見せたのですよ」

「砂漠の旅は術がなければ本当に命がけだ。楽して移動しているのを見ているうちに使いたくなる。そして、その許しは初めから示されていたわけだ」

「わたしなら使っちゃうわ」

危険な旅をしないですむのなら、それに越した事はない。アンヘリカの人が乗り合いを使い始めるのも納得のいくものだ。

「そういうこった。次にそんな感じでアンヘリカの土地にも術を施

したいと持ちかけた」

「アンヘリカ自体に？」

「荒れた土地を戻す為、姫はアンヘリカ自体にも魔力の供給をしています」

「どういう状態なのだろうか」と聞くと、ウィルナの建物や道をどう思いますかと問われた。

「何ていうか造りたてみたいに綺麗だと思う」

ユージンは微笑みと共に頷く。

「そうです。ウィルナ全体には魔力が使われていて建物が劣化しないように、植物は育ち易いようになっています。そうしなければあの土地であれだけの人間は暮らせないのが現実です」

大きな壁に囲まれた国を思い出す。輝くように美しい場所ではあるが、確かに朽ちた建物を目にはしなかった。

「ウィルナだけではなく、シェラルドも魔力で成り立っているはずですよ」

魔力をうまく使い自然を保護しなければ、あつという間に砂に埋もれてしまう。それがこの世界だというのだろうか。蘭の疑問をよそにユージンの話は続いていく。

「アンヘリカは魔力の保護下にいない。その中で二国の戦いに巻き込まれて来たのです、色々な所に傷も多い。姫はそれを治すまでとはいかないが、定期的に魔力を提供しこれ以上の劣化を防ぎたいと提案しました」

当初アンヘリカ側は何か目的があつてそのような事をするのだろうかとうと断って来た。だが、そこに姫は見返りを求めない、術師として魔力の使える土地を放っておけないだけだと言って強引に提供し始めたらしい。

「術師として放っておけない？」

「ええ。姫はセルアと同じく術師の才を持っておられるのですよ。研究熱心な方でして、すでに魔力の使い道が決まっているウィルナだけでは物足りなく感じていたらしいのです」

「物足りない？」

「ああ、あいつが動く理由なんてそんなもんだ。しかし見返りはいらねえと言ったが、それなりの効果は得てるぞ」

セルアの意見にユージンも同意した。

「破壊して手に入れるよりも、守る事でそこにいる人々の心証を良くするという目的はあったのかもしれないね。それを今まで誰もしてこなかったのかと思うと何だか妙な気がします」

「とにかく、今ウィルナとアンヘリカの関係は良好になりつつあるってこった。そして、それに何の文句もつけて来ないシェラルドは気味が悪い。以上」

長い話をセルアが終了させる。その締めくくり方にユージンは苦笑した。

「大方そうですね」

何だか一気に色々な事を聞いたなど、蘭は頷く。

「何となくはわかった。その気味の悪いシェラルドの第二王子がいて、顔を合わすのは避けたかったって事ね」

「その通りです。確か……第二王子の名はヘンリックでしたかね？」

どうにか記憶を引っ張り出して来たらしいユージンに、セルアが答える。

「ああ、んで第一王子がマティアスだったんじゃないか」

「そうでしたね。そのヘンリック王子が来ている理由はわかりませんが、私達はここでおとなしくしているしかありません。しかし、クロードの様子を思うとシェラルドが何かしているのでしょうか？」

「どちらかと言えば、ありがたくないみたいな感じはしたかな」

ヘンリック王子一向を見かけた途端、張り詰めた雰囲気になったクロード思い出しながら蘭が言えば、ユージンも同意した。

「好意的なものではなさそうでしたね」

しかし、どれだけここで想像しようとも真実は見えて来ない。可能であれば後でクロードから話を聞く事はできると、三人はどう時間を潰すかを考え始めるのだった。

一章・砂礫と岩の狭間（八）

扉を叩く音と共にクロードの声がする。

「ラン、夕飯食べよう」

あの後セルアはまた眠ってしまいユージインも部屋で休むと言った為、蘭も一室でのんびりと過ごしていた。昼食は部屋まで運んでもらい極力室外へ出ないようにしていたのだが、もう大丈夫らしい。扉を開くと想像通りの笑みを浮かべたクロードがおり、蘭は見上げる。

「もう出ても平気なの？」

ヘンリク王子がまだアンヘリカにいるのならば、ここから出るべきではない。宿に入る可能性はほばないらしいのだが、念には念を入れるべきだと三人はこもり切りだった。

「さっき帰ったから大丈夫。暇だったでしょ？ 折角今日は外に出れたのにさ」

当たり前のように蘭の手を掴み部屋の外へと導く、特に拒む必要もなかったのもそのまま廊下へ出た。

「ユージインとセルアも呼ばないと」

まずは奥のユージインの部屋へ行こうとすると、クロードが繋いだ手を引く。先へ進むなという事らしい。

「どうしたの？」

振り向いた蘭に、クロードは寂しげな表情を見せた。

「あの二人も一緒じゃなきゃ駄目？」

「駄目って、一緒に食べた方が良いでしょう」

一気に済ませてしまえば後片付けだって楽になる。

「オレはランの事が気になってるんだよ、それはわかってるよね？」
食事の話がどうして、クロードが自分を気にする話に変わるのだろうか
と蘭は首をひねる。確かに、クロードが自分の事を気に入ってくれているとはわかっている。ウィルナでも言われ、来る途中の

乗り合いでも言われ、ここに来てからも散々言われているのだ。

「わかってると思うよ。でも、わたしにはクロードに無理やりさらわれたって事実もあるの。二人と別に行動できないのは当然でしょ？」

ウィルナとアンヘリカの間の事情で当然のように振舞ってはいるが、本来ならば蘭はクロードを忌み嫌ってもおかしくない立場のはずなのだ。それを忘れたかのように近づいて来るクロードは信用すべき者とは捉えられない。

「そう言われると、オレもどうしようもないな」

暗い表情を見せる姿もわからなくはないが、蘭はとにかくユージンとセルアを優先する。

「だから、二人を呼んでくるからね？」

「うん、皆で食べようか」

その言葉に蘭は頷き、するりとクロードの手から抜け出る。

「じゃ、呼んでくるね」

「ん、オレは下で待ってる」

「すぐに行くから」

気に入られているのはわかっているが、全てに応える必要もないというのが今の蘭の考えだった。

蘭はユージン、セルアを連れて一階へと降りる。一つのテーブル席にクロードが座り、手招きをしているのが見えた。

四人でテーブルを囲み食事を始めると、そこへマルタも加わる。

「今日は災難だったね、ちょっとは外を見れたのかい？」

「半分近くは歩いたかな、全部は見れなかったけど楽しかったよ」
実際にクロードの話してくれる内容は楽しく、蘭の知らない事ばかりだった。マルタもそれなら良かったと笑う。

しばらく五人で当り障りのない会話を続けていたが、ユージンが本題を口にした。

「ヘンリック王子が何故ここへ来たのかを教えてはいただけますか？」
マルタもそれがわかってこの席へ来たのだろう、口端を上げる。
「そう聞かれると思ってたさ。しかし明確な理由はあたしも知らないね」

「知らない、ですか？」

ユージインはマルタとクロードの様子を窺っているようだった。
それにクロードがきつい瞳を返す。

「それは本当だ、オレ達はどうして王子が来たのかを知らない。むしろ迷惑してるんだ」

迷惑という言葉にユージインだけではなくセルアの表情も厳しくなった。

「どういう意味だ、そりゃ」

「ヘンリック王子は停戦してから数ヶ月置きにアンヘリカへやって来てるんだよ。シェラルドは戦を止めた側だからね、あたし達もむげにはできなかった」

マルタの説明によると、ヘンリック王子は以前からアンヘリカへ度々やって来るらしい。当初の目的は主にアンヘリカやウィルナの品を買い付ける為のようだった。

「初めは特に害らしい害はなかったんだよ。可愛らしい口調の子供で、楽しそうに買い物をしては帰っていたのさ。けれど三年、四年と時間が経つにつれて偉そうな口ぶりで喚き散らし始めてね。どうも、苛ついているっていうのかね。来ては当たり散らされてるって感じになってるんだよ」

それでも、何とか我慢できると思っていた。戦に巻き込まれていた頃に比べれば、その程度の事と思い我慢を続けていたとマルタは続ける。

「さすがに一人斬られたのは我慢がならない」

「斬られた……？」

耳慣れない言葉に蘭が聞き返すと、マルタが辛そうに視線を落とす。

「若い男が一人、ね。別に死んじやいないが、片腕を落とされてる」
腕が斬り落とされる事などあるのかと蘭は驚いた。しかし四人は
酷いとは思っている表情を見せつつも、動じてはいない。

「その理由は？」

ユージインの質問にマルタは簡潔に告げる。

「特にないね」

「斬りたいから斬った、て事か？」

そう解釈したセルアにマルタは首を横へ振る。

「お前達はもうウィルナに堕ちたのか、そんな事を喚きながら斬られてる。こちらに理由はなくともあっちとしては何か思うところがあつて斬ったとは思っているよ」

「そうは言ってもどこか八つ当たりのような印象がしますね。ウィルナに関する事柄ならばアンヘリカの者に刃を向ける必要はないはずです」

ユージインの素直な感想のようだった。それはマルタも思っている事らしい。

「子供の癪癪みたいに見えたって話だ。従者達は初めから止めていたらしいし、斬り落とした後にまだ剣を振り上げた王子を一人が怪我を負ってまで止めている。最後にはマティアス王子の名を出されて落ち着いたらしいがね。とにかくそれ以来、ヘンリク王子が来たら町の者には注意するように言っている。しかし、何が王子のご機嫌を損ねるかわからない。扱いづらいたらありやしないよ」

嫌気が差すと言い、マルタは目の前にある酒を煽るように飲み干す。

「あくまでヘンリク王子一人の行動で、シェラルド側が何かをして来ているわけではないのですね？」

再度確認するユージインに、マルタは頷く。

「それは確かだよ。今のところシェラルド側は特に何かをしようって気はなさそうだ。斬られた男にも一生働かなくとも良さそうなくらいの品を持ってきたている。シェラルドの本意ではないと念も押さ

れたよ」

一通りの話が済むと、辺りは沈黙に包まれる。

その時、ふとマルタの首にかかった紐にぶら下がる小さな板状のアクセサリーが目に入った。

これまでも紐があるとは気付いていたのだが、板自体は衣服の下に隠れていたらしい。

親指程の大きさの長方形の板は金属なのか、銀色でありながらも微かに虹のような色合いを角度によって見せている。繊細な模様がびっしりと彫られ、何をかたどっているのかと蘭の瞳は集中した。

その瞬間、何故か脳裏には言葉が浮かんだ。

「あなたが……魂の欠片？」

思わず呟くとセルアが訝しげにこちらへ目を向ける。

「どうした？」

しかし今の蘭には答える余裕などなかった。驚いて目を外し、もう一度眺めれば結果は変わらない。

セルアが蘭に教えてくれた文字とは全く似つかない彫り物を見ていると、あなたが魂の欠片という言葉が強制的に脳内に浮かび上がってくる。

読めもしないはずのものが蘭に何かを訴えかけてくるのだ。

どういう事だろうと目を見張っているとマルタも声をかけてきた。

「まさか、これを読んだのかい？」

胸元のそれを手に取り、見易いように蘭へと向ける。それを見つめれば見つめる程に言葉は浮かび上がるのであり、蘭は頷く。

「読める？　のかな。何だか言葉が頭に浮かぶっていうか……」

不思議な感覚をどう説明したものかと悩んでいると、ユージンが告げた。

「それは契約文字ですね」

そうでしょう？　とユージンがセルアへ目を向ける。蘭の発言に疑問を向けつつも、なくした魔力を取り戻す為なのか大量の食量を口に運んでいたセルアの手が止まった。頬張っていた物を飲み物

で流し込み、改めて板を見つめる。

じっくりと値踏みをするように眺めた後に頷く。

「それしかないだろうな」

「契約文字？」

その疑問を口にしたのは三人。蘭、マルタ、クロードである。

これは俺の分野だ、と言いセルアが話し始めた。

「契約文字、それは魔力がある人間が使える特殊な文字の事だ。普段目にしている文字は知っている奴なら誰でも読める。しかし誰にでも読めるのでは困る内容が存在するのも確かだ。ならば、どうするか？ 答えは簡単だ、決まった奴だけが読める文字を作っちゃえばいい」

「そんな都合の良い事ができるってのかい？」

マルタの意見は最もだと蘭は思うが、セルアは不敵な笑みで答える。思い返せば以前、同じ言葉を話すなら文字も一緒のはずだと言ったら不思議な反応をされた。

本当に契約文字という存在があるのならば、お互いに会話ができても文字が読めないという事態は当然なのだ。二人が気に留めなかったのもわからなくはない。

「できる。この場合は掘り込んだ模様は魔力が込められていると考えるべきだろうな。その時にある一定の条件を満たした者が読める言葉を入れた。それがランの言ったあなたが魂の欠片という事になる」

「その言葉自体に何の意味があるかはわかるの？」

蘭の問いにセルアは首をすくめる。

「それはわかんねえよ、あくまで必要な奴に伝える為に使うもんだ。大抵は読めば相手がわかる事を入れる」

しかし、蘭にはそれがわからない。そもそもこの土地の人間ではない自分が読めるという事態がおかしいようにも思えた。

「どうしてわたしが読めるんだろう？ おかしいと思わない？ わたしはこの人間じゃないもの」

「そうは言ってもお前はここにいるだろうが？　だから読めたんだ。ここにいる全員が読めない状態で読める奴がいる。理由はわからねえが目的の人物はお前だったんだよ」

「目的の人物……何も知らないのに？」

「セルア、ランが困っていますよ。程ほどにしてください」

決め付けるような物言いにユージンが言葉を挟んだが、セルアは煩わしそうな瞳を向けるだけだ。

「うるせえな。仕方ねえだろ？　契約文字なんて使うのは城の中でも限られてる。まあ、隠れて術師同士の恋文になったりはしてるがな」

「そんな使い方ができるんだ？」

随分と仰々しい説明に驚きはしたが、そうした使い方を聞くとわずかに蘭の気持ちも楽になる。

「誰にも見られる心配がない分、書きたい放題とも言えるがな。これははっきりと相手を持定しなければ使えない術だ。だからお前の為にそれを残した奴がいるってのは事実なんだろう」

「わたしの為に？　わたしこの人は誰も知らないよ？　本当にその人がいたとしたって特定なんでできるはずないじゃない。それどころは本当に何もわからないでここにいるんだよ？」

「そうかもしれないが、これを作った奴はお前を必要としていたのかもな。だからここにいるとでも考えとけ」

「だから……ここにいる？」

この世界にいる理由すらわからないと思っていたが、ふと答えに近づいたのかと蘭は呟く。すると言葉をくれたのはマルタだった。

「この為の為にここへいるってのは、あたしも賛成だね」

「マルタ？」

急にどうしたのかと目を向ければ、これまでになくこちらへ興味を持っているらしいマルタの視線に気付く。

「アンヘリカっていうのは、この町を作ったと言われている女性の名前なんだよ。そのアンヘリカの意志だと言われているのがこれだ」

マルタは首からかけている板を外すと、蘭の手に置く。手のひらの上でそれは不思議な輝きを見せた。

「こいつはここがどれだけ焼けようが壊れようが傷一つ付かず、ずっとあるんだ。無くしたって必ずアンヘリカへ帰ってくる。そして、ここではアンヘリカに倣って女性が代表になる、これと一緒にね。いつか読める人が現れたら渡すようにと伝えられながら……読めたのはおそらくランが初めてになるね」

「読める人に渡す？」

随分と熱のこもった台詞に戸惑いながらも聞き返せば、しっかりと肯定される。

「ああ、そうさ。アンヘリカの探し人に手渡さなければと、長い間受け継がれてきたものだ。残念ながらはつきりとした理由はわからなくなっちまってはいるけれど、読める者はアンヘリカにとって必要な人物。ランはここへくるべくしてきたんだよ。クロード、あんたが連れてこなきゃならなかったって言うのも、どうやら間違いじゃないようだね」

何がどうしたのかマルタはクロードの行動すらも認め始めるのだ。それにはユージンとセルアも驚いた反応を見せるが、まずはクロードが笑みを浮かべ発言した。

「良かった。オレも不思議に思ってたんだよね。どうしても連れ帰りたいからって、さすがに人はないって自分でも驚いたんだ。ラン、やっぱり君はここにくるべきだったんだよ。もう、いつその事アンヘリカで暮らすといいよ」

テールブル越しにいたクロードは立ち上がると、何故か蘭に向かって手を伸ばしてくる。

「ちょ……ちょっと待って！ どうして急にそんな事になるの？」
差し出された手を受け取る意味はわからないが、何やら急変した事態にとにかく疑問を投げかけた。

「だってランはアンヘリカの意志なんだから、帰る必要もないのかもしれないよ。まあ、本音としてはオレがここにいて欲しいと思っ

ているわけなんだけど」

照れた笑みを見せるクロードが差し出している手を、蘭の隣にいたセルアが思い切り跳ね除けた。

「おい待て！ お前は調子に乗り過ぎなんだよ。こんなもんで勝手に決め付けるな」

少年の小さな手がテーブルを力強く叩き、すつくと立ち上がる。睨み合う格好となったままクロードが眉を寄せた。

「何するんだよ。オレがランを連れて来た理由がわかったんだからいいじゃないか」

「その理由もよくわかんねえもんだろうが！」

「ええ。何があるうとも貴方が人さらいという事実は変わりませんね。ランはウィルナで必要としている方なのですよ？ そうしたふざけた理由がまかり通ると思わないでいただけますか」

椅子に座る姿勢を崩しはしなかったが同じく蘭の隣に座るユージンも加わり、マルタが続く。

「クロード、あんたの馬鹿な行動は褒められたものじゃない。それは忘れるんじゃないよ」

「マルタまで！」

蘭を連れて来たのを認めたのではないかとクロードが訴えれば、マルタの表情は渋くなる。

「しかしね。これを読まれちゃったんじゃない、全てを否定できない。ここへ残って欲しいとは言えないけれど、二度とこないってのも本意ではないねえ」

「じゃあ、いつでもオレが迎えにいくのでどう？」

「お前なんか来てたまるか。マルタ、いったいどうなってる？」

あまりの変わりようにセルアも訝しげにマルタへ聞くが、状況は変わらない。

「アンヘリカの意志を読めるランは、あたし達にとって必要なはずなんだよ。いつでもここへきて欲しい」

クロード程ではないが蘭がアンヘリカにいる事を望む発言に、ユ

ージインの瞳が細められた。

「私としては望ましくないと考えていますよ」

「勿論、クロードに迎えに行かせるつもりなんてないからね。ウィルナで必要と思われる者をつけて寄こしてくれればいいよ。それならあんたらにも得があるんじゃないかい？」

何かを含む会話が始まり、マルタの目も鋭くユー・ジインを見つめる。

「ランさえいればそれは許されると受け取って構わないという意味ですね？」

「そのくらいは仕方がないさ。あんまり大勢はさすがに困るが、クロードみたいにさうような奴がいるのも考えものだからね。ランの身の安全を守るという名目の範囲なら時期も問わないよ？」

「悪くはありませんね」

蘭はどうしてしまったのかと二人を眺めるばかりだったが、隣にいるセルアも口を挟む気配を見せない。随分と真剣な眼差しで会話を見守っているようであり、ユー・ジインと同じくマルタの意見を受け入れているのかもしれない。

「そんな……何で急に？」

小さな板切れ一枚で変わった事情を飲み込めないでいると、マルタは厳しい表情を一気に崩し蘭へ笑みを向けてくる。

「必要だから読めたんだよ。それはランに必要な物だ、持っているといい」

手のひらに乗せられたままの板を譲るという発言に戸惑いだけが生まれる。

「わたしに必要なもの？」

「そうだよ。必要だから読めたんだからね」

当然といった口調がどこか恐ろしくもあるが、引き返せない場の雰囲気飲まれるように蘭は受け入れてしまう。

「……ありがとう。でも、本当にいいの？」

不思議な色合いを見せる板に目を落とせば、やはり魂の欠片とい

う言葉が脳裏を過ぎる。

「ああ、構わないんだよ。これを待ち人に渡せばアンヘリカは救われるっていう話だからね」

「アンヘリカが救われる？」

再び現れた仰々しい台詞に驚けば、クロードが自信有りげに言葉を紡ぐ。

「そう。アンヘリカの意志を知る者はアンヘリカを救うって言われているんだ。ラン、一緒にここを救ってみない？」

「クロード、そんな軽がるしいもんじゃないんだよ！ あんたはすぐ調子に乗るんだから」

「ちえ、オレがランを連れて来た理由がわかったんだからいいじゃないかよ」

「ふざけんなよ、てめえ」

まとまりのない会話が入り混じるように続いていくが、この板はアンヘリカにとって随分と大事な品らしいと改めて気付く。

「大切なものなんでしょう？ わたしが持っているのは良くないんじゃない？」

「いいや、読める人が持つのが一番なんだよ。これであたしの役目も一つ減るんだ。気にせずにとっていてくれるのさ。アンヘリカはここにいて誰もが名前を知っているが、実物なんてわからないんだよ。遠い昔にそういう名の人がいればいい。この町を造って誰かを待ち続けていたらしい。全部が言い伝えであり曖昧なものだ。それでもずっと信じて町はあり続けてきた。とにかく、アンヘリカの意志だと思っしかない。ランは受け取ってさえいいんだよ」
本当に受け取るだけで構わないのかと疑問は残る。しかしマルタもクロードも、それどころか同じ室内にいるアンヘリカの者達全てまでもが頷いている始末なのだ。

どこか喜びを感じさせる表情に見えるマルタが立ち上がり、周囲を見渡すと全員に告げた。

「もう聞いていただろうが、アンヘリカの求めた者が現れたよ。あ

んたら、する事はわかってるかい？」

勿論だところらの様子を伺っていた者達が立ち上がり、何故か散り散りに屋外へと向かって行ってしまう。

「アンヘリカの……求めた者？」

「いったいどうなってんだ？ あいつらは何をする？」

蘭は疑問を呟き、セルアは周囲の動きを訝しがる。ユージンも不信そうな瞳でマルタを眺めていた。

「私達には理解できない状況ではありますね」

するとマルタは声を上げて笑い告げるのだ。

「アンヘリカはランがくるのを待っていたんだ。祝わないわけがないね」

散っていった人々が何をするのかと思えば、各々が酒や食べ物を手にして帰ってきた。どうやら本当に祝われるらしく、蘭の目の前にはたくさんの物が並べられていく。

「クロードはあの通りだが、悪い奴でもないんだ。仲良くしてやってくれよ。お嬢ちゃん」

「いやいや、アンヘリカの意志を知る者なんだから、クロードだけじゃなく仲良くしてくれよ」

「まさかアンヘリカの待ち人がくるなんて思いもしなかったわ。よろしくね」

一緒に様々な言葉を投げかけられた上に、誰もが蘭に好意的である。

「は、はあ……」

アンヘリカの望む者がとうとう現れたと言って、町中に触れ回った者もいたらしい。とにかく入れ替わり立ち代わりに現れる数は多く、蘭にはもう誰が誰かもわからない。

じゅうぶんにぎやかな空間だったはずが、一気にお祭りのような騒がしさになり、蘭は目を白黒させるばかりだ。ユージンとセルアは側にいてくれるが、やはりこの場に飲まれてしまっているらしい。蘭がいるならあんたらとも懇意にするとといった言葉向けられ

ながら、同じように大量の人に驚いている。

伝説は本当だった。アンヘリカは実在したのかと様々な言葉が飛び交い、騒ぎはどんどん膨れ上がるばかりだ。

一晩で蘭の存在はアンヘリカ中に知れ渡り、たくさんの人に声をかけられるはめとなった。

（どういう事？）

何かを掴んだようにも思えたが、更に疑問が増えたとも感じられる夜はとても長いものだった。

一章・砂礫と岩の狭間（終）

翌日、蘭、ユージン、セルアの三人は乗り合いでウィルナを目指す。アンヘリカの民だけではなくウィルナの商人も同乗しているが、城に仕える者が乗っていても不自然ではないらしい。

乗り合いは術師がいなければ使えない代物であり、城との関係も根強い。更にはアンヘリカ自体に魔力を供給しているという理由もある。ユージンが黒の衣服をまとっていても、何か必要な作業があったと思われる程度だと説明をされた。

姫本人が関わらない限りは民と同じ乗り合いを使うのが当然であり、頻繁に行き来をしている商人ならば慣れているらしい。下手に隠そうとするよりも安全なのだとユージンは告げた。

しかしセルアは蘭だけが目立たないようにとアンヘリカの衣服に着替えている。ウィルナの姫に似ている事を考えると、二人共が王宮に仕えていると見られるよりは紛れるのかも知れなかった。

昨夜の騒ぎはウィルナの民の耳にも入っているだろうが、少々噂が流れても問題はないとそのままにする予定らしい。ウィルナとアンヘリカの関係は以前よりは良好だが、それでも深いと言えるものでもない。この土地ならではの事象と捉えるくらいだろうとユージンは言い切った。

アンヘリカの民にとって重要な何かが起きたのだと認識するだけで構わないと言うのだ。

実際その場にいたはずの三人も、どうしてああも騒がれてしまったのかをうまく理解できていない。それを更に薄めたものと考えているらしかった。

（何かあったんだろうなくらいに思ってもらえるのかしら？）

少々疑問は残ったが、乗り合いの中では声をかけられもせず、蘭は座ってられる。基本的に子供は乗り込まないものらしく、アンヘリカの大人達は事情を知っていた。アンヘリカの中にいない限り

はこちらへ干渉しないらしい。

三人で丸二日の帰路につく予定だったが、何故かクロードも混じっている。四人で荷台の隅に固まるように陣取りつつも、セルアが嫌そうに目を向けた。

「お前なんているんだ？」

「この前、必要な事が終わらなかったから今日も行く」

「本来の用件を忘れて連れてったって事か、馬鹿だな」

鼻で笑うような反応にクロードが眉を寄せたが、すぐに晴れやかな笑みを見せる。

「別にいいさ、アンヘリカの意志が伝わるランを連れて来れたんだから。確かに仕事を放り出したのは問題だったけれど、ランに比べれば些細な事なんだよ」

昨夜、蘭が契約文字を読んだ事により、人さらいまがいの事をしたと言われていたクロードの評価が大きく変わった。蘭は本当にアンヘリカへ来るべき人間だった、だから無理をしてまでクロードが連れてくる事になった。マルタだけではなく、誰もがとても前向きな解釈になったのだ。

もちろん蘭に対しては申しわけないと思っている。それも本音だが、こうして来てくれた事に感謝したいとも言われた。

それによりクロードも蘭を連れ去った事実を当然のものとして受け入れたたらしく、初めに見せた反省の色など失っているように感じられた。

（意味がわからない）

この世界の人達は蘭のわからない部分で納得する事が多い。それはここでの知識を持たないが為に、理解できない部分もあるのだろうとは思っている。それでも不思議だった。こんなにも小さな板の文字を読めただけで蘭はアンヘリカへ来るべき者になってしまうのだ。

セルアとユージンが限りなく近い先として蘭を受け入れてくれた。

アンヘリカの意志が読めるという理由で、アンヘリカの人々も蘭を受け入れてくれた。そこに込められているのはあなたが魂の欠片という言葉だけであり、目的は全くわからない。

ウィルナの姫が残した言葉と、遠い昔に存在したと言われているアンヘリカが残した言葉。

蘭にとってはどちらも見知らぬ人物であり、どうにも信じがたい事態だ。ウィルナの姫はまだユージンとセルアやマルタの発言から実在しているように感じられる。しかし、アンヘリカに至っては口頭で伝えられてきた昔話とも言える人物なのだ。

（胡散臭い上に、アンヘリカが救われるっていうのも困るのよね）
あくまでも伝えられているだけだと口にしながらも、マルタを筆頭にアンヘリカの人々は蘭へ期待の眼差しを向けてくる。再訪を望む理由も明らかに見える姿は、受け入れられないよりはありがたいがどこか落ち着かない。

本当に何の意味があるのだろうか、蘭は溜め息を付きながら胸元に下げた板を取り出し眺める。

乗り合いの中は人工的なランプの灯りに照らされているだけであり、あまり明るいとは言えない。そうした場所でも金属らしい板は艶やかに煌き、蘭の脳裏にあなたが魂の欠片という言葉を投稿かけてくる。

「どうしました？」

言い合っているセルアとクロードを冷めた目で眺めていたはずのユージンに問われ、蘭は板から目を逸らした。

「不思議だなんて思ってただけ。知らない場所のはずなのに、これは私がくるのを待っていたって事にはなっているでしょ？」

ユージンの瞳はしっかりと板を見つめていたが、表情は幾らも変わりはない。契約文字は本当に自分以外には何も訴えないのかと、蘭は再び目を落とす。

「今も魂の欠片って言葉が聞こえるっていうか。勝手にそう思えるっていうか……不思議な感じなの。おかしいと思わない？」

「ラン、先視みというものは未来が見えると言ったでしょう？ あくまで姫の言葉ではありますが、感情が与えられるものらしいのですよ。良いか悪いかを強制的に教えてくれるようなものだと言現されていました」

「強制的に教えてくれる？」

「ええ、それを知っているとランの感想は不思議とは思えられないのです。板そのものがランに訴えかけてもおかしいとは言えない。そもそも契約文字とはそうしたものですからね」

蘭にとっては非常識でもユージンにとっては当たり前と捉えられるらしい。

「難しいな。でも、これがくるべき何かだったのかな？」

この場所にいる意味すらもわからないでいる蘭へ、ユージンは時期を待とうと告げていた。

そして確かに変化は訪れ、蘭は誰かに望まれているのかもしれないと思えるものに出会ったのだ。

酷く曖昧ではあるが、物事は進み始めたようにも感じられる。

呟くような蘭の声ではあったが、ユージンは静かに微笑む。

「そうかもしれないね」

誰も確信など持てないとはわかっている。それでもこれが元の世界へ帰るきっかけになるのかもしれないと思いながら、蘭は強く板を握り締めた。

二章 止められた孤に灯る想い【一】（一）

乗り合いの中ではクロードが蘭へ話しかければセルアが突っかかる。そうになると蘭を除く二人が言い合いを始め、あまりにうるさければユージンが止めに入った。

蘭は主にユージンと当たり障りのない会話をして過ごし、時折クロードとセルアに巻き込まれる程度だ。

騒がしくはあったが確実にウィルナの屋敷へ戻れると決まっていた。

大きな不安もなく乗り合いに揺られ、あっという間に二日間は終わる。

ウィルナへ着くと、クロードは用事があると言ってすぐに町の中へ消えて行く。やり残していた仕事は相当急ぐものらしく、走る後姿を見ながらセルアが悪態をついた。

「馬鹿な野郎だな」

「付いてこられるよりは良いと考えましょう。二人は後から帰ってきてくださいね」

三人で戻ると思っていたが、何やらユージンだけ別行動らしい。

「ああ、遠回りして行く。ユージンは急げよ？」

セルアとのわずかな会話のみで先に行くユージンを眺めた後に、蘭は隣を見やる。

「別じゃないと駄目なの？」

「服装も違うだろ？ 俺達は裏からしか入れねえ」

確かに蘭は城を囲む壁に設えられた小さな扉からのみ出入りをしていた。姫の代役であり、堂々と姿を見せられる立場ではないのだ。黒衣を着ているユージンと一緒にいてはならないのだろう。

「それだと乗り合いの中は本当に平気だったの？」

「城内と町の繋がりはそのなにあるからな。堂々としてりゃ問題ねえよ。別に会話も当たり障りがなかっただろ？」

セルアとクロードが言い合ってはいたが内容は深いものでもなく、蘭は馬鹿馬鹿しいとあまり気にも留めていなかった。周囲も同じようなものかと考え、とりあえず受け入れた。

「大丈夫ならいいわ。わたしには詳しい事もわからないし」

どこまでを許されるかは、誰かの判断を仰がなければわからない。セルアが平気と言うからには大丈夫と思うほかはなかった。

二人で街へ出かける時と変わらず、蘭はセルアに手首を掴まれ引かれながら足を進める。

「俺の姿が見えないのは誰も気にしねえが、ユージインは別だからな。早々に帰って騒がれてりゃ楽なんだよ色々」

何故セルアは気にされないのかと疑問も浮かんだが、詳しい話のできる場所でもない。楽というのはおそらく自分達が屋敷へ戻りやすいのだらうと、蘭は視線を周囲の店へ向け始めた。

アンヘリカでは特に買い物もなかった事に加え、屋敷へ戻るまでに時間を潰す必要もあった。蘭とセルアは細々とした品物を手に屋敷へ戻る。

扉を開き廊下へ踏み入ると、こちらの気配を察したのか一番奥の扉が勢いよく開かれた。駆け寄ってくるハンナは真っ直ぐに蘭の前へきたかと思うと、力強く抱き締められた。

「わわっ、ハンナ！」

「ラン、無事だったのね。ユージインが立ち寄っては行きましたが、本当に良かった」

涙声で言われ、蘭も自然と瞼が熱くなる。まさかこんなにも心配されているとは思ひもなかったのだ。抱き締められたまま怪我はないのかと問われ、大丈夫だよ元気だからと答える。

「ユージインは寄って行ったのか。じゃあ、今はうまく説明してるってとこだな。ハンナ、思いがけずアンヘリカへも向かいやすくなっただ。今回はあいつの迷惑のうちだったとでも思っておけ」

セルアの言葉にハンナが力を込めていた腕を緩めた。蘭もどうしたのかと表情を見れば、随分と驚いているのがわかる。

「まあまあ、姫様のお望みが叶ったのですね？」

「偶然なのか必然なのかはわかんねえけどな。こいつの身にも色々ありはしたが、散々という程でもない。悪くはないだろ」

驚きと喜びがない交ぜになったような表情だったハンナは、今度は眉を潜める。

「セルア。それでもランは大変な目にあっただけでしょう？　もう少し考えて発言なさい。こうして無事だったから良かったものの、どうなる事かと心配だったのよ？」

「どうやら結果を重視した発言が気に入らなかったらしいが、蘭としては付随したものはありがたい。もしも自分を助けるだけが目的になってしまっていては、申しわけなさも倍増してしまうところだ。」「本当に平気だから。確かに大変だったけれど、色々な事も知れたし勉強にはなったもの」

驚きは多分にあったが、アンヘリカという町と砂漠をこの目で見る事が叶った。本当に見知らぬ場所だと思いき知らされもしたが、曖昧な気持ちはだいぶ払拭されている。

（知らない場所だって嫌でもわかったし、どこか前に進んだ気がする）

セルアが言ったように偶然なのか必然なのかはわからないが、確かに蘭はアンヘリカへ向かい何かを得たのだ。

「まあ、ランまで？　こうして帰ってこられたのだから良いとしましょうか。二人は部屋で休んだらどうかしら？」

「ああそうだな。俺は疲れた」

「ええ、そうなさい。お昼はまだなんでしょう？　準備してくるわね」

ようやく蘭の体を開放したハンナは、セルアの顔きを見ると足早に厨房へ戻って行く。

熱烈な歓迎ぶりのせいで涙目になっている蘭をセルアが見上げた

が、どこか機嫌が悪く感じられ戸惑う。

「どうしたの？」

「俺達に会った時は泣きもしなかったのにな」

投げつけられた内容は意外なものであり蘭は驚く。あの時は何もかもが目まぐるしく余裕などなかったのだ。確かに二人が来てくれた事に安心はしたが、事態はまだまだ不安定だった。ウィルナのこの屋敷に戻って初めて、本当に安堵できたように思える。

何だかんだと三ヶ月近くもこの場所にいるのだ。成り行き上ではあったが姫の屋敷こそが、今の自分が帰るところなのだと改めて実感した。

「泣く余裕なんてなかったの。二人が来てくれて本当に嬉しかったんだからね」

別にハンナと区別しているわけではないと告げれば小さく笑われる。

「そのくらいわかってる」

「なら、言わなければいいのに」

「悪かったな」

セルアは面白くないと言いたげな顔を見ると、一人で部屋へ向かってしまう。

（時々突っかかってくる？　っていうか、なんだろう？）

ユージンが難しい年頃だと表現していたが、確かに蘭には理解しがたい部分がある。

（まあ、問題という程でもないし大丈夫よね）

何かを知ろうとしても踏み込めない事象も存在するのだ。今は手に入れたものから何かを探すべきだろうと、蘭も借り物の部屋を指し足を進めた。

疲れたと言っただけはあり、セルアは昼食を取るとソファですぐに眠ってしまった。

蘭はしばらくハンナと会話をしていた為、うるさいだろうと自室へ帰るのを勧めた。しかしユージンが来るまではいなければならぬらしく、セルアは騒いでもかまわねえと言いながら瞳を閉じなおすだけだった。

（まだ、疲れてるんだよね）

蘭も疲労感があり、ソファに体勢を崩し寄りかかっていた。

ハンナは夕食の支度をするとう厨房へ向かい、セルアは熟睡している。

久しぶりに訪れた一人になる時間の中、蘭は六日の間に起きた出来事を改めて考える。

ユージンと街へ向かい、クロードにさらわれた。そうして辿り着いたアンヘリカで、蘭はきっかけと呼べそうな物を手に入れたのだ。

真向かいにいるセルアを気にしつつも胸元から板を取り出せば、魂の欠片だと訴えられる。

（不思議）

いい加減全てを受け入れるべきかと思っではいるが、理解しづらいのだ。魔力があり、それを使いさえすれば特定の人物に向けた文字を作れる。繊細に刻まれた模様が文字と認識すべきものなのかも知からないが、確かに蘭の中に言葉は浮かび上がった。

（あなたが魂の……欠片）

同じ文言だけが延々と繰り返され、眺めていた瞳を逸らし逃れてみる。

（見なければわからないんだよね）

読んでいるとは思えないが、視界に入らなければ知る事はできない。やはり文字と表現すべきなのかと、見つかりもしない答えを探し続ける。

そうしているうちに蘭も睡魔に誘われ、考える事を止めた。

普段なら蘭とハンナだけで夕食を取るのだが、今日はセルアも加わり随分と賑やかな時間となった。そうした後にユージンは現れ、食堂ではなく寝室で会話は行なわれる。

指定の位置に腰を据えた二人を眺めながら、蘭はただ話を聞く。はつきりとした理由はないらしいのだが、扉に最も近い場所がユージン。扉から見て左手がセルアの指定席になっている。姫は残る二つのどちらかであれば問題がないらしく、今の蘭は気分でユージンの向かいを選んでいた。

「やっと落ち着いたな。大丈夫なんだろう？」

夕食まで眠り込んでいたセルアは、それでもまだ足りないらしく随分と気だるそうな声を発している。

「そうですね。アンヘリカとの間に何が起きたのかと不思議がられてはいますが、近々マルタを呼ぶ形をとれば納得してもらえそうですね。ランが行き来する為という理由ならば向こうも断りはしないでしょう」

ユージンこそ休んではないはずなのだが、こちらは姿勢正しくソファに座り笑みを浮かべる余裕すら見えた。

「こっちに都合のいい約束でも取り付けるつもりか？」

「それもありますが、あまりにも急に事が運び過ぎましたからね。アンヘリカの代表者が城へ入るくらいの変化がなければ納得されそうにもありません」

二人の会話は蘭が口を挟めるものではない。どうやらアンヘリカは本当に気軽に出入りが許される場所ではないらしく、突然の状況の変化に城内は賑わっているという。

「さすがに全部は無理だったって事か」

「ええ。しかし、姫が籠もり切りであるからには何か起きてても仕方はない、くらいの反応はありました。悪い結果ではないのでどうにかやり過ごせるでしょう」

「いないとは言えねえからな。もうしばらくはいけそうか？」

乱暴に髪をかき上げるセルアの表情はしかめられており、ユージ

インも苦笑気味に答える。

「どうにか大丈夫でしょう。今回アンヘリカへ自由に行けるのはセルアという事にしてありますからね。よろしく願いますよ」

「俺か……まあ、仕方がねえ。ユージンはこれ以上出歩くわけにもいかねえしな。あいつが戻ってくるまでの間に、せいぜいいい結果を作っておくこった」

「そうさせていただきますよ。姫はこうなる事がわかっておられたのでしょうかね？」

「さあな。あいつは無駄を嫌うが、くだらない事を楽しむ節もある。どちらかによって随分と変わってくるんじゃないか？」

「楽しんでいると知れるのならば安心もできるのですがね。本当にどうしておられるのか」

目にした事のないウィルナの姫は、とにかく外見は蘭に似ているらしい。アンヘリカのマルタでさえ似ていると口にしたのだから、本当なのだろうとは思える。

しかし、外見以外の情報は主に二人の会話で仕入れるだけだった。今も無駄を嫌うがくだらない事を楽しむと曖昧な表現をし、いなくなった事も楽しんでいるのならば大丈夫だろうと言われてしまっている。

（術が使えて研究熱心とも言っていたよね？　それでいてウィルナとアンヘリカの関係も良い方向に持っていているみたいだし、色々な事ができる人っぽくはある？）

姫と城内と国に関する話題が続けている二人の声を耳にしつつも、蘭は情報をまとめ始めた。

セルアがいる限り姫の生存は何故か確実であると言うのだ。そして、それは巻き込まれたものなのか、自発的に行なったもののかはわからない。

（わたしがここにいるのも、姫様がした事ならいいんだけどな）
セルアを見ているだけでも術が凄いものだとは感じている。帰ってきた事により姫仕様にまとめ直された髪も、相変わらず本物のよ

うに馴染んでいた。

砂の上を木製の車輪で軽々と移動し、強い日差しすらも押さえ込んでいる。言葉にはしないが全てが姫によるものと仮定できるのなら、先が見えるのではないかと希望を探し出す。

クロードの発言だけではあるが、アンヘリカの人間は決してウィルナも姫も嫌っているような雰囲気ではなかった。乗り合いを造ってくれたと言ったのだから、評価をしていると捉えるべきなのかもしれない。

（わたしがここで目覚めてアンヘリカに向かったのも全部が姫様によるものなら、帰ってきてくれれば変わるのかしら？）

ユージンとセルアが現れた時は随分と張り詰めた空気にはなったが、帰りにはアンヘリカの人々に笑って見送られていたのだ。関係は悪くなるどころか良好になったと言えるはずだった。

そして、ウィルナの姫は今回のような結果を望んでいたらしい。（姫様の思惑通りとかね。でも、それなら二人が知らないのはおかしいみたいだし）

何かをするなら巻き込まれるはずとセルアは告げていた。やはり不測の事態なのかと蘭は内心で溜息をつく。

気付けば二人の会話は収束しており、蘭は素直に聞いてみる。

「姫様って二人から見てどういう人なの？ 立場じゃなくて人柄って意味なんだけど」

すると二人はしばし考える為か、間を置いた。

「俺に言わせると好き勝手する奴だな。だが、自分ができる範囲内で無茶をするまでとはならねえな」

セルアは何かを思い出したのか、散々振り回されて来てんだと渋い表情を見せる。しかし、ユージンは違うらしい。

「私は好き勝手をしているとは思いませんよ？ 思慮深い方です」
否定するように言い切ったが、セルアは呆れたような眼差しを向け鼻で笑う。

「思慮深いねえ、我が強いだけだろ？」

「それは貴方でしょう？ 姫は先を見据えておられますよ」

各々の感想はどうやら違うらしいが、様々な面があると捉える事にする。合わせてみると思慮深いながらも好き勝手な行動を取る人物となるのだが、想像はなかなかに難しい。

お互いの姫に対する感想が気に入らない素振りが見える為、とにかく話を進めようと蘭は思いつきを口にする。

「とんでもない事をしたと思ったら、ちゃんと結果がついてくるのか？」

おかしな表現になってしまったが、二人の反応は良かった。

「それでじゅうぶんだな。人を驚かすのが趣味とも言える」

「少々慣例を破るところがありますからね。とんでもないと言えなくもありません」

セルアが大きく頷き、ユージインに至っては声を上げて笑って見せた為に蘭は驚く。

「そう、なんだ」

とにかくしとやかなお嬢様を想像しない方が良いのかと思っていたれば、セルアが話題を変えた。

「あいつ自体を考えても話は進まねえだろ？ 今はここにいるお前の方が重要だ」

「わたし？」

蘭としては話を進める為に姫を知ろうとしていたのだ。何故、自分を優先させる必要があるのかわからない。

「あいつが望んでも叶わなかった事をあっさりしちまったんだ。意味がないとは言えねえんだよ」

「確かに、そうとも取れますね」

まるで本当に何かをしてしまったような二人の口ぶりに、蘭は慌てて否定を返す。

「わたしはクロードに連れて行かれただけで、特に何もしていないよ？ 二人が来てくれなかったらどうなってたかもわからないし。凄く感謝しているの……本当にありがとう」

何度目かは忘れてしまったが、改めて礼を告げる。するとセルアは少しばかり嫌そうな顔をした。

「それはもういい。お前はもっとあいつに対して怒るくらいになれ」「確かにそうですね。彼のせいでこの騒動は起きたのです。ランが気にする事ではありません」

ユージンも頷いているが、どうしてもクロードだけを責められないのだ。

「でも、わたしが一人になったのも原因じゃない？」

気にするなどは言われても、散々危なっかしいと注意されていたのも事実だ。興味に任せて一人でふらりと歩き回ろうとしていたからこそ起きた事態だった。

「それはそうだが、人ひとりを無理に連れて行くってのは常識の範疇ではねえよ。違うのか？」

蘭の世界の事を含めて聞いているのだらうと頷く。

「わたしがいたところだって、それは駄目だよ。犯罪になる」

「だったら、あいつもそうだろうが」

「……確かに」

こればかりは否定のしようがなかった。しかし、それでもクロードを怒ろうとは思えないのだ。

「憎めないとかそういう意味で怒れないのでしょうか？」

ユージンの問いは当たっているようにも思えたが、そればかりでもない。

「そうなのかもしれないけど……どちらかというところ酷い目にあった気はするけど最終的には良かったのかな？　って微妙に思えるとうか。凄く難しい感じなんだよね」

「なんで良かったになるんだよ？」

いらつきさえ感じさせるセルアの瞳を向けられたが、そう思うのだから仕方がない。蘭は首にかけた紐を外すと、衣服の中に下げていた板を取り出す。

「よくわからないけどこれが読めたし、何か前には進んだ気がする

……だから仕方がなかったって思えるのかもしれない。クロードがいなかったらアンヘリカには行かなかったでしょ？」

ユージンやセルアはアンヘリカへ自由に向かえる立場ではなかった。その状況のままでは蘭はウィルナの街へ出かけるが精一杯だったはずなのだ。

「だから仕方ないのよ……たぶん」

紐を掴み魂の欠片だと訴え続ける板を手のひらに乗せた。

「意味はわかんねえままだけどな」

セルアは立ち上がると蘭が座るソファへ移動する。わざわざ隣へ腰を下ろす姿にどうしたのかと思えば、蘭の手から板を掴み上げ灯りにかざすようにしげしげと見つめた。

「ったく、随分と魔力を突っ込んだもんだ」

「魔力？ 突っ込んだ？」

蘭には美しく煌いていく程度の感想しか持てないのだが、何やらわかる事があるらしい。セルアは食い入るように眺め続けている。

「ラン、魔力は持たぬ者には一切感じられないものなのです。不思議に思えるでしょう？」

「うん、本当に全然わからないもの。魂の欠片って言葉は浮かぶから何かがあるんだとは思っけどね」

「才のない私にも見る事が叶わぬ力ですが、確かに魔力によって国は成り立っているのです。そういうものだと思えるほどではないのですよ。ところで、どの程度の魔力を含んでいるのです？ その様子では乗り合いに使う魔石以上に思えますが」

ユージンは魔力を持たないらしく、セルアに聞かなければ確認ができないらしい。

「ウィルナを覆ってる魔力と同じかそれ以上か。無駄使いだな、こりゃ」

始めは板を摘んでいた指先は繋いでいる紐へと移っている。セルアはぞんざいに大きく揺らしながら呆れたような声を出したのだが、ユージンはその言葉自体も訝しがっているように見えた。

「本当ですか？ 国を覆う為にどれ程の術師を必要としているのかをわかっていますか？」

「当然だろ？ 国を守るだけでも必死だったのに、こいつはそれどころじゃない魔力を感じさせる。長年壊れないようにと考えても随分多いな。いったいなんだってんだ？」

雑に扱うセルアの姿を見る限りそう凄い物にも思えない。すると突然投げ返されてしまい蘭は慌てて受け止める。

「もう、もっと大切にしてよ」

何かの手がかりとも言える品への扱いに不満を向ければ、特に気にもしないらしい。

「どうせ壊れないようになってんだ、いいだろ？」

マルタがアンヘリカが焼けようが壊れようが傷一つ付かないと言っていたのを思い出す。なくしても必ずアンヘリカへ帰ってくるとまで言っていたが、そんな事は本当に可能なのだろうかと改めて疑問が浮かぶ。

（目に見えるものならいいのに）

ユージンですら見られないと言っている魔力は、蘭にも感じられる気配はない。

ウィルナそのものを守っている魔力がどれ程なのかもわからないが、とにかくこの小さな板に収まっているのかと蘭はじつくりと眺めてみる。

するとやはり、あなたが魂の欠片という言葉だけが脳裏に浮かんで来た。

「あなたが魂の欠片って、どんな意味なんだろう」

「さあな」

セルアはそっけなく言い、ユージンは困りましたねと頷く。

「あなたがというからには、ランの事なのでしょうか？ そうだとしても魂の欠片が何を指しているのかがわかりませんね」

どうやら魂の欠片と表現をするものはウィルナにはないらしい。マルタとの会話を思い返しても、何かを知っているとは思えない。

「あまり気にしないでいた方がいいんじゃないか？　意味があるならそのうちどうにかなるだろ」

今日はもう寝るかなとセルアは気だるそうに立ち上がった。

「お前らも休んだらどうだ？　どうせ何もわかんねえぞ」

そうして部屋から出て行く後姿を見送る。おそらく城の中にある自室へと帰るのだろう。

「契約文字を使える者の意見ですからね。セルアの言う通りなのでしょうが……」

「手がかりもないし、また時期を待つしかないって事なのかな？」

不安げなユージンの呟きに、今度は蘭が以前に告げられた言葉を向けるとわずかに驚いた表情が浮かぶ。しかしそれも一瞬であり、ユージンはいつも通りの笑みを浮かべた。

「今回みたいな騒動でなければ良いのですがね」

「わたしもそう思う」

さらわれるような大事ではなく些細なきっかけで物事が進まないかと、蘭は強く願ったのだった。

二章・止められた孤に灯る想い【一】（二）

その夜、眠りにつく支度も済んだ蘭はベッドへ寝転んでいた。ウィルナには魔力はあるが電力が存在しない。空いた時間を埋めてくれるテレビなどはなく、明かりもベッドサイドにあるろうそくを入れたランプがぼんやりと光っているだけだ。元来住んでいる人物が姫という事もあり、町に暮らす者と比べれば恵まれているとも理解はしている。

アンヘリカの宿では布で体を拭くのが精一杯だったが、この屋敷には風呂が存在していた。どの家にも備え付けられる物ではなく、姫だからこそ許される贅沢らしい。

（お湯に浸かれるだけでも幸せなんだろうな）

長年暮らして来た場所から考えると不便さもあるが、ウィルナやアンヘリカで括るならば蘭は優遇されている。

それでも持て余す時間は多分にあり、夜はいつも暇だった。

（なんか疲れてるんだけど、眠れないな）

ようやく帰ってこられたのだから、ぐっすり眠りたいとは思っている。しかし、相反するように目は冴えてしまうのだから困りものだった。

（昼間に寝ちゃったしな）

手慰みに本を持ってはきたものの、ただめくっている動作が続いている。

目まぐるしい日々は確かに蘭を疲弊させていたらしい。文字の解読に頭を悩ませる程の余力はなく、本を閉じると布団の端へ押しやった。

うつ伏せになっていた体を反転させ天井を見やる。石でできたそこには、ところどころ綺麗な色の物が使われ模様が描かれていた。
（何が描いてあるんだろう？）

意味のある紋様なのかわかりもしないが、抽象的な形を眺め時間

を潰そうとしてみる。初めの頃に少しでも得るものはないかと部屋中に目を走らせ、同じように過ごした時があったものだった。

（結局何もわからなかったんだよね）

セルアに意味があるのかと聞いてみたが、ウィルナでは一般的な装飾だと教えられて終了してしまったのだ。

室内に置いてある本は全てが姫の必要としている内容の為、蘭が先程まで手にしていたのは特別に手に入れて貰った子供向けの教本だった。

ずっと年下の者に向けたものであっても、蘭にとっては随分と難しい。教えられながら書き記した日本語訳を添えてはあるが一貫性を感じられないのだ。

（当たり前って難しいものなんだわ）

蘭には法則性がなくともウィルナの人にとっては当然の文字である。天井に意識を逸らしていたはずが、結局は閉じた本についてを考えていた。

（文字を読めるようにならなきゃ駄目ね）

帰ろうと思っているが、微かに帰れない事態を想定している自分も存在するのだ。暮らすのなら慣れなくてはと、嫌な諦めが自身を蝕んでいるように感じてしまう。

（帰る為に文字を読むのよ。きっと何か手がかりがあるはず）

時折現れる不安を振り払うように自身に言い聞かせていると、ふいに何かを叩く音が聞こえた。

控えめに存在を知らせるような音に、思考が止まる。

何事だと蘭が体を起こして辺りを見回せば、もう一度同じ音が聞こえてきた。

音がするのはどうやら窓際らしいが、さすがに外は暗闇で何も見えない。正体のわからない音に恐怖心はあるが、とにかく確認しようとしてベッドから降り静かに歩き出す。

するとぴたりと音が止んでしまい、蘭は原因がこちらの動きを悟ったのかと足を止めた。

（誰かいる？）

風で物がぶつかっているくらいなら構わないが、見知らぬ人物がいるのは恐ろしい。

真っ直ぐ向かうのを避け、窓より少し離れた壁際に向かってみる。そこから何とか外を覗こうと窓に目を向けてみれば、突然手が張り付いた。

「ひいっ！」

闇ばかりが見えるガラスに大きな掌が現れ、悲鳴を上げる。鼓動が一気に早くなり、嫌な汗が流れた。

（な……な、な、何？）

驚きつつも目を逸らせないと、一つだった手が更に増える。

「……………っ！」

急激に喉が渴き悲鳴も出ない蘭をよそに、両手がガラスから下へと動き始めた。確認するように掌を貼り付けながら移動し、どうやら窓枠に指をかけたらしい。

腰は引けているというのに、目は窓から逸らす事ができず蘭はガラスを見つめる。

すると見知った顔が半分だけ現れたのだ。

「クロ……ド？」

かすれた声が出はしたが、閉ざされた窓の向こうに聞こえはしない。お互いの姿を認めているだけの状態である。

鼻から上だけを覗かせるクロードが瞳を細めている姿に蘭は素直な感想を覚えた。

（覗き？）

この屋敷の周辺は建物部分だけが小高くなっている。内側は蘭の腰辺りから上が窓になるのだが、外側からでは背の高いクロードでも届かないはずだった。

窓枠を掴んだ動きから、懸垂をする形でどうにか顔を覗かせたのかと考える。

クロードの瞳の動きから、開けると訴えられているのは理解した。

しかし、ここで開けはしないだろうと蘭は窓際に向かうだけに留める。

（わざわざこんな時間にこなくても）

蘭が近づいた事でクロードは窓枠から手を離していた。窓の下に立ちこちらを見上げ、片手を振ってみせる。

だが蘭は手を振り返そうとは思わず、困ったままにクロードを見下ろした。その間にも開けて欲しいと動きで訴えられ、仕方なしに窓を開けるかと手をかける。

（カーテン閉めておけばよかったな）

着替えをする時以外は気にしていなかった自身を後悔しながら、両開きの窓を開放すれば想像通りに名を呼ばれた。

「ラン！」

眼下には満面の笑みがあるが、さすがに笑い返そうとは思えない。「どうしたの？ こんな夜中に」

「折角近くにいるんだから遊びに来たよ」

悪びれる様子もなく、さらりと言ったのけたクロードに蘭は溜め息を付く。

真夜中に女性が一人でいる部屋に来るのはどうしたものかと突っぱねた。

「こんな遅くに来られても困るよ」

招き入れるつもりなどないのだが、そもそもこの屋敷に誰かを入れても良いのかと疑問を抱く。今までこの世界で知っていたのは、ユージン、セルアとハンナだけだった。その三人は屋敷に元から出入りをしている為、気にする必要もない。

「困る？ 別にいいじゃん」

様子を見る限り追い返されるとは思っていないのだろう、笑顔で蘭の言葉を待っている。

「ここはわたしの家じゃなくて、置いてもらっているところだよ？ 勝手にクロードを入れるわけにはいかないでしょう？ どこかに泊まってるんじゃないの？ 警備の人も見回るんだから気付かれな

いように早く帰って」

素直に帰って欲しいと思い告げるのだが、クロードは面白くなさそうな表情を浮かべるだけだ。

「今日はどこも取ってないんだ。外で寝るのも嫌だし、入れてよ」

「無理」

「広い部屋みたいだしいいでしょ？ 別に何もしないからさ」

何もしないと言われようが入られるものではない。早々に窓を閉めるべきかと考えながらクロードを見れば、何となくだが雰囲気担当上げられた時に似ているように感じられた。

もしや入る気なのではと慌てて窓を閉じようとしたが、クロードの動きが若干早い。窓枠をしっかりと掴むと、懸垂をするようにひよいと自身の体を持ち上げ室内へ入り込もうとする。

その瞬間。何故か、ばちん！ と小さな破裂音がし、まるで何かに弾き飛ばされたかのようにクロードが外に向かって吹っ飛んだ。音は小さかったが空を舞うクロードの勢いは凄く、鈍い音と共に背中から地面へ叩きつけられる。いくら草花が植えられているとはいえこの高さにあの勢い、相当な衝撃だろう。

思いもしない動きに蘭は言葉もなくクロードを見つめる。

しばらく、お互いに動く事なく時間が過ぎた。さすがに落ち着いて来た蘭は、慌ててクロードに声をかける。

「クロード、ねえ、大丈夫？」

全く返事はなく、動く気配すらない。弾き飛ばされ背中から地面に打ちつけられたクロードは、仰向けで大の字になっている。

「クロード！」

数度呼びかけても返事を得られる事はない。更に大きな声を出したいところではあるが、誰かに気付かれる恐れもある為に蘭も思い切れなかった。

身を乗り出せば声が聞こえるのではないかと、手を伸ばしかけたが引っ込めてしまう。

（どうしよう）

吹っ飛んだ姿を見た為、窓から顔を出すのはためらわれたが恐る恐る手を出してみる。これまでに窓を開けなかったわけではないが、吹っ飛ぶクロードを見ていては躊躇もしてしまう。

「あれ？ 何でもない」

また、ばちんと鳴るのではと思ったのだが、何も起きない。手はごく普通に窓の外へ出てしまい、戻る事も可能だった。

（どういう事？）

とにかくクロードと同じ目には合わないらしいと、蘭は思い切って外へ顔を覗かせる。

やはり大丈夫らしい。

窓枠に手を乗せ身を乗り出しながら、再び地面に仰向けで倒れているクロードへ声をかける。

「クロード、ねえ、クロード！」

気を失っているのだろうか、何の反応も返して来ないクロードに蘭は再び悩む。

屋敷の外へ出ないという約束には、庭も含まれているのだ。

蘭が外出を許されるのはセルアもしくはユージンが同行できる時のみであり、勝手に出るわけには行かない。しかし、目の前には倒れたクロードがいる。

側に行って確認したい気持ちもあるが、単に寝た振りをしている連れ去られる可能性もないと言い切れない。

どうするべきかと思い悩んでいると、微かな音が聞こえる事に気付く。

（何？）

耳を澄まし理由を知ろうとすれば足音らしい。

（いけない！）

城の敷地内は見張りも存在している。蘭が常に姫と同じ格好を求められる理由は、万が一見られた場合の対策なのだ。簡単に覗き込める造りではないが、姿ばかりはなりきっていなければ心配らしい。

どうやらそれは、徐々にこちらへ近づいて来ているようだ。転がっているクロードはいまだに起き上がる気配どころか目覚めてもいないらしい。

（どうしよう）

気軽に入り込める場所ではなく、明らかに真っ当ではない状況のクロード。見張りならば連れて行かれてしまいうに違いないが、蘭の手ではどうしようもない。

とにかく一旦窓を閉めるべきかと、蘭は慌てて体を引っ込める。外からは見えないように壁に体を張り付け、わずかに残した隙間から聞こえる音に耳を澄まして様子を伺った。

がさがさと草を踏む音からどうやら走っているらしい事がわかる。数もこの分だと一人なのだろうとは理解した。

音が聞こえなくなった事により、クロードの側で止まったのかと蘭は窓の端から目を向けてみる。

倒れたクロードを見下ろしているのは見知った人物であり、蘭は再び窓を開け放った。

「セルア！」

こちらを向いたセルア表情は訝しげであり、窓の下までやってくると不思議そうに口を開く。

「どういうこった？」

「それを聞きたいのはわたしの方よ」

二人で顔を見合わせまま、しばしの時が流れた。

とにかくぐったりと伸びているクロードを蘭とセルアは室内へ運び込んだ。どうにかソファの上に寝かせると、セルアは指定席へと座る。

「初めてかかったのがこいつとはな」

明らかに嫌そうな声と共に片肘をつき、クロードを眺める瞳は冷やかだ。蘭はセルアの隣に腰かけるとこれまでの経緯を話す。

黙って話を聞いていたセルアだったが、最後には呆れた様子で頭を抱える。

「夜這いに来たのかよ」

うんざりとした表情で立ち上がりクロードに軽く蹴りを入れたが、それにも反応はない。

「クロードは大丈夫なの？」

あまりにも動かない事が心配になり蘭が聞くと、セルアは大丈夫だと言いながら何度もクロードを踏み付ける。さすがにやめてと止めに入った。

「どうしてセルアは来たの？ それにクロードは吹っ飛んだし」

何から聞けば良いのかわからない蘭の言葉をセルアは理解してくれたらしく、クロードから足を避けると隣に座りなおす。

「ここは姫が住む為に作られた屋敷だ。ただ見るだけなら、そこら辺にある物と何も変わらない。しかし、こんな窓一枚割ったら入って来れるような所に国の重要人物をただ置いておくと思うか？」

そう言われてみると、不思議だった。

「もっと、警備とか仰々しくなりそうだね？」

「だろ？ その代わりがクロードの吹っ飛んだ術ってこった」

人を配置して見回るのも良いが、それよりも術で屋敷を包むようにする。そして、ここへ出入りする人間には、それを通り抜けられる術を施す。そうした上で他の者が入り込もうとすれば見事に吹っ飛び、なおかつ術を仕かけたセルアには伝わってしまう、という仕組みらしい。

だからセルアが現れたのかと納得し、クロードへ目を向けてみるがいまだにぴくりとも動かなかった。

「すぐくわかり易いけど、ちょっと怖いね」

「死なねえようにしているだけ、ありがたいと思って欲しいくらいだな」

セルアはどうやら機嫌が悪いらしい。険しく眉を寄せながら蘭を見る。

「本当にこいつが無理やり入ろうとしたんだろうな？」

まさか自分がここへ入れようとしたと言うのかと、思わずこちらの声も荒くなる。

「ないよ。この場所をクロードに教えたわけでもないし……そう言われるのは面白くない」

アンヘリカでもずっとセルアかユージンが側にいたのだ。二人で会話をする機会も少なく、何より居候の身で誰かを呼び込もうなど思ってもいなかった。

とにかくクロードを入れる必要などないのだと、蘭の瞳も自然とセルアをきつく見てしまう。

「悪い、そうだよな。少し、苛ついた」

珍しく慌てたセルアに蘭は驚いたが、疑いが晴れたのならば構いはしない。

「わかったならいいよ。それにしてもクロードには驚かされるね」

「まったくだな」

二人でクロードを眺めながら会話を続けていたが、蘭はふと気付く。

「今日は、ここにクロードを置いたまま寝なきゃいけないって事だよね？」

姫の為の屋敷であるからこそ、ベッドはただ一つきりだった。ソファも大きい為に横たわるのに問題はなかったが、とにかくクロードと同室なのは困ってしまう。

中へ入り込まないようにしていた術で伸びたクロードが、結局は室内に入ってしまったているのだ。心配だからと運び込んだものの、これでは本末転倒ではないかと蘭は肩を落とす。

「クロードの迷惑に負けた気分だわ」

いつその事、一晩中起きているかと思っていると、セルアは何か思案していたらしい。仕方なさそうに告げる。

「こいつが朝まで起きると思えねえが、今夜は俺もここにいる。ならいいだろ？」

それならば安心だと蘭は頷く。

「ありがとう。三人なら平気だよね」

先程までは眠くても寝られないと思っていたはずが、何故か睡魔を感じるのだから不思議なものだ。本来なら自室で休めるはずのセルアには申しわけないが、三人同室で我慢してもらう事にする。

「クロードには用心したくせに、俺は気にしないのか？」

からかうように投げかけられた言葉に蘭は首を傾げた。

「どうして？」

セルアは溜め息を付いた後に、自嘲するように笑う。

「そりゃそうだな、もう寝たらどうだ。俺も疲れてんだから寝かせろ」

そして、部屋の一角にある棚を開くと、毛布らしき物を取り出した。

二章 止められた孤に灯る想い【一】（三）

翌朝、蘭はけたたましい声と共に目覚めを迎えた。

「どういう事です！」

部屋の中には蘭だけでなく、ソファに寝そべるセルアとクロードがいるのだ。事情の知らないハンナが大声を出すのも当然だった。

ハンナは近くに家族と暮らす家があり、朝早くに屋敷へ来て夕食の片付けが終わると帰って行くのが普通だった。夜は蘭一人という心もとない状況ではあったが、常々姫がそうしていたのだからと変わる事もない。

蘭はアンヘリカから戻って来たばかりで疲れも溜まっており、更には昨夜の騒動のおかげで就寝時間も遅かった。セルアもまだ魔力が戻りきらず休息の必要な状態であり、クロードは変わらぬ様子で眠り続けている。

三人はハンナが来るまで一度も目覚めなかったらしいのだ。

「おはよう、ハンナ」

特にやましい事があるわけでもない蘭は、至って普通に声をかける。寝ぼけた眼を擦りながら体を起こし立ち上がった。

その緩慢な動作に、いつも穏やかなハンナも声を荒げる。

「ラン！ 何を呑気な事を言っているんですか？ どうしてこの部屋に男性がいるんです？」

珍しく大きな足音を立てながら二人の側へ行き、見下ろすと大きく息を吸い込んだ。

「起きなさい！」

屋敷の外まで聞こえるのではないかと思う声に、セルアはびくりと体を震わせ目を開いた。慌てて体を起こし、間近にいる人物を見上げる。

「んあ、ハンナか。……すっかり寝ちまったな」

その反応は先程の蘭とあまり変わらないのだが、ハンナの眉は更

に釣り上がった。

「何が寝ちまったですか！　どうしてセルアがここにいるんです？
そして、この人は！」

あの声によく起きなかったものだと思いきなり、蘭もそちらへ近づいた。さすがに大丈夫なのかと不安を覚え、クロードの肩を揺すり声をかける。

「クロード？　大丈夫？」

「ん……」

数度揺さぶった後ではあったが、少し煩わしそうに体を捻るとクロードも目覚め起き上がる。どうやらどこか痛いらしく、顔をしかめながら辺りを見回した。

「あれ……オレ、何だ？」

わけもわからず吹き飛ばされ気を失っていたのだから、今どこにいるのかも曖昧なのだろう。

しかし、ハンナはそれをわかってはくれない。両手を腰に当て、三人に目を向けた。

「わかるように説明なさい！」

まさか床に並んで座るはめになるとは思ってもいなかった。

「本当に懲りない人ですね」

そう告げたのはユージンだ。

三人はセルアが中心となり、昨夜の出来事を多少ごまかしつつハンナに説明をした。特に口を挟む事はなかったが、耳を傾けるハンナの機嫌は終始悪く居心地の良いものではなかった。

聞き終わると、事情はわかりました。しかし、このままそうすかと言うわけにもなりませんと屋敷から出て行き、ユージンを連れて戻って来たのだ。

後は引き受けましょうとユージンが言い、ハンナは部屋を出たところである。

その際に、きちんと処分はしてください！ と釘を刺して行った。ユージインの視線は一点、クロードに注がれている。しかしクロードは気まずそうにしながらも、目を合わせる気はないらしい。微妙に違うところを見ているように感じられた。

「私は数日前、貴方へお伝えしたと思うのですが、お忘れですか？」アンヘリカで蘭とセルアがいない時の事だろう、クロードは言葉を詰まらせている。何を言うでもない反応に、ユージインがはつきりと怒りの表情を見せた。

「また何かをしたら、身の保証はできないと言ったはずです。切り刻まれる覚悟があるのでしょう？」

予想にもしなかった発言に、蘭は息を呑む。なんと云えばいいのか、とにかくユージインらしからぬ発言だと思った。しかしセルアはそれを聞きながらもくつろいだ様子を見せている為、驚くものではないのかもしれない。

「いっそ刻んじまえ」

「ちよっと、刻むって」

さらりと言ったのけたセルアに、蘭は物騒だと止めに入るがユージインに一蹴された。

「刻む必要があるでしょう？」

「たとえ別棟とはいえ、ここは王宮の一部だ。通常、侵入した奴は必要な情報を聞き出された後、消される」

特に大した事ではない、そんな雰囲気 of セルアに蘭は言葉をなくす。ユージインもどこか嫌な笑みで頷いた。

「当然ですよ？ たとえ貴女がこの屋敷の主ではないとしても、今は大切なウィルナの客人。私達には守るべき義務があり、害をなす者を罰する権利があります」

二人を見ながら背筋が凍るようだと思ふ。まざまざと意識の違いを見せ付けられている。

「部屋に入ろうとしただけだよ？」

それでもと言葉を挟めばきつい瞳を向けられる。

「入ろうとしただけでも罪でしょう？　ここにるのが姫だった場合、とうに事切れていたでしょうね」

「ああ、しかも一気になんて死なせてやらねえしな。拷問されにきたとも取れる行動なんだよ」

おそらくこれがこの当然なのだろうと納得せざるを得ない。ウィルナをあまり理解していない蘭でさえ、城には入れないと思っっているのだ。城門の前には兵が立ち、不審な者の進入に目を光らせている。ユージンとセルアという後ろ盾があるからこそ、蘭が外へ出る事も叶っているに違いないのだ。

しかし、それでも目の前にいるクロードが酷い目に合うのは受け入れられない。

「待って。それはやめて！」

とにかく何かを言うしかないと声を出せば、セルアが冷たい視線をぶつけてくる。

「なんでだ？　お前だってこいつがここに入るのを嫌がったんだろう？」

確かにそうだ。クロードが怖いと思い拒絶をした。

どうすればこの流れを変えられるのか、蘭は必死に考える。

「それでも、その時クロードはここに入れなかった。そうでしょ？　運んで欲しいと言ったのは私だもの」

昨夜、セルアはクロードをここへ入れようと言うと嫌がった。そのまま放っておけばいい、と反対する姿勢を見せていたのだ。

しかし蘭はぐったりとするクロードが気になり、外で寝ているよりも室内の方がいいと無理に願った。それにセルアは、仕方がないと渋々折れてくれたのだ。

（もしかすると、あのまま放っておけばこんな話にはならなかった？）

嫌な予感がすると蘭は恐る恐るセルアを見た。

「こうなるって、わかって……た？」

蘭の怯えた表情がわかるだろうにも、セルアは不敵な笑みを浮か

べるだけだ。

「当たり前だ。だがな外に放っておくと余計に酷くなってたんだよな。俺以外の奴に見つかったのなら、とっくに牢へ放られてるわけだ」

想像とは違ったセルアの言葉に蘭が驚けば、ユージンは苦笑する。

「セルアが一緒だったのなら、朝早くに起こし逃がせば良かったでしょうに」

逃がせば良かったとはどういう意味かと、蘭の思考は定まらない。「そうは思ってたんだがな、すっかり寝過ごした。俺は疲れてんだよ、いい加減に寝かせろって話だ。それに俺はこいつが気にいらねえからな、そこまでする義理はないだろう？」

髪をかき上げながら欠伸をする様子に、ユージンが仕方なさそうに息を吐く。

「そんな事だろうとは思いましたよ」

今までの空気は一転、ユージンが穏やかな笑みを見せた。セルアも自分が情けないと言いつつ背伸びをすると、ソファから立ち上がりクロードの前へ足を向ける。

何も言わず青白い顔で怯えていたクロードの襟首を掴むと言い放つ。

「さすがに懲りたか？ 馬鹿だがお前の使い道はまだあるってこつた」

「え……？」

クロードは何も言えずセルアの顔を見つめたままだ。間拔けな声を上げたのは蘭であり、気付いたユージンが告げる。

「特別に許そうと言っているのですよ。折角得た機会を無駄にはしたくありませんからね」

「だがな。この件は俺達がお前を殺そうとも文句は出ねえはずだ。大きな貸しを作ってやったんだ、せいぜい使われろよ」

クロードを見るユージンとセルアは、意味あり気な笑みを浮か

べていた。

「びっくりした」

ハンナが運んできた茶を一口飲み蘭が言うと、セルアはただ鼻で笑いユージンは当然ですと返事をした。クロードも飲み物を摂る事で多少落ち着いたのか、先程よりは幾分顔色が良い。

「オレも驚いた。ほんとに死ぬのかと思ったよ」

疲れた声を出すクロードに、ユージンはぴしゃりと言い放つ。

「私達以外に見つかったのなら、とっくに死んでいますよ。放っておかれなかっただけ良かったと思いなさい」

「……はい」

おとなしく返事をしたクロードに、セルアも畳みかける。

「よくもまあ思い切ったもんだ。ある意味賞賛してやりてえ」

「そうですね」

「ここに本気で入ろうとしたのは、お前が始めてだぞ」

「無知とは恐ろしいですね」

どうやらこの屋敷にかけられた術は有名らしい。これまでに何も知らずに入り込もうとする者は、誰一人いなかったという。

「オレだって知ってはいたよ。でも、それはウィルナの姫のものであって、ランがいる建物だから違うと思ったんだよ」

決して知らぬわけではないと訴えるクロードに、セルアの厳しい視線が向く。

「その前に城壁の中に入ってるのが問題だろうが？」

「それはそうなんだけどさ……。蘭は城の敷地内に入ってるって言ったし、まさかウィルナの姫様の屋敷にいるなんて思いもしなかったんだ。どうしてランが姫様の家にいるのが今でも不思議だよ」

クロードは姫の顔を見た事がないらしい。知っている者ならばあれは姫に違いないと考えるのだろうか、クロードは蘭が城の敷地内にいるという知識を得ていたが為に入り込んだようだ。

様々な問題を孕んではいるが、わからなくてもない理由だった。

(どうするつもりなのかな?)

「実際の姫は城内におられるのですよ。ランはよく似ているので、時折姫の代わりをしてもらっているのです」

「王族くらいになると影も必要になるんだ。絶対に外では言うなよ。それこそ次はなくてやる」

あくまでウィルナの姫はいなくてはならない存在だ。蘭が屋敷にいる理由は一時的なものであり、例え行方がわからなくとも二人は素振りも見せはしない。

(時々、姫様の代わりをしているくらいならおかしくはないのかな?)

蘭はただ頷くだけで、三人の話の行方を見守る。

「わかった、わかったよ。絶対に言わないから、マルタもランが姫様に似てると言ってたもんな。本当にそっくりなんだね。ランの説明がはつきりしなかった理由もわかったし、もう大丈夫だから」色々と事情があるといって濁した蘭の言葉をクロードなりに納得したらしい。

ウィルナとアンヘリカの関係も知らず、乗り合いすらもよくわからないでいた蘭を受け入れてくれたのだ。深く考えていないのかよく理由はわからないが、どうやらそのままを受け止めてくれるらしい。

(まあ、全部じゃないけれど知ってる人がいるのも悪くはないかもしれない)

様々な事を知るには人数が多いに越した事はない。クロードも蘭がこの世界を知る為に必要な人物なのだろうと考える事にする。

「しかしちゃんと動作する事がわかったのはありがたいが、寝ているところを飛び起きるのはもうごめんだ」

まだ寝足りないのかセルアは欠伸を噛み殺し、ユージインは意外そうな顔をした。

「便利そうですがね」

「便利、不便が問題なんじゃない。強制的に起きるのが嫌なんだよ」
残念ながらその点は改善のしようがないらしく、セルアはクロードに念を押した。

「もう絶対にするなよ！ 次は本当に刻んでやる」

さすがにクロードも懲りたらしい、大きく頷いた。

「しない、本当にしないから！」

その様子を眺めたユージンが、わざとだと思われる質問を向ける。

「折角ですし、昨夜やって来た理由をしつかりと話していただきましょう」

「え？」

明らかに嫌そうなクロードに、ユージンとセルアは含みのある笑みを見せるばかりだ。

「お話しなさい」

「言えよ」

言う言わないの押し問答がしばらく続いたが、クロードが勝てる状況ではない。ちらりと蘭へ視線を向けた後、一呼吸置くと話し始める。

昨日、乗り合いから降りるとすぐに別れたクロードは、本当にすべき用事がありそこへ向かったという。後を付けたりは絶対になり、らしい。

用事を済ませるとすっかり暗くなっていた。どこかに宿を取ろうかと思ったが、まずは空腹を満たしたいと食事に行く。

腹も満たされ店を出ると、ふと蘭を思い出した。城の敷地内にいると言っていたのを思い出し、折角だし会いに行こうとやって来た。そして、運良く蘭もすぐに見つかった。この屋敷はかなり異色に見える為、目に付いたのだろう。

「壁を越えたのか？」

「ちょうど足場になりそうな木箱もあったし、砂漠に必要な道具も役に立つからね」

厚手のコートの中には何かが収納されているらしく、クロードは本当に壁を越えたいらしい。国を覆う物に比べればずっと低い、それでも蘭の背丈の倍は越えるものなのだ。セルアとユージンが信じられないと声を発する。

「馬鹿かお前？」

「私も言いたいですね。馬鹿でしょう？」

「今思うとオレもよく登ったなって感じるんだけど、とにかく越えたらすぐにこの建物を見つけれられたんだ」

クロードがこちらを見ながら笑った為、蘭はとりあえず頷いた。するとユージンが今は相手をしなくて良いですよと言い、珍しく睨みつける。

「それでどうしようと思っていたのですか？」

「顔が見れて話ができればいいなと思って、窓を叩いたんだ。それ」
「待て」

そこに言葉を挟んだのはセルアだ。クロードは何か言おうとしていたのを飲み込む格好になる。

「それだけの為にここには来ないだろう？ お前はここに来たかった、そしてどうしたかった？」

セルアの口調は厳しく、クロードは面食らったように押し黙ってしまう。

「へらへらしていたら許されると思うなよ」

「そうですね」

ユージンも乗じたが、クロードは困ったように視線を泳がせしばらくの間黙っていた。

そして、長い時を置いてようやく口を開く。

「確かにオレはランに会いたかった。そして、一緒にいたいと思ったから来たよ、それは認める」

「そして、どうする？」

セルアとユージンが何を言わせようとしているのかは、蘭にも何となくわかっている。昨夜、そうなるのが怖いと感じて蘭は窓を

閉じようとしたのだ。

しかしわざわざ聞きたい内容でもなく蘭は止めに入る。

「セルア、もういいよ。クロードだってわかっているし、もうしな
いって言うてくれたよ？」

「駄目だ、聞いとけ」

「どうして！」

「どうしてもだ」

「必要なのです。ランには悪いですが、おとなしくしててください
い」

ユージインの声に目を向ければ、セルアに負けなくらい厳しい
瞳にぶつかる。

何も言い返せない蘭は、俯きながら体を正面に戻した。そのまま
ではなくちゃんと見ておきなさいと言われ、クロードへ目を向ける。
そうして、話が戻った。

「続けてください」

ユージインに促されたクロードは、視線を少し下に落とす。直接
こちらを見る事はできないらしい。

「とにかく、一緒にいて話ができればいいと思ったんだ。ただ……」
「なんだ？」

「ちょっとだけ、もしあわよくばもつと色々とかは思ったかな。仕
方ないじゃん。来たいと思ったんだからさ。来るべきだったんだよ」
クロードは誤魔化すように笑みを見せた。それにはセルア、ユー
ジインも溜め息を付く。

以前もどうしても連れ帰らなくてはと思ったとクロードは言った。
そしてたまたま蘭が読める契約文字が存在していたが為に、その行
動は許された。

本当に意味があったのかもしれないと蘭は感じ、必要な事象だっ
たのだと受け入れる事にしたのだ。しかし今の様子ではやはりどち
らも信用できない。どうやらユージインも同様らしい。

「貴方はうまく誤魔化せば大丈夫だと思っているのでしょうか？ 先

日も同じように反省をしているふりをしていた。最終的にはランが契約文字を読んでしまったが為に全てが許されてしまっています」

「悪いなんて、大して思ってもいねえくせに。今回もランはアンヘリカに必要なだからと言えどどうにかなるとでも思っただろ？」

二人の勢いは落ち着くどころか増したようだった。特に合わせようとしているわけでもないだろうに、滑らかに言葉が続く。

「ここを乗り切れば、また次がある。そんなところでしょうね」

「気にいらねえな」

「まったくです。使い道があるとしても迂闊にランに近づけていては何が起きるかわかりませんね」

先程、じゅうぶんに青白いと思っていたクロードの顔色は更に悪くなっていた。怯えた瞳も比べ物にならない。そして、そうしながらも何も言わずにユージンとセルアの様子を窺っているようにも見えた。

蘭もこの空気にどうしたものかと思いつつも、口は挟めもしない。どうも二人の話を聞く限り、クロードは思っている性格とは違うのだろうか。憎めない性格ではなく、憎めないように見せかけているという事かと思ひ悩む。

長い、長い沈黙が続いた。

いい加減、どうかしようと思ったのだろう。ユージンが口を開く。

「貴方にはその場限りの女性の方がお似合いでしょうね。そのふざけた行動を変えないのなら、私達の前には二度と現れない事です」

「俺としては変えたって来て欲しくはねえがな」

セルアの意見にユージンも思い直したらしい。

「特に受け入れる義務もないですね。アンヘリカから出られないようにマルタと交渉でもしましょうか」

「ああ、今回の話をしてやるといいな」

「前回は含めれば、それなりに話もまとまるでしょうね」

マルタの名前を出された途端、クロードは慌てる。

「待って！ 待って、変えるから！ お願いだからマルタには言わないで、もう二度としないから。お願いします」

必死に懇願する姿に、どうしたのだろうかと蘭は驚く。そして隣を見るとユージインがわずかに笑みを浮かべていた。

「貴方がランの気を引きたいのなら、もっと違う行動を取るべきだったでしょう？ そして、ウィルナとアンヘリカの関係を気にするべきです」

「俺達がお前を殺してしまえば、せつかくの関係にひびが入るかもしれないねえ。こっちの理由を信じてもらうだけの関係は成り立っちゃいねえんだよ、お互いにな。お前は全部をぶっ壊してえのか？」

「それは違う、本当だから。だからマルタには言わないで」

首を振って否定するクロードは、ユージイン、セルアへ視線を向けた後に、ようやく蘭と目を合わせた。その瞳は弱々しく、何かに怯えているように感じられる。

何故か、初めて本当のクロードを見た。そんな気がすると思いがから蘭は、その視線をしっかりと受け止める。

「さて、どう思いますか？」

ユージインが聞いた相手はセルアだ。

「しばらく様子を見たらいいんじゃないか？ 俺は構わない」

ユージインは再度確認する。

「本当に、ですか？」

「ああ、構わない。俺よりもこいつに聞くべきだろうが」

「わたし？」

急に視線を向けられ蘭が聞き返せばユージインが答える。

「無理やり連れ去ったり、部屋に乗り込もうとして来るような男が、まだ貴女に会いに来るのを許せますか？ 私達はクロードによってできたアンヘリカとの繋がりを重要なものと捉えています、ランが拒むのならば違う者を介する形を選ぶ事もできるのですよ」

改めて言われると悩む問題だった。蘭にはこの世界の知り合いがほとんどいない。その状況で親しげに接してくれるクロードは、正

直嫌いではない。何より魂の欠片と告げる板へ強引ではあったが引き合わせてくれた人物なのだ。まだ何かしらの可能性を秘めているのではないかと思える部分はある。

しかし連れ去られたり、昨夜のような事をされるのは嫌だった。相手の意思など省みない、自分勝手な行動により被ったものは多分にある。どちらも大きな傷が残る事にはなっていないが、そうなる可能性も大いにあったのだ。

どう答えるべきなのだろうかと、必死に考えた結果を蘭は口にする。

「わたしは一緒に話ができる……友達として見ているよ。と言うよりは友達になれるかな？　くらいなんだと思う」

「そうでしょうね」

ユージンが頷き、クロードも真剣にこちらを見ている。セルアはわざと蘭から視線を外しているようで、よくわからなかった。

「そして、この前や昨日みたいな事は嫌。さらわれたり無理に押し入ろうとするなんておかしいでしょ？」

初めて出会ってからは一ヶ月だが、名前を知ったのはたった七日前なのだ。それだけの間に目まぐるしい出来事があり、魂の欠片と訴える板に引き合わせてはくれた。

だからこそ蘭はクロードに会わないという選択肢を選ぶ事はできない。

「わたしの意思を無視しないのなら、会えると……思う。でも、実際に起きた出来事があるんだから、全面的にクロードを信用する事もできない」

こちらの思惑など気付いてはいないらしいクロードの表情がわずかに明るくなる。信用できないと言われているにも関わらず、どうして喜びを感じさせているのかと思える程だった。

「それは可能性があるって事？」

理由はわからないが、クロードは街で見かけた時から自分を気にかけていたようなのだ。好かれていると言うべきなのかは怪しいが、

気になるのだと蘭に近づいてきた。

それらがわかった上で会い、結果を出す事ができるのかと聞かれているのだろうとは思えるのだが意味合いが難しい。

（どうしてクロードはわたしを気にかけるんだろう？）

特にお互いを知っているわけでもないはずだと蘭は答えを考える。「零ではないかな、クロードと一緒にいられる可能性は低いと思うけど」

「低い……？」

いずれ帰るのだから、この世界の人が特別な存在になるとは思っていない。いや、そう思っていないと蘭は感じていた。

（でも、帰れないかもしれない）

常に付きまとっている不安が大きくなり、一生をここで過ごす事態が思い浮かぶ。

（ない。そんな事はない）

嫌な想像を必死に振り払い、蘭はとにかく出すべき答えを探した。

「クロードだけがって事じゃないよ、誰でもそうなの。わたしはここにずっといるつもりがないんだから」

あくまでウィルナの姫の代わりとして屋敷にいただけであり、いつかはいるべき場所へ帰らねばならない。実際はいつかどこころではなく今すぐにでも帰りたいのだが方法は見つからないままだ。

蘭は正直に思いを告げ、限りなく低い可能性だけを口にする。しかし帰れないという現実が待っているかもしれないという恐れもあり、絶対にないと言えなかった。

何故そんな事を言うのかわかるはずもない、クロードは不思議そうに首を傾げる。

「でも、それが変わるかもしれないんだよね？」

わずかな希望でも構わないのだろうかと言は小ざく頷いた。

「零ではないってだけだよ。ほばないと思って」

帰りたいのであり帰らなければならぬのだと蘭が思っていると、

ユージンが小さく笑う。

「どうやらクロードだけがというわけでもなさそうですね」

「ユージン？」

クロードが言葉と共に瞳を向けると、ユージンは苦笑した後、眉を潜める。

「別に私だとは言っていないでしょう？ ランはここに留まる気持ち、薄いようだと思っただけです」

はっきりとした意味を感じ取る事はできなかったが、何か余計な事が増えてしまったように蘭は思っていた。

二章・止められた孤に灯る想い【二】(四)

あれ以来、クロードは正面からやって来るようになった。

その前に必要な作業として、一度アンヘリカからマルタが呼ばれている。

マルタとクロードが共に城内へ入り、国と町を繋ぐ為という名目を与えられたらしい。しかし、マルタはアンヘリカを離れる事は基本できず、クロードが代理をする形となっている。

だが実際は蘭の元へ来るだけであり、ウィルナとアンヘリカを繋ぐ保険もしくは人質とも言える状況が正しいようだった。

「ランをアンヘリカへ連れて行ったのは間違いないクロードですかね。向こうが何かしら彼に期待をしている可能性は拭えませんがランには申しわけないのですが、我慢してくださいね」

蘭が拒むのなら別人を使うとは言っていたが、どうやらユージインはクロードの出入りを禁止するつもりはなかったらしい。しかしセルアは間逆だった。

「俺は嫌だと言っても構わねえと思ってるぞ？ あいつじゃなくともアンヘリカから来れる奴はいるだろう？ もっと常識的な奴が望ましい」

必要性を感じないとセルアが訴えても、ユージインは引かず押し通したように蘭には見えた。

「今のところは懲りているようですし、屋敷へ無理に入ろうともしないでしょう？ もし突然姫が帰ってきたとしても、あの方はクロードくらいどうとでもできます。ランさえ守れば問題はありません」

確かにいつか前触れもなく蘭が帰り、姫もどこからか帰ってくる可能性も否定はできない。更に姫はクロード相手ならば撃退してしまような発言をされ、セルアも否定しないだけではなく物騒な内容を口にする。

「いつ消しても構わない程度の奴がいいって意味か？」

「そう捉えていただいても構いませんよ？」

蘭には二人がクロードをどう扱おうとしているのかはわからない。しかし、何か目的があるようには感じられていた。

クロードは屋敷へ自由に出入りするまでとは行かないものの、セルアがいる場合は中に入れる。

悪い事はしないから大丈夫だと本人は言うが、さすがに鵜呑みにしようとは誰も思わない。

あの日はすぐに屋敷から追い出され、そこから十日程姿を現さずにいた。アンヘリカへ戻り、再びウィルナへ来る為には最低でも六日空く、それでも早いくらいだ。

それはマルタと共に城を訪れた時の事であり、姿を見せるだけで帰っていった。

そこからは十日置き程でやって来るようになり、どうやらクロードはほとんどを乗り合いで過ごしているらしいと蘭は知った。

しかしここ三日は続けて来ており、いい加減言う事がない。セルアとユージンが来るのとは違いクロードは完全に蘭そのものを目当てにしているのだから、どうしたの？ も何もあったものではなかった。

一昨日は午後のわずかな時間であったが、昨日に至っては朝から晩までいたのだ。常に客人がいるのも落ち着かず、あまりにも続く来訪に蘭も疲れ気味であった。

「ラン！ おはよう。何してるの？」

クロードは挨拶もそこそこに、窓際の椅子へ座り机に向かう蘭の側へやって来る。

最近ハンナに織物を教えてもらった蘭は、時間があれば没頭していた。あまり器用ではない為に進みは遅く、形になるのは当分先になりそうだがウィルナ特有の模様が描かれる予定だ。

太めの針を持ち、鮮やかな色合いの糸を縫り合わせるようにして作る作業は意外と面白く、蘭は飽きる事なく続けている。文字を覚えたいという目的はあったが、一つだけに集中しているばかりでも効率は上がらない。屋敷から自由に出られないなりの生活は、少しずつではあるが変化を見せ始めている。

クロードは背もたれを前にした椅子に腰かけ、両腕と顔に乗せると蘭を見ているだけだ。特に何をするわけでもなく、本当にただそこにいる。

「アンヘリカに帰らなくていいの？」

特に視線を向けもしないのだが構わないらしい。クロードは気にする様子もなく言葉を返してくる。

「んー、そろそろ帰らなきゃいけないんだけどね。ランも一緒にアンヘリカに行かない？」

この発言も現れる度に行なわれるものであり、クロードは蘭はウイルナよりもアンヘリカにいた方がいいんだけど告げてくるのだ。

本人が連れて行きたいと思い、マルタの持っていた板がそれを確定的なものにしたという自負があるらしく、アンヘリカにこそ住まないかと誘われ続けている。

「わたしはね、姫様の代わりにここにいたいというのが仕事なの。クロードだってする事があって来てるんじゃないの？」

ユージンにより都合よく言われた理由ではあったが、実際には姫の代わりができるからこそこの場にいられるのだ。仕事と考えれば割り切れるような部分もある。

やるべき事があり離れられないのだと言えば、クロードからは溜息が零された。

「オレとしてはそっちがついでなんだけどな」

こちらをついでにしてはもらえないかと蘭は思う。この口ぶりだと、帰るのを先延ばしにしているに違いない。来るなどは言わないが、全てを放り出してまで足を向けられるのは困ると目線を動かせばクロードはどこか不服そうに見えた。

「ちゃんとする事はしないと駄目でしょ？」

しつこい程に繰り返されている問答に、クロードは仕方ないかと小さく呟く。

あれ以来、クロードの雰囲気が変わった。よく変わる表情は相変わらずだが、無理を強いるような行動がだいぶ少なくなりやたらと甘えてくる。アンヘリカへ来ないかと誘ってはくるが強引という程ではない為に問題もない。

以前からユージインやセルアと比べ落ち着きはなかったが、蘭は随分と子供っぽくなったという感想を抱いている。

（でも、こんなものだったのかな？ 単にクロードを知らなかっただけな気もするし）

街で見かけた時と無理やり押し込まれた乗り合いからアンヘリカまでが主なのであり、印象というものは刻々と変化するのかもしれないと蘭は思う。

するとまるでこちらの疑問を知ったかのように、クロードは聞いてきた。

「ところでさ、ランって、いくつ？」

そういえばお互いの年すら知らないでいたのかと蘭は素直に答える。

「十九だけど」

「やっぱりお姉さんだったかあ」

同意するように頷くクロードは、蘭の想像とは違った言葉を吐き出すのであり思わず聞き返す。

「え？ 年下……なの？」

すっかり自分よりも年上だと思っていたのは、単に見た目からの印象だった。ユージインと同世代に思える容姿で決め付けてしまっていたのだが、クロード自身もわかっていた事なのか特に不快感も表さずに笑みだけを向けられる。

「オレは十七になったばかりだよ」

「本当に私より年下？」

蘭自身は年が大きく下にも上にも見られる経験はなく、相応といった容姿なのだろうと思っている。そうした自分の感覚で思い込んでしまっていたのは認めるが、やはり驚きは隠せずクロードを凝視してしまっていた。

しかしあまりに続く反応は面白くないらしく、クロードははっきりとむくれて見せる。

「驚き過ぎ。オレだって好きで老けてるわけじゃないし」

わざとらしさ感じさせる溜息を零す仕草から、決して見慣れぬ状況ではないらしいとは理解した。だが、蘭が完全に納得し切れるかというと違ってくる。

「驚くよ！」

あまりにも完成されて見える容姿に、勝手に勘違いをしたのは認めるが予想外過ぎた。

乗り合いの中での頼りなさから会話こそはこちらが主導する形になってはいたが、まさか年少とは思ってもおらず本音だけが漏れる。「ユージンくらいかと思ってたもの」

「オレもそう思われてるなとは思ってたよ。町でも同じような反応の人が多かったし……」

そうしてすぐにばつの悪そうな表情を見せた為に、どうやら町で色々あったのかと蘭は認識する。

（まあ、そこら辺はわたしには関係ないし）

もしかすると単に大人に見られた事で不便だったのかもしれない、詳しい部分は伺いしれない。しかし、そうならあいった表情を浮かべる必要がないようにも思えるのも事実だ。

これまでの女性遍歴など聞いても仕方がない。とにかく年下なのかと思うだけだった。

（セルアだって随分年下だし、大して気にもならないくらいよね）

「お互いの年齢がわかったからといって、これまでと何かが変わるわけではないんだよね？」

「まあ、そうだけどさ」

望んでいた反応ではなかったのか、クロードはつまらなそうに話を続ける。

「ランは年上が好き？ 本当の事を言わなきゃ駄目だよ」

時たま妙に可愛い動きをするとは思っていた理由はこれだったのかと蘭は納得する。年上でも甘えるのが得意な者はいるのかもしれないが、何かしつくりくるものがあつた。

勿論、問いかけられた事へもきちんと答える。

「うーん、どちらかと言えばそうかもしれないかな」

念を押されたので素直な意見を述べたのだが、それはそれで面白くないらしい。

「やっぱり。だからそのまま年上の振りをしようかなって思ったんだけどな」

「思ったのに、やめたの？」

「嘘をついたままは良くないかなって思っただけ。そうは言っても別に嘘の年を言ったわけじゃないけどね」

クロードは蘭の隣でぶらぶらと足を揺らしながら座っている。そうしながら、ふと蘭の手を握った。

セルアにはよく手を引かれ、ハンナも抱き締めるといった動作をよく見せる。この人達は触れ合う事を好むかと思ひながら、蘭は微笑むクロードを眺める。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃなくて、ランに嘘を付くのが嫌だったって事だよ」「そう」

わかったと頷く蘭にクロードは肩を落とす。

「ランって本当にわかってる？」

「何が？」

「何がって、オレがランに興味があるって事」

来る度にクロードは蘭が気になると言う。言わないと伝わらないようだからと、必ず言う。

蘭はそれに対してそうなのかとだけ答えた。現時点でクロードが

好きだ好きじゃないという感情が浮かばないのだから、ただ受け止めている。

そして思うのが、クロードは特に自分を知っているわけではないのではという事だ。

「でもクロードは本当にわたしを知ってると思う？ それにわたしを連れて行かなきゃって思って、最終的には板に辿り着いているでしょ？ クロードの感情とは別の必然性があったとは考えられない？もしかするとわたしをアンヘリカに連れて行かなきゃいけないだけなのかもしれないよ」

蘭は自身がどうしてここにいるのかもわかってはいない。目覚めると見知らぬ場所にいるというありえない状況のままに過ごし続けているのであり、自分の想像を超える事態が意識もないうちに起きてしまっているのだ。クロードの行動も果たしてどうなのだろうか。と疑う部分はある。

「またその話？ ランがそう言うから会いに来てるんだよ。オレには特別な力なんてないし、一緒にアンヘリカにいったならって思うから言うんだ」

しかしクロードが同意するはずもない。蘭が全く別の場所からやって来たという事実は一筋の線とセルアだけが知るものであり、教える必要性もなかった。

「こうしてクロードが会いにくるだけでもいいでしょ？ わたしだってセルアの都合がつけばアンヘリカには向かえるんだし、立場上簡単にここを離れるわけにはいかないの」

結局はふりだしに戻ったかのように蘭がアンヘリカへ向かう点を中心になってしまい、この繰り返される話題に疑問だけを抱き続ける。

「じゃあオレが何度も通ったら、いつかは一緒にアンヘリカに来てくれる？」

ねだるように告げるクロードを、どうしても理解できないと蘭は溜息を零す。

（クロードの目的はわたし自身じゃなくて、アンヘリカにいる事のような気がするんだよね）

何故、アンヘリカと一緒に行かなくてはならないのかと疑問ばかりが膨れ上がった。こちらと良好な関係を望むのならば、まずは互いに理解する事が必要ではないかと思えるのだ。しかし文化の違いというものも考慮しなくてはならず、この世界の常識を蘭はあまりにも知らないでいる。

（とにかく一緒に暮らす事を重要とするのかしら？）

広い世の中には顔すら知らぬ人物を伴侶とする場所だってあるのかもしれない。本人が気づかり知らぬ場所で物事が進む可能性があるのかと、わずかに首を捻る。

図りきれはるはずもない事に頭を悩ませながら、今度は恋愛について意識を向けてみた。

蘭もこれまでに付き合った相手がいらないわけではない。会いたいと思ったり、共に過ごす時間を楽しんだりといった感覚も理解できる。しかし、見ただけの者を自分の暮らす土地へ連れて行くなどと思うだろうかどうしても穿ってしまうのだ。

大恋愛と呼べるような経験をしてきたとは言えないが、クロードが自分に執着する理由が何なのか恐ろしく感じられるような部分もあった。

（まあ、いつかは恋愛もしたいけれど、この場所じゃないんだよね）現実なのかも疑ってしまうような世界で、恋愛などではいられない。どうやって帰るかを探すべきであり、今の自分には不要なものだった。

「ラーン？」

聞かれた事にも答えず考え込んでいると、クロードに腕を引かれ思い出す。

「あ、ごめんね」

「わかっているつもりだけど、傷つくな」

眉を下げる表情から、待たれていたらしい雰囲気は感じ取れた。

「ごめんってば、真剣に考えてみたの」

「オレと一緒にに行けるかって事？」

「……ちょっと違うかも」

言葉に詰まりながら答えれば、不服そうな表情は一瞬で変わり得意気に笑う。

「だよね」

「わかったの？」

「さすがにね。ランが言う事もわかる気がするから、当分は遊びに来る。ランもアンヘリカにおいでよ。マルタ達がいつでも歓迎するって」

クロードは握っていた手を離すと、ひょいと立ち上がり背伸びをする。

「今日は帰る、する事しないで入り浸ってるのも良くないしね。オレはまずランの信用を得るところから始めなきゃいけないんだもん
な」

アンヘリカに来いと言いつつも、クロードは己がこちらにどう思われているのかも理解しているらしい。どうにも矛盾したものを抱えていると感じられるのだが、うまく伝えられはしないだろうと言葉にはしない。

「うん、気をつけてね」

見送ろうと立ち上がった蘭は、決まってクロードに抱きしめられる。

「これはやめて、って言ったでしょ？」

ハグをするという習慣を持たない蘭にとっては違和感のある行為なのだ。馴染みのない挨拶の形は酷く落ち着かず、この世界の常識とは聞かされても慣れない。

「別にやましくないし、いいじゃん」

「いいや、お前は信用ならねえ。いい加減に離れやがれ」

声を挟んだのはソファで眠り込んでいたはずのセルアだった。蘭が目を向けると、随分と不機嫌そうな表情で起き上がる姿が見える。

「あ、起きてたんだ？」

クロードはセルアがいなければ屋敷に入れない。だからといって、蘭と二人で過ごせないのは気に入らないとクロードが申し立てた。

特に三人でも構わないだろうと蘭は言ったのだが、クロードは譲らない。そして何故かユージインが折れてしまいセルアが最後まで反論するという状況が続いた。詳しい理由はわからないがセルアよりもユージインの意見が優先されるらしく、不思議な決まりごとができ上がったのだ。

クロードがいる間は基本的にユージインとセルアは会話に参加して来ない。どうにもおかしい状況にも思えたが、クロードはそれに納得しやって来ている。

しかしクロードがいる間中、セルアが同室にいるというわけでもなかった。セルアは屋敷内の別の場所に出て行ったりもしていた為、あくまで完全な不在時のみ入る事を拒まれているのだ。

今日のセルアは同室でソファに寝そべっていた。セルアはクロードがいようがいまいが、よくこの部屋に来ては寝ていたりと自由に行き来している為、蘭も特に気にしていない。

クロードを外へ送り出す役目を負っているセルアは、気だるそうにこちらへ足を向ける。

「別にしっかり寝ていたわけでもねえよ、こいつうるせえしな」

「なんだよ、オレがいる間は干渉しないって約束じゃないかよ」

セルアとクロードの会話がおとなしく進んでいる姿など蘭は見た事がない。二人は何かにつけて言い合いを始めるのであり、止めるのも億劫になる程にうるさかった。

「帰るんだろ？ 俺の手が必要だろうか？」

セルアが右手をひらひらと動かす仕草から、退出に必要な何かを訴えているのは見て取れる。

「オレとしてはいつでも入れるようにして欲しいけどね」

これ以上は無理と判断したのか、クロードは蘭を解放すると扉へ足を向ける。

「ラン、また来るから。できれば次は口うるさい人がいないといいんだけど」

「ふざけるな。二度と入れなくしてやる」

言い合いながら外を目指していく二人を蘭はただ見送るだけだ。

扉の外まで出る必要など絶対にならない上に、姫自らがそうした行動を取るのも許されないらしい。

（賑やかにはなったから、いいのかな？）

ユージンはセルアと普通に接する人物が珍しいと言っていた。

それは特に蘭だけである必要もないはずだろうとも考える。

なんだかんだと騒いでいる二人を見ると、悪くないようにも思えたのだ。

二章 止められた孤に灯る想い【一】(五)

「まったく、だりいな」

クロードを屋敷の外へ出したらしいセルアがぼやきながら入ってくる姿を眺めながら、ソファに移動した蘭は聞いてみる。

「ねえ、この建物ってセルアの術がないと入れないんでしょう？」

「ああ。どうした？」

己の席にあぐらで座るセルアは、どうしてわかりきった事を聞くのかと眉を寄せた。

クロードは毎回セルアの許しを得て出入りをしている。そして、ユージンやハンナも初めは何かしらの術を施されているらしいのだ。しかし蘭はそういったものを一切されていないように思える。

「初めてここから出た時に、セルアが扉を開けろって言ったじゃない？ あれってもしかして……」

何気なく扉を示され開いた事を不思議に感じた理由にようやく思い至ったのだが、セルアの返答は簡単なものだった。背もたれに体を預け、当然のように言い放つ。

「お前が吹っ飛ばさるか確認しただけに決まってるだろ」

「やっぱり！ あんなに酷い目にあうのに試させたの？」

勢いよく吹き飛ばされ地に叩きつけられたクロードは気を失ってしまったのだ。自分も同じ目にあうところだったのかと、声も自然と大きくなった。しかしセルアは特に悪かったと言うでもなく、気だるそうに髪をかき上げるばかりだ。

「仕方ねえだろう？ 俺だって見極めない事にはどうしようもなかったんだ」

「わたしもクロードみたいになるところだったんだよ？」

「ならなかったんないいだろうが？ 最初から中にいたんだ。おそらく大丈夫だとは思っていたぞ」

「後付けじゃないの？ 吹っ飛んでも構わないと思ってたんでしょ」

どうしてこんな話をするのかと言いたげな表情のセルアに告げれば、鋭く睨みつけられた。

「知らねえ奴にまで気を配ってられるか。お前は完全に不審者だったんだ」

「不審者って何よ！ こっちだって知らない場所にいて驚いていたんだからね。今だってよくわからないままだし……」

「状況は変わってるだろうが？ 俺もユージンもハンナもいる。クロードは納得はいかねえが会いに来るだろう？ 自由に歩けないのは不自由だろうが、あのまま放り出さなかっただけでもありがたがれ」

結局は蘭はこの世界を知らず、ユージンやセルアによって留められなければ更に困った事態になっていたはずなのだ。現時点でも姫がいなくなり似ている自分がいたという理由があるからこそ、こうしてセルアと言葉をぶつけ合う事が叶っている。

「それもわかってはいるんだけど、納得いかない」

ようやく気付いた事実に不満を漏らせば、セルアは大きく溜息をついた。

「今の状態ならそんな事はさせねえよ。お前だってこっちを警戒してただろうが」

「それは確かだけれど……なんか無理やり納得させようとしてない？」

「無理やりでもいいから納得しろ、あれがあったからクロードも入れなかったんだ。むしろありがたがったとけ。しかしクロードが入り浸ってるのが気にいらねえ。こんなにしょっちゅう来やがって、俺が疲れる」

セルアの魔力はだいぶ回復したものの、いまだ万全ではないらしかった。一ヶ月以上とそれなりの時間が経っても戻りきらない魔力というものは、好きなだけ使えるわけではないようだ。

その為かユージンにも仕事は程々にして休めと言われているらしく、アンヘリカへ向かう以前よりも頻繁にやってくる。別に自室

でも構わないだろうとも思ったが、来なくなるのも寂しい気がした為、蘭も口にはしていない。

クロードへ術を施す回数が多ければ負担も増すらしく、セルアが不満を漏らすのも仕方がないのかもしれない。

「今日はそうでもなかったでしょ？　すぐに帰ったし」

昨日のように一日中居座らなかっただけでも良いと言えば、セルアは渋面を作る。

「そりゃそうだが、俺はあいつが気にいらねえんだよ。ユージインはなんであいつなんかを受け入れたんだ？」

心底嫌がっているのがわかる口調ではあったが、好みではどうにもできない理由もあった。

「うーん、でもクロードがきっかけでアンヘリカとの間がうまくいきそうなんですよ？」

「それはそうかもしれねえがな。別に他の奴だって問題はねえはずなんだよ。クロードにはアンヘリカで会えるだろう？　はつきりとした理由が見えないんだよ俺には……だが、おそらくランもそう言うはずなんだ」

「姫様も？」

セルアは蘭を名で呼ぶ事がなく、姫のみに使っている。しかし、基本的には姫すらもあいつと表現している為、あまり名を呼ばないだけなのかもしれない。

「全てとは言わねえが、ユージインはあいつと気が合うんだよ。おそらく近い答えを出すはずだ。単に俺が国の事に興味が薄いつてのものもあるけどな」

クロードが嫌だと言いつつもユージインの意見を受け入れた理由が見えたとは思えたが、理解しきれるものではない。

「なんだか不思議な感じ。セルアは姫様が生きてるってわかるんですよ？」

先視みだ術だと見知らぬ力があるのだから、蘭は可能なのだろうと思ひ込もうとするだけだ。セルアにもそれは伝わっているのか、

苦笑交じりの言葉を返される。

「不本意ながらな」

「そしてユージィンは姫様と考え方が似てるんだ？　だから二人はここに出入りしているの？」

「そう言われりゃそうだが、他にも事情はあるんだよ。まったく面倒ばかりが増えやがる。静かに寝させろってんだ。しかしクロードだけは気に入らねえ」

「別に今は害もないじゃない」

クロードが帰るとセルアは決まって苛々している。はつきりと文句を口にし、面白くないと態度にも表してくるのだ。最近であれば騒がしいものの、大きな問題を起こしてはいない。今日もやるべき事をしろと言えば素直に帰って行ったのだ。

「そう言やそうだが、気に入らないものは気に入らない」

むすつとした表情でソファにあぐらをかく姿もだいぶ見慣れて来た。

蘭は気に入らないとばかり繰り返すセルアに思わず笑いながら立ち上がる。

「まあ、しばらくはこないだろうからいいでしょ？　喉乾いたから、

何か持ってくるね」

自由に動ける場所は決まっているからと、最近の蘭はできる事は自分で行なうようにしていた。ハンナの仕事という部分もありはするが、茶の支度くらいは許される。

「なあ？」

セルアの座るソファの脇を通ろうと足を進めると同時に問いかけられ、蘭は何事かと立ち止まった。

「どうしたの？」

目前にいる少年を見下ろしながら聞けば、不思議な事を聞かれる。

「お前、俺をどう思ってる？」

ふいにセルアは立ち上がっている蘭の手を掴み乱暴に引いた。突

然の事に体勢を崩しはしたが、どうにか踏みとどまる。

「何？」

急な行動に蘭は首を捻りセルアを見下ろし、手を掴んだままにこちら見上げる少年は口端を上げた。

何も答えぬセルアは少年が浮かべるには不釣合いな色気のある笑みを見せると、立ち上がりついでと蘭の肩を手のひらで押す。軽い力ながらも的確にバランスを崩され、蘭は数歩後退し今まで座っていたソファに逆戻りする形になった。

座るというよりは背中から半ば倒れこんでいる格好なのだが、何故かセルアが蘭の顔の横に両手を着く事により、押し倒されているような状況ができてしまう。

いや、今の状況を考えると押し倒されたが正解だろう。

さすがに蘭も危機感を覚え何とか押し戻そうとセルアの胸元を両手で押してみるが、意外にもびくともしない。セルアはだからどうしたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべてこちらを見つめてくる。

「セルア、どうしたの急に？」

押しているばかりでも仕方がないと聞いてみれば、眉を寄せた表情で思いもしない言葉が返ってきた。

「あいつがお前にべたべたするのが気にいらねえ」

「そんな理由？ 挨拶代わりに最後に抱きついてくるだけじゃない？ ハンナもしてくれだし、普通なんじゃないの？」

「違えよ。あれは誰にでもするもんじゃない」

「そうなの？」

今ひとつこの土地の常識がわからない蘭は、疑問に出くわす度に問うてはいる。しかし、聞いた相手はクロード本人であり、どうやら騙されていたらしい。

「知らないでやってるのはわかっていたが、正直面白くねえんだよな。お前、クロードをどう思ってたんだ？」

「友達になろうとしてるくらいだと思うよ？」

「まあ、そうだろうな」

「じゃあ、いいんじゃないの？」

「しかし、いい返事を待ってるのは確かだろ？ お前がどうあれ向こうはそれなりに好意を持っていると考えるべきだ。アンヘリカの意志が読めるとかいふ理由もあるが、今でも連れてこうとするくらいに気にしてんだよ」

可能性は零ではない、それを信じてクロードは蘭に構ってくれていっている部分はある。

「……それは、そうだけど。ウィルナとアンヘリカの為にもクロードを屋敷に入れているのもあるじゃない」

蘭がアンヘリカへの出入りが自由である事は、ウィルナに大きな影響を与えるかもしれないとユージンは言っていたのだ。本来ならばさらう原因となったクロードを受け入れるべきではないが、アンヘリカでの評価は大きなものになっている。そこを跳ね除けるよりは蘭を使って取り入るべきだと、確かに狙っているものがあるのだ。

「確かにそうだな。だが、それはそれなんだよ。あいつに触られてもお前は嫌がりもしないだろう？」

「別にあれくらいなら困らないじゃない？ セルアもいるし何も起きないでしょ？ セルアだってわたしの腕を掴んだりとかするじゃない」

決してクロードを特別扱いしている事はなかった。ユージンは滅多に触れたりはしないが、セルアもハンナも触れる動作が多いのだ。蘭にはそれらの違いがよくわからなかった。

「俺は構わないだろう？ 見た目もこの通りだからな。似ちやないが、せいぜい姉と弟といったところだ」

確かにセルアは随分と年下の為、異性という意識は薄い。

「少ししか変わらないけれど、クロードだって年下よ？ それに抱きつかれるのも一般的じゃないなら次からやめてもらおうし」

「早々に止めさせろ。しかしな、本当にそれだけか？ 迷ってるんじゃないのか？」

何となくだが理由はわかったが、セルアは更に聞いてくる。

「迷ってる？」

「ああ、お前も少しは迷ってるってこったろ？ 理由はどうあれク

ロードが側にいるのが嫌ではない」

しかし蘭の本音はこの世界での知り合いを失うのが嫌だから、クロードの気持ちを利用しているなのだ。

（クロードが好きとかそういう感じではないんだけどな）

蘭はどうしたら帰れるのかと情報を求め、あやふやではあるが契約文字を読めるというところに辿り着いた。クロードはそのきっかけとなった人物であり、更なる可能性があるのかもしれないと期待している部分があるのだ。

「わたしは帰る為にどうしたらいいのかを知りたいんだよ？ もしかするとアンヘリカやクロードが何かに繋がっているのかもしれないじゃない。だから、ここに来てもいいと思ってるの」

いつか大きな結果を得られるかもしれない。わずかな可能性も逃さない為には、知り合った人物との間は良好に保っていたいのだ。

自分自身が自由に動けないのなら、せめて周りにいる数を増やし情報仕入れられる環境を作りたい。

「ああ、それもあるだろうな」

「なら構わないじゃない」

目前にいるセルアはふざけてはいないらしい。真剣な眼差しをぶつけたままに言葉を続ける。

「今は、別に異性として見なくたって構わねえだろうな。ただ、本当に先があるかもしれない」

「先が……ある？ だって何とも思っていないんだよ？ むしろ利用してるくらいなのに」

クロードがどうして自分を気に入っているのかはわからないが、蘭はそれすらもうまく使おうと考えていた。気にかけている部分は自分がいる理由を知るきっかけにならないかであり、異性である部分はあまり重要ではない。

「それもわかってる」

「じゃあ、どうして？」

まるで自分がクロードを好きになるとでも思っているように見え、蘭はとにかく聞く。するとセルアの目が更に不機嫌そうに鋭くなった。

「気に入らないもんは、気に入らねえんだよ。可能性はあるだろう？ お前には悪いが、もしかすると帰れないのかもしれない。そうしたらクロードを選ぶんじゃないのか？」

「え……？」

確かに絶対に帰れるという根拠はなく、蘭の中には常に不安が付きまといっている。しかしそれは最悪の場合であり、現時点では帰る為に動こうとしているのだ。

まさかそんな不確かな未来の為に押し倒されたのかと蘭は絶句する。

「なら、俺のものにならねえか？」

挙句に俺のものなどというんでもない台詞が飛び出した。いったい何が起きたのかと蘭は声を荒げる。

「ちょっと待って、そんな先の事わからないじゃない！ あと、ほらわたし達年も離れているし」

年が近ければいいという問題でもないのだが、とっさに思いついてしまったのだから仕方がない。

実際に七歳差がある上に、蘭は十九、セルアは十二。蘭の常識の中ではありえない。

「なるほどな」

セルアは大した事でもないと思っているのか、笑みを浮かべ蘭の顔を覗き込んだままだ。

「なるほどじゃなくって！ ここではどうだかわからないけれど、私の住んでたところでは確実に駄目なの！」

こちらは焦っているのにも関わらず、目の前の少年は気にも留めずに問うてくる。

「どうしてだ？」

「どうしてって、セルアはまだ子供じゃない！」

「十二では若過ぎるって事か」

「そうなの！　わたしよりも七つも年下じゃない。釣り合わないでしょ？」

何やらうまく言い含められるのではないか、そんな希望が見えてきた。なんとか笑みを浮かべるとセルアをどうかそうと再び両腕に力を込める。

だが、それはあっさり掴まれ外された。更に仰向けになる蘭を跨ぐようにセルアの両膝がソファに乗った為、むしろ悪化したように思える。

「なら俺がお前より年上だったらどうだ？　さっき年上の方がいいって言ってただろ？」

「え？」

セルアから意味のわからない事を言われ、蘭は目をしばたたかせる。

「年上って何よ？」

「俺がお前より年下なのが気に入らないのなら、年上だったら構わねえって事だよな？」

それは、まるで年上になってやろうかと言っているようにも聞こえる。

そんな事はある得ないと思いつつも、蘭は何故か聞き返した。

「な……にを言ってるの？」

「だって、そうだろ？　お前は俺を子供だと言った。それが嫌がる理由なんだろう？」

目の前にあるセルアの瞳はまっすぐに蘭を見下ろしてくる。嘘を告げているようには思えない逸らせない程に真剣な瞳が迷いを呼ぶ。

「そうは言っただけど……」

「なら問題ない、お前が俺に戻れと願え」

どうかそうとしていた事も忘れてしまった腕は解放され、セルアの

両手は蘭の頬を優しく包むようにし、顔が更に近づいた。

「俺に戻れと願え、俺が年上になると思え」

「……………」

言葉も出せずに瞬きを繰り返していると、セルアに強引に抱きつかれた。十二の小さな体では蘭を包み込むとは言えないが、確かな温もりをぶつけられ戸惑いが生まれる。

「俺が大人になる姿を思い浮かべてみる、見てみたいだろ？」

「セルアが大人になる？ 戻る？」

その時、確かに見てみたいと蘭は思った。それは否定しない。もし、この子が大人になったらどのような容姿を持つのだろうか？と素直に思ったのだ。

ただ、まさか本当にセルアが大きくなるとは考えていなかった。

そして、そのまさかが今日の前にある、らしい。抱き締められている為に全貌を知る事はできないが、蘭の体に当たる感触が違っている。そう、抱きつかれた程度に感じる大きさだったはずのセルアが、なぜか蘭をしっかりと抱き締めているのだ。

「これならどうだ？」

声変わりも迎えていない高い声はどこへいってしまったのか、低く甘い見知らぬものが蘭の耳元から吹き込まれる。

「は……？」

「さすがにこの姿で乗っかってるのはまずいだろうから、勘弁してやるよ」

ソファの上に二人で倒れ込んでいる格好から、一人起き上がったセルアラしき人物は立ち上がる。

腰に巻かれていた布を取り外し広げる姿を眺めながら、蘭は事態を把握しようとはするが思い浮かぶものはない。

「服だけは上手い事いかねえんだよな」

確かに上半身の服は随分ぴったりと体に張り付き、ズボン丈が足りていないように見える。

ユージインの物と似ている黒のコートを羽織りながら呟く男は、

釣り上がった碧の瞳を細めると腰を曲げた。

「これなら問題ねえだろ？」

仰向けのまま見上げる蘭の顔を覗き込んだ表情は、意地悪そうに細められた瞳と軽く上がった口元が印象的だ。

全く違う人物のように見えるが、知らぬとは言えない雰囲気はセルアであると訴えているようには思えた。

しかし、受け入れられるものではない。

「え……ええっ！ はあ？」

何かを言いたいのだが言葉にならない蘭に、今度は満足げな笑みが向けられる。

「え？」

セルアは不機嫌そうにしているのがほとんどであり、笑みもどこか陰りが見えた。そして、満面と言えるような表情は全く見えず、いつも意地悪そうな雰囲気称えていたはずなのだ。

（違う……人？）

別人なのではないかと感じる様子に驚けば、男は蘭の手首を強引に掴むと引っ張り上げる。

（やっぱりセルア？）

小さな手に引かれて歩く時に近い持ち方のまま、蘭はソファの上での体勢を正しいものへと変えた。

すると男は乱暴に隣へと腰を下ろし、何故か蘭の肩に腕をかける。「このくらいだったら構わないだろう？」

そして、当たり前のように引き寄せられた。

寄りかかる格好になった蘭は、大慌てで体を起こそうとするが許されない。力強い腕がちりと肩を押さえているのだ。

「なんで？」

決して相手に向けた言葉ではなかった。突然起きた出来事に蘭はとにかく疑問だけを抱き、呟いてみただけだった。

どうしてこのような事態になったのかと思考を巡らせていると、不機嫌さを表す声がぼやく。

「クロードだって、べたべたしてるじゃねえか。俺は駄目か？」

「いや……えっと」

いまだに何を言ったら良いのか、それを考える余裕がない。

（セルアなんだよね？ でも、本当にそうかしら？）

向けるべき言葉も見つけられずにいると、随分と間近に顔が近づいた。

「どうした？」

覗きこんでくるセルアらしき顔を見た途端、蘭の顔は何故か赤く
なってしまう。すると嬉しそうに目の前の人物が笑った。

「悪くない反応だな」

そして、そのまま顔が近づいてくると気付いた瞬間、蘭は咄嗟に
腕を振るう。

「ちよっと待って！」

突然霧が晴れたようにぼんやりとした思考が動き出したのだ。容
赦なく右の掌でセルア？ の顔面を押し返す。

「いってえ」

力加減もせず結構な力で叩いてしまった為、男は片手で顔を押しさ
え喚いた。

「痛いだろうが！」

それと共に押さえられていた肩の力が緩んだ為、とにかくソファ
の端へと逃れる。

そしてあまりにも普段と変わらない口調へ、蘭はようやく言葉を
向けた。

「痛いじゃないでしょ！ セッ、セルア？ が悪いんだから」

「ん……確かにな。なんだよ、その疑問形は？」

叩かれた為に押さえた手を外した顔には、うっすらと手形の跡が
見える。

「だって、どこか違う人みたいなんだもの。本当にセルアなんだよ
ね？」

「ああ、そうだ。どう見たって俺だろう？」

当然だと言われるからこそ蘭も普通に話しかけはするが、やはりおかしさは拭えない。

「それがわからないの！ 何でそんな事になるのよ？」

「なるんだから仕方ねえだろうが？ そんなに怒るなよ」

余りにも変わったこの姿は、別人。いや、癖のある金髪やこの表情、喋り方はセルアだとは思う。

はっきりとした理由はわからないままだが、蘭はとにかく不満をぶつける。

「あれだけクロードを怒ったくせに、今はないでしょう？ しかも何で大人になるのよ、非常識！」

「非常識とはなんだよ。俺にとってはこっちが普通なんだよ。ったく、本当にやっちまおうとか思っていないからな」

「本当に？」

「本当だ。さすがにあいつにあれだけ言ったのに無理やりってわけにもいかないだろう？」

「でも、今……」

キスされるかと思った。

蘭はそう言いきれず言葉を濁す。

それにセルアは乱暴に頭を搔いた。やはり見慣れた動きである。

「ん、俺としても予定外だな」

「何よ、予定外って」

「可愛い反応に、つい、ってこった」

その言葉に再び顔を赤くした蘭へセルアが笑う。

「それだ、それ」

「なにがそれよ！ さすがにびっくりしたの。本当に大人になるなんて思ってたんだから！ っていうか、その前の行動だって問題でしょ？」

自分でも顔が熱いのはわかる、でもこればかりは仕方がない。早く戻れと思ってもなかなか治まらず、蘭は構わないようにしながら話を続ける。

「びっくりしたの、本当にそれだけだから！」

「だったら、驚くだけでいいじゃねえかよ」

セルアは余裕の笑みを見せると、こちらに体を動かし蘭の頬に触れた。

蘭はびくりと体を震わせ慌てて振り払うと、立ち上がってセルアから逃げ出す。

「もう何なの！ わけわかんない。非常識！ 急にあんなに近づかれたら誰だって驚くに決まってるの」

「悪い悪い、何もしないから落ち着いて座れ。普段通りだ、普段通り。いつもは気にしないだろうが？」

蘭の混乱をよそにセルアは随分と上機嫌な様子を見せる。謝っているが、どうにも面白がられている気配が感じられた。

「だって、見た目が違うんだもの……」

「なんだよ？ 見た目で差別するのか？」

「差別？ 違うわ……これは区別なの！」

子供だと思っていた人物が急に大人になってしまったのだ。自分がおかしな反応をするのは当然なのだと蘭は言い放つ。

「なるほどな。まあ、悪くはねえからいいか。本当に何もしないから座っとけ」

ソファの座面を叩きながらセルアは戻れと言うが、蘭は再度確認をする。

「ほんとに？」

「本当だ。無理に触ったりもしないから、座れ」

わざとらしく腕組みをするセルアに念を押した。

「言ったからね、何もしないって言ったからね」

再度確認をしながら蘭は隣に腰かける。視線はずっと腕組みをして座っているセルアに送り、警戒しながら眺め続ける。

するとセルアは声を出して笑う。

「面白過ぎるぞ、お前」

「セルアが悪いんじゃない！ 何もなければこんな事しないわよ」

姿が変わるのならばせめてもっとわかり易くしてはもらえなかったのかと蘭がぼやくと、何故かセルアはぼつが悪そうに髪をかき上げ、拗ねたように告げた。

「仕方ねえだろ。俺としても一か八かってとこだったからな」

「何よその、一か八かって」

「色々あんだよ」

背もたれに体を預け足をテーブルに乘せる仕草は、行儀は悪いがセルアらしいものである。

（セルア、なんだよね）

いまだに信じきれないが、改めて目の前の人物を確認しようと蘭は視線を移動させた。

足首までもある長いコートを羽織っている為、服装は普段とは違う。しかし、いつものセルアがだぼつかせて着ていた衣服は確かにこの中にあるのだ。サイズが合わなくなった事を気にしながらこれを羽織ったのであり、蘭はしっかりと見ている。

浅黒い肌の色は変わらず、癖の強い金髪は少々長いようにも感じられるが髪型は同じままだ。瞳の色も碧ではあるが、すべてが大人になってしまっている為に印象は違う。

細い腕は筋肉のついた逞しいものになっているはずだった。目ではわからないが確かに蘭は抱き締められ、瞬間的に変化した感触を知っている。

「もう慣れちまったのか？」

何も言わずに見つめ続ける蘭にセルアは聞いたが、慣れるようなものではない。

「そんな事はないわ。今も悩んでいるところだもの」

「なるほどな。でも、これが俺だ」

口端を上げる仕草も見慣れたものであり、蘭はやはりセルアなのだと思っはいた。

二章・止められた孤に灯る想い【二】（終）

その後のセルアは蘭に好きな事をしていれば良いと告げ、本当に普段通りだった。気が向くと話しかけて来るが、突然ふらりと屋敷から出て行ったりもする。そうかと思うとまた戻って来てソファで眠る。あまりにも常と変わらぬ動作であり、違和感はあるが蘭も多少は落ち着いたように思えていた。

違う部分と言えば、いつもならばユージインが来る前には必ず帰っていたはずがまだいるというところだ。アンヘリカから帰ってきた日も夕食を共にしたが、それ以来はなかった。

どうやらセルアがいられる時間は夕食前までが基本らしい。特別に用事がある時のみユージインを待っているように見えた。

そして、突然大人の姿になったセルアを見たハンナの反応は、蘭とは違いあまりにも普通だった。

あらセルア、その姿は久しぶりね。そうごく当たり前のように言っただ。

その姿を咄然と見つめている蘭にハンナは笑った。

ランは初めて見たんでしょう？　びっくりするわよね。大きくなったり小さくなったり、でもそのうち慣れますよと察してはくれたようなのだ。

素直に頷きながら蘭は、どうやらセルアが大きくなったり小さくなる事は不思議ではないようだと思えて認識した。

食事も済み後片付けをしたハンナは自宅へと帰って行き、蘭とセルアは食堂へそのまま残りのんびりと茶をすすする。

お互い椅子の背もたれに寄りかかり、特に会話を必要としなくとも過ごせる。そんな関係になっていたはずなのだが、まるで別人のように見える為かどこか落ち着かない。

おそらく気にしているのは蘭だけなのだろう、セルアは特に変わった素振りもなかった。ふと立ち上がると気ままに食堂をうろつき、

食べたばかりだというのに何やら口にする物を探しているようだ。
まるで見知らぬ人というような感覚に耐えられなくなった蘭は、
セルアに声をかける。

「本当にそれが普通なんだよね？」

「ん？ どうした？」

「ハンナも別に驚いてなかったし……久しぶりって言っただけじゃなくて、どこか安心してらるっぽかったかな？」

「どうやら何かを見つけたらしく、セルアは口に放り込む。」

「そうして容器を掴むと、咀嚼しながらテーブルまで戻って来て置いた。どうやら、ハンナの焼いた菓子らしい。」

「どかりと椅子に座りなおすと当然だと言葉が返ってきた。」

「そりゃそうだ、見慣れてる。ランとハンナは昔から知ってるからな。ユージンもまあ、今更驚きはしないだろう」

「そっか」

「まだ見慣れねえか。俺の顔ぶっ叩くくらいだから慣れたのかと思っただが」

「あれは、見慣れたと言うよりも驚いたのよ。あの時だけで色んな事があつたでしょ？ というよりはセルアがしたんでしょ」

「そりゃそうだ」

「こうして会話を続けてしまえばやはりセルアであるとは思える。テーブルに頬杖をつきながらこちらを眺める仕草も、知らぬものではなかった。」

「蘭も焼き菓子へと手を伸ばす、甘い物は別腹であり控えめの甘さとさくりとした触感が良い。美味しいと思いつつながら、向けられている視線に気付けばセルアは笑んでいる。」

「どうしたの？」

「別に」

「そう？」

「どうもこの姿になってからのセルアはよく笑う気がする。蘭は思う。普段の不機嫌そうな仕草はどこへいってしまったのかと感じる。」

程に違うのだ。外見以外に感じ取れる唯一の変化とでも言えそうな様子には何か含まれているのかとも思えた。

「そういえば、セルアの本当の年っていくつ？ 私より年上なんでしょう？ 話しておかしな感じがするのも間違ってたんだよね」

常に蘭よりも落ち着いて構え、ユージンやハンナとも同等に渡り合っているのは当然だったらしい。おそらくセルアは見た目とはかく中身は大人であり、そうして蘭にも接していたに違いない。

「二十七だ」

正面にいる見慣れぬセルアは当たり前のように告げたのだが、蘭の想像を超えていた。

「に……じゅうなな？」

確かに大人びているとは思っていたが、まさか八つも年上だったのかと驚く。今日はクロードが年下である事を知り、セルアが年上である事も知った。どうにもちぐはぐな二人に頭が混乱するわけだと溜息を漏らす。

（ややこしいわ）

それでもクロードはまだ納得がいった。単に成長が早いと思えば問題がない。

さすがにセルアは規格外だと蘭はまじまじと見つめる。

「なんだ、その反応は？」

「いや、なんていうか。少し前まで十二歳だと思っていた人が、実は倍以上の年でしたっていうのはさすがに驚くよ？」

セルアやハンナにとっては当然なのかもしれないが、蘭の中ではうまく消化できない程の大事件だったのだ。

「それは否定できねえな」

「否定されても無理だし。でもハンナを見ると、普通なんだなあって思わなきゃいけないんだよね。術があるし不思議な場所だとは思っていたけど、見た目も変わるなんて思いもしないよ？」

「誰でもできるものでもないしな。お前怖くはねえのか？」

「なんで？　だってそれが普通なんでしょ？　驚いたし非常識だとは思ったけれど、今の姿の方が納得できる気もする」

会話をしつつも菓子を食べ続けていたセルアは、何故か少し驚いたように目を開いた。

「へえ、変わってるな」

「変わってるのはセルアでしょ？　子供っぽくない喋り方をするとは思っていたにしても、とんでもない事をするんだから」

まるでこちらが変わり者のような言い方をされ蘭が反論すると、セルアはただ口端を上げるだけだ。

「俺としてはそうでもないと思うがな？」

「ふうん」

やはり当然という意味かと蘭が頷いていると、扉を叩く音が混じる。

セルアは前触れもなしに入ってくるが、ユージインは知らせを告げなければ入室しない。

「いいよー」

大きめの声に向ければ、ゆっくりと扉が開かれる。

「お邪魔しますね」

普段と変わらず静かに入ってくるユージインが、多い人影に視線を向ける。その瞬間、目は大きく見開かれ、口はぽかんと半開きになった。

そして、そのまま立ち止まってしまったのだ。

「ユージイン、どうしたの？」

常ならぬ様子に蘭が問いかけるが返答はない。ユージインはひたすらセルアに視線を向け続け、突然に足を進める。

「どう……してです？」

勢いよくセルアの側までやって来ると、大声が放たれた。

「どうしてその姿なんです！」

セルアに掴みかかるのではと思うような勢いで、ユージインがまくし立てた事に蘭は驚く。

ここまで過剰な反応を見せるユージインは初めてだったが、セルアは落ち着いたもので椅子を指差すだけだ。

「説明するから座れ。聞かなきゃわかんねえだろうが」

「それはそうですが、おかしいではないですか！　どうしてその姿になっているのです。ランがいなければ無理なはずでしょう？」

大人しく席に付く余裕もないらしい、そのまま話は続けられる。

「んー。まあ、こいつのおかげだ」

何を思っているのか笑みを浮かべるセルアは蘭へ視線を向け、ユージインが素早く続く。

「何をしたのです？」

焦りを感じさせるユージインに、蘭は状況が理解できないまま答える。

「セルアに戻れて……言えって」

「それで戻ったのですか？」

再びユージインに視線を向けられたセルアは、更に目を細め頷いた。

「そういうこった」

ユージインの常々笑みを浮かべている顔は強張り、崩れ落ちそうな体を支えるように両手がテーブルへ置かれる。

「何故……です？」

呆然としながらもセルアへ瞳を向けてはいるが、焦点が合っていないのかも怪しく見えた。

「おかしいでしょう？　あれはランとの間に交わされたもののはず……」

ユージインはセルアが大きくなった事が信じられないらしい。当たり前だと受け入れたハンナとは間逆の反応だった。

そして今言っているランとはおそらく姫の事なのだろう。蘭と区別する為に、ずっと姫を名で呼ばずにいたユージインがそれを崩してしまっている。

「それはそうだが、変わっちまったんだよ」

セルアは髪をかき上げながら眉を寄せ、どうしたものかと考えているようだった。

ハンナの反応に対しては当然だと言ったが、ユージインに関しては驚きはしないだろうと曖昧な発言をしていたのだ。全く予想のでないものではなかったらしい。

ユージインはセルアを見つめ続けるだけであり、その視線に困ったようにセルアは蘭へ顔を向ける。

「似てるからって考えるしかねえのかもな」

「似てる？」

返事をしないユージインに代わって、蘭が聞いた。セルアとしてはそれでも構わないらしく話を続ける。

「初めて見た時に俺は、似てるって言っただろう？ あれは見ただけって事じゃねえ。どこか本質が似ているって意味だ。そして、今日こいつに俺が大人になると思わせながら戻れと言わせた」

素直に頷いた蘭へ目を向けたユージインが、ようやく口を開く。

「それで術が履行された……」

「おそろくな」

二人の視線を受けた蘭は、何を言っているのかもわからずセルアとユージインを交互に眺める。

「別にお前が悪いとかではねえよ、気にすんな」

セルアはそう言うが、ユージインのただ事ではない様子には意味があるのだろう。

「ユージインもそんなにこいつを驚かすな。本当にたまたまの事だ。初めからこの屋敷を自由に出入りできると考えると、間違ってもいないだろう？ こいつはランに限りなく近い存在だと捉えるしかねえ」

こうしてユージインへ声をかけるセルアを見てみると、改めて年上なのだろうと思えてくる。以前からユージインよりもセルアの方が物事に詳しい口ぶりが多かった。術師という特殊な能力だけではなく、仕えている年月が違っているのだと感じさせるものがある。

ユージィンは色々と考えているのか、すぐに言葉を返そうとはしない。たつぷりと時間を置き、酷く悪い顔色と共に搾り出すような声で告げる。

「ええ、そう考えるほかはないのでしょね。しかし……この事が姫の身に異変があったという理由にはなりませんか？」

「おそらく違う、としか言えない」

困ったように眉を下げたセルアへ、今度は鋭い瞳がぶつけられた。

「何故、そう言えます？」

「あいつはちゃんと先を見ている。ならば生きて戻ってくるのが約束されているはずだ。俺よりもユージィンが先視みを信じているんじゃないかったのか？」

「それはそうですが……」

蘭には理解しがたいが、先が見える事が無事の証になるというのだ。ユージィンも決して否定はせず、むしろ渋々ではあるが納得しているように見えた。

「ここはむしろ、俺が大きくなった事にも意味があると思った方がいい。何かの為に事が進んだと考えるべきだろう」

はつきりと言い切ったセルアへ、ユージィンが眉を潜める。

「それを理由に、貴方はそのままにいるつもりですか？」

「当たり前だ」

「戻る気は？」

「ない」

するとユージィンはゆっくりと蘭へ目を向けた。そして今度は蘭の側へ足を進めたかと思うと、立ち上がるように促される。

「どうしたの？」

「これは必要な事ですから」

強引に背を押され、セルアの元へ連れて行かれた。

「ラン、セルアが子供の姿に戻るよう願ってください。小さくなる
とも言えば大丈夫なはずです」

「え？」

椅子に腰かけたセルアは嫌そうにユージンを睨みつける。

「俺は断る。このままでいさせろ」

しかし、ユージンも対抗するように瞳をぶつけるだけなのだ。
「常にその姿でいる事はないでしょう。ここでランが貴方を子供に戻せるのなら、いつでも自由に姿を変えられる保証がなされるのです。小さくなりなさい」

「それなら何日か経ってからで構わねえだろ」

是が非でも小さくさせたいらしいユージンと、戻りたくないらしいセルアの問答はしばらく続いた。だがセルアが折れる気配はなく、ユージンが一つ溜息を零す。

「今まで貴方がその姿に固執した事はないでしょう？　どうしたのです」

するとセルアは少々ばつが悪そうに言葉を濁す。

「……こっちの方が」

「その姿が、何です？」

言いよどむ姿にユージンが促すと、セルアがふいに蘭の腕を掴み引き寄せた。

二人の会話に集中していた蘭は、踏みとどまれずにセルアの方へとふらつき近づいてしまう。

更にセルアが腰に腕を回し引っ張った為、蘭は椅子へ座るセルアに寄り添うように立つ格好になった。

「こいつの反応がいい」

拗ねたような口調のセルアに、ユージンは今までとは違った意味で驚いたのだろう。何も言わずセルアを凝視する。

そして蘭は急にぴったりとくっついた事に驚き、慌ててセルアから逃れようともがいていた。

少年の姿ならばあまり気にならないのだが、頭で理解していても別人のように感じられてしまうのだ。落ち着かないととにかく離れようとする。

「離してよ！　さっき触らないって言ったじゃない」

「それはさっきの話だろうが？ 別にこのくらい気にするな」

離して欲しいと手でセルアの腕を外そうとはするが、緩まる気配はない。

「嫌よ。嘘つき」

今度は蘭とセルアの間で言い合いが始まり、ただ眺めていたユージンがセルアへ聞いた。

「それが理由ですか？ 本当に？」

訝しがっているらしいユージンへセルアは言い切る。

「ああ、そうだ。悪いかな？」

「……………」

そのまま何も答えずにいるユージンと、逃れようと抗う蘭に拒むセルアという状況が続いた。

「……………」

あまりにも言葉のない時間が長い為か、耐えられなくなったらしいセルアが声を上げる。

「何か言えよ！」

「ふ……ふふっ」

それに今度はユージンが声を上げて笑い出した。

そんな姿を想像もしていなかった蘭は、更に驚いてしまう。セルアにとっても予想外だったらしく、珍しいものを見るようにしている。

「す……すみませんっ、ま、まさか、ふふ、セルアが、そんな事」

何かを言おうとはしているようだが、ユージンはとにかく笑いに笑った。

そうも笑えるのだろうかと思う程笑い続けるユージンに、セルアの表情が険しくなる。だが、それでも蘭の腰に腕は回したままで喚く。

「そこまで笑うな！」

ユージンは落ち着こうと、ゆっくり呼吸をしながら表情を整えているようだった。軽く腹を抑えたのは、痛みを感じる程笑ったか

らかもしれない。

「失礼しました。ふ……」

どこかまだ笑いが残っているような表情にも見えたが、どうにか落ち着いたらしい。

「貴方がそんな事を口にする日が来るとは思ってもいませんでしたよ」

そう言ってセルアを見るかと思えば、さりげなく視線を逸らす。

「悪かったな」

セルアもこれ以上笑われたくないのだろう、そこには触れず答える。

喉が渴いたらしいユージインは、テーブルに置かれたポットから茶を注ぐと一口飲む。そうして、ようやく椅子に座った。

「笑ったせいでしょうか？ 先程までの心配が馬鹿らしくなって来ましたよ」

「そりゃ良かったな」

特に反論する気もないらしいセルアへ、今度は蘭が声をかける。

「ねえ、そろそろ離してくれない？」

おかしい状態ではあったが、ユージインも落ち着いたらしい。蘭は不要だろうと訴えかけるが、セルアは不服そうに眉を寄せるだけだった。

「このままでもいいんじゃないか？」

「嫌よ、わたしも座りたいの」

簡単に言っただけのセルアに蘭は反論する。座る事よりもこの腕をどかしたいのが本音だが、この方が何も言われない気がしたのだ。

「……仕方ねえな」

思った通りセルアは蘭を解放し、そのまま元の椅子へ移動する事が許される。

この様子を黙って見ているユージインの口元が微かに笑っているように見え、セルアも気付いたのか声を荒げる。

「ユージイン！ 笑い過ぎだ」

するとユージィンはまた声を立てて笑い出し、セルアが面白くないと表情を歪めた。

ようやく状況も落ち着き、改めてユージィンと言う。

「私は一度、ランがセルアの姿を変えるところが見たいですね」

「嫌だとさっきも言っただろうが」

「理由も聞きましたが、ランは貴方の小さい姿を知っているのだから問題ないでしょう？　ずっと小さくなれとは言いません、一度戻ってください」

だいぶ普段の調子に戻ったらしいユージィンは、嫌がるセルアにはつきりと言いつ切る。

「そう言われるとな……」

セルアも断りきれないようで、仕方がないと立ち上がり蘭の側へやって来た。こちらの頭に手を乗せて、見下ろす。

「今度は逆だ、俺が子供になると思うながら小さくなれて言ってみろ」

見上げておとなしく話を聞いていた蘭は頷いた。ほんの半日前、不機嫌そうな顔でソファに寝転んでいた子供の姿を思い浮かべ口を開く。

「小さくなれ……？」

しかし、セルアの姿は変わらなかった。あの時は何が起きたのかわからない程、一瞬で変わってしまったはずの容姿は大人のままである。

「あれ？」

「もう一回やってみろ」

「うん」

セルアは小さくなる。普段の十二歳の姿にならなくてはいけないのだと考える。しっかりと容姿を思い浮かべながら言葉に乗せた。

「小さくなれ」

「……………」

全員が無言となりお互いの顔を見た後に、ユージインが首を捻る。

「変わりませんか？」

もう一度挑戦するも、やはり変わらない。

するとセルアがどこか嫌な笑みを称えて、蘭に告げる。

「お前、俺が小さくなるのを望んでねえのか？」

「え？」

思いもしない言葉に疑問だけを口にすれば、ユージインの声が続いた。

「セルア。あくまできつかけを与えているだけで、意思はさほど関係ないはずですよ」

その発言に蘭は密かに安堵する。自分の思い一つで姿が変わらないのは嫌なものがあったのだ。

セルアもそれは承知していたらしい、特に何も言わずに首をかしげている。

「どういこうった？」

「どういう事でしょうね」

三人で顔を見合わせていても何かが解決するわけでもない。しかし、誰も理由が思い当たらないのだから会話も進みようがなかった。

「もう俺が大きくなったのには意味があるって事でいいだろう」

話をまとめ始めたセルアに、ユージインは納得していないらしい。

「何をそう簡単に言うんです？」

「実際にこの姿にはなれたが、そこから戻らねえんだ。諦めるしかないだろう？」

「しかし……」

「仕方がないだろう。本来あるべきなのはこっちだ」

「今が自然なのはわかっています」

セルアが己の体を指し示す仕草とユージインの言葉から、やはり子供の姿である事が異例らしいと蘭は知る。

だが、ユージインは表情を曇らせるばかりであり認めはしない。

「それでも私は納得できません」

「そう言われてもどうにもできねえ。納得するしないよりも諦めろ」

「諦めですか」

「そうだ」

嫌がるユージィンへセルアは受け入れろと言葉をかけ続けるが、どこか不満を表情に見せている。

「確かに方法がないのだから諦めるしかないのでしょうかね」

本当に渋々口を開いたように思えるユージィンへ、セルアはどこか機嫌良く告げた。

「諦めろ、諦めろ」

するとわざとらしく溜息をついたユージィンが、突然普段通りの笑みを浮かべたのだ。これまでの驚きや焦りが一瞬にして鳴りを潜める姿は不思議なものだった。

「そんなに簡単に言われたくはないですね。しかし、セルアがその姿のままにいるのなら、すぐにでも蘭と二人でアンヘリカへ行ってもらいましょうか」

今までの流れがどうしてアンヘリカに繋がるというのだろうか。

蘭には話が突飛過ぎるように思えた。

しかし、セルアは特に疑問もないらしい。当たり前前に会話を続けてしまう。

「期間は？」

「三日で往復、こちらで御者も準備します。あなた方は乗っているだけで構いませんよ。ただし、魔力は使ってください」

「ちょっと待って！ どうしてアンヘリカへ行くの？」

関係性の見出せない蘭は問うが、セルアもユージィンも誤魔化すように笑うだけだ。

「行くしかねえんだよ。折角の二人旅なんだから喜べ」

「それがわからないの。しかも喜べっていうのは？」

「御者がいようが中の音は外へ聞こえない仕様だぞ」

乗り合いの詳しい仕組みは知らないが、どうやらそういうものら

しい。

「セルア、馬鹿な事を言っていないで真面目に考えてください。蘭もまだ可能性は捨て切れないのですから、小さくなるように努力しましょう」

ユージンが大きさを変えろ点を気にしているからには、やはり話自体が変わったわけではないようだ。何かはつきりとした理由があつて話しているようには感じられる。

「う、うん。それは頑張るけれど……」

蘭には何も理解できないままに、突然のアンヘリカ行きは決まったのだった。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（一）

蘭とセルアはアンヘリカへ向かう乗り合いの中にいた。

アンヘリカは蘭がいる事だけを重視すると言っている為、服装は町へ出る時と同じものだ。セルアが少年から大人へ変わってしまったのはいるが、装いは町に溶け込めるものになっている。

そこに砂漠へ出る際に必要な物として、フードのついた厚手のコートや羽織り靴を履き替えさせられた。更には二日分の食料や簡易的な毛布を入れた鞆も持たされている。

乗り合いは以前ユージンとセルアが使用したものらしいが、見た目も内装も蘭が見知るものと変わりはない。

ただ、乗り込む前にセルアが何やら作業をしていた。蘭の目には美しい宝石へ手をかざした程度にしか見えなかったが、それが魔力を使うという事なのだろう。

今回同行している二人の御者は王宮付きの乗り手らしいが、庶民的な姿をしている蘭は姫に似ているとは言っても気付かれない。あくまでセルアに従っている娘くらいに思っているようだった。

実際、似ているだけで本人ではないのだから、蘭もその方がありがたい。気軽に声をかけられ返事ができる相手を得られただけでも喜ばしかった。しかし随分と大変な役目を負っているのだと心配されている素振りが見え、いったいユージンはどんな説明をしたのかと首を傾げるような場面も多々ある。

さすがに一台の乗り合いに二人だけの為、ひどくがらんとした印象がした。たとえ外にいる御者が加わったとしても変わりもないように思え、これだけ広い乗り物で移動ができるのだと喜ぶべきかと前向きに捉えてみる。

蘭は壁に寄りかかれる位置のベンチに腰かけており、疲れれば体を預けてみたりしていた。セルアは床へ直接座る方が楽なようで、布を敷き寝転がっている。

乗り合いは二人の御者が交代しながら砂漠を進むのであり、蘭とセルアはわずかな休憩以外は籠もりきりなのだ。揺れと共にうまく過ぎし続ける事が重要だった。

砂地の凹凸に合わせてがたがたと荷台が鳴る音を聞きながら、蘭は問う。

「ねえ、どうしてアンヘリカに行くの？」

昨夜はセルアについて話していたはずが、何故かアンヘリカ行きが決まってしまったのだ。その理由を蘭はまだ聞いていない。

「別にアンヘリカに特別な用事があるってわけではねえな」

セルアは体を起こしこちらへやって来ると、蘭の正面のベンチに腰かける。

「用事がないのに行くの？」

「用事はないが、お前はアンヘリカに歓迎されるだろう？ それはウィルナにとってもいい事だ」

「わたしが？」

意味がわからないと首を捻る蘭へ、セルアは続ける。

「普通ならこんな風に突然アンヘリカへ向かうなんてあり得ねえんだよ。お互いに日時を決めて会うのが普通だ。だが、クロードが前を連れて行った件と板を読んだおかげで、自由に行き来ができるようになった。あくまで、お前がいればの話だが」

本来なら日時を決めて会うというのは、おそらく国としての事なのだろう。そして、蘭がアンヘリカに歓迎されるというのも納得できる。アンヘリカからウィルナへ戻る際に、マルタが蘭ならばいつ来ても構わないと言っていたのだ。そして、クロードも昨日似た内容を口にしていたのを思い出す。

しかし、一つ解消されない疑問があった。

「昨日はセルアの話をしていたのにこの事が決まったじゃない。どうして？」

ユージィンはセルアがその姿でいるのならアンヘリカへ行ってもらうと言ったのだ。蘭が自由に出入りできるのとは別の理由がある

のは間違いない。

セルアは何も答えずに眉を寄せるだけであり、どこか困っているようにすら見える。

「もしかして凄く難しい問題でもあるの？」

こちらとしては純粹な疑問を抱いているだけなのだが、あまりにも反応が悪いのだ。二人は蘭に必要な情報を与えないという節が見られる為に、望めない理由があるのかと思ってしまう。

するとセルアは随分と力のない笑みと共に口を開く。

「いや……単に俺が魔力を使えるようになったからだ。深く気にする必要なんてねえよ」

「使えるようになった？」

ユージィンはウィルナとアンヘリカを三日で往復しろと言っていた。だが、セルアはウィルナからアンヘリカへの片道で魔力を使い果たし、その力がまだ戻っていないはずなのだ。

何かがおかしいと気付けば、セルアは今度こそはっきりとした笑みを浮かべる。

「この姿の俺は三日で往復するくらい、余裕だ」

「余裕？」

「ああ。俺が姿を変えている理由は余分な魔力を消費する為だからな」

「余分な魔力？」

「そうだ、俺は体を十二歳に保つ為に魔力のほとんどを使っている状態だった。だから、あの時は足りなくなった。今の姿になっていたのなら問題なんてなかったんだよ」

蘭の髪を長くした際に、セルアは国一番の使い手だと聞かされた。髪の毛とは似ても似つかない糸を本物そっくりにしてしまったのだから、蘭は素直にそうなのだろうと思っていた。

しかし、今のセルアの口ぶりではそれすらも些細な力という事になる。そして、何故常に大人の姿でいないのかが不思議にも感じられる。

「それは必要だから小さくしていたって事だよね？」

思い返すとユージンはセルアを随分と小さくしたがつていた。意味があるのではないのかと蘭は聞いたのだが、セルアは大した事ではないと否定する。

「あの姿自体はどうでもいいんだ。俺が魔力をうまく使いこなせなかった頃の名残だからな。少し多めに使う必要はあるが、気にしなくていい」

「本当に？ 多めに使う必要があるって、使わないと困るって事なんでしょう？」

念の為にもう一度聞き返してみると、どこか嫌がるような素振りが見えた。

「本当だ。確かにあまり多くなると制御しづらくなるが、そうならないように使うんだから問題ねえよ」

最後に笑ったセルアを信じるしかないのだろう。だがユージンの過剰な反応が気にならなくもない。

（何があるんだろう？）

この様子でははつきり教えては貰えないらしいと、とにかく念を押すように告げる。

「信用するからね」

「ああ、信用しとけ」

迷いの感じられない返答に、今度こそ蘭は頷いた。

先程までの話は終わり、蘭は更に別の質問をするべきか悩んでいた。実は少々気にかかっている事があるのだ。

しかし気軽に聞くべき内容とも思えず、やはり止めるべきかと視線を隣へ向ける。

今セルアは何故か先程よりも近くにおり、二人で並んで腰かける状況になってしまっていた。

それなりに広い空間なのだからここまで近くにいらなくても良いの

ではないかと言うと、別に構わないだろうと一蹴されてしまう。

俺がいたいんだからいいだろう、という事らしい。

確かに側にいるだけなら構わないはずなのだが妙な感じはする。肩が触れそうな程近くにいるのもすっかり日常的になっていたはずだった。しかし、それはセルアが少年だった時のものだ。

まだこの姿には慣れず、蘭は落ち着かない。

もしかするとセルアはわざと蘭の側にいるのかもしれない。

どうも面白がっているような節が見られるのだ。

ベンチは幾つか並んでおり、セルアは前にあるそれに足を乗せてくつろいでいた。行儀が悪いとも思ったが、セルアは常々こんな様子であり大きさは違えどやはり同一人物なのだと思い知らされる。

(セルアなんだよね)

子供と思っていたが、やはり大人なのだ。ややこしさに頭を悩ませながら、蘭は気になっていった質問を思い切って口にする事に決める。

「ねえ、セルア……？」

「ん？　なんだ」

こちらへ顔を向けもせずに応じる姿もやはり見慣れたものであり、興味を引かぬ限り会話はそのまま続けられるはずなのだ。

「町で声をかけて来た女の人ってさ、何？」

するとセルアは蘭としっかり視線を合わせ口端を上げた。

「気になんのか？」

どうやら聞かれて悪い気はしないらしい反応に、蘭はどうしたのかと考える。

この乗り合いを使う為に、蘭とセルアはウィルナの町を徒歩で移動した。乗り合い場と呼ばれる発着所からのみ出発するのであり、必要な行動だった。目的地は違えど行為自体は普段二人で街へ出る時と変わらない。

今回違ったのはセルアが大きくなっている点だ。今まで態度はそれらしくないものの十二歳のセルアと出歩いていたのだから、周り

の反応ももちろんその姿にふさわしいものだった。

当然、二十七歳のセルアと並んで町を歩けば様子は違ってくる。

今回は買い物をするわけでもなくただ歩いているというのに、やたらと女性に話しかけられた。

その女性達は皆、美しく艶っぽい。あら、久しぶりね。最近は来てくれないんだねえ。等、その言葉の端々から色々と関係のある人達であるとはわかったのだが、どうにも人数が多かった。

気にせずにいようとしていたが興味は沸いてしまう。その中の一人に今日は珍しい子を連れていても言われた為、そちらも気にかかっていた。

無粋な気もしたが、どうやらセルアは蘭を気に入ってくれているようなのだ。ならば知っておいても構わないのではと思ったのも確かだった。しかし、少し卑怯な気がするとも蘭は思っている。自分が相手を好きなわけでもないのに、相手に好かれているようだからと色々聞こうとしているのだ。

「ちょっと、ね」

遠慮がちに言葉を返せば、セルアは特に気にする事もないらしく意地悪そうに笑って答える。

「たぶん、お前が考えてるので正解だと思うぞ」

はっきりと言わないのは言いづらいのではなく、表情を見る限り面白がっているらしい。

これはこれで蘭は反応に困ってしまう。

（随分数が多かったけれど、まあ人それぞれよね。わたし的にはないけど）

そういった考え方もあるのだろうとは思うのだが、蘭には理解し難いものだ。そもそも本当にこちらの考えが当たっているのかもわかりはしない。クロードとの会話を思い返しても似たような部分があり、この世界では固定の伴侶と連れ添いはしないのかとすら考えた。

「そっか」

これ以上突っ込んで聞くのも気が乗らず、蘭は納得したふりをする。それに気付いたのかどうか、セルアは会話を続けた。

「俺は常にこの姿でいられるわけじゃねえ。特定の誰かというわけにはいかない」

セルアは特に気にする素振りもなく言ったようなのだが、内容は深いのではないかと蘭は思う。

「特定……の人？」

ゆっくりと聞いた蘭に、セルアは頷いてみせる。

「誰も十二の俺と今の俺が同じだなんて知らねえよ。いや、知られるわけにはいかないとこだな。俺が王宮にいる事だって知らねえはずだ。この格好だから話しかけて来たんだよ」

何を言っているのか困っている蘭に、セルアは気付いているのかもわからぬまま続けた。

「俺は月に一度か二度こっちになるくらいだからな。その期間もせいぜい一日、二日。はつきりと両方の俺を認識してるのは、ユージンとハンナとお前ってとこか、今はいないが姫の方のランもだな。まあ、他にも何人か城にはいるが詳しくはない」

その口ぶりに疑問が浮かんだ。

「知られちゃいけないの？」

蘭はセルアの姿が変化したのを、この世界の常識だと思い受け入れた。しかし話を聞く限りでは違っているように感じられたのだ。

「……ん、ああ、なんだ」

珍しく言いよんだセルアが、随分と間を空けた後に答える。

「知らない方が良い事もあるってこった」

「そう、なんだ」

よくはわからないが理由があるらしいと、蘭は納得する事にした。おそらく知る必要はないという意味なのだろう。

「それに、この年で何もしないでいるのもつまんねえしな」

あまり触れられたくない内容だったのかセルアが話題を元に戻したが、蘭は自分から聞いたのにも関わらず嫌悪を示す。

「その話はもういいよ、そこは個人の自由でいいでしょ？ 聞いたわたしが悪かったわ」

「でも気になったから、聞いたんじゃないかねえのか？」

「それは、そうだけど……」

改めて言われると返答に困ると思いながら蘭が呟けば、セルアは笑みを浮かべ顔を近づけ耳元で囁く。

「実際にお前を気に入ってると言いながら、他の女のところにいったら嫌なんだろう？」

ぞわりとする感覚に蘭は慌てて反対側へ首を傾け、セルアは満足げに笑ってみせる。

難しい質問だった。確かに自分を気にかけていると言う相手が他の女性の所へ行くというのは気分が悪い。しかし、今の蘭は止められる立場なのだろうか、とも思うのだ。

よく考えて、口にしてみた。

「そうは思うけど、わたし達は別に恋人とかではないわけだし、わたしにセルアを止める権利はないと思うよ？」

「そう言われると、こっちが面白くねえ。してたらしてたで、ないなとか思うんじゃないかねえのか」

不機嫌そうな表情を見せたセルアに、蘭は更に困ってしまう。確かにそんな事をしている相手を選ぶだろうか？ よほど相手に惹かれればあるのかもしれないが、今の気持ちでは確かにないと思った。「確かに嫌かもしれないわ。でも、それはそうなった場合の話でしょ？ わたしとしてはセルアとクロードのどっちともどうにかなる気はないし」

それよりも帰らなければならないのであり、蘭にとっては不要な議題とも言える。

するとセルアは一瞬眉を潜めたが、すぐにいつものように髪をかき上げる仕草を見せ笑った。

「まあここは、俺がどうしたいかだな。お前は気にするところじゃない」

「そうなるのかな？」

「とにかく今まではそうだったってこった。どうせ俺はお前がここに来てから昨日まで遊びには行けねえ姿だったし、これから行く予定もない。それでいいだろ」

「ふうん」

あっさりと返答した蘭へ、セルアは随分とわざとらしい溜め息をこぼす。

「もう少し、良かったとか安心したとかみたいな反応を寄こせよ」

「何よそれ。お前は気にするところじゃねえと言ったばかりでしょ？ 押し付けられたって困るし、わたしは帰る方法が知りたいの」

「仕方ねえな、確かにお前の状況じゃあそうなるだろうからな」

そう言いながら、蘭の腕を掴むセルアに視線を向ける。

「何？」

「別に何でもねえよ。構わないだろ？」

「それはそうだけど」

思い返してみるとセルアはよく腕を掴んで来る。昨日この姿になってからはやたらと側に来るようにはなったが、それ以前から腕を掴む仕草は多い。町へ出る時などははぐれないという目的があると思っていたのだが、どうやら違うようにも感じられた。

（癖なのかな？）

そう思いながら蘭はされるがまま隣にいる事に決める。姿が変わり落ちつかなくはあるが、確実に自分を守ってくれるだろうという安心感はあるのだ。

（無理に何かをするはずはないだろうし）

そうして二人で他愛もない会話をしつつ、アンヘリカまでの道程を過ごし始めた。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（二）

「ラン、よく来てくれたね！」

アンヘリカへ着いた蘭は、歓迎するマルタに抱き締められていた。相当喜ばれている事はわかるのだが、少々苦しい程だ。

この様子はクロードやハンナにもよく似ており、どうやら親しい間柄では当たり前の行動なのだろうと改めて認識する。

（難しいなあ）

しかしクロードには止めさせろとセルアは言っており、正解は見えない。

「う……ん、お久し、ぶり」

何とか声を出しつつも、熱烈な歓迎に困っている蘭の姿を見かねてセルアが止めに入る。

「おい、こいつが苦しがってる。そろそろ離せ」

マルタはアンヘリカの代表であり、ウィルナとの関係には欠かさない存在である。真っ先に足を向けるべきだと宿を目指し、扉を開けるとすぐに会おう事ができた。

「悪かったよ、また来てくれたのが嬉しくてね」

マルタは申しわけないと言いつつ蘭を解放し、すぐに隣へ視線を移す。

「今日はこの間の二人じゃないんだね」

蘭の側に立つセルアは背の高い大人の姿だ。どう考えても前回来た人物に見えるはずがない。

乗り合いの中でセルアは自身の見た目が変わると知られる事を、あまり良いとは言っていないかった。この場合はどうするのかと思えば、セルアがマルタと蘭だけに聞こえるように小声で告げた。

「この姿では初めてだが前回も来たセルアだ。金色と言えば、わかるだろう？」

金色という単語にマルタがはっと息を飲み、鋭い目付きでセルア

を見上げる。

「……あんたが？」

驚いているらしいマルタに対し、セルアは表情を一切変えずに続けた。

「こいつの同行者として来ているだけだ。今夜はここへ宿泊させてもらいたい」

一日だけの滞在にはなるが、今回もマルタやクロード達のいる宿に泊めて貰おうと予定はしていた。他にも宿はあるらしいが、何かと都合が良いとユージンに念を押されたのだ。

蘭としてはそれで構わなかったのだが、セルアはクロードがいる為か不服そうに反論をしていた。しかし、ユージンは全く受け入れる姿勢を見せなかった。

現在も泊まりたいと口にはしているがあまり乗り気に見えないセルアへ、マルタの視線は突き刺さるように向けられている。

（どうしたんだろ？）

金色の意味は蘭には全くわからず、何故こうした反応をマルタが見せたのかもわかりはしない。

だが、それもわずかな時間であり表情はすぐに笑みへと戻った。

「まあ構わないさ、こうしてランを連れて来てくれた。それだけでもあたしはあんたを歓迎するよ。もちろん、町の誰もが同じ事を言うはずだ」

そしてそのままランとセルアを二階へ来るよう促した。二人は素直に従い二階の一室に入る。

「今日はこの部屋と、隣を使っとくれ」

「ありがとうございます」

「何かあるんだろ？」

室内へ入った蘭は開けた扉の側に立つマルタへ礼を述べたのだが、セルアの発言は違ったものだ。どうしたのかと思うと、マルタが一步室内へ入り扉を閉め三人が立ったまま向かい合う形になった。

「わかってたかい？ どうやらうちのクロードが何か迷惑をかけた

みたいだったから、一言謝りたくてね」

クロードが屋敷に入ろうとした事を言ったのかと、蘭は訝しがる。マルタはウィルナへ呼ばれはしているが、詳しい事情を説明されてはいないはずだった。

「どういう事だ？」

セルアも同じだったらしく不思議そうに告げると、マルタは首を大きく横へ振り否定する。

「あの子が何かを言ったわけではないよ。ただ、あんたらと一緒にウィルナに行って帰って来ると様子が変わってたからね。何かあったんだろうと思ったただだよ。それと共に城へも呼ばれた、おかしい事態に感じたのさ」

あくまでマルタの推測らしいと思いながらも、セルアはどう答えるのかと蘭は目を向ける。

「確かにあったが、詳しく言うつもりはない」

「あたしもそれで構わないよ、おそらく聞かない方が身の為だろうしね。ユージンが含みのある口ぶりだったし、恐ろしくて仕方がない」

「わかってるならいい、こっちとしてはユージンが聞いていたおかげで助かった部分もあった」

「それはこっちが助かったって事だろうね。ランがこうして来てくれたんだから」

マルタに笑みを向けられるが、話の掴めない蘭は二人を交互に見比べるばかりだ。何やらユージンが聞いていた事があったようなのだが、何を示しているものなのか見当もつかない。

「あの子が変わるきっかけを与えてくれたのなら、感謝しなければならぬよ。ありがとう」

笑みを潜めたマルタは、真剣な顔でそう言うのと部屋から出て行った。

「どういう事？」

今までの会話の疑問を聞かぬわけにもいかないと蘭は見上げる。

するとセルアは少し困惑した表情を見せたが、髪に片手を突っ込みながら仕方なさそうに話す。

「クロードがお前のところに来るかもしれないねえってのは、マルタに言われてたらしい」

「そうなの？」

ならば教えてくれても良かったのではないだろうか。来る事も屋敷へ入れない事も知っていたならば、ああした事態にはならず済んだのだ。

「確実ではないが可能性はあるって言われたみてえだな。直接聞いたのはユージンだから俺も詳しくは知らねえよ。んで、なんでマルタが感謝してんのかもわかんねえな」

「そっか」

アンヘリカにいる間、ユージンは蘭をクロードと二人きりにする事を相当嫌がっている様子だった。もしかすると、マルタの言葉があつたからかもしれない。

気を使いわないでいてくれたのだろうかと思っていると、わずかばかりだが持ち込んだ荷物を部屋の隅に置いたセルアが告げる。

「その事はもう気にすんな。でも、あいつには気を抜くなよ」

「わかりやすい忠告だね」

笑った蘭へ、セルアは声を荒げた。

「俺はまだあいつを信用してねえんだ、お前だって気をつけとけ」

「もう、大丈夫だと思うよ？」

「だいたいんだがな」

溜息をつくセルアは蘭の側へ戻ると、強引に手首を掴み室外を目指し歩き始める。

二人が一階へ降りると、マルタは客の相手をしたりと忙しそうだった。それでも蘭とセルアの姿を見れば、夕食時にはたっぷりもてなすからねと声をかけてくれる。

二人はそれに応えようと外へ出た。ウィルナとは違いアンヘリカは直接日差しが当たる為、慣れていない蘭は肌に痛みを覚える。先程まではコートを羽織っていた為に気にならなかったのかと、改めて魔力に守られないという意味を感じた。

「ああ、ここは焼けんだったな」

一歩前に行くセルアは眩しそうに空を見上げると振り返る。向かい合わせになり手をかざし、蘭が手のひらを見上げる格好になった。「何？」

「ちょっと待ってろ、さすがに焼けた肌で代理はさせらんねえ」

セルアは特に何を言うわけでもなく、手をかざしているだけだ。

それなのに何故か今まで受けていた日差しの感覚が薄くなる。ウィルナにいる時に近い体感になった事に蘭は驚く。

「これも術？」

そうなのだろうと思いついてみれば、セルアは手を下ろすと蘭の手首を掴み歩き出す。

「ああ、これなら焼けねえ。さて、行くか」

「どこに？」

突然の動きに戸惑いながらも、蘭は追いかけるように足を進める。この姿のセルアの歩みは早く、こちらが少し早足にならなければ付いてはいけない。

「適当に決まってるだろ」

「適当？」

「アンヘリカがどんなもんか見て歩きゃいいだろう」

ぐいぐいと腕を引くセルアに、さすがに無理だと声を荒げた。

「ねえ！ もう少しゆっくりは無理なの？」

するとセルアが突然立ち止まり、今度はぶつかりそうになった蘭が慌てて歩みを止める。

「悪い、こっちで歩くのは慣れてねえんだ。普通のつもりだったんだがな」

振り返った表情を見るに随分申しわけないと感じているようにも

思え驚けば、セルアの体は蘭の隣に並ぶ。そしてこちらをしばらく眺めると、急ぐ必要のない速さで歩き始めた。

「セルア、術ってどうやって使ってるの？」

引かれずに動けるようになった蘭は、ようやく話す余裕もできたとセルアに聞く。

以前から術を使う際に何かをしているような素振りはあるのだが、特に言葉を発するわけでもなく目に見えるものもない。ただただ不思議な現象と感じるばかりであり、たった今体感したからこそ疑問をぶつけた。

セルアは本当にアンヘリカを眺める事を目的としていたらしく、様々な方向へ目を向けながらも返事だけは寄こす。

「意思の力ってどこか。別にはっきりとした使い方があってわけでもねえな」

すると今度は空いた片手をひらひらと見せながらこちらを向いた。

「まあ、大概の奴は手から力を出す事を考えながら使ってるはずだ。したい事を思い浮かべながら集中すればいい。後は慣れだ慣れ」

「何か言ったりとかはしないの？」

「ああ？ 使い始めの頃は、動け、光れと、したい事を言ったりもするが、そこを過ぎれば必要ない。お前だって何かをする時にわざわざ言ったりしないだろう？」

確かに自分が行動する内容を口にする事など滅多にない。例外は説明をする相手がいる時ぐらいだろうか？と頭を悩ませながらも、使える者にとっては当たり前の行為なのだから術も同じかと納得する事に決める。

「そっか。わたしには見えないし不思議なんだよね」

「俺達は生まれた時から接して気になんねえのかもな。術なしの生活なんて知らねえし」

魔法のようなものが当たり前だという感覚は、蘭には不思議だった。だが、術がなければ生活できない土地だというのだから仕方がない。

（必要だから存在しているのかしら？）

蘭はそう考えながらもセルアと共に町の中を歩く。

アンヘリカの中で蘭の顔は知られたもので、歩いていると度々声をかけられた。その中には前回宿で見た人もいれば、見知らぬ顔もある。アンヘリカの意志が読める人物として町中の人が集まっていたはずなのだが、あまりにも数が多かった為に覚え切れなかった部分があるのかもしれない。

ほとんどが歓迎とクロードが喜ぶという話であり、蘭は適当に返事をしつつ町中を周っていく。

ウィルナ側とシェラルド側の二箇所に入り口を持つここは、中央付近が大きな広場となっており、更に奥まった木々の中にたくさんの墓石がある。前回もそこに目を引かれたが、さすがにクロードへ聞く事はできなかった。

「気になんのか？」

目を向けていた事に気付いたセルアが静かに声をかけて来る。アンヘリカの人々がいる中、そう大声で話せる内容でもない。蘭も同じようにして答える。

「うん、なんていうかアンヘリカの人口に対して多過ぎるっていうか」

「そりゃそうだろう、ここはウィルナとシェラルドに挟まれて散々荒らされて来たんだ。増えては減りの繰り返しの結果があれだ」

耳にただけで実際の状況はわからないが、ここが二国の戦いにさらされたという事はわかってる。しかし、実感が湧くまでには至らない。

そういう事があったらしい、という知識のみだった。

「……そうだよね」

おそらくウィルナにも墓地は存在しているのだろうが、蘭は全ての場所を巡っていない。開かれている街や乗り合い場へ向かう道を知っているだけであり、これ以上のものが向こうにはあるのかもしれない。

「俺だってあれに関わってる一人だ、好きでじゃねえがな」

ふと零されたセルアの呟きに蘭が見上げると、暗く自嘲するような笑みが浮かんだ。

「この前ユージンが俺達は戦いを知らないと言ったが、本当の俺は戦いを知っている、が正解だ」

前回アンヘリカへ来た時のセルアは十二歳だった。蘭はそれが真実だと思っていたのだから、ユージンは嘘を付いたのだろう。何も知らない状態で事実を告げられても信じる事はできなかったはずだ。

「この奴らはほとんどが被害者だ。思い出させるような事を言う必要もねえ。お前も気にせずにいた方がいい」

迂闊な事を聞いてセルアにも嫌な思いをさせてしまったのだろうかと思っていると、強く腕を引っ張られた。

「気にするなって言っただろうが。今の事じゃねえ、知らない過去にお前が捕われる必要はない」

「う……ん」

「辛気臭い場所にるのが悪りいのかもな、行くぞ」

腕を引かれ前回はたどり着く事の叶わなかったシェラルド側の入り口へ足を向けようとすれば、今まで見ていた墓地の奥から見知った顔が現れる。

おそらく乗り合いから降り、そのまま向かったのであろう。厚いコートを羽織り手荷物を持ったままでクロードが歩いて来たのだ。蘭とセルアが出発する前日に発ったのだから、同じく今日到着しているはずだった。

向こうもこちらに気付いたらしい、一瞬動きが止まったがすぐに駆け出して来る。

「ラン！」

満面の笑みで近づいて来ると荷物を地面へ放り投げ、いつも通りに両腕を開く動作が見えた。しかしそれは、蘭の隣に立つセルアが腕を引き位置をずらしたせいで未遂に終わる。

準備していた腕を持て余す事となったクロードは、蘭の隣に立つセルアを見て訝しげな表情を浮かべた。

「なんで邪魔するんだよ！　　というか、誰？」

前半はセルアを、後半は蘭を見ての言葉だ。

蘭は腕を引かれると同時に腰に手を回され、セルアに抱き寄せられる格好になっていた。クロードの熱烈な抱擁にも困った事だろうが、今の状況にも少々戸惑う。

まるで俺のものだとしても言いそうな現状からどうにか抜け出ようとがいてはみたが、セルアの腕が弱まる気配はない。一昨昨日の口ぶりを思い返せば、クロードが抱きつこうとしたのが面白くなかったのだらうとは理解できた。

「えっと、ね」

どう説明したものかと助けを求めるようにセルアを見上げると、どうやら汲み取ってくれたらしく頷きを返される。任せて構わないのだと蘭は安堵したのだが、セルアは自信たっぷりの笑みと共にクロードを見つめるとあまりにも説明不足な言葉を投げつけた。

「セルアだ」

名を告げるだけですぐに真実へたどり着けるとは思えない。クロードが何とも表現しがたい複雑な表情でセルアを眺め続けるのは当然だろう。

丁度背丈が同じくらいの二人が向かい合うが、じっとセルアの顔を見つめるクロードはそうだとも違うとも言えずにいるようだった。年齢は違っているが、よく見るとそこかしこに見知った面影を感じられるはずなのだ。

「この姿では初めまして、だな」

どこか楽しそうな声のセルアは、蘭の頭に自分の顎を乗せてくる。それを見たクロードは顔をしかめ睨み付けた。

「ランを離せよ」

「やなこった」

くつくつと笑う声がセルアの顎から蘭の頭へ直接響いて来る。そ

の振動がどうにもむず痒く頭を動かそうとしていると、クロードがセルアの腕を掴み引っ張る。

「離せ！」

「離すかよ」

公衆の面前で何故か一人に抱き寄せられ、もう一方がその男を引き剥がそうとしている図はどのようなのだろうか。遠目からこちらを眺めている人々の興味深そうな姿を認めた蘭は、このままでは延々と続きそうだと声を上げる。

「セルア、離して」

「なんでだよ」

心底不服そうな声が聞こえてくるが、ただクロードと遭遇しただけではないかと蘭は再度告げる。

「いいから、離して。普通にしていればいいでしょ？」

すると蘭の体は自由を許されるが、右腕だけはセルアに掴まれたままだった。これはウィルナの街へ出る際と変わらぬものであり気には止めない。

このやり取りから得るものがあったのか、クロードがセルアではなく蘭に視線を向ける。

「本当にセルアって事？」

目を丸くしている姿から、やはり簡単に真実とは捉えられないかと思いつつ蘭は肯定した。

「そうだよ」

どう説明すべきかが難しい為に簡潔に答えれば、クロードは再びセルアをじっくり眺め始める。そして全身を見つめていた瞳は何故か、急に髪で止まってしまったのだ。

「金……色？」

先程セルアがマルタへ言ったのと同じ金色という言葉を発したクロードは、目を見開き食い入るように見つめ続ける。

するとセルアは口端を上げ、目を細めた。

「察しがいいじゃねえか」

「それしか……思いつかない」

どこか放心したようなクロードにセルアは続ける。

「まあ、そうだろうな。今日はこいつを連れて来たただけだ、驚くより感謝しやがれ。俺達は町を周る、お前んとこに泊まる事になるからな」

偉そうに告げるとセルアは腕を引いて歩き出し、蘭は足を進めながらクロードを振り返る。

何を考えているのかぼんやりとセルアを追っていた瞳が蘭に戻ると、クロードは荷物を拾い上げ慌てて走り出した。

「オレも一緒に行く!」

蘭は金色が何の意味を持っているのか不思議だった。確かにセルアの髪は金色であるが、特に珍しいものでもないはずなのだ。ウィルナにもアンヘリカにも金髪の者はおり、セルアと同じように浅黒い肌という組み合わせもよく見かけている。

しかしマルタもクロードも金色と聞くと驚き、食い入るようにセルアを見つめていた。セルアの姿が大きくなった事と金色に繋がりがあるようにも思え、それを聞きたいのだがどうにも今は無理らしい。

蘭は右腕をセルアに掴まれ、左手はクロードが繋いでいる。二人に挟まれつつ歩くという妙な状態な上、不毛な会話が繰り返されていた。

「セルアが離せばいいんだよ!」

「なんでだ、俺はこいつをここへ連れて来て確実に連れ帰る義務がある。理由があるだろうが」

どちらか一方がいれば良いとお互いに主張しており、一向に答えの出る気配はない。

蘭は何度もお願いだから離して欲しいと訴え、三人一緒でも構わないだろうと意見している。しかしその時ばかりは二人は見事に同

調してしまうのだ。

「絶対に嫌だ！」

「俺だけでじゅうぶんだろう？」

溜息ばかりがこぼれる蘭は、ひたすらに疲ればかりを感じ続けている。

「ウィルナにいれば一緒にいれるんだから、アンヘリカにいる時くらい離せ」

クロードが蘭の手を引けば、今度はセルアが逆に引く。

「お前はウィルナにいる時にもべたべたしてんじゃねえか」

「それはそれ！」

どちらも譲らずにこの調子で話が続いているのだ。前に進む速度も遅く痛い程ではないが左右へ何度も体を揺らされ続けている蘭は、ただただ本音を漏らす。

「疲れる……」

そうすると二人は過敏に反応する。

「どっちが？」

「どっちだ？」

それすらでも優越を付けたいのだろうか、蘭は両手が使えない状態ながらも頭を抱えたくなった。

「どっちもだよ」

すると再び言い合いが始まるのであり、蘭は二人に捕らわれたままの移動を強要される事になる。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（三）

「お姉ちゃん、つまんないね」

「そうだね。じゃあ、何か違う事しよっか」

周りにいる子供達に訴えられた蘭は笑みを浮かべた。まったく役に立つ気配のない男共など放っておくべきだと、内心で毒づきながらも頭を悩ませる。

蘭とセルアとクロードは、あのままの状態でアンヘリカ内を見て周っていた。そうして無事に一周するあたりで、宿で暮らす子供達に遭遇したのだ。

どうやら帰って来たクロードと遊ぶ約束をしていたらしく、あっという間に囲まれ全員で宿へ戻る事になった。

しかしクロードは土産を渡すと、今日は遊べないと言い出した。理由は蘭が来ている為だという。もちろん、子供達は納得しない。蘭が遊んであげればいいと言えば、クロードは面白くないと不満を漏らす。

先程はセルアとクロードであったが、今度は子供達とクロードに挟まれる格好に蘭はなってしまったのだ。そうしたやり取りを繰り返した結果、全員でできる事をしようと今に至っている。

クロードは元より子供達と遊んだりしているらしく、蘭と一緒に構わないと嬉々として説明すらもしてくれた。しかしセルアは相嫌がり、無理やりに引っ張り込んだ。

どうやら蘭から目を離すのも避けたいらしく、適当にしかやらねえと零しながら渋々頷いていた。

この世界にも多少ルールは違うが影踏みのようなものがあるらしく、それを全員で興じているはずだった。

しかし、その中に程良く混じるはずだったセルアとクロードが今、真剣に追いかけている。

五回影を踏まれた人に罰ゲーム的な事をしようと誰かが提案し、

そうやってふざけるのもいいだろうと話は決まった。あまり無茶な事はせず楽しめる範囲でと考えていたにも関わらず、どうやらそれが失敗だったらしい。

鬼となったクロードがセルアを追いかけ始め、何とか影を踏むと今度はセルアがクロードを追いかける。

完全に二人の世界になってしまっていた。

お互いに罰ゲームをさせてやろうと、追いかけて回している姿は情けない事この上ない。

(どうせ罰ゲームなんて大したものでもないのに)

そう思いながら蘭は、する事のなくなってしまう子供達と一緒に地面へ座り込んだ。

「お姉ちゃんは絵描ける？」

「んー、ちょっと苦手かな」

「なら僕が描く」

一人の少年が木の枝を手にとると、僕も私もと砂地に絵を描いて見せる子供達に蘭は笑みで接する。一人一人の個性的な絵に感想を言いつつ、蘭もちょっとした物を描きながら過ごす事に決めた。

子供達は皆十歳前後であり身寄りのない者同士が集まってあの宿に暮らしている事を考えると、この子達の親は亡くなっているのだろう。そして、ある程度の年齢より下の子供がいないのは丁度戦いがなくなった時期に当たるようだ。

おそらく、クロードもその一人なのだろう。

この世界は蘭の知るものとはやはり違う。現在は落ち着いているようだが、まだそこかしこに戦いの後が残っているのではないだろうか。

(やっぱり知らない場所なんだよね)

考えながらぼんやりしていると、子供達に話しかけられる。

「お姉ちゃんはウィルナの人だね？ マルタが言ってた」

蘭はそのまま頷いても良かったのだが、真実を込めた。

「今はウィルナにいるけど、本当は違う所にいたんだよ」

「じゃあ、シェラルド？」

「ううん、どっちでもないの。アンヘリカでもない、みんなが知らない所」

子供達は不思議そうに首を傾げている。ウィルナ、アンヘリカ、シェラルド以外の場所など本当にあるのかと思っっているようだ。時折小声で何かを伝え合ったりもしている為、何か思うところはあらしい。

それでも否定は返されず、疑問だけがぶつけられる。

「じゃあ。いつかは帰っちゃうの？」

「そうなるかな」

帰る為の何かを手に入れたいからこそ、蘭はここにいるとも言えた。今回はセルアがアンヘリカへ向かうきっかけにはなったが、この土地が何かを与えてくれる可能性は高いとも思えるのだ。その為には様々なものを知る機会を逃してはならない。

「それじゃクロードが泣いちゃうよ」

蘭がやってきたのはクロードが原因だと理解しているからこそ、幾人もが同意をする。子供達はさらわれたという事実を知らぬままに、クロード寄りの意見を素直に告げてきた。

「そう？」

「そうだよ。ずっといたらいいのに、私達もお姉ちゃんがいた方がいいよ。楽しいもん」

少女が側に来て微笑む姿に蘭も思わずつられてしまう。前回と今回、たった二度会っただけにも関わらずこんな事を言ってくれるのは本当に嬉しいものだ。

「ありがとう、わたしも楽しいよ」

蘭はどうして自分がこうも簡単に受け入れられているのかと、深くも考えずに会話を続けていた。はつきりとした理由があった事を、すっかり失念していたのだ。

一人の少女が随分と熱のこもった視線をぶつけてくる事に気付き、蘭は聞く。

「どうしたの？」

「お姉ちゃんはアンヘリカの意志が読めるんでしょ？ それってすごい事だし、町を救ってくれるんだよね？」

ふと向けられた期待の眼差しは、よく見ると全員が当然のように持っているものだった。あの板を読めたのだから蘭は何かをするのだらうと、無言で訴える様子にわずかな恐れが生まれたようにも思える。

（だって……マルタ達もあんなに喜んでいたもの）

そうした年長者を見ている子供達が蘭へ期待を抱くのは当然なのだろうが、どうしても受け止めきれないものがあつた。

「できる事はするよ。でも、凄い事はできないかもしれないな」

救うとも救わないとも曖昧な返事にはなったが、蘭がアンヘリカの意志を読めるからこそセルアもこうしてやってこれるのだ。

（それがウィルナの為にもなるんだし、姫様にも繋がるのかもしれない）

否定だけはしてはならないと無理やりにでも笑みを作り出し、蘭は子供達との会話に努める。

「こうして遊べるのもその一つだよね？」

誤魔化すように現状へ話を逸らせば、素直に流れは変わり始めた。

「そうだね。お姉ちゃんと遊べるのもいい事だもん」

「明日は帰っちゃうんだよね？ またすぐにきてくれるといいな」

決して板を読んだだけではなく、自身も受け入れられているのだと思ひ込もうとしながら蘭は子供達との時間を過ごし続ける。ただ、アンヘリカの意志という期待が込められている事実が拭われる事はなかった。

酒の入ったマルタは上機嫌に笑い声を上げ、セルアとクロードに言葉をかける。

「あんたら、馬鹿だねえ」

今は宿で夕食を食べており、食堂は大人達で賑わっていた。

あの後、すっかり熱中してしまった二人を置いて、蘭と子供達は先に宿へ戻り解散したのだ。蘭が夕食までは部屋でのんびり過ごそうと思っていたところへ、すぐにセルアとクロードが戻って来た。

なんでいなくなったんだよとクロードは言い、セルアは目の届かない所にいるかと告げたが、こちらが帰るのにも気付かず熱中していた二人の方がどうかと思いついてやった。

「子供達の事も忘れて二人で遊んでいるから、置いて来たんじゃない。わたしは別に一人で出歩いているわけでもなく宿にいたんだもの、問題ないでしょ？」

それには二人の言葉も詰まり、お互い気まずそうな視線を交わしていた。蘭はそれを見て散々笑い、二人は不機嫌そうながらも自分達の行動を思い返し恥じている様子だった。

昼間の出来事を子供達に聞いたらしいマルタは、二人を見るなり笑い出している。

どうも調理中から酒を煽っていたらしく、すっかりでき上がっていた。今は一つのテーブルを蘭、セルア、クロード、マルタで囲う形で座っている。

夕食に限り子供達は先に食事を済ませる形になっているようで姿は見えない。現在は酒が飲める者達の時間らしい。他の席も大いに賑わっている。

「よくもまあ二人で遊んだもんだね」

けらけらと笑い声を上げるマルタにクロードの頬が膨れた。

「もういいじゃん。次はこんな事しない」

「ああ、わかったよ。あんたもそうしな」

マルタはもちろんセルアに対しても散々笑っており、本人は不服そうにしている。

セルアは特に返事をするでもなく不機嫌そうに酒をあおるばかりだ。どうやらこの姿だと酒を飲むらしいと蘭が思っていれば、セルアに問われた。

「お前は飲まねえのか？」

蘭はアルコールの入っていない飲み物を手にしている。全く口にした事がないわけでもないが、飲んだと言える程の量を摂取した経験はない。

悪戯に手を出した一口二口の記憶ですら美味しいとは思えなかった為、蘭は首を横へ振る。

「いい、お酒は向いてないと思う。それにまだ飲めない年だし」

「子供はともかく、お前の年でも駄目なのか？」

大きなグラスで何杯か飲んでいるはずのセルアだが、顔色は普段と変わらず涼しいものだ。マルタのように上機嫌になるでもなく、淡々と飲み干してしまう。

「二十歳になってからって決まってる。国によって違うみたいだけどね」

何か果物のジュースでじゅうぶんだと、蘭はそれを口にする。

「国の数も多いのか？」

「ん、二百とかあるのかな？　よくわかんない。たくさんあるし覚えてられない」

簡単に答えて料理へ手を伸ばす。明日には帰ってしまうのだから今の内に美味しい物を食べておかねばと食は進んだ。

「色々話は聞いたが、いまいちわかんねえな。お前、国の事知らない過ぎじゃないか？」

以前から日本についてを聞かれ答えてはいたが、セルアやユージンがウィルナの事を知る程の知識を持ち合わせてはいなかった。これまでに国の行く末など気にした事はなく、蘭は己の無知に嫌でも気付かされる。

「でも、わたしみたいな人も多いと思うけどな」

「どこの話？」

そこへクロードが割って入ってくる。正面の席にいたのだが、わざわざ移動してきたらしい。クロードも普通に酒を飲んでおり、セルアの反応から考えても決まった年齢で飲む物ではないように見え

た。

ほんのりと赤くなった顔で、椅子へ腰かけた蘭の後ろから肩に触れてくる。

「ランって本当にこの人じゃないの？」

「そうだよ」

セルアとの会話を聞いていたのだろう。載せられた腕から逃れようとしながら答えると、隣にいるセルアがクロードの手を払いのける。

「離れろ」

「嫌だ」

今度は蘭の肩に両手を載せる格好になったクロードは、覗き込むようにこちらへ寂しげな表情を見せた。そして、セルアと会話をする気はないらしい。

「じゃあ、いつか帰っちゃう？」

「帰れる時がくれば、ね」

「じゃあその時は一緒に行ってもいい？」

クロードの言葉に蘭は目を瞬く。

方法はわからないがいつか帰れる時が来たならば、クロードが共に行く事は可能なのかと考えてみる。だが、答えが出るはずもない。どうやってここへ来たのかすらわからないのだ。

何より元の世界に連れて行ってもどうして良いのかわからないと現実的に考えてみる。別世界からやって来た人間ですと言って誰が信じるものか。自身は今、何故か受け入れられているが必ずしもそうなるとは思えない。

それよりも、本当に帰れるのだろうかと不安が蘇って来るばかりだった。

「勝手な事言ってんじゃねえよ」

「だって、ランがいなくなったら嫌だし」

黙り込んだ蘭の代わりにセルアが喋り、クロードが答える。その会話は煩わしい。本当に帰れるのかもわからないまま、更にもう一

人を加える事を考えても仕方がない。蘭は悩むのをやめようと頭を振る。

二人はけんけんごうごうと会話を続けていくが、今はその内容を余裕を持って聞き入れる事ができず蘭は声を荒げた。

「もう、いるならおとなしく隣に座って！ セルアも！」

これでは昼間と変わらないと溜め息をこぼせば、クロードはおとなしく隣に座る。その顔は明らかに不満そうだが、いちいち気に留めてもいられない。蘭は目の前の料理を取ると、会話などしたくはないと口に放り込んだ。

「最近のランはちよつと怖い気がする……」

「怒鳴るようになって来たな。まあ、お前が余計な事を言うからだろ？」

クロードの呟きにセルアが珍しく同意をしたが、後半の台詞が引っかかったのか再び騒がしい会話が再開される。

苛々とした蘭を挟んだ状態で悪いのはどちらかと言葉が飛び交っていく姿に、思わず口を開く。

「二人共がわたしに大きな声を出させてるんでしょ？」

答えなど出はしないと終わらせる為に蘭は告げたのだが、勢いは止まらない。

「これが嫌なら手を引け」

そうセルアが言えば、クロードも言い返す。

「そっちがやめればいい」

一向に終わる気配を見せない流れに疲れた表情を浮かべた蘭へ、マルタが声をかけて来る。

「随分と好かれているみたいだね」

「喜んでいいのかわからないわ」

正直に述べた蘭へ、セルアとクロードはまた不満の声を上げた。

散々食べて飲んだ翌朝、蘭とセルアはウィルナへ出発する。マル

タや子供達はまた遊びに来いと言い、クロードは数日後の来訪を口にしていた。

乗り合いに揺られながら蘭は隣にいるセルアに問う。

「楽しかったんだけど、これで良かったの？」

ただアンヘリカを見て、遊び、食べ、帰路に着く。本当にそれだけだった。

「いいんじゃないか？ 特に変わりもなかった事だし、帰ったらユージンにシェラルドは何もしてねえみたいだと報告すりゃ終わりだ」

「それだけ？」

「特に目的があるってわけでもないしな。この調子でちよくちよくアンヘリカに来る事になるかもしれねえ」

二日酔いになりもしないらしいセルアは、普段通りにだらけた姿勢で座っている。アンヘリカは少々煩わしいが城内の仕事よりは楽だと、余暇のような感覚とも取れる発言も付随していた。

蘭自身も屋敷に籠りきりよりは良いと、セルアの隣で会話を行なう。

セルアは今日も乗り込む前に何かを施し、乗り合いは順調にウィルナを目指している。こうしてウィルナとアンヘリカを往復する事で見出せるものがありはしないかと、蘭は内心で期待を膨らませつつ丸一日の復路をどう過ごすべきかと頭を悩ませ始めた。

すると、セルアがこちらを向き口を開く。

「ああ、そういや」

「どうしたの？」

「ユージンが帰ったらお前を城に上げるって言ってたな」

簡単に告げられたが、蘭は内容に驚き瞬きすらも止める。そんな事は一切聞いていなかった。

何も言わず見返すだけの蘭に、セルアは事もなげに続ける。

「さすがに姿を現さないあいつを心配する声が上がってたんだよ。とりあえずお前が変わりに入る事になった」

城へ入るからには何かをしなければならぬのだろうかと思いつつも、蘭は言葉を絞り出す。

「む……無理……だと、思うよ？」

しかしセルアはこちらの発言など気にはしないらしい。

「無理とか言える状況ではねえんだよ。何とかしろってとこだな」

「何とかしろって、見た目はともかく姫様には程遠いって前に言ったじゃない！」

まるで丸投げにでもしそうな表現に蘭は声を荒げる。

「喋ったり動いたりしてなければ、見た目は変わんねえぞ？」

蘭の反応を面白がっているのか、セルアは投げやりな言葉ばかりを紡ぐ。

「それじゃ人形みたいにしてなきゃ駄目じゃない。二人がわたしを運ぶわけじゃないでしょう？」

人形と言ったのが気に入ったのか、セルアは声を上げて笑う。しかし、笑みはすぐに潜められ真剣な眼差しを向けられた。

「健在しているのを知らせるんだ。お前がそれらしく振舞うしかねえよ」

「もっと早く言ってよ……」

「早くても何も変わんなかっただろうが。帰ればユージンがうまく誤魔化せるように考えているはずだ」

どうやらわざと今まで言わなかったらしいと察した蘭は、大きく溜め息を付く。

どうとも思っていなかったはずの帰路が、急に重いものへと変わった瞬間だった。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（四）

「とにかく背筋は伸ばせ、顔はにやけるな」

決して姿勢は悪くないはずだが、姫とは違うという事なのだろう。蘭は背筋を伸ばし、必死に表情を作ろうと努力する。

「どうもしっくりこねえが、上までそれで行け。なんとかなるだろう」堂々とさえしていれば大丈夫なのですから、自信を持ってください。貴女は姫とよく似ているのですよ」

目的地はだいぶ近づいてきたらしく、蘭は二人の脇を通り抜けるように先を目指す。こうして前へ出てしまえば、セルアとユーギインの表情を窺う事はできない。

今はウィルナ城から繋がる高い塔の螺旋階段をひたすらに登っている。空を目指すようにぐるぐると続く段差を眺めながら、おそらく明日は筋肉痛に違いないと蘭は内心で零す。すでに腿や膝が悲鳴を上げそうなのだ。まさか姫がこんなにも長い階段を登っていたとは想像もできなかった。

石で造られた塔には扉が二つだけ存在しているらしい。地上からの入り口と最上段にある展望する空間へ出る為の物だ。それ以外はずっと階段らしく等間隔で明かり取りの窓があり、ただ上り下りをして見渡す為だけの場所を蘭は登り続ける。

蘭の服装は屋敷にいる時と同じ、赤を基調とした物だ。この姿で城へ入り塔を登り城下を眺める。

そうしてしばしの時を塔の上で過ごしたならば、今度は執務室へ向かう。蘭に課せられたのはそれだけであり、その為にある程度の動きを決めて来たのだがうまくはいかない。

「何ヶ月も自由にしてないで、ある程度教えときゃ良かったな」

ぎこちなく動く蘭へセルアは細々と注文をつけ、ユーギインは励ます役に徹してくれている。

「ここまで姫が不在になるとは思わなかったのですから、仕方がな

いでしょう。ランも頑張ろうとしてくれているのですよ?」

許されるうちに聞いておかなければと、蘭も振り返らぬままに二人の意見を求める。

「どこら辺が駄目?　なんか考えてもわからなくなるだけみたい」
普段とは違う雰囲気で歩くというのは難しいものだった。蘭の考えている姫の姿は、ユージインのようにいつも所作が崩れない人物だ。常に背筋を伸ばし、セルアのようにだらしない動きを見せないのだろうと想像していた。

二人にも概ね間違っていないと言われた為、それを目指し頑張っているが程遠いと自覚もしている。だが、努力しないよりは良いはずだと細かな指摘を求め続けていた。

「そうですね……」

考えているらしいユージインよりも先にセルアが口を開く。

「全体だな」

「それじゃどうにもできないでしょ」

さすがに全否定は困ると蘭が極力表情を変えずに告げると、セルアは笑う。

「お前らしさがなくなればいいんじゃないか」

「セルアふざけないでください。ラン、今は会話ができる分、先程よりは楽でしょう?」

「仕方ねえ、やめるか」

おそらくそうだとは思っていたのだが、セルアはこの状況を面白がっているらしい。こちらとしては真剣なのだから、本当にやめてもらいたいものだと考えながらもユージインへの返答を優先する。

「この塔から出るまでは誰にも会わないんだもんね。ずっと無反応でいるのって難しかったよ?」

姫は自分から城の人間に話しかけはしても、余程の事ではない限り向こうからの言葉に反応しないと説明されたのだ。

とにかく、蘭を見かけた人々は必ず挨拶をして来る。だが、答える必要は一切ないと言うのだ。

本当にそれでいいのかと思っていたのだが、実際にこの塔に登る前にたくさんの人に声をかけられ納得した。特に姫の為に集まるというわけではなく、たまたま通り道に姫が来たという感じだったのだが、それでもかなりの人数が城内にはいたのだ。

全てに答えるのは難儀に思え、下手に声をかける人間とかけない人間に分けてしまうのなら、全てに答えない方がうまく行きそうにも思えた。

蘭の姿が目に入ると誰もが通路の脇で頭を垂れる。蘭はその者達の前を、当然だと言わんばかりに通り過ぎなければならなかった。

初めて目にする城内は、思っていた通り劣化する事のない美しい石でできている。ただ石を積み上げているのではなく、たくさん細工を施しそれだけで芸術と呼べる程の仕上がりだった。

それらをじっくりと見る事ができたならと蘭は思う。

しかし、許されはしない。

姫にとっては生まれた時から見知っている景色であり、物珍しさなど一欠片もないのだ。どれだけ蘭が興味を持とうとも、全てを押し込めなくてはならない。そびえ立つ姿だけを知っていた城の中に入れたというのに、ひたすら前を指して歩くばかりだった。

「ねえ、執務室に行けばそこくらいはじっくり見れる？」

どうしても抑えきれない好奇心は、せめて一部屋だけでも眺めたいと願わせる。

表情を伺う事はできないが、返ってきたユージンの声は柔らかい。

「そのくらいは大丈夫ですよ」

「良かった」

一つくらい楽しみも欲しいものだと思いながら蘭は歩み続ける。

前を向いた先には目指す扉が見えていた。

分厚く重そうに見えた扉は、音をたてる事もなく静かに開く。そ

ここから差し込んで来た光は、薄暗い階段に慣れた目には酷く眩しい。目を細めながら蘭は外へと踏み出し辺りを見回した。塔の最上階は大きな部屋のような造りだ。

中央に出て来た扉があり、それを囲むように空間がある。四方を囲む壁はガラスをはめ込んではいないが四角く切り抜かれており、そこから外を眺めるらしい。

先に窓へ向かったユージンが振り返る。

「姫はよくここからウィルナを眺めておられました。この行動こそが姫らしいのですよ」

「そうなんだ」

蘭は頷くとそちらへ行き、一望できるウィルナを見た。

眼下には思っていた以上にたくさんの家屋がある。張り巡らされた無数の道、青々と生い茂る緑、そして輝くような水。それらが、この場所を中心に外側を囲う壁まで続いている。

何もかもが図られたかのように並んでいた。ここへ置くべきだから置いたと思わせるような、不思議な配置に思わず声が漏れる。

「凄い……」

「ここはウィルナ全体を見る事のできる唯一の場所ですよ」

窓の枠を掴み蘭は吸い寄せられるように景色を眺めた。一つひとつはとても小さいものの、全てが集まる姿は壮大で圧倒される。

心地よい風が肌を撫で風が髪をさらさらと流していくが、国を覆う壁の外に広がっているはずの砂は微塵も飛んでこない。

日差しさえ抑えるのだから、砂を入り込まないようにもできるのだろう。不思議な力で包まれた空間を見下ろし続けた。

（ここだけがウィルナを見渡せる場所）

そう思いながら蘭の目は張り巡らされた道へ移る。

町へ出る度、蘭は不思議に思っていた。石が敷き詰められている道は、様々な色を使い模様を描いている。しかし同じものが続くのではなく、突然色使いが変わってしまったりもするのだ。

それはここからでも見て取れる。青っぽい道があれば赤みがかっ

た物も、何色にも色分けされた道が国中に広がって行く。ずっと同色が繋がっているわけではない。ぷつりと途切れ、突然に色が変わる。そしてまた別の色と不思議な程に一貫性がない。

「道の色って何か意味があるの？」

素朴な疑問だった。一本の道ですら細かく色を変えた挙句に、同じものを何度も使用している。どうして一色で長い道を作らなかったのかと思える程に切り換わっているのだ。上空から見ることにより、手間のかかる作業だろうと更に思わされた。

「改めて言われてみると不思議ですね」

「ずっとこんなもんだと思ってたぞ？」

どうやら気に留めた事もなかったらしいユージンとセルアの言葉を聞きながら、蘭は部屋をぐるりと周り見る景色を変える。

どこか異質に感じる色合いが引っかけり、引き寄せられるように道を目で追う。

その中でも特に気になった青だけに注目してみる。一本だけではなく周りに走る同じ色も拾い、更にその範囲を広げてみる。窓際にあった体を一歩二歩と後退させある程度の範囲が視界に収まると、突然何かの形が組み上がった。

そして、言葉が現れる。

「失くした……？」

「どうしました？」

側にいるユージンに聞かれたのだが、蘭自身もどうした事かと我が目を疑い答える余裕がない。

とにかく今見ている地点から右へ視線をずらし、縦横に走る青を大きく拾い上げてみる。幾つもの道が集まると急にこれだと思う形が見え、言葉は勝手に浮かび上がった。

「道が……読める、みたい」

蘭の様子に、扉に寄りかかるようにしていたはずのセルアも近づいて来る。

「どういふこった？」

二人に挟まれる状態になったが、今はそちらに目を向けずひたすら青い線を追った。

一つの形を捉え、また次を捉える。それが幾度か続くと、言葉が浮かぶ。

「……魂」

「契約文字、か」

耳に入って来たセルアの声に蘭は無言で頷く。これはマルタに貰った板と同じ仕組みらしく、模様を認識する度に言葉が浮かんで来る。

わずかでも逸らすと見失ってしまいそうな形から、目が離せない。今見えているものを読み取ろうと蘭は目を凝らし続ける。

二人は特に言葉を挟まずこちらの様子を眺めてくれているらしかった。

「取る……」

また一つ言葉が浮かび、次を見る。そこで浮かんだ単語を知る事で不思議と納得ができた。これまでの全てがするりと繋がる感覚を得る。

「失われた魂を取り戻す」

そうしてまた次を見て形を捉えようと試みるが、どんなに目を凝らし範囲を広げても言葉は浮かばない。おそらくこの形ではないだろうか？　そう思えるが今までのように確信が持てなかった。

「もう、わかんないのかな？」

長い間続きを読もうとしたが、どうやら無理だと蘭は視線を外す。そして側にいる二人を見ると、どちらも興味深げな顔をしていた。

「貴女には驚かされますね。道そのものが契約文字とは思いもしませんでした」

ユージィンはそうして視線を外へ向け、セルアは蘭の頭に手を乗せながら眉を寄せる。

「ここへ登る事にさえ意味があったって事かよ」

「よくはわからないけど読めたんだもの。でも、全部は無理みたい」

雑に頭を撫でて来るセルアを見上げると、その瞳が笑いかけて来た。
た。

「それで構わないんだろうな。ここは基本的に王族しか入れねえ。
おそらく一族に伝える為だと考えた方がいい。ユージン！」

セルアの声にユージンが振り返り、ゆっくりと口を開く。

「姫がここへ来ていた目的はこれだった、という事でしょかね？」
「そう考えるのが妥当だろう。そして、お前は一部だけを読む権利
を持っていたとでも考えるべきなんだろうな」

やはり当然として受け入れられてしまい蘭は聞く。

「権利？」

「あいつの代わりとして屋敷へ自由に出入りできる存在だからこそ、
道も読めたと考えろって事だ」

「じゃあ、意味があるって事？」

「そう考えるべきなのでしょうね」

「まあ、だから何ができるのかはわからねえけどな」

言い切りはするものの、やはり理由はわからないらしい。

（どういう事なんだろう？）

膨れ上がる疑問を抱きながらも、蘭はもう一度城下を眺め何かを
知ろうとしていた。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（五）

蘭は執務室へ移動し、置かれている椅子に座り込む。

あの後も他に読めるものはないかと色々道を探ってみた。確かにいくつか読めはしたのだが、どれも魂、欠ける、戻す、と同じような単語ばかりで要領を得ない。

根を詰めても仕方がないだろうと、諦めて移動して来たのだった。
「疲れた……」

背もたれに寄りかかり、手を組み前へ伸ばす。

塔の長い階段を下り、そしてまた緊張した状態で城内を歩いて来た。誰もが頭を垂れて蘭に敬意を示す仕草は、決して居心地の良いものではない。皆が自国の姫だと信じているのであり、蘭は騙しているだけなのだ。

自ずと望んだ状況ではないが後ろめたさは拭えない。しかし真実を露呈するわけにもいかないのだから困ったものだ。

ようやく気の抜ける場所へ辿り着いた蘭は、素直に感想を漏らす。

「誰かのふりをするって大変」

「そうだな。帰りもあるんだ、今のうちに休んどけ」

「もう一回、か」

不満を零しつつも目の前にいるセルアを見上げる。

蘭の座る椅子は大きな机と対になっており、何故か机上にセルアが陣取っていた。

インク壺や羽ペン等、細々とした物が置いてある机は、セルア一人が座ってもまだまだ余裕がある。しかし、机は座る物ではない。
「あのソファの方が楽そうだよ？」

この部屋は豪華な絨毯が敷かれ、奥に机と椅子が置かれている。壁は一面を除いて本がぎっしり詰まった棚で覆われ、入り口近くに一つソファがあるだけだ。

そちらの方が絶対に座り心地が良いだろうと思い蘭は口にしたの

だが、セルアは面白くなさそうに一瞥する。

「この方が近いからいいんだよ」

おそらく、蘭に近いという意味なのだろう。同じ室内にいるのだから少々離れても構わないのではないかとも思ったが告げはしない。屋敷のように言い合いをするのも気が引けてしまう。

「別にいいけど」

「どうせそのうち大量の書類を持ったユージンが入って来るんだ。今くらい側にいさせろ」

今日は夕方までここで過ごすように言われていた。本来ならば姫も何かしら作業があるようなのだが、生憎そこまでの代役は無理だ。蘭はただ室内にいただけで、実際はユージンが行なう形で済ませるらしい。

今は必要な物を準備しに行っているようで、蘭はセルアと二人で帰りを待つ。

「姫様はあの文字が読めるから、あそこに登っていたのかな？」

ユージンの口ぶりでは塔に登り国を見る事が姫らしい行動だと言っていた。それだけ頻繁にあの場所へ通っていたのだろう。

机上に片膝を立てているセルアは、眉を寄せ片手で髪をかき上げる。

「それもあるだろうが、本当に国を見ていたと思うぞ。そもそも見ようとしなければあそこへは登らない。そうならなければ気付けないって造りにわざとしてんだと思う。あいつの親父、王が登ってる姿は見た事がないしな、おそらく知らねえんだろう」

「長い階段を登ってまで国を見る人だけに伝える言葉……？ でも、そうなるかわたしが読めるのはおかしくない？」

それにはセルアも少々悩んだらしく、しばしの間を置く。

「お前は魂の欠片って文字を読んでる。だから、そこに関わる部分だけ読めたってところか」

「……関わる部分？」

しかしどう関わっているかは一向にわからないままだ。板に込め

られたあなたが魂の欠片、同じように先程読めた失われた魂を取り戻すという言葉が何を意味しているのかが見えてはこない。

何か思い至らない部分があるのではないかと蘭は頭を悩ますが、目の前にいるセルアは簡単に告げる。

「よくはわかんねえが少しずつ集まってる気はするだろ？ 悪い事じゃねえ」

「そうかな？」

どうにも納得できず蘭が聞き返せばセルアが眉を潜める。

「そうじゃないと困るだろ。お前は帰りたいんじゃないかねえのか？」

「そうだけど、本当にこれが帰る事に繋がっているのかな？ とは思わない？」

帰るという目的はあるが、蘭の読んでいる契約文字が願いに繋がっているという保証はない。確かに物事が進んでいるようにも感じられるが、同時に不安も沸き上がるのだ。

「まだ足りないもんが多過ぎんだよ。俺やユージンがわかる程度に集まれば先が見える」

蘭よりもセルアとユージンはこの世界の知識を持っている。手に入れているものから何かを導き出せる可能性は、自分よりもはるかに高いだろう。

「う……ん、そうだよな」

曖昧ではあるが返事をすればセルアはわざとらしく溜息をつく。

そして、思いもしない言葉を向けられた。

「俺としてはお前が帰らなくても構わねえがな」

「え？」

不敵に笑う姿は本当にそう思っているようにも見え蘭は戸惑うが、セルアは苦笑しながら続ける。

「別に帰さないとは思ってねえよ、無理にここに置こうとも思っていない。だが、その選択肢もなくはないって事だ」

「帰れないって事？」

帰りたいと願う蘭にとって、この言葉は重いものだ。微かな希望

も打ち消してしまいそんな恐ろしいものにしか聞こえない。

しかしセルアは何でもないように告げる。

「帰れないってよりは、帰りたくなくなったらどうだ？」

「帰りたく、なく……なる？」

「ああ、俺が帰りたくなくなるようにしてやるよ。それなら構わないだろう？」

ふざけているのかどうか量りかねるような口調に蘭は戸惑いつつも考える。

帰りたいという思いをなくす、そう思う時が来る事はあるのだろうか？ 告げられた言葉にどこか心が揺らぐ気がすると思っていると、突然セルアが顔を歪め、苦しそうな息を吐いた。

「どうしたの？」

心配になった蘭は立ち上がり、右手で胸元を抑え荒く呼吸をするセルアに声をかけた。しかし、返って来た言葉はおかしなものだ。

「お前、この部屋から出ろ！」

「え？」

蘭は目をしばたたかせて聞き返す。

「どうして？ わたしはここから出るわけには行かないでしょう？ セルアはどこか苦しいとかじゃないの？」

今日は夕方までここにいる事が重要なのだ。そして、目の前には明らかに具合の悪そうなセルアがいる。どうなればこの部屋から出る事に繋がるのかがわからない。

「駄目だ！ 俺の近くにいたるな、離れろ」

身を縮めるように体を折り曲げ、顔を歪めている姿は尋常ではなかった。痛みにも耐えているのか脂汗が滲む様子に顔を覗き込む。「どこか苦しいの？ 誰か呼んで来る？」

「そんな事はいいい、頼むからここから出ろ！ 今すぐだ！」

「意味がわかんないよ。なんで出なきゃいけないの……わっ」

意志の疎通ができないまま言い合っていると、何故か突然強風が吹き付けて来た。吹き飛ばされるのではないかという勢いに、蘭は

慌てて手を伸ばし何かを掴む。

「駄目だ！ やめろ！」

セルアの大きな声が聞こえるが、あまりにも強い風に目を開く事ができない。蘭は状況が把握できぬままに何かをしつかりと握り締め、抗うようなセルアの言葉を耳にする。

轟々と音を立てながら痛いと思う程の風が吹き付け、髪も大きく揺れたなびく。徐々に増していくそれに、口を開くのも無理そうだ。いや、段々呼吸をするのも苦しくなって来ている。

（何？ 何が起きてるの？）

一体何事だというのだろう、風がどこから吹いているのかもわかりはしない。

部屋を見る事すら叶わない蘭が知れるのは、激しい風の音と途切れ途切れに繰り返されるセルアの声ばかりなのだ。

「やめろ！」

セルアは怒鳴りつけるように何かを止めようとしていた。切迫した声は何度も繰り返され、懇願し続ける。このなぶるような風に対してなのかはわからないが、酷く恐れを感じさせる声は強く何かを望んでいると理解する事ができた。

（セルアは何を止めたがってるの？）

何をどうしたいのかはわからない。だが、蘭は強く思った。

（こんなにも駄目と言ってるんだから、やめればいいのに）

すると、激しく吹き付けていた風が止んだ。弱まる事もなく突然、ぶつりと途切れるように止まってしまったのだ。

「えっ？」

抜けてしまうのではと思う程、強く後ろに流されていた髪がぼさりと元の位置に戻り、体が受けていた痛みもなくなる。

無事に呼吸ができる事もわかり瞳をゆっくり開けると、どうやら自分が掴んでいたのはセルアの腕だったらしいと知った。

机の上で体を丸めるようにして頭を抑えているセルアの片腕を、蘭はしっかりと掴んでいる。

「駄目だ！」

しかしセルアは今の状況を理解していないらしい。大きな声を上げられ、蘭は体を震わせる程に驚く。

轟々と吹き付ける風の中でも聞こえる程の声は叫びだった。

固く目を閉じ体を小刻みに震わせている姿は、まるで何かに怯えているように見える。

両手が耳にかかってしまっている為、音が聞こえないのだろう。

今は落ち着いたこの部屋の状況に気付いていないようだ。蘭はセルアの腕を引くが、どれだけ力を込めているのか全く動く気配がない。

「セルア！ 手を外して！」

理由はわからないが、とにかく風が止んだと知らせねばと蘭は声をかける。

全てを閉ざしてしまったように蘭の声も力も受け付けないセルアは、恐れるような叫びを上げ続けた。だが蘭も負けてはいられないと、怒鳴りつけるように名を呼ぶ。

「セルア！ セルア！」

何度も大声で呼びながらぐいぐいと腕を引いてやると、ようやくセルアが両耳を塞ぐ手の力を緩める。

「セルア！ もう、どうしたのよ？」

これならば大丈夫だろうと蘭が声をかけても、セルアの様子はおかしい。訝しがるように周囲を見回した。

「な……んだ……？」

そして、蘭を見た途端に息を飲む。

まるで在りえない者を見た、そう言いたげな青白い顔に蘭は眉を潜める。

「どうしたの？」

驚いているらしいのはわかるが、蒼白になる程の事態でもない。蘭はただただ答えを待つが、信じられないような台詞をぶつけられた。

「なんで……お前、生き……てんだ？」

「は？」

「どうして死んでない？」

机から降り蘭の両肩を掴むセルアの視点は何処か定まっていない。

「何を言ってるの？」

「生きて……んのか？」

要領を得ないセルアの言葉にどうしたものかと考える。よくはわからないが、どうやら自分が生きている事に驚いているようなのだ。何を思って勝手に殺されなければならないのかと思いつながら、蘭は大声を出す。

「勝手に殺さないの！ 動いてるでしょ」

すると、さまようように動いていた瞳が蘭の正面で止まる。数度瞬きを繰り返し、しっかりとこちらを見据えて来た。

「――そう、か」

気の抜けた声を出すセルアは崩れ落ちるように床に座り込み、今度は扉を叩く音が聞こえた。

蘭がそちらへ視線を送ると、通り抜けられるだけの幅を開けユージンが素早く入り込んで来る。

「何事ですか？ 大きな音で人も集まっていますよ」

そう言いながら室内を見たユージンの動きが止まる。

「……どういう事でしょう？ これは？」

セルアの様子に気を取られ、周りまで意識していなかった蘭もあまりの惨状に驚く。

棚や置かれていた椅子、ソファは投げつけられたかのように壁にぶつかりでもしたのか砕け散っていた。棚の中に納められていた本は散り散りに破け、床に撒き散らされている。更には蘭自身も束ねていた髪は解けばさばさになり、衣服もところどころ破けている有様だ。

何事もないのは机とセルアと蘭だけなのである。

机の上に置かれていた文房具達は吹き飛ばされてしまっているが、セルアは平気だったらしい。咄嗟にすぎた蘭も無事とはいえない。

ないが、大事でもない。

座り込んだままのセルアの前に立ち尽くす蘭は、どうにか口を開く。

「セルアに部屋から出ろって言われて……そうしたら、風が吹いた……の」

改めて気付いた惨状に、セルアが怯えを見せた理由を感じ蘭の声は自然と震える。

ただ風が吹いたと言うにはおかしな部屋の姿に、何かしらの危機があつたのだと思に至る。

「風が吹いてどうなったのですか？」

ユージインが続きを求めているのはわかるが、蘭の体はがくがくと揺らぎ立っている事を拒む。セルアと同じく力なく座り込みながらも、蘭は必死に告げようとした。

「セルアはやめろ、駄目だって言って……なんだかすごく苦しそうで……それで、それで」

蘭が知っている事は本当にそれだけだ。突然の風に視界は奪われ、ただセルアの声が聞こえていただけだった。

「ラン、もうじゅうぶんです。そのまま置いてください」

ユージインの声は随分と近く、いつの間にか側へやって来たらしい。わずかに首を動かせば、セルアの目の前にしゃがみ込んだのがわかる。

放心しているようなセルアの顔を見つめ、何の前触れもなくユージインは頬を平手で打った。

小気味良い音が響く。

そして、しっかりとセルアを見据えゆっくりと告げる。

「しっかりしなさい。何をしたんです？」

ユージインは何が起きたとは言わず、何をしたのかとセルアに聞いた。必死に止めようとする言葉を口にしていたはずのセルアが何かをするのかと、蘭の中には疑問が浮かぶ。

叩かれた事により、セルアの目にはわずかにだが力が戻った。一

瞬驚き間を置きはしたが、深い呼吸を数度行なうと部屋を見回し蘭を見た後にユージインを見つめる。

「暴発……した」

その一言だけでユージインは状況を理解できたらしい、大きく頷いた。

「それで、これだけで済んだのですか？」

「それがおかしい」

質問に答えるセルアの様子こそがおかしなものに蘭は思えたが、ユージインはどこかへ導くように声をかけ続ける。

「どのように？」

「……こいつが、生きてる」

蘭を見つめるセルアの表情は頼りない。

「ならば暴発はしなかったのでは？」

ユージインの問いに、首を横に振りながら視線を落としセルアは呟く。

「無理、だと思った。暴発したから部屋は荒れてる。だが……完全じゃない」

常らしくない小さな声にも、ユージインはただ頷いている。

「貴方が抑えたのでは？」

「そうしようとした、だが無理だった」

「他に、何かしましたか？」

「何もしていない。いや、できなかった……気付いたら止まっていたみてえだな」

普段に近い口調になったセルアにユージインは穏やかに笑う。

「やっと、落ち着いてきましたね」

「そう……だな。悪い」

ゆっくりと立ち上がり、セルアは再び机に腰かけた。そして目を閉じると、何か考えているのだろうかそのまま動かない。

ユージインはそうした姿を眺めているだけであり、蘭も何も言う事はできなかった。

今はセルアが口を開くのを待たなくてはならないと、不思議と思わされたのだ。

随分と長い時間が過ぎ、セルアは重く口を開いた。

「俺は魔力を抑えられなかった。しかしそれは止まり、気付くとお前が俺を掴んでいた」

セルアは立ち上がると手を伸ばし、蘭の頭に触れ口の端を吊り上げる。

「それが答えか」

「何？」

この反応は何かがわかったのだろう。だが、蘭には全く意味がわからない。隣にいるユージンも怪訝そうにしている。

続いて立てと言われた為に、蘭は素直に従った。セルアの正面を示され向かい合うと、髪や頬、肩、腕と様々な部位に触れられる。

「どうしたの？」

驚きはしたが何かを確認するような仕草に意味が感じられ、蘭は問いかけるに留めた。するとセルアは蘭の髪を一房掴み口付けたのだ。

「な……っ」

予想にもしない行動に思わず声を上げかけた蘭へ、セルアは笑みを向ける。

「お前が魔力を吸い取ったな」

「吸……い取った？」

見えもしない物を吸い取ったと言われても何の事やらわからない。聞き返す蘭へ、セルアは普段の調子で話し始める。

「お前に塔の上で触れた時には全く感じられなかった魔力が今はある。ユージンいつものように鉢を準備しろ、髪を供給できる」

髪を供給するとは何かと思えば、ユージンが新たな疑問を口にした。

「姫と同じ事ができるというのですか？」

「おそらく、それ以上。だな」

「……そう、ですか」

何やら喜んでいられるらしいセルアとは違い、ユージインの顔色は優れない。しかし、セルアは気にも留めずに言葉を続ける。

「髪を持っていけば今まで登城しなかった理由にもなる。魔力の貯蓄量を増やす為にとってここで納得するだろう。今の音もそれにするか……サイラス達が騒ぐだろうが姿を見せずに押し通すぞ」

何度も確かめるように蘭の髪を撫でるセルアと同じく、ユージインも髪に触れた。

「私にはわかりませんが、魔力があるのなら納得するのでしょうか」
髪に触れられながら立ち尽くす蘭は、どういう事なのかを説明して欲しいと訴えるように二人を見つめていた。それには、ユージイン、セルア共に苦笑する。

「説明が必要なようですね」

「ああ、ここは俺だな。とにかく座れ」

セルアは唯一原形を留めている机へ蘭を促す。何もかもが吹き飛ばされている今、通常では不自然な状況も仕方がない。

蘭が素直に腰かけると、セルアの視線はユージインへ向かう。

「悪いがユージインは席を外してくれ、大体知ってんだろ？」

「何となくですがね、素直に外へ出ますよ。なるべく時間を置いてから、鉄を持って戻って来ます」

ユージインは意味ありげに微笑み、荒らされたように散らかった部屋から出て行ってしまった。

三章・止められた孤に灯る想い【二】（終）

二人きりになった部屋で、セルアは蘭の隣に座るとしばらく何も言わずにいた。これから説明するであろう事を考えているのか、随分と真剣な表情でどこかを見つめている。

セルアの様子は声をかけづらいものがあり、蘭は何も言わずに待っていた。教えてもらえる事はわかっていなのだ、焦る必要はない。壊れ果てている椅子を見ているだけでも、尋常ではない事態だったと理解できる。もしかすると蘭も壁に叩きつけられていたのかもしれないのだ。こうして無事でいられるだけでも良いと前向きに考えた。

「それじゃ、どこから話すかな」

普段の口調のようにも思えたが、微かに違和感を覚えセルアを見上げる。すると、その目は困ったように泳ぐ。

「さっきの俺の事も必要だよな？」

蘭が頷きだけで答えると、セルアはそうだなと小さく言い話し始める。

「自分に魔力があると知るきっかけは、ほとんどが暴発だ」

先程も暴発という言葉セルアとユージンが使っていたと蘭は頷く。

「暴発っていうのは術師の素質がある奴にしか起きない現象なんだ」素質があるといっても、使い方を知らなければどうする事もできない。魔力というものは知らずの内に体に蓄積されていくものらしい。

その蓄積量は生まれた時はごくわずかであり、成長と共に大きくなっていく。器が大きくなる間は魔力も溜まり続ける為に問題は無い。魔力は徐々に溜まっていくものであり、器の大きさや溜まる速度共に個人差はあるという。

とにかくそれが一杯になり、抑え切れなくなった時が暴発という

状態らしい。

「大抵は身の周りの物が壊れたり燃えたり、まあ大事って程ではないな。少し火傷や怪我をする」

そうして、どうやら自分には魔力があるらしいと認識し、使い方を学ぶ為に王宮へ入る。ある程度の年齢までは家から通い、その後正式に王宮へ仕えるらしい。

「俺もその暴発を起こしている。十五年前、お前も知っている姿、十二歳の時の話だ」

姿は知っているが、それは本当に中身が十二歳のセルアとしての出来事なのだろう。

「あの日、俺は寝起きから調子が悪かった。どこがどう悪いかはまいちわからねえで困ってたな。今なら魔力が溜まり過ぎてるってわかるんだが」

ゆっくと話し始めたセルアの視線は何処か定まっていなかった。その動きはどこか、昔を思い出そうと記憶を眺めているようにも見えた。

「とにかく調子が悪くて仕方がなかった。どうにか起き上がって着替えを済ませたが、部屋の外へ出るのも億劫でなかなか歩き出せねえ。滅多に寝坊なんてしない俺が朝飯を食べる時間になっても現れない事を家族は心配したんだろう。そこに妹が来た」

蘭は何も言わずにセルアを見つめ、続きを待つ。

「俺より三つ下のレリアは、具合の悪そうな俺を見ると駆け寄って来た。ただ、本当に心配している表情だったんだよな。その時に俺は、何かがまずいって事に気付いた。どうまずいのはわからないが、とにかく……良くないと思ったんだ」

その声はだんだん暗く、表情は青白くなっていき、蘭は思わず隣に座るセルアの手を掴んだ。その左手は凍るように冷たく両手でそっと包むようにすると、正面を見つめていた虚ろな瞳がこちらを向く。

「大丈夫？」

本当にこのまま話し続けて良いのだろうか、そう思える程にセルアの様子は不安定に見えた。

現に今も特に表情が浮かんでいない。まるで表情を変える事の無い仮面のように気味が悪くも感じられるのだ。

「大丈夫だ、聞いとけ」

微かに目を細めた気はしたが、読み取れるようなものではない。もしかすると笑いたかったのかもしれないと思いながら蘭は頷く。

「近づいて来るレリアに俺は、来るな！　と言った。今、俺の側にいては駄目だ。直感でそう思った。でも……その時はもう間に合わなかった」

視線がまた前に戻された、セルアには今本当に何かが見えているのかもしれない。

先程も、セルアは散々近寄るなど言った。きっと同じように来るなど言ったのだろう。それを無視して蘭はセルアの側に居続け、今もこうしてここにいます。

セルアが言わんとしている事は蘭にも薄々わかり始めていた。あの暴発は完全ではない、そう言っていた事を思い出したからだ。

（なら、完全なら何が起きるの？）

室内は荒れ果て蘭の衣服も破れてしまっている。これが不完全ならば、事態は更に酷いものなのかと予想はできた。

しかし、結末までを読みきれるものではなく言葉を待つ。

セルアは大きく間を空けると、吐き出すように一気に告げる。

「力が暴発して、何もかもが吹っ飛んだ。……どうして吹き飛んだのかはわからなかった。ただ、苦しくて苦しくて、それでも俺は我慢しようと思っていた。それでも抑えられなかった。俺を中心に爆風が起きて、全てをなぎ払ったんだ……」

ほんの少し前、痛いと思う程の風を蘭も浴びた。だが、それすら軽いものだったのかもしれない。

「家は跡形もなく崩れちゃった、俺のいた部屋の辺りは粉だったけどな。別の部屋にいたはずの両親も肉片しか残ってなかった。何

もかもが一瞬だったはずなのに、俺はあの時程、遅い時間は知らねえ。……駆け寄ってくるレリアの表情が、心配するものから驚くものに変わり、その顔や体に風が当たった。衣服が剥げ、皮膚や肉も剥がれる、何もかもが無理やり剥ぎ取られ吹き飛ばされる。そして、それが舞いながら粉々に砕けていく。骨の一つも残らない……」

セルアがいた部屋の辺りは粉だった、の中には妹すらも含まれていたのかと蘭はその事実にも声も出ない。

「俺は暴発で自分の妹と両親を殺した」

セルアの顔が蘭に向く。いつもならばしっかりと光を宿している瞳が、どんよりと暗い。

「お前もあなるのかと思ったんだ……」

あの激しい風を受けた時、蘭は驚いていた。そして、一瞬見えたセルアの表情はどうしたのかと思う程、何の希望も映していなかった。今見ているのとはまた違う暗い表情がセルアには浮かんでいたのだ。

十五年前に見たものと同じ光景、それがまた起こる。

セルアが受けた衝撃がどれ程のものかはわからない。しかし今、聞いているだけでも蘭は辛かった。尋常ではない状況で家族を失ったという過去は、本来ならば口にしたくもなかったのだろう。

ユージンですら何となく知っていると云っていたのだ。本人からではなく、別の誰かから聞いたと考えるべきに思えた。

何をどう伝えれば良いのか、うまく浮かんではこない。それでも蘭はどうにか口を動かす。

「でも、わたしはここにいるよ？　そのせいで平気だったんでしょ？」

本当かどうかはわからないが、蘭はセルアの魔力を吸い取ったらしいのだ。暴発という危険な状況から脱したのだから、何かが上手く働いたのだろうと言葉をかける。

これまでもおかしい状況をどうにか乗り切ってきたのだ。今更否定する必要もない。以前とは違った結果になっているのだと、自分

は死ななかつただろうとセルアに伝えてみる。

すると表情を固まらせたままのセルアがこちらをじっと見つめ返してきた。あまりにも感情を見せない姿に蘭は言葉を返せず、ただ瞳を合わせ続ける。

「――そうだな。前とは違うんだよな……」

しばらく何も言わずにいたセルアは呟くように告げると、蘭が両手で包んでいた手を抜き取り何故かわざわざ右手と繋ぎなおす。

「しばらくこうしていいか？」

普段は特に聞きもしないで手首を掴みぐいぐいと引っ張っていくとは思えない様子に驚きはしたが蘭は頷く。

「いいよ」

「なんでお前がそんな顔してんだよ」

自分の表情など知れるものではないが、蘭から見れば特に辛い悲しいなどという感情を見せないセルアの方がおかしいようにも感じられる。暗いと感じられても内面を欠片も見せはしない不思議な表情に、何を言うのかと言葉をぶつけた。

「セルアの方がそんな顔って言えそうだよ？」

「そうか？」

「……全然感情が見えない」

不適な発言かとも思ったが、あまりにも淡々としている姿に零せば苦笑だけが返された。

「俺はこうするしかないんだからな」

蘭はそれに何も言わなかった。何故そうなってしまったのかを、聞く必要もないと思ったからだ。

しばしの間言葉もなく座っていると、セルアがぼつりと告げる。

「ありがとうな、ラン」

どこか穏やかさを取り戻した瞳は、わずかにだが笑みを浮かべたように見えた。

その後、セルアはそれからの事も教えてくれた。

住んでいた家をあらかた吹き飛ばし、その中心にセルアはぼんやりと立ち尽くしていたらしい。本人もその辺りの記憶は曖昧で、後に聞かされたのだという。

「心臓は動いていたが、それ以外は止まっていた気がするな」

セルアの表情はだいぶ戻って来たようには見えなかったが、時折固い面持ちで目を伏せる時がある。しかし気遣うのを嫌がる素振りを見せる為、蘭は触れずに会話を続ける。

「全然覚えてないの？」

「なんとなく覚えてる気はするな」

被害はセルアの家ばかりではなかったらしい。家屋は一軒の崩壊で済んだが、樹木や建物の外に置かれた品が壊れる事態になっていた。家族以外に死人は出なかったが怪我人がおり相当な騒ぎが起きてしまったが、そこにはすぐ王宮から術師が集まりセルアを保護する処置がとられた。

「ちょっとした暴発で自分の素質に気付くってのはよくある話だ。

俺は人よりだいぶ規模が大き過ぎたがな。とにかく、俺はとんでもない量の魔力を溜められる。同じ事を起こさない為にもすぐに王宮へ入れと言われた」

正しく魔力を使う事ができればいいと、セルアは素直に従った。とにかくとてつもない事を引き起こした自分をどうにかしてくれる、それだけで構わなかったという。

「そこで俺は王に会い。そして、成長を止められた。器はでかいが、一杯になると全てを吐き出してしまう事は危険だからと常に魔力を使い続ける術を施され、それからずっと城で暮らしている」

家族を失ってしまい戻る場所もないセルアは特に不満もなく、とにかく術を使いこなす為に勉強を続けた。

「その時、十二歳のまま姿が止まるとは知らなかった。何かよくわからないが大丈夫らしいと信じていただけだ。二年も経つ頃には俺も周りも不思議がった……ってよりは気味悪がったな。見た目が全

く変わらねえんだから当然だよな」

ただでさえ暴発の件で周囲から良い反応を向けられていないセルアは、その事により更に敬遠されるようになっていったらしい。

「国には受け入れられたが、人には受け入れられねえなっでは気付いていたけどな。さすがに俺の様子を気にした術師の一人が王に説明を求めた。そこで知らされたのがあいつを介さないと俺の体は十二歳のままってこった」

どのタイミングで暴発するかがわからない者をそのままにはしておけない。そして、セルアよりも先に命を落とす可能性がある者にその鍵となる役目を負わすわけにもいかない。

「それで姫様になるの？」

セルアより年下でさえあれば、他の人間でも構わないのではないだろうか。

「そこは、ずっとウィルナにいる奴じゃないとまずいだろうが。王は俺を大量の魔力を扱える術師として気にかけてたんだからな。もし他の者に鍵の役目をさせて、そいつと一緒に国を出ちまったなら意味がなくなる。かえって危ないだけだろう？　俺は対シエラルドの為に城へ置かれたんだ」

確実にウィルナに留まらせる為に、敢えて自分の娘すらも使うのかと蘭は驚く。

「俺が十四、あいつが六つの時にそれは知らされた。まあ、あの頃はさんざん遊ばれたな。目の前にいる奴が大きくなったり小さくなったりするんだから、いいおもちゃにされたもんだ」

どうやら笑みを浮かべられる思い出のようだった。セルアはずっと面白くなさそうな表情で話を続けていたのであり、蘭はわずかに安堵する。

しかしそれも一瞬であり、すぐに元へ戻る。

「その後は簡単だ。俺は必要な時にだけあるべき年齢に戻り仕事をこなす。それ以外は子供のままで暮らす、ただそれだけだ。まあ、あいつは王よりは随分甘いからな、ここ三年はだいぶ自由に歩か

せてもらってる。その前にもたまには戻してくれたしな」

（姫様ならば自由に歩けるけど、王様だと駄目って事？）

蘭と入れ替わるようになくなった姫は、父親である王とは違った考えを持った人物らしい印象があった。だが今は口を挟めるような雰囲気でもなく、蘭は聞き役に徹する。

「そして、十五からは殺す事が俺の仕事だった。金色の悪魔なんて異名までいただいてな。これ以上は言いたくねえから終わりだ」

マルタとクロードが気にしていた金色の意味が見えたと思った途端、セルアは話を締めくくってしまう。

不満が面に出てしまったのか、セルアがこちらを見ながら苦笑した。

「わざわざ聞かせるもんじゃねえんだよ。後は髪に溜まった魔力の話だな」

姫と同じだと言われた事を思い出し、蘭の興味もそちらへ移る。

セルア自身がこれ以上を望まないのなら、無理に聞き出す必要もないだろう。自分が帰る為に必要な情報にも思えず、蘭は髪を一房掴み眺めた。

「本当に髪に毛に魔力が溜まってるの？」

触れてはみたものの何の変化も感じられず、蘭は不思議に思うばかりだ。そもそも大部分はセルアにより髪にされた糸であり、自分の髪と言うべきなのかも怪しい。

「魔力を持つてる奴らは皆同じ事ができるわけじゃねえし、得手不得手もある。俺は自分の体に溜まった魔力を意思で使うが、あいつは髪に魔力が宿りそれを媒体に使う」

「髪を媒体に使う？」

そこへ扉を叩く音が加わり、ユージインが顔を覗かせた。

「そろそろどうです？」

「まだ終わってないが、もういい。入ってくれ」

「なら失礼しますね」

室内へ入ってきたユージインの手には宝石箱のような物が載せら

れている。

赤を基調とした四角形に凝った金の細工が施されており、同じく金色の脚がついていた。随分と高価な品に見える箱は机の上に置かれる。

「そのまま続けて構いませんよ」

大きな机の上に座る蘭の側にユージンは立ち、セルアは気にも留めずに話を再開させる。

「術を使いたい時にはその髪を切り落とすか、数本抜き取る。それは自分だけではなく他の術師にも使えるもんだ。俺のように体内に溜まるならばできない事だ」

「誰にでも？」

「術師であればな。俺は自分でどう使いたいかを考えながら必要な所へ魔力を入れるなりする。だがあいつの髪に溜まった魔力は目的をもっていない、後から足してやらなきゃならないんだ」

魔力に目的を足してやる、それがどのような作業かは想像もつかない。わかるのはとにかく、使い方が違うという事だった。

「今はランの髪にも魔力が溜まって。それはお前には使えない物だが、俺達なら使えるってこった」

セルアが片手を差し出すと、ユージンは持って来た箱の中から銕を取り出した。豪華な箱には不釣り合いな程に簡素な作りではあったが、しっかりと手入れをされた物に見える。

「魔力を持たない私は、適量を見極める事ができない為に切れません。しかし、ただ切るだけなら可能ですよ」

「切れるけど、切れないの？」

ややこしい表現だが理解できないわけでもない。とりあえず切ってしまうばいいものではないらしい。

「わからない奴が切っても魔力はあるが使いづらいだけだからな。そこは仕方がねえ」

受け取った銕を手にはセルアは机の上を移動し蘭の後ろへ来ると、まず髪を手櫛で整える。ある程度直してはいたのだが、風の跡がま

だ残っているはずだった。

そして、静かに髪を切り落とす音が聞こえる。

「それだけですか？」

「ああ」

髪は箱の中へ収められたらしく、動いてもいいと言われた蘭は覗き込む。髪は一センチ程均等に切り取られ、箱の中にあるこれまた小さな箱に収まっていた。

蘭にはごみ箱へ入る物にしか見えないが、ここでは随分と大切なようだ。箱はあまりにも豪華であり、ユージンは丁寧に蓋を閉じている。

「普段通りに使うなって言えよ。確認した上で使用させなきゃそっちが暴発するかもしれねえ」

「わかりました、確実に伝えましょう。しかし、この部屋もどうかしなければなりませんね」

嵐が過ぎ去ったように乱れた部屋に、ユージンは溜め息を付くがセルアは簡単に言う。

「重要書類はないよな？　なら誰かに片付けさせればいいだろ」

「そうですが、さすがに酷いですからね」

うまく説明ができれば良いかとユージンは漏らせば、セルアは髪の毛を理由に強引に押し通せと告げる。

（本当に魔力と髪の毛で誤魔化せるのかな？）

姫と同じ事ができるのなら、確かに有効な品ではあるのだろう。しかし蘭には理解できないと、とにかく部屋を改めて見回してみた。すると何も置かれていなかった壁面のほんの一箇所だが、詰まった石が飛び出しているのに気付く。

「壁も壊れちゃったね」

「あ？」

「それはおかしいですね」

二人がそちらに視線を向けた。何気なかったのだが、反応はそれが不自然だと言っている。蘭には暴発の勢いで壁にも影響が出たの

だろうと思えたのだが違うらしい。

「壁が壊れるのなら、こんなものでは済まないでしょう？」

問いかけたユージンにセルアはそうだなと答える。

ウィルナは魔力で建物自体の劣化を防いでいるのだ。壊れるのはその魔力を打ち破った時だけらしい。このように石一つだけに影響が起こるはずがないと言うのだ。

ユージンは近づくと思ひ出した石に手をかける。

ぎりぎり持ちこたえていたらしいそれは、ごとりと音を立てて床へ落下していき更に重い音を立てた。そして、その石があった場所にはぽっかりと穴が空いてしまう。

「なんだ？ 元からここだけ外れんじゃないのか？」

ひび割れる事もなく綺麗に抜け落ちた石を拾い上げ、穴を覗いたのはセルアである。ユージンも同じように中を気にしていた。

机から様子を見ていた蘭もそちらへ近づいて行くと、セルアが手を差しこみ中を探った。

「何かあるな。奥の下に空間がある」

腕全てを入れる程の奥行きはないらしい。肘の辺りまでを壁に入れたセルアはごとごとと音を立てながら、何かを引っ張り出す。

それは分厚い、一冊の本だった。

四章・注ぐ光に孤は惑う（一）

赤く染められた革の表紙は、表題すら記されていない。しかし赤一色ではなく周囲を豪華な金が縁取っており、蘭が目にしてきたどの書物よりも豪華な装丁である事は確かだった。

片手で持つにはつらいのではないかと思える程の厚みの本は、セルアの両手の上に鎮座している。

ぽっかりと空く穴は、積み上げられた石を一つ引き出すだけで現れた。そして奥に続く空間も無理に作られたようには見ええず、三人は各々覗き込みながらも意見を述べた。

「最初からあったものなのかな？」

「壊し方がねえもんだからな。そうだろう」

「そんな事は可能なのですか？ 見る限り石の状態は同じでしょう？」

床に落ちた石も壁を造る石にも大きな違いは見られない。造られたままの一切欠けぬ姿は、ウィルナの建物としては当然の事だ。

セルアは壁と抜け落ちた石を数度交互に触ると、本が納められていた穴を覗き込む。

「術は建物全体に使われているが扉や窓は開くだろう？ はなからくつついていないのなら劣化を抑えられるだけだ。造られた時点でこの仕組みはでき上がっていたと考えるべきだな」

他にもありはしないかとセルアは穴の周辺を探り、ユージインは元より露になっている壁面に触れた。蘭も壁に手を当て何かがないかと探りながら聞く。

「じゃあ、本もその時からあったって事？」

「さあな。だが、こいつにも魔力を入れてあんのは確かだ。新しいもんではないさそうだな」

セルアが表紙に触れ中身を覗かぬままに言えば、ユージインが訝しげに目を向ける。

「魔力、ですか？」

「ああ、ランが持つてる板と同じだ。劣化を防ぐにしても随分な量を入れてある」

手にした状態で開くには分厚過ぎる本を、セルアは座り込んで床に置いた。蘭とユージンも側へ寄ると膝をついて覗き込み、隠されていた中身が現れるのを待つ。

「さて、何が出るのか」

軽い口調ではあったがセルアの瞳は真剣であり、手は静かに表紙をめくる。

そして、現れた中身に三人は言葉もなく顔を見合わせた。

表紙は赤く染められているが、中身を作る紙は黄みがかったものだ。蘭が手渡された教本も姫の屋敷にある書物も同じような質であり、決して特別なものではないらしい。

そこには読めはしないものの文字と教えられた綴りは並ばず、謎めいた模様が書き込まれているのを認識すると共に、蘭の脳裏には言葉が浮かんだ。

「ランには読めるものがありますか？」

誰もがわかつているらしく、簡潔なユージンの問いに蘭は無言で頷く。

道すらも読んだと思えば驚きも少ない。眼の前にあるのは本であり、書かれたものを読んでいるのだから当然とも言えた。

とにかく蘭は頁全体に目を走らせ、自分が読めるものを探す。これは契約文字であり、だからこそ脳裏には言葉が浮かぶのだ。

「わかるけど、道を見た時と変わらないよ」

新たな言葉を知らないかと思ったが、浮かび上がるのは魂、欠片、失うと、覚えがあるものばかりだった。

「関わりのある言葉だけって事か。ったく、何かが出て来ても全部契約文字じゃどうにもなんねえな」

セルアがそう言いつつ頁をめくって行く。不可思議な模様が描かれている中に、蘭には時折単語の浮かぶものが存在する。

しかし、それだけでは意味をなさない。この本に書かれている内容全てを知り得るには蘭が読める言葉は少な過ぎた。契約文字は伝える相手を特定しているはずだが、先程から蘭は一部のみを知れるのでありもどかしさが募る。

アンヘリカで手に入れた板は、全体を目にするとあなたが魂の欠片と訴えてきた。道と本のように読めないと感じる部分は存在しない。

「これや道を全部読める人は誰なのかな？ それにわたしが一部を読めるのも変な感じがする」

ウィルナを知らない蘭が契約文字を読める事がすでにおかしくはあったが、中途半端に情報を伝えてくるものは更に違和感を覚えさせる。

「この部屋にある事を考えると、王族の人間ではないでしょうか？ 私やセルアも出入りはしますが、基本的に主は王や姫なのですよ」執務室の目的としては正しいのだろうが、セルアはあまり納得していないらしい。

「そんな気もするが、はっきりとは言い切れないだろう？ 建物自体に手を加えるのは無理だが、部屋の中身を変える事はできる」

あくまで術に守られているのは家屋や土地であるらしく、家具や小物等は劣化もするし壊れもするようだ。現に執務室は壁、天井、床は無傷であり、中に置かれていた棚や本たちがぼろぼろになってしまっていた。

「造られた時点と今では、部屋の用途が違う可能性も否定できませんね。しかし、契約文字を知っているのは基本的に王宮の者ですよ？ 位置取り的にも王に近い地位の者が入るのがせいぜいでしょう」

「確かにユージンの意見が一番現実的だろうな」

不確定な会話をしながらも、次々に頁をめくっていたセルアの手が急に止まる。細かな模様の中に走り書きが見つかったからだ。

それは契約文字ではなく、おそらくウィルナの文字だと蘭は目を

凝らし考える。読めるようにと努力しつつもきつかけが掴めないでいる文字は、随分と短いものだった。

「意味ねえか」

「そのようですね」

セルアとユージンは肩を落とし、頁はあつという間に次へ進んでしまう。

「何が書いてあったの？」

読めない蘭が素直に聞けば、返事も早い。

「食べたい物が書いてあったのです」

「食べたい物？」

ユージンが教えてくれたものの、確かに意味はなさそうだった。「まさか日記を契約文字で書きましたと言わねえだろうか」

セルアの発言にユージンが難しい顔で開かれた本を眺め、次に困ったように首を傾げる。

「ランには魂や欠片と読めるものがあるのですよ？ それを思えば契約文字には意味があると考えるべきでしょう」

「どうも書き手は一人じゃないみてえだしな」

よくわからない模様が描かれているという点は変わらないが、ある程度の頁毎に雰囲気は大きく違っていた。

荒々しく頁を埋めているものがあれば、繊細で芸術的な姿を残しているものもある。契約文字は読ませたい相手だけがわかるように魔力を使って残す文字なのだ。蘭が初めて出会った契約文字は随分と美しい工芸品のよう見え、今日の前にある契約文字は本に記されている為に読むべきものだと感じさせる。道に至っては一般的な生活範囲では文字と認識する事すら叶わない。

（結局はどれも読ませたいんだろうけど）

描こうが書こうが構わないものであり、全ては使い手に任されるのかもしれないと蘭は新たな頁を待つ。

「書かれた方の性格が出ているのは確かですね」

がらりと雰囲気が変わり、風景画を描いている頁にユージンが

笑った。

先程、塔から眺めた景色の一部を克明に写したらしい。個人の特定はできなくとも、やはり城の主である可能性は高いようだ。

「ったく、残す言葉と絵のどっちに重きを置いたのがかわかんねえな」

セルアの言葉を耳にしつつも描かれた家屋の一部を見れば脳裏に魂と浮かび上がって来た為、蘭は確信する。

「ちゃんと読める部分はあるよ。魂って書いてある」

書いてあるという表現すらも似つかわしくはないが、とにかくその部分を指し示した。

「全てではなくともランが読めるのはありがてえな。しかし、ここまですて描くもんか？」

どうやら風景画は数十頁続くらしく、セルアは緻密に描かれた紙を呆れたように眺めながらめくり続ける。そうすると今度はやる気の感じられない曲線ばかりが現れた。

「細やかな絵の次は随分と大胆なものですね」

みみずが這ったような波が並ぶだけでも、やはり契約文字らしい。蘭の頭には強制的に言葉が浮かび、否定のしようがなかった。

「しかしところどころに契約文字以外の走り書きもありますが、大したものではないようですな」

「その時あった事を書き止めているだけで、関係なさそうだな」

ユージインとセルアはお互いに確認しながら、時折現れる文字に目を走らせている。

蘭が契約文字である確証を探し、二人は有益性の低い一般的な文字を求める作業がしばらく続く。

そうして延々と頁をめくり半分を過ぎた頃、セルアの手が止まりこれまでとは違う反応が見えた。

「ん……?」

引っかかりのある様子にユージインの視線が動き、息を飲む。

「これは……姫の文字」

ゆっくりと本へ手を伸ばし文字を撫でたユージインが、そこに書かれているらしい言葉を発した。

「分かたれたものが一つになれば、欠けたものは戻る……？」

「欠けた、もの？」

思い当たる単語に蘭は繰り返す。あなたが魂の欠片、失われた魂を取り戻すと、これまで蘭が読めたものは今ユージインが言った内容に当てはまるのだ。失われたと戻るは、同じ意味合いと捉えて構わないのではないだろうか。

二人の視線も自然と蘭へ向けられる。

「あなたが魂の欠片が、仮にランを指しているのでしょうか。そして、姫の文字は欠けたものは戻るか？　そう言っています。ものという表現は漠然としていますが、欠けたという点を見逃すのも惜しくはありませんか？」

「だが、ものの部分が何を指しているのかまではわからないだろう？　あくまでも仮定だ」

「しかし姫は欠けたものを戻そうとしたからこそ書いたのでは？　魂の欠片が当てはまる可能性が高いと私は考えます」

蘭とセルアは黙ってユージインの言葉を聞き入る。

「ならば、ランは姫がここへ呼んだと考えるべきではないでしょうか？」

簡単に呼ばれたと言われても、一体どのようにしたなら蘭をこの場所へ連れてこれるのだろう。術という不思議な力が存在するからこそ見知った世界ではないと思えるが、納得もしきれなかった。

「方法はわかりませんが、この文字を見る限り姫は欠けたものを戻したがっていた」

言い切るように続けるユージインへ、セルアが文字の一部を指し示す。

「そうは取れるが、分かたれたものが一つになるはどうするつもりだ？」

「文字通り、何かを一つにする事ができればランを呼べるという意

味で構わないのでは？」

小さく唸るようにしてセルアは本と蘭を交互に見比べた。

「悪くはねえか。ランは必要があってここにいるはずだしな。だから王族が読めるはずの契約文字の一部を知る事ができるってところか」
何故か必要だと言われるのにも慣れてきた。こうして少しずつ何かが集まっているようにには思えるのだからと蘭は小さく漏らす。

「誰か、この本を読める人がいれば良いのに……」

それにセルアが反応した。

「王族であれば読めるというのは範囲が広過ぎる気がしねえか？」
特に姫に兄弟がいる等の話を聞いた事もなく、父王は病床のほすだ。母は随分と昔に亡くなっているという話であり叔父叔母もしくは従兄弟でもいるのかと思っていると、ユージィンは眉を潜め間を置く。

「この国の人間は、元を辿ればほとんどが繋がっているはずですよ。王族とは呼べなくとも、その血が入っている可能性はありますね」
シェラルドの人間は入れず、アンヘリカの人間もごく最近受け入れ始めたのがウィルナだ。広い国だとは言っても高い塔を登れば見渡せる範囲であり、血筋を辿れば行き着く先が決まっているのかもしれない。

「そうやって来ると、俺達だって読めてもいいはずだ。違うってなると、先視みになんのか……」

面倒くせえと言いながら髪を片手でかき回すセルアへ、ユージィンが問う。

「そうでしょうか？」

「国を治める為に必要とされる証が先視みて事を考えると、一番しつくりくるだろう？ よくわかんねえが、先視みを持つ人物くらいにくらねえと範囲が狭まらない」

「でも、それじゃ姫様以外は読めないって事だよね？」

蘭が聞くとセルアは渋い表情を浮かべる。

「もう一人……いる、とも言えるな」

「もう一人？」

先視みの力は国に一人だけではなかったのだろうか？ 蘭が不思議に思いセルアを見上げると、隣でユージインが溜め息をついたのがわかった。

「それは無理でしょう？ セルア」

「そうかもしれないが、シェラルドにも一人いるのは確かだ」

ユージインも否定はせず、セルアも決して納得している様子ではない。

「シェラルド？」

素直に疑問を口にした蘭へ、セルアはそっぴゃとお前は知らなかったなと続ける。

「先視みの力は、ウィルナとシェラルドに、必ず一人ずついるものだ」

「ウィルナでは姫が先視みできるように、シェラルドでも第一王子のマティアスが力を持っているはずですよ」

セルアの言葉を引き継いだユージインを見ながら、蘭は更に聞いた。

「その第一王子も未来が見えるって事？」

姫はウィルナの未来を見る事ができ、その力を使いながら国を治めている。ウィルナは美しく活気のある町であり、蘭の常識とかけ離れてはいるがうまく機能しているように見えた。

シェラルドも魔力により成り立っているとは聞いていたが、先視みという力までもがあるとは思ってもいない。

「おそらくと言えませんが、そうなのでしょう」

「あいつが先視みで得たものを口にしてる姿しか見てねえ上に、シェラルドの人間と話をする機会もない。そういうもんだと知ってるだけだ」

二人が不確定な返答を寄こし、蘭は考える。

「ならシェラルドもウィルナと同じような国だと思っていいいのか？」

「同じような国？」

セルアが聞き返してきた為、蘭は頷く。

「町の雰囲気とか色々な部分。未来が見えて国を治めてるのなら、変わらないんじゃないの？」

それにはユージン、セルア共に随分と複雑な表情を見せた。

「ウィルナ自体がここ三年で大きく変わっているの、違うのではないだろうか」

「ああ、俺もそう思う」

「どういう事？」

より良くする為に未来が見えているとばかり思っていたのだが違うのかと聞けば、ユージンが本当に仕方なさそうに告げる。

「ウィルナでは姫が先視みを引き継ぐまで、王が国の為に良くないと判断した者を処刑していたのですよ。全国民が王にまみえる機会はないので、あくまで城に入った者がほとんどではありましたがね」

「処……刑？」

思いもしない物騒な言葉に、蘭はとにかく繰り返す。

「別にその王だけがって事じゃねえよ。どのくらい前かは知らねえが、長く続いていたもんだぞ」

いつからかもわからない間、王の言葉一つで人を殺していたのかと蘭は驚くばかりだ。

「そんな事って、おかしくないの？」

聞けばセルアは大きく首をすくめる。

「改めて聞かれればそんな気もするが、もしおかしいと思っても単なる一国民がどうにかできるもんでもねえしな。王宮にいる奴らだって、いつ自分がそんな目に遭うかわかったもんじゃないと思いつつ働いていた。俺達だってそれは変わらない」

「ですが、どうやら私達二人はとても良い未来が見えるらしく、王からの扱いは良かったですしね。不安も少なく過ごしていた方だとは思いますよ？」

ユージンはわからないが、セルアは半ば無理やり城に留まる形

ではなかったか。蘭がそう思っているとセルアが口端を上げた。

「初見で駄目だと思ったら、とっくに殺されてたって事だ。それ以外なら扱いが良いってとこだな」

殺されなければ良い扱い、それで構わないのだろうか？ どうにもこれは蘭の常識には当てはまらない。

「それでも城で働くうちに何が変わったのか、良くないと言って消される場合もありましたしね」

ユージンはさらりと消すと言ったのだが、もちろんそれは命そのものを消してしまうのだろう。

「城に仕えるのは命懸け、それが当たり前だったからな。そんな気がなくてもたまたま町で良い未来が見えたと目を留められ、そのまま城に入れと言われる場合もある」

「さすがにそうやって来た人達は滅多に消えないようでしたね」
「確かにな」

蘭にはただ恐ろしい事に思えたのだが、二人は大きく気にかけているわけでもないらしい。当たり前のように会話を続けていくばかりだった。

先視みというものがあり、限りなく近い先という蘭自身に関わりがありそうな言葉を姫が残したとは理解している。だからこそ先視みとは何かの手がかりのような、ちよっとしたきっかけくらいに考えていたのだ。まさか人の命を奪うものとは想像もしていない。

蘭は驚き二人の話を聞いているばかりだったがどうにか言葉を出す。

「なら、どうしてやめたの？ 姫様だって同じように見えるんですよ？」

長く続いてきたものを止めたのなら、理由があるに違いない。蘭の質問に二人はわずかな間を置きはしたが、まずはセルアが何かを思い出したように笑った。

「理由なんて大したもんじゃねえよ。くだらねえって言ったんだ」
「え？」

ユージンも同じく笑うだけであり、本当に大きな理由はないように見える。

「ええ、くだらないと言っていましたね。先視みが悪いと告げたからと殺す必要はないのかもしれないと、気まぐれのように止めたのですよ」

「そう、なの？」

「あいつは見てる限りでは気まぐれだからな。何か考えてんのかもしれねえが、とにかくくだらないからやめると言いやがった。結果も悪くないし、良かったんじゃないか？」

「実際、雰囲気が以前よりも良くなりましたね。城の中でも怯えるような空気がなくなり、皆の働く意欲も増したように見えますよ。町の者も仕官の声がかかってでも殺されないとわかり、随分と気軽に返事を寄こしているようです」

柔らかに笑ったユージンへセルアもそうだなと返事をする。

蘭がおかしいと感じたように姫も考えたのかと思うと、少しばかりだが安堵できる。もしも、本当に蘭が姫に呼ばれたのならば、簡単に誰かを殺してしまうような人物ではない方が良い。

「じゃあ、シェラルドは殺しているのかもしれないし、そうじゃないのかもしれないって事だよね？ 特に情報が入ってくるわけでもないんでしょ？」

お互いに人の行き来を禁止しているらしいのだ。シェラルドには本当に先視みがあるのかも怪しいのではないかと蘭は思うが、読める人物を求めるという理由から口にはしない。

「そうなるな」

「もし知りたいのならば、密偵を使うほかはないでしょう」

ユージンの発言にセルアが渋面を作る。

「それは駄目だろうが、あいつがいない時に下手な動きはできねえ」「わかっていますよ。ならば向こうの状況を知る手立てはないに等しい。第一王子がこの本を読める可能性はあっても、それを実行する術がありません」

「そうなんだよな、まったく厄介なもんばかりが現れやがる」

セルアはぼやきながらも、更に頁をめくったのだが以降は全て白紙だった。飛ばして書き込まれてはいないかと探してはみたが、何も記されない紙が続くばかりである。

「代々書き連ねて来たという事なのでしょいかね」

最後に書いているのが姫と考えるとそうなのだろうと話はまとまったが、新しい情報を手に入れたものの解決までは至らない。

「こいつは屋敷に持っていくか？」

セルアの提案にユージンも頷く。

「まだ簡単に目を通しただけですからね。もしかすると私達にも読める文字で何かがあるのかもしれないし、ランが何かを見つけてくれる可能性も捨て切れません」

「なら決まりだな。さて、俺達は屋敷へ戻るか」

本を閉じたセルアが小脇に抱えて立ち上がる。そして空いた片手を差し伸べてきたので、蘭は素直に掴み立ち上がった。

「最近のセルアには驚かされますね」

含みのある台詞と共に笑ったユージンへ、セルアがきつく眼差しを向ける。

「うるせえな」

「姫がいたならば喜んだでしょうに。珍しいものを私だけが見たとなっては怒られてしまいます」

声を出して笑いながら立ち上がったユージンは、机に置いた箱を取り上げると蘭へ告げた。

「そのままの姿で帰すわけにはいきません。私が戻って来るまではここにいてくださいね」

「ああ、そうだな」

納得するセルアの声を聞きながら、蘭も己の姿を思い出す。

暴発により破けた衣服で城内を歩くのは、確かに無理そうだった。

四章・注ぐ光に孤は惑う（二）

屋敷へ戻って来た蘭は、着替えを済ませる。

ここへ来るにあたり執務室で着替えると思っていたのだが、蘭が手渡されたのは足元まであるマントだった。ユージンには部屋の状況を見たら誰も何も言えないはずですからこれでじゅうぶんと告げられ、行きと同じく緊張しながらここまで歩いて帰って来たのだ。

全身を隠すように羽織っていたマントを取った蘭は、更にその下の衣服を脱ぎ始める。

（こんなになっちゃったんだもんな）

強風で細々と剥ぎ取られた衣服は使い物にはならないだろう。大きく肌を露出するような穴は空いていないが、蘭が指でつまみ軽くひっぱるだけでも裂けてしまうのだ。

脱ぎ捨てる際に布が擦れ痛みを感じ確認すると、むき出しになっていた部分の肌がところどころ赤くなっている。皮膚に細かな傷があるように見えどうやら擦り傷らしい。

慌てて新しい物を着て鏡を覗くと、頬にも無数に擦り傷のようなものがあり赤くなっていた。

「うわ……洗ったらしみそう」

どうしてこんな目にも思ったが、その後を思い出すと原因となったセルアに不満を覚えづらい。

（このくらいで済んで良かったって思わなきゃいけないのかもしれない）

ひりつく頬を触りながら、改めて自身が危険な状況にあったのだと実感し始める。

目も開けられない吹き飛ばされそうな風にあおられ、衣服は破れ細かな傷も負った。

それでも蘭は運が良かったに違いないのだ。

セルアは確かに家族を吹き飛ばしたと言った。目の前にいた妹の命を奪い、住んでいた家を碎いてしまったと告げた。そしてまた同じ状況になると思っただけだ。

それに限りなく近い所に自分はいたのだろう。本当に命を脅かす威力を持つ一歩手前だったのかもしれない、そう思いながら鏡に見入っていると扉の外から声が聞こえた。

「ラン、もういいか？」

普段ならば勝手に入ってくるセルアだが、着替えをする為に外で待たせている。蘭は大きく返事をしながら扉へ足を向けた。

「いいよー」

扉は蘭が辿り着く前に開き、顔を覗かせたセルアが何故か眉を寄せる。

「どうした？」

「何が？」

こちらの台詞ではないかと思いつつも聞けば、セルアは立ち止まった蘭の目の前へやってくる。

「顔が悪い」

ついと顎を掴まれ上を向かされた蘭は、セルアを強制的に見上げる格好になった。

「別に、大丈夫だよ」

着替えながらに気付いた恐怖が、今更ながら蘭に影響を及ぼしたのかもしれない。鏡に映る自身の顔色など気にも留めなかったが、セルアは酷く不安そうな表情を見せている。

大丈夫と告げた言葉が耳に入っているのかどうか、セルアは蘭の腕や足へ目を走らせた後に視線を顔へと戻す。

「俺が傷つけちゃったな」

辛そうに歪めた表情に、蘭は腕を動かして見せながら笑みを浮かべる。

「ちょっと痛いけど、平気だよ。このくらいすぐに治るし」

赤くはなっているが、この程度はかすり傷だ。数日も経てば何事

もなかったようになるのはわかりきっている。

常々はつきりとものを言い堂々としているセルアが、妙に怯えたように感じられた。だからこそ蘭は強く出られなかったという部分もある。

（大丈夫なのかな？）

すぐに言葉も寄こさずにいる姿をとにかく見上げていれば、随分と小さな声で聞かれた。

「……俺が、怖くはないか？」

突然、怖いと言われたものの何の事かと首を傾げる。

「どうして？」

今更何なのかと聞き返せばセルアは大きな溜め息をつき、わずかに普段に近づいたように見えた。

「一歩間違ったら死ぬような目にあっただぞ？ そんな俺が怖くはねえかって聞いてんだ！」

確かにセルアが原因で危ない目にはあったが、それもどうにか回避できたのだ。過ぎた事を気にしても仕方がないだろう。慣れはしないがウィルナに来てからというもの、驚く事ばかりが続いている。「うーん、着替えながら赤くなってるの見たらちよつと怖くなつたけど、別にセルアは怖くないよ。だって、もう大丈夫なんでしょ？ わたしからするとほとんどの事が驚くようなものだもの、無事だったんだし気にしていられない」

返事がない為に蘭が改めて腕の赤みを気にして触れると、セルアは顎に添えていた手を離す。そうして今度は蘭の頭に手を乗せると、撫でるでもなく数度揺さぶったのだ。

「酔いそうだから、やめてよ」

自分の意思とは関係なしに乱れる視界に、蘭は手を伸ばしセルアの腕を掴んで離させる。すると部屋に入ってから冴えない表情だったセルアが笑う。

「お前ってよくわかんねえ」

「何よ？ それ」

「俺に平気で触れるんだな」

何を不思議がられているのかがわからない蘭は、思ったままに告げた。

「セルアがいつも触って来るんじゃない。ここ何日かその姿になってからは増えた気もするし」

己の行為を省みないのかと睨めば、何故かセルアは驚きで目を見開いたらしい。そうかと思うと今度は声を立てて笑い出し、蘭が驚くはめになる。

ぽかんとしているこちらを余所に、セルアはひとしきり笑った。

「……俺が、馬鹿馬鹿しい事を聞いたみてえだな」

そうして蘭の髪を一房手に取ったかと思うと、自分の口元に寄せる。

「！」

またも驚かされた蘭が体を数歩下がらせれば、髪はするりとセルアの手を逃れ重力に従い背中へと戻った。

どうしてそのような動きをするのかと言いたげなセルアの視線に、蘭は自分こそがその感情を抱くにふさわしいのではないかと思う。

「さっきもだけど、何なの？」

「ん？ 何がだ？」

「どうして髪にキスするのかって事！」

当然だと言わんばかりの動きは、蘭にとっては意味がわからない上に妙な恥ずかしさを覚えるものだ。わざわざ言わせるのかと不満を面に表せば、セルアは何故か嬉しそうに笑みをたたえる。

「ランが魔力を吸い取るみてえだからな」

執務室で魔力の暴発を止めたのは自分だと言われたが、実際どのようなにして止めたのかはわかっていない。髪に口付ける動きこそがそうなのかと聞く。

「髪が吸い取ってるの？」

「髪だけじゃねえよ。ランの体自体に魔力が溜まってんな。苦しいとかはないんだろ？」

多少ふざけているようにも見えた瞳が心配するものへと変わり、蘭は頷いて答える。

「何でもないよ？ 魔力があるっていうのもわからないし」

セルアの言う通りならば、強風が止まった時に蘭が魔力を吸い取った事になるのだろう。しかし変化として気付けたのは皮膚についた細かな傷だけだった。本当に自分の中にあるのかすらわからない。

「まあ、使い方を知るうちに身につく感覚だからな」

セルアは再び蘭の頭に手を乗せ、今度は静かに目を閉じた。どうしたのかと見上げるこちらを気にする事もなく時間は過ぎ、瞳が開かれれば話は変わる。

「お前あの板はどうなってる？」

板と呼ばれる物は一つ持っているだけだ。マルタから貰ったあなたが魂の欠片と契約文字の刻み込まれたものである。それは魔力の暴発にも負ける事がなかったらしく、しっかりと蘭の胸元にぶら下がっていた。

「何でもないよ？」

首にかかる紐を引っ張り、取り出した板を手のひらに載せるとセルアに向ける。

何も変わらず光り輝く板をセルアは摘み、己の手のひらに乗せると何故か口の端を吊り上げた。

「やっぱり、こいつの魔力まで吸い取ったな」

そのままセルアが板を握り締め、すぐに開いて見せると変わり果てた姿が現れ蘭は声を上げる。

「ええ！」

どのようなにしても壊れないと言われた物が、何故かばらばらに砕けてしまっていたのだ。

「長い年月の劣化を魔力で抑えてたんだ。それが解ければ脆いもんだな」

「壊しちゃ駄目でしょう？ どうしてそんなに落ち着いてられるの

！」

セルアの手のひらを掴んで蘭は訴える。意味があるからと持っていたはずの物が、一瞬で粉々になってしまったのだ。焦って指で欠片に触れると、更に細かく砕けてしまいうろたえる。

「何かに必要なものかもしれないのに」

集めようとしても触れる度に小さく姿を変えるばかりであり、今まで金属のような質感を持っていたとは思えない。まるで砂のようにさらさらと崩れていってしまうのだ。

「こいつの役目は終わったってこった。込められた魔力はランに移った――それで良いんだろうな」

「わたしに移った？」

こちらの焦りなど気にも留めない姿に意味があるのかと問えば、セルアの空いた片手が蘭の手に触れる。

「こうしてランに触るだけでも魔力を感じんだよ。しかもとんでもない量だ。俺が暴発させた魔力だけじゃこうはならねえはずだと思えば、板を守っていた力が失われていた。一緒に吸い取っちゃったんだろうよ」

ユージンですらセルアに聞かなければ魔力はわからない。そして、セルアがそうだと言えばユージンも納得している。蘭も信じるべきなのだろうとは思いつつも、聞かずにはいられない。

「そう……なの？」

「そうとしか考えられねえな」

セルアは再び手を握ると窓際へ向かい、机に置かれていた小瓶へ板だった物を入れる。蘭はただ、さらさらと破片が鈍い輝きを放ちながら積もる姿を見つめ、ふと生まれた疑問を口にする。

「ねえ？ もし、国を護る魔力が解けたらどうなるの？」

ウィルナ自体が大きな魔力に包まれ、風化を防いでいるはずだった。

魔力を失った板は儚く散ってしまったが、もしも国だったならば何が起きるのか？ まさか同じ末路を辿ってしまうのだろうかと不

安が過ぎる。

全てを入れたセルアは蓋をはめると振り返り、感情の見えない表情で告げた。

「ちょっとした衝撃で崩れるだろうな、どの家も城も……何もかも」

「そうなる……よね？」

小瓶に移された板は、蘭が眺めようともあなたが魂の欠片とは訴えてこない。

思い返せば胸元から取り出した時点で目にしているのだが、強制的な言葉が脳裏には浮かんでいなかった。繊細な模様はそのままだったが、魔力を失えば何も伝えはしないらしい。

セルアはまた蘭の髪に触れ、撫でながら静かに続ける。

「だから俺達は魔力のほとんどを国の為に使うんだ。生活していく為に必要な物を守らなければ、生きていけねえからな。新しく家を造るにしても材料がない」

「材料がない？」

ウィルナの家屋は石造りであるが、周りは砂ばかりだった。どこから手に入ってくるのかは検討もつかない。

「シェラルドは岩に囲まれているらしい。もしかすると昔はそこから採って来てたのかもしれないが、今は無理だな。アンヘリカを通せば手に入れない事はないが難しい、ある物を守り維持するのが最優先なんだ。その為に必要な魔力がランの髪にもある」

話がまた髪に戻ったと思いつながら聞く。

「本当に姫様と同じなの？」

「同じなのは髪に魔力が溜まるってとこだけだな、ランはそれ以外にも随分と体に溜めてるみてえだし」

そうなるも姫の体には魔力が溜まらないのだろうか。それを聞く間もなくセルアは告げる。

「俺としてはさっきみたいな状況になる前に魔力を吸い取ってもらいてえんだよ。体を小さくする事はできないだろう？」

セルアの言葉はよくわかる。過去の辛い記憶を呼び戻すような状

況をまた見たいはずもない。そして蘭はユージンに強く望まれセルアの体を小さくしようと幾度も挑んでいたが、成果は全く現れていない。

「でも、どうやったのかわからないんだよ?」

気付いたら暴発は収まっていたのであり、魔力を吸い取るという感覚が存在しているのかもわからなかった。

「だから俺から入れられるかを試した」

「試した?」

セルアがまた蘭の髪を手取る。

「こうやって髪に口を寄せると、そこから魔力が入るって事だ。おそらくは体に直接のほうの手っ取り早いんだろうがな」

「手っ取り早い?」

自分の髪に口付けるセルアの顔を見上げながら蘭が言えば、触れていた手が離された。

「手で髪に触れるよりも、口からの方が多く入れられる。それを考えるのだな」

そして全てを言い終える事もなく、蘭の頬へセルアの唇が落とされる。

突然焦点が合わない程目前に来た顔と感触に、蘭は目を白黒させながら頬を真っ赤に染める。

「な、なな、何?」

両手でセルアの胸を押し返し体をわずかに遠ざけると、満足気な笑みを浮かべる姿が見えた。

「思った通り、髪よりも入りがいいな……」

入りが良いというのは言葉通り、魔力が蘭に移っているのだろう。しかし、本当にそうなのかを確認する術はない。

蘭は必死に執務室での事を思い出す。

「さ、さ、さっきはそんな事しなくても吸い取れたでしょ?」

何を好んでこんな恥ずかしい事をされなければならないのか、どうやらセルアは楽しんでいる様子だが、蘭にはそんな余裕は一切な

い。

「とにかく風が吹いてセルアがやめろと言って、わたしもやめ
て思ったら止まったんだから、もっと他の方法があるはずだよ」
熱い頬をどうにか治めようとしながらセルアを見ると、面白くな
さそうな口ぶりで言われる。

「俺はこの方が気に入るそうなんだが？」

「わたしは嫌なの」

ゆっくりはつきりと告げれば、セルアの眉根が寄った。

「なら、吸い取って見せろ」

「え……」

「吸い取って、見せろ」

方法がわからないのを知っているだろうにも、セルアは不満げに
腕を差し出してくる。

蘭は困ってしまったが、何もしないよりは挑戦してみるべきだと
先程と同じくセルアの片腕を両手で掴んだ。

あの時はセルアの腕である事もわからずしがみ付いていたのだが、
おそらくそれが重要だと感じた。吸い取ると言うくらいなのだから、
どこか相手に触れていなければならないはずだ。

そして、やめてと思うと風は凪いだ。しかし、やめてはこの場に
そぐわないように思える。

（やめてじゃなくて、セルアの魔力を吸い取りたいと思えばいいの
かな？）

蘭はそう考えると、心の中で繰り返し唱えた。

何かが変わった気配は感じられなかったが、セルアを見上げて問
う。

「どう？」

セルアの手が蘭の頭に乗せられ、魔力を確認するにはこうするし
かないのかと思いつながら返答を待つ。

「お前の魔力は増えてねえな」

「どうしてわかるの？」

「そう言われると難しいな。自分の魔力の確認はできないが、他の奴らのはわかるってのは割と多いんだ」

「自分はわからないの？」

「なら暴発する前に何とかしようとするだろ？ 昔よりも魔力が溜まり易くなってるのか、だるいとかもなく急に苦しくなったしな。俺もその瞬間までわからなかった」

どうにも不便だと思いながら、蘭は自身の髪を手にとってみる。

本当に魔力が溜まっているなら、いずれ自分もその限界に辿り着く可能性があるのでないだろうか。

「わたしも暴発するんじゃないの？」

するとセルアは更に片手を足して、蘭の頭に触れながら数度首を傾げさせる。

「俺も思ってたんだが、こうやって見る限りではなさそうなんだよな」

「なさそう？」

「なんていうか……とんでもねえ量が入っているのはわかるんだが、無理がない。底なしなのか？」

疑問が疑問で返って来る事にはなったが、どうやら大丈夫らしいと思いたいところだ。

「髪に魔力を溜められる奴は暴発を起こさねえのが普通だから、そっちを基準にするべきなのかもな。とにかく俺と板の魔力を吸い取ってもこれなら、何て事なさそうだな。むしろ簡単に取れる方が怖い」

潜められた声は確かに何かを危惧しているように感じられ、蘭も不安に駆られる。

「怖い……？」

「もしお前が国中の魔力を体に入れてしまったら大変な事になる。ランは魔力を吸う必要はなく、俺が入れる——というよりは入れさせてもらう……か」

体を小さくする事ができない今、セルアは持て余す魔力を放っておけばまた暴発をしてしまうのだろう。それを防ぐ為には蘭が魔力

を受け取る必要はあるのかもしれない。

しかし髪に口付けたりする動きは止めてもらいたいと、念を押す為にも蘭は告げる。

「だからと言って……っ！」

言いかけた蘭の唇のすぐ側に前触れもなくセルアの唇が触れた。落ち着きかけたはずの顔の熱さが戻り、何も言えぬまま口はぱくぱくと酸素を求めるように動いた。

軽く触れるだけで唇はすぐに離されており、セルアは首を捻る。

「変わらねえか」

そう言いながら片手で蘭の頬に触れたかと思うとそのまま親指が唇に添えられる。ゆっくりとそこを撫でると、見下ろす瞳がやけに艶っぽく輝く。

蘭は金縛りにでもあったように体を強張らせ、セルアを見上げているだけだ。

確か魔力を体に入れる話をしていたのではなかったか？ いや、そのはずだった。しかし、今のセルアの雰囲気は明らかに違う。近づいてくる口の端が上がり、当然のように告げてくる。

「目閉じろ」

抗い切れない呪文かと思う程、一瞬素直に従いそうになった。だが、はっと思い直す。

「閉じるわけないでしょ！」

思い切り力を込めて目の前にある脛を蹴りつけてやると、痛えと声を上げてセルアが後退した。それと同時に触れられている手を払い除け、蘭は喚き立てる。

「何で急にこうなるわけ？ おかしい！ 絶対おかしいでしょ」

しかしセルアは脛を抑えながら事もなげに言う。

「髪より肌なら、それ以上もありそうだろうが」

それ以上の部分に蘭は過剰に反応する。セルアが何をしたいのか理解しようにも頭が追い付きそうにもない。

「それ以上って何よ！ 意味わかんない。魔力を吸い取るのが問題

であって、こんな事しなくたって入るんでしょ？」

「だから試そうとしたんだろ。それに俺はお前が気に入ってるから、願ったりだしな」

さらりと願ったりと言われても困ると蘭は力強く告げる。

「わたしの意思は？　そこ大事でしょ」

ほんの数日前にもこんな会話をした気がすると思い出した蘭へ、セルアは不本意そうに頷く。

「ああ、そうだな。クロードにあんな事を言うんじゃないかと、今更ながらに思ってる」

セルアは心底残念だと言わんばかりに溜め息を付いて見せた。

「どういう事？」

「多少強引なところがあっても構わないだろう？　その気になったらいつでも言えよ」

楽しむような口ぶりに蘭は、表情を緩める事もできない。

「納得いかない……」

「必要なだから構わないだろうが？」

「勝手に必要な部分を決めないでよ。セルアが触れば魔力は入るんでしょ？」

自身でわかるものならば指定もしやすいのだが、どうにもセルアの発言が真実なのかも疑わしい。

（暴発はしてるんだから、吸い取る必要はあるはずなのよ。でも、わたしにはわからないしユージンも無理だし）

第三者がこの程度でじゅうぶんと、太鼓判を押してくれる状況は望めそうにもないのだ。とにかく好き勝手にされては困ると、蘭は意見をぶつけ始める。

四章・注ぐ光に孤は惑う（三）

セルアの自由な口ぶりが気に入らない蘭は散々文句を言い、相手もそれには納得している様子だが受け入れる気もないらしい。話がまとまらないまま延々と言い合うのかと思われる状況にやって来たのはユージンだった。

二人の姿を見るなり、どうしました？ とユージンは言ったが深く追求する事もなく、セルアに用件を告げる。

「セルア、髪を使いようで貴方が必要だそうですよ。行ってください」

部屋の中央で立ったまま繰り広げられていた二人の会話は強制的に終了を迎えた。セルアは面倒だなと呟くと、蘭の耳元に顔を寄せそのまま口付け囁く。

「このくらいは許せよ？」

そうしてだるそうに部屋の外へと歩いて行き、蘭は触れられた耳を押さえ立ち尽くしたままその姿を見送る。

ユージンは物珍しそうにこちらを眺めているばかりであり、セルアが屋敷から出て行ったとわかると苦笑しながら蘭をソファへ促した。

「戻って来てから、ずっとそうしていたのですか？」

言われてみるとそうな気もするが、特に言い合っていたばかりでもない。しかし、座る事もなくいたのは確かであり、蘭は何も言わずにソファへ身を沈める。

まだ熱い顔を鎮めるように両手で挟んでいると、向かいに座ったユージンが聞いてきた。

「セルアは随分と機嫌が良さそうでしたね」

あれは機嫌が良いのだろうかと思いつつも一応頷く。

「わたしが魔力を吸い取る話をしてたはずんだけどね」

簡単にだがセルアが蘭へ魔力を入れられる事を説明すると、ユー

ジインはなるほどと言いつ分と長い間を置いた。

「体を重ねれば、より魔力を入れられる。そのような考え方もあるのですね、悪くはない」

ただ自分の意見を口にしたらしいユージインだったが、体を重ねるという発言に蘭は慌てる。

「そこまでの話はしてないよ」

蘭とセルアが言い合っていたのは髪や頬に口付けするという点であり、ユージインの発想は飛躍し過ぎているのだ。

「それはわかっていますよ。しかしその考え方でいくと、より魔力を取れそうでしょう？」

そうなのかもしれないが、決して好ましい方法ではない。

まさかユージインが受け入れた上に、こうもとんでもない提案をしてくるとは思ってもいなかった。セルアがまた暴発してしまうのは危険だが、さすがに遠慮したいと蘭は続ける。

「多く取れるからって言ったって、執務室では腕に触っていただけなんだよ？ どうして吸い取れたのかもわからないままだけど、そのうちできるようになるかもしれないし」

穏便に済ませたいのだと訴えかければ、ユージインはわざとらしい笑みを浮かべる。

「そのうちでは困るのですよ。たった数日で一室の中身を駄目にしてしまうような暴発を起こしてしまうでしょう？ 私としては確実に魔力をランへ移していただきたいのです。無理にそうしなさいとは言いませんが、最悪の場合はそれもあると思っていてくださいね」

「え……？」

決して否定はしないユージインに、蘭は言葉を詰まらせる。いつも通りに爽やかな笑顔を浮かべてはいるが、瞳は強く真っ直ぐこちらを見据えていた。

「私は姫が戻るまで国を守らなければなりません。そして、セルアを失うわけにもいきません。もちろん貴女もです。その為に必要な事はしていただきたいのですよ」

何も言えずにいる蘭へユージインは続ける。

「私が二人をアンヘリカへ向かわせたのは、セルアに魔力を使わせる為です。暴発させないようにできるだけ多くを使わせたかった。しかし、十二の姿ではあつという間に使い果たすような術を簡単にこなし、そして間もなく抑え切れなくなった。それだけの姿に貴女は戻ってしまったのですよ？」

決して本意ではなかったが、セルアをあの姿にしたのは自分だった。だが、あれは半ば無理やりの状態で、理由もわからず偶然に起きてしまった出来事とも言える。

「否定はしないけど……」

「貴女も災難なのはわかりますが、私はどれか一つではなく全てを選びます。最悪の事態を招かない為にも、ある程度は我慢できませんか？ どうしようもなくなってからでは後悔するでしょう？」

柔らかに笑ったユージインに、蘭は仕方がないと溜め息を付く。

「なんとなく、わかった気がする」

「察しが良くて助かりますね」

ユージインは本当にそこまでを望んではないのだ。セルアが髪や肌に口付けるのを蘭が拒否し、惨事が起きる事を危惧しているらしい。わざとそう言う事で、こちらを納得させようとしたのだろう。最終手段に比べれば、大した事もないと思えるようにだ。

全てを守る為には多少の事には目をつぶらざるを得ない。それがユージインの考え方なのかもしれないと思いつつ、蘭はわずかにだが受け入れる。

「できる事はしなさい、でしょ？ わたしがセルアを大人の姿にしたのは事実だし、魔力を吸い取ったのもよくはわからないけどたぶん真実だもんね」

「はい。申しわけありませんが、頑張っていたみたいです。貴女にしかできない事です」

自分だけができる事。蘭がこの世界にいる意味があるとするならば、その中にはこれも含まれている。そう考えるしかないのだろう

かとわずかに溜息が漏れた。

気は乗らないが、どうせ最近はセルアとクロードがべたべたと触れて来るのだ。少々髪に口付けられるくらいはどうとでもないと思っ
てしまえば良い。蘭は自らへ暗示をかけるように脳裏で何度も言
い聞かせる。

（でも恥ずかしいんだよな）

クロードはともかくセルアはしっかりと理由があるのだ。もしも
暴発したならば誰かの命が奪われる可能性すらある。その為にも自
分は魔力を受け取る必要があり、触れられなければならない。

（そう、触れられなきゃいけないのよ）

何やらおかしい思い込みだと疑問を抱けば、ユージインがこちら
を見て笑っているのに気付く。

「面白いくらい表情が変わりますね」

どうやら面に出てしまっていたらしい、蘭は少し不満気に答える。
「わたしだって色々考えてるんだから。ここ何日かで一気に色んな
事が起きた気がするし」

考えるべき事は他にもあるのではないかと思いつく。一つひとつ
の意味は不確かだが、何かが集まって来ている感覚もあった。

「そうですね。今日だけでも随分な事が起きました」

ユージインも思い返したのだろう、苦笑しながら言葉を続ける。

「私は貴女を城へ入れずにいましたが、それは間違いだったよう
です」

「間違い？」

「今日だけでランは城内で二つの契約文字を見つけているのですよ
？ それをもっと早く知れたのならと思っっているのです」

今まで城へ入れずにいた事をユージインは悔いているらしいが、
仕方のない事だった。

「何が正解かはわからない状態で、必要もないのにわたしがお城に
入るのは変でしょ？」

数ヶ月なら城へ入らずともやり過ごせる。そうした理由があるか

ら蘭は屋敷で過ごし続けたのだ。

ユージンは納得しきれないらしく、小さく息を吐いた。

「貴女が動く度に何かが起き、わずかでも情報は増えています。その為には私達がランを様々なものへ触れさせるべきでした。結果論だとはわかっていますが、少し残念なのですよ」

確かに何かしら行動する度に、あなたが魂の欠片、失った魂を取り戻す、契約文字で書かれた本と情報は得ている。しかし、本当にそれを早く知る事ができたのかはわからない。

「時期を待とうと最初に言ったのはユージンだよ？」

物事には来るべき時があると蘭に言い聞かせたはずのユージンが、今はどこか焦っているように見える。

どうしてこの屋敷で目覚めてしまったのか、何故姫と自分は似ているのか？ 帰りたいが方法がわからず周囲に騙されているとすら思った蘭を、ユージンはなだめ続けてくれたのだ。

「そうでしたね」

ユージンは静かに頷くと、テーブルの上へ無造作に置いていた本に触れる。めくる事はなく、ただ白く細い指が表紙の縁をなぞった。

「急ぐ必要はないのかもしれませんが。はっきりとした意味や目的はわからずとも、この中に書かれた文章を見る限り貴女は姫に呼ばれている」

「姫様に……」

おそらくですがねと言い、伏せ気味の瞳で本を見つめながらユージンは続ける。

「あの方が何をしようとしていたのか、私にはわかりません。そして心配もあります」

「心配？」

何があるうとも笑みをたたえと思っていた人物が、はっきりと不安を感じさせる表情を見せた。

「ええ。初めランはただ姿が姫に似ているのだと思っていました。」

しかし、貴女はアンヘリカへ行き自由に行き来ができる証を手に入
れ、更には姫が定期的に供給して来た魔力も同じように髪に宿して
しまった。少しずつですが、姫に近づいている気がします……」

そのものに近づくとは不思議な表現だと蘭は聞き入る。

「姫はアンヘリカとの関係を良くしたがつっていた。しかし、今ひと
つきっかけが掴めずにいたのです。ランは身一つで歓迎されるでし
ょう？ それと共にセルアや私が入る許しすらも手に入れた。直に
彼らを知る機会には有益なものであり、更には姫の手では叶う可能性
も低かった」

契約文字を読んだ事でマルタ達アンヘリカの人々は蘭を歓迎して
くれる。それが何を意味しているのかも全くわからないというのに、
喜んで受け入れてくれるのだ。

「そして、姫の不在を知られる一番の心配でもあった魔力の供給す
らも解決しました。あまりに強い力に皆困ってしまいましたかね」

だからセルアが呼ばれたのですよと、ユージインは補足する。

「もちろんそれ以外にも、様々な困り事があります。しかし大抵は
私とセルアでどうにか対処できる内容です。姫自身が不在であると
知られれば問題にはなりますが、今日のようにわずかに姿を見せる
だけでもやり過ごせる。正直……今のままでは特に困らないのです
よ」

そう締めくくったユージインに、蘭は良い事なのではないかと思
う。不在の姫が帰って来るまでの間、無事に過ごす為には必要な内
容のはずだった。

素直に伝えればユージインの表情は更に暗くなる。

「私はそれが怖いのですよ。貴女がここに馴染んでしまい、姫が帰
って来ないような気がして来るのです」

「でも、先視みの力で必ず無事だってわかってるんでしょ？」

この世界で目覚めた時、怪しむ程簡単に納得していたユージイン
とセルアが思い出された。しかし肯定は返ってこない。

「あくまで本人が言っているだけで、はっきりとした内容はわから

ないのですよ？ 見えない者にとっては不思議なだけの力です。先を知る力は重要ですが、私は確信が持てないので好きではありませんん」

すっかり信じ込まれていると思っていたのだが、どうやら違うらしい。

「納得してるんだと思ってたけど、違うんだね」

顔色の冴えないユージンは、困ったように眉を下げる。

「いえ、ほとんどの者は信じていますよ？ 私個人がそう思っているだけです。ウィルナは先視みの力によって生きながらえているのですからね。不思議かもしれませんが、先視みが良いか悪いかを見極めなければこうして暮らしてはいられないのです」

考えてみると、どうして先視みを信じる事ができるのかを疑問に思ってしまう。ほとんどの人が盲目的に信じているという状況、そしてつい三年前まではいつ命を奪われるのかもわからない、そんな力を受け入れて来た。

「はっきりと形がわかるものでもないし、信じるのは難しいのかもね。でも、良いつて言われてしまえば自信が持てるのかな？」

ユージンとセルアは扱いが良かったと言っていた。何かしら差は生まれるのかもしれない。

「確かに悪い気はしませんね。王は私を見る度に良い未来だとお喜びになりました。姫も私とセルアの未来は素晴らしいと口にしていきます。だからこそ尽力しようと思えている部分がありますよ」

「そうなんだ。よくわからないけど、先視みに良い部分はあるって事だね？」

「ええ。しかし本当に国の為になっているのかと、疑問に思う部分もあるですよ」

「たとえば魔力がなければ壊れてしまうとしても、ウィルナ自体は繁栄しているんじゃないの？」

セルアから聞いたのですねとユージンは言い、話は続く。

「そうなのですが、それでも戦いが起これば被害者は出ています。

過去の記録を見ても、それにより何かしらの利益を得ているとは思えません。それでもアンヘリカを手に入れようとする、ウィルナとシェラルドの頑な態度が不思議なのです。アンヘリカは唯一、魔力の庇護がなくともぎりぎり生きていける土地です。それはとても貴重な事なですよ？ それをわざわざ荒らすような真似をしている両国に、疑問を持つても構わないとは思いませんか？」

姫がアンヘリカに魔力の供給を始めたと言っていたのだから、それまでは魔力によって守られる事はなかったと考えて良いのだろう。決してウィルナのように美しく整ってはいないが、あちらはあちらでの良さがあった。

「アンヘリカだけは魔力なしでも暮らせるって事なんだよね？　だからその土地が欲しかったんじゃないの？」

もしも魔力を失う事態を迎えてしまえば、アンヘリカだけが生きる為の場所になるはずなのだ。

「私もそう思っていたのですが、どうも違うようです。ただ、その理由を知れるのは先視みのできる王だと、私は思っています」

「王様だけ？　そう言えば、どうしてウィルナもシェラルドも未来が見えるのに戦争をするんだろう。しない方が平和に暮らせそうなの……」

「そう思うでしょう？　それが正しいと私は思うのです。しかし、生まれた時から二国は争っているのが普通であり、当たり前だと認識している為に気付いていないだけなのかもしれません」

あまり蘭に詳しい事を教えようとはしなかったユージンが珍しいなと思うっていると、こちらの考えに気付いたのか真剣な眼差しを向けられた。

「貴女にはたくさんの事を知っていただいた方が、事態が好転しそうに思えるのですよ」

蘭が行動を起こしたり巻き込まれたりする度に、新しい何かが現れているのは事実だ。どうやらユージンは姫がウィルナへ帰って来る為にも、様々な事を蘭へ教え込もうと思っているらしい。

「わたしも帰りたし、その為に必要なのかもしれないなら構わないんだけど、何をしたいのかはやっぱりわからない」

首を横に振った蘭に、ユージンは頷いて見せた。

「それで構わないのですよ。何がきっかけになるかはわかりません。そして、それを見極める術も私達は持ち合わせていません。ならば、とにかく色々貴女に知っていただくだけです」

何だか勉強のようだなと、蘭は溜め息を付く。

「覚えられるかな」

「覚えられない事は不要だと考えましょう。きっと意味のあるものは貴女の中に残るはずです」

決め付けられても、どうも違うような気がしてならないと蘭は首を傾げた。どれだけの事を知り、どう行動を起こせば事態は先へ進むのだろうか？ 結局は今までと同じ、その時を待っているのと変わらないのではないかとも思ったが、わずかでも早くそこへ辿り着ける可能性はあるのかもしれない。

考える事に集中し黙り込んだ蘭へ、ユージンは告げる。

「貴女がもし、このまま何年もここにいらしたらどう思いますか？」

この世界に来て、四ヶ月は経っている。最初は不安があり、更には屋敷の中に籠もっている生活がやけに長く感じていた。しかし、アンヘリカへ向かってからというものの時間はあっという間に過ぎ始めたのだ。このまま時が流れて行くと確かに年という単位もないとは言いい切れない。

少しずつ馴染み気を使う事も減っては来ているが、ここは自分がいるべき場所ではないと蘭は感じている。本当は姫という人物を必要としているのだ。

「うーん、とにかく困るかな？」

「私も困りますね。おそらくランも本当に困りますよ？」
変わった言い回しに蘭はユージンを見つめる。

国を担うべき人がいない状況を延々と続けて行くわけにもいかな

いのはわかるが、ユージーンが言っているのはどうもそこではないように思えた。

それに気付いたのかどうか、ユージーンは珍しく意地悪そうな笑みを浮かべる。

「姫の年ですと、そろそろ世継ぎの話も上がっていますしね。ここで子供は望まないでしょう？」

「子供？」

何を言われるのだろうかとは思っていたが、予想とはだいぶ外れていた。

「姫の次にこの国を担うべき人物もそろそろ必要なのです。残念な事に姫には兄弟もおられないので、姫が子を得なければウィルナ王家は少々困ってしまいます。最悪の場合は王の兄弟を辿る形で先視みは現れるでしょうが、最も望まれているのは姫の子なのですよ」
確かにそうなのだろう。王は病に伏せ、娘は一人、母親も亡くなっている状態だ。とにかく姫が今第一に国を預かる人物であり、子を望まれるのは当然のように思える。

「婚約者がいるとか？ 結婚はしていないんだよね？」

結婚しているならばこうして蘭が一人でいられるとも思えないが、念の為に聞くとユージーンは頷いた。

「婚約すらもしていませんよ。それでも候補はいます」

「候補？」

「私とセルアになっています。だから、私達は自由に屋敷を出入りしているのですよ？ 通常ならば、姫の部屋には女性しか立ち入りません」

「え？」

セルアが色々あると言っていたのはこれだったのかと思いつつも、驚きだけが声になる。

目覚めてすぐにユージーンがいたという状況におかしさを覚えはしたが、様々な事に驚き過ぎて気にならなかったあの時の自分を思い出す。

この屋敷で暮らして来て、たまに寝坊する蘭を起こすのはハンナであり、ユージンやセルアが勝手に入っているという事はない。昼間であればセルアは何も言わず入ってきたりもするが、ある程度は限られた時間の話だ。

姫がいるのであれば、セルアもユージンも寝ている所へ勝手に入ってくるのだろうか？ 考えていても仕方がないと、まともらない頭のまま蘭は聞く。

「だからって婚約も何もなしで、二人を自由に出入りさせるの？」

世の中には様々な生活の形があるとは思っているが、一国の姫という立場でもそれは成り立つのだろうか？と疑問が浮かぶ。

「これは姫の意思ではなく、王の意思なのですよ。セルアは膨大な魔力を扱い、私はどうやら城内の仕事に向いているようなのです。更には先視みが未来が良いと告げている。どちらの力も欲しいと考えたのでしょうか。形に囚われず世継ぎを望む王は珍しくはありませんが、あくまで城内での事ですし、意外と簡単なものなのですよ？ここへ出入りするようになって四年と言ったところですかね。色々便利なので王が倒れた後も、止めてはいません」

ユージンは笑って言うが、蘭にはよくわからない。

「じゃあ、二人共姫様の恋人みたいな感じって事？」

「それは違いますね。姫はどちらにも異性としての興味はないようでしたし、セルアは姫を妹みたいなものだと言っていますからね。手出しをするはありません」

今度は苦笑して見せたユージンに蘭は聞く。

「ユージンは？」

この質問に少し戸惑った様子を見せたユージンは、いつも通りの穏やかな表情でゆっくりと告げた。

「私はあくまで仕えている身ですからね。姫自身が望んでくだされば、従いますよ」

肯定とも否定とも取れない言葉を返され、少々迷いつつも蘭ははっきりと聞いてみる。

「セルアは姫を妹のように思っているとしても、ユージインはどうなの？」

姫は二人に興味がなく、セルアは随分と昔から側にいた話をしてきた。ユージインが姫に向ける感情だけが見えないと告げれば、困らせてしまったらしい。眉を下げ考えるようにしながらユージインは口を開いた。

「ランが言っている意味とは違うかもしれませんが、好いてはいますよ。国を治めるに値する素晴らしい方だと思っていますからね」
曖昧な言葉と笑みを返して来たユージインは、目の前にある本の表紙をめくる。

ユージインが取り乱すような姿を見せるのは、姫に関わる話題の時が多い気がした為そう思ったのだが違うのだろうか。とにかく本人がそう言うのならば、深追いする必要もないと蘭は頷いた。

「姫様が帰って来ないままわたしが居続けると、いつかはそんな話も出るって事でいいんだよね？」

「そうですよ。私は貴女に手出しをするような真似はしたくありませんからね。そうならない為に今は新たな情報を探しましょう」

こちらを向き柔らかに微笑むと、ユージインの視線はすぐに本へと落とされる。

さすがにウィルナの世継ぎを産む事など考えたくはない。おそらく差し迫ったものではないが、可能性は零ではないとユージインは教えてくれたのだろう。新たな情報で蘭自身に何かのきっかけを与える為の発言とも取れるのかもしれない。

同じように蘭も本を覗き込み、更に読める契約文字はないかと目を走らせ始めた。

四章・注ぐ光に孤は惑う（終）

結局全ての頁を丁寧にくくって見たものの、これといった情報を得る事もなく二人は溜め息を付いた。

何百とある紙を一枚一枚めくっていたのだ、その結果が何もなかったとなると疲労も増すというものだ。蘭は魂、欠片、失うという単語が脳裏に浮かぶばかりで、ユージインは時たま現れる走り書きを見つけては読むの繰り返しだったが、有益な情報は皆無だった。

蘭は一度立ち上がると大きく背伸びをし、再びソファへ身を沈める。

「何もわかんなかったね」

「そうですね、さすがに疲れました」

蘭の問いかけに、正面にいたユージインも珍しく疲労の色を見せソファの背もたれに体を寄りかからせた。

ふと視線を窓に向けると薄暗くなり始めている事に気づく。随分と長い間集中してしまっていたらしい。昼食を食べ合間に茶を飲んだりもしたが、それ以外はとにかく頁をめくっていた。

「やっぱり先視みの力がないと無理なのかな？」

覗き込む仕草で凝ってしまった首元をほぐそうと、蘭は頭を大きく横に傾け筋を伸ばす仕草をしユージインは片手で肩を叩く。

「おそらく、としか言えませんね」

「だよね」

ユージインの疲れた笑みを見ながら、蘭も背もたれに寄りかかりぼんやりと視線を泳がせる。

そのまま二人で何も言わずぐったりしていると、突然扉が開かれた。雑に扉を開き足音を立てて入って来るのはセルアだと、蘭、ユージイン共に承知している。

「何だお前ら？」

どうやら見て取れる程に疲れているらしい。ユージインも蘭と同

じくセルアへ視線を向けてはいるが、常の表情よりも力が感じられなかった。

セルアは当たり前のように蘭の隣へ陣取ると、髪に触れ撫でる。

（仕方ないのよね）

セルアの動きに対しては何も言わず、蘭は目の前のテーブルに置かれた本を指差す。

「全部めくって見たの」

「これをか？」

驚きの声を上げつつも、セルアは妙に納得した素振りを見せた。

「ああ、だからか。ユージンがそんな面してんのは珍しいな。ランも疲れてんのか？」

ユージンを見てからすぐにこちらへ視線を移すセルアに、蘭は無言で頷く。

「そちらは無事に終わったようですね」

さすがにそのまま返事はしないらしく、ユージンはきちんと体を起こしていた。対してセルアはソファの上にあぐらをかき、蘭の髪を口元に持って行ったりとまるで両極端な動きだ。

その二人をただ見ている蘭は、ユージンとの話を思い出しセルアにされるがままになっていた。暴発させない為にも、この程度は我慢しなければなるまいと思っている。

こうして触れられながら魔力を受け止めるのが、今の蘭にできる事なのだ。

（我慢、我慢）

特に何も言わないこちらをどう捉えているのか、セルアは蘭の髪を好き勝手に弄ぶ。これで魔力が入っているのだろうか不思議なものだ。

「問題ねえよ。とんでもない量に驚いてはいたが、あいつらも次からはうまく使えるはずだ。サイラス辺りは文句を言うだろうが、術師棟の中は盛り上がってる」

視線も向けずに喋るセルアへ、ユージンは安堵したらしい笑み

を向ける。

「なら、安心ですね」

蘭には術師棟もサイラスという人物もよくはわからない。ただ二人からよく耳にするものであり、今の口ぶりならば大事にはなっていないように思えた。

「そうだな。ついでに俺の姿がこのままなもの、そのせいだと言った」といた」

「それで、納得しましたか？」

笑みを潜め窺うように聞くユージインに、セルアは何故か眉を潜める。

「半信半疑ってとこだな。だが、このまましばらく俺が生活してりゃ信じるかもしれねえ」

「実際その姿でいるのをアンヘリカへ向かう前から見ているわけですからね。珍しく続けて見かけ皆も不思議に思っているはずですよ」

「ああ、だから理由付けにはちょうど良いだろう？　あながち間違ってもいない」

セルアが大人の姿でいる事は、ほんの数日でも不信に思われる程珍しいらしい。ハンナも今朝そのままで大丈夫なのかと聞いていた為、暴発は皆が知っているものなのかもしれない。

「まあ、暴発を起こさずに一定期間を過ごせればの話でしょうね」

「そういうこった」

そうしてセルアは肩を抱き寄せようとしてくるのだが、蘭は思わず押し返す仕草をしてしまう。

今まで何も言われず気を良くしていたらしいセルアが不満の声を上げる。

「何だよ？　このくらいいいだろうが」

「……別にここまでは必要ないでしょ？」

蘭も思わず負けじと言ってしまう。髪に触れられるくらいは気にしないが、あまりに近づくのはどこか気恥ずかしい。どうしたものかと思っていると、ユージインが言葉を挟んだ。

「セルア、今は話を進めてください」

仕方ねえなどと呟きながらセルアは蘭の肩から手を離すと、再び髪に触れつつ会話を戻す。

そしてユージインはこちらに明らかに何かを含んだ笑みを向け、それを受けた蘭は何となくだがそのくらいは大丈夫でしょう？　と言われている気がした。

（我慢しろって事？）

蘭はそう思いながらユージインへ曖昧に笑みを返し、この流れには気付いていないのかセルアは話を続けている。

「俺が続けてこの姿で城内をうろつく事に驚いている奴は多い。実際好んで寄って来る奴はいねえしな。さっきもびくびくしやがって別に取って食ったりもしねえってのによ」

「滅多にある事ではありませんからね」

様子が想像できるのか、ユージインが笑い声を漏らすとセルアは軽くねめつける。

「わかっていても面白くはねえんだよ」

「それもわかっていますよ？　まあ、これを機に大丈夫だと思う者が現れるかもしれません」

執務室でのセルアの話の思い返す限りあまり城内に親しい人物がいる雰囲気ではなかったが、どうも怖がられているらしい。

「まあ、ずっとこのままにいる予定だしな。慣れるのを待つしかねえ」

「どうなりますかね？」

あまり心配している風でもないユージインに、セルアは溜め息を付く。

「お前、面白がってるだろ」

「ええ、それなりに。姫がいたならばさぞかし喜んだ事でしょうね」
特に心配すべき事柄ではないらしく、ユージインは完全に人事のようだ。セルアが暴発さえしなければ、歓迎すべき事態とも思っているようにも見え蘭には不思議だった。

「もう、その話はいい……それよりもこいつをどうするかだ」

嫌気が差したらしいセルアが目の前に置かれた本を無造作に持ち上げ、蘭とユージンに視線を送る。

「完全にこいつが鍵だろ？」

「確かにそうだとは思いますが、先程も言ったでしょう？ 方法がないと」

「だが、諦めるのもどうかと思わねえか？」

本に込められた契約文字を読めるのは、おそらくだがウィルナの姫とシェラルドの第一王子だろうと考えている。そして、姫は今ここにはいない。

もしかすると姫もこの世界のどこかにいるのかもしれないが、所在がわからないという点ではシェラルドの王子よりも可能性は低くなってしまうのだ。

「マティアス王子だっけ？ 全然情報が入ってこないんじゃないの？」

「ああ、この六年全く情報がない。それはそれでおかしい気がするがな」

セルアは雑多に頁をめくりながら紙一枚を透かして見たりとしているが、特に変わりはないらしい。溜息混じりに新たな頁を眺め始める。

術師として得るものがあるのかと蘭は見つめていたが、ユージンが声をかけた。

「それで、どうするつもりです？」

「ん、そう言われるとはつきりと答えは出ねえよ。とにかく情報くらはい手に入れるべきだ」

明確にすべき事が決まっているわけではない様子に、ユージンは表情を曇らせる。

「その方法が問題なのですよ？ 密偵も使えないでしょう？」

「そこを考えろって事だ」

「ならば何も変わらないのではないですか？」

「はなっから諦めてるのは違いよ」

埒が明かない二人の会話がしばらく続けられたものの、答えが出る雰囲気は微塵もない。

（マティアス王子の事を知ればいいんだよね？）

「ねえ、第二王子に聞いたら駄目なの？」

何となく蘭が思い付きを口にする、二人の反応は決して良いものではなかった。

「……あ？」

「……はい？」

お互いに間を開けて返事はしたが、こちらの発言はうまく伝わらなかったらしい。

「初めてアンヘリカに行った時に、偶然いたでしょ？ だったらまた一緒になるかもしれないし、その時に聞いちゃ駄目なの？」

第二王子と呼ぶくらいなのだから、マティアスの事を知っているのではないかと蘭は思ったのだ。そして一度遭遇している人物であり、マルタも頻繁に姿を見せるような口ぶりだった。最も手っ取り早い方法ではないだろうか。

セルアは片手で頭を押さえ、ユージンはこれまでにない程に眉を寄せた。そうしてたっぷりの時間を置いた後、各々が口を開く。

「その手がある……のか？」

「確かに……情報源としては申し分ありませんね？」

曖昧な口調にどうしたのかと思えば、二人は直接相手方の者に聞くなどという発想はなかったと言った。

生まれながらにしてシェラルドは敵国と教えられ戦い続けている。会話という行為すらも成り立たない存在だと思っていたらしい。

「別に普通の格好してりゃ、俺がウィルナ王宮に仕えてるなんてわかりもしねえしな」

止まっていた手で髪をかき回しながらセルアが言えば、ユージンが首を傾げる。

「アンヘリカの民として聞くのなら、可能……なのでしょうか？」

なかば呆れるような二人の反応に、蘭は少し困ってしまう。

「変、なのかな？」

小さく聞いた蘭へ、セルア、ユージインが共に否定をする。

「変ではねえよ」

「少し驚いただけです。しかし、ヘンリク王子もなかなか厄介な気はしますね」

「アンヘリカの奴が腕を切り落とされたって言ってたしな。機嫌を損ねたらばっさり斬られるかもしれないねえって事か……」

以前マルタに聞いた話を蘭も思い出し、どうやら自分の発言は軽はずみだったようにも思えて来る。

「危ないなら、止めた方がいいかも……」

「それをもったいねえとも思うぞ？ 悪くはない案だ」

セルアは優しく蘭の髪を撫でながら告げたのだが、完全にこれだと言い切れる程でもなく少々引っかかりもあった。

斬られた側は理由がわからないが、おそらくヘンリクは意味を持っていたらしいとマルタは告げたのだ。何かはわからないが自分の規則に準じて動いているのならば、どこか危険に思える。

それはユージインも同じだったらしく、不安げな声を漏らす。

「命を危険にさらしてまで情報を得る必要はありません。そこまでせずとも結果は出るのではないでしょうか？」

「死ぬつもりは毛頭ねえよ。あくまで偶然を装ってマティアスの様子を知る事ができりゃいい」

そう言いながら、何故かセルアは再び蘭の肩を抱き寄せようとする。先程よりも力強く引かれ、蘭は半ば無理やりセルアの胸元に寄りかかる格好になってしまう。

慌てて体を起こそうとしたが、正面にいるユージインの視線に気付き動きを止めた。

爽やかに微笑んでいるようでいて、どこか有無を言わせない空気に蘭は思わず溜め息を付きそうになる。

（できる事はしなさい……か）

果たして、本当に魔力を吸い取る為の役に立っているのかどうかはわからない。セルアが髪よりも蘭の体に触れたほうが入りが良いと言っているだけなのだ。自分にもユージンにも魔力を確認する事は叶わない。

(嘘ではないと思うんだけど)

蘭は自身に言い聞かせ、仕方なしではあるがされるがままにする事に決める。

一瞬抵抗する素振りを見せた蘭へセルアは不機嫌そうな顔を見せたが、すぐにおとなしくなった事に満足したらしい。蘭の髪に顔を寄せて静かに口付ける。

さすがに平静を装おうとは思っていても、気恥ずかしさは拭えない。蘭は少し俯きわずかに赤くなったように思えた顔を隠そうとする。

このままではセルアの好き勝手にされているばかりだが、どうしたものかと思っているとユージンが声をかけて来た。

「必要な事ですが、本筋も忘れないでくださいね？」

ある程度満足できる状況なのだろうか、セルアは体勢を何一つ変えないまま話を始める。

「ユージンもこの案に反対ではないんだろ？」

「ランが出した案を実行しないのも惜しい気はしますよ。ランが行動する度に新たな何かが見つかっているのは確かです。今もその可能性があると思いたくはなりませんね」

ユージンは蘭が動く事によって早く姫が戻ると考えている。その為にはヘンリクに遭うという選択肢も捨て切れないのかもしれない。

「なら、決まりだ」

あっさりと口にするセルアにユージンは釘を刺すように告げる。

「決まりとは言っても、本当の偶然でのみ出会える人物ですよ？」

計画も何もないでしょう。そして内容も決して容易とは言えません」

「それはわかってる。どうせ俺とランはこれからアンヘリカに行

く予定だろうか？」

セルアは会話の合間に蘭の髪や頬に口付けて、魔力を入れ込んでいく。蘭はただじっとしているが、だんだんこれが本当に意味を成しているのかと疑問にも思えて来た。

そうした蘭の思いなど関係なしに、二人の会話は続いて行く。

「アンヘリカへ向かう事は、ウィルナにとって得るものがありますからね。定期的に行っていたきたいとは思っていますよ」

ユージンからすると蘭とセルアの動きは面白いものらしく、どこか声色が笑いを噛み殺しているようにも思えた。

「そうなれば、いつかは会える。そこに賭けてみるのもいいじゃないか」

「とにかく二人が危険な事をしない、それだけは約束してください。無理に聞き出す必要はありませんからね？」

「わかってる」

二人が真剣に会話をしていると重々承知してはいるのだが、調子に乗ったセルアがあまりにも口付ける為、蘭は我慢できずに抵抗し顔をぴしゃりと叩いてやる。

「いい加減にしてよ！」

「って！」

どうやら額付近を叩いたらしい、セルアがそこを抑えながら蘭に喚く。

「何だよ！ おとなしくしてただろが……」

体を離し元の位置へ蘭が座ると、セルアがこちらの腕を掴んで強引に引く。またも胸元に引き寄せられる格好になり、今度は蘭が喚く。

「本当にこんなにくっつかなきゃ駄目なの？」

「入れられる時に入れておいた方がいいだろうが？ 何で急に叩くんだ」

無理やり抱き寄せられ顔がセルアの胸元に半ば押し付けられている体勢のまま、蘭はくぐもった声を出す。

「必要だから、ある程度は仕方ないって思ってるんじゃない！」

「仕方ねえって何だよ、お前も少しはありがたがれ」

きつく抱きしめて来る仕草と、ありがたがれと言うよくわからない台詞に、蘭は無理とはわかっていてもうな垂れそうになる。

「どこをありがたがれるって言うの？」

「折角俺が気に入ってるんだ、構わないだろう」

どんな表情をしているのかはわからないが、セルアの声は楽しげだ。

「それがわかんないの！」

言い合うこちらをどう見ているのか、ユージンが声を上げて笑い出す。

それにはセルアの腕の力も緩み、蘭は頭を上げ辺りを見回す余裕もできた。

我慢を重ねていたらしく腹を抑え笑うユージンの姿に、今度は蘭とセルアの意識がそちらへ向く。

「ユージン笑い過ぎ！」

「お前、何か吹き込んだんじゃねえのか？」

蘭とセルアに口々に言われながらも、ユージンはどうにか言葉を発したらしい。珍しく震える声が状況をはっきりと伝えてくる。

「必要な事しか言っていますよ？ まあ、セルアが少し自重しても良いのかもしれないね」

そうして更に目を細めると言葉を続けた。

「程良く魔力を移せるように、色々と頑張ってみてください」

セルアの魔力を蘭へ移す事は本当に必要なのだ。しかし、ユージンはどうやらこちらを少々おもちゃ扱いしているようだと思認識した瞬間だった。

五章・孤の秘匿と影（一）

アンヘリカでヘンリクに遭遇したら聞けばいい。そうは言っただけの実際簡単に出会えるわけもなく、蘭はセルアと共にウィルナとアンヘリカを幾度も往復していた。

「いつ来るかわからない人だし、無理なのかな？」

今はちょうどアンヘリカからウィルナへ戻って来たところであり、乗り合い場を後にしセルアと共に屋敷を目指し町中を歩いている。

「まあ、向こうもそんなに頻繁にはやって来ねえだろうし、俺達も大半はこっちにいるからな。その上で偶然を待ってるんだから気長にやるしかねえだろ」

セルアが蘭の腰に手を回している為、二人は寄り添う形になっていた。おそらく周囲には砂漠から帰って来たばかりの恋人同士にでも見えているのだろう。ウィルナとアンヘリカ間の行き来が年々多くなっている中では特に目立つものではないらしく、蘭もそうした者を目にした事があった。

（けれど、本当に目立たないのかしら？）

見かけた記憶を持っている時点で目に付いたのではないかと疑念も抱く。しかし仕方がないと思える部分もあり、蘭はセルアの意見に頷いてみせる。

「会える確率の方が低いはずだもんね。それがなくてもこまめに向かうのは必要な事だし、わたしも外出する機会が増えるのはありがたいもの」

アンヘリカへ行く回数が増える程、セルアの魔力は消費されているのだ。蘭に触れていれば暴発は避けられると言っているが、保険は多いに越したことはない。更には蘭が外へ出て知識を増やせるという部分もあるのだから、不利益はないようにすら感じられる。

「そうだろ？ 俺達の目的は一つだけじゃないってこった。それなりに進んでいるものもある」

「なら、こうして移動している事が必要な何かって事？」

「それはわかんねえよ。結果が出ない限りは気付けるとも思えねえしな」

道行く人々がこちらの会話を気にする可能性は低いだろうと、重要な単語を避けつつ二人の会話は進められた。以前はセルアに引かれて慌しく移動するのがほとんどだったが、最近は蘭が望む速度で足を進める。

街を眺める余裕も増え、見かければのぞいてみる露店の店主達とも顔見知りと呼べるような関係になりつつあった。蘭はウィルナやアンヘリカで関わる人物を増やしながら移動を繰り返している。

（でも、これはやっぱり落ち着かない）

相変わらずと言うよりは、前にも増して蘭にべったりと張り付くセルアにはどうしても不満が募ってしまう。

人前でこうも引っ付いている事もないだろうとは思うが、セルアがこうしているのにも意味はある。アンヘリカにいる間、セルアはあまり蘭に触れないと決めているからだ。

それを提案した時のセルアの不機嫌さは相当なものだったが、蘭にもはつきりとした理由がある為に押し通す事が叶った。

魔力を入れるというれっきとした目的はあるが、傍から見ればセルアが蘭を抱き締め髪や肌に唇を落としているだけなのだ。理由を話すわけにはいかず、しかし二人の関係を聞かれてうまく説明できる自信もない。おそらくクロードは蘭がセルアを選んだのではないと知れば同じ事をするとも思えた。

その旨を伝えるとセルアも気にいらねえと納得し、滞在も丸一日と決まっている為にかやり過ぎす方向に決まった。まったく触れない事に対する不安もある為に宿の室内ならば魔力を移す努力はしたが、アンヘリカにいる間はとてもおとなしいものだった。

ただしその分、アンヘリカから出るとこれでもかと触れて来る。乗り合いにいる間で魔力はかなり移っていそうなのだが、まだ終わらないらしい。

（寝ている時以外はほとんど側にいたのに……）

片道が丸一日という行程であるからには乗り合いの中で眠らなくてはならないのだ。二人は床に各々の寝床を準備し睡眠を取って過ごし、その間だけはセルアは蘭へ触れようとはしてこない。

無理やり組み敷かれはしないだろうと信用できる部分はあるのだが、だからといって節度を守っているのかと考れば首を捻りたくはなる。

（分別はあるって事なんだろうけど、線引きがわからないんだよね）
今はのんびりと足を進めながら気ままにこちらの髪に口付けている様子から、周囲を気にする必要はないと判断されているのだろう。

（別に帰ってからでじゅうぶんじゃないかな）

どうやら頬にまで顔を寄せてきそうな気配が感じられ、蘭は逃れようと頭を振る。

「これは、外ではやめようよ？」

本来なら寄り添いながら歩くのも止めたいところなのだが、妙な駆け引きをしているような部分もはらんでいる為に加減は難しい。

「別に構わねえだろうが？ そんなに気にしてる奴もいねえよ」

周りが気にするよりも蘭自身の問題なのだと、言い合いとまではならないが止める止めないの問答を幾度も繰り返す。

そうしていると完全に睦まじい男女に見えてしまったのか、通りがかった男に冷やかしの言葉をかけられた。蘭はそんな事はないと否定したかったが、セルアは当然だと言わんばかりの笑みを浮かべるだけだ。

続きは帰ってからしろという内容に、蘭は溜息を零す。

「わたしってさ、あんまり目立たない方がいいと思うんだけど？
名前だって気軽に呼ばない方がいいんじゃない？」

服装は町に馴染んでいるが、蘭はウィルナの姫とそっくりな容姿をしているらしいのだ。あまりに目を引く行動は避けるべきに思える。セルアはいつの間にか蘭を名で呼ぶようになり、それはどこにいても変わらなかった。

「あいつと同じ年から下にはランって名前は多く付けられてんだよ。特に誰も気にしねえだろうな。髪 of 長さだって近づきたいと伸ばす奴も多い、普通にしたりゃ溶け込める。堂々としとけ」

人々の名前は呼ばれない限りわかりもしないが、確かに年若い女性が発を伸ばしている姿は多い。蘭は習慣だとばかり思っていたのだが、姫にあやかっの行動らしいと驚く。

「そんなものなの？」

「そういうもんだ。それに俺は見せつけるのも嫌じゃねえしな」

「見せつけるのはどうかと思うよ？」

ひけらかしたところで羨ましいと思う者などいはないと、蘭は呆れるばかりだ。しかしセルアは構わないらしく、結局はそのままで足を進める事になる。

こうして街を歩いていれば、以前セルアに声をかけて来た女性達に出会う事も度々あった。その誰もがこのセルアの様子に初めは声が出ないらしく、驚いて動きを止めてしまう。そしてその後にはまるで別人を見ているようだと言った口にするのだ。

あんたは誰も選ばないと思っていたんだけどねえ。そう口にした女性がいた。セルアを好む人々はいたらしいのだが、そうだと気づくとセルアはその人から離れるのが普通だったと聞かされた。

随分と好かれているとも言われたが、蘭としては複雑だ。

決して恋人と呼べる関係ではなく理由があつてこうしていると伝えたかったが、無理だとも理解している。あくまでウィルナの民であり国 of 中枢に関わる事など絶対にない。蘭とセルアはウィルナの町のどこかに住んでいるのだと思わせる必要があつた。

とにかく誰もがセルアの変わりように驚き、楽しんでいるようなのだ。

その中にはユージンすらも含まれ、珍しいとよく口になっているのを思い出す。

(姫様が喜ぶって表現も多いんだよね)

存在は色濃いいにも関わらず、あまりにぼやけた印象を抱かせるウ

イルナの姫はセルアの妹のようなものらしい。

(なら、みんなと同じような反応をするって事なのかな?)

「どうした?」

何も言わず視線を足元に向けているとセルアに声をかけられたが、蘭は眉根を寄せ首を傾げる。

「うーん、何て言っているかわかんない感じ」

「何だ、そりゃ」

どうすれば上手く説明できるのかわからないのだから仕方がない。自分の立ち位置が非常に曖昧だと思いつつ蘭は、ふとセルアを見上げた。

それに気づいたセルアは蘭に笑みを向ける。黙っていると怖いくらいに鋭い瞳も、こちらを向く時には柔らかくなってしまふのだ。その変化に誰もが驚いている事はわかっていた。セルアは基本的に不機嫌な様子が多い、今の姿になる前は輪をかけてそうだった事だと思える。

どうして自分にだけはこうした表情を見せるのか、蘭には不思議だった。

特に何をするわけでもなく一緒にいただけなのだが、セルアはやたらと自分を気に入ってくれているらしい。大人の姿に戻したり魔力を吸い取ったりと特殊な事もしてしまっているが、それ以前から気にかけられていたようにも感じられる。

理由がないと蘭には思えた。

(どうしてわたしなんだろう?)

最近そう考える事が度々あり、いつも同じ答えに辿り着く。

考えてもわからないものは、わからない。

悩んでも仕方がなく今はこうするしかないのだからと自身に言い聞かせ、蘭は隣にいるセルアの腕に手をかけた。

「早く帰ろう、ユージンも待ってるよ? たぶん」

蘭から触れる事があまりない為か、こうした時のセルアは更に上機嫌になる。

「それでもあいつの事だから、仕事が終わるまでは屋敷には来ねえだろうな。まあ、ハンナは気にしてるはずだ、戻るか」

そして、二人は屋敷を目指し歩き続ける。

「ラン！」

そのまましばらく歩みを進めると、買い物客で賑わう露店の通りでどこからか声をかけられた。たくさんの人に紛れている為、聞こえて来た場所はわからない。

人ごみを縫うように歩いていた蘭は、声の主がクロードだとわかり慌ててセルアから離れようとした。しかし、セルアはその腕をわずかに緩めるだけで相変わらず腰には手を置いたままだ。

「ちよつとセルア。離してよ」

セルアの腕を掴み離そうとしたが、望むようにはならない。

「これだけ人が多い中だ、別に構わねえだろう？ 離れてどっかにいかれても困る」

この言葉に以前から落ち着きがなくすぐに側を離れていた蘭は反論のしようがなかった。わずかではあるが体も離れた為、この混雑でこちらを庇っているように見えると考える事にする。

「どこにもいかないよ？」

それでも離れたい旨を伝えると、セルアは口元を微かに歪めた。

「クロードがランにひつつくのは嫌だが、あいつを見たからと言って離れるのも面白くねえ」

正直な意見に蘭は肩を落とす。

確かにクロードに見られるのが嫌で離して欲しいとは言っているが、決して誤解されるのを避けるという意味ではない。むしろこれ以上触れてくる人間が増えるのが嫌なだけだ。

「セルアだって納得したくせに」

「それはそうだが、気に入らねえものはしょうがないだろう」

「わがまま」

「どこがだ？」

二人で言い合いながらもどこにクロードがいるのかと視線を動かせば、前方から人を掻き分けるように近づいてくる姿が見えた。背の高いクロードは他よりも頭一つ分抜きん出ている為、目に付くのだ。

どうにか蘭の側までやって来ると、クロードはいつも通り抱きつかうとしたが当然のようにセルアに阻まれる。

しかしこれは拒まなくてはならないのだと蘭も知識を手に入れていた為、素直に見守るだけだ。基本的に同性との間で行なうべき行為であり、家族や親類等の一定の間柄でなければする必要はないらしい。

「挨拶くらいいいじゃないかよ！」

蘭の隣を睨み付けたクロードに、随分と冷めた声が向けられる。

「こんな所でそんな事をしてたら邪魔になるだろうが、俺達は屋敷に帰るんだ。邪魔するな」

自身の行ないはどこへやら平然と言い放つ。しかし、クロードは気にする事なく蘭へ話しかける。

「セルアが見えたからもしかしてランもいるかなとは思って来たけれど、会えて良かった」

セルアも背が高い為に同じように目立っていた姿を見つけ、声をかけて来たのだろう。近づいて来て蘭がいなければ、なんだいののかとでも言ったであろう事が想像できる。

「けど……ランもたまには一人で出歩いたら？　ほとんどセルアとばかりでしょ」

嫌味な視線を向けるクロードにセルアは舌打ちをし、蘭を強引に引き寄せた。

「ふざけた事言ってんじゃないやねえよ。お前みたいな奴がいるんだ、一人で外になんて出せるか」

「オレもたまにはランと二人で歩きたいけどね。屋敷に行ってもいないって言われちゃったしさあ。折角仕事も終わって遊びに行った

のに、アンヘリカに行ってたの？」

セルアの言葉にはあまり反応せず、クロードは蘭との会話を望む。それがセルアは面白くないらしいが、ここでずっと立ち話をしていくわけにもいかない。だいたい通行の妨げになってしまっているのだ。とにかくここから離れなければと、蘭は苦笑交じりに答えた。

「うん、入れ違いになっちゃったみたいだね。とりあえず移動しようか？」

「最近アンヘリカによく来てくれるから嬉しいんだけど、今回みたいになると残念なんだよなあ」

セルアとは逆の位置に来たクロードは自然と腕を組み、蘭は二人に挟まれたまま屋敷を目指す事になる。

ここで文句を言ってもまた足が止まるだけだと思いながらも蘭は再び考える。

セルアと同じように、どうしてクロードが自分を気に入ってくれているのかわからないのだ。以前もクロードが自身を連れ去ったのには、人知を超えた何かが働いたのではないかと疑ったのだが答えは見つからない。

蘭は戸惑いながら二人を交互に見た。

そしてよくわからないと心の中で呟きながら、小さく息を吐く。

「何だ？」

「どうしたの？」

二人がこちらの様子に気づき声をかけてくれるが、蘭は誤魔化すように笑って答える。

「何でもないよ。早く帰ろう」

不審がる様子もなかったが、蘭は無理やりな笑顔のままに二人を引っ張るようにして歩き出した。

五章・孤の秘匿と影（二）

屋敷へ戻った三人を出迎えたのはハンナとユージンだった。

ハンナが顔を見せるのは当たり前だが、ユージンがいるのは想定外だ。先程セルアが言ったように仕事を終えた夕食後に現れるとばかり思っていた。

屋敷にいるというだけでも驚くというのに、わざわざ玄関まで出てきた点も違和感を抱かせる。ハンナ以外が出迎える事など今までにはないものだった。

「またお城にでも行くの？」

昼前から屋敷にいる事は珍しい為、また城へ向かわなければならぬのかと思った蘭にユージンは苦笑する。

「私にも仕事が少ない日はあるのですよ？　そろそろ帰って来る頃合だと思ひ来たというのに酷いですね」

「ごめん、珍しいと思って」

「本当にそうだろうが、ユージンがこの時間に用事もなしにいるなんて雨でも来るんじゃないかねえのか？」

何故かセルアは眉を寄せながらユージンを眺め、不審がっているような素振りすら見えた。

ハンナが抱き締めながら迎えてくれる為、屋敷に着くとセルアもクロードも蘭から離れている。しかしその挨拶も済んでいる今、セルアは再び蘭の腕を掴んだ。引き寄せはしないがどこかは触れていたらしい。

その仕草を見た為か、ユージンが笑い声交じりに告げる。

「そこまで言いますか？」

「それだけ珍しいってこった。こんな所で話していても仕方がねえ。部屋に行くぞ」

セルアが蘭の腕を掴んだまま歩き出し、引きずられるように続くとクロードもそれに倣う。三人が固まるように動く後ろに数歩遅れ

てユージンがおり、ハンナは先に奥へと戻って行った。

「そういえばオレがさっき来た時もユージンが出たから、結構前からいたみたいだな」

クロードが呟き、蘭とセルアは振り返る。

「そうなんだ」

「今日は朝から空いていたのですよ」

「何か用事があって来たのか？」

セルアの問いにユージンは口元に人差し指を当て、意地悪そうに笑う。

「秘密です」

「気持ち悪いな」

そのまま洗面を作ったセルアが扉を開ければ、室内は見知ったものとは違っている。

「どうしたの？ これ」

蘭は思わず声を漏らし、部屋中へ目を走らせた。

何故か室内に花が溢れているのだ。床や棚、とにかく豪華に活けられた花が所狭しと置かれている。皆がくつろぐソファとテーブル周辺のみを残し、花畑かと思う程の空間になってしまっていた。

「そういう事か……今いるのはランだぞ？ しかも、やり過ぎだろうが」

どうやらセルアは何かを承知しているらしく、ユージンへ目を向ける。

「それはわかっていますが、こんなにも似ていると同じかもしれないでしょう？ 折角なのでこっそり準備してみました。ランの生まれはいつ頃です？」

「生まれ？」

「ええ、姫は本日で二十歳になられるのですよ」

その為に並べられたのかと納得しつつも、蘭はこれまでの日数を思い出そうとする。

蘭は十月生まれだ。そしてこの世界に来た時向こうは五月、それ

から何かと時が進み五ヶ月は経っているだろう。そのまま考えると確かに誕生日を迎えているのかもしれないかった。

ここは四季がないらしく常に暑い、毎年秋風を感じながらその日を迎えていた為か全く思い出しもせずに過ごしていた。それに加え、生まれた日を考えるよりも気にしなければならぬ事が多かったとも思う。

「こっちに來てからの日数で考えると、そろそろなのかもしれない」蘭の認識している一年がこの世界にも通用するのかわからないが、確かに常ならば一歳年を重ねたと言える期間だった。

（そういえば、年も一緒だったんだ）

容姿が似ているだけでもじゅうぶんに驚いていたが、細かな部分まで重なるのかと不思議に思いつつも目の前の会話は続く。

「当たりかよ」

セルアが花を避けながら室内を進み荷物を置いて告げれば、ユー・ジインが少し得意気な表情を見せる。

「私の勘は馬鹿にできませんよ」

「違っていたらどうする気だったんだか」

「どうもしませんよ。今日と本来の日、どちらも祝えば良いだけです。今日はどうしてもしなければならぬでしょう？」

ユー・ジインの物言いに蘭も氣付く。毎年姫を祝っているのなら、身代わりの蘭もそれを行なわなければならぬはずだ。こうして花を活けるという習慣があったのかと、数種類の花を見渡す。

「そりゃそうだな。俺はすっかり忘れてた」

理由を聞きながらも蘭の側へ戻って來たセルアは首をすくめ、ユー・ジインは諦めたように肩を落とした。

「貴方はいつも覚えていないでしょう？ 覚える気がないとも言えますが」

「仕方ねえだろ？ 興味がないんだ」

ユー・ジインは少々嫌味を含んだらしかったが、セルアは氣にする様子も見せずに答える。

二人の会話を何となしには理解している蘭に対し、クロードは何の事かと不思議そうにしていたが、部屋の様子を見回しつとも一輪を手に取りしげしげと眺めている。

「とにかく、今日はランのお祝いって事でいいの?」

蘭がウィルナの姫の代わりをしているとは理解している為、状況は把握できているらしい。違和感を覚えさせたのは、そろそろかもしれないと曖昧な言葉を口にした蘭自身だったのかと思っているとユージインが返答をする。

「そうなりますね」

「だったら何か買ってこれば良かった。ユージインもさっき来た時に教えてくれれば良かったのにさ」

心底不服だと言いたげなクロードへ、ユージインは冷めた瞳の笑みを浮かべるだけだ。

「貴方に告げてしまっってはランに伝わる恐れがあるでしょう? それにこうして一緒に来るとも限りませんでしたからね」

「黙っておけと言われればオレだって言わないよ。知ってたら色々準備できたのに」

クロードは花を戻しつつ心底残念そうに言うも、すぐに満面の笑みを浮かべ蘭へ近づく。

「おめでとう!」

これは祝いなのだと言わんばかりに抱き締められた蘭は、一応礼を述べる。

「あ……ありがとう」

しかしすぐさまセルアがクロードの襟首を掴み、無理やり引き剥がす。勢いよく引かれた為、クロードは呻き声を発しながら蘭を離すと苦しげに告げた。

「死ぬかと思った……」

首元を抑えたまま顔をしかめているクロードに、蘭は声をかける。

「大丈夫?」

「大丈夫だけど」

クロードが恨めしそうに睨む先にいるセルアははつきりと言う。

「面白くねえ」

このまま言い合いが始まるのではと思われたその時、ユージインが声を張り上げる。

「いつも通りの光景ですが、とにかく今日は全員でここにいる事にしますよ？　ハンナにもランが好きな料理を準備してもらっていますし、彼女も一緒に入っていたたく予定です」

「ええ！」

クロードが声を上げた。普段であればクロードは蘭をある程度独占できたが、今日ばかりは無理だとユージインに言われ頬を膨らませながらこちらを見る。

「折角来たのになあ」

訴えるような眼差しに困り蘭が何も言えずにいると、クロードはすぐに表情を笑みへと変えた。

「まあ、今日はお祝いだもんね。今度二人で町に行けないかな？　何か欲しい物買ってあげるよ」

この切り替えの早さがクロードらしいと蘭が笑みを浮かべると、二人で出かけようと更に聞いてくる。

「それは駄目だ」

すぐにセルアの反対意見が出されクロードはまたも不満を口にするが、そこにはユージインも同意した。

「私も反対しますね」

二人のきっぱりとした物言いにクロードは大きく肩を落とす。

「仕方ないのはわかっているけど、オレって信用ないな」

その言葉にセルアは当然だと頷き、ユージインはどこか怖い笑みを浮かべた。

「自覚はあるんじゃないか」

「そのようですね」

「酷い！」

本当に酷いとクロードは思っているようだったが、蘭自身も信用

しきれているかと問われれば難しい部分ではあった。

砂漠から帰って来たばかりという事もあり、一度蘭以外は屋敷から外へ出ていた。ウィルナの姫の代わりをする為の身支度を済ませ、再び全員が集まったささやかなパーティーは終わりを迎えている。

クロードはそろそろ宿へ向かえと追い出されるように帰らされ、ハンナも後片付けを終え自宅へ戻って行ったところだ。

いまだ花に覆われた部屋では蘭とセルア、ユージインの三人がくつろぎながらも会話を行なう。

姫は何かを貰う事を望む人ではないらしく、それに倣い特にプレゼントはなかったがこれだけたくさんの花に囲まれる事はない。それだけでもじゅうぶんだと蘭は美しい空間を眺め楽しんでる。

セルアが言うには、姫にこの部屋を見せたら怒られる程にユージインは張り切ってくれたらしい。

香りの弱いものばかりを集めたらしく、部屋の中はむせ返る程でもなく色とりどりの花に彩られている。

「本来なら生誕祭を行なうのですが、王が病に伏せてからは控えていたのですよ。姫自身が望んでそうしたのですが、残念がる声が多いですね」

ユージインの言葉に蘭はやはりと思う。

一国の姫だというのに、こんなにも簡単に自室で食事をするばかりで良いのかと思っていたのだ。本来は盛大に行なわれるべきものらしかった。

「あいつの事だから、面倒だっていうのもあったと思うぞ？　大きく祝われるのは好んじやいなかった」

蘭の肩を無理やり抱き、寄りかからせながら告げるセルアにユージインも同意する。

「そうした方ですからね」

「じゃあ、ここ三年はこうしてここで祝っていたの？」

「そういうこった」

「何もしないわけにはいきませんから、半ば無理やりですね。せめて城内が良いのですが、今回は助かったので悪くはなかったと考えるしかないでしょう」

正面に座っているユージインが笑うと、セルアがまったくだと頷く。

「おそらく城には祝いだとして色んな品が贈られているはずだ」

「へえ。じゃあ、そういった物はここへ持ってくるの？」

「残念ながらここには収まりきりませんからね。城内で管理されるのですが、姫はあまり興味を持ってはくださらない。たまり続ける一方です」

「それはもったいない気もするね」

そうなるあまりに多い花も同様なのではないかと思い告げれば、これらは花瓶一つ分以外は全て明日運び出されてしまうらしい。

「この花々は姫の部屋に飾られた物として城下に振る舞うのですよ」
「振る舞うの？ 何の為に？」

するとセルアが届く位置にある花へ手を伸ばし、一輪を差し出してくる。

「国民のラン様信仰はなかなかのもんだからな。こいつを手に入れただけでも大盛り上がりなんだぞ？ あいつのいる空間にあつたらしいと喜ばれる」

「ラン様信仰？」

初めて出会う表現に聞き返しながら、蘭が黄色の花弁を持つ可愛らしい花を受け取ればユージインが答えた。

「姫は先視みで国民を殺さないとした上で、アンヘリカとの行き来も良くしたり、まあ他にも色々と変えました。私達が町で暮らしていた頃とは大きく違いますね。今までの恐れを含むものとは違った感情を持っているらしく、だからこそ小さな花一つにも皆は喜んでくれるようなのです」

どうやらここにある花達は、一日置かれただけで随分と価値を変

えてしまうものらしい。

「そんなに喜んでもらえるのに、実際にいたのはわたしって酷くないかな？」

城に入った時にも見舞われた騙すという感情に蘭は疑問を抱く。

しかし、二人共に気にする気配は見られない。

「気にする必要なんてねえよ。場所は合ってたから構わないだろ」「ええ、むしろ私はいい機会だと思っていますよ。こうしてたくさんの花を振る舞った翌年は減らすわけにはいかないでしょう？ 増えるのは喜ばれるので構いはしないですよ」

随分と楽しそうなユージインの口ぶりに驚けば、セルアが笑う。

「あいつに対する嫌がらせて事か」

「失礼ですね。これまで民は更に多くをと望んでいたにも関わらず、姫はいらぬと言うばかりでした。戻られたならば、次は姫にもこうした部屋で過ごしていただく予定だけです」

「それが嫌がらせなんだろうが。まあ、こうでもしなきゃあいつは受け入れねえだろうし、いいんじゃないか？ ランはむしろ貢献してるとも言えるんだ。気にするな」

何やら思惑があったらしいと蘭は頷きながら、ふと思いつく。

「そういえば二人共、前は町で暮らしてたって事なんだよね？」

「どうしました？」

「そうに決まってるだろ？」

当然だといった反応が返ってくるが、蘭は先程のユージインの発言に引っかかりを覚えたのだ。

「なんだかユージインって町が似合わない気がする。セルアはそうでもないかな？ でも、ずっと今の姿じゃないなら、やっぱりおかしいのかも？」

失礼な事を言っているとも思えたが、城以外の場所で暮らしている二人の姿が想像できず蘭は告げた。

「わからなくもねえな、今となってはあっちで暮らせる気がしねえよ。ユージインが似合わないのは俺も認める」

そしてセルアは声を上げて笑い、ユージインは少々眉根を寄せる。
「貴方が城内に馴染んでいないだけでしょう？」

「ああ、そうだな。城にいる方が長くなっちまった俺よりも、ユージインの方が馴染んでるのは確かだ」

「セルアの方がお城にいる期間が長いんだもんね」

「そりゃそうだろう。俺は十二からいるが、ユージインは五年位か？」

「十九で仕官したのでそのくらいですね」

確かにセルアは通常よりもかなり早く城に入っている上にユージインよりも年上だ。よく考えると当たり前の事なのだが、何となく不思議に思えてしまう。

「なんだかユージインの方が長くいそうに思えるんだよね、ずっとお城にいましたって感じっていうか」

ユージイン、セルア、ハンナ、三人以外の城の人間など知らないが、その中ではユージインが最も異質さを覚えさせる。単にセルアの乱雑な口調との対比で際立っているのかもしれないが、どこか物腰の違いを感じるのだ。

「面白い事を言いますね。私だって普通に町で暮らしていたのですよ？」

軽く笑いながら言ったユージインに、セルアも頷く。

「まあ、ユージインは異例の出世をした変人だ。こっちの方が向いてたんだろ」

「変人ではないでしょう？」

少々引っかけがあたりがあたらしいユージインが強めに反応すると、セルアは鼻で笑う。

「それがしつくり来るんだよ。一年で王の側に控え、王が倒れてからは姫に付く、そうそうある例ではねえぞ。まあ未来が良い奴は出世するようになってるからな、先視み通りとは言えるんだが」

「へえ……」

その地位に就く為にどのような能力を求められるのかはわからない

い。だが、セルアの言う通りならユージインは異例の出世を遂げたのだろう。ユージインも自身で城内の作業に向いているような事を口にしていた。しかしそれだけではなく、影には努力があり今の位置に上り詰めたのかもしれない。更には先視みが良い人物はそうなるのだという、不思議な意見すらも付随しているのだ。

「セルアも姫付きには変わりありませんよ？」

「俺は姫付きと言うよりは、側にいないと生活できないだけだ。お前とは違う」

自分だけが特別なのではないと言いたげなユージインにセルアがきっぱり言い切ると、どこか不服そうな様子が見える。

「私にはどちらも同じに思えますがね。未来の良さだって変わりはしないでしょう？ 姫はセルアの未来は素晴らしいものだと言っています」

「まあ、そう言われちまうと否定もできないが――俺達は特殊って事なんだろうよ」

お互いの未来が良いと言いながら続けられていく会話は、とてもではないが蘭に理解できるものではない。先視みというものがある場所なのだと認識しているだけで、実際の効果を信じられるとは思えなかった。

しかし否定する理由にもなりはしないと言葉に乗せる。

「先視みって本当に意味があるものなんだね」

「ええ、そうですよ。無意味とは言えない存在です」

「ああ、確かな成果は上げるもんだからな」

二人は疑問もなさそうに思える返答をすると、城で暮らすようになるまでの経緯を説明し始める。

ユージインはウィルナの町で他の民と同じように暮らしていたらしい。そこへ仕官をしないかと声をかけてくれた人がいた。これはごく一般的な方法であり、大部分が周囲の推薦により城内へ入るきっかけを手に入れるらしい。

現在では先視みの結果が悪くとも、殺される心配がない為に誰も

が気軽に返事をする。しかし以前は即座に命を奪われるという危険が存在していたのだ。

王の目に触れ悪い未来が見えたなら殺されてしまうと恐怖が強く、ユージインは気乗りせずに初めは断ったらしい。しかし、ユージインならば大丈夫だと何度も勧められ、結局は城へ仕える身になったという。

「その話をしている間に両親が事故で亡くなりましたね。何となく一人で家にいるのも嫌になって、承諾してしまいました。町で畑仕事をしている生活も良かったのですが、どうやら私にはこちらが合っていたようです。向き不向きはあるものですね」

ユージインが畑仕事をしている姿は想像しづらいと思っていると、セルアも同じように考えていたらしい。

「なんか似合わねえんだよな。まあ、しっかりと出自がわからねえ奴は城には入れねえし、町で暮らしてたのは確かだな。そういやユージインは農地に関する知識も豊富で、初めはそっちの担当だったな。しかも結果も出していやがる」

「そちらの方が長いのだから当然でしょう？」

あまりにも似合わないと言われたユージインは、どうやら少々面白くない様子だった。珍しくいつもの笑みがないまま話を続ける。

「もう住む事ありませんが、町の北側に家もありますよ？」

「家に帰ったりはしないの？」

するとユージインが不思議そうに目を瞬く。

「すでに別の者が住んでいるのですから、帰りはしませんよ」

「そうなんだ。じゃあ帰る家がないって寂しくはないの？」

「寂しいですか？」

ユージインは眉を寄せてしまい、まるでこちらの意図が伝わっていないようにも見える。

「だって、帰る場所がないんだよ？」

そうなるセルアにまで訝しげな瞳を向けられてしまい、蘭は戸惑う。

「おかしな事を言ってる？」

確認するように二人を見れば、セルアが困ったように髪をかき上げる。

「ああ、なんか違うんだな。ランが自分の住んでいた場所へ帰りたいているような感覚が、家にもあるかって事になんのか？」

「それはアンヘリカへ行って、そこからウィルナへ帰るという感覚ではありませんか？」

「それはそうなんだが、何か根本的に違うもんがあるように思えるぞ？　ランの所では家が変わったりはしないのか？」

蘭には二人の会話こそおかしなものに感じるのだが、どうやら本当に伝わってはいないらしい。

「引越しの事？　必要があればするけれど、持ち家があれば大抵はそこに住んでると思うよ？」

「持ち家？　個人的に所有しているという意味ですか？」

「そう、買った家があればそこに住むでしょ？」

この発言で何かに至ったらしい。二人が頷くと共に、セルアが説明を始める。

「ウィルナでは新しく建物を造るなんてしねえからな。住む場所があるという事だけが重要なんだよ。家族が多ければ一軒を割り振られるが、減ってしまえば戻り見込みがなきゃ別な建物へ移動させられる。ユージンの場合は両親が健在で妻を迎えて子供が増えるという前提がなきゃそのまま暮らせなかっただろうな。野郎一人だけが暮らすなんて状況にはならない。似たような奴らと暮らす為の家屋に分配される」

どうやら家という物に対する感覚が自分とは違っているらしい。国そのものが蘭の捉える家という形に近いようにも感じられた。

「そういうものなんだ」

「ええ、建物は個人の物ではありませんからね。条件を満たさないのであれば退去する必要があるのですよ」

「数が決まってるんだから、うまく割り振らなきゃ困るもんね」

「空きなんてすぐに埋まっちゃうからな。それだけ貴重な物を俺は吹っ飛ばし、残念ながら今は農地になっちまってる」

過去に触れたセルアを見上げれば特に表情が変わってはおらず、むしろ視線を向けた事に対して眉を潜められてしまう。

そうしてセルアの手が頬に触れると思えば、結構な力でつねられる。

「痛っ」

「気にしてんな。別に大した話じゃねえよ」

「もう……なんでつねるのよ」

するとユージンが目を細めているのがわかり、セルアが何故か不機嫌そうに言う。

「ユージン、続きだ続き」

「はいはい。セルアが住んでいたものは、唯一壊れた家屋になりま
すからね。一軒に使う魔力も相当な量ですが、それを破ったのは前
例がありません」

「魔力って一軒毎にかけてあるの？」

国中が魔力に覆われていると理解しているが、どのような仕組み
なのかと聞けばセルアが答える。

「国全体、区画毎、家毎、幾重にもかけてあるが一番重要なのは家
毎の部分だ。俺はそれを打ち消しちまったせいで粉々になっちまっ
たんだろう。区画までに影響があれば近隣にも変化が見られるはず
だが問題は起きちゃいねえ」

「全部がなくならない限りは、どうにかできるって事？」

「どうにかできるって程ではないだろうな。家毎の魔力を失っても
形が残っていればすぐには崩れないといった程度だろう。区画と国
で保っている間に避難して、その建物は潰した方が他への負担が減
りそうだな」

「じゃあ、区画と国全体は補強みたいに考えていいのかな？ あっ
た方がいいけどそれだけでも成り立たない感じ？」

「そういうこった。備えがあるに越した事はないだろ？ 造ったの

は大昔の奴だけどな」

これでも大まかな説明なのだろうと思いつながら蘭は頷く。

ウィルナは家屋を造る為に必要な石材を持っていない、今ある物を魔力で守り暮らしているのだ。国中に生い茂っている木々は建材として使えそうな大きさではない。おそらく国中の木を全て使って数十軒を建てるのが精一杯だろう。

つまり、人口が増えると家屋が足りなくなってしまうという事だ。それをうまく解決していたのが、王の先視みによる人減らしに当たるのだろうか。蘭は思い口を開く。

「姫様が先視みで人を殺さないと決めて、戦争もしていないなら人は増えるよね？」

「そうだな」

セルアはただそう答え、蘭は首を捻りながら更に聞いた。

「どうする気だったんだろう？」

全てを口にせずともユージインには伝わったらしい。

「おそらくアンヘリカを通して道を探すつもりだったのでしょね」

アンヘリカは魔力で守られていない。そうなると建物は定期的に直さなければならなくなる。その材料をアンヘリカは普通に買い付ける事ができる為、シェラルドから入手している。そこから更にウィルナへ運ぼうとしていたのだろうとユージインは話を続け、セルアも頷いた。

「上手くいくかはわからねえが、それしか道はないからな。それ以外にアンヘリカへ魔力を提供し結果を得る事でウィルナの国土を広げる方法を模索しているっていうのもある」

「国土を広げる？」

「ええ、豊かとは言えませんが魔力を必要としない土地を潤おす術が成功したなら、砂漠を人の住める土地へ導く方法が見つかるかもしれない。はっきりと耳にしたわけではありませんが、姫の考えはそこへ行き着くと思いますよ」

「じゃあ、このまま人が増え続けたら問題があるって事なんだよね

？　そう考えると、わたしは先視みで人を減らす事に意味があるように……ちよつとだけ思えるかな」

正直口にして良いのかを悩む発言ではあったが、ウィルナが抱えている問題は随分と大きなものだと思づく事ができた。魔力を失って崩れ去るだけではなく、定員そのものが決まっている状況なのだ。それを変えようとしていた姫と関わりがあるのなら、気にするべきなのかと蘭は言葉に乗せた。

何故か二人は驚いた表情を浮かべ、セルアが隣からこちらの顔を覗き込んでくる。

「お前はそういう考え方をしないと思っていたぞ？」

「勝手な理由で殺されるのは嫌だけど、それでも全員を生かそうとすると無理が出るんでしょう？　それを回避するには……」

仕方がないと言いたかったが、そうした理由で殺されてしまう人と思うと上手く口に出せなかった蘭にユージンは苦笑する。

「そうは思えても実行できる人ではないでしょう。姫と同じように」

「あいつもわかっていて止めたんだろうしな。そして、国中の奴らも理解しながら希望を抱いてんだ。何かが大きく変わるかもしれないとあいつの采配に夢を見てる」

一定数以上では成り立たないとわかっているからこそ、先視みは受け入れられているのかもしれない。国の長が不思議な力で不要な者を排除しているという理由があれば、それにすぎれば仕方がないと思える。あくまで蘭個人の感覚ではあるが、先視みというものの必要性が見えたよう感じられた。そして、それはもう一方の疑問にも当てはまるのだ。

「戦いもそれが目的って事ではないのかな？　アンヘリカが欲しいんじゃないって国民の数を減らしたいっていう思惑が出てくるんじゃない？」

「ああ、それもあるんじゃないかとは思ってる。だがよくわかんねえんだよな」

「そうですね。姫もアンヘリカへ向かわれた際に、戦をしないわけにはいかないと不思議な内容を口にされましたからね」

「姫様が？」

先視みの結果で人を殺す事を止めた人物が、どうして戦いを否定しないのだろうか。

「ああ、あいつはアンヘリカに行くと様子がおかしくなるからな。

何か先視みがアンヘリカを欲しがるとか言ってたな」

「アンヘリカを欲しがる？」

これまたよくわからない表現に蘭が首を傾げれば、ユージンが深く頷く。

「本人が言うには、欲しくもないものが欲しくなるそうです」

「欲しくもないものが欲しくなるの？」

「直接見た俺達にもよくわかんねえ状況だったからな。とにかく先視みはアンヘリカが欲しいと思うもんらしい」

「なんだか難しいものなんだね。わたしには先視みがどういうものなのかさっぱりわからないよ？ 欲しくもないものが欲しくなるなんて強引過ぎるっていうか、随分な感じがするっていうか」

「なんか聞いた事があるような台詞だな」

セルアは蘭の様子に何か思い出すものがあつたらしく言葉を紡ぎ、ユージンが懐かしげに頷いた。

「暮らした環境は違えども、どこか似た考えを持っているのかもしれないですね」

「似過ぎな気もする……な」

そう言いながらセルアが頬に触れた為、蘭の視線はそちらを向く。

「似過ぎ？」

以前、同じ事を言われたと蘭が思い出しているとユージンが告げる。

「だからここにいます。それで構わないでしょう？」

「似ているからここにいます。なら、あいつは今どこで何をしてるんだ？」

「それは、わかりませんよ」

わかるはずもない、誰も蘭がここにいる意味など知らないのだ。そして、姫がどうなっているのかも知り得る手段はない。三人は一樣に口を紡ぎ、それぞれに何かを考えているようだった。

「いつも答えは一緒になるな」

随分と長い沈黙を破ったのはセルアであり、蘭はその声を聞きながらここにいる理由が本当にわかる時は来るのだろうかと思っていた。

五章・孤の秘匿と影（三）

それから蘭とセルアは度々アンヘリカを訪れていた。最近は一ノリクに会えればと思う事も薄れ始める程に、変化のない生活ばかりを過ごしている。

無理に出会う必要はないとユージインも言っただけ結果を急ぐ事はない。蘭とセルアも期待し過ぎるのは良くないと、あくまで魔力を消費しアンヘリカの内情を知る事に専念していた。

そうは言っても蘭が特にしなければならぬ事はない。ただ乗り合いで移動しアンヘリカでマルタ達と話し、子供達と遊ぶくらいのものであった。

しかしそれにも意味があるとセルアやユージインは言うのだが、蘭にはどうも遊び呆けているとしか思えない。

「ここにいる意味ってなんだろう」

一人呟きながら、町中にある一つの建物の影に蘭はしゃがみ込んでいた。

今は町の子供達とかくれんぼをしている。子供達が十人と蘭とクロード、それが始めた時の人数だった。近頃は途中で宿以外に住む子供達が増えていたり、何人で遊んでいるのかわからなくなる事も多々あるのだ。

（鬼はクロードだし、もう少しここでおとなしくしようかな）

壁に身を寄せながら辺りの様子を窺っていると、どこからか、見つけた！ とクロードの声が聞こえ、見つかったか少年が笑う声がある。

どうやら着実に見つけているらしい様子に、次はどちらへ足を向けるのかと思っていると、聞こえた声とは逆方向へ駆けて行く少女が目に入った。どこかに隠れていたのだろう、クロードの声をきかけに場所を移動するようだ。

確かソニアと言う子だと蘭が小柄な少女の向かっていく先へ目を

向けると、五人の男が固まって移動をしている事に気づく。

白いコートをまとう集団は、中心にいる人物が主と呼ぶべき存在なのだろう。細身の少年が堂々と足を進める姿は常に見かける光景ではなかった。

(あれは……？ もしかして)

蘭は無意識に息を潜め一行を見つめる。どうにか顔を確認できそうな位置にいる彼らは、初めてここへ訪れた時に見た人達ではないだろうか。慌てて宿へ戻らされ詳細など知りはないが、町に暮らす人物とは思えない。

(シェラルドのヘンリック王子……？)

とうとう目的の人物が現れたのかと蘭はセルアの姿を探す。遊びには参加していないが、こちらの居場所を見失うような場所にはいないはずなのだ。自身が隠れている建物の影から眺められる場所へ必死に瞳を走らせると、セルアはすぐに見つかった。

町中を使つては広すぎると遊ぶ範囲を決めていた為、セルアは全体を見渡せる位置に腰を据えていたらしい。

少し遠いが蘭は大きく手を振ってみせる。とにかく気付いてもらわなければと、数度手を動かすとセルアが首を傾げながらこちらに向かつて歩き始めた。現在の位置からではわからないだろうが、もう少し近づくとヘンリック王子一行にも気付くはずだと必死に動きで呼ぶ。

このままセルアはやって来ると感じられた為、蘭の瞳は再びヘンリック達へと向けられる。合流し次を考えなければと頭を悩ませ始めれば、ソニアがヘンリックらしき人物にぶつかった。

隠れ場所へ向かう事に集中し過ぎたのだろうか、ソニアが謝っているらしい動きが見えた。

するとその謝られている人物が剣を抜き、隣にいた男がおやめくださいヘンリック様！ と大きな声を上げる。

「え……？」

蘭の感覚ではあのままソニアが謝罪し大人達が許す。それで全て

はうまく収まると考えていた。しかし、目の前にある光景は程遠いものだ。

明らかに彼はソニアを斬ろうとしている。

このままでは、いけない。

それだけが脳裏に浮かび、蘭はとにかく駆け出した。

「やめて！」

眼前に振り上げられた刃におののき動く事ができないでいるソニアへ蘭が駆け寄り、小さな体を自身で覆うように抱き寄せる。

それと同時に衝撃が右腕に走り、蘭は顔を歪めた。

「ラン！」

遠くからセルアの呼ぶ声が聞こえたが、今の蘭には応える余裕などない。切りつけられた痛みを感じながら閉じた瞳を開き、目の前に立つ人物を見上げる。

まるで虫けらでも見えていると思えるような表情で、ヘンリクは蘭とその体で隠されたソニアを見下ろしていた。

長く伸ばした銀髪に紫がかった淡い色の瞳、整っているように思えるその顔は薄気味の悪い笑みを称えている為か酷く醜く思えた。たっぷりとしたコートから覗く腕は青白く不健康そうに細い為、本当に剣を扱ったのかと思える程だ。

細く吊り上がっている瞳が、更に鋭さを増し蘭を睨みつける。

「邪魔をするな」

こうも憎しみのこもった眼差しに蘭は出会った経験がなく、おそろしさにすぐには反応できない。

しかし何かしなければと必死に相手を見据え、ゆっくりと呼吸を繰り返して心を落ち着けようとした。

傷口は激しく痛み、血が溢れ腕を伝い地面へと滴っていく感覚がある。蘭はソニアを庇ったまま傷口を左手で抑えると、口を開いた。「この子はぶつかっただけじゃない！ 斬る必要なんてないでしょう」

ただふざけていた子供がぶつかっただけで剣を抜く、その感覚が

蘭には理解できない。だが、向こうもこちらを理解する事はできないのだろう。

「私に触れる事は死に値する。それも知らぬか？」

くつくつと喉の奥で笑いながら、ヘンリクは剣の切っ先を蘭の目前に向けた。

傷口から溢れる温かいものの感触と痛みの事を考えながら、蘭は何も口にはできぬままにそれを見つめる。切れ味はすでにわかっており、このままどうなるのかも気付いてはいた。しかし蘭は逃げる事も立ち向かう事もできない。

いつの間にかたくさんの人が集まり蘭達を囲んでいたらしい。誰もがこの状況に心配そうな表情を浮かべてはいるが、声をかける事も行動を起こす事もできないでいる。蘭は正面にいるヘンリク達の隙間から見える者をわずかに認識しただけが、おそらく全体がそうなのだろう。

ヘンリクは周囲には興味も示さず、楽しそうに口元を歪めた後に告げる。

「命乞いはせぬのか……それもいいだろう。一瞬で楽にしてやる」
更に大きく口の端を吊り上げるとヘンリクの腕は高く掲げられる。太陽の光を浴び眩しいくらいに煌いた刃を見つめながら蘭は息を呑む。

「やめろ！」

そこに大声を上げて駆け込んで来たのはクロードだった。

蘭とヘンリクの間飛び込むように現れたクロードは短剣を手にしており、振り下ろされた刃を受け止めている。細腕のヘンリクと屈強な体を持つクロードでは力に差があるのだろう。クロードは両手で握っていた短剣の柄から片手を外し、自身の衣服の中へその手を差込みながらヘンリクを鋭く睨み身構えた。

何が起こるのか、そう思った瞬間。

「斬るな！」

クロードが動くと同時にセルアの声が聞こえ、物凄い勢いで光の

塊のようなものが二人の足元へ飛び込んできた。クロードとヘンリクの間で砂が激しく舞い上がり、周囲の視界を阻む。

そのわずかな間に蘭とソニアはセルアに抱え上げられ、大した距離ではないがヘンリクから遠ざけられた。

「ヘンリク様っ！」

従者が主を心配する声を上げ、蘭はセルアに抱えられた格好のまま事の成り行きを見守る。

砂塵に紛れたヘンリクを従者の一人が引き出し、クロードはただ立ち尽くし相手を睨みつけている。今は両の手に一つずつ短剣がしっかりと握られており、セルアの斬るなという発言は二本目に向けられたものらしい。

「クロード、こっちへこい」

呼びかけるセルアの声が聞こえているのかどうか、クロードは何も言わず微動だにしない。

数度繰り返し呼んだもののクロードが答える気配はなく、セルアは舌打ちをする。

「仕方ねえ、おとなしくしてろよ？」

そう言うと蘭はセルアの腕から開放され、力なく地面にへたり込んだ。すでにソニアを抱えている力もなかった為に、小柄な少女も一緒に座り込む格好となる。

蘭の元を離れたセルアはシェラルドの者へ目を向けながらも、クロードの腕を掴み無理やり引きずるようにして戻って来た。

抵抗するのかと思えば、クロードは何を言う事もなく素直にセルアに腕を引かれている。どこかぼんやりとしている姿に、セルアが活を入れた。

「しっかりしろ！」

しかしそれにも応える様子はなく、クロードはただ立っているだけだ。

「クロード？」

蘭も心配になり声をかけたが反応がない。

どうした事かと思っていると、ヘンリックの声が聞こえた。

「術師か……」

五歩も近づけばぶつかりそうな距離に彼らはいる。剣を手にしたままのヘンリックを挟むように両側に二人ずつ男が立ち、こちらとヘンリック双方の動きを気にしているようだった。

従者に守られる形で立つヘンリックが、視線をセルアに向けた。

「身なりからこの民と思っていたが……ウィルナだな？」

語尾が上がりはしたが、確信しているらしい口ぶりだ。ただでさえ余り良いとは言えない目つきが、憎々しげにこちらを睨み付けてくる。

「アンヘリカとウィルナは随分と仲がよろしいらしい」

そう言うとは何故かヘンリックは笑い出した。どこかおかしいのではないかと思う程に大きな声で笑い、それをしばらく続けると今度はつまらなそうに剣に目を落とす。

蘭の目には相手がどう行動するのかがわからず、セルアも身構えてそちらを見ているだけだ。

一体何をする？ 誰もがそう思いヘンリックを眺めているらしい空間が続く。

そこで動きを見せたのはヘンリックを取り囲む従者達だった。四人全員が王子の肩や腕を抑え、まるで身動きをするなど言わんばかりの力ずくな様子を見せる。そして一人が言葉を向ける。

「ヘンリック様、お止めください。マティアス様のご意向をお忘れですか」

ヘンリックの瞳がやけにゆっくりと従者へ目を向けられ、力ない声がこぼれるように漏れた。

「……兄上の意向、か」

何か迷っているのか、その目は従者と剣の間を幾度も往復し静止を受け入れたようには見えない。

「ここはお引きください」

丁寧ではあるが有無を言わせぬ雰囲気を漂わせ、ヘンリックの腕を

掴んだまま男は頭を垂れる。するとヘンリクは自嘲したかのような笑みを浮かべ、緩慢な動きで剣を納めた。

「先視み……か」

そして不機嫌そうな表情で帰ると言うのと悠然と蘭達から離れ始め、ヘンリクの向かう先にあった人垣が自然と割れる。

こちらへの興味など一切失ったかと思える程に進んでいくヘンリクを従者達が追い、蘭はただ座り込んだままに眩く。

「助かった……の？」

決して急ぐ事なく歩いて行く姿を見つめる蘭の腕に、セルアが布を巻き付ける。傷をきつく締め付けられる痛みに蘭は顔を歪めた。

「今はじつとしてろ、まずはお前の治療だ」

そう言いながらセルアは蘭を簡単に抱え上げると、足早に歩き出す。

「クロード！ お前もぼんやりしてねえで、そいつを連れて帰って来い」

先程から何を言うでもなく立ち尽くしているクロードへ、セルアが振り向きながら話しかけた。

お姫様抱っこをされている蘭には、その様子を見る事はできない。特にクロードが応える声も聞こえず、むしろソニアが震える声で話しかけているらしかった。

「お兄ちゃん大丈夫？」

それに応える声も聞こえなかったが、セルアが黙々と歩みを進める為クロードがどうしているのかはもうわからなかった。

「剣に向かって突っ込むな、馬鹿！」

宿へ戻り、腕を水で洗われ包帯を巻かれた蘭はベッドへ横になっていた。

医者らしい人はいるらしく、二人が宿へ戻るとマルタが急いで連れて来てくれた。おとなしくしていれば命に関わる事はないらしい。

腕はじんじんと痛むが、血の量のわりに傷は深くないと診断された。傷跡は残るが後遺症はないだろうとの事だった。

そうして、人払いをした後のセルアの言葉である。

「とっさに動いちゃったんだもん」

本当に、ただ危ないと思いソニアを庇ってしまったのだから仕方がない。それ以上の説明は思いつかなかった。

起き上がっていても良い気がするが、セルアやマルタに寝ているようにとしつこく言われた為、蘭は仰向けでベッドにいる。首だけを右に向け、側で椅子に腰かけているセルアを見た。

「そうだったのはわかってる。でも言わずにはいられねえんだよ」

大きく溜息を付きながら蘭の額に手を乗せ、優しく撫でセルアは続ける。

「代わりにお前が傷付いたら意味がないだろう？ 俺だってクロードだっていたんだ。もつと違う方法もあった。次からはこんな事はするなよ」

セルアの辛そうな表情を目にした蘭は、とにかく少女が斬られてはいけないと考えなしに動いた自分を思い出し頷く。

「ごめんなさい。もうこんな事にならないようにする」

「わかってるならいい。後はある程度傷を治す事だな。明日に帰るのは止めて数日ここににいるからな」

アンヘリカにいるのは丸一日、そう決めていたのだが大丈夫だろうか。セルアには城内での仕事があるはずなのだ。最近蘭の側にばかり来ているが、城内へ呼ばれる回数は多く不在は避けるべき状況にも思えた。

「大丈夫なの？」

蘭が聞くと、セルアは大丈夫だと言いながら笑みを浮かべる。

「傷口がある程度塞がるまではアンヘリカにいる。乗り合いは一度、御者だけでウィルナへ帰らせてユージンにも知らせる。そうすりゃ何とかなるだろう」

おそらくユージンが何とかするという事なのだろう。確かに今

あの乗り合いに揺られるのはさすがに辛いと蘭は礼を口にする。

「ありがと」

「今は寝てろ、あと食えるもんは食え。血が足りねえからな」

疲労を感じていた蘭は素直に頷くと瞼を閉じ、すぐ眠りに付いた。

五章・孤の秘匿と影（終）

それから五日。

蘭の元にはアンヘリカの民がたくさん見舞いに訪れた。食べ物や花、小物等、様々な品を手に見れては蘭の様子を心配し、そしてソニアを救った事への感謝を述べていく。蘭はアンヘリカの意志が読める人物だというだけでも親しくしていた人達が、やはり必要な者なのだと思信するようにやって来る姿は不思議なものである。

蘭は当然の事をしたまでだと告げるが、アンヘリカの人々はきつと意味があるに違いないと期待を込めた眼差しを向けてくるのだ。ソニアを助ける事は叶ったが、自身は怪我を負ってしまっている。いったい何ができるものかと不思議に思いながら来訪者との会話を続けていた。

こざっぱりとしていたはずの部屋は、すっかり物で溢れかえっている。さすがに食べ物を全て食べる事はできず、長く置いておくわけにもいかない為に宿中の人に手伝ってもらっていた。

「そろそろ落ち着いてきたな」

だるそうに椅子に体を預けているセルアは、大量の訪問者と蘭の傷の具合、どちらも含んで言ったようだった。ベッドの上で起き上がり壁に寄りかかりながら蘭は頷く。

「まだ痛みはあるけど、動いてもいいって言われたしね」

「明日にはウィルナへ向かうか」

事の次第を伝える為にウィルナへ向かった乗り合いも、昨日戻ってきた。あまり急がず揺られる分にはもう耐えられるだろう。

「ユージン心配してるだろうな」

「心配はしてるだろうが……」

何気なく呟いた台詞へのセルアの反応は悪い。

「どうしたの？」

聞き返すとセルアは蘭の髪に手を伸ばし何かを言いかけたのだが、

言葉を飲んだ。

「何でもねえよ。それより、クロードが顔を見せないのが気味が悪い」

セルアが言うようにクロードは蘭が怪我を負った後、姿を見せていない。ソニアはすぐにマルタとやって来たというのにだ。

彼の性格を考えると真っ先に飛び込んできそうだと思っていたのだが何の音沙汰もない。

こちらもクロードがヘンリクの剣を受けてくれた事で救われている。お礼も言いたいのだが、一向に姿は見えないままなのだ。

「何か用事があるとかじゃないの？」

クロードがウィルナとアンヘリカを往復しているペースは異常だ。最近では蘭に会うのを目的にしている為にかなり多いが、それ以前から行き来は多いらしかった。

「俺もそうは思ったんだが、どうも違うみてえなんだよな。アンヘリカにはいるらしい」

どうしてもウィルナへ行く用事がある為に来ないと思っていたのだが、違うとなると蘭も首を捻りたくなる。

「なんか、おかしいかも」

「だろ？」

「わたしがいるのにね」

自分で言うのも変な話だが、すぐ近くに蘭がいる状況でクロードが現れないのは不思議だった。普段ウィルナでもアンヘリカでも蘭にべったり付きまとっているというのに、どうした事だろうかと思うのは間違っではないはずだ。

「俺としては、あいつがべたべたしてるのは好きじゃねえが、こうも姿が見えないと気になるな」

セルアは立ち上がると、窓際へ向かい外を見る。

「出歩いてる風でもねえ」

「ただの気まぐれとかじゃないのかな？」

クロードは会話をしていても話題がよく変わり、表情が面白い程

に変わっていく。興味が無いものには触れない傾向もあり、クロードなりの理由があると考えてみる。

「だと、いいけどな」

セルアは呟くように言い、振り返った。

「少し調子がいいからって無理はするなよ？ 今日もおとなしくここにいろ」

「もう飽きたけどな」

つまらないと口にした蘭へ、セルアは近づくと頭を優しく撫でるが最後に揺さぶる。

「飽きたじゃねえだろ？ どうせまたすぐこっちにも来れるんだ。今回は我慢しろ」

蘭はセルアを見上げながら、少し間を置いて答えた。

「わかった……おとなしくしてる」

「ならいい。俺は少し外へ出て来る」

そうして部屋の外へ出て行くセルアを見送った蘭は、立ち上ると窓際の椅子へ腰かける。怪我をしたのは腕なのだが、必要最低限の事をする以外はベッドで過ごしていた。そろそろ動き出したいと思っているのだが、周りはそれを望んでいない。明日ウィルナへ発つまではこの部屋にいるしかないのだろう。

一緒に出歩けるのならばセルアは蘭と共にいる事を望む。しかし、今回はそうもいかずセルアは一人でアンヘリカの様子を探りに出かけていた。ヘンリクがソニアを斬ろうとした一件で、町の人々の心証も変わっているらしくなるべく多くの情報を仕入れたいようだった。

「結局、ヘンリク王子に会ってもマティアス王子の事は聞けなかったしな」

ぼつりと零しながら蘭は考える。

軽く子供がぶつかっただけで剣を抜き、迷う事なく振り下ろした姿を思い出す。咄嗟に飛び出した為、途中からの表情はわからないが命の宿っている者を見ているようには思えなかった。

蘭にはヘンリクにマティアスの現状を聞こうと考えた事が、初めから間違っていたと思えてならない。だが、こうして蘭達がヘンリクを気にしていなければ、ソニアは簡単に斬り捨てられていたのかもしれないとも思える。

しかし蘭がこちらに来ていたからこそ遊んだと考える事もでき、不在で同じ状況になっていた可能性も否定はできない。

（あの子が助かっただけでもいいって思うしかないのかな？）

そう考えながらも、何か心の内が落ち着かない蘭は溜息を付く。

そして、あのヘンリクの兄とはどのような人物なのだろうかと頭を悩ませた。

本を読める可能性はあるが、その人自体に会う事が危険ではないのだろうか？ 情報を仕入れたとしても手に負える人物なのかもわかりはしないのだ。

「難しい……な」

色々と頭を悩ませていると、扉を叩く音がした。

また誰かが見舞いに来たのだろうか、蘭は慌ててベッドへ移動し腰かけると返事をする。

「どうぞー」

すると扉は静かに開かれ、顔を覗かせたのは先程まで話題に上っていたクロードだった。珍しく何を言う事もなく部屋に足を踏み入れる。

「クロード、どうしたの？」

普段とはどこか違う雰囲気思わず、そう声をかけてしまった。

弱々しい笑みを見せながらクロードがベッドの側に椅子を持って来て座り、暗い声を向けられる。

「傷はどう？」

「だいぶいいよ。このくらいで済んだのもクロードもおかげだね、ありがとう」

心配そうに視線を向けられていた為、蘭がゆっくりとだが腕を動かして見せるとクロードは良かったと呟く。

「すぐに来れなくてごめん」

こちらが気にする程姿を見せていなかったのは確かだが、謝られるのはどこか落ち着かず蘭は首を横に振って答える。

「いいんだよ。わたしもクロードに会いに行けなかったし」

「う……ん」

自身が心配されるよりも、どうも元氣のないクロードが蘭は氣になった。いつもならこちらが何を言わずともあれこれと話し始めクロードのペースに巻き込まれてしまうのだが、今日は表情が暗く言葉の齒切れも悪い。

先程もどうしたの？ と聞いてしまったが、本当にそう思うのだ。どのように声をかければ良いのかと悩みつつも、蘭はクロードの表情をうかがい見る。喜怒哀楽がわかり易いはずのそれが今はどこか冴えない。

「何かあった？」

理由があつての事だろうと、蘭は思い切って聞いてみた。すると、クロードは困った表情を浮かべてこちらを見返してくる。

何かを考えているらしい様子に蘭は何も言わず、ただじっと待った。話すも話さないもクロード次第だと答えを待ってみる。

たっぷりと時間は過ぎ、その間にもクロードは幾度か口を開きかけた。しかし、すぐにそれは飲み込むように止まり、視線は蘭を見たり見なかったりと定まらない。

蘭が無理に話す必要はないとクロードに告げようとしたその時、言葉が放たれる。

「死なないよね？」

思いもしなかった質問に、蘭は瞬きを繰り返してクロードを見た。「何？」

「死なないよね？」

同じ言葉を繰り返すクロードの瞳は、真っ直ぐ蘭へ向かっている。何をどうして死ぬなどと言い出したのだろうかと思いつつも蘭は頷く。

「死なないよ？」

「本当に？」

椅子から腰を上げ、蘭のいるベッドの端に両手を付いたクロードが顔を近付ける。

ひどく間近に迫った表情はしっかりしているようでどこか虚ろにも思え、蘭はその不自然さに戸惑いすぐには言葉を出せずにいた。座っていた布団の上を後退るようにしながら、距離を取り様子のおかしさを訝しむ。

そこへクロードは急かすように言葉が続ける。

「絶対？」

「……絶対ってどういう意味？」

怪我をしたがそのせいで死ぬ事はない、それならば答えられる。しかし、クロードの物言いはどうも違うようだ。そもそも絶対に死なないという表現がどこかおかしい気もする。

蘭の返した言葉にクロードは何故か頷く。

「だよね？ 絶対なんてないよね」

突然、蘭の首にはクロードの両手が伸び、何事かと思う間もなく締め付けられた。

「！」

一瞬で息苦しさを覚え、蘭は声を上げる事もできずぎりぎり締め上げてくるクロードの腕を叩いて抵抗した。離して欲しいと懸命に訴えるが、応じられる気配はない。

息ができず頭がぼんやりすると思いつつも、どうにかこの状況から脱しなくてはならないと背後にある壁を手足でがむしゃらに叩き、蹴る。

目の前にいる人物の様子は真っ当とは言いがたいのだ。これはもう別の者に気付いてもらう他はないと、蘭はとにかく音を立てる事で危機を室外へと訴え続ける。

尋常ではない音に気付いたのかすぐに走る足音が近づいてきたが、クロードはただ虚ろに蘭を見つめ首を掴んだままだ。

(このままじゃ……だ、め)

そう思った瞬間、扉が激しく開かれマルタが飛び込んで来た。その手には階下で使用していたのか鍋が握られており、マルタは迷う事なくクロードの背中を思い切り叩いた。

「この馬鹿！ 何やってんだい」

その勢いにクロードは大きく前に体を倒し蘭に圧しかかって来たが、おかげで両手は首から離され、塞がれていた気管に空気が流れ込んで来る。しかし、今度は体の大きなクロードが上にいる為、これはこれで息苦しかった。

激しく咳き込みながら押しつぶされていると、マルタがクロードの肩を掴み引っ張る。

「さあ、起きな！ クロード！」

女一人の力で持ち上げられるような大きさではなく、マルタはクロードが自身で起き上がれと声をかけ続けた。蘭も早く退いてはくれないかと抵抗し続け、随分と時間が経ったようにも思える。

「……あ、れ」

蘭とマルタの必死さをよそに、突然どこか呑気な声を上げたクロードが体を起こして辺りを見回し、首を押さえて咳き込む蘭の姿を目に留めた。

「どうしたの？ 大丈夫」

まるで今までの流れを知らないような素振りに蘭は驚き、途切れ途切れにだが声を上げる。

「大……丈夫……って」

言葉が続けようとするが、苦しくなりまたも咳き込む。そこへマルタが手を差し出し蘭の体を起こすと、背中を優しくさすってくれた。

「無理に話す事はないよ。まずはちゃんと息をして」

「ん……」

蘭は静かに呼吸を繰り返し、どうにか落ち着かせると二人を見上げる。マルタはわかるのだが、クロードまでもが心配そうにこちら

を見ている姿はおかしい。

「首が赤くなってる」

手を伸ばしたクロードに蘭は慌てて後退りをしたが、ベッドの上をわずかに移動し壁際に背中を付けるばかりだ。

この動きに驚いた表情を見せ手を引いたクロードを、蘭は不思議に思いながら見上げる。

「クロ……ド？」

どう聞けば良いのかがわからず、蘭は掠れた声で名を呼ぶ事しかできなかった。自分がどんな表情をしているかはわからないが、クロードが浮かべているのは随分と悲しそうなものだ。

「オレ、何かした？」

眉を寄せながらこちらの様子を見ていたマルタが、今度は素手でクロードの背中を叩いた。持って来た鍋は床に放り出されている。

「あんたがやらかしたんだよっ！　また覚えてないって言うのかい」

「覚えてないって何を？」

不思議そうに目を丸くするクロードは、本当に自分が何をしたのかをわかっていない。そうとしか思えない様子に見える。

どうも誤魔化しているわけでもなく本気で言っているのかと蘭が思っていると、マルタは大きく溜息を付いた。

「……本当に覚えてない、のかね」

「本当に？」

咳き込みはしなくなったものの、どこか調子の悪い声で蘭は聞く。するとマルタはクロードの頭を一つ叩く。

「全然覚えてないって事だよ、今の自分の行ないを」

「何で叩くんだよ！」

理由もなく叩かれたと言いたげなクロードを蘭は何事だろうかと思つめ、マルタは睨み付けて告げる。

「あんたがランの首を絞めてたんだよ！　二階からすごい音がするのとクロードがぼんやり登ったって話を聞いてこっちはすっ飛んで

来たから間に合ったものの……殺す気かい！」

「え？」

何を冗談を言っている、初めクロードはそんな表情を見せた。しかし、その瞳が蘭の首に残る痕へ向き、表情は変わる。

「オレ……が？」

何かを確かめたいのか再び蘭に手を伸ばそうとしたクロードを、マルタが間に入り遮った。

「今回ばかりは洒落にならないよ」

「ほんと……に？ オレが締めた？」

マルタは今回と言った、それは同じような事が過去にもあったとも取れる。そしてクロードは覚えていない事ではなく、本当に首を締めたのかだけを聞いた。

自分の行動を覚えていない事などあり得るのだろうか。そう思いながらクロードから向けられた視線に、蘭は無言で頷く。詳しく説明する必要があるのかもわからなかった。

「……なんで、だろ」

蘭の答えを知るとクロードは両の手のひらをじっと見つめ呟いた。何故なのかわからない、そうはつきりと汲み取れる声で言い視線を蘭へと動かす。

「どうして、だろ……オレ、何で？」

声も瞳も揺れ、クロードは何度もどうして？ と呟き、その声は次第に泣いてしまうのではと思う程に変わっていく。

「駄目だ、わからない。オレ……」

そう言くと、クロードは部屋を飛び出して行った。蘭は声をかける事もできずその姿をただ見送ってしまい、困ったようにマルタを見上げる。

「しばらく放っておくといいよ」

マルタは冷たく言い放ち、蘭はそれにすら戸惑う。

「でも……」

「本当にわからないんだよ。クロードにもあたし達にも、どうして

やったらいいのかずつとわからない」

困り顔になったマルタは蘭の首を覗き込みながら、小さく息を吐く。

「これはすぐには取れないだろうね。セルアが戻って来たら何て言うか……まあ、誤魔化すべき事でもないし、本当の事は伝えるよ。ランもちゃんとあった事を言うんだよ？」

そして、クロードが側に寄せた椅子にマルタは腰かける。

「しばらくはここにいようかね。あの子がここに戻って来るとは思えないけれど、今は一人じゃない方がいい」

柔らかな笑みを向けられたが、蘭はそれにどうしていいかわからず曖昧に頷いた。一人でいるのは確かに怖い気もしたが、飛び出した行ったクロードも気にかかるのだ。

「わたしはもう大丈夫だよ？　クロードの方が心配かも、行ってあげて」

そう言った蘭にマルタは首を横へ振る。

「そうはいかないよ、ランも大切なんだからね」

「じゃあ、少しいてくれたらどう？」

何度も繰り返す蘭にマルタも折れてくれたらしい、渋々ではあったが頷いた。

「仕方ないね。もう少ししたらクロードの所へ行くから、ランもセルアにちゃんと話すんだよ？」

言い聞かせるようなマルタに、蘭はしっかりと返事をする。

「わかってる、大丈夫だから」

二人は会話のないまましばらくの時を過ごし、マルタは部屋の入りに誰かを置いておくと告げ去って行った。

「あの野郎！」

部屋から飛び出して行きそうなセルアの腕を左手で掴み、蘭は必死に止める。

「今すぐじゃなくなっちゃっていいでしょう？」

「自分が殺されかけたってのに、どうしてそうなんだお前は！」

掴んでいる腕を振り解こうとしたセルアだったが、蘭が怪我をしている事を思い出したのか動きを止め、怒りに染まっている瞳をこちらへ向けて来た。

ベッドの端に座っている蘭は、目の前に立つセルアを見上げる。

手はまだセルアの片手を掴んでおり、このまま部屋にいて欲しいと願っていた。

「行ってしまうの？ クロードは本当に覚えてないんだよ？」

「その覚えてねえって意味がわかんねえ。そんな事あるかよ」

とにかく落ち着いて欲しいと蘭は何度も訴え、どうにか苛ついているセルアを隣に座らせる事に成功した。その上で手を繋ぐように掴むと、セルアはわずかながら笑う。

「ランからってのはありがたいが、今は複雑だな」

どうしてもクロードの所へ行かないで欲しいという言い分を、セルアは納得していない。蘭の話を聞いた途端、一つ二つではなく殴ってやると言ったのは、おそらく冗談ではないだろう。

しかし、クロードの様子を思い返す限り、今セルアが彼を殴ったところでどうにもならない。そう思えるのだ。

セルアは蘭に手を握られたまま器用に体を動かしベッドの上であぐらをかくと、空いた手でこちらの首に優しく触れた。

「あいつが本気で体重をかけてたらとっくに死んでたんじゃねえのか？」

痛々しく赤くなった指の痕をなぞるセルアに、蘭はどう答えるべきか悩む。

確かにクロードが本当に息の根を止めようとしたなら、一思いにできたとも思える。多少なりとも迷いがあつたからこそ、今自分は生きているのかもしれないとも考えられた。

だが、クロードが望んであの行動をとったのかはわからない。とんでもない事をした、そんな表情を浮かべて飛び出して行った姿も

真実なのだ。

何も言えずにいる蘭へセルアは更に言葉を続ける。

「どんな理由なのかは知らねえが、クロードはお前を殺したかったって事だろ？」

殺したい。実感のない感情に思いを馳せるが、答えが出るはずもない。蘭は今まで誰かを殺したと思った事など微塵もありはしなかった。

「……そう、なのかな」

呟いた蘭に、セルアも表情を曇らせる。

「そうは言っても、俺にもあいつがそんな事をするとは思えねえ。だが証拠はここにある」

触れられたままの首に蘭も手を伸ばしてみる。自身で見る事はできないが、先程鏡で見た時と同じく赤くなっているのだろう。

「本当に駄目かな、って思ったもんね」

息を吸い込めずに意識が遠のきそうだった寸でのところでマルタが来てくれた。それがなければ今頃どうなっていたのかは想像したくもない。ヘンリクに斬られたよりも更に危険な目に合うとは思ってしなかった。

「それでも俺があいつのどこに行くなって言うのか？」

少しは穏やかになったセルアだが、まだ諦めてはいないらしい。

「わたしが怖くて逃げた時、クロードは悲しそうな顔をしたの。そして、マルタに首を絞めたって言われて、信じられないものを見るように自分の手を見つめてた。何かおかしかったんだよ？」

「見てねえ俺には不思議なんだよな、自分でここに来たんだろう？」

「どうおかしかった？」

どうおかしいのか、これはとても難しい質問だった。蘭はクロードが部屋に入り出て行くまでの流れを必死に思い返し、考える。

「全部……だと、思う。ここに来た時からいつもと雰囲気違ってた気がする」

「いつもと違う……か。そーいやランが斬られた辺りからぼんやり

してたな」

言われてみると、あの時からクロードはどこかおかしい様子を感じさせていた。

「あの時からなのかな？」

「あの時？」

「わたしが斬られた後からそのままって事なのかなと思って」

「そのまま、か」

セルアは蘭の首から手を離すと、自分の前髪を掻き上げながら何かを考えている様子だった。唸るようにしながらたっぷりと時間を置いて最終的に首を横へ振る。

「わっかんねえ。やっぱクロードに直接会うしかねえだろ」

そうして繋いでいた手をセルアは静かに解こうとし、蘭ももう無理に止めようとも思わなかった。このまま二人で考えても、解決する事ではないのだ。

「行くの？」

不安そうに聞いた蘭へ、セルアは笑みを見せた。

「ああ。そんなに心配しなくていい、さっきよりは俺も落ち着いてるからな」

そうは言われても気になる蘭は口を開く。

「なら、わたしも行きた」

「それは駄目だ」

しかし、蘭に全てを言わせる事なくセルアは否定をする。

「俺だけが行く。大丈夫だからランは休んでろ。扉の外には誰かをつけておくからな」

そしてそう言うとうつくりと立ち上がり、部屋の外へ出て行った。

翌朝、蘭とセルアはウィルナへ向かう乗り合いの中にいた。

いつもならばたくさんの人に混じり見送ってくれるはずのクロードも、今回ばかりは不在だった。

昨日、セルアはマルタを通してクロードに会ったらしい。しかし、セルアが話をしてもやはり自分のした事を覚えてはいない様子で、あまりの落ち込みように会ってすぐに一発殴れただけだったと戻って来たのだ。

それでも殴ってはいるんじゃないと蘭が言うと、セルアはこう答えた。

「クロードに何も聞かずにまず手が出たから殴れたんだ。そうでなきゃ、そのまま帰って来ていただろうな」

それは本当にクロードが見ていられない程の有様だったという事なのだろう。

セルアはあまり詳しく話そうとはせず、蘭もどこか聞きづらい気がした為、話はそれ以上進まなかった。

「大丈夫なのかな……」

何に対してかを口にはしなかったのだが、セルアにはじゅうぶん伝わったらしい。

「そう思うしかねえだろ」

おそらくセルアも蘭と同じように気にしているのだろう。しかし、二人はウィルナへ帰らねばならず、クロードへ何をすべきなのかわからない。

並んで座りセルアが蘭に触れる事はいつも通りだったが、会話はどうしても弾まない。

心配事を残したまま乗り合いはウィルナを目指していた。

六章・孤がまみえるは虚実（一）

「いったい、何を言えいいのかわかりませんね」

珍しく頭を抱える仕草を見せたユージンは、そう言ったきり黙り込んでしまった。

蘭が怪我を負ったという知らせを受けてはいたが、どうにも予想を大きく超える事態に言葉が出ないらしい。

ストールを巻き首の痕を見えぬようにした上でコートを羽織っている蘭は、一見すると大丈夫そうに思えたのだろう。しかし、部屋へ戻りソファに座った蘭が布を外せば、痛々しい程の指の痕があり腕には包帯が巻かれている。

その様子にユージンは顔をしかめ、何があったのかと問い詰めて来た。

それにセルアが端的にはあるが、一連の流れを説明したところだった。

重苦しい空気が漂い蘭はセルアが何か言わないのかと視線を向けるが、どうにもぼつの悪そうな表情でソファに背中を預けている。

普段ならば蘭の隣へ座るのだが、どうしてか今日は側にいない。蘭とユージンは向かい合っており、セルアはこちらから見て右手にあるソファに座っているのだ。以前からの定位置ではあるが、今となっては珍しいと思える程にセルアはそこに座っていなかった。

全員がだんまりとしている状態に耐えられなくなった蘭は、ユージンに向けて腕を動かして見せた。

「ちゃんと動かし、大丈夫だよ？ 首の痕もしばらくすれば消えるはずだし」

元氣だと伝えようとした事は理解してくれたらしく、ユージンは渋々ながら頷く。

「それは不幸中の幸いと言ったところですが……」

しかし、笑顔は見られない。表情はかえって暗くなり、大きな溜

息がこぼれた。

「色々と納得がいきませんか？ セルア」

ユージインの視線はいつになく鋭く、向けられた側のセルアは黙って受け止めている。

「貴方がいるというのに、ランだけがこうも怪我をして帰って来る事になるのはどうしてでしょうか？」

特に何かを言うつもりはないらしいセルアへユージインが言葉を続け、そしてまた沈黙が訪れた。

「わたしが飛び出したのが原因だから、セルアのせいじゃ」

「それだけでは済みません」

蘭が口を開くとすぐにユージインに遮られてしまい、どうしたものだろうと押し黙ってしまふ。するとセルアが前髪を掻き上げて一呼吸置いた後によりやく言葉を吐く。

「俺はランを守る為にいたんだ、ユージインが正しい。すっかりアンヘリカに慣れて油断しちゃってた」

「そうは言っても、どれも仕方がない気もするよ？」

二人はセルアを責めるような考え方をしているらしいが、蘭からするとそれはおかしいと思える。結局は自分が考えなしに飛び出したのだ。

セルアは眉を寄せ自嘲気味に笑う。

「そうになると、何もかもが仕方ねえで済んじゃうだろうが」

「やるべき事はすべきなのですよ。まあ、私も以前クロードにランを連れ去られているので大きな事は言えないのですがね」

ようやく笑みを見せたユージインに、セルアはそうだったと声を上げる。

「ユージインも俺の事を言えないんじゃないかよ」

そしていつも通りにあぐらをかいたセルアへ、ユージインは呆れ顔を浮かべた。

「珍しくおとなしくしていると思えばそれですか」

「さすがに今回はまずかったと思ったんだよ。ユージインは怒ると

怖えからな、どんだけ言われるかと覚悟して来たんだが」

「私に怒れと言っているのですか？」

あまりのふてぶてしさにユージインが再び目を鋭くすると、セルアは少しばかりだが姿勢を正した。

「そんなつもりはねえよ……俺だって気にしてんだ」

「そうだとは思っていましたよ？ 貴方は色々と気にかかる人ですからね」

「何だよ、それ」

わざとらしく笑って見せたユージインに、セルアは面白くないと言葉を濁らせる。

思い返せばアンヘリカでもセルアはユージインの事を随分と気にしている様子だった。どうやら叱られる事を気にしていたのかと思うと、蘭は少々面白くなり笑い声が漏れる。

「笑うな！」

セルアが喚くと同時に、ユージインが笑みを潜めこちらへ目を向けた。

「ランの行動にも問題がないとは言えないのですからね？」

「ご……めんなさい」

慌てて蘭が口にすれば、ユージインは表情を柔らかいものへ変える。そうして少し間を置くと、今度は眉を寄せ何かを考えているようだった。

「どうしたの？」

蘭が問うとユージインは視線を数度移動させる。セルアを見たかと思えば蘭の二箇所を傷を眺め、微かに首を傾げた。

「いえ、どこから話をするのが良いかに困っていましたね」

「クロードか、ヘンリクかってどこか？」

気を使って別のソファに座っていたのであろうセルアが蘭の隣に移動しつづ言うと、ユージインは小さく息を吐いた。

「ヘンリク王子は少女がぶつかった事で斬ろうとしたのですよね？ 以前、理由もわからぬままアンヘリカの男性が斬られた事を思え

ば、わからなくもないとは言えます。しかし、少々短絡的過ぎる気がしますね」

セルアの言葉は当たっていたのだろうか、ユージインはヘンリクについて話を始める。

「そういや、周りの奴らは止めたがってたな」

蘭の腰へ腕を回しながらセルアが言った事で、自身もあの時を思い出す。

「そうだね。でも、どうしても止めるって程でもなかったかな？」

マティアス王子の名前を出されて、先視みがどうか言って帰ったけれど」

絶対的にヘンリクを止めたいのならば、男が四人もいたのだ。斬り付ける前に止める事も可能だったと思える。しかし、彼らはそこまでをしようとはしていなかった。

セルアも同じだったらしく、頷きながら蘭の右腕へ目を向ける。

「確かにそうだな。はなっから止めてくれてりゃ、こんな事にはならなかったのによ」

「どうしても止めたいわけでもなく……？ どっちつかずな印象がしますね」

ユージインは蘭とセルアの言葉を聞き、自分なりに考えてから話をしているのだろう。普段よりもゆっくりと話す。

「どっちつかず、か。あとは何かおかしいところはあったか？」

セルアに聞かれ、蘭は更に思い出そうとする。

「んー、ウィルナだってわかってからの様子はおかしかった、よね？」

どうやらセルアがウィルナの術師だとわかった途端、ヘンリクは大声で笑い始めた。あの異様な雰囲気は何だったのかと思いつながら説明すると、今度はユージインが不思議そうな顔を浮かべる。

「笑った？ ウィルナだとわかって？」

「なんて言やいいんだろうな、ちょっとおかしいと思っちゃまいそうなくらい笑ってたぞ」

「その後にアンヘリカとウィルナは仲が良いとかって言ってたね」
セルアと蘭が順に告げると、ユージインは首を傾げながらも口を開いた。

「よく、わかりませんね。とにかく、ウィルナだとわかりそのまま帰ったという事ですか？」

それを聞いたセルアはちょっと待てと言うと、状況を改めてを思い出し始めたらしい。視線を動かしつつ、自身の髪に触れる。

「今思うと、ウィルナだとわかったから止めたのかもしれない。アンヘリカの奴ならまた違ったのかもしれない」

「ウィルナだと止めるの？」

蘭は不思議に思い聞く。

「俺はな、相手がシェラルドの人間だから迂闊に手が出せねえと思ってた。ましてや第二王子ともなりゃ、氣を使わないわけにはいかねえ」

「それが後手に回った原因ですよね？」

ユージインが言うと、セルアは口調を少し荒げた。

「そりゃそうだろう。基本的に術師はアンヘリカにいない。ウィルナとシェラルドだけに素質がある奴が生まれて、国に留まらされる。あの場で術師だと知られるわけにはいかねえだろうが」

だからアンヘリカは魔力で守られる事もなくいたのだろうか。蘭が一人思っていると、その間にも二人の会話は進んでいく。

「私もそう思いますね。しかしそこでクロードが斬りかかったのでしょう？」

「斬りかかりそうだった、が正解だな。その前に止めちゃった」

セルアが己の手のひらを揺らしながらユージインへ見せると、仕方なさそうな顔きが続く。

「さすがに王族を傷付けるわけにはいきません。アンヘリカとシェラルドの間で大きな問題になるのは目に見えています」

「だから、使わざるを得なかった」

「そして、そのおかげで周りはヘンリクを止めた……と言ったところ

ろでしようかね」

ユージインの意見に蘭は首を傾げながら聞く。

「アンヘリカの人なら良くて、ウィルナの人駄目って事？」

「ただのウィルナの民なら斬っただろうな、おそらく術師の俺がいたから止めたんじゃないか？」

「姫がない今、こちらはシェラルドと事を構えるわけにはいきません。それは向こうも同じという事なのでしょうか」

ユージインは予想の範囲ですがね、と念を押して続けた。

「向こうから停戦を持ちかけて来た事を考えると、あちらにはウィルナと戦う意思はないと思っても良いのではないでしようか？」

その意見にセルアは難しそうに首を捻る。

「マティアスの名と、先視みって言葉も出てる。第一王子が先視みを使った結果によつてはあり得なくはねえ……のか？ とにかくヘンリクが先視みを持っていない時点で国の命運に関わる事を控えさせるのは確かだろうな」

どんなに意見を出し合っても、想像の範疇を超えることはない。

ユージインとセルアは他にも色々と言口にはしたが、これといった案は出ないらしく揃って曖昧な表情になってしまった。

「わかんねえな」

セルアが少し苛つきを見せれば、ユージインは溜息をつく。

「とにかく、このまま大事にならなければ良いのですがね。仮にシェラルドが何か申し立てたとしても、こちらはあくまで仲裁した立場ですからどうともできるでしょう」

「実際に俺は二人を止めたただけだからな、ランだってアンヘリカの子供を救おうとしたんだ。こちらの否はないだろう？ クロードもまあ、何とかなるだろ」

最後は少し投げやりに言ったセルアへユージインが視線を向ける。

「その件に関しては、です」

「それはわかってる」

少々咎める口調で言われたセルアは、そう返事をしつつ蘭の首へ

優しく触れた。

「こっちはどうするか、だろう？」

いまだ消えずに残された指の痕は特に痛みもしない。だが、こちらを眺めるユージンとセルアの表情は痛々しいものを見ていると物語る。

「そうです。何故彼がそのような行動を取ったのか本当にわからないのですか？」

ユージンの表情も口調も、ヘンリクの話をしている時よりもずっと厳しくなっている。

「俺は外に出ていたからわからねえ、あの建物内なら大丈夫だと思っていたのが甘かった」

蘭の首へ置かれたセルアの手からは優しさを感じたが、表情にはそんな雰囲気は微塵も感じられず声は己の迂闊さを悔いているのか暗い。

「私もあの宿は信用に足りると思っていましたよ。ですが、今回の事を考えると簡単にアンヘリカへ行くべきではないのかもしれないね」

クロードだけではなく、マルタを含めた人達をも疑うユージンの口ぶりに蘭は驚く。

「マルタもどうしていいのかわからないって言ってたよ？　今回が初めてじゃないみたいなきもちだったし」

「貴女はそれだけの傷を負って帰って来たというのに、アンヘリカへ行きたくないとは思わないのですか？」

眉をひそめたユージンに蘭は困ってしまう。色々な出来事があり、たくさんの感情が自分に湧き上がったのは確かだ。しかし、それでアンヘリカ全てを否定できるかと言えば違った。

「怖かったよ？　でもわたしがヘンリク王子に斬られたのはソニアを庇ったからだし、仕方がないのになって思えるところはある。クロードの事は殺されるかとも思ったし、その後はクロードに触られるのも嫌だった。でも、あの姿を見ていると何ていうか……クロード

ドの方が大変なのかな、とも思えたっていうか」

本来ならばもっと恐れなくてはならない状況であるはずだと、自身でも理解していた。刃物で斬りつけられる経験などあるはずもなく、首を絞められ息の根が止まるような事態に陥った事もない。

二度とアンヘリカへは向かいたくない。クロードにもヘンリクにも会いたくないと思う事こそが正常ではないのかと感じる部分はあるのだ。

しかし、何故か蘭はアンヘリカそのものを拒もうとは思えない。これまで何かしらの手がかりを得てきたように、全てには意味があると当てのない何かが訴えかけているような感覚すらあった。

とにかく思った事を伝えようと必死に話しているとユージンは苦笑する。

「私にはできない考え方ですね」

笑みを浮かべてはいるが酷く冷めた瞳がこちらを見つめていた。蘭の考えを聞きはするが本当に理解できないと言いたげな様子に、セルアが珍しく同意する。

「俺も初めはそう思った。だが、クロードを見てランの言う事も少しわかった気もする」

おや、とユージンは驚いた表情を浮かべると、セルアも小さく笑う。

「あいつに会ってすぐにぶん殴ってやったんだ。倒れるくらいに思いつきりな。クロードは起き上がって俺を見はしたが、何を言うでもなくいた。この世の終わりみたいな顔してやがった、どうしたもんかと思って何故あんな事をしたのかと聞けば、覚えてねえって言いやる」

どうやらセルアはクロード自らに話をさせようとしたらしい。しかし、クロードは覚えていない。どうしてあんな事をしたのか、本当なのかも、何もかもがわからないと繰り返すばかりだった。

それに困ってしまったセルアへ声をかけたのが間に入ってくれていたマルタであり、彼女はクロードがここで暮らすようになった時

点ですでにこうだったと言った。

「大切にしている生き物をいじめちゃったり、好きらしい女に傷をつけたりする傾向があったらしい。原因はわからねえし、クロードは綺麗さっぱり忘れちゃってるって事だったが」

マルタの言葉を説明しながらも、どこか納得し切れていないのかセルアの表情は曖昧だ。黙って聞いていたユージンの顔にも疑問が浮かんでいるように見える。

「クロードと二人きりにしない方がいいと言われてはいましたが、こうも大事になるとは思っていませんでしたね」

「ユージンは何て聞いてたんだ？」

以前マルタからクロードについて何かを言われていたらしい事へ触れるセルアに、ユージンは首を横へ振った。

「とにかくランと二人きりにするのは避けて欲しいと言われただけです。傷物にはしたくないとマルタが言ったのでその通りなのだと思いますが、まさかこんな意味合いを含んでいるとは……」

「屋敷に侵入しようとした時を考えると、どっちの意味も含まれてたって気はするけどな」

溜息混じりに言ったセルアが、蘭の頬に触れる。何だろうと蘭がそちらへ視線を向けると、セルアは答える事はなく今度は唇で頬に触れた。

「……もう。真面目に話しようよ？」

魔力を移す作業は必要なものであり蘭は軽くたしなめるだけに留める。するとセルアは口端を上げるだけだ。

「改めて無事で良かったと思ったんだ、いいだろ？」

「それは、ありがと」

事を荒げる必要もないと蘭は簡単に頷く。怪我をして寝ている間、来客がいない時に限り蘭へ触れていたセルアは、普段よりも魔力を移せてはいなかったのだろう。よく暴発もせずにやり過ごせたものだ。と今更ながらに思いながら、その分を受け取らなくてはと蘭はセ

ルアの行為をそのまま受け入れる事に決める。

そして思考はクロードへと戻り、この屋敷へ入り込もうとして魔力に吹き飛ばされた時を思い返す。

「でも、ここに入ろうとした時のクロードは自分の行動を覚えていたよ？」

確かに気絶し目覚めたクロードは、自身の行動をしつかりと把握していた。誤魔化そうとはしたが、それは己が何を考え何をしようとしたかを踏まえた上での行為だった。何かが欠落していたとはとても思えない。

「そうですね。あの時は会話も成り立っていましたし、覚えていないという状況とは違うのでしょうか」

あくまでおそらくとしか言えないのだが、そうなのだろうと三人が顔を見合わせながら頷く。

「今回は覚えていない。俺達は初めて見たがマルタはそうじゃねえ。何か理由があるって事なのか？」

セルアの言葉を聞きながら、蘭はふとクロードの台詞を思い出す。「そういえば、死なないよね？　って聞かれた」

クロードは蘭は死なないのか？　そう聞いて来た。絶対に死なないのかとどこか不自然な質問を投げかけて来たのだ。

「絶対に死なねえ？　何だそりゃ」

一通りを伝えるとセルアはわけがわからないと首を捻る。それとは違いユージインは神妙な面持ちで、死なない？　と呟き、考え込み始めた。

「よくわからないけど、そう聞かれたの。怪我のせいで死なないとかじゃなくて、根本的？　って言うのかな、とにかく死んでしまう事自体にこだわってたのかな？」

それを聞かれ言葉に詰まっていると一気に首を絞められた。その間にクロードが何を思っていたのかは皆目見当も付かない。だが、そこに何かがあるとは思わされる。

「クロードの様子はランが斬られた時からおかしかったのですよね

？」

「たぶん」

ユージィンに聞かれ蘭が頷くと、セルアも同意した。

「あの辺りからぼんやりしてたな。呼んでも反応しねえしで、こっちは困った」

セルアに無理やり引きずられたクロードが思い出される。あの時点でおかしな部分は確かにあったのだ。

「ランが斬られた事と死なない事、それがクロードの行動の一因である可能性はありそうですね」

「斬られた事と、死なない事？」

ユージィンの意見に蘭は疑問を覚え、セルアは心底嫌そうにその時の感情を口にする。

「俺はあの時、ランが死ぬかもしれねえ。少しばかりだがそう思った」

蘭は自身がとにかく駆け出した事を思い出し、そう思わせる程に危険な行動を取ったのかと改めて気付かされた。聞きづらいとは思ったが、敢えて言葉に乗せてみる。

「そんなに、危なかった？」

するとセルアは目を吊り上げ声を荒げた。

「危なかったどころじゃねえだろうが！ 急に走り出した先を見たら、剣を振り上げた奴が立ってたんだ。あれは死に行ってるようなものだぞ」

思っていた以上に強く言われ、蘭はごめんなさいと小さく呟く。

そして、こちらを見ていたユージィンが告げた。

「クロードもセルアと同じように考えたのではないのですか？」

「そりゃそうだろうな、あれは誰が見たってそう思える」

セルアは当然だと頷き、蘭はユージィンが一体何を言いたいのだろうかと思いつながら、流れに任せようと無言のまま二人を見比べる。

「ランが死んでしまうと思う事と、死なないという言葉に何か接点

があるのでは？」

「……例えば何だよ？」

セルアが問うとユージンは、困りましたと首を傾げるだけだ。

「それはわかりませんよ。しかし、何かがありそうではないですか？」

「結局はわからねえか」

首をすくめたセルアへユージンは静かに笑う。

「見てもいない私には、これくらいしか思いつけませんよ」

何かが前進したわけではなかったが、どこか悪くはないと思わせるユージンの意見に蘭とセルアは顔を見合わせ頷いた。そして、何かを得ようと更に考えを巡らせたが、結局思いつく事はなく話はこちらで途絶えた。

六章・孤がまみえるは虚実（二）

蘭の首につけられた痕も消え、腕の傷も塞がった。それ程の日数
が経ったというのに、クロードが現れる事は一度もない。

「どうしてゐるんだろ」

そう呟くと隣にいるセルアが腕を掴み、無理やりに引っ張られた。
窓際に立ち庭へ視線を泳がせていた蘭は、セルアの胸元へ寄りかか
ってしまい不満そうに顔を上げる。

「何？」

体を起こし反転させ窓枠へ寄りかかれば、黙って見ていたセルア
は不機嫌そうにこぼす。

「クロードの事考えてんだろ？」

向かい合い見下ろしてくる姿はとても不服そうであり、蘭は溜息
をついた。

「気にするでしょ？ あれだけ来ていたクロードが全然来ないんだ
よ」

「普通に考えたら来ねえだろうが」

「それはそうなんだけど、ね」

セルアの言う通りだとも蘭は思っている。覚えてはいないがこち
らの首を絞めて殺そうとしたのは紛れもない事実なのだ。それを知
った上でこの場所へ顔を出すとは思えなかった。

「ユージインはアンヘリカに行くのを反対してるし、行けないなら
来ないかなって思ってもいいじゃない」

蘭はクロードの事が気になり、アンヘリカへ向かいたいと幾度か
口にしていた。しかし、ユージインが受け入れる気配は一切ない。
当分は許可できませんと笑みと共に返して来るのだ。もちろん瞳
は全く笑っていない。

「俺が一緒でも納得しねえんだから、仕方ないだろう？ こっちと
してもここまで信用されないとは思ってなかった」

蘭がアンヘリカへ向かいたいと言い始めた時、セルアも完全に反対する姿勢を見せていた。危険な目に会った場所へ自ら赴くという発言に、本気で怒り止めようとしたのだ。しかし、クロードの様子のおかしさを知っているのは確かであり、蘭が必死に説得した結果、一瞬たりとも側を離れないと言えるのなら向かうと口にした。

クロードとヘンリクを止める為に魔力を使う姿は、アンヘリカの者達も目になっている。セルアが術師だという事実はすでに伝わってしまったているのだ。今更隠す必要もなく最悪の場合はクロードを排除するという恐ろしい言葉を付随させながら、ユージインの説得へと加わった。

セルアは嫌になると言うのと、だるそうに近くにあった椅子へ腰を下ろす。蘭も座ったらどうかと勧められたがやんわりと断った。

「このまま何もしないでいたら、どうにもならないと思うのに」

蘭自身、今の感情がクロードに対するものなのか、それとも何かのきっかけを求める為のものなのかはわからない。気にかかっているのはクロードだけではなく、こちらを斬りつけてきたヘンリクも同じ事なのだ。何故、ヘンリクはああもおかしな行動を取ったのかを理解する事はできそうもない。

「ユージインもわかってるはずだ。俺もどうにかしてえとは思っているが、うまい案は浮かばねえ」

背もたれに背中を預け天井を見上げたセルアは両手で前髪を掻き上げ、そのまま何かを考えているのか動きを止めた。

そうかと思うと今度は急に腕を下ろし呟く。

「あいつも一緒に連れてきやいいって事なのか？」

これを耳にした蘭は側へ近づいて行き、セルアの顔を覗き込む。

「ユージインも一緒ならいいって言うと思うの？」

間近にある口元が笑ったかと思えば、セルアは急に蘭の頬へ自身の唇を寄せる。不意の感触に蘭は驚き数歩後退しながら頬を押さえた。

「何、急に！」

仕方がないと思える理由があるのなら構わないが、どうしても不意打ちは慣れない。今は違うだろうと蘭はとにかくまくし立てたが、目の前の瞳はただ真っ直ぐにこちらを見つめる。

「そろそろ口にもさせねえのか？」

「ちょ……っと、何でそんな事言い出すのよ」

「その気になったら言えってのを忘れたのかと思ってよ」

会話の流れを断ち切ったセルアは不敵に笑うばかりで、何故こんな事をしたのかを告げる気もないらしい。蘭は急にどうしたものかと思いつながら、流れを戻そうと口を開く。

「べ、別に忘れたとかじゃなくて、その気がないの！　もう、今でもじゅうぶんに魔力は移せてるんでしょ？　今はどうやってアンヘリカへ行くかでしょ？」

「最近はランが前よりも近づいてくると思ってな。まあ暴発はしてねえし、じゅうぶんなだろう。ユージィンを連れて行く件に関しては、それならあるかもしれないくらいだな。零ではない」

久々に距離をとる動きをした為か、こちらを見て楽しそうに笑うセルアは己の行動については触れず蘭の質問にだけ答えた。

そのまま話を続けたいが、セルアに文句も言ってやりたい蘭がむくれているとセルアは悪い悪いと簡単に告げる。

「一緒にアンヘリカへ行って理由を確かめるのならどうにかなりそうなのかな。自分の目の届く範囲なら、許す可能性はあるだろう」

更に話を進められた蘭は結局不満を口に出す事はできず、直前の台詞にだけ答えた。

「納得する？」

「納得させるしかねえってのが正解だろうな。すつきりさせねえと俺も嫌なんだよ。クロードがいなければ俺を選び易くなるだろう？」

真面目に話しているかと思うと、そんなふざけた事を口にするセルアに蘭は肩を落とす。

「そんな理由なの？」

「ランが思っている以上に重要なんだよ、俺にとってはな」

クロードがないからセルアを選ぶわけでもないのじゃないかながらも、蘭は呆れた声を出す。

「そんな事言ってる、かえって嫌になるかもしれないよ」

少し意地悪をしてやろうと思ったのだが、セルアは全く動じないらしく何故か口端を持ち上げた。

「そうでもないだろうが？」

自信ありげに視線をぶつけてくるセルアに、蘭は思わず押し黙ってしまう。だがすぐに、何をどうしたならそこまでの自信を得られるのかを理解できないと笑ってしまう。

「馬鹿みたい」

「そりゃどうも」

セルアは椅子から立ち上がり、何かを言うでもなく扉の外へ向かって行く。

城での仕事があるのだろうか。こうしていなくなったかと思うと、数時間もすれば帰って来るのはわかっている。セルアを見送った蘭はまだ温もりの残る椅子へ腰を下ろし、背もたれに寄りかかると溜息をついた。

「んー、よくわかんない」

クロードの事を知る為には何をすれば良いのか。あの自信有りげなセルアの様子は意味があるのか。どうして自分はここにいて契約文字を読めるのか。魂の欠片はどんなものであり、おそらくではあるが何故姫は蘭をこの世界へ呼んだのか。分かたれたものとは何を意味しているのか。様々な疑問がぐるぐると浮かんでは来るが、どれ一つとして明確な答えは出ない。

たくさんの出来事で情報が入って来ているようには思える。しかし、それらは解決する事なく積み重なって行くばかりだった。蘭が行動する度に新たな何かが起こるとユージンに言われたと思いがら、全ては繋がっているのだろうか？ それとも一つひとつ全く違うものなのだろうかと思いを馳せる。

「わたしがアンヘリカに行きたいと思っているんだから、そこでも何かが起こるとか？」

何となく呟いてみた蘭は、まさかそうも簡単に事が運びはしないだろうと笑ってしまう。

だがとにかくユージンを説得し、アンヘリカへ向かいたいと考えているのは確かなのだ。

その為には自分も何かをするべきだと、蘭は必死に頭を働かせ始めた。

「お断りします」

話を聞くなり即答したユージンに、蘭は食い下がる。

「ちゃんと理由を知って納得しようよ。絶対何かあると思うの」

ユージンが仕事を終え屋敷へ来るのを待っていた為、今は食堂にいた。三人でテーブルを囲みまずはセルアがユージンを説得しようとしていたのだが上手く行かず、今度は蘭がどうにか口説き落とそうと頑張っている。

ティーカップを手にしたユージンは茶を一口飲んだ後、困りましたねと笑った。

「そんなにもアンヘリカへ行きたいのですか？」

蘭が大きく頷くと、ユージンはわざとらしく告げる。

「私はクロードもマルタもアンヘリカも疑っています。正直に言えば、行きたくはありません」

先程から行きたいのかと聞かれ、そうだと言うと嫌だの繰り返しなのだ。ユージンはこちらが諦めるまで繰り返しつもらいなのだ。うかと、蘭の意気込みも徐々に弱り気味である。

「このままここにいても何も進まねえだろうが、ユージンだってそれはわかってんだろ？」

蘭でも無理だと判断したセルアが口を挟み、それをユージンは冷たく一瞥する。

「ランが怪我をした流れまでもが、必要な事だと思うのですか？」
向けられた意見にたじろぎながらも、セルアは必死に言葉を紡ごうとしているらしい。

「それは俺達にはわからないだろう。先視みがあればどうにかできるのかもしれないが、今はあいつはいない。可能性にかけるしかないのが現実だ」

「難しいですね。クロードを知り、何かが変わるとでも？」

「ランが行動する度に新しい情報を得ていると言ったのはユージンだ。今ランはアンヘリカへ行きたがっている、それは何かに向かつて行ってるんじゃないのか？」

セルアも蘭と同じところに行き着いていたらしい、その言葉にはユージンも小さくだが頷いた。

「私もそこは考えていますよ？　しかし、もしランが更に大きな怪我を負い、命まで失う事になったらどうするつもりですか」

ユージンがアンヘリカ行きを嫌がる理由もじゅうぶんに伝わってくる。しかし、行動を起こさなければ現状は変わらないとも思えるのだ。

何か言わなければと蘭が口を開こうとすると、先にセルアがユージンを見据え告げた。

「……今度は側を離れねえよ」

真剣な瞳にユージンも笑みを潜め、セルアを見返す。

「絶対に、ですか？」

「絶対に、だ」

お互い何も言わずにいる二人の間に長い時間が流れた。蘭はどちらが先に口を開くのだろうかと思ひながら黙って見守っていると、ユージンがわざとらしい溜息をこぼす。

「私の負け、ですかね」

そう言いながら蘭へと視線を寄こす。

「ランも一人で行動をしないと約束できますか？」

その問いに蘭は、二度と迂闊な行動は取らないとユージンにわ

かってもらう為にも真摯に向き合わなければと頷く。

「何かあっても勝手な事はしないから」

「……仕方ありませんね」

ユージインはそう言うのと冷めかかっている茶をまた一口にして、困ったように首を傾げた後二人を見る。

「ならば、すぐにとはいきませんが三人でアンヘリカへ向かいましょうか」

「ユージイン、ありがとう！」

ようやくアンヘリカへ向かう事を許された蘭は満面の笑みを浮かべ、ユージインも穏やかな笑みを向けてくる。

「本当にこれで良いのか心配ですが、仕方ありません。ランを信じますよ」

ユージインがアンヘリカへ行く事を許してくれた。しかし、すぐに向かうはずもなく、蘭はいまだにウィルナの屋敷で過ごしている。あれから十日以上経つというのに、日取りすら決まっていないのだ。すっかりお決まりになっているソファにセルアと共に座り、一向に話が決まらない事に対する不満を口にしていたところだった。

「とにかく行くとは言ってくれたから、待つしかないのはわかるんだけどね」

ユージインを含めてというのは思っていた以上に難しい事らしい。思い返してみれば蘭がさらわれた時以外にアンヘリカへ行く姿は見えない。

「俺と違ってあいつは中心にいるからな。あの時は無理にでもアンヘリカへ向かったが、今回はそうもいかねえ」

セルアが蘭の髪に触れながら喋る。二人はいつものように並んで座り魔力を移しながら会話を進めていた。

「最近仕事量を増やしているところを見ると、どこかで行くつもりがあるらしいのはわかるな」

「なら、へたに急かすよりも待った方がいいよね？」

セルアの仕草を気にする事もなく蘭はただ見上げる。

「さすがにこれ以上何か言っても仕方ねえだろうな。決めた事を簡単に破るような奴でもねえし、何もしないのが最善だろう」

そうなるここは黙って待ち、ユージンの予定に合わせるしかないのだろう。時間を作ろうと頑張ってくれているのはわかっているのだ。そしてそれは蘭が手伝える内容でもない。

「何かできる事があればいいのにな」

「無理に考える必要もねえだろうが」

呟くように言った蘭の頭の上へセルアの大きな手が乗せられる。

ここ最近同じ事ばかりを口に行っている為か撫でる動きも乱雑だ。

髪型が乱れてしまいそうなそれを蘭は両手で押さえると、セルアを軽く睨む。

「せっかく魔力があるんだし、私にも術が使えないの？ って言っても駄目って言うしさ」

「駄目なもんは駄目だ」

今度は乗せられていた手に力が込められ蘭の体は前に傾いてしまう。押しのけるようにしながら蘭はセルアの手を振り払った。

「もう、何で駄目なのよ！」

自分の体に魔力が溜まると知った時から使う事はできないのかと思ひ、蘭は幾度か口に行っている。しかし、その度にセルアもユージンも反対するばかりなのだ。

暴発する心配もないものを無理に使う必要はないと言われても、ひたすら溜め続けるばかりをもったいないと感じるのは当然ではないだろうか。自身で確認する事は叶わないが、蘭の体には日々魔力が込められている。セルアが抱えきれない程の量とあなたが魂の欠片と記された板に入っていた魔力が、自身の中にはあるはずなのだ。何にも使わずただ増やすばかりでどうするのかと思ってしまう。

「この魔力で何かをするんじゃないの？ だからわたしはセルアの魔力を溜めておけるんだと思うよ？」

「その何かがわかんねえんだ、無理に使う必要もないだろう?」

「使い方を知る事が何かのきっかけになるかもしれないじゃない?」
セルアがいとも簡単に使ってみせる術を目にしている蘭は、ほんの少しだが使えるものなら使ってみたいとも思っていた。必然性を主張しているが、興味こそが大いにあるのだ。

それを知ってか知らずか払いのけられた手で己の髪をかき上げたセルアは、困ったように眉根を寄せ蘭へ視線を落とす。

「お前な、それだけの魔力を使おうとして失敗したらどうなると思う? 国もろ共吹っ飛ばすぞ」

「それは……前にも聞いたけど」

わずかな魔力ならば失敗しても少々の傷で済む、だが蘭が持っている魔力はとてつもないのだ。国一番と言われているセルアの魔力を軽々と吸い取り無限にも思える程に蓄積していく。

「成功したってとんでもない事になるかもしれないねえ。ランは無意識に俺の魔力を吸い取った、それだけの事をやってのけたんだ。もし使う事が必要なら、その時になりやどうかなるかもしれないだろうが」

そしてセルアは毎回のように時期がくればどうにかなると言うのだ。その意見にはユージンも大いに頷き、貴女は自然と必要な事をこなすのかもしれないよ? と言ってこちらを納得させようとしてくる。

この世界へ呼ばれた意味があるのなら、この魔力にも役割があると考えるべきだろう。使い方を知らずにしていたい何ができるというのか。だが、これまでの不可思議な出来事を思い返せば否定もできない。確かに蘭は無意識に魔力を吸い取ってしまい、もう一度吸う事は叶わずにいるが代わりにセルアが魔力を入れる事ができている。

それは、必要な時には何かをしているとも取れた。

「やっぱり、このままが一番って事?」

蘭が聞けばセルアはそうだと答え、こちらが納得したと思ったの

か今度は優しく髪を撫でる。

「ランはそのままでもいい。俺達とアンヘリカに行くだけでじゅうぶんかもしれねえだろう？」

ただいるだけ、その言葉は蘭をどこか不安にさせた。本当にそれだけで事態は進むのだろうかと疑問ばかりが浮かび上がる。アンヘリカには向かうが、それはクロードの様子が気になっての事だ。ユージンには自分が行きたいと思う事に意味があると言ったものの、蘭がここにいる意味に繋がる保障は一切なかった。

「せめて、どうして呼んだのかわかるようにしてくれば良かったのに」

おそらくこの世界へ呼んだのであろう姫へ小言を漏らした蘭に、セルアがわずかに笑う。

「それは俺も思わなくもねえな。何を考えての事だったんだか」

結局、姫の目的は謎のままであり、今はとにかくユージンがアンヘリカへ行く事のできる時期を待つほかはなかった。

六章・孤がまみえるは虚実（三）

アンヘリカの乗り合い場に降り立った蘭とユージイン、セルアの三人は突き刺さるような日差しに目を細めた。だが、それもすぐにセルアの施す術によって抑えられ、気に留める必要もなくなる。

「結局、結構な時間が経っちゃったな」

クロードのいる宿を目指し歩みを進めながらセルアが言えば、ユージインは仕方がないでしょうと口を開く。

「丸三日空けるのは大変なのですよ？　また以前のように突然では周りも不信がるでしょうし」

ユージインが城から離れる事は本当に難しいものらしく、蘭がアンヘリカへ来るのは約三月ぶりになる。仕事を前倒しにしつつ僅かな時間を積み重ねて手に入れた三日間は、必ず何かを得なければならぬと思うされる程に貴重なものだった。

そしてそれだけの期間が空いたにも関わらず、クロードは一度も姿を見せてはいない。蘭はほとんどの時間をセルアと屋敷で過ごし、時折街へ足を向ける生活を続けていた。

更には姫として数度執務室へ赴き、ユージイン、セルアと共にまるで業務をこなしているかのように過ごす時もある。ウィルナには姫が健在であり変わらず国政を行なっていると思わせる為にも必要な事らしく、定期的にしなければならぬと言い含められ足を運び続けていたのだ。

「こっちも変わりはないさそうだな」

のんびりと先を目指しながら、セルアの瞳は様々な方向へ向けられる。アンヘリカは蘭から見ても以前と何ら変わらないように思えた。

先程から幾人も久しぶりだと声をかけては来たが、ソニアの事には触れるもののクロードの件は一切出てこない。それは皆が知らないのか、それともマルタによって抑えられているのかは判断がで

なかった。

「すっかり顔見知りが増えたみたいですね」

次々に声をかけられる蘭へユージンが見せる表情は驚きであり、隣にいるセルアは笑う。

「ここでのランは慕われてるぞ。アンヘリカの意志が読めた上に子供一人を助けたって具合にな」

「なるほど。どちらも真実ですし、誰にでもできる事ではありませんからね。契約文字の効果もあるのでしょうが、まるでウィルナにおける姫の状況に似ているようにも感じられますね」

「わたしの場合はそんなに凄いものじゃないよ？」

姫のようにウィルナとアンヘリカ間に乗り合いを走らせたのでもなく、先視みによる処刑を止めたわけでもない。ただ成り行きで期待されているような、おかしい状況と言わべきなのだ。

「まあ、規模はどうあれ似てるとも言えんじゃないか？」

「セルアまで？」

蘭の手を掴みながら歩くセルアを見上げれば、仕方ねえだろうなかいてんだからと告げられた。

「私は悪い事ではないと思いますよ？ 色々と便利そうですしね」
ウィルナにとって利点があるという意味なのだろう。ユージンは蘭とセルアがアンヘリカの民と会話をする姿に、感心したように頷いている。

「あんまり期待されるのって嫌なんだけどな」

姫に似ているからと代わりをし、アンヘリカの意味が読めるからと想いを込めた視線を向けられてしまう。決して蘭が何かをしているとは言えず、どうにも落ち着かないのは相変わらずだった。

そうやって会話をしながら歩いて行くと、目的地の宿が目に入ってくる。セルアは辿り着くと扉をためらいなく開き、中へ声をかけた。

「クロードはいるか？」

「急にそれはないでしょう？」

そう言ったユージンと共に中を覗くと、目の前の食堂はまだ昼には早い時間の為か数人の男女がいるばかりで閑散としていた。

突然扉が開かれた事に全員がこちらを振り返る。その中には見知った顔もあり、蘭の姿を認めるとすぐに奥の厨房へいるらしいマルタを呼ぶ。

大きく返事をしたマルタが足音を立てて現れ、入り口でセルアとユージンに挟まれる形で立っている蘭へ駆け寄る。そして、今までにない程の勢いで抱き締められた。

「よく来てくれたね！ もう会えないかと思ってたよ」

セルアもユージンもマルタは害がないと考えているのか、それとも疑った上でそうさせているのかはわからない。だが、二人共が何も言わずさせるがままにしている。

苦しい程の力が込められてはいたが、マルタはすぐに蘭を解放し視線が首へと向けられた。

「傷は大丈夫かい？」

いつもなら嬉しそうに笑みを見せるマルタの表情が曇っていたのはその為かと蘭は納得し、しっかりと頷く。

「すっかり大丈夫。腕には痕があるけど、問題ないよ」

本当に問題なく腕は動いた。しかし、傷痕が完全に消える事はない。引きつった痕はおそらくこのまま残るだろうと思っているが、こればかりはどうしようもなかった。

マルタは蘭につられてか表情を崩し、三人を中へ迎え入れた。セルアと二人ではない時点で何か用件があると思ったのか、室内にいる全員を外へと追い出し中央のテーブルを囲むように勧められる。

「ユージンがいるって事は話があるんだろう？ まあ、あたしも想像はついてるつもりだよ」

そう言いながら厨房へ入って行くマルタは、わずかな時間を置くと思ひ物に手に戻って来た。どうやら蘭の嗜好に合わせ全員が同じ物になっているらしく、以前好きだと言った木の実のジュースがなみなみと注がれている。

ここへ現れた時と同じく三人は並んで腰かけていた。蘭の左にユージン、逆にはセルアがいる。マルタは蘭の真向かいに座り、真剣な眼差しでこちらを見つめていた。

「クロードのした事は本当に済まなかったね。そして、ウィルナにも」

そうして両隣の二人にも視線を向けたマルタへ、ユージンは無表情のまま言葉を返す。

「その本人にお会いしたいのですが？」

棘のある言い方に聞こえたが、マルタはただ静かに頷くだけだ。

「わかってるよ。クロードはもうじき帰って来るだろうから、待っとくれ」

この言葉に三人は顔を見合わせる。てっきりアンヘリカにいればかり思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「クロードはウィルナへ行っただよ」

申しわけなさそうに告げるマルタへ、蘭は驚きつつも聞く。

「ウィルナに来てたの？」

「あの時からだと、今回は二度目だね。最近ようやくウィルナへ行けるようになったんだよ」

「ランに怪我を負わせた人物をウィルナへ向かわせたの？」

ユージンの冷たい瞳を受けつつも、マルタはしっかりと言葉を紡ぐ。

「クロードにはウィルナへ行ってもらわなきゃならない仕事もあるからね、何もせずにここへ置いておくわけにはいかない。今までは一人で行かせていたけれど、前回と今回は同行者をつけたよ。クロード自身も一人ではウィルナへ行きたがらなくてね、おそらくクロードの方が相手から離れようとはしないはずさ。ランのいる屋敷だつてセルアの許しが必要に入れないって話じゃないか、じゅうぶんに守られていると判断させてもらったよ」

「私達の所へ顔を出さない条件でウィルナへ行かせましたか……少々気にはなりますが、それはそれで構わないでしょう。ただ、クロ

ードのした事を私は黙って見過ごすつもりはありませんよ」

蘭がクロードへ会う事は好ましくないとはいつつも、ウィルナへ向かっているのは許せるらしい。

あれだけアンヘリカへ行く気はないと言っておきながらのこの口ぶり、蘭は実際ユージインがどのように考えていたのかがわからないかと思うながらも、今は会話を见守るだけだ。隣にいるセルアも椅子の背もたれに寄りかかっているだけで口を挟む気はないらしい。

「あたしもさすがに放っておくわけにはいかないと思っていたよ。けれど、原因がわからないんだからどうしてやったらいいのか困るばかりさ。閉じ込めておけば解決するっていうもんでもないだろうしね」

ユージインの言葉がある程度予測していたのか、マルタは頷きながら本当に困ったと溜息を付いた。

「セルアとランにも聞きました覚ええていないというのは本当なのでしょうか？ にわかには信じられないのですが」

マルタを見定めるかのように見つめながらユージインが言えば、更に深い溜息が零れる。

「ユージインの言う通りだよ。自分がした事を覚えてないってのはあたしの中にはない。ちょっとしたうっかりとかは除いてだよ？ただ、クロードを六つの時から见ている身としては本当だとは思えない。いや、思えなくなった、が正解だね」

この宿はアンヘリカで親を失った子供達を集め共同生活をしている。それはずっと続けられて来た事であり、マルタ自身もそうしてここで暮らすようになったらしい。一度は宿を出て外で生活もしたが、再び戻りまとめる役目に着いたらしい。

「ある程度の年になったらここを出て、一人で暮らすなり所帯を持つなりするのさ。そして、誰かがここに帰って代表を務める、それだけの事だよ。たまたま今はあたしなだけで、数年置きに代わるもんだ。ここで暮らした人間は大勢いるからね」

その慣例からすると、クロードはもう宿から出ているべき年齢ら

しい。思い返してみると十代後半から二十代らしき人達の出入りはあるが、常に宿に居るのはマルタと同じくらいの年齢と年下である子供達ばかりだった。

「あの忘れてしまう事さえなければ、とっくに出してやってる。どうしても気になっていまだにここに置いてしまっているんだよ」

アンヘリカは決して広い場所ではない為、町中の誰もが懇意ではないとしても顔見知りである。そして何かがあればあつという間に噂は広がってしまう。

蘭はあなたが魂の欠片と告げる板を読んだ時と、怪我をし見舞いにたくさんの方々が訪れた件を思い出し、そうなのだろうと素直に聞き入る。

しかしクロードが宿で暮らす前にそういった噂は聞かなかったらしい。マルタはクロードの両親ともそれなりに仲が良かった。他にも親しい人物は数多くいた。だが、誰一人としてそのような話を聞いた事がなかったという。

「その時あたしはここで暮らしてはいなかったが出入りはしていたし、何だかんだと子供達をたくさん見てきたよ。気難しい子や意思表示が苦手な子、すぐに手を出したりと色々いたもんさ。しかし、それも個性だ。皆それなりに大人になって巣立って行ったよ。クロードもそれに足りるだけの能力は持っているはずんだけどね」

それでも自信を持って出してやれるかと言えば、躊躇してしまうらしい。

「あれだけはどう考えても危なっかしいからね。自分が執着するもの程、傷をつけてしまう節がある」

「執着するもの程ですか？」

口に出したのはユージンだったが、蘭も同じように思いセルアは隣で眉根を寄せている。

「可愛がっていたり、気に入っているものを壊したり傷つけたり、そう頻繁ではないけれど……少ないとも言えないかねえ」

マルタはこれまでの事を思い返しているのか更に表情を重くさせ

ると、ユージンが問う。

「人以外でも構いません。何かを殺してしまった事はあるのでしょうか？」

するとマルタは苦虫を噛み潰したように顔を歪ませる。

「可愛がってた動物を殴り殺した事があるらしいよ」

「可愛がってるならどうして殺す必要があるんだよ。おかしくねえか？」

セルアの意見はもっともだった。どうして、可愛がっている生き物を殺してしまう必要があるのだろうかと蘭は頷く。

「そうなんだけどね。どうしてそんな事をしたのかはわからないよ？ あたしは聞いただけでその場を見ちゃいない、そしてクロードは覚えていないんだからね。ただ、暴力を奮うクロードを見たって奴はいるんだよ。否定はできないね」

「覚えていない……ですか」

前例があつたとしても、本人が覚えていないのでは得るものが少な過ぎた。どのような過程でクロードはそうした行動を取り、命すらも奪ったのかわからない。

「その後のクロードは相当泣き喚いたらしいけれど、それは自分の行ないを覚えていないでただ死んでしまった事を悲しんでいたって言うからよくわからない。本当に自分が思ってもいない事をしてるみたいなのところが困ってるんだよ。ランに対しても首を絞めたいだなんて思っていないかったんだろ？ さすがに人を殺しそうになつた事はなかったし、クロード自身も相当参ってるよ」

説明をしているマルタ自身もどこか参っているのではないかと思わせる程に肩を落としており、やはりこれは真実なのだろうか？ 蘭は思ってしまう。

「結局はわからない、という事です。さて、どうしたものでしょう」

ユージンが眉を寄せると、マルタは本当に困ったと再び嘆く。
「間もなく本人が帰って来るはずだから、色々聞いてみるといい

よ。クロードも断りはしないはずだ。ランを目の前に逃げ出すような真似はさせないよ」

マルタの話を聞いてもこれといった情報を得る事はできず、とにかく今はクロードを待つしかない。四人は当たり障りのない会話をしている状況になっていた。誰もがクロードに対する疑問を色々と口にはしたが、どれ一つとしてどこかへ辿り着くという事もなくわからないの繰り返しばかりだった為、自然と会話はそれってしまったのだ。

そうしている間にもウィルナからの乗り合いはアンヘリカへ到着していたらしく、扉は当然のように開かれた。

待ち望んだ人物が現れたのかと全員が入り口へ目を向ければ、取っ手を掴んだまま立ち尽くすクロードがいる。

「ラン……」

声が聞こえはしなかったが、そう呟いたかのように口元が動いた。これまでなら満面の笑みを浮かべ蘭の元へ駆け寄って来たはずのクロードは、そのまま微動だにしない。隣には同行していたと思われる男が立っており、中の様子を確認すると共にマルタへ視線を向ける。

「お疲れさま、見ての通り今は立て込んでるんだ。悪いけどしばらくは他へ行ってくれないかい？」

マルタが告げると、男はわかったとだけ答え宿の外へと去って行く。その間にもクロードは何も言わずにこちらを見つめていたが、今はぼんやりとしているのではなく困った表情を浮かべ、入るべきか否かを迷っているようだった。

「クロード、あんたはここへ来な」

自身の隣を指差すマルタにクロードは更に困り顔になりながらも、開けられたままの扉を閉める。しかし、こちらへ足を向けるまでには至らないらしい。

クロードは首を絞めた事に対する感情で足を進められないのだらうと蘭が立ち上がれば、隣に座るセルアに腕を掴まれた。

「何をするつもりだ？」

「クロードをここまで連れて来るだけだよ、そのくらいいいでしょう？」

「そのくらいってな」

簡単に告げた蘭に対し、セルアの表情は厳しい。

クロードが近づいてこないのならば、こちらから向かえば良いだけの話だと蘭は告げる。

「今の状態なら危なくないでしょう？ セルアもユージインもマルタだっているんだから」

するとユージインが溜息をつく。

「ランの感覚には少々戸惑いますね。……仕方がありません、彼をここまで連れて来て貰いましょう」

止められるとばかり思っていた蘭は驚いてユージインを見返し、声を上げるのはセルアだ。

「ユージイン！」

「何かを見極められるかもしれませんが、危ない時は貴方がどうにかするのでしょうか？」

冷たい瞳を向けられたセルアが一瞬押し黙り、その後に蘭の腕を開放する。

「……何かあったらクロードだけ吹っ飛ばしてやるよ」

物騒な台詞を受けながらも蘭はクロードの元へ行く事を許され、本当にそうした事態にはならないで欲しいと祈りつつも歩みを進めた。

たくさん歩数は必要もない位置にクロードはいる。近づいて来る蘭を見つめながらも表情を曇らせている姿は、落ち込んでいるのだらうと思わされた。以前の表情が読めなかった時とは違う、きっと普段通りのクロードなのだと言は目の前で足を止め見上げる。

「久しぶりだね」

笑いかけた蘭へクロードの青い瞳は曖昧な笑みを浮かべて寄こす。違和感を覚えさせない雰囲気、蘭はクロードの手を掴み引こうとしたが拒まれる。

「オレには触らない方がいいよ」

悲しげに瞳を伏せながら腕を後ろへまわした姿に、どうしたものかと蘭は思った。しかし、今ここでクロードの意見を聞いているばかりでも仕方がないと、無理やりに二の腕を掴みしっかりと力を込める。

「大丈夫だから、向こうまで一緒に行こう」

それでもクロードの足は先へ進もうとはせず、困ったように触れられている蘭の手に視線を落とした。

「また……何か……したら？」

自分自身すらも信用できないと言いたげな姿に、蘭は問いかける。「何かするつもりなの？」

するとクロードは慌てながらも否定を寄こす。

「そんなつもりはないよ！ 絶対ない」

これを聞いた蘭はそうだよねと言いながら頷き、もう一度クロードの腕を引く。

「なら問題ないじゃない。とにかく向こうに行って話をしよう。ここなら大丈夫でしょ？」

何が起きても止められる人物がいるのだと、蘭はこの場の安全性を訴えた。クロードはこちらに危害を加える気などないと告げている。しかし、問題なのは本人の意思とは関係なく、勝手に行動をしている点なのだ。不安を減らす方法でしか納得できないのかもしれない。

昔よりクロードを知るマルタ、術という武器を持っているセルア。誰よりも疑うような素振りを見せているユージンと思惑は個々で違っているはずだ。それでも二人きりでいたあの瞬間とは大きく違っている。

ぐいぐいと腕を引く蘭に観念したのかクロードはゆっくりとだが

歩き出し、そのまま付き従うようにマルタの側へ向かう。

「座りな。クロードも辛いのはわかるけれど、おそらくこれはあなたにとって必要な事だよ」

そう言われ頷いたクロードは席へ付く、表情はやはり暗く俯きがちのままだ。

今クロードを席に着かせ話をする事に意味があるのかはわからない。だが、このままにしておいて解決するとも思えないのだ。とにかく少しでも何かを得る事が必要だと、誰もが自身に言い聞かせているような雰囲気は蘭の表情もわずかにだが曇る。

「マルタの話を聞く限り、貴方は本当に覚えていないのかもしれない。ですが、何も聞かないわけにもいきません。思い出せる限り話していただきましょう」

口火を切るのはユージンであり、容赦しない瞳がクロードを見つめていた。

六章・孤がまみえるは虚実（四）

ユージインは厳しくクロードを問い詰めるのではないかと思っていたのだが、どうやらそこまではしないらしいと蘭は胸を撫で下ろしていた。

アンヘリカへ来る機会の多かった蘭とセルアでは、温情なしに接する事などできないだろう。ユージインはそうした発言までしていたのだが、端的に聞いていく姿からはそれほど冷酷さは感じられなかった。

沈んだ表情を変える事なく頷くクロードは、どこへ視線を向けるでもなく簡潔に答える。

「蘭がヘンリク王子に斬られそうだったのは覚えてる。でも……その後はもうあの後だったから、よくわからない。気付いたらオレは、苦しそうにしているランの前にいた」

どうやらクロードは蘭が右腕を斬られた瞬間すらも覚えていないらしい。短剣を手に割って入った動きすらも記憶の中には存在していない。

「その間にも結構な時間があつたでしょう？ 本当に何も覚えていないのですか？」

「……何となくだけど、ランがいなくなるのは嫌だなんて思ってた気はする。でも、それはその間ってよりはその前な気もするし、なんかぼんやりしてたっていうか、動いてはいたけど何も考えてなかったのかもしれない」

そう答えたクロードの言葉に蘭は、ユージインがウィルナで口にした内容を思い出す。

蘭が死んでしまう事と、死なないという言葉に何か接点があるのでは？ 確かにユージインはそう言った。そして、それに通ずる言葉を今クロードが口にしたのだ。いなくなるのは嫌だという表現は、死に繋がっているように感じられる。

「ランが死んでしまうのでは？　そう考えたのではありませんか？」
「そう、かもしれない」

曖昧に答えたクロードへ、いつもならばからかったり強い言葉ばかりを向けるセルアが静かに声をかけた。

「俺は、ランが死ぬかもしれないねえと本気で思った。お前だってそうじゃねえのか？」

声音はおとなしかったが、瞳はいつも通りに鋭いセルアに見つめられたクロードは一気に表情を強張らせる。

「……そんな、気がする。ランが死ぬ、いなくなるのは嫌だって思った」

申しわけなさそうに俯いていたクロードの瞳が蘭へ向けられたが、今のそれはどこか虚ろだ。セルアとユージインが顔を見合わせ、小さくだが頷いた。

「ですがランは死ななかったでしょう？　それでも貴方はどう思いましたか」

そして、畳みかけるようにユージインが告げると、クロードの視線は迷いがあるのが酷く落ち着きを失ってしまう。

「ランが死ぬところは見たくない……けれど、それは――それは、駄目なんだ。駄目なんだけれど、駄目なんだけれど」

そう繰り返すと、今度はぴたりと動かなくなる。呟いていたはずの口元も、遠くを見つめるような瞳も瞬きすらせずに、まるで時が止まったかのように固まってしまったのだ。

「クロード、大丈夫？」

不安を覚えた蘭が声をかけてもクロードの反応はない。ぼんやりとした表情で、何を考えているのかも掴めはしない。

「これか、原因は」

セルアが溜息混じりに言えばユージインも頷く。

「そうですね。さて、どうしましょうか？　原因は見えたようで、根本はわからないようにも思えますが？」

首を絞められた瞬間を思い出させるクロードの姿に戸惑う蘭は、

何かに納得したらしい二人を見比べる。そして、正面にいるマルタが酷く眉を寄せているのに気付く。

「これで何かわかったってのかい？」

「全てがわかったわけではありませんが、クロードはランが死ぬかもしれない。そう思いあのような事をしでかしたのでしょうか。それは当たっているはずです。見たくないと言っている事から、過去に誰かの死を目の前で見ているのでしょうか？」

ユージインの発言に、セルアは髪をかき上げながら嫌そうに口を開く。

「人死にはアンヘリカの奴らはほとんどが見てるだろうよ」

「そうなりますか」

過去の状況を知っているセルアと知らないユージインの会話を聞きながら、マルタが言葉を漏らす。

「確かにアンヘリカにいる人間のほとんどは見たくもないものを見ているよ。あたしだって思い出したくもない」

そのマルタの表情は蘭が今まで見たどれよりも辛そうに感じられた。

「貴女にまで嫌な思いをさせてしまいたね。しかし、クロードの行動の原因は誰かの死だと考えたくなるのですが？」

ユージインも気にはなかったらしいが話が止まる事はない。必要があるのだと推し進められる。

マルタは構わないよ、この連中はそういった過去ばかりだからねと言うと、すぐにクロードへと話を戻す。

「親の死に目を見ているのは確かだけれど、あたしは状況を知らないよ？ 必要なら情報を得る事もできるかもしれない……ただ、あまり口にしたいとは思わない内容だね。そして必ずしもそれが原因とは限らない。他にもたくさん目にはしているはずだからね」

マルタやクロードが目にした光景がどんなものかを蘭には想像する事はできない。考えを巡らせたとしても思い浮かぶのは映画やドラマで目にした映像であり、現実として見るものとは違っているの

だろう。そう思いながら、意見を述べる。

「その話をする事で他の人も嫌な過去を思い出すんでしょう？　そこまでしなければならぬのかな」

クロードをどうにかしたいのは確かだが、今出ている案が正しいとも言い切れない。

「確かにあまり根掘り葉掘り聞くのは気が引けますね。……今はラの身に危険が迫らなければ大丈夫だと思えばいいでしょう。もしかすると時期があるのかもしれない」

ユージンの意見にセルアがはつきりと表情を歪めた。

「これもか？　……何でも時期が来りゃどうにかなるもんだと本当に思ってるのか？」

「わずかながらでも情報は得ていると考えるべきです。とにかくラを危ない目にあわせなければ、こうはならないのでしょうか？」

いまだにぼんやりと視線を泳がせているクロードをユージンが示し、セルアが不信感を露にした眼差しを向ける。

「危なっかしいのには変わりがねえ」

「確かに心配だね、一体何が原因だっていうんだか」

そうして大きな溜息をついたマルタがクロードの頭を一つ叩くと、たちまち瞳に光が戻る。

「痛い。何するんだよ」

そして何事もなかったようにマルタを見つめている姿は、本当に止まっていた時が動き出したようにすら見えた。

「このぼんやり癖をどうにかしたいんだけどねえ」

マルタの言葉を聞きながらクロード以外の全員が深く頷くと、当の本人は何の話なのかをわかっていない為に首を傾げながらぼやく。「いったい、何の話をしてるんだよ。突然叩くし」

結局クロード自身もわからないという状態で結論を出す事はできなかった。しかし、思い返す限りクロードは愛着のある者程傷付ける傾向があり、そのきっかけは死に繋がっているであろう事はわかった。しかし、それが何を意味しどうする事

でクロードが抜け出せるのかはわからない。

「とにかく、根性でどうにかなんねえのか？」

無責任なセルアの発言だったが、ユージンは首を捻る。

「気の持ちようで変わるのなら良いのですが……。まあ適当に誤魔化す癖をやめるのは勧めますがね？」

何か気に留まる内容だったらしく、クロードは少し不機嫌そうに口元を歪ませた。

「最近はどうでもないよ。前はわざとしてたとも言えるから」

全体の流れはわからないでいるが、どうやら誤魔化すという言葉に反応したらしい。そして、何気ないクロードの発言にマルタが声を荒げた。

「そのわざとにどれだけあたし達が困らされた事か！」

しまったと表情を変えたクロードが、気まずそうにマルタに視線を向けながら言う。

「オレだって自分がした事を忘れるのは怖い。覚えてる事もなかった事にして誤魔化せば少しは楽になれるかと思っていたけど、実際はそうじゃないって思ったから止めたんだし」

「……クロード」

呟くよう告げられたクロードの言葉に蘭が思わず名を呼べば、久しぶりの笑みが向けられる。

「ランに会ってから何かが変わった気がするんだ」

蘭は以前、マルタにクロードが変わるきっかけを与えたと礼を言われた事を思い出す。本当に屋敷へ忍び込もうとした一件はクロードに何かの影響を及ぼしたのだろうか？ それとも本人が言う通り蘭と出会った事に意味があり、何かを変えさせてしまったのか。

確かに出会った頃に比べるとクロードの様子は違うとも思えた。

しかし、蘭が知るクロードの姿などわずかなものとしか言えないはずだ。自身の行動すらも忘れてしまうと言うべきか、それとも無意識と呼ぶべきなのかもわからない癖のようなものを知ったのすら最近なのだ。

はつきりと変化を感じ取れているのかは、蘭には正直わからない。
「最近はお久しぶりだけど、変わったとは思わなかったけどねぇ」

長年見て来たマルタが言うのだから本当なのだろう。クロードは何かが変わった、もしくは何かを変えつつあるのかもしれない。

何も言わずに見つめたままの蘭を不思議に思ったのか、クロードが少し照れたように目を伏せる。

「なんか、また普通にランと話せる気がして来た」

そして、そこへ反応を見せるのはセルアだ。

「何調子に乗ってるんだ。お前なんてランの側に置いておけねぇよ」

「さっき根性でどうにかならないかって言っただけに！ 本当にどうにかしてみせる」

突然自信を取り戻したクロードの頭へ、容赦なくマルタの拳が飛ぶ。

「あんたのその性格も問題なんだよ」

「酷い！」

涙目になりながらも訴えるクロードの姿を見た蘭は思わず笑ってしまう。以前の姿に戻ったと表現できる様子には、どこか安心させられる。

解決とまではいかないも、クロードが普段に近い様子で会話ができる状態にはなった。それだけでは何も変わっていないのかもしれない。しかし、とにかくそういった癖のようなものがあると認識できただけでも良いと考える事で、ひとまず話はまとまった。

「とにかくクロードと二人きりになるのは駄目だって事だな」

二階の一室でセルアはベッドに陣取りながら手招きで蘭を呼ぶ為、側まで椅子を動かし腰かけながら同意する。

「仕方ないもんね」

「なんだよ、残念なのか？」

二人でいるいらないではなくクロードの様子が心配な為の発言だった。

たのだが、セルアは不機嫌になってしまう。

「そういう意味じゃなくて、あのままじゃクロードが大変じゃない。これからもずっと無意識で行動する事を気にしながら生活しなきゃいけないんだよ？」

これからと言うよりは、今までもなのだろうと蘭は思う。クロード自身がずっと思い悩んで来たからこそ、覚えている事すらも誤魔化していたに違いない。

「その理由が今ひとつわからねえから、どうしようもないんだろうが」

セルアは蘭の側にクロードがいない事を焦点としているようだが、本当に気にすべきはそこなのだろうかと思息すらも零したくなる。

「ランの側にクロードが来る事も問題ですが、私は彼の存在にすら本当に意味があるのかと思っていますよ？」

存在に意味があると思議な物言いをしたユージンへ蘭が聞く。

「どういう意味？」

ユージンは腰へぶらさげていた剣を外しテーブルの上へ置くと、側にある椅子へ腰を下ろしていた。以前は帯剣する事なく来ていたのだが、今回は身を守る物も必要ですと言いつち込んでいたのだ。

「ランがここに居る理由、その中に彼は含まれるのでしょうか？」

確かにクロードによってアンヘリカへ来る事ができ、情報も得ました。しかし、それ以上の役割はあるのか？ という事です」

「役割って……会う人全員に意味があるとユージンは思うの？」

「極端とは思いますが、そうではないかと疑っています」

少し曖昧な表現をしたユージンへ、セルアが眼差しを向ける。

「今までの出来事全てに意味があるのなら、ランが怪我をしたのも何もかもって事になりクロードの存在にもじゅうぶん意味があると捉えるしかねえだろうが」

「まあ、そうなるのですがね」

苦笑したユージンへ、セルアは適当な事言いやがってと不満気に呟く。

仮に全てに意味があるとしたならば、確かにクロードだけを外すとはならない。むしろ、クロードが関わった事によって事態は動き始めたとも取れるのだ。

その旨を伝えると、ユージインとセルアは共に頷く。

「そうなるのでしょうか。ならば今のクロードにも意味があると捉えるほかはありません。きっと何かに繋がるのでしょうか」

「確信できる要素は何もないのか？」

全員が信じ切れていない状況では、はっきりとした会話は進まない。

「これまでもそうやって来たでしょう？ 信じる事で道が開けると思うだけです」

ユージインはどこか芯のある口ぶりであり、蘭は本当に意味があつてクロードがああの行動を取ったのではないかと思ってしまう程だった。

「意味がある……わたしがいる事も、クロードがいる事も、全部」
蘭が呟くと、セルアが腕を伸ばし静かに髪に触れてくる。

「なら、その中でも俺に意味があるだろうな。一番ランの側にいられる」

そうして笑みを向けて来るセルアに、蘭は思わず笑いながら言葉を返した。

「そういう事じゃないでしょう？」

「そういう事にしとけよ」

軽くふざけたセルアの発言に、ユージインも笑う。

「本当にセルアにも私にも意味があり、すべき事が存在するのかもしれないですね」

答えなど何も見えないままに、すべき事があると言う姿は不思議なものだった。しかし全てはどこかへ繋がっていくのではないかと思えるような感覚が、蘭の中には確かに存在していた。

六章・孤がまみえるは虚実（終）

曖昧な予想ばかりが増え会話もなくなった頃、部屋の扉が叩かれた。何事かと思えばやって来たのはマルタであり、どうやらヘンリクもアンヘリカへ入ったらしいという情報が与えられた。

対応したのはユージンであり、入り口で会話を交わすとマルタはすぐに階下へ戻って行く。蘭とセルアはその後に聞かされた形になった。

「ヘンリク王子が？」

思いもしない名前を聞き返した蘭へ、ユージンはただ頷く。

いったい何の巡り合わせだというのか、会いたい時にはなかなか現れなかったその人が今アンヘリカにいる。蘭達が訪れない間にも来ていたのかと思い聞いたらしかったが、彼らもまた今回があの時以来だというのだ。

「どちらかと言えば、今は会いたくねえ相手だな」

以前の状況を思い出したのか顔をしかめるセルアに対し、ユージンは何故か正反対の言葉を口にする。

「私は是非お会いしてみたいですね」

ああもアンヘリカへ来る事を反対していたユージンの発言に、蘭、セルアが共に驚きの目を向けた。

「お前何言ってるんだ？」

セルアの哑然とする表情と声に蘭も頷くと、ユージンはわざとらしく首を傾げこちらを見返す。

「どうしました？　ランに傷を付けた人物に会ってみたいと言っただけですよ？」

「いや、ユージンがそんな事を言うとは思わなくてな」

何だよ冗談かよとセルアが安堵したらしい声を上げれば、またユージンが驚く事を告げる。

「冗談ではありませんよ。本当に会いに行きたいと思っているので

すが？」

冷めた瞳のまま笑みを貼り付けたユージンへ、ベッドから飛び降りるようにしてセルアが近づく。

「会いに行つてどうするつもりだ？」

「マティアス王子の事を聞けるかもしれないでしょう？ その可能性には賭けないのですか？」

「それは……そうだが、今じゃねえだろう？」

言葉を詰まらせながら答えたセルアに一瞬目を向けたユージンだったが、手は素早く先程腰から外した剣へ向かう。

「ユージン、それは……？」

あくまで護身用であり、余程の事がない限りは抜かない。そう告げられてはいたが、わざわざ手にした姿に思わず蘭は聞いてしまう。「念の為に持っていくだけですよ？」

重い金属音をさせたそれをあるべき場所へ戻したユージンは、笑みを浮かべたまま扉へ向かつて行く。冗談とは思えない動きに、セルアが再び問いかける。

「本気で行く気なのか？」

「ええ、本気です。向こうも帯剣しているでしょうし、こちらも身を守る必要はありますからね。マティアス王子の事も気になります——気に入らないのですよ。ランを斬ったヘンリック王子が」

過剰な笑みをたたえているユージンは、表情と言動がそぐわない為かやけに恐ろしく見えた。笑いながら剣を持ち、ヘンリックが気に入らないと告げる姿は不気味以外の何ものでもない。

何を考えているのか分からない。そう表現するのがぴたりとはまりそうな姿に、蘭は戸惑いながら目で追うばかりだ。

「俺達も一緒に行く」

このままでは一人で出て行ってしまうであろうユージンへセルアが言えば、否定だけが向けられる。

「ランを連れて行くのは止めましょう。二人はここで待っていてください。私は話をしに行くだけですよ？ 危険な事などあり得ませ

ん」

「そうはいかねえだろうが、俺達に勝手な事をするなど言ったくせに、自分は単独で行動するつもりか？ ユージンが怪我をするのだって困るってのはわかってんだろう」

扉の前へ体をねじ込み行く手を阻んだセルアの姿に、ユージンは大げさに溜息をついてみせた。

「そのような心配は無用ですよ。うまくマティアス王子の事でも聞いて帰って来ます」

「駄目だ！ ランの身は俺が守る。それに、術師が一人いるだけでも大きく違うだろう？ 向こうも砂漠を越える為に術師は必ず連れてくるはずだ。もしもの時、俺は遠くからでもユージンを援護できる」

以前光の玉で砂煙を上げたように、遠くから魔力をぶつけるのだろう。それは有効な手段らしく、ユージンも頷く。

「ですが、私はシェラルドに何かをしかけるつもりはありませんよ？」

「当たり前だ。だが、向こうがどう出るかはわからねえ、一人では行かせられない」

セルアの意見を聞き入れず、どうしても一人で向かいたいらしいユージンに蘭も声をかける。

「私は離れているので構わないから一緒に行かせて」

ユージンが一人だからといって、向こうもヘンリクが一人で現れるわけではない。むしろ確実に以前と同じく従者を引きつれているに違いないと確信できる。その中へ単独で向かわせる事はどう考えても危険だった。

蘭とセルア、どちらへも視線を向けたユージンは、困った表情を浮かべたかと思うとすぐにわずかな笑みを浮かべる。

「危険な目には遭わないかと思いますが、仕方がないでしょう」

そして、そう言い終わるとセルアを押し退けるようにして扉を開き、室外へと出て行ってしまふ。

「おい、待てユージン！」

同行を許可された事で気を抜いてしまったらしいセルアは、あまりにも勝手に動いて行くユージンへ声をかけつつ蘭の腕を掴んだ。そのまま二人は階下へ向かう。

下ではマルタとクロード以外にも数人がおり、おそらくユージンが出て行ったのであろう扉を啞然と見つめていた。

「なんだか怖い笑顔で歩いて行ったけれど、大丈夫なのかい？」

足早に宿を出るユージンへ声をかけられなかったらしいマルタが、蘭とセルアの姿を認め聞いてくる。しかし、ユージンを追わなければならぬ二人は歩きながら答えるほかに、簡潔に口にしながらも宿の扉を開け放った。

「ちよつとヘンリクに会って来るだけだから、気にするな。っていうのは無理か……とにかく大事にはしねえから」

「何言ってるんだい！」

「本当に大丈夫だ。アンヘリカを巻き込んだりはしねえよ」

セルアの言葉へ対するマルタの反応は正しい。だが、今はそれどころではないのだ。とにかくユージンに付いて行かなければならず、何が大丈夫なのかもわからぬまま蘭はセルアの開けた扉を今度は閉めようとする。

しかし、それは誰かの手によって押さえられ、蘭は背後を振り返った。

「どうしたの？ クロード」

慌てていた為か近づくクロードにも気付かなかったらしい。セルアも無理に蘭を引く事はない為、足を止め振り向く。

「オレも一緒に行くよ」

「何だと？」

扉を閉められないように掴んでいるクロードは、空いている片手で自分の衣服の中を示す。

「力に関してはオレが一番だと思うからね。とにかく今はユージンを追いかけるでしょ？ 急がないと」

確かに今はユージインが勝手に先へ進んで行ってしまおう為、クロードを言い含めている余裕はない。

「仕方ねえな」

セルアがそう告げると、三人はとにかく追いつかなければと駆け出した。

決して走りはしないがユージインの足は速く、三人は結構な距離を走らなければ追いつく事ができなかった。

「ユージイン、どうしてそんなに急ぐんだよ」

「そんな事はありませんよ」

隣に並んだセルアへ顔を向けたユージインは、先程マルタが言っていた通りに怖いと表現するのが似合う笑みを浮かべている。どうにも普段とは違う様子に三人は一瞬たじろぐが、すぐにセルアが言葉を発する。

「いったいどうしたってんだ？ ユージインらしくもねえ」

「私らしくもない？ セルアこそどうしました。私は何も変わりませんよ」

冷たく言い放ちつつも歩みは一切緩まず、ユージインはひたすらどこかを目指して行くばかりだ。ユージインとセルアが並ぶ後ろに手を引かれた蘭がおり、その隣にはクロードもいる。

「ユージインはヘンリク王子がどこにいるか知ってるの？」

迷いのない動きに蘭が聞くとユージインはこちらを振り返り、今度は少し馴染む笑みを浮かべた。

「私達はウィルナ寄りの宿へ滞在するでしょう？ 同じようにシェラルド寄りの入り口付近に宿ではなくとも滞在場所があるはずですよ。そうでしょう？ クロード」

突然鋭く目を向けられたクロードは驚いたらしいが、すぐに頷く。「向こうの入り口近くに大きめの家があって、いつもそこを使ってる。土地を潤おす為にウィルナの術師が出入りするようになった時

に、両国分を準備したんだ」

蘭はアンヘリカへ来る度に宿を使っていたが、どうやらウィルナ、シェラルド共に王宮関係者がそういった場所へ泊まる事は基本ないらしい。

「宿に泊まるのは、ウィルナやシェラルドの一般的な人達だけなんだよ。正直、王子なんかには泊まられたらたまったもんじゃない」

ただ見ているだけならば、アンヘリカの人々はウィルナの民もシェラルドの民も受け入れているように見える。だが、その内心には色々と思う事もあるのだろうか。そしてそれ以外にも、ヘンリック本人を見ている蘭としてはおそらく扱いづらいだろうという感想も抱いた。

「絶対に揉め事が起きるのが目に見えてるし、あいつらだって最初から泊まるつもりはないはずだけどね」

クロードが心底嫌そうに告げれば、ユージンが苦笑する。

「寝首をかかれては困ると考えるはずですね」

「まあ、アンヘリカからすればどっちの王族も嫌な存在だろうしな」セルアが頷くと、クロードが迷う表情を見せた。

「最近ウィルナ寄りにはなってるから、そこまでではない気もあるな。でも、わだかまりがないわけでもないし……」

「そればかりは仕方がないでしょう。そして今、その王族に用事がある身としては宿にいられるよりもずっとありがたい事です」

自身の目的へ話題を移したユージンへ蘭が聞く。

「その家に向かうのはいいんだけど、ユージンはそこからどうするの？」

もし家屋内にヘンリック一行がいたとしても、ウィルナの人間がどうやって会話をする状況へ持っていけるというのだろうか。

蘭の問いにユージンは少し困った様子を見せたが、すぐに口を開いた。

「どうにかなるでしょう」

本当にらしからぬ台詞にユージン以外の全員が言葉を失う。し

かし、当の本人はお構いなしに先へ進んでいくばかりであり、とにかく三人はまた後を追う格好になる。

「ユージン、大丈夫か？」

きちんと言葉は返ってくるものの、やはり普段とは違う姿にセルアが呟くとクロードが頷いた。

「さすがにオレもちよつと変だと思う」

「そうだよね」

蘭もただそう言う事しかできない。

ユージンならばきつと考えあつての事だろうと思いたいのだが、どうにも違和感がある。あれだけアンヘリカへ来る事を拒んだというのに、ヘンリク存在を知った途端率先してそこへ赴こうというのだ。

「無理にでも止めるべき？ 剣も持ってるし」

もし本当に使う事になつては大変だと蘭が聞けば、セルアは否定をする。

「そこまで馬鹿はしないだろうな。さすがに」

「何気にオレを馬鹿だつて言ってるよね？」

「今はそんな余裕ねえよ！ クロードもこの前みたいになるんじゃないぞ？」

以前の自身の行ないを思い出したのか、馬鹿という言葉に反応したクロードの頭をセルアが叩く。痛いな、と文句を言いながらもクロードはその後の発言にしっかりと頷いた。

「大丈夫だよ……」

どこか弱々しい返事に今度は蘭がクロードの背中を叩く。

「しっかりしてね、クロード？」

「うん。頑張る」

クロードの気持ち次第で抑えられるのかはわからないが、前回のようにならては困るのだ。だが、どこか似ていなくもないと思える今の状況は蘭をどこか不安にさせる。

「俺達はマティアスの事を知らなきゃならねえ。その為にはいい相

手に違いねえが、ユージンがあいつをどうにかできるのか？」

三人からすると、ヘンリクはまともに会話ができる相手なのかすら疑問なのだ。

心配しつつもすべき事が決まらない三人の目にも、シエラルド側の入り口付近にある他よりも一回り大きな家屋が目に入ってきた。ユージンがそこへ真っ直ぐ歩を進めて行く姿に、蘭達は慌てて足を速める。

目の前にある扉を睨むように立ち止まったユージンが、囲む形で側へ来た三人を見回す。

「これから私がする事に口出しをしないでいただきたいのですが？」

「どういう意味だ？」

まるで何かを言うと言っているユージンへセルアが聞くと、返って来るのはいつも通りの笑顔だ。

「言葉通りですよ。私はこれから少々貴方達を驚かせるかもしれませんが。ですが、黙って見ていてください」

「……何を言ってる？ 内容によっては止める事もあるだろうが」

「セルア。貴方はわかつているのでしょうか？ ならばおとなしくしててください」

そう言うとユージンはセルアの返事を待つ事なく目の前の扉を叩く。中には本当にヘンリクがいるのかはわからないが、人の気配は確かに感じられた。

程なくして扉が開き、明るい茶色の髪を長く伸ばし首元で一つに縛っている細身の男が顔を覗かせる。険しい表情をしているユージンの姿に危機感を覚えたのか、鋭い瞳が全員を見渡した。

「ヘンリク王子にお会いしたいのですが？ 貴方ならば通してくれるでしょう？」

口調は柔らかいが有無を言わせるつもりはないらしい。とんでもない発言に驚いた男を押しのけるようにユージンが中へと足を踏み入れた。思ってもいない強引な動きに、セルアが声を上げる。

「待て、ユージン！」

しかしユージインが止まる事はない。腰にぶら下げた剣の柄に手をかけながら室内へ視線を配りつつ、振り返る事なく声を発する。

「貴方達はそこで待っているといいでしょう。しかし、中へ入り扉くらいは閉めていただきたいですね。いくら敵国の者とは言っても斬り合いは止めてください。余計な火種は不要です」

待っていると言われて、そのままでいられるわけもない。三人はとにかくユージインを追わなければと足を踏み入れたが、目の前にはヘンリクの従者であろう男が立っている。

だが、男は何を言うわけでもない。むしろ蘭達と同じく困った様子で先に行くユージインを見つめていた。どうして阻まれないのかと疑問も浮かんだが、とにかく余裕がなかった。

「何か言ってる場合じゃねえな、行くぞ」

扉を閉めたセルアが髪を掻きむしるようにしながら奥の部屋へ向かうと決めると、蘭もクロードも頷き後を追う。

駆け出しながらも男はどうするのかと思えば、どうやら何も言わずに後ろを付いて来るらしかった。

何かがおかしいと思える状況ではあったが、ユージインはもう奥へ行ってしまったているのだ。

この建物は扉を開けてすぐに一部屋。そして奥にある扉を開くとまた一部屋と、どうやら三部屋が繋がっている造りらしい。それ以外に左右にも扉はあったが、ユージインは見向きもせずに扉を開け放ったまま奥へ向かっていた。

内容まではわからないがユージインの声が聞こえる状況で、三部屋目へ入ろうと三人が中を覗く。

するととんでもない状況が広がり、蘭は息を飲んだ。

部屋の奥で椅子に座っているヘンリクへ、己の剣を振りかざすユージインがいたのだ。

そしてそれは、あっという間に事を成した。

「ユージイン！」

まさかと思うユージインの行動に蘭が叫ぶと、すぐに答えが返っ

てくる。

「兄が弟の不始末を叱るのは当然でしょう？」

不釣合いだと思っていた剣を軽々と扱い、ヘンリックの右腕を斬り付けたユージインの表情は見知らぬものだ。笑みを浮かべているのは相変わらずだが、更なる冷たさを感じさせるそれを顔面に貼り付けたまま刃に付いた血を拭い鞆に収める。そして、小さく息を吐きヘンリックを見据えた。

「私はすべき事を伝えていたはずでしたが？ 貴方がそうも愚鈍だとは思ってもいませんでしたね」

いつかの蘭と同じように右腕から血を滴らせているヘンリックは、斬られた影響なのか椅子から滑るように床へ体を落としている。すぐに従者である男が駆け寄り処置を始め、馴れた手つきに目を向けたユージインは次にその者へ声をかけた。

「貴方は医術に長けているのでしたね。その程度の傷ならどうとでもできるでしょう？ ヘンリックを連れて早々にお帰りなさい」

困った顔で男がユージインを見返すと同時に、ヘンリックが体を起こしつつ目線を上げる。ヘンリックの表情は怯えているわけでもなく、怒りを含んでいるようでもなかった。

ただ、不思議そうにユージインを見つめ静かに告げる。

「兄上はお帰りにはならないのですか？」

その言葉は本当に弟から兄へ向けたものなのか、どこかすがるような響きすらも感じられた。

ユージインは眉を潜めて、どこか不機嫌そうにヘンリックを見下ろす。

「無駄口は必要ないでしょう？ 私の目的は変わりはありません。ネストリと共に己の役目を果たしなさい」

その口ぶりに何故かヘンリックは嬉しそうに笑みを浮かべ、ゆつくりと立ち上がる。従者達が大丈夫かと口々に声をかけると、ヘンリックはそちらへ目を向ける事はないまま大丈夫だと言いユージインを見続けた。

「私はまだ、兄上を信じて構わないのでしょうか？」

以前、蘭が斬られた時とは全く違うヘンリクの表情は生気に満ちたものだ。目を輝かせ、心底嬉しそうにユージインを見つめている。言葉こそは疑問を抱いているように感じられるが、口調はどこか心酔しているような不思議な様子に見えた。それは突然斬りつけた相手に対する表情とはとても思えない。

そしてその先にいるユージインは、蘭が見知ったものとは違う優しさなど感じさせない冷たい瞳のままヘンリクと対峙している。

怖いと思わせる雰囲気にも声も出せない蘭をそっと支えたのはセルアだ。思いもしない事態に足が震え、かろうじて立ってはいるがすぐにでも座り込みそうなところを気付いてくれたらしい。

「今は見てるだけにしとけよ？」

セルアは耳元で囁くとユージインとヘンリクへ視線を戻す。

蘭と同じように驚いていると思っていたが、どうやら違うらしい。何があるのかとセルアを見上げれば苦々しげな表情が浮かんでいる。

「とりあえず詳しくは後だ。クロードもだぞ」

とにかく伝わってはいらしいと理解した蘭は頷き、意識をユージインへと戻す。クロードも小さくわかったとだけ答えた姿から、平常を保ってはいるらしかった。

「まだその時ではありません。貴方だけお帰りなさい」

ユージインはそう告げるとヘンリクから興味を失ったのかこちらを振り返り、いつも通りの笑みを浮かべた。まるで何か切り替えるスイッチでもあるのかと思う程の、見事な変わりように蘭は驚く。そうして剣を振るった時の動きとは全く違った物腰で歩み寄り、ユージインはこちらを真っ直ぐに見つめてくる。優しく微笑む姿を蘭はただ見上げる事しかできない。

「少々驚かせてしまいましたか？」

悪びれる事もないままにいるユージインに、よくぞ少々と言ったものだと思いながらも蘭はとりあえず頷いた。

七章・孤と個の隙に揺れる（一）

ユージインが帰れと告げただけでも関わらず、一行はヘンリクの腕の傷へ簡単な処置を施すと本当にこの建物を後にしてしまった。

ヘンリク以外の人間がユージインへ声をかける事はない。しかし、言葉がなくともそこにいる人々の動きは明らかにユージインに従い、無理やりに近い形でヘンリクを連れ出して行く。

本当に仕えるべき人物はユージインであり、今はヘンリクが何を言っても通らない。そう思える空間がわずかの間、蘭の目の前にはあった。

蘭、セルア、クロードの三人はその光景にただただ飲まれ、啞然と見守るばかりであり口を挟む事もできない。

蘭の側へ来たユージインは普段通りの笑みを浮かべ声をかけては来たが、シェラルドの人間を見て話す時には雰囲気が変わる。冷たい瞳と冷たい声音で端的に指示を下す姿を見ながら、どこでなら言葉を発する事が叶うかと蘭は考えたが、どうしても思い至れぬまま時は過ぎ彼らは目の前を去って行ったのだ。

室内はアンヘリカという町のものと考えると、随分と豪華であると言えた。蘭が町の全てを知るわけではないが、見知ったものとの差は歴然である。

長期滞在を目的とした場所ではない為か、置いてある物は決して多くはない。だが、テーブルや椅子など必要最低限の品はどれも細工を施された手の込んだ造りになっている。

中央に据えられたテーブルに対し、椅子が十脚。それがこの部屋の主だ。中でも奥の中央に置かれている椅子は一際豪華であり、ユージインはそこへ当たり前のように腰を据える。

蘭が見慣れているたたずまいと変わらぬはずなのだが、ユージインはどこか異質な空気をまとう。

「このまま何もしなければ良いのですがね」

二部屋先にある入り口から出て行ったヘンリック一行へ向けたらしい言葉を吐き出したユージインは、珍しく肘かけに腕を載せると足を組んだ。

「この状況ってそれだけで済むの……かな？」

ユージイン以外の誰もが何も言えずにいた中でようやく声を発したのはクロードであり、見守る事しかできなかった三人の代表のような台詞だった。

この発言に押されてか、セルアがユージインへ強い眼差しを向ける。

「済まねえだろうな、どういうつもりなのかを知りてえところだ。

おい、ユージイン！ いや……マティアスって呼ぶべきか」

言い直したセルアへ、ユージインは今まで通りで構いませんよと苦笑すらして見せる。

「現在の私はウィルナに仕官しているユージインです。それ以外の何者でもありませんからね」

「何者でもありませんだと？ はっきりと自分がマティアスだと名乗っておいてどういうつもりだ」

体勢は違っているが見慣れた表情をしているユージインに対し、セルアは眉間にしわを寄せ声を荒げながらテーブルへ近づくと天板に両手を着く。どれだけ力を込めたのか驚く程大きな音が部屋中に響いた。

だが、ユージインは動ずる気配もなく口を開く。

「それが私の今あるべき状況だからですよ？ 確かに私はシェラルドのマティアスですが、あちらを取り仕切っているかと言えば違います。現在は長期休暇中とも言いましょうか。とにかくウィルナの為に働いているのが主ですからね」

「ウィルナの為？ シェラルドに利があるから入り込んだって事じゃねえのか？ ランが塔で道を読んでからお前の行動がおかしいと思っていたらこの通りだ」

セルアの発言も蘭にとっては初耳だった。以前、塔へ登り国中に

張り巡らされた道が契約文字であると知る事ができた。だが、その後のユージインの動向など知る事もなければ、気にする必要もなかった。

しかしセルアの口ぶりは違う。ユージインが何か思い当たる行動をし、気にしていたのは明白だ。

「私も不自然になるとわかった上で動かざるを得ませんでしたからね。セルアにはいつ聞かれるかと思っていましたが、そうはいきませんでしたか？」

問い詰めるようなセルアに対し、ユージインは余裕の笑みで何故今になるまで聞かなかったのかと告げる。

するとセルアは目つきを鋭くしながらも、口ごもった。

「それは……」

「もし事実だったのなら、ウィルナは立ち行かないからですか？」
先程からユージインの口調が澁む事はなく、対するセルアが悔しそうに口元を歪め黙り込んでしまう。

それでも、しばしの間でセルアは口を開いて見せた。

「立ち行かないどころの話じゃねえだろうが。今はあいつがいなくてランがいる。その状況で代わりに国を仕切ってる奴が敵国の王子いや、本来ならとくに王として名乗りを上げるべき人間だった。信じたくもねえ」

「そうなるのでしょうかね」

神妙な面持ちで頷いたユージインへセルアは喚く。

「お前が納得するな！ 王が倒れたのもユージインのせいじゃねえのか？」

三年前、いや蘭がこの世界へ来てからを考えるとおそらく四年近くも前、ウィルナの王は病に倒れている。その時城内にシェラルドの者がいて、毒を盛ったのではないかという話が出たと蘭は聞いていた。最終的には病だと落ち着いたらしいが、今その疑惑が目の前にいるユージインへ向けられている。

果たしてどう答えるのかと思っていると、ユージインはしっかりと

と頷いた。

「先程シェラルドに利があって入り込んだと言われましたが、確かにそう思いウィルナへ来たとは言えますね。ですが、ウィルナにも貢献はしているでしょう？　王が倒れた事で国はより良くなりました」

ヘンリック達の前で見せた姿など思い出させない程にユージインの表情は柔和だ。優しく笑い、穏やかに喋る。先程の姿は夢だったのかと思いたくなるくらいに、ユージインは蘭の見知った姿と変わらない。

だが、発言の内容ははっきりと王が倒れ国は良くなったと言い、自身が貢献しているとセルアの質問を認めているのだ。

セルアの表情はますます険しくなり、更にユージインを睨み付ける。

「ならあいつがいなくなったのもユージインが仕組んだのか？　狙うなら王だけではなく姫だって同じだろうが！　あいつがいなくなれば、先視みは国政に疎い奴へ引き継がれていく。じゅうぶん内側から壊すに事足りるだろう？」

「それは、違います」

セルアの瞳をしっかりと正面から見据えたユージインは、はっきりと言い首を横へ振る。

「証拠は？」

「ありません」

「信用すると思うのか？」

「信用していただくほかはありませんね」

そのまま二人の会話は続けられるが、疑うセルアに対しユージインは違うと答えるばかりであり、どうにも先へ進めない。そう思っていた時に仕方がありませんね、と溜息をこぼしたのはユージインだった。

「私がマティアスだという事を、姫は知っておられました。その上でウィルナに関わっていたのです。あの方へ手をかけるつもりなど

毛頭ありませんよ」

「あ？」

セルアは反応したものの、うまく言葉は出なかったらしい。大きく目を見開いたままユージインを見つめ、止まる。

その姿を見たユージインは楽しげな笑い声を立てると、蘭とクロードへ視線を移した。

「とにかく皆さん席へ着きましょう。立ったままでは疲れるでしょう？　おそらく長い話になりますからね」

部屋の入り口近くで二人の様子を遠目に窺っていた蘭とクロードは突然の事に何も言えずにいたが、ユージインは気に留めぬまま続ける。

「おかけなさい」

再び座れと言われ蘭は足を踏み出しながら、何もかもがユージインのペースだと思いつつ椅子に腰かける。クロードも無言で隣へやって来た。

こちらへ視線を向けたセルアは不機嫌そうに眉を潜めると、もう一方の蘭の隣へ足を運び乱暴に椅子を引く。そして座ったかと思えば、盛大な溜息をついた。

「長えとかの問題じゃねえ。俺だって混乱してるんだ、ランとクロードは余計にわかんねえだろうが？」

蘭とクロードが素直に頷けば、斜め向かいにいるユージインがそうですと笑みを浮かべている。

正面に座るべきなのはセルアだと思い、蘭は少し離れた位置に腰を据えていた。クロードは更に遠くになってしまったが、声が聞こえぬわけではない。セルアがユージインと向き合う形で話は進められる。

「驚いているけれど、わたしは何となくついていけるかな」

蘭がそう告げると、クロードは難しい表情でテーブルに両肘をついた。

「オレはちよっとって言うよりは、さっぱりついていけない。前か

らわかんない話の時はあったけどさ、ウィルナとシェラルドは実際どうなってるのかな？」

二人の言葉を耳にしたセルアが、背もたれに寄りかかりながら視線で蘭とクロードを示してみせる。

「この状況でどこから話を進める気だ？」

「どこから何も、最初からでしょうね」

動じた姿を一切見せぬユージインは、本当に部屋の主であるように見えた。

ユージインはまずクロードの為に、簡単ではあるが姫は不在でありおそらくだが代わりに蘭がいるという話をした。そして細かい部分をだいたい削りはしたが、大まかな流れを聞いたクロードが目を丸くしている。

「ウィルナの姫様は本当にいないって事？　ランが代わりをしているのは誤魔化す為で、行方も全然わからない？」

身を乗り出すようにしてユージインの話を聞いていたクロードが問うと、セルアが頷く。

「そういうこった」

「じゃあ、前に言ってたランがアンヘリカでもウィルナでもシェラルドでもない所から来たって話も本当？」

次々と質問をするクロードの言葉が、自分の答えるべき内容になり蘭は頷く。

「そう、わたしはこの世界の人間じゃないの」

するとクロードはそっかと小さく呟き押し黙ってしまった為、蘭は視線を向ける。

「どうしたの？」

何とも言えない。そう表現できる表情を見せたクロードは、乗りに出していた体を戻し背もたれに寄りかかるとぼやくように告げる。

「前にセルアとそんな話をしてた時にオレも口は挟んだけど、どこ

か信じてなかったんだよな。てっきりオレと一緒に記憶がないのかと思ってたから」

確かにそういった話をした時があったと思い出しながらも、蘭は不思議に思い首を傾げる。

「記憶がない？」

「そう。オレと一緒に覚えてないって事だと思ってた。アンヘリカとウィルナとシェラルド、どれでもない場所なんてあるはずがないし、ランは忘れてしまったんだと決め付けてたんだ。でも、詳しい話もしてたんだから、本当なんだなって思うべきだったのかもしれない」

一概に信じられる話ではなく仕方がないのだろう。セルアやユージインは姫の屋敷にいたという状況もあり信じてはくれたが、わたしは違う世界からやってきた人間ですと言われて納得するのは難しい話だ。

「お前の考えは間違っちゃいないだろうよ、見た事もない世界があるだなんて思いもしねえ。あいつが先視みをしていた上でいなくなり、ランが現れたから俺達は信じるしかなかったってだけだ。まあ、今の状況からするとユージインは違いかもしれねえがな」

クロードの意見に同調したセルアが、ユージインへ目を向ける。

「私にも先視みの力がありますからね、ランは姫と同じ未来が見えるのですよ。不思議な事です」

蘭を見つめながら口を開いたユージインは本当に不思議だと思っているのだろうか、神妙に頷いて見せた。

「同じ未来？」

先視みという力がどんなものかもわからない蘭が素直に聞くと、ユージインは笑みを浮かべる。

「ええ、とても美しい景色が見えます。そして、一辺の陰りもなく清らかなそれは、私が心地良いと感じる素晴らしいものです」

一体どのような景色が見えているのだろうか。ユージインは嬉しそう相好を崩し蘭を見つめているが、ふいに表情が曇る。

「しかし、全く同じ景色というのが解せないのは確かです。個人個人、見える景色や感じる想いは違うというのに、ランと姫だけは変わらない。それが私を不安にさせます」

三人共が話の内容を理解できない為か、何も言えずにユージインを見つめるばかりだった。ユージインが蘭自身を見つつも他の何かを見ているらしいという事は、口ぶりから判断できる。しかし、何を見てそう言っているのかを理解する事はできないのだ。

「悪いな、ユージイン。俺達には想像もできねえ」

全員を代弁するようなセルアの言葉に、ユージインはそうでしょうねと言いながらも話を続ける。

「これは本当にその身になれば理解できない力です。私も父から先視みを譲り受けるまでは信じる事ができませんでしたからね。ウィルナやシェラルド、アンヘリカに関わらず、人を見る度に良いと思える感情、もしくは悪いと思う感情が湧き上がる不思議な力ですよ」

三人の様子を見てなのか、こちらの反応を待つ事がないままユージインは言葉を紡ぐ。

「例えば、ランがさらわれた時、私はクロードに良い未来を感じました。だから追うふりはしても本当に追いつこうとは思いませんでしたね」

「何だと？」

セルアが声を上げ鋭い瞳でユージインを睨みつけたが、臆する事なく話は続けられる。

「ええ。ランに良い未来が見え、クロードにも良い未来が見える。ランが担がれ無理やり連れて行かれる状況ではありましたが、おそらく必要な出来事なのだろうと思い、本気で追うという判断はしませんでした」

「止められる状況をあえて見逃したっていうのか？」

「その通りです。確かにこのままではランの身にどのような事が起こるかはわからない。そうは思いましたが、先視みは良い未来を暗

示している。ならばそのままです。もし、ランの身に傷が付いたとしてもそれはその過程でしかないと思えたまでです」

先程のようにセルアはテーブルの天板を片手ではあるが叩く。

「ふざけるな！ あの時、俺達は必死でランを探した。それすらもユージンにとっては茶番だったって事か」

セルアは魔力が制限されている子供の姿のまま、疲れ果てて眠り込んでしまう程の力を使いアンヘリカへやって来た。それをユージンはどう考え、見ていたのだろう。

「茶番……それは違いますね。私は良い未来を見てはいますが、最終的にどうなるのかはわかっていません。正しい道筋も、です。ただ、これが良い未来への一つなのだろうと思うくらいなのですよ？ 決して確信があるわけではありません。セルアもまた良い未来の持ち主なのだから、その行動を信じ従ったまでです」

ユージンの発言はどこか曖昧だった。結果が見えているわけではないが、おそらく良いのだろうと、はつきりとしれない口ぶりに蘭は問う。

「絶対ではないの？」

「絶対、ですか？」

ユージンはつまらなそうに冷めた笑みを浮かべ、同じ言葉を繰り返した。

「国を治める為に必要で、絶対的に皆が信じている力でしょう？」

悪い未来が見えると殺されてしまうというのにまかり通る不思議な力。蘭にとっての先視みはそんな印象だ。

「私は絶対的に信じていると言いましたか？」

自分が質問したというのに問い返されてしまったと蘭は口をつぐむ。

しかし、すぐに以前ユージンが口にしてた内容を思い出す。

「見えない人には不思議なだけの力で、確信が持てないから好きじゃない……だっけ？」

「よく、覚えていましたね」

先程はどこか冷めた瞳だったユージンが、今度は優しく微笑んだ事に蘭は素直に頷く。

「意外だなんて思った記憶があるから」

先視みがあるから姫は大丈夫だと、あれだけ言っておきながらもユージンは信じていないと漏らした。絶対的な存在とばかり思っていた蘭には印象的だったのだ。

「実際に先視みを使える身となり改めて思ったのですが、この力は本当に当てにはならない。私はそう考えていますよ」

「当てにならねえなら、それを目安に動く必要はないだろう？」

セルアが言う事は最もだ。信用できないと言いつつもユージンは先視みに沿って動いている。

「そうとは思えない出来事も私の身の周りでは起こっていたのですよ。良い未来を持つ者はそのままで構わないと思える程には——全ては姫の元にいたからこそですね。だから私は、不安がありつつも彼女の無事を信じています」

当てにならないと言いつつも、姫の無事を信じているというのはやはりおかしい。

「姫は限りなく近い先は見えませんが、その先は見えると言いました。それは絶対的に命の保証をし、必ずここへ戻って来るはずです」

「あくまでも、はずって事なんだろう？ 断定はできていない」

セルアも姫の無事を信じたいのだろうが、表情は暗い。

「存命という点においては、断定できます。……いえ、私が断定したいのですね。セルアがいるという事実も姫の無事を告げているはずでしょう？」

「それはそうだが……本当にユージンが何かをしたわけではないのか？」

「私が姫に仇なす事などできるはずがありません。だからこそいなくなれた理由がわからず、先視みに頼らざるを得なかった。姫の言葉を信じるほかはないのです……」

はつきりとした口調が、最後に迷いを見せた事で蘭はまた思い出

す。

蘭はただ姿が姫に似ているだけではなく、徐々にそのものに近づいている気がする。ユージインは言った。簡単にアンヘリカへの出入りが許され、なおかつ姫と同じく髪に魔力も宿してしまう。

蘭がこの世界に馴染んでしまい、姫が帰ってこないのではないか。それが怖いと確かにユージインは言っていたのだ。

「わたしがいる限りは不安なんでしょう？」

「どういう意味だ」

ユージインばかりを見ていたセルアがこちらへ目を向けると、蘭は何故か笑って答える。

「姫様と同じ姿をしたわたしがいて、同じように髪に魔力を宿せる。それがあればお城の人はある程度誤魔化せるでしょう？ その上アンヘリカとの関係も良い方向に進んでいる。確かに必要としている姫様はいないけれど、どうにかやり過ごせるだけの条件は揃っているんだから、帰って来る時期を読む事もできない……って事だったのかな？ ユージインはわたしが何かを見つける度に、不安を増しているような気がする」

以前ユージインが口にした言葉をそのまま伝え、わずかに自身の思う事を加味しただけなのだが、セルアは随分と驚いた顔でこちらを見つめている。

蘭の言葉とセルアの姿、どちらがきつかけなのかはわからないがユージインは声を出して笑う。

「あの時の私は相当不自然だったのでしょうね。ランの記憶にそんなにも残ったのですから」

突然、ランに様々な情報を与えようとしてくるユージインは確かに不思議だった。それまでは時期を待つと言っていたはずの人が、まるで手のひらを返したかのように急かしたと感ずるものがあったのだ。不安以外の何ものでもないだろうと蘭は告げ、隣にいるセルアへ目を向ける。

「びっくりした？」

するとセルアは盛大に溜息をつく。

「ランはランで何かをユージンから聞いてたって事か」

「うん、そういう事。ユージンは姫様に関する時だけは本当に焦っているような気がする。それは先視みではどうしてもわからない事だからなんでしょ？」

蘭が聞くとユージンは参りましたねと言った後、一呼吸置いた。「その通りです。私は先視みを心から信じる事ができないというのに、その便利さには慣れてしまっています。姫の先を知る事ができないというのは、大丈夫だと思いつつも不安に駆られて仕方がないのですよ」

そして笑みを潜めどこか寂しげに瞳を伏せたユージンへセルアが聞く。

「あいつが帰ってくる為には、どうしてもランの存在に繋がるってのか？」

「ランだけがというわけではありませんよ。姫がいなくなってから今までの間にたくさん事が起きています。その全てが私の不安を煽っているというのが正解でしょう。しかし、最初に起きた出来事はランが姫と入れ替わるように屋敷にいた事であり、そこから全ての事象は起きていると捉えられるのは事実です。」

ランには何かするべき事があり、それを達成しない限り状況は変わらない。そう考えるならば、私にも何かすべき事があると考えました。結果、マティアスであると知らせる必要があるのではないかと至ったのですよ。ただ……それは簡単に口にすべき内容とは思えず、大いに悩む問題だったのですよ？ 私が不自然な行動をとったのは、セルアに気付かせる為ではありませんでした。契約文字を読む事で姫のしようとしていた何かを知ろうとしたのであり、結果だけを見れば今に繋がったと言えるのかもしれませんが」

「ユージンがマティアスだとわかって、何かが変わるって事か……って、お前あの本が読めてたのか！」

セルアの言葉により、すぐには思い浮かばなかった事実があった

と蘭も気付く。ユージンと話すべき内容が多過ぎた為すっかり失念していたのだ。

セルアは蘭の右腕に目を向けて、苦々しそうに口元を歪める。

「あの時ユージンが自分の正体を言っていたなら、ランは怪我をしなかったって事になるよな？」

「そうなりますね。私が迷っていた事によりランは危険にさらされたと考える事もできます。ですが、今でもランから見える未来は明るい。私には、あの出来事も必要だったと思えるのですよ」

様々な事をユージンは伝えてくるのだが、あくまで先視みの力で見ているものを前提として語られる。それは見えない三人にとっては不思議なものであり、理解しがたいものだ。

とても全てを納得できるとは思えないが、ユージンは当然のように口にする。だからこそ信じなくてはならないのかとも思えるのだが、首を捻りたくなるのも確かだった。

この不思議な空間の終わりを決めるのはやはりユージンであり、正体をさらした事に対する憂いなど存在しないように言葉を紡ぐ。

「とにかく私はマティアスではありますが、今はウィルナのユージンであり国を思う一人の男です。まずは、宿へ戻りましょうか」

まだまだ疑問は残されているが、このままここへ居続けるわけにもいかないのが現実だった。

七章・孤と個の隙に揺れる（二）

建物の外へ出た蘭が本来利用すべき人達がいまいまにしているのかと思っていると、ユージインは簡単に言い放つ。

「クロード、貴方ならこの施錠もできるでしょう？　ヘンリック王子は痼癪を起こして早々に帰ってしまわれた。必要な手順を踏みつつ、仕方なしに閉めていただけますか？」

「オレが？」

「当然でしょう？　ウィルナの私達がシェラルドに関わる行動を取るよりも、クロードがヘンリック王子のわがままに振り回されている方が自然です」

ユージインはそのままゆっくりと歩き始めるのであり、方向からも宿へ戻るつもりらしい。一時見せた見慣れぬ様子は失われ、表情も口調も穏やかな人物が進んでいく。

「確かにクロードがするしかねえんだが、ウィルナの人間がシェラルドの建物から出てきた時点で問題だろう。しかもシェラルドは出て行っちゃってる。不自然だろうが？」

セルアがすぐさま後を追いつけるが、特に視線を向けぬままにユージインの歩みは続いた。

「気にする必要はありません。なるようになるでしょうからね」

「気にする必要はないだど？」

「ええ、こうして揉めて見える状況こそが今は不穏さを感じさせますよ。何が必要かを考えて発言すべきでしょうね、セルア？」

全く気に留めていないのか足を進めて行くユージインに対し、セルアは歩みを止めてしまっている。あまりにおかしな事態に戸惑いしつつも、蘭はクロードと共にセルアへ近づき促す。

確かにこの場で留まる姿は不自然に見えるだろうと動きはするが、すでに周囲の目はこちらを気にしているようだ。明らかに目を向けている者、気にせずに通り過ぎる者、どちらの姿も認められる中に

はヘンリック一行がここから出て行つたと知る者もいるのだろう。

しばらくは三人が口を開かぬままに進んでいたが、お互いの胸の内を知る事はできなくとも、どこか消化できないものを抱えているのはわかる。

先を行くユージンよりわずかに離れた位置のまま、蘭を真ん中にセルアとクロードが並び小声での会話が自然と始まった。

「さすがにユージンの正体って信じるしかないんだよね？」

「そうだと思うけど、ねえセルア？」

クロードの問いを肯定しながらも逆隣にいるセルアへ蘭が視線を向ければ、随分と機嫌の悪そうな様子が伺えた。

「本人がそうだと言った上で兄上って呼ばれたんだ。そうなんだろうな」

三人はどうしてもマティアスと口に出せないまま話をしていた。

もし周りにいる誰かに聞かれ伝わってしまったてはと心配する部分もあったのだが、蘭は何よりも事実として受け入れる事ができず濁してしまうのだ。もしかすると二人もそうなのだろうかと思いつながら、クロードの言葉を耳にする。

「だとして明日にはウィルナに帰るの？ 三人で？」

「そうするしかねえだろう。正直、ユージンがいなきゃこっちは困る」

素直に領けないらしいセルアが、困ったようにわずかにうめいた。

「完全におかしいよね？ 普通はもう追い出したくならないの」

「だって、それはできないんだよ。事情はクロードもわかるでしょ？」

先程の説明で大体ではあるが伝わってはいるだろうと蘭が言えば、クロードは渋々頷く。

「んー。わかるんだけど、変な感じだよなあ」

クロードが言わんとしている感覚は蘭にもわかる。だが、ウィルナはユージンがいなければ立ち行かないという現実を抱えているのだ。

追い出してしまつてはウィルナそのものが窮地を迎えてしまう。しかし、シェラルドの人間が国政の中心を担っている時点で窮地ではないのかと思える部分も大いにあった。

「そこはもう仕方がねえんだ。話してる限りじゃユージンがいつをどうにかしたわけじゃねえ。今のところ目的は一緒、そう考える事にする」

クロードに言い聞かせる台詞かと思っていたが、どうやらセルアは自身にも言い含めたいらしい。

こちらの会話が聞こえていたのかどうか、ユージンが笑い声を立てつつ振り返る。

「お話したいのはわかりますが、宿へついてから三人でゆっくりとするべきではありませんか？ 原因の私が言うのもなんですが、ここでは詳しい事も喋れないでしょう？」

余裕たつぷりの姿を見たセルアが、自身の髪を盛大に掻き乱す。

「肩身が狭いはずのユージンが一番余裕そうなのが納得いかねえ」

「小さな事を気にしている場合ではないのですよ？ 腹を括ったらどうです？」

それはつまりユージンは何かに対する覚悟を決めたという事なのだろうかと思つたが、聞けるような状況ではなく蘭はひたすらに足を進めた。

宿へ戻ると心配そうな表情で出迎えたのはマルタだ。

それはそうだろう。ヘンリクが来たから気をつけるようにと伝えただけだが、ユージンが怖い笑みを貼り付けて宿を出て行ってしまった。挙句に蘭とセルアがヘンリクの所へ行くといいながら追いかける。

クロードが共には向かったが、むしろ心配事が増えないかと思つていたらしい。

宿の中へ足を踏み入れてすぐ、ユージンはマルタへ説明をした。

「以前の事で話し合いをして来ただけですので、特に問題はありません。向こうはもうお帰りになりましたが、それによりアンヘリカとウィルナが困る事態にもならないはずです」

簡潔に言い切ると振り返り、蘭とセルア、クロードへ、そうですね？　と有無を言わせぬ視線をぶつけてきたのだ。

それには三人共が渋々ではあるが返事をし、マルタは怪訝そうではあったが安心した様子を見せた。その場は一応丸く収まったと言える程度にはなってしまったのだ。

三人でゆっくり話せばいいとユージインは言っていたが、結局は四人で一室に入り各々自由に腰を据える場所を見つけていた。

蘭はセルアに無理やり並ばされる形でベッドに座らされており、そうなるとクロードも逆隣へやって来る。ユージインだけがゆつたりと椅子に腰を下ろし余裕の笑みを浮かべ、三人が並んで見つめる形となった。

「結局、ユージインは敵ではないって事？」

先程とあまり変わりもしない配置のままに、疑問を投げかけるのはクロードである。セルアや蘭と違い内情を深く知らない為か、簡潔ではあるが最もだと思わされる質問をぶつけ続けていた。

「敵ではないでしょうね」

もちろん、ユージインは全く動ずる事なく答えて見せる。

蘭は何をユージインに聞くべきかを迷い様子を見守るばかりであり、隣にいるセルアも不機嫌そうに座っているだけで口を開きはしない。

このままクロード任せが一番ではないかと思えるような状態なのだ。

「じゃあ、オレとしては問題はないって事かな」

ひとしきり聞き終えたのであろう。クロードはどこかすっきりとした表情で言うと、ベッドの空いているスペースへ器用に寝転がる。三人が座っているだけでも軋みがちだった簡素なベッドは、悲鳴のような音をぎしりと鳴らす。

「壊れるだろうが」

「痛っ」

本来このベッドを使うべきであるセルアが咎めながら一つ叩くと、クロードは仕方なしに体を起こし、あ。と声を上げた。

「オレ下に行かなきゃ。仕事の話の途中だったんだ」

クロードはベッドから足を下ろし立ち上がると、見上げている蘭を見て満足そうに笑んだ。

「また来るからね」

「あ、うん」

そうして蘭が頷けば、扉は閉まり足音は遠ざかる。

確かヘンリクの所へ行く前のクロードは、マルタ達と何か会話をしている様子だった。慌てて廊下を駆けていく音が響き、急ぐべき用事があったらしき事はわかる。

黙って見送ったセルアが、相変わらずの切り替えの早さに驚いたのか呆れたのかわからない表情で扉を見つめたままに言う。

「すっかり元通りって事なのか？ あいつ」

「どうでしょうね。一見する分には問題はなさそうですが」

するとセルアの視線は、相変わらずの笑みを浮かべているユージンへ向けられた。

「ユージンの問題に比べりゃ軽いもんだな」

「そうですか？ クロードの抱えている問題の方が難しいと私は捉えていますよ？」

おそらくユージンはセルアの考えている事がわかっていながら、余裕の笑みを見せているのだろう。自身の発言によって起こりうる事態は予想済みなのか、動じる気配は一切ない。

「色々と聞きてえ事はあるんだが、さすがに頭が追いつかねえ」

大きな溜息をついたセルアが悔しそうに口元を歪めると、ユージンは更に柔らかに微笑んだ。

「私はどんな質問にもお答えするつもりですよ？」

「その余裕が気にいらねえんだよ！ 何様のつもりだ」

セルアの言葉に何様も何もシェラルドの王子様なのだと思いますが、話さねばならない事はたくさんあるらしいと蘭は二人を見つめていた。

七章・孤と個の隙に揺れる（三）

どんな質問にも答えるとユージンは言ったが、結局あれ以上詳しい話を聞く事もなく三人はアンヘリカで過ごす事となった。

ユージンにとってはアンヘリカの情報を直に得られる貴重な機会でもある。ずっと室内へこもらず、まずはウィルナの為に必要な事をしようと思われたのだ。

そうして過ぎし帰って来た三人は、ウィルナでの通常の生活へと戻っていた。

常に忙しく業務をこなしていたユージンは、三日間城を離れた為かいつも以上に忙しそうである。セルアもこまめに顔を見せはしたが、やはりすべき事があるらしく長時間いる事はない。

そうなつて来ると、以前の様子に戻ったクロードが仕事の折に屋敷へ顔を見せたとしても、今度は入る事が叶わない。大丈夫だから入れてよと言われたとしても入れようがないのだ。再びクロードが吹き飛ばされてしまうわけにもいかず、追い返す形になっていた。

その結果、蘭はどうしようもなく暇になっていた。ハンナに教えてもらった織物もだいたい小作品もいくつかでき上がってはいるが、そればかりをしているのも飽きが来る。文字を読む作業はある程度生活に必要な単語を覚えられてはいるが、文章にはまだ不安が残る状態であり途切れ途切れに教本を理解できるようになったくらいだ。

一人で外出するわけにも行かず、帰って来てからというものの蘭は屋敷にこもりっぱなしである。

思いつく限りの事に手を付け、それでも時間を持て余した蘭はソファに寝そべりながら呟く。

「確かにユージンはウィルナに必要なんだろうな」

そう言わざるを得ない状況が、滅多に城内に入る事のない蘭にすら感じられるのだ。セルアがユージンをシェラルドの王子として

捉えないようにしているのも頷ける。

帰りの乗り合いの中でも、ユージンではなくマティアスとして答えるべき質問をいくつかはした。だが、大半ははぐらかされわからない事だらけのままだ。

ユージンとセルアの様子を見る限り、どうやら蘭を交える事を避けたい内容もあるらしい。敢えてそうしている空気も読み取れた為、深く追求しようとは思わなかった。

どんな質問にも答えてもらえるのはセルアだけなのかとも思ったが、蘭が知る必要がない事柄ならば仕方がないのだろう。セルアとは立場が違うのだ。

今の状況は確かに一大事だと思える部分もあるのだが、本当にそうなのか今ひとつわからないとも蘭は思っていた。

結局、自分はユージン、セルア、ハンナと、ウィルナで詳しく知っている人物はこれだけだ。城へ足を踏み入れても極力周りとは接する事を避け、屋敷ばかり過ごす。後は少し町中をぶらつくくらいのものであり、知らない事はたくさんある。

顔見知りの数ならばアンヘリカの方が圧倒的に多い為、どちらかと言えばそちら寄りになってしまいうにも思えてしまう。

「なんだか、どんどん複雑になってるだけじゃないのかな」

弱々しくそう呟くと、今度は退屈のあまりか欠伸が漏れる。

少し眠るべきかと、蘭は静かに瞼を閉じた。

ふわりと頭を撫でられる感触に蘭は身じろぎをする。心地良く眠っているところを微かに邪魔して来るそれに、拒否を示そうと首を振ったが止む気配はない。

時折そうして起こされる事のあった蘭は、寝ぼけた頭のまま口を動かす。

「セルア？」

そして、その後に瞼をゆっくりと開けば、映りこんできたのはユ

ージインだった。

穏やかな笑みを浮かべて髪を撫でながらこちらを覗き込んでいる姿に、蘭は慌てて声を上げる。

「ユージイン！ どうしたの？」

夕食前の時間にやって来るなど予想にもしていなかった上に、常ならぬ様子まで見せていた。思わずそう聞いてしまう。

「驚かせてしまいましたね」

申しわけなさそうに手を離れたユージインは、蘭の寝そべるソファの傍らに立っていた。どうやらすっかり眠り込んでいるところを見られていたらしく、恥ずかしいと思いながらも蘭は体を起こす。乱れた髪を撫で付けながら見上げると、ユージインは静かにこちらへ近づき隣に腰を下ろした。普段ならば自身の席に座るユージインが珍しいと、蘭はやはり驚いてしまう。

「溜まっていた仕事を片付けたら、時間が空いてしまったのですよ。どうやら頑張り過ぎたようですね」

そう言いつつ、背もたれに寄りかかる姿は少し疲れて見える。

「お疲れさま。わたしお茶を持って来るね」

蘭が立ち上がろうとすると、ユージインにやんわりと止められた。「持って来ているので、大丈夫ですよ」

見るとテーブルの上にはティーポットとカップの載せたトレイが置かれており、注ぎ口から湯気が立ち上っている。どうやらユージインはここへやって来たばかりらしい。

ユージインはそれらを手に取ると蘭と自身の前に茶の支度を整えながら、笑みを零す。

「起こそうか起こすまいか悩んだのですが……最初から声をかければ良かったですね」

そうして目の前にはティーカップが差し出され、蘭は素直に受け取り口にする。

「ううん、別にいいよ。ユージインだし」

「私なら構わないのですか？」

何気なく答えた蘭は、ユージインの問いにしつかりと頷いた。

「だって、ユージインは何もしないでしょう？」

何もしないという言葉もどうかとは思うが、もしここに來たのがセルアだったのなら氣まぐれに一緒に寝ていたりするのだ。目覚めたら二人で狭苦しくソファにいた時の事を伝えたと、ユージインは苦笑する。

「さすがにそれはしませんね」

「でしょう？　だからいいの」

あの時は本気でセルアを怒ったな、と思いながら蘭は茶を一口飲む。

しかし無防備に寝ている自分も良くないのかと考えながらユージインを見ると、静かに飲み物を口にしくつろいでいる。

どうやら本当に休憩がてらここへ立ち寄ったようだと思いながら、蘭も無理に会話をする必要もないだろうと茶をすすり、まだ寝ぼけている頭を覚まそうとした。

しばらく二人でのんびりとした時間を過ごしていると、今度はユージインがどのような質問になら答えてくれるのだろうかと思いは考え始める。やはり氣になる部分は多々あるのだが、それをどれだけ教えてもらえるのかはわかりづらい。

空になったティーカップをトレイに載せながら、隣に座るユージインへ視線を向ける

「ねえ、ユージイン？　ウィルナにちゃんと家があるって言ってたよね？」

突然話題を振ったのにも関わらず、ユージインは驚く事もなく頷きながら微笑んだ。

「ええ、言いましたね。ユージインとしての家は確かにあったのですよ」

だが、その答えには少々の引っかけが感じられる。

「ユージインとしての？」

「本物のユージインと言えば良いのでしょうか。私は元々ウィルナ

に住んでいたユージンという人の名を借りる形で城へ入ったのですよ」

蘭の疑問を予測していたのかどうか、ユージンは澁みなく答えを返して来た。特に困らせる内容ではなかったらしいと、蘭は納得し更に質問をする。

「じゃあ、その本物のユージンはどうしてるの？」

すると、ユージンは笑みを更に柔らかなものへと変えてしまう。「物騒なのでお教えできません」

あまりにも不自然で爽やかな笑顔に蘭はかえって戸惑ってしまう。「……それって、どういう意味？」

恐る恐る聞くと、表情を変えないままユージンは小首を傾げる。「聞かない方が身の為ですよ？」

身の為とは何なのかとも思ったが、どうやらこれ以上の話はしてくれないらしいと蘭は押し黙った。深く踏み入れないのならば、かける言葉も見つからない。

質問を変えなくてはならないのかと蘭が頭を悩ませ始めると、ユージンは笑みを幾ばくか自然なものへと戻す。

「似た年頃で、体格もあまり変わらない。そして、髪型や色を変えれば成り代われる。そうした相手を探してここへ来たという事です。深く知るのはおやめなさい」

物騒と成り代われるという二つの言葉で思い浮かぶものはあったが、蘭も口に出して聞く必要はないのかもしれないと俯く。

おそらくだが本物のユージンはいないと言われている気がした為、追求する事すらも恐れてしまった。

「じゃ、色を変えるっていうのは？」

ならばと今の会話で気になったところへ話を変えてみると、ユージンの表情は普通だった。これは今のところ大丈夫らしいと蘭は安堵する。

「ヘンリクの髪と瞳の色を覚えていますか」

「うん、銀色が印象的だったかな。目も紫で不思議な感じがしたか

も」

長く伸ばした艶のある銀髪に細く釣り上がった薄い紫の瞳、それが蘭の思い出すヘンリクの姿だ。

「私も本来は同じなのですよ、銀の髪に紫の瞳。それらを黒く染め、髪を切っただけです。他は以前となら変わりありません」

目の前にいるユージインはきちんと整えられた黒い髪に優しく微笑む黒い瞳である。それがヘンリクと同じ銀と紫である姿を蘭は思い描く。今でもじゅうぶんな美しさを見せてはいるが、本来の色ならばそれは更に華やかなものになるであろう事が想像できる。

ヘンリクは初めて目にした時、鋭くもどこか病んだような表情を浮かべていた。しかし先日、ユージインを目にした瞬間だけは生気を宿し華やいだ笑みを見せたのだ。

おそらくユージインはそれ以上の輝きを放つ、蘭にはそう思えた。髪を染め、瞳の色を変えするという方法も気にはなったが、糸が魔力により髪になってしまう場所なのだ。そのくらいは術でどうにでもなるのだらうと思い、蘭は質問を変える。

「どうしてそこまでしてお城に来たの？」

これはユージインを少々困らせるものだったらしい。随分と間を空けた後に言葉が返された。

「先視みに呼ばれたから……ですね」

「呼ばれた？」

見る事によって感情を覚えると言っていた先視みに呼ばれるとはどういう事だろう。蘭はよくわからないと首を捻ってしまう。

ユージインも伝わらないとは理解しているらしく、あくまでそう思っているだけですと続けた。

「私はある時アンヘリカへ向かいました。すると、アンヘリカをウィルナへ奪われるという思いに駆られたのです。どうしてかはわかりませんが、ここを奪われてはいけないと強く思わされたのです」

「思わされた？」

「先視みの力を得てすぐに気付いた事は、見る相手毎に不安や希望、

そういった感情を強く感じる事でした。それは良い感情ならそれ程苦にはなりません。しかし、悪い感情は思っていた以上に辛いものでした」

想像で補う事しかできないのだが、蘭はユージインが言っている内容を理解しようと必死に考えた。

この場合は自分が思っている感情とは別に、強制的に良いか悪いかの感情が生まれるという事で構わないのかと聞くと、ユージインはそうですと頷く。

「基本的に城内は良い者達が置かれていたので生活し易くはあったのですが、唯一良くない思いに駆られる相手がヘンリックでした。彼は生まれた時から良くないと言われ、殺されるはずの身だったのですよ。それを母が身代わりになり救い、生き長らえる事ができました」

色々と複雑な事情があるらしかったが、ユージインはそれ以上を話そうとはしなかった。蘭が何かを聞こうとしても、触れられたくないとはばかりにはぐらかされ不自然な笑みを返される。

そして、ユージインは強制的に話を進めた。

「ヘンリックは私を慕っています。そして、私もそれを当たり前に受け入れて生活をしていました。ですが先視みを手にした後ヘンリックを見るのは、正直苦痛でしかなかったのですよ。これをここへ置いてはいけないという思いばかりが強くなり、消し去りたくなる。しかし、それでは先視みの力に負けている、そうも思い我慢を重ねました。結局、耐え切れなくなりアンヘリカへ向かい、そこでまた奪われる思いに耐えられなくなり、ウィルナへ来ただけです」

その後一度シェラルドへ帰り、必要な事は済ませて来ましたがねとユージインは念を押す。

「ここへ来ると、あれだけアンヘリカを奪われると思い憎みなくなる存在だったウィルナが、今度はとても魅力的な……何と言いましようか、私を救ってくれるものに見えたのですよ？ おかしな事だとは思いますが、本当にそう思うのです。」

結局、ヘンリクを殺す、アンヘリカを手に入れる、ウィルナで救われる。三つの中で私が選んだのがウィルナだったというだけです。そして、その結果がどうなるのかはいまだにわかりません」

先視みを手に入れた事でユージインに大きな影響を与えたのが、この三つだったらしい。その中で最善だと思われるのがウィルナ、そう信じて入り込んだという。

そこまでさせる先視みは何なのかはわからないが、どうやらただ便利なだけではないという事はわかる。

「なんだか人によっては振り回されそうな印象かな？　わたしなら手に負えない気がする」

どれを選ぶべきかと考える余裕がない人間なら、とっくにヘンリクを殺しアンヘリカを奪おうと躍起になっているのではないだろうか。

蘭が告げると、ユージインは笑った。

「まさにそう言った感じですね。本来の自分とは違う感情に強制的に流される、そうした力なのです。だから、私は信用できないと思います」

「いました？」

何故過去形なのだろうと聞き返せば、ユージインは立ち上がり机の引き出し奥深くに保管していた赤い表紙の本を取り出す。

「蘭がこれを見つけたでしょう？　そのおかげですよ」

そう言いながらユージインは再び蘭の隣へ腰を下ろし、静かに表紙を撫でる。

自分が見つけたという表現が適切なのかはわからない。だが、セリアの魔力が暴発し蘭が止めた事により、本は発見された。その内容はユージインにとってどのような意味を持っていたのだろう。

「姫は本の存在を先視みを手に入れてすぐに気付いていた為、私程には困らなかったのかもしれませんが。先視みが不完全だと知り、その上でどう振舞うべきかを考える事ができた。私の目から見ても彼女の采配は素晴らしいものでしたよ」

何かを思い出しているらしいユージンはとても嬉しそうに相好を崩す。

ユージンが大きく様子を変えるのは姫に関する時ばかりだなと、蘭は改めて思いながらも口を開いた。

「そんなにも凄かったの？」

するとユージンはしつかりと頷く。

「良い未来を見せる者はそのまま、悪しき未来を見せる者には別の環境を与える。それだけで未来は変わる、いるべき場所が変わるだけで先視みの内容は変わります。ほんの少しの違いで、何もかもが変わるのですよ」

何もかもが変わるとは、ユージンが見ている景色が変わる事なのだろうかと思いつつも、蘭ははつきりとは頷けない。

「力そのものを実感している私でも不思議なのですから、無理に納得する必要はありませんよ。とにかく先視みの結果により、その者を殺してしまうという使い方は間違っていた。それがはつきりとわかったのですから安心しましたね」

ウィルナもシェラルドも先視みにより処刑をしていたとは聞いていたが、そうなるのとまた違った問題が出てくるはずだった。

「なら、住む場所が足りなくなるよね？」

良くないと思うが、魔力で守り続けて行くしかないこの国では人減らしは必要なのかもしれない。そう思わされた理由が確かにあるのだ。

「それは、先視みが本来の役割を果たさなくなった代償なのでしよう」

「代償？」

「本来の先視みはただ一つ。決して分けてはならぬと言われていた力のようです。それが何らかの理由で二つになりウィルナとシェラルドになってしまった。結果、この世界は変わったのではないかという見方が有力なのですよ」

ユージンの曖昧な口ぶりに戸惑いながらも、蘭はあるものに行

き着く。

「もしかして、分かたれたものって先視みの力って事？」

「そのようですね」

はつきりと言い切れる程でもありませんがと付け加えつつも、ユージィンは肯定を返してきた。

「そうなる」と姫が書いていた文章の意味はわかった事になるよね？」
分かたれた物が一つになれば、欠けた魂は戻る。

姫が書き残した言葉が指していたのは二人が宿している先視みの力と、魂の欠片……蘭自身になるのだろうか。

現時点ではそれが最も答えに近いとは思えたが、やはり現実とは言い切れない。

ユージィンも、おそらくと言う事しかできませんがねと苦笑した後に続ける。

「先視みの力を持つ私と姫が同所にいた事により、ランがここへ現れたと考える事はできますね。しかし、その片割れであるはずの姫は同時にいなくなってしまった。それでは全てが揃わない事になります」

確かに今の話ではユージィンと姫、蘭の三人がいなければ成り立たない事になってしまう。

「ただ、はつきりとした条件はわかりません。私は姫が先視みの力を得る前から側にいて、その後も三年を過ごしています。もっと細かな条件の上で何かが起こったと考えるべきなのでしょう」

「そう……だよね」

どうにも行き詰ってしまい、蘭はまた質問を変える事にする。

「そもそも魂の欠片は何なのかな？」

「どうやら自分が魂の欠片らしい。そう思える状況があまりにも重なった為、何となくだがそうなのだろうと思っではいる。しかし、はつきりできるものならば正体を知りたいのだ。」

するとユージィンは本を静かにめくりだし、ある頁で手を止める。
「どうやら遠い昔の王が先視みの力を手に入れる際に差し出したも

のが、魂の一部になるようですね」

一部を差し出すと言われたものの、魂とは蘭が考えているものと同じものなのだろうか。

「そんな事ができるのかな？」

魂とは、死ぬと抜け出てしまう何か。そうした印象しか持ち合わせていない蘭にとっては、一部を差し出すという状況が全くわからない。ユージンも同じように捉えているのかと聞けば、魂とは形のわからない個人そのものを表す何かだと思っていると言われた。

「私にも一部を差し出すという表現はわかりません。しかし、実際にあちこちに魂、欠片といった文字が残されています。本当に魂の欠片なのかはわかりませんが、意味はあるのでしょうか。そして、この本の中でもその真意まではわかっていないようですね」

本は歴代の王の中で国中を走る道を読み解き、存在を知る事ができた者によって継がれてきた物らしい。誰が最初に作り魔力を込めたのかはわからないが、長い時代を劣化する事なく過ぎし少しずつ必要な情報を記して来ている。それが積もりに積もった今の状態でも、不明な点は多いらしい。

先視みは元来一つのものであり、分かれてはならなかった。そして、それを手に入れる代償として魂の一部を差し出している。

はつきりしているのは、これだけだというのだ。

「大半は先視みを手に入れた王達の心境が書かれていたのですよ。どうやら誰もが力によって流れ込んでくる感情を持て余し、病んでいつている印象がありましたね」

読めないふりをしながら読むのは大変でしたと言ったユージンに、蘭はあの時の姿を思い出す。

珍しく疲れを見せていた理由は、契約文字によって脳裏に浮かぶ言葉と共に走り書きの文字すらも読んでいた為だったのだ。

確かにそれならば疲れただろうと、蘭は改めて納得をした。

「あの時点ではわたし達に知らせるつもりはなかったって事なんだよね？」

「突然、私はシェラルドの王子ですと言うわけにはいきませんでした。姫がいるのなら……いえ、彼女は本の存在を私には知らせなかったのですから、ランでなければ知る事はできなかったのでしょうね」

そうして呟くユージインの表情はどこか陰りを帯びる。

詳しい心情までを見抜く事はできないが、何かを憂いているらしいユージインを見つつ蘭は声をかけた。

「今までに何があっても、私に見える未来は明るいんでしょう？」

ユージインは蘭がクロードにさらわれる時でさえ、未来が良いのならば先へ繋がるだろうとそのままにしたのだ。

そして現時点でも自分の未来が良い内容であるならば、現状はこれで構わないと思うほかはないのだろう。この場所では先視みというものが何かを担っているのであり、ユージインは効果を実際に知っているのだ。

「なら、これに必要な事って考えるしかないし、ユージインがいなくなる前に見た姫の未来だって良いものだったのなら、まだ何か足りないだけなのかも。きつときっかけがまた来るんだよ」

わずかではあるが不安を感じさせるユージインを見ると自然に言葉が出た。先視みの力を信じ切ろうとしても、信じ切れない。そんな様子に向け明るく告げた蘭へ、ユージインは驚いたように目を見開いた。

「やはり似ているのですね。ランと姫はとても似ています。姿形ではなく貴女の中にある何かが近いように思えますね」

そうして次に寂しげな笑みを浮かべるとユージインの手はこちらの髪に触れ、蘭は驚きと共に瞬きを繰り返す。

「先程は貴女がすぐに目覚めて良かった」

「そうなの？」

蘭としては間抜けであろう寝顔を見られたくはなかった為にすぐに気付いた事を安堵していたのだが、ユージインはどういった理由なのかと首を傾げてしまう。

「どうしても寝顔は姫に見えてしまうのですよ。同じ姿で変わらぬ未来を映し出している……目覚めているとこんなにも違うというのに」

似ていると言ったかと思えば、すぐに違うと告げるユージインの様子はどこか不思議だ。しかし、そう言いたくなる何かが自分と姫の間にはあるのだろうかとも思える。

何も言わずに蘭の髪に触れ続けるユージインの意識は今、こちらには向いていないのだろう。蘭はそう思いながら、何も言わずにただユージインの動きを受け入れていた。

すると、二人だけの空間に一つの声が乱入して来る。

「何してんだ？」

そう言いながら姿を見せたのはセルアなのだが、どうやら扉がしっかりと閉まっていなかった為、いつものような大きな音を立てて入ってくる事態にはならなかったらしい。

姿を認めたユージインは蘭の髪から手を離すと姿勢を正し、セルアへ声をかける。

「今、来られたのですか？」

「ああ、そうだ」

足音を立てながら側へ来たセルアは急に屈んだかと思えば、ソファに座っている蘭の背中と膝裏に無理やり腕を突っ込む形で体を持ち上げた。

「ちょっと！ 何？」

突然すくい上げられた事で歪んだ景色に少々目を回しながらも蘭が声を上げると、セルアはぼやくように呟く。

「ユージインは害がないとは思うんだが、気に入らねえ」

自分を軽々と抱え上げたまま拗ねた表情を見せている姿に蘭は呆れるばかりだったが、このままの状態にいるのも落ち着かない。

「とにかく降ろして！」

蘭がしっかりと睨みつけているにも関わらず、セルアは聞き入れるつもりがないらしい。不服そうにしながら足を進める。

「……降ろしなさい」

それでも続ければセルアは何も言わぬまま、腕から降りられるように体勢を傾けた。蘭はすつくと立ち上がり、セルアをねめつける。「もう、別に何でもないでしょ？ ユージンと話してただけだし」「わかってる。ユージンなら安心だからな」

「なら、どうして？」

どうやらお互いに問題はないと思っっているらしいと蘭が聞けば、言葉を発したのは話題になっている本人だった。

「さすがにそうも無害と言われると微妙な気持ちになりますよ？」

そう告げながらもこちらを眺めているユージンは面白そうに笑っており、セルアはそれにすら不愉快そうな表情を見せる。

「ユージンなら信用できる。だがマティアスなら信用できねえ」

「不思議な事を言いますね。どちらも私でしょう？」

そうしてわざとらしく首を傾げたユージンに、セルアは瞳を鋭くさせてしまう。

「ユージンを演じ切ってるなら問題はねえ。だが、最近はマティアスを垣間見せてるだろう？」

すると今度は急に蘭の腕を掴むとユージンから離れた位置にあるソファへ強引に座らせ、セルア自身も当然のように隣へ腰を落とす。

「正体を知られた今、貴方達の前では構わないでしょう？」

くつくつと笑い声を漏らしつつユージンが言うと、セルアは面白くなさそうに溜息をつく。

「それでぼろが出ても知らねえからな」

「心配してもらえただけ良いのでしょうね」

それにすら微笑み返したユージンを見たセルアは、うんざりしたと言いたげな表情浮かべる。

「んで、その本が出てるって事は、ランにも説明をしたんだよね？」
「簡単にですがね」

ユージンの膝の上には赤い表紙の本が載せられたままだ。どう

やらセルアは蘭よりも先に詳しい内容を聞いていたらしい。

「なら、この前話をした二つに分かれた原因ってのはあの予想でいいんだよね？」

蘭の肩を抱き更に引き寄せながら言ったセルアに、ユージンが黙って頷く。

二つに分かれるというのだから先視みの事なのだろう。先程は何も言わなかったではないかと蘭はユージンを見た。

「わかってたの？」

「確実とは言い切れませんが、悪くはない案といったところですね」ユージンはそう言いつつ、本を目の前にあるテーブルへ置きある頁を指し示した。

「どうやら兄弟喧嘩の結果が、この現状をもたらしたのではないか、という事です」

「兄弟喧嘩？」

あまりにも予想外な台詞に蘭が繰り返せば、ユージンは兄弟喧嘩ですと念を押す。

「どちらの先視みも、先代が扱いきれない状況になると受け継がれます。それは主に親から子へと移るのが一般的、現在のシェラルドのように王子が二人いるのならば兄が力を得るのですよ。分かれる条件はすぐにわかるでしょう？」

兄弟間で分かれる事はないのかと思いつながらも、蘭は考える。それは先に兄が生まれているからこそその優先順位なのだろう。ならば、先視みが分かれる原因となるのは一つ。

「双子って事？」

「そうなるのでしょうか。双子であれば優先順位が曖昧になると考える事ができます。それが先視みが不完全になった原因でしょう」

先視みを分ける事態だけは避ける。代々受け継がれていた言葉だったのにも関わらず、それを実行できなかった代で先視みの力は分かたれた。

「そしてそれを肯定するならば、姫は私との間の子を身籠った事に

なりますね」

「子供？」

「またも思いもしない言葉を紡いだユージンに、蘭は驚いた声を上げる。」

「親から子へ伝わるのですから、分かれた先視みを持った者同士が結ばれれば一つに戻るのでしょう」

確かにそうなのかもしれないとは思えた。親から子へ引き継がれる力を一つにするには、二人の間に子供を設ければ良いのだろう。

「でも、それは確実なの？」

蘭が聞きたかったのは力が一つになる事ではなく姫が身籠っているという点であり、ユージンにも伝わったらしい。

「残念ながら確信はできませんが、そうなるような間柄ではありましたがからね」

蘭は何と返事をすべきか困り、とにかくユージンと姫の間には既成事実があるようだと言で頷く。

「ただ、私は姫に騙されていたのかと少々傷付いてはいるのですよ？ どうもあの方の思惑に操られていた気がしますからね」

溜息交じりのユージンの言葉に蘭がどうしたのかと思うと、今まで黙っていたセルアが笑う。

「それがユージンの本音って事か」

「そう言いたくなるような状況でしょう？」

珍しく不満げな表情を見せたユージンに、セルアはますます楽しそうな笑みを浮かべながら蘭へ顔を寄せる。

間近に近づいたセルアへよくわからないと蘭が目で訴えると、口端が意地悪そうに上がった。

「どうやら大好きな姫様に利用されていたらしい事を知って、ユージンは酷く傷付きましたってこった」

ユージンが姫は二人を異性として見ていないと言っていた。そして、本人は認める発言をしなかったが、ユージンは姫が好きなのだろうとは蘭は思っている。

しかし子作りをするような関係ではあるのであり、とにかくやこしいと思いながら聞く。

「そうなの？」

「わざわざ言う必要はないでしょう、セルア」

セルアが何かを発する前に声が割り込み蘭がそちらへ目を向けると、ユージインが見た事のない表情を浮かべていた。常々にこやかなはずの目が鋭くなっている姿に、こんな時ではあるがヘンリクと兄弟なのだと思わされた。

すると、隣にいるセルアが我慢できねえと言い、思い切り笑い始める。

「ユージインをからかう機会なんてそうそうねえからな」

そうしてふざけて言ってみせたセルアだったが、突然に笑みを潜めた。

「あいつはユージインを利用したのかもしれないが、それだけでもないはずだ。そのぐらい気付け」

「……………」

「悪いが俺の方があいつといた時間が長え。ユージインよりもわかる部分はある」

何の返答も得ないままセルアが続ければ、ユージインは目元を緩め溜息をつく。

「……私もマティアスとして得を考えた部分もありますので、真実は本人に聞く事にしましょう。まあ、これで何となくではあります。が姫のしようとしていた事もわかりました。後はアンヘリカがどう関わってくるかでしょうね。あなたが魂の欠片と契約文字を残したのが、マルタの言う通りあの町を作ったと言われているアンヘリカという名の女性なのか」

これ以上話を続けたくはなかったのか、ユージインは無理やりに話を逸らす。セルアは隣で面倒くせえ奴だと呟きながらも話を聞いてはいるらしかった。

この世界へやって来て、蘭が最初のきっかけを手に入れたのはア

ンヘリカだった。アンヘリカの代表を務めるマルタの胸にぶら下がり、蘭の脳裏に言葉を浮かび上がらせた板を残したという人物。

「本当に実在した人なのかな？」

「名はどうあれ板に魔力を込めた人物がいるのは確かです。仮にアンヘリカとしておきましょう」

蘭の疑問にユージィンはそう答える。確かに名前はどうかあれ、板に魔力を込める人間がいなければ話は始まらない。

「そして、その人は先視みが分かれた時代にいたのか、それとも後世に事実を調べ上げただけだったのか。知りようがないとは思いますが、決して無関係ではないでしょう」

「双子が生まれ、先視みが分かれるきっかけができた。アンヘリカは魂の欠片としての人物を見極める契約文字を残している。確かに無関係にはならなそうだな、先視みが正常ならば魂の欠片を探す必要性は薄いと考えるべきだろう」

先視みが分かれてしまったからこそ魂の欠片は探されているとセルアは告げるが、当事者だと思われる蘭にはやはり何もわからないまままだ。

「でも、わたしは魂の欠片として何をすべきかがわからないよ？ただそうなのかな？　って思うくらいだし」

蘭の意見にセルアが頷いた。

「確かに、はっきりとした目的を残していないのが……わかんねえな」

「折角なら、何をしたらいいのかも残してくれば良かったのにね」そうなっていればこうも悩む事態にはならなかっただろうと思えば、ユージィンが同意する。

「それが一番だと私も思いますよ。いったいどんな思惑があったのでしょうかね。とにかく、私とランと姫、それで全てが揃うのでしょうか？」

そこで蘭は急に思い立つ。

「その為にはわたしが帰らないといけない気がするな。やっぱり」

三人が必要だと話しているのはわかっているが、本当に微かにだが自身が帰らなければ姫は戻ってこないと思ふ。蘭は思う。

「なんだ急に？」

セルアが不振そうに覗き込んで来るが、蘭は気にも留めずに言葉を続けた。

「わたしがここに来て姫様がいなくなったんだから、わたしが帰れば姫様も帰って来ると思ふんだよね。どうしたらいいのかはわからないけど」

何故か突然、帰らなければならないという思いに強く駆られた蘭の肩をセルアが掴み、向かい合えるように動かされる。

「ランが帰らないままあいつを連れ戻せば問題ねえだろうが」

「問題ないって、そんな事できるの？」

「できるも何も、どうやって来たのかもわからねえんだから、帰り方もわからねえだろう？」

セルアが言う事もわかる気はしたが、やはり帰らねばならないと蘭は思うのだ。

「私は帰るべきだと思う。今は姫様の代わりだからここにいられるけど、そうじゃなくなったらここで暮らしていける気もしないし」

考えないようにはしていたが、家族や友人、学校と本来自分が身を置いていた世界を思い出してみると、そこが暮らすべき場所だと思ふのだ。この世界は蘭を必要としている場所とは思えない、望まれ続けているのはウィルナの姫であり自分は間借りしているだけの存在なのだ。

とにかく帰りたいと言う蘭を見たセルアが、心配そうな表情を見せる。

「帰りたいのか？」

「……帰るべきだと思う」

「俺はランが帰りたいのかを聞いている」

帰りたいと帰るべきの違いも蘭はわかっている。だが、それをはっきりと言う事はできない。

「わたしはセルアもクロードも選べないし、この世界にいる事も選べない……んだと思う。本当に帰れるのかもわからないけど、帰れないのもはっきりしていないでしょう？」

もう帰る事はできない。蘭はここでずっと暮らすしかない。そうはっきりとわかるのなら腹も括れる気がしたが、どうにもならないのもわかっている。

この不安定な状況で何かを選ぶ事自体が無理だと思ってしまう。

「ここが嫌か？」

「嫌とかじゃない、ここにいるのだって楽しいし、アンヘリカだって楽しいよ？ 嫌な事もあったけど、そんなのどこにだってあるもの。でも、私の居場所じゃないとは思う」

ここは姫の場所であり、蘭の場所ではない。

「作ればいいだけの話だろうが」

セルアはそう言うが、作るという状況が今は頭に浮かぶような気がしなかった。

「……………」

何も言えず、蘭はただセルアを見る。心配そうに自分を見つめている瞳、そして言動は蘭の意思を尊重する為に帰りたいのかと聞いたのもじゅうぶんにわかった。

居場所を作ればいい、そう言ってくれている事もわかってはいる。その中にはセルアが自分を受け入れてくれるのだろうと感じるものもあった。

だが、どうしても思考が上手く働かない。とにかく帰らなければならぬと思うのだ。

「わたしはここにいてべきじゃないのよ。姫様がいないとウィルナは先視みがないままになってしまいうでしょ？ でも、帰ってくる兆しなんて全然ないし」

「それを知る為に俺達は足掻いてんだろうが、ランが帰る事が重要なのかもわかりはしない」

「だから、わからないんですよ？」

わたしはいられるのか帰れるの

かもわからないままで……答えなんて見えてこない。帰らなきゃって思わないと駄目なのよ!」

「その駄目だが俺にはわかんねえんだよ。このままここにいる事を考えてみるのだって構わないだろうが?」

「それじゃ何も変わらないの、帰るって思っていないと……」

帰るという目的の為に自分はここにいるのだと言いつつも、蘭はその先が見つけられない。

どうしたら良いのかわからないまま口をつぐみセルアを見つめ続けていると、ユージインの声が入り込んでくる。

「セルア、そのくらいにしてはどうです? 迷いが出る程にランがここを気に入ったと思うべきでしょう。違いますか?」

そして、その言葉に蘭はそうかと思う。

いつの間にか自分が本当に帰りたいのかも、わからなくなってしまっていたのだ。

七章・孤と個の隙に揺れる（終）

先程の感情に蘭自身が戸惑っていた。

理由もわからずこの部屋で目覚め、形ばかりではあるが姫の代理をする事になり、そのまま暮らしてしまっている。見知らぬ土地に一人で放り出されなかっただけでも、蘭の待遇は悪いものではないのだろう。

いや、良いと言った方が正しい。存在の意味があると言われ、大切に扱われている。

蘭もそれを受け入れ、時期を待てという言葉信じ今日まで過ごしてきたのだ。

普段ならとうに眠りにについている時間なのだが、どうにも眠れず蘭は一人ベッドの上に座り込んでいた。

そして目の前には赤い表紙を持つ本を置き、当てもないままゆっくりとめくる。

魂、欠片、失う、断片的な言葉が頭に浮かんでは消える様はやはり不思議だった。読んでいるという意識が全くないままに浮かび上がる単語は、確実に蘭が無関係ではないと語っているように思える。「わたしが魂の欠片」

だから読めるのだろうと思わざるを得ない上に、いくらめぐり続けてもそれ以上の言葉が浮かぶ事はなかった。

「そしてユージンと姫様が先視みを持っていて、それを手に入れる為に差し出したのが魂の一部」

その魂の一部と自分に関わりがあるのだろうかとも思うが、仕組みがわからない。どうしたら魂の欠片というものが仕上がるのか、そもそも魂とは欠く事ができるのか。疑問が重なるばかりである。

姫によって呼ばれたとは言っても、本当なのかもわからない。姫が身籠った事で蘭が呼ばれたのではないかとユージンとセルアは言ったが不確かなのだ。そうなる過程があったとしても、全く別の

ところに真実が潜んでいる可能性もあるはずだった。

何より、何故妊娠をきっかけにこの世界へ呼ばれなければならぬのかも不思議だ。

「ユージンと姫様が分かれたもの、失われた欠片はわたし……？」

だから何なのか、情報は集まっているようで肝心な事はいつもわからない。

「どうしてここにいるんだろう」

答えが出ないままの疑問は蘭の中に常にあるものだ。

来たばかりの頃に比べ、この世界の事も幾ばくかではあるが知れた。そして知り合いも増え、以前よりも心細いと思う事も少なくなっている。

しかし先程、気にしないでいようとしていた事が突然、本当に思ひもしない程急に押し寄せて来たのだ。どうしようもない不安が蘭の中には渦巻いている。

寂しさと不安で泣きなくなった事も、涙を流した事も幾度もあった。だが、今回のようにセルアやユージンの前で表に出す事は、随分前からなくなってしまっていた。初めの頃は騙されているのだと疑いながらに不安をぶつけていたが、最近では皆が答えを探しているとなっていており道を探す方に躍起になっていたのだ。

アンヘリカで契約文字を読み、蘭は自分がここに理由を知れると思った。そこから帰る為の何かが現れるのだろうかという期待を抱きながら過ぎしてきたのだ。

しかしその後に出会った契約文字は、ウィルナの姫の為のものだった。更にはユージンも読めるという事実が現れた事により、先視みの所有者へ向けた言葉なのだと嫌という程に思い知らされてしまう。

自身がいる理由や帰る方法に直接繋がる文章ならば良かったと思いつつも、これまでならば新たな道があるのだらうと強くいられるはずだった。どうしてこんなにも急に不安は蘇ってしまったのかと

蘭は一人戸惑い続けている。

二人とも驚いた事だろう。しかし、そう思っても我慢できずに言葉は溢れ出てきた。

ユージインの迷っているという表現は当たっていると蘭は思う。

ただ、自身が何に迷っているのかはわからない。

帰りたとは思っている。しかし、本当に帰らねばならないのか。半年以上もここにいると考えると向こうで蘭の扱いはどうなっているのだろうか。搜索願いを出されているのか、両親や友人達は何を思っているのか。

「もし帰れたとしても……どうなるんだろう」

異世界で過ごしていました。

それが通じるとはとも思えない。

「でも、帰れるってわかってないし、ここにずっといるのかな」

ならば、蘭はここへ定住する事について考えなくてはならないのだ。

それはあまりにも両極端な選択肢な上に、自分で選べるとはとも思えない。

そして、選ぶという言葉に改めてセルアとクロードの件を思い出す。

どうせ帰るのだからと思いつつ可能性は零じゃないという返事をしたあの時の自分は、今のように悩んだりはしなかったのではないだろうか。ウィルナへは一時的に滞在しているのであり、思い入れを抱くなどとは欠片も思っていないかった。

だからこそ深く考える必要もない程に二人の事に興味も持たずにいられたのだ。

「せめて帰れるか帰れないか、はっきりすればいいのに……？」

蘭は無意識にそう呟き驚く。

一瞬何かが脳裏に浮かんできた気がしたのだが、正体を自身で掴む事ができない。そんな感覚に戸惑いながら、手にしている本を強く握り締める。

はつきりしたならば、いったい自分は何をするのか？

どうにもまとまらない感情に蘭は頭を抱えなくなり、力なく溜息をつく。

「自分の事もわからないや」

そしてまた答えが出る事もなく、ぐるぐると回り続ける疑問を考え始める。

早く眠りたいと思うながらも今日に限って眠気は一向に訪れてはくれない、蘭はひたすらベッドの上で本を抱え過ごす事になった。

翌朝、セルアが気分転換に街へ行かないかと訪ねて来た。最近の仕事も多く外出する余裕がなかった事を考えると、わざわざその為に時間を作ったのだろう。

しかし、蘭は出かけられるような状態ではなかった。

ソファに座りながら目元に濡らした布を載せている姿に、どうしたとセルアは聞いては来たが無理やり取るような真似はしない。

布に覆われ見る事はできないが、側にセルアが歩いて来たであろう気配は感じられる。布を手で押さえたまま声がする方向へ顔だけを向けた。

「今日は無理」

簡単に答えれば、ふわりと蘭の頭に手が載せられた感触がする。

「わかった。……今日はもう来ない方がいいか？」

緩やかに撫でる仕草に心地良さを覚えながら蘭は首を横へ振る。

「夕方くらいには何とかなると思うから、その後ならいつでもいいよ」

「一人で大丈夫か？」

そして詳しい事を聞かぬまま大丈夫かとたずねてくるセルアに、蘭は小さく笑みを零す。

「うん、大丈夫。一応ユージィンにもそれまで来て欲しくないって伝えてもらえる？」

「ああ。何かある時はハンナに言えばよ？」

最後に髪を乱す程に大きく撫でると手は離され、セルアが部屋を出て行った事が扉の閉まる音でわかった。

すると蘭は今ならば大丈夫だと、瞼の上の布をそつと外す。目元の熱を吸い取り温もったそれを、ハンナが用意してくれた器の中の水に浸し硬く絞るとまた瞼に当てる。

昨夜は結局眠れず、ああでもないこうでもないと考えてばかりだった。そうしているうちに自然と涙が溢れ、流れ始めると止まらな

いそれに困りながら朝を迎えてしまったのだ。
腫れぼったい瞳のままぼんやりとベッドにいるばかりでは駄目だと朝方に着替え、水を求めて厨房へ向かいハンナに遭遇した。

泣きはらした顔を見てどうしたのかと心配をしてくれるハンナに、何だかわからないけど泣いちゃったと蘭は答えた。その曖昧な発言をどう受け取ったのかはわからないが、必要な物は運ぶとハンナに告げられてしまい部屋に逆戻りし今に至っている。

さすがにこれでは出かけようがないと、蘭は小さく息を吐いた。

何だかんだとセルアは優しい。昨日の様子を見てわざわざ外出しようと考えてくれたのだろうと思いつつ、蘭は布の冷たさを感じようとする。

そして、明日は出かけられないのかを聞いてみるのも良いと思いつき、早く瞼の腫れが引かないかともう一度布を水へ浸す事にした。

今日もウィルナは晴れた。

蘭が知る限りでは晴れ以外の天気など数える程しか見ていない。数回曇った空を眺めた事はあったが、雨に至ってはただの一度きりだった。ウィルナは術の効力で雨すらも振り落とす事を許してはならず、雨粒は透明な魔力の天井を伝い国を覆う大きな壁の外へと水を流していた。

しかし水は貴重な為に壁際から回収はされているようなのだ。や

はり見慣れぬ場所なのだと思わされた時を蘭は振り返る。

刺さる程に熱いはずの日差しも魔力に遮られ焼ける心配すらない。ウィルナの街は今日も賑わい、蘭は雑踏の中をセルアと共に進んでいた。

はぐれるのが心配だからと無理やり腕を組む格好で歩かされているが、今更氣にする必要もない。自分を必ず守ってくれるのだろうと信頼し、この時を楽しもうとしていた。

昨日再び屋敷へやって来たセルアにかけ合った結果、今朝は早くから露店巡りをする事が決まったのだ。難しいのならば諦めるとも思っていたが、蘭が夕刻まで屋敷へ入る事を拒んだ為か作業は常よりもはかどつたらしくセルアはあっさりと外出を認めてくれた。

「んー、久しぶりかも」

蘭は果物の汁を凍らせた菓子を購入し頬張る。程好く甘い薄い青の粒が口内で溶けて気持ちが良い。以前、どうやって凍らせているのかと不思議に思い聞いたのだが、姫が気まぐれに作り出した術が応用されたものだった。

満面の笑みを浮かべた蘭につられてか、隣にいるセルアも笑う。

「それ好きだよな」

「うん、一番かも」

溶けてしまう菓子の為、どうしても自ら町へ足を運ばなければ食する事ができない。その上、露店はいつも同じ位置に開かれているわけでもなく営業時間も曖昧だった。出会えるかどうかは運と言えるような状況がウィルナではあるべき姿なのだ。

昨日はいなかったのかもしれない、そう考えると今日である事に意味があったと思える。

（だからわたしはあんなに泣いたのかも）

蘭はそう考える事にし、言い表す事のできない不安に無理やりだが蓋を被せた。

考えてもわからないのなら、とにかく今を過ごすしかない。心の内で言い聞かせながら、菓子を口に運び飲み下す。

そして、それを綺麗に平らげると今度はセルアの腕を引っ張り別の店を探し始めた。

どこか空元気な気がしなくもなかったが、このままいつも通りになればいいと思える。自身の置かれている状況の終着点は誰にもわからないのであり、気を晴らす事でしか逃れられないのではと蘭はとにかく楽しみを探した。

そんな自分をセルアがどう考えているのかも気にはなったが、おそらく詳しくは聞いてこないだろうと蘭は思う。昨日も気遣ってはいくくれるものの、深く追求しようとはしなかった。こちらが言い出さない限りは踏み込んでくるつもりがないらしい。

とにかく二人で色々な店を巡る。それが今日の目的なのだ。

「あれ可愛いかも、ね？」

「そうか？」

蘭の指差した先は、日の光を浴びて輝くアクセサリーの並べられた店だった。

様々な色の金属や石を使われた小物達は、どれ一つとして同じ物がない。例え同じような姿をしていても、手作りであるそれは微妙な違いが見て取れた。

食べ物も良いが、身を飾る品を眺めるという行為だけでもじゅうぶんに楽しめると蘭は目を輝かせながらそれらを見つめる。

「俺にはどれも一緒に見えるぞ？」

しかし、隣で小物達を見下ろすセルアの表情は不思議そうだ。どうやら全く興味のない品物らしいと蘭は小さく笑う。

「見るだけでも楽しいんだよ」

そうして様々な方向へ目を走らせ好みの品を探そうとし始める。するとそこへ声がかけられた。

「なら、こんなのはどう？」

あまりに聞き慣れた声色に蘭は慌てて真横を見る。

「クロード！」

いつの間にか隣にはクロードが立っており、右手には商品が一つ

握られているらしい。

「なんでお前はそう町中で現れる？」

セルアが仏頂面を向ければ、クロードも不服そうに声を上げる。

「町を出歩いてる率で言ったら、絶対オレの方が多いと思うけど？」

そして、視線が蘭とセルアの腕へ向けられた。

「はぐれない為なんだろうけど、気に入らないな。ま、今はそれよりこれ」

そう言って蘭の目の前に差し出されたクロードの手のひらには華奢な腕輪が載せられており、蘭は指先でそっと触れ持ち上げる。次に己の手のひらに載せ、じっくりと眺めた。

極細い銀色の輪は単調な円ではなく、緩やかな楕円だ。それを幾重にも重ね、その一つ一つに淡い色の石が幾つもぶら下げられている。

光の加減により色を変える不思議な石を見た蘭は、たちまち目を輝かせた。

「凄く綺麗！」

「だよね」

薦めてくれたクロードを見れば少し得意気な笑みを浮かべ、腕輪を蘭の手のひらから取り上げてしまう。

「どうしたの？」

折角見ていたのにと残念がる蘭へ、クロードは告げる。

「前に何か買ってあげるって言ったからね、これにする」

すると、あっという間に会計を済ませ蘭の左手首にそれははめられた。

見ているだけでじゅうぶんに楽しめたのだが、自分の物になるとは思ってもいなかったそれに蘭はうっとり瞳を向ける。

「ありがとう」

そしてすぐにクロードへ礼を言うと、少し恥ずかしそうに言葉を返された。

「どういたしまして」

「んじゃ、行くぞ」

こうした様子を黙って見ていたセルアが急に腕を引いた為、蘭がそちらを振り向くと明らかに不機嫌そうな表情を浮かんでいる。

「どうしたの？」

「別に、なんでもねえよ」

大した返事もしないまま店から離れようとする姿に蘭が首を傾げていると、クロードがわざとらしく笑う。

「セルアも少しは小物にでも興味を持ったらいいんじゃないかな？」

「うるせえな、邪魔しやがって」

深く眉間を寄せたセルアを見たクロードが更に楽しげな笑い声を上げる。

蘭は二人のやりとりを目を大きく瞬かせながらも、これこそが日常だったのかもしれないと思いつく。

セルアとクロードが言い合い、今は叶わないがユージンが二人を仲裁する。時折ハンナも交えながら皆の会話は続いていくのである、蘭は其中で暮らしていたのだ。

こうして三人となった露店巡りは度々セルアとクロードがいみ合っただけだったが、それなりに楽しく蘭は久しぶりにたくさん笑う事ができた。

後はもう屋敷に帰らなくてはと帰路へ着こうとすると、普段は気にならないはずの話し声が妙に気になり蘭は振り返る。

騒がしい街の中ではいつも様々な会話が飛び交っており、それらはいちいち気にする必要もないはずだった。

だが、今はそうはいかない不穏な言葉が飛び込んで来たのだ。

ウィルナとシェラルドの間で戦いが起こる、と。

八章・孤は陰であり陽になる（一）

改めて蘭が街中の会話へ意識を巡らせると、ウィルナとシェラルドについてばかりが聞こえる事に気付く。

どうして今まで気にならなかったのかと思える程に、そこかしこで話されている内容は耳を疑うようなものだ。自身の事に手一杯過ぎたと考えつつも、隣にいるセルアを見上げた。

「今日ってずっとこうだった？」

詳しく告げずとも伝わったらしい。セルアは軽く周囲へ目を走らせた後に小声で返してくる。

「ああ。数日前からこんな調子らしいな」

ろくに外へ出ていない蘭が知らぬ事は何の不思議でもない。だが、何故こうした話が上っているのだろうかと眉は自然と潜められた。

「原因はわかり切ってるだろうか？」

確かに蘭にも思い当たる事はあった。しかし何故今更なのかと感じる部分もある。

「アンヘリカでの事だよな？」

ユージンと共にシェラルドの人物がいる建物へ入り、挙句に最後まで居座っていたのだ。アンヘリカの人々にははっきりと目撃され、中にはウィルナやシェラルドの者がいた可能性もある。ユージンはなるようになると言っていたが、それが今日の前にある状況なのだろうか。

「アンヘリカもこんな感じだよ？ まあ、ウィルナよりもずっと前からだけどね。一応その報告も兼ねて今日は来てるから」

「そうなんだ」

クロードの言葉に蘭は素直に頷く。事の発端がアンヘリカなのだから、クロードがこの状況を知っているのは当然なのかもしれない。そして噂はウィルナへと流れ始め、セルアは仕事も兼ねて街へ来たのかもしれないと蘭は考える。

「必要な事は聞いていたって思ってたいいの？」

自分は全く気付けない状態だったが、セルアは違うのだろうと蘭はもう一度見上げた。すると何故か眉が酷く寄せられる。

「ほとんどは聞いていた話と一緒に。大した収穫もねえよ。それに俺はこの為に街へ来たかったんじゃないやねえしな。ついででついで」

そうして蘭の腕を掴むと、勝手に足を進め始める。わずかに体勢を崩す事にはなったが、蘭が素直に従うとセルアは振り返りクロードへ目を向けた。

「後は帰って飯だな。そうしてりゃユージンも来る。今日はクロードも混じっとけ」

「当然だよ」

セルアがわざわざ呼び入れようとする姿から、事態はあまり好ましくないのかと蘭は不安を抱く。

二人は真剣な眼差しのまま屋敷を目指しており、本当に状況がわかっていないのはどうやら自分だけだった。

「気分転換はいかがでしたか？」

屋敷へ顔を見せたユージンがまず発したのはこれだ。

こちらの事よりも気にすべきものがあるのではないかと蘭は思ったがとりあえず頷く。

「楽しかったよ」

最後の最後に不安を覚えはしたが、確かに帰り際までは楽しんだのだから嘘ではない。

ならば良かったですねとユージンは言い、いつもの位置へ腰を下ろす。昼食後という常ならぬ時間帯にユージンが来ると、話はすでに決まっていたらしい。クロードが混じるという事態だけが予定外のまま、四人は食堂でテーブルを囲む。

テーブルの上にはハンナ手製の菓子と淹れたての茶があり、それらを口にしながら一見気軽そうな会話が続けられる。町へ出て周っ

た場所や、購入した物、食べた物、どんな事が起きたのか、普段と
なんら変わりのない内容だ。

蘭の隣にはセルアがいて、クロードもいる。両隣の二人はユー
ジンが現れる前から言い合う事もなく会話をしており、珍しい光景
ではあったが交わされる内容でどうやら今日のクロードの目的はセ
ルアとユージンだったらしいと蘭は納得した。

マルタがクロードを通してアンヘリカの状況やウィルナへ対する
姿勢を伝える。その内容を聞いたウィルナはアンヘリカへ刃を向け
る事はないと答えを出す、それが目的らしかった。

他愛もない話が続けられた後、ユージンは視線をセルアへ向け
つつ告げる。

「その様子ですと、国中に噂は流れているものの人々の生活や意識
に大きな変化はないと思って良いのでしょうか？ 城内でも似た感
想を抱いている者は多いですね」

「変わらねえとも言えるが……よくわからねえってのが本音だ」

椅子に浅く腰かけ背もたれに寄りかかっているセルアは眉間に皺
を寄せ、記憶を手繰っているように見える。ユージンはこの言葉
が予想していた内容だったのか、小さく頷いた。

「そうなるのでしょうかね」

「直接戦いに出る奴とその身内くらいじゃねえか？ 本気で気にし
てんのは。他は完全に人事だと思ってるみてえだな」

するとクロードが口を開く。

「それはオレも思ったよ。アンヘリカとウィルナじゃ噂に対する反
応が全然違う。こっちは本当に戦いが起こるのかだけじゃなく、そ
うなったらどうするかを気にしてる」

テーブルに腕を載せ体を預ける姿勢はくつろいで見えるが、クロ
ードの口調には厳しさが感じられる。

「また戦いになれば、傷つくのはアンヘリカだってわかってるから
仕方がないんだけどさ」

今度はどこか頼りない口ぶりになったクロードへセルアが軽く目

を向けたが、発された内容はユージンへあてたものだった。

「こっちは、というよりもウィルナもシェラルドも自国で戦った事がねえんだろ？」

「記録上はありませんね。両国共に目を通していますから確實ですよ。改ざんされていなければの話とも言えますが」

本来ならばありえない内容を笑みと共に告げるユージンに、セルアは首をすくめる。

「どっちの情報を持ってるのも、いいんだか悪いんだかわかんねえな」

「良いと思いませんか？ ウィルナ、アンヘリカ、シェラルド、それぞれに属する者が揃っているのは不思議だとは思いますがね。それ以上に全く別の世界から来たランもいるのです。大した事ではないでしょう？」

確かに自身がここにいる事に比べれば問題はないだろうと蘭は頷く。全てが地で繋がりが移動できる場所なのだ。

「いい機会って考え方もできるよね？ ここにいる皆の意見では戦いたい人は一人もいないんだし」

蘭の言葉を耳にしたセルアが、そりゃそうだがと呟きつつも渋い表情を浮かべユージンへと目を向けた。

「はつきりしてんのはウィルナとアンヘリカであって、シェラルドはわからねえだろ？」

するとユージンは本当にわずかだが、間を置く。

「……私の意思としてウィルナへ手出しはしないと告げていますが、実際どうなっているかはわかりません。さすがに五年以上も不在ですし心配な部分もありますね」

本当に心配しているのかどうか、不安を覚える程にユージンはにこやかな表情で言葉を紡ぐ。

そのあまりにも不確定な言葉にクロードが不満げな声を上げた。

「オレとしてはもっとはつきり言って欲しいところだよ。ユージンは一度も向こうに帰ってはいない？」

「ええ、ここへ仕官すると決めて出てからは一度も戻ってはいませんよ。ましてや今はこうしてアンヘリカでの事で噂が流れているのですし、シェラルドへ入るわけにはいかないでしょう？ 戻る予定すらありませんね」

淡々と説明をするユージインにセルアが少し鋭い眼差しを見せる。

「その割には迂闊な行動だったんじゃないかよ？」

アンヘリカでのユージインの事を言っているのだろうと蘭は納得する。確かにあのような事態を起こさなければ、現状は違っていたはずなのだ。

「私も怒る時はあるのですから仕方がないでしょう？ 確かに迂闊な行動ではありましたが、過ぎた出来事に固執せずにそれを踏まえ、次を見据えなくてはなりません」

しかし、ユージインは後悔をしてはいないらしい。全く動ずる事なく言葉を返した。

セルアは何を言っても駄目らしいと、呆れた表情を浮かべつつもぼやく。

「仕方がねえってな」

「些細な事で人を斬ってしまう弟を叱りたくなつたのですよ。……理由は何となくわかる気もしますがね」

一瞬、表情を陰らせたユージインへセルアは興味を引かれたらしい。

「どんなだ？」

だがユージインは明らかに不自然な、これでもかという程の柔らかな笑みを浮かべて見せた。

「これは家族間の問題ですのでお教えできません。当分は懲りてアンヘリカへも来ない事でしよう」

質問に答えているようでありながら、ユージインはシェラルドでの自身に関する内容は喋りたくないとはっきり拒絶する事がある。しかしながら、こちらが本当に必要としている事柄に関しては相応の内容を返してくる為、これ以上は踏み込めないと思わざるを得ない。

いのだ。

ユージンに対する内容では無理と判断したのか、セルアの質問は少し変化する。

「アンヘリカへ来ない、本当にそう思うか？」

「絶対、とはいいい切れませんが、現状ではないでしょうね」

ヘンリクという人物を見知ったユージンの答えはこうらしい。

「ならば、噂はどこが出所だと思う？」

今度の質問はユージンだけに向けたものではなかった。蘭もクロードも意見を求められ、それぞれに答える。

「わたしは噂がアンヘリカから広まったって思うけれど」

蘭が街へ行き感じられたのは、噂として徐々に広まったらしいという事だけだった。そうすると、この答えにしか行き着けないと思いを告げる。

「オレも噂として広まったとは思っている。でも、それだけじゃない……気がするってくらいかな」

それだけではないと言うクロードに、蘭は何か更に理由があるのかと視線を向けたが、少々困ったような表情を返されるだけだ。

しかし、セルアはクロードの発言が気に入ったらしく口端を上げた。

「俺は見かけた奴から流れた噂と言うよりは、シェラルドでわざと流した可能性が高いんじゃないかと思ってる」

「否定はできませんね」

ユージンが答えた事で、蘭はそれが真実である可能性が高いのかと考える。だが、詳しい意図まではわからない。

「だからって本当に戦争をするわけじゃないんでしょう？」

三人共が流れている内容を気にしているだけであり、実際に戦うという雰囲気は感じられないと思いつながら蘭は聞く。

「確かにウィルナとしてはそうした考えはありませんね」

即答したユージンへセルアが目を向ける。

「ならシェラルドはどうだ？」

「マティアスはもう存在しない者として扱えるという前提はありませんが、可能性の話で良いのでしたら、戦う意思はあると思いますよ」
マティアスを存在しない者として扱えると聞いて、蘭の脳裏に浮かんだのはアンヘリカでの出来事だった。

「アンヘリカでユージーンに会ったシェラルドの人達の反応を見る限り、存在しない者として扱うの……かな？」

そして、この疑問はセルアもクロードも納得できるものだったらしい。

「オレもユージーンは今でもマティアスだと思うけど」

「俺もそう思う」

二人が思い思いに言葉を吐き出すと、眺めていたユージーンは楽しそうに笑う。

「私もそう考えていますよ。ヘンリクに任せたとはいえ、あの場を本当に動かせるのは私だけでしょうね。それでも城内の全てが私を支持しているとは思えません。反抗したい人間も出ては来ているのでしょう。反りが合わない者もないわけではありませんしね」

笑顔で告げているが内容は物騒なものであり、蘭だけではなく他の二人も何とも言えない表情になってしまっている。

「結局、火種はあるってこったな」

そしてセルアは大きな溜息を付いた。

蘭が見聞きできる範囲では戦いが望まれていないとわかったが、実際に噂の元凶がどこにあり何を狙っているのかはわからないまま数日が過ぎた。

しかし事態はそのまま停滞もせず、シェラルドからの書状がウィルナへ届いた事で動き出す。

「書状？」

「ええ、ウィルナ宛の書状です。ウィルナ王宮にシェラルドの者が入り込んでいる為、引渡しを求めるという内容でした」

普段と変わらぬ時間に屋敷へやって来たユージンは、特別な変化も見られない表情でそう告げると手元にあった茶を口にする。

あくまでこんな出来事がありましたと報告する様子に、当事者だというのに何故こうも変わらないのかと蘭は不思議に思う。

「ユージンの名前は書いてなかったの？」

「私の名は出てはいませんね」

「あくまでウィルナの中枢を担う人物がシェラルドと繋がっているみてえだって感じになってるな。濁した表現のおかげで周りの奴らは疑い合ってる」

珍しく昼間に姿を見せずにいたセルアはユージンと共に現れ、こちらも椅子に座ると茶を飲み菓子を食べていた。

どうやら書状の件で、こちらへ来る事ができなかったようだと言は頷く。

「なら、ウィルナでその人物を探せて事？」

「探せというよりは、内容でウィルナを混乱させるのが目的とも取れるがな」

空腹なのか口へ次々と菓子を放り込む間にセルアは言葉を発する。「そうなのでしょね。とにかくウィルナには裏切り者がいる、という認識を植え付けたいといったところでしょうか。しかし、このまま放っておくわけにもいきません」

ユージンも眉を下げている様子から、さすがに困ってはいるらしい。しかし口調に惑いは感じられなかった。

「どうするつもりだ？」

セルアの問いにユージンは、軽く首を傾げて見せた。

「こちらが何の反応も示さなければ向こうが何かを言ってくる可能性はあります。ですが、その内容もある程度は想像できますしね」

「わかるの？」

シェラルドの動きを予測できているらしいユージンの考えは、蘭には想像もできない。

「はっきりとは言えませんが、当たり障りがないというよりは、直

接名指しで知らせて来る可能性は高いでしょうね」

「名指しで？」

「文章で来るとして、さすがに私だけが読むとはなりませんから色々起きそうではありますね。誰もが読める前提ならば契約文字は使えませんしね。もし私だけに向けた契約文字があったとしても知らぬ振りをすればどうともなるでしょう？ さて、何をしようとするのか」

ようやく食べる為の手を止めたセルアが眉を寄せる。

「その割には余裕そうに見えるぞ？」

するとユージインはまさかと言いたげに驚いて見せた。

「それでもありませんよ？ 私はここでの地位を手放したくはありません」

「俺だってユージインにいなくなられては困る。俺達の意見は合っているが、問題はこの状況がどうなるかだな」

シェラルドは名を上げはしないもののユージインを引き渡せと言つて来ている。しかし、ユージインもセルアもその状況を望んではないらしい。

もちろん蘭もそうだ。わずかな知識を持ち合わせているだけではあるが、姫がいないままの状況でユージインがいなくなる事は駄目だと思えるものがあつた。

「ねえ、もしユージインがそうだって分かったらどうなるの？ 向こうが伝えて来るのかもしれないでしょう？」

漠然とした不安をぶつけてみると、ユージインは自信ありげな笑みを浮かべ答える。

「大丈夫ですよ？ 確かに不審がっている者はいますがあくまで城内全員に対する疑惑であり、誰なのかがはっきりとしているわけはありません。私がしっかり仕事をこなし続けている限り、周りは違ふと思うでしょうね」

確かに現在は大丈夫なのだろうとは思ふ。だが、今ではない先がどうなるのかは不確かなのだ。

「ユージインが今の地位にいるのはすべき事をしてきたからっていうのはわかるよ。でも、人の言葉って考えている以上に怖いと思うんだよね」

シェラルドが意図して流している噂ならば、いつかはユージインを指し示す内容が伝わってくるのではないのか。そう思わずにはいられない。

蘭の不安が伝わったのかどうか、ユージインはしっかりと頷く。

「それには同意見ですね。一度事が起きればどうなるのかを想像したくはありません」

「その割には、どうしても余裕そうに見えるよ？」

先程からユージインの発言には不安の欠片も感じられなかった。

困惑した様子も見せてはいるが、そうなったならどうとでもしましようと言いそうな自信のようなものを感じてしまう。

ユージインはここでもやはり、しっかりと笑みを浮かべて見せた。

「そう見えるようにしなければ駄目なのですよ。わずかでも不穏な姿を見せれば、疑われるでしょう？ その為には平然と過ごすだけです。現に私はウィルナのユージインなのですから」

何年もこうして来たのだから真っ当するだけですよと言い切る笑顔が、ユージインとして存在している何よりの証なのだろうと蘭は思わされる。

噂だけではなく、ずっとマティアスである事を悟られない生活をユージインは送って来たのだ。今回の件はさほど気にするものではないのかと、蘭は信じてしまいそうにもなった。

「今のところユージインを疑っている奴は少数だ。ほとんどは俺が引き受けてるからな」

この内容に今度はセルアへと蘭の意識は切り換わる。

「セルアが？」

相変わらず背もたれに寄りかかってはいたが、セルアは体を起き上がらせると片腕をテーブルへと載せた。

「俺を直接知る奴はそうでもねえが、知らねえ奴らからすればうってつけだろう。戦いともなりや敵、味方も関係なしに殺す無慈悲な悪魔様だからな」

そうしてつまらなそうに頬杖を着く姿に、蘭は目を大きく見開く。「敵も味方もって、セルアは理由もなしにそんな事はしないでしょう？」

何がわかると聞かれれば難しくはあったが、セルアが敵味方も関係なしに殺すという噂に蘭は違和感を覚えずにはいられなかった。するとセルアははっきりと口端を上げる。

「嬉しい事を言ってくれるな。確かに理由もなきやそんな事はしねえ。だが、理由があったから過去にはしたとも言えるんだ」

はっきりと敵も味方も殺していると認めた発言に、蘭は何を言うべきかを考えてしまい押し黙った。セルアは気にするなと軽く告げ、続ける。

「あくまで過去の話で、必要があつてした事だ」

「……うん」

これ以上何を言うべきかが分からず蘭はとにかく頷き、そして考えた。すると程なく一つの事に行き当たる。

「そもそもセルアはウィルナから離れられないってわかってるんじゃないの？ 姫様の側にいなければ魔力をどうする事もできないでしょう？」

姫の側にいなければ生きてはいけない術を体に施されているのだ。最も条件から外れるべきではないだろうか。

それはそうだがとセルアは口にしつつも、表情を曇らせた。

「俺は今、そのウィルナを離れられない理由からも逸脱しちゃってる。それも不自然に思われる要因だな。周りは本当の事をわかってやいねえし、近頃大人の姿でうろついているのは何かをする前触れじゃねえのか？ って考えるわけだ」

はっきりとセルアの容姿が変わる理由を知っている人間も極少数の為、詳しい事情を知らない者の間では好き勝手に言われるという

説明に蘭はただ頷くほかない。

「じゃあ、今はセルアが疑われてるって事にしても、直接何かを言われたりされたりとかはないの？」

「今のところそれはねえな。あくまで俺が一番疑わしいってだけだからな。何よりも俺相手にそんな事をしようとする奴なんていねえよ。気に触ったら殺されるとでも思ってるだろうしな」

城内でのセルアの風評も気にはなったが今はそこに触れている状況ではないと思えた蘭は、先程と同じく言葉に詰まってしまう。

すると、ユージンがゆっくりと口を開いた。

「セルアには申しわけありませんが、私はこの状況にしばらく甘えさせていただくつもりですよ。貴方がそのような事をしないのはじゅうぶんにわかってはいますがね」

「俺もそれで構わねえ。だが、向こうがユージンを名指ししてくるまでの間だとわかりきってる。その前にどうするか、もしくはそうなるからどうするかだな」

特に申しわけないとも思っていない様子のユージンと当たり前のように受け入れたセルアを見た蘭は、二人の中ではすでに何かが決まっているのではないかと思う。

それ程までに二人はしっかりとした表情で会話を続けているのだ。「いつかは表に出さなければならぬとわかってはいますが、今ではないでしょう。まあ、こちらからも何かしらの手を打つ必要があるとは言えますね」

「その手は？」

さすがにこればかりはすぐに案が出なかったらしく、ユージンはたっぷりと時間をかけてからセルアの問いに答える。

「前例はありませんが、ウィルナ、シエラルド、アンヘリカの三者が揃う機会でも設ける事にしましょうか」

この意見に対するセルアの表情は驚きを通り越して呆れてしまったような、大口を開けたものだ。

「頭の固い連中がそれを許すと思うか？」

疑わしげにセルアが言えば、ユージンはやはり笑顔で答える。

「許す許さないではなく、従っていただくほかはありませんね」

そうして見せる表情は、ユージンではなくマティアスなのではないかと蘭は思っていた。

八章・孤は陰であり陽になる（二）

勢い良く扉が開かれたかと思うと、セルアはソファの上に倒れこむように寝転がる。

「疲れた……もう寝させろってんだ」

部屋の中を歩いていた蘭は、突然の事に驚いて振り向きはしたが入って来た人物を認めると苦笑した。ただただ室内を練り歩くという一見無意味な行動をしている自分にもはつきりと理由があった為、恥ずかしがる必要もない。

先日のユージインの発言以降、二人はウィルナ、アンヘリカ、シエラルドの代表者を集める場を作ろうと奔走している。

主だった行動はユージインがしていたが、城内で手伝う事ができるのはセルアだけだ。結局は二人で手分けして動くほかはなく、こうして疲れたと言いつつセルアは休憩にやって来る。

「お疲れさま、これ食べる？」

蘭は突っ伏しているセルアの側で屈むと、テーブル上の容器を手にし中身の菓子を差し出す。

「ああ、食う」

特にこちらへ視線を向けるでもなく差し出された手のひらへ菓子を一つ載せてやると、セルアは仰向けに体を動かし口元へ運ぶ。

「今日ハンナと一緒に作ったんだよ。セルアこれ好きでしょ？」

木の実が入った焼き菓子をセルアが好んで食べていたのを思い出し、蘭は午前中に作っていた。

「んー、そうだな。作り方覚えたのか？」

そう言う蘭の手から器を取り、セルアは寝転がったまま菓子を食べ始める。

「うん、セルアとユージインが好きそうなのを一つずつ。わたしはここにしかいないから、なかなか手伝えないしね」

テーブルの上にはもう一つ容器があり、そちらには甘さをかなり

控えた焼き菓子が入っていた。セルアは甘い物をよく好むがユージン
は逆の為、別々に準備をする事にしたのだ。

疲れている割には機嫌の良さそうな表情を一気に曇らせたセルア
が、つまらなそうに言う。

「なんだ、ユージンの分もあんのか」

「二人共頑張ってるんだから、そうなるでしょ？」

何も言わぬまま口と手を動かすセルアを見た蘭は立ち上がり、一
旦部屋を出て茶の支度をする為に厨房へ向かう。

ここ数日、日を追う毎にセルアの機嫌は悪くなっているように思
えた。部屋にやって来てすぐに不機嫌さが見て取れる時であれば、
先程のように些細な事で表情を変えたりもする。

忙しいせいもあるのだろうが、それ以上に城内での噂に疲れてい
るらしかった。

城内にシェラルドの人間がいると記した書状がもたらされ、セル
アは納得した上で矢面に立っている。しかしあまりに疲弊して見え
る姿は、実情を知らない蘭ですら不安を抱く。

ユージンはこの状況を利用すると言いセルアも同意をしている
が、三者を揃えようとする動きは明らかに不自然であり疑われるも
のだった。

共に行動をしているユージンも疑われるべきではあるのだが、
そこはどうしてもセルアが目を引いてしまうらしい。

俺は言われ慣れている、そう告げつつもはつきりと疲労の色を見
せるセルアを蘭はどうにかしたいと考えてはいたが、なかなか名案
が浮かぶ事もなくいた。

「わたしにできる事って何だろう……な」

そう思いながらも何もしないよりはと考え、菓子を作りこうして
茶を入れる。

「どうしたんです？」

湯が沸くのを待っている間に、無意識に蘭が呟いた言葉へハンナ
が反応した。

厨房にはいつも通りにハンナがおり、夕飯の為の支度をしている。その一角を使わせてもらっていた事をすっかり失念していたと思いつつ、蘭は笑みを浮かべた。

「ただここにいるだけだから、何かしてあげたいなと思って、セルアにもユージンにも」

ハンナは詳しい事情を知らぬままに蘭を受け入れてくれている。本当に何かの理由があって姫の代わりに暮らしていると信じて接してくれているのだ。

状況を見守るばかりで自分にできる事が少ないのが嫌でたまらなく感じるのだが、できないものはできないと思えるのも確かである。蘭は時折、そのどうする事もできない現状に不安を覚えてしまう。まったく周りに意見が許されないわけでもなくセルアやユージンにも訴えてはいるが、無意識に独り言として不安をこぼす瞬間があった。

「ランはラン様に望まれてここにいますんでしょ？ もうじゅうぶんに役目を果たしていると思うわよ。セルアもユージンもあなたという事を随分と楽しんでいるようにも見えますし、そのままでも構わないんじゃないかしら？」

するとハンナはこう言ってくれるのだ。ハンナは姫が望んで蘭をここへ置いていると思っている。実際は姫が自分の意思でこの状況を招いたのかどうかもわからないのだが、全ては彼女の思惑だと信じているらしかった。

ふっくらとした面に浮かべる笑みは優しく、蘭にとってはこの世界での母とも思える人だ。確かに自分の役目を果たしているのかもしれないと蘭は思い、結局は沈んでいても仕方がないといつも気付かされる。

「そうだよ。わたしは必要があってここにいますんだもの。できる事をするね」

蘭はそう言うと言った湯を茶葉が入ったティーポットへ注ぎ始め、ハンナは気をつけてと言葉を続けた。

「ラン様は自身の考えをあまり表に出す方ではありません。おそらくユージンもセルアもはっきりとした理由を知らないのでしょうか？　だからランが不安になるのも仕方がない事なのよ。それでも決して、悪い方向へ物事を進めるようなお方ではありませんからね。きつと良い結果と共に戻って来られますよ」

戻ってくるという発言に、ハンナはどこまで状況を把握しているのかと蘭は思ってしまう。随分と長い期間、もうすぐ一年とでも言えそうな程に屋敷の主は姿を隠したままなのだ。

姫を信じ切っているらしいハンナを蘭が見つめると、どうしたのかと笑い声を立てられる。

「ここではラン様の力を信じなければ暮らしてはいけないのですよ。大丈夫に決まっているでしょう？」

先視みの力は絶対であり信仰されているとは思っていたが、こうもはっきりと疑いもせずに言われてしまうと蘭は戸惑いを覚えた。

（本当に姫様は戻って来るの？）

しかしこの疑問は口にして良いものではなく、こうしたハンナの姿を見ていると自分も信じなくてはならないと思わされる部分も、わずかながらにはあるのだ。

「そうだよね」

蘭は不安を隠すように返事をし、支度の整ったトレイを手にする。とセルアの元へと戻った。

「遅かったな」

いまだにソファに寝そべったままのセルアは、ちらりとこちらへ視線を寄こす。だるそうな雰囲気はあるがどうやら眠いわけではないらしいと、蘭はテーブルの上へカップを置き茶を注ぎながらに言う。

「お湯を沸かして来たんだから、このくらいはかかるでしょ？」

「ま、そりゃそうだ。そういやランはどんな感じなんだ？」

さすがに寝ながら茶は無理だとセルアは体を起こし、蘭が部屋の中を歩いていた内容に触れる。

「んー、どうなんだろう。前よりはよくなってるとは思うけど……どっちかと言えば喋り方をどうにかしないといけないのかな？」

これから先、蘭がこのまま表に出ずにいられるかははっきりしていない。極力そうした事態を避けたいとは思っているが、その域を超えてしまった時、何もできないままでは困るのだ。

ウィルナの姫ランとして振舞えるようになる。それが蘭の今すべき事だった。

とにかく何気ない動きを姫らしくする事を目指し、先程は歩き方を考えていたところだったのだ。

蘭が差し出したティーカップを受け取ったセルアは、一口飲みこちらを見つめた。

「なら俺の前でもそうして喋ってみたらどうだ？　少しなら付き合ってやる」

「そうした方がいいかな？　ユージンという時だけじゃ足りない気もしてたし」

ユージンが来ると全ての時間ではないが、姫らしい口調で過ごすようにはしていた。まるきり同じは無理としても、極力近づける為に細かな指導をユージンはつけてくれている。しかしそれもわずかなものであり、増やせるものなら増やしたいところではあった。

「なら隣に來い」

こちらの返事を聞いたセルアは片手でソファの座面を叩いて見せるが、それは特に姫とは関わりのない事だ。

「別に今日だからってわけじゃないでしょ？」

正面のソファを選んだ時点でいつ言われるかと思っではいたが、普段通りに側へ呼ぶセルアに蘭は笑ってしまう。

「まあ、それはそうだが俺もそう頻繁には来れねえんだ。魔力を溜めるのは避けたいんだよ」

否定する事なくセルアも笑って告げ、こうしている事で少しでも休めるのならばそれも良いのだろうと蘭は頷く。

「わかってる」

これから練習する事が本当に使う時は来るのだろうかと思いなながらも、蘭はセルアの隣へと席を移した。

「必要があるのならばわたしはアンヘリカへ出向くつもりです。国中に再び戦が始まるという噂が流れ、民が不安に感じている事は明らか。わたしが出向く事でアンヘリカとの仲はわずかながらでも進展しました。ならばシェラルドとて同じ事、直接向こうの者と会うというのも悪くはないでしょう？」

城内の一室、九人がテーブルを囲み意見をぶつけ合っていた。

蘭はその中でも最も重要な、国の代表を兼ねる姫として参加している。背筋を伸ばし、自信に満ちた表情に見えるように笑みを浮かべ、散々練習を繰り返した言葉達を必死に組み立て、この場に合っているであろう台詞を紡ぎ出す。

蘭、ユージン、セルアを除く人物は男が四人と女が二人。年齢は二十代から五十代程と決して統一されている様子はなかった。

ユージンを見ているとわかるように、この国では力があるのならばすぐにでも要職に就く事ができる。ここに居る人々は確実に姫に認められ、その地位に就いた者だと蘭は傍目にはしっかりとした瞳で見据えていた。

その中の一人、最も年齢の高いであろうがっしりとした体躯に立派な髭を蓄えた男が先程から主に意見を述べる。

名はサイラスと言い、城内でも特に重要な位置に就いているらしかった。セルアやユージンの会話にもよく出される人物であり、蘭はようやく自身の中で形を成した男の言葉へ耳を傾ける。

「しかしラン様、あまりにも危険ではありませんか？ アンヘリカとシェラルドでは持っている力も違います。万が一という事も考えられるのですぞ」

それは当然の内容であり、蘭はこういった際の台詞を必死に考え始める。

姫は頭の回転の速い人ではあるが、決して急いて意見をする事はないらしい。たつぷりと時間を置いて答えた方が、本物らしく見えるとユージンとセルアも言っていた。

この場に正体を知る二人が在席してはいるが、今は姫として話さねばならないのだ。蘭は決して助けを求める事はできなかった。

誰よりも国を思い、己の力を信じ、自ら動く事をいとわない。そして思った事は自信たつぷりに言い放つ。

教えられたものをまとめた結果、蘭の中ででき上がった姫の人物像はこれである。

「そなたはわたしの力を信じぬと言うのか？ ユージンにもセルアにも悪い未来は見えない。それに従い進む事でウィルナは更なる平和を得る」

おそらくこんな感じだろうと蘭が喋れば、男はそれもわかつてはおりますがと言葉を返して来た。

どうやら大丈夫らしいと蘭には自然と笑みが生まれ、周りはずかではあるが萎縮した様子を見せる。

すると今まで何も言わずに見守っていたセルアが口を開いた。

「俺がランを守るのなら問題ねえだろう？」

皆が姿勢を正し着席している中で、セルアだけが普段と変わらぬ砕けた様子で背もたれに寄りかかり乱暴な口調を見せている。この異質さはわざとなのか、それとも普段からなのかが蘭には判断がつかない。

「セルアが……ですか」

サイラスとは別の男が呟き、数人が何かを理解したように頷く。セルアもユージンも何も言わずに座る姿から、蘭は自身が何かを告げねばならないらしいと更に頭を悩ませつつも言葉を発する。

「セルアは全てをこの国へ預ける存在、わたしの兄のような者だ。それをそなたはどう考えている？ はっきりと言って構わないのだか？」

少々棘のある言い方をしてみると、男は慌てて口を開いた。

「いえ……それはわかっておりますが、やはり不安を拭い切れないのです。確かにセルアは国一番の使い手であり、今は魔力も抑えてはいない。それでもラン様に危機が及ばないとは言い切れないではありませんか」

姫はセルアを本当に兄だと思い接していたという。そして、城内での立場等を色々と気につけ、ウィルナへと仕え続けようとセルア自身に思わせる程の人物だったらしい。

ならばセルアを疑うような内容は否定すべきだと、蘭は思ったのだ。

すると今度はユージインが言葉を挟む。

「デールの言う事も間違っではないませんよ、ラン様？ この度のアンヘリカ行きは以前とは大きく違います。停戦しているとはいえシエルルドはあくまで敵、貴女が危険にさらされる可能性は間違いなく高まるのですよ」

笑みを浮かべ穏やかに喋るユージインを見る限り、これまでの流れは悪くないのだろうと思える。このまま目指すべき所へ辿り着けるのが、自身にかかっているのだ。さりげなく男の名も説明され、蘭は忘れてはならないと心に止めながら道を探す。

蘭は不安や表現しきれない圧力に押しつぶされそうだと思いつつも、次にユージインへの答えを組み立てる。

「わたしが命を奪われる？ セルアがいて本当にそのような事態になると思える？ ならば更に守る為に兵をつければ良い。わたしが選んだ者達は皆、ウィルナに良い未来を与える。それと共にシエルルドと対峙するだけです」

先視みの力は絶対であり、姫が保有している限りウィルナを導く事ができる。ハンナが信じているように自分も信じなければならないと、蘭ははっきりと言い切って見せた。

するとユージインの瞳が鋭く見据え返してくる。

「それはつまり」

戦うのかと聞かれていると蘭は理解する。そうなった場合の答え

は準備されている為、大きく悩む必要はなかった。

「戦うのではなく身を守る為。わたしは戦がしたいわけではない。民が平和に暮らせればそれで構わないのです。アンヘリカとて同じ事、彼らも傷つけられる事なく生活すべき、全てを得る為には一度シェラルドと向き合う必要があるでしょう」

姫はあくまで戦いを回避する為に動こうとしている。決して戦争を呼び起こしたいわけではなく、平和を求めるが故の意見だと知らしめる必要があった。

この言葉にはサイラスもしっかりと頷き、本当に戦いを望む者はそうはおりませんと言う。

「王は病に伏せられ話す事もままなりません、いまだ国の長の地位は持つておられる。ならばラン様と同じ立場として向こうが出すに値する人物は誰になるのか」

おそらくではあるが戦わない意思をはっきりと提示しセルアと兵が守ると言えば、不可能ではないと予測していたユージンの考えが当たった瞬間だった。

まだアンヘリカへ向かって良いと口にはしないが、考えなくもないというだけで話はじゅうぶんに進展している。

「ウィルナの王は父。シェラルドは第一王子が位は継がぬままも資格を持つているはず、ならば次の地位にいるヘンリクを名指すのが当然でしょう」

「第二王子ですか……あまり良い噂は耳にしませぬが」

蘭がヘンリクの名を出すと、室内にいる誰もが表情を曇らせた。

実際に本人を目にしている蘭としても同意したいところではあったが、姫の立場では許されもしない。

あくまで彼は姫と同等の地位の者として現れなくてはならないのだ。

「そうであっても、同等の条件を出さなければ話が通らないのは目に見えています。わたしがアンヘリカへ向かうのなら、シェラルドはヘンリクを出すべきとなるでしょう。第一王子のマティアスで

も構わないのですが、おそらく無理というもの」

表面上はマティアスを呼びたいと言いつつも、本人が出て来れない事はわかってる。何としてもヘンリックでまとめ上げなくてはと蘭は言葉を選ぶ。

「しかし、ラン様も我が国ではもう長のような存在なのですか？

確かに父王はご健在ではありますが、シェラルドとは随分と条件が違ってきます」

確かにそうだ。決して同等とは言えない。周囲も口々に意見をする姿に、蘭はこれ以上何を言うべきかとわずかにだが眉を潜める。するとユージンが口を開き、サイラスはそちらへ顔を向けた。

「ウィルナはラン様を失えば立ち行かず、シェラルドはヘンリックを失ったところで痛手ではないという事ですか」

「はつきりと申すならばそうです。そして、今回事の発端はシェラルドにあるのですぞ？ 向こうはラン様をアンヘリカへ誘い出そうとしているではありませんか？ それでは敵の思惑通りになってしまいます」

そこへ、そもそも本当にシェラルドの人間が城内にいるのかと疑問の声が上がる。

王宮に仕える為にははっきりとした身元が必要とされており、この国において所在が不明な者は存在しないはずだった。

それが当たり前であり、疑う必要もなくこの国の者達は暮らして来たのだらうと蘭は考える。実際はユージンとして最初から存在した者は失われ、その名を隠れ蓑として入り込んだシェラルドの王子が今この場の中心にいるのだ。

決して万全とは言えなかった。

もし、真実をこの場で知る事ができたなら、人々はどんな反応を示すのだろうか。信じられないと言うのか、それともユージンが裏切り者かと納得した上で何かが起きるのか。

進んでいるようで問題を多くはらんだ話はまだまだ続きそうであり、蘭はとにかく必死に姫であり続けようと努めた。

八章・孤は陰であり陽になる（終）

穏やかで気持ちの良い風が吹き、髪をわずかになびかせる。

長い話し合いも終わりようやく姫としての役割に一息入れられると、蘭は国を眺める為に設えられた塔の窓枠に腕を載せ視線を町へと向けた。

すぐに屋敷へ戻っても構わなかったのだが、どうしてもこの場所へ来たいと思い自ら申し出て登って来たのだ。

「ここなら普通に喋ってもいいよね？　これ以上はもう無理」

ただ姿形を真似るのではなく、今回は本人として考え意見を述べた。これまで使った覚えがない程に頭を酷使した疲れは相当なものであり、蘭は大きく息を吸い込み気持ちの切り替えを図る。

「構いませんよ。しかしここで良いのですか？」

隣にいるユージンは不思議そうな表情を浮かべており、蘭は手を組み腕を前へ伸ばしつつも笑って見せた。

「いいの、わたしもここが好きだし、姫様が大切な話をした後に国を思っって町を見えるというのも良いでしょう？」

「やっぱり、どこか似てんだな」

離れた位置に座るセルアの声に蘭は思わず振り返る。

「似てるって？」

「あいつにだ」

セルアが言うあいつとは姫を指しているのだろうとは思ったが、どこがどう似ているのかと首を傾げたくなる。おそらくではあるがセルアは見た目以外に対して告げたのだろう。

セルアは蘭が不思議がっているのを理解しているだろうにも面倒そうな表情を浮かべるだけであり、それでは説明不足でしょう？とユージンが続きを述べる。

「姫は重要な出来事の後には必ずこの塔へ登られるのですよ。それを知らずとも実行したランに驚き、やはり似ていると思ったのは私も

同じですよ」

知らぬまま本人と同じ行動を取っていた事に驚きつつも、姫を演じ切らねばならないと思っていた蘭は言う。

「それなら最初から言ってくれば良かったのに、この方がより本物らしく見えるでしょ？」

常に塔に登るという習慣を持っていたのなら、蘭も同じくここへ来るべきなのだ。それは周りへ蘭が姫である事への違和感を覚えさせないという効果をもたらしてくれる可能性が高い。

「考えなくはなかったのですが、先程の会話でじゅうぶんに疲れると思っていたので言うべきかを迷っていたのですよ」

ユージンが告げるように自分ではない誰かを演じるという事は難しく、相当疲弊するものだった。今も立ってはいるが、壁に寄りかかり蘭はなるべく楽をしようとしている。

この後は再び城内を通り屋敷へと帰るのだ。その為にはわずかにでも疲れを取り、再び姫になりきりたかった。

どうやらユージンは、蘭がすぐに屋敷へ戻るべきか塔へ向かうべきかをその場で決めるつもりだったらしい。しかし蘭は思惑よりも先に塔へ登りたいと言い、そのままここへ向かって来た。

「正直驚きました。こちらが思っている以上に蘭は姫として行動する事を理解している、と言うよりはやはり何かが近いのでしょうか？」

感心するような仕草を見せたユージンではあるが、その後首を軽く傾げた様子から不思議にも思っているようだ。

そんなユージンを見つめていたセルアはあぐらをかいたまま、自身の髪をかき上げ溜め息を零す。

「あんまり似てくるのも考えものだ」

「つい頼りたくなってしまいですからね」

「ああ、代役も便利だが頼り切るのも不安だからな。それにしてもよくやり切った。たまに心配にはなったが、あれならじゅうぶんに通用しただろう？」

セルアがユージンへ視線を向けると、しっかりと頷かれる。

「ええ、見事に演じていただきました。本人より少し優しげな感じもしましたが、姫はああしたお方です」

結構厳しくしたつもりだったと蘭は考えながらも、本当の姫とはどんな人物なのかと考えた。

しかし答えが出るはずもなく、蘭は今回姫として発言した事で城内にどんな影響を及ぼすのかを意識してしまう。そうなると行き着くのはあくまで自身は偽者だという点になる。

「このままわたしが姫様をしてもいつかは限界が来ると思うよ？ 今日にはたまたまうまく行ったと考えるべきではない？」

背を壁に当てたままずると蘭はしゃがみ込み、隣にいるユージンと斜め向かいにいるセルアに告げた。

三者を揃える為にはユージンとセルアだけではどうにもならない。姫自らが望み、それを実行すると言わねば無理だと城へ入った。しかし、一度表に立ってしまうとそのまま続ける必要性があるのではないのか？ 現にアンヘリカへ向かうと口にした時点で、蘭は参加すると示してしまっている。

これが演劇ならば良いのにと蘭は思う。筋書きがありしっかりと終わりのあるものならば、そこを目指してひたすら演じて行けばいいのだ。だが、今は明確な終わりが見えない。

むしろ姫という役割がはっきりと始まってしまったとさえ思えてしまう。

「ランが言う事も最もだ。今まではあいつが存在すると見せかけるだけでもじゅうぶんにやって来れただろう？ この件でそれは大きく変わる」

セルアは立ち上がると蘭の側へ来て再び座り込み、片手で髪に触れた。

「さっきの働きでも負担をかけ過ぎているとは思わねえか？ このままではランもこの件の中心からは逃げられねえ」

「それは私もわかってはいます」

ユージインは笑み潜め真剣な眼差しでこちらを見つめ返して来る。
「今日までランの姿は見せるだけに留め、どうにか誤魔化して来ました。しかし、今回の件に限らずシェラルドがこちらへ意思表示をして来た場合、ランにはどうしても姫として表に出てもらわざるを得ません。その時を迎える前に、こちらから手を出すほかはないのですよ」

「あいつはこの国の事実上の長だ。戦っていないとはいえ安定もしていない現状で本人がいないと公表するわけにもいかねえ……それがわかっていてもランに負担をかけるのが嫌なんだよ。本当にシェラルドの奴らの前に出すつもりか？」

きつい物言いになったセルアへ、ユージインははっきりと言葉を返す。

「ただ身代わりとして、容姿が似ているだけでは済まないところへ行き着いてしまったのです。ランに頼らずにできる事なら私もそれを選びたい。ですが、もう限界なのです。もし本当に三者が揃うとなった時、ヘンリクが来たならば私の名を出す事でしょう。事態は大きく変わります」

「それを回避するにはランが必要だと言うのか？ ユージインは一体何を考えてるんだ？ 俺がお前を信用して手を貸しているのはわかってんだろうな」

視線をぶつけ合う二人はそのまま何も言わず、長い沈黙が訪れた。セルアは言葉を待ち、ユージインは目を閉じおそらくではあるが何かを考えている。

セルアは蘭がこれから先も姫の代役を続けなくてはならない事に異論を唱え、ユージインもわかってはいるが譲れないと言う。どちらも間違っていないのだろうと蘭も頷けた。

自分がこのまま姫を演じ続ける事自体にも大きな不安はある。しかし現在はユージインがマティアスであるという事実が露呈するかどうかの瀬戸際なのだ。うまく回避する為には姫の存在が必要であり、蘭は身分を偽らざるを得ない。

「今、姫様がいたらどうしたんだろう……？」

あくまで足りないのはウィルナの姫であり、それが揃えば先は見えるのだろうか。蘭は呟く。するとセルアは端的に告げた。

「この状況であいつが帰って来たなら、同じ結果を出すだろうな」

「アンヘリカでシェラルドと会おうとするの？」

いまだに髪に触れていたセルアの手を蘭は掴み、降ろさせながら見上げる。

「あいつはそういう奴だ。この機会を逃すはずがねえ。両国間を良くする為に率先して動き出す」

「なら、わたしは姫様をするしかないよ。たぶんだけどこれをしなければいけないと思うの。わたしがここへ来たから今があるんでしょう？　姫様がずっとウィルナにいたままではヘンリク王子に会う事もなかったし、そもそもアンヘリカへは向かっていないもの。これはわたしがいたからこそその出来事なんだよ」

これまで何度も蘭がいたからこそ動いた事態があった。その全てを通した結果が現状であり、自分は当事者だと思うしかないのだと蘭はセルアを見つめる。

「ランがいたから俺もこの姿でいられる、何かが動いているのも分かっている。けどな……」

どうしても蘭が姫役をする事にセルアは納得し切れならしい。表情は苦々しく、口調も珍しくはつきりとしめない。

「今こそあいつに帰って来て欲しい時だ。もし悪い結果を迎えたならば、俺達は戦う事になるかもしれないねえ。……あいつがいない中でそれだけは避けたいんだ。そして、ランをその中へ巻き込みたくはねえ」

ウィルナとシェラルドが戦うという噂が本当になる可能性は相当高いのだろう。こうして戦わない事についてばかりを語ってはいるが、これまでこの世界で暮らして来た人々が抱く感情は蘭とは違っているのかもしれない。想像以上の重みを持った何かがあるのかと思わされる。

セルアが知っている現実を自分は知らない。だが、蘭はそれでも思いを強くするほかはないと心に決める。

「わたしは必要があつてここにいるはずなんだから、これは無駄な事ではないと思う。魂の欠片であるわたしにできる事があるから、だからここにいると思わなきゃいけないんだと思うの」

触れている手を更に力強く握るとセルアはじつとこちらを見つめ、一つ溜め息を零す。

「ランはそれで本当にいいのか？ 危険な目に会う可能性は高いぞ」不安は確かにあるが、今は飲まれている場合ではない。酷くおぼろげなものの、これがすべき事だと訴える感情があるのだ。蘭は自信を持って頷いてみせる。

「今までだって全部どうにかなって来たもの、大丈夫だよ」

「説得力のねえ言葉だな。どうにかなったとしても、どれも俺としては心臓に悪かったがな」

納得したのかはわからないまま、セルアはそう告げるとようやくの笑みを浮かべた。

先程から黙り込んだままのユージインは眉を潜め何かを考えていたらしいが、突然何かに思い至ったように頷く。

「やはり、ランの言葉と私の先視みを信じて動く以外はないようですね」

「わたしの言葉と先視み？」

急に発された内容がどう繋がるのかが分からず、蘭は思わず聞き返した。

ユージインは神妙であつた面持ちをすっかりいつも通りの笑みへと変え、珍しく床へ座り込んだ。

こうしてユージインが地べたに腰を下ろす姿を見せるのは意外なものであり、蘭だけではなくセルアも窺うような素振りを見せた。

「どうしたんだ？」

「蘭の言葉を聞いて思うところがあつたのですよ。これから私はユージインだけではなく、本当にマティアスでもある事にもしましよ

う」

晴れやかな表情と共に紡がれた言葉は奇妙なものであり、蘭もセルアもいぶかしげにユージインを見つめる。

「私はこれまでウィルナにいるからにはユージインであり続けようと思っていました。それはおそらく間違いではなかったでしょう。それを成さなければ現在の地位に就く事はありませんでした。しかし、今はそれにこだわっている場合ではありません。ユージインとしてウィルナでの仕事をこなしながらも、マティアスとして先視みの力を使う。それが今、私のすべき事なのでしょう」

ユージインの言う事がわからない蘭は大きく首を傾げた。
「それって今までと一緒じゃないの？」

「俺にも違いはわからねえな」

どうやらセルアも理解できないらしい。蘭がセルアへ視線を向けると、眉根を寄せてユージインを見つめている。

こちらの様子を見たユージインは小さく笑い、話し始めた。

「私が初めに目指したのはウィルナ王宮の掌握でした。王を床に伏してしまえばこの国は立ち行かなくなると本気で考えていたのですよ。それを期にユージインとしてウィルナを手にしてしまえば良い。簡単な考えでしょう？ その時の私はユージインの振りをしているマティアスでした。」

しかし、それはあくまでその時の考えであり、今は違います。私は姫と出会いその力を目の当たりにする事と共に、彼女自身にも惹かれユージインでいる事を選びました。この時点で私はマティアスとして思い描いていた予定を失い、一人の従者になってしまったのです。

そしてそのまま姫に仕えて来た私は先視みの力も極力使わず、あの方がされる事に従っていた。姫はおそらくですが先視みの本質を見抜き何かを成そうとしていた。しかしそれはあくまで分かれている力の片割れ。同じように先視みを持つ私も何かを成さねばならぬと考えるべきでしょう。欠片を持っているであろうランが役目を負

っているのなら、私も同じ事です。役目の為には迷いを捨てなくてはなりません」

蘭は内容を必死に理解しようと努めたが、どうやらユージインの中で何かが大きく変わったらしいというぼんやりとした結果に辿り着く事しかできなかった。

「俺はウィルナに仕えているユージインを信じて手伝っているんだが、そこはどう考えるべきだ？」

セルアは何かを理解したのだろうか。そう言ってユージインをしつかりと見据える。

「信じていただいて構いませんよ。私はユージインである事を捨てはしないのですから」

ユージインが告げると、セルアは大きく髪をかき上げもう何度目にもなる溜息を吐く。

「ウィルナの為に働くユージインだけではなく、シェラルドの事も思うマティアスもいるって事か」

「理解が早くて助かりますね。私はどちらか一方ではなく両国共、アンヘリカすらも変える結果を望んでいます」

ただ笑みを浮かべるだけではなく、今までになく強い意志を見せたユージインの瞳はしっかりとこちらを見て訴える。それを受けたセルアは何故か口端を上げた。

「それはあいつだって同じ事だろう」

「ええ、姫も戦いをなくしたいと願っておられた。アンヘリカも戦いに巻き込まれる事を望んではない。私も戦を疎んで止めた立場です。三者が揃わずとも、答えは出ているのですよ」

「だが、それを果たすのが難しいんだろうが」

「それでも成すしかないのでしょうか。このまま話がまとまりアンヘリカにウィルナとシェラルドが揃うと仮定します。そうなれば確実に私がマティアスだと露呈されます」

「それでは困るんじゃないの？」

ユージインはウィルナでの地位を失いたくはないと言っていた。

それはマティアスである事が伏せられていなければ成立しない。

「ええ、困ると思っていました。しかし、今はもうこだわっている場合ではないのでしょうか。私の正体は晒される。それを踏まえた上で先を見るべきなのです。」

私の正体を隠し通すつもりなら最初から書状など送り付けては来ないはず……おそらくヘンリクは私を疑っています。シェラルドよりもウィルナを選んだと思っている可能性が高い。それは私が早期に結果を出さなかったというよりは、当初の目的から大きく逸れた行動を取り自身で招いた事です。その為にも私はユージンとしてアンヘリカへ向かい、そこでマティアスとなりましょう」

つまりはユージンの立場を捨てるというのだろうか。今までの話を聞く限りではそのような考えはないように思える。しかし、マティアスであると示してしまうのならば両立は不可能なはずなのだ。「マティアスになる？」

疑問を口に出してしまった蘭を見つめるユージンはそうですと頷く。するとセルアが声を荒げた。

「ユージンはどうなる」

「捨てはしません、例えば私がマティアスになったとしても、ユージンであった過去が消えるわけではありませんからね。私達が考えられている中ではおそらくですが姫は身籠っているでしょう？ ならばそれはウィルナとシェラルドの子。無理やりにも両国を繋ぐきっかけにすべきです」

「だが、今いるのはランダ。あいつじゃねえ」

これには蘭も大きく頷いた。姫本人がいて子がいると証明できなければ成り立つはずがない。

「わかっています。姫が帰るのを待ち結果を得るべきだと思っていましたが、その時期もわかりません。しかし、動かぬわけにもいかないのです」

ユージンも無理を言っている自覚はあるらしい。その上でどうまとめるつもりなのか蘭には想像する事もできなかった。

「わたしが姫様を演じるにしても、さすがに子供だけはどうにもできないよ？」

「ええ、だからまず私と姫が婚約する形にでも話を持って行きましょう。手順としてはこちらが正しいのですからね」

戸惑いを感じる蘭へユージンは事もなげに伝え、セルアは疑わしげに言う。

「持って行くってシェラルド相手にか？」

「私にとってはあちらも身内、上手く丸め込める可能性もなくはありません」

するとセルアは何も言わずにユージンに視線を走らせた後、頭を抱える。

「あくまで賭けて事か？」

明らかに嫌そうな顔でいるセルアに対しユージンは頷き、こちらを見ているようでどこか異質さを感じさせる瞳を向けてきた。

「そう、賭けですね。私は先視みが嫌いです。それでも今はこれ信じるほかはない。こうして私と共に行動しているランやセルアを見ても未来は決して陰ってはいません。美しい未来があり、私を魅了する。悪い道を辿ってはいないと思えます」

真偽を知る事は二人にはできない。

ユージンは見ているものがそうさせるのか、とても嬉しそうな表情のまま言葉を続ける。

「今、私がこうも無謀な話をしていても未来は欠片も変わらない。この力は悪い方向へ向かっていくのなら、すぐに姿を変えて見せるのです。やはり、道はこれで正しいのでしょうか」

蘭が脳裏に浮かぶ文字を読める事を考えると、確かにユージンは何かを見ているのだろうとは思えた。しかし、この意見を本当に信じるべきなのかと迷いも生まれる。

「俺は見えねえものを信じたくはないが……頼るしかないのか」

セルアも肯定はできないらしい。自身に問いかけるように呟いた。「困った末、結局は力に頼るという事態は正直好ましくはありません」

ん。それでも、いなくなったあの方が私に残した方法なのです。姫は私などよりずっと力も強く使い方を知っておられた。その全てが今を導いたと信じ動くしかないのでしょうか」

もうユージインはユージインだけではいられないと考えているらしい。しかし、完全にマティアスになる事も望んではない。ウィルナでのユージインも自分であり、シェラルドのマティアスも自分である。そのどちらをも合わせて行動する事が、未来に繋がると考えているらしかった。

それは同じ者であって違う者、違う者であって同じ者。不思議な存在に思える。蘭自身もウィルナの姫ではないが、姫として今ここにいるのだ。

（本当に何かの意味があるの？）

誰も答える事のできない疑問を抱きつつも蘭はセルアの手から逃れふと立ち上がり、眼下に広がる町を眺めた。様々な色彩を配置した町並みは美しく、魔力に守られ一切の姿を変える事もない。

縦横に走る道はやはり、蘭の脳裏に魂、欠片、失うと文字を浮かび上げらせ何かを訴えかけて来る。

（でも、事実はある）

蘭は振り返り、二人を見た。

「こうして王族のみが読める文字がわかるんだから、わたしが姫様になる権利も本当に少しあるのかもしれないよね」

するとセルアが驚いた表情を浮かべた後に呟いた。

「もう……腹は括ったって事か」

そして、その後にユージインが頷く。

「確かにそうかもしれませんが。私と姫は全てを読む事ができ、ランは一部を読む事ができる。それはきつと意味のある事でしょう」
決して強くなる事のない風は柔らかいまま、心地良く蘭の体を撫で通り抜けていく。

先視みの力を信じた結果がどうなるのかはわからないが、蘭は姫としてアンヘリカへ向かいヘンリクに会う必要がある。その為には

まだ、ユージン、セルアと共にするべき事があった。

九章・集う孤は楔（一）

今日、蘭はアンヘリカへ向かう。

姫の証である赤い衣服を身にまとい、髪を結う。そして城から出て、国民に姿を晒す。

ウィルナの姫ランはシェラルドとの対話の為にアンヘリカへ向かい、結果と共に帰って来る。

発言は必要とされず、ただ凜とした佇まいを見せつけければ良いのだとセルアは告げた。

ユージンも、確かな未来と共に蘭は存在しているのだから自信を持って頷く。

戦わない結末を望んではいるが、必ずしもそうなる保証はない。決裂すれば、おそらくではあるが戦いが起こるのだろう。

国の行く末を知る権利は誰もが持つており、大勢がいる空間をランとして歩いた。護衛として側に付く者に囲まれ、並ぶようにユージンや重役達もいる。セルアだけが共に行動をせず、先に乗り合い場へ向かっているはずだった。

ウィルナでは町の中を徒歩で移動する以外の方法はない。王族だろうが王宮に勤めているようが、誰もが歩くほかはないのだ。

必ずしも安全が保証されないが故に、ランの周りは景色が見えぬ程に囲まれている。しかし、正面はある程度開けている為、自身が通る道の端にはたくさんの人が集まっているのがわかった。そして、その者達は蘭がアンヘリカへ向かう事へ対する思いを口々に投げかけて来る。

ラン様はこの国をお救いになる方だ。

戦いを望まぬのだから、必ず良い知らせをもたらしてくれる。

誰よりも素晴らしい未来を持っていると告げられた姫が、私達の命を奪うはずがない。

概ね姫を信じている。いや、心酔しているような熱のこもったも

のが多く、蘭はこの国における姫という人物の重要性について改めて認識させられた。

（こんなにも信じる人がいるのに、どうして姫様はいなくなってしまったの？）

蘭は疑問を抱きつつも歩を進める。アンヘリカへ向かう理由は例を見ないものであり、今の蘭は周りへ愛想を振りまく必要もない。真剣な面持ちで乗り合い場まで向かう事が重要だった。

とにかく、それまでは蘭に戻ってはならない。

信念を持ち、国の為に動く姫。それがまさか偽者だとは誰も思っていないのだろう。

時折、本当に極稀にだが良くない言葉も耳には飛び込んで来た。しかし、全ての者が支持をするという事態は到底考えられないのだから、その人はそう思っているだけだと受け止める。

何よりもそうした内容を口にする、周りの国民達がその人物を言いくるめるように言葉をかけてしまうのだ。

姫にそのような無礼を働くな。

そうして揉めるかと思えば、そこまで熱く批判の言葉を吐こうともしない。

自分達は先視みによって殺されはしないのだ。

否定の言葉を口にしても、姫の成した事を認めぬわけではない。どうしようもなく姫を批判する人物は今のところ、蘭には見受ける事ができなかった。

わずかにだが揺れる乗り合いの中で、蘭は普段よりも心持ち姿勢を正し腰かけている。今はアンヘリカ到着まで姫である事を忘れるつろげる時なのだが、どうしても緊張は隠せなかった。

これまでは常々砂漠を渡るものと同じ乗り合いで移動していたが、今回は姫の為に作られたという豪華なものだ。見るからに違う外観にも驚いたが、中身は更なるものを感じさせる。まるで小さな部屋

と表現すべき内装に蘭の気負いは増すばかりだ。

ベンチ状の椅子と床そのものを使用する空間が半々である乗り合いとは違い、ここには簡易的なベッドすらも備え付けられている。乗る人数が限られているのか椅子の数は半分以下に減らされ、寄りかかる為に使用していた壁板には棚が作りつけられていた。

一台での移動ならば、セルアの魔力で所要時間を速める事ができる。

しかし今はウィルナの者達が複数の乗り合いにいるのであり、丸二日という当たり前の道程を辿らなくてはならないのだ。更にはアンヘリカでの不測の事態に備えて魔力を無駄にできないという理由もある。

蘭はこの無駄に豪華に見える乗り物でアンヘリカを目指す以外の選択肢を持たないとは知りつつも、思わず呟いてしまう。

「なんだか違い過ぎて落ち着かない」

ただでさえ悪路の上を静かに走る乗り合いが、より揺れを抑えている状況は乗車している気分さえ忘れてしまいそうな程なのだ。ウィルナの屋敷と比べれば簡素と言えるが、本当に小さな一室で過ごしていると錯覚してしまいそうな環境だった。

隣に座るセルアは前の座席へ足を載せる体勢のまま、蘭の髪に触れ笑う。

「ああ、やり過ぎだと思うだろ？ あいつも普通に構わないと言ったんだが、周りはこちらまでしねえと納得しなかったんだよな。馬鹿馬鹿しい」

「姫様がこうしたかったわけじゃないんだね」

「ええ。特に頻繁に使用するものではない為、同じものを望まれていたのですよ。使われたのは二往復だというのだから、無駄にも思えますね」

蘭の向かい側にいるユージンが苦笑する姿は、本当に仕方がなさそうに見える。

「姫様が普通でいいって言ってるのにこれなの？」

「示しがつかねえと言われちゃうんだな。これが」

屋敷の豪華さを考えるとこれでも妥協しているのかと感じる部分もあった。しかし、二度しか使われていない乗り物と考えるとやはり首を捻りたくなる。

「中を見る人なんてそうそういないんだよね？ 外側だけ立派でもじゅうぶんそうなのに……それに、はっきりと要人が乗ってるのがわかるって危なくない？」

思わず漏らした本音にセルアが更に笑う。

「あいつも同じような事を言ってたな。この内装で通常の乗り合いが何台か作れるんじゃないかと溜息をついてたぞ」

「だって、暮らせそうなくらいに張り切ってますって感じだもの」

蘭が知るのは姫の屋敷とアンヘリカの宿、そしてシェラルドの為に準備されたというアンヘリカの建物だった。必要最低限のものを置いている宿よりも、乗り合いの方が充実しているという状況は身分の差なのだろうかと自然と蘭も溜息を零してしまう。

「やっぱり落ち着かない」

セルアと共に幾度もウィルナとアンヘリカを往復してきたのだ。

蘭はすっかり木の床に布を敷き寝転がる状況に慣れてしまっていた。「俺もあっちの方が居心地がいい。乗り込む人数が少ないからといって、やり過ぎにも程がある」

「乗り物って感じじゃないもんね。でも、姫様と一緒に乗りたい人もいるんじゃないの？ かえって狭い気がするけど」

当然のように三人で使ってしまったているが、見回す限りあと一人二人を追加するのが限界だろう。

今はランではなく蘭がいる為に新たな人物は不用なのだが、今回のようにセルアとユージンだけで二日間を過ごすのはさすがに困るのではないかと気付く。

「姫が乗る場合はセルアが必ず一緒ですから、私以外に同乗する者はいませんよ」

「ユージンだけ？」

「俺と二日間も同じ空間にいられる奴がいねって事だ。だから、こんな部屋みたいな作りになっちまった」

「ふうん。まあ、色々事情もあるし、姫様みたいな立場だとなおさら仕方ないのかな。ユージインもこんな感じで暮らしてきてたって事でいいの？」

一国の主になる者の暮らしなど、代わりを務めた身としても理解しきれるものではない。しかしユージインは身を持って知る人物だったと蘭は聞く。

「はい。概ね同じと言えるでしょうね。立場を忘れるなど、よく言われたものです。しかし、先視みの力があるからこそわがままが通るという点もあるのですよ」

「先視みがあるから、長期間国を離れるのを許してもらえたんだよね？」

これこそわがままなのだろうと蘭は告げたのだが、ユージインは困ったように眉を下げる。

「許されたものではありませんよ。押し通しただけなのです。ヘンリクと……もう一人の者に自国を任せて、私は逃げるように飛び出してしまいました」

何かを思い出したのか瞳を伏せるユージインの姿に、セルアは驚いたらしい。

「らしくねえ台詞だな。ユージインには逃げるなんて似合わねえ。まあ、俺はあいつに対する態度を見てそう思ったただけだからな。実際に立場を理解できるからこそ、対等を望まれた時の適応が早かったっただけか」

蘭にもユージインが逃げるという状況は想像がしづらいものだ。しかし以前にも先視みに振り回されるようにウィルナへやってきたと言っていた。それ程の感情が与えられたのだろうと納得する。

「性別は違いますが、よく似た教育をされたのでしょうね。継ぐ者は皆、同じような感情を抱くのもかもしれません。しかし、先視みの与える感情とは、本当に逃げたくなるようなものもあるのですよ？」

ヘンリクは殺してしまいたくなり、アンヘリカは欲しくてたまらない。これからでさえ、二人の未来がないのなら私は耐えられなくなるかもしれません」

真実を知った今だからこそ、ユージインはアンヘリカにいる自身の状況を伝えてくる。蘭がさらわれた際にクロードから守るように側へいたのは、自身の為もあったらしい。

良いと感じさせる未来と共でなければ、アンヘリカはつらい場所以外の何ものでもない。理解する事は難しいが、ユージインはひたすらに苦しい場所なのだと訴えた。

「そんな物騒な事言うなよ。前にあいつがアンヘリカに行った時にユージインの様子もおかしかった意味が今ならわかる。同じような感情を与えられたと考えて構わねえんだろ？」

「ええ。アンヘリカは訪れる度に欲しいと思わてきますからね。どうしたならあも欲する事ができるのか……、まったく困ったものです」

そのまま口をつぐんでしまったユージインを気にしつつも、蘭は先程からやたらと触れてくるセルアへ目を向ける。

「ねえ、わたし達しかないからって、今これはないんじゃない？ どうにも緊張感が足りないのではないかと告げれば、セルアはこちらの髪に唇を落とし満足気に口端を上げた。

「どうせ外からは見えねえんだ。構わないだろ？ アンヘリカへの滞在は一日の予定だが、不測の事態で伸びる可能性だってある。俺の魔力を受け取っておけよ」

最もらしいように自身の都合に沿ったセルアの発言に、蘭は仕方なしに頷く。

「ずるいんだから」

「絶対に大丈夫とは言えないんだ。俺達は万全で臨む必要がある」すると何かを考えているように見えたユージインが、セルアへ眼差しを向ける。

「今回ばかりはそうした発言は控えていただきたいですね」

「はなっから道筋もできてねえ今の状況だ。全てが不測じゃないのか？ 最悪の事態に対して備えておく必要がある。後手に回るわけにはいかねえだろう」

鼻で笑うセルアに、ユージィンは小さな溜息を漏らす。

「貴方はわかっていて言うのですからね」

「今どんなに気を張ったってしょうがねえだろうが。全てはアンヘリカに着いた後、シェラルドの奴らに会ってからだ」

蘭がアンヘリカでヘンリクに会うという案を聞き散々反対してきたセルアだったが、話が進みこうして間近になると誰よりも自信有りげな発言をするようになっていた。

こちらの髪を優しく撫で続けているセルアへ、蘭は再び視線を向ける。

「でも、本当にどうなるかわからないだし、わたしも心配だな」

ユージィンはウィルナの姫ランとシェラルドの王子マティアスを婚約させると言った。確かに二つの国をまとめるには良い話だとも思えたが、実際に成立するかと問われれば首を傾げてしまいたくなる内容なのだ。

この世界について詳しくもない蘭ですら、無謀ではないかと疑念を抱いてしまう。

自分達以外の誰が首を縦に振るのだろうと思える程に可能性の薄い望みであるが、今はすがらざるを得ない状況でもあった。

果たして全てはどこへ向かっていくのか、あまりにも先を読めない状況はどうしても蘭の心をざわつかせる。

不安を零した蘭を見つめるセルアは、そんな事言ってもどうにもならねえと続けた。

「腹を括るしかねえんだよ。やれるだけの事をやってどうなるか、そんなもんはその時にしかわからねえ。俺達はそうしてこうなったんだろ？」

セルアの言葉を聞いた蘭は、何故今の状況になったのかを改めて考える。

おそらくだが自分がこの世界へ現れ、姫は消えた。そして、その代わりとして暮らし、クロードと出会いアンヘリカへ向かったのだ。それによりアンヘリカとの縁ができ、魂の欠片という言葉を知った。全てがそこから動き始め、蘭は失われた魂の欠片であり、姫とユージンが分かれた二つなのだろうと思える本を見つけたのだ。

（でも、どこからが始まりと言えるんだろう？）

蘭がこの世界へやってくる以前から、何かが起きていたと考えるべきなのか。敵国の王であるはずのユージンがいて、ウィルナーの使い手である術師のセルアもいる。姫は二人がいる状態で蘭を呼んだのであり、何となくだがクロードもこの中に加えていいように思えた。

（クロードがいたからこそアンヘリカに行けたんだし……ヘンリク王子もそうなのかな？　もしもシェラルドの王子が一人だけだったなら、今とは違った状況になっていたんだろうし）

うつむき眉間に皺を寄せ黙り込んでしまった蘭へ、セルアが声をかけてくる。

「どうした？」

自分の世界に入り込んでしまっていたと蘭は慌てて頭を上げ、首を横へ振る。

「ん、なんでもない。ちょっと考え事をしてただけ、どうしてここに来たのかなって改めて思っちゃって」

「今更そんな事か？」

セルアの手が蘭の頭を掴み大雑把に揺らす。時たまこうして揺さぶる仕草が気に入らない蘭は鋭くセルアを見た。

「やめて。それに、そんな事ってないでしょう？　わたしにとって
は重要な」

しかし、セルアは本当に気にならないらしい。睨みつけている蘭を無視し、こちらの耳元へ唇を近づけ囁きかける。

「ランは俺に会いに来たに決まってる」

「な……っ」

突然の発言に、蘭は耳元を押さえて体をセルアとは逆方向へ傾けた。載せていた手から逃れるように動いたのが気に入らなかったらしく、セルアは腕を伸ばし蘭の肩を掴む。

「なんで離れる？」

「なんでって……急にそんな事言われたらびっくりするじゃない」
妙に驚かされた台詞を思い出しながら蘭が言うと、セルアは意地悪そうに口端を上げた。

「急じゃなかったらいいのか？」

そうして、そんなふざけた口をきく。

「もう何なの！ こっちは真剣なんだからね。アンヘリカに着いたらまた姫様をしなきゃいけないのに」

真っ赤な顔でまくし立てれば、笑い声と共に返事を向けられる。

「わかってる。だから今はランらしくしていりゃいいんだ。そんなに気負うな。俺はランが好きだからこうしてるんだ、構わねえだろ？ 別にふざけているわけでもない」

「ちょっ、何！」

更に告げられた言葉に蘭は過剰に反応したが、セルアには伝わらなかったらしい。不思議そうに瞳をぶつけられる。

「どうした？」

「どうしたって、セルアが今、す、す」

これまでセルアは蘭が好きだと口にした事はなかった。気に入っているや、帰りたくないと思わせてやるなどと散々言われてはきたが、突然正面切って感情をぶつけられたのだ戸惑いも生まれる。

同じ言葉を出す勇気がないままに蘭が口ごもれば、目前にある瞳は細められた。

「好きだと言っただけだろうが」

「だって、今までそんな言い方した事なかったもの」

「なんだ？ 言わねえとわからなかったのか？ じゅうぶん態度で示してただろ？」

今度は髪を乱すように頭を撫でたセルアに、蘭は再び頬を赤らめ

る。

「ずるい……ずっと私が決めればいいって感じだったのに」

確かに好かれているとは思っていたが、蘭自身の感情だけが問題だと考え続けてきたのだ。自分はこの世界で暮らさなければならぬ。はつきりとした答えが出ない限りは受け入れられない話だと思いついてきた。

何故そんな事を言うのかと蘭は訴えたが、セルアは妙に自信に満ちた笑みを浮かべ告げる。

「今だってそれは変わらねえよ。何か心境の変化でもあったのか？
言ってみろ」

「嫌よ、わたしは帰る為にここにいるんだもの」

まるでこちらが変わったかのような物言いに、蘭はただ強く突っぱねた。しかしセルアは不安をおおるような現実を突きつけてくる。

「帰れないかもしれないだろうが？」

蘭はこの世界から帰るという目標を掲げていて、今でも答えを探しているはずだった。

「前にも言ったけど、私ははつきりしないのが嫌なの。ちゃんとわかってるなら……」

しかし口から飛び出したのは酷く曖昧な、決して帰りたいたとは言えないものであり自身が戸惑ってしまう。

「わかったら何かあんのか？」

続けるべき言葉を見つけられない蘭へセルアは確認するように問うてくる。

（わかったら……どうするんだろう）

見えるようで見えない。もしかすると気付いているのに気付いていないのかと、自分すらも疑いたくなるようなおかしい感情が蘭の中では渦巻く。いったい何の為に自身はここににいるのかと、改めて考えながら話を打ち切る事に決める。

「何でもない。本当に何でもないから。ねえ？　今はアンヘリカに行く事を考えなくちゃ」

この発言にセルアの眉ははっきりと潜められた。しかし蘭は言い切れる程の答えを提示できる気がしない。どれだけ問われようが考えようが決断できる状況ではないと、蘭は言い表す事のできない感情を己の中に閉じ込める。

とにかく話題を変えなければと蘭が視線を動かすと、こちらを黙って眺めているユージインが面白そうに笑っていた。

「ユージインも笑って見てるだけじゃなくて、何か言つてよ」

内心で助けて欲しいと思いつつ言葉を向けると、ユージインは少し驚いた表情を見せ仕方がありませんと苦笑する。

「セルアが少々ランを困らせているようには見えますね」

「でしょう？」

予想していた通りに言葉を発したユージインに蘭は大きく頷く。しかし、セルアはだからどうしたと言わんばかりにこちらを見つめているだけだ。

「なんで気にしないの！」

「気にするわけがねえだろうが、俺はただランが好きだと言つてどう思われてんのかを聞いただけだ。問題があんのか？」

「それはそうだけど」

確かに問題はないのかもしれない。単にいつからか自分が迷いを抱いているだけなのかと、蘭の声も自然と小さくなる。

「まあ、本音を言えば私のいない所でしていただきたいですね。セルア、以前から気になっていた事があるのですが、姫の先視みの件をどう思っているのでしょうか？」

突然に告げたユージインの発言はこの流れを断ち切るものなのかと蘭は視線を向けるが、セルアが随分と嫌そうな声を発した。

「どういう意味だ？」

「もちろん、貴方へ姫が告げた先視みですよ。出会いがあると言われていたでしょう？」

何故そうも嫌がるのかと言いたげにユージインは笑んでいるが、蘭は先視みが何かを告げていたらしい事実には驚く。

「な……に？ セルアはわたしに会うって知ってたの？」

見上げればセルアが不機嫌そうにユージインを見据えており、決して認めているとは言えない状況には思える。

「そんなの関係ないだろ？ 俺自身がランを好きだと思っている部分が重要なんだよ。あいつの先視みがランの事を告げていたかなんて、俺達にはわかりもしない――。いや、ユージインには見えるんじゃないのか？」

蘭には姫がどんな先視みをしたのかはわからない。しかしセルアの口ぶりでは特定の誰かに会うと告げられていたようには感じられなかった。

確かにユージインも先視みを持っているのだ。姫と同じくセルアの未来を知れるのだろうと、蘭も瞳を向ける。

しかし酷く困っているらしい表情がユージインには浮かんでおり、こちらが望む言葉を吐く事は叶わないようだった。

「残念ながら、どうして姫がセルアに出会いはあると告げたのが私にはわかりません。貴方の未来は心穏やかになれる素晴らしいものですが、決して誰かに出会えるとは思えないものなのです。まるで私と姫では違う未来を見ているのではないかと思える程に理解できないものです」

「二人が見てるもんは違うって事なのか？」

セルアははっきりと認められない答えにどこか安堵しているようにも見える。だがユージインは表情を陰らせるのであり、何か不安を抱えているようにすら感じられた。

「どうなのでしょうね。私は姫とそこまでの会話はできていませんでした。このような事態になるとは露とも思わず、これから先視みについてを語れるとさえ考えていたのですよ。しかし姫は同じ未来を持った別人のランと入れ替わるようにいなくなってしまうわれた。まるで確認する事を拒まれているようにすら感じられます」

ユージインの正体を姫は知っていたが、詳しい話をする間もなく蘭がこちらへ来てしまったらしい。二人の先視みの違いを知る事は

無理なのかと蘭が思うと、隣でセルアが鼻で笑う。

「とにかく俺は先視み通りに動いてんじゃねえよ。例えランに会うと示していたんだとしても、俺は自分で決めてんだからな」

「う……うん」

確認するように目線を合わせられた為に蘭はセルアへ頷いて見せたが、何故かこの様子にユージンが苦笑していた。

「私も先視み通りに動いているとは思っていません。自身で姫の側を選んだのですよ？ 先視みはどこまでを知り何を伝えてくるのか、まったく理解できないものなのですからね。そう言いたくなるセルアの気持ちもわかりますよ」

「それでも先視みを信じて動いてきたんだろう？」

「仕方がないでしょう？ ウィルナもシェラルドも結局は先視みに頼らなくては生きていけないのですから……姫の為にも私はこの力にすぎるつもりです。二人もそれで構いませんね？」

正体が掴めないままに話の中心となった先視みは、この世界にとって決して無意味なものではないのだろう。ユージンは疑問を抱きつつも信じ、先へ進もうとしているように見える。

「よくはわからないけれど、今までもそれでうまく進んでいるなら信じるしかないのかなとは思うよ？」

蘭が肯定すれば、セルアも溜息混じりに続いた。

「俺は信じるしかないんだろうな。未来が良いから生かされて、今がある」

悪しき未来が見えるのなら殺されているはずなのだ。先視みはそれだけの力を持ち、この世界は成り立ってきている。

蘭の瞳は自然とセルアを見つめたが、先視みに決められていたという事実がいまだに気に入らないらしい。再度、念を押すように言葉を向けられた。

「俺は先視みに動かされてんじゃねえからな」

「うん、大丈夫わかってる」

先視みを持つユージンですらセルアの言動を理解できると言っ

ている。影響力の強さを感じつつも蘭はとにかく同意をした。

「しかし、ランも姫である事を忘れられたのではありませんか？
普段に近づいたように思えますよ」

「え？」

思いもしない言葉に蘭は驚き、セルアは自身の髪を気だるそうにかき上げて呟く。

「俺は別にそんな事まで考えてねえよ。ランがあいつの振りをするのは必要な時だけでいいと思ってるだけだ」

何故かそっぽを向いてしまったセルアに対し、ユージンが頷いた。

「確かに今はランが姫である必要はありませんからね。もう随分と慣れたものでしょう？」

セルアに対して何かを言うわけではなく、こちらへ言葉をかけてきたユージンを蘭は見る。

「確かに、何回か姫様として話はしたけど」

慣れたのかどうかは分からなかったが、蘭は数度姫として城に赴いていた。それはいつもアンヘリカへ向かう為のものであり、戦いはせずにヘンリクと会う事だけを望み続けたのだ。

そして、結果としてそれは成り立ち、今に至っている。

もしかすると気負った自分の為にセルアはわざわざあんな事を言ったのだろうか？ 蘭は視線を横へと向けたが、セルアは少し不愉快そうな表情で座っているだけだ。

そうなのかもしれないが、セルアはいつもこんな調子であり蘭に真意はわからない。

例え本当だとしても本人が認めたくないのならば、追求する必要もないのだろう。もしかするとセルアなりの優しさが含まれていたのかもしれないと蘭は心の内で思う事にする。

（でも、違う悩みを思い出しちゃったしな）

セルアに好きだと告げられる事で、蘭は自分の不安定な立場を嫌でも思い出した。帰れるのか帰れないのか、知りたくとも知れる気

がしない疑問をだ。

（どうしたら、答えを知る事ができるんだろう）

現時点では導き出せないとわかりきっている為に、蘭は無理やりにも発言する事で頭を切り替えようと試みた。

「それにしても、本当にわたしで大丈夫なのかな？」

確かに先程より気を張らずにいられると思いつながら蘭は、これらに対する不安を改めて口にする。

「また、それか？」

セルアがその話はしたくないとばかりに、眉根を寄せた。しかし、蘭は話を止めるつもりはない。

「またって言ってもね。アンヘリカの人達はわたしを直接知ってるんだよ？　それが姫様として現れたらどう思うのかなって考えるじゃない」

蘭はこれまで姫としての姿で外へ出た事はなかった。いつも庶民的な衣服に着替えて外出し、アンヘリカへも来ている。姫と見目が似ている為に王宮の敷地内に住んではいるが、あくまでウィルナの市民であるとアンヘリカでは認識されているはずだった。

その旨を聞いたユージインは、わずかにだが神秘的な面持ちを見せる。

「詳しい事を知っているのはクロードだけですからね。一応、マルタへはランが姫の代役として行くとは伝えてもらっています、彼女も何故本人ではないのかと疑問を覚えているでしょうね」

「さすがに本当の事は言えねえだろう？　アンヘリカとの仲はあいつがいるからこそその部分もある。ランの役割も大きいが国単位になると違う」

アンヘリカの意志を読めるからこそ歓迎されている蘭。そして、ソニアを助けた事によって更にアンヘリカの人々に知られる事となった。それは確かに絆自体が深まっているように思えるが、国としての意味は成していない。

蘭個人だけが優遇されるのであり、ユージインやセルアと共に訪

れるほかに方法を持たない為、二人も同じように扱われているだけなのだ。

「私達も多少は気軽に向かえるようにはなりましたが、あくまでおまけのようなものです。姫がいなくなれば不安を煽るでしょうね。マルタにはこちらに案がありわざとそうしているとでも思っていたかもしれませんか。まあランはアンヘリカの救い主と思われるようですよ、嫌がりはしませんでしたよ？」

ユージンは簡単に言うが、それはつまりしっかりとした策があってアンヘリカへ来ていると、そう見えるように振舞えという事だ。「ユージンはすぐに面倒くせえ事をさせたがるな」

嫌そうな表情をはっきりと見せたセルアへ、ユージンは言い切った。

「面倒と言っている時ではありませんよ。しっかり働いてください」これ以降、三人はアンヘリカですべき内容を口にする事を極端に減らしてしまう。当たり障りのない会話をし、時折セルアがからかうような発言をこちらへ向けてくるの繰り返しだった。

単に二人は必要がないと判断していたのかもしれないが、蘭は心をざわつかせたまま笑みを浮かべようと努力をする。

まるで全てを集めるような事態は、恐れずにはいられないものだった。

九章・集う孤は楔（二）

アンヘリカへ到着すると町は不思議な程に閑散としていた。普段であればそれなりに人の往来が見られるのだが、どこへ行ってしまったのだろうかと思う程に姿がない。

さすがに乗り合い場で働いている人はいたが、それ以外は見当たらないのだ。

まだ乗り合いから降りる事なく、乗車口の隙間から外を眺めた蘭は不思議だと首を傾げる。

「どういう事？」

同じようにセルアも外へ視線を向けており、目隠しとして垂らされている布の位置を整えながら蘭へ戻れと告げた。

今回は普段のように気軽に降りられはしないだろうと思っていた蘭は、素直に座席へ腰を下ろし言葉を待つ。到着する直前まで蘭にべったりと張り付いていたセルアも、少し距離を置き腰を据えてから言葉を吐く。

「いつ何が起こるかわからねえんだ。誰もがなりを潜めてるんだろうよ」

普段よりもだいぶ抑えた声になったセルアへ、蘭は目を向ける。

「何が起こるかわからない？」

「そうだろう？ 長年いがみ合って来たウィルナとシェラルドがこの場で直接話をする。その結果の予想は大半が悪いもんだろうな」

「そう……だね」

蘭自身は誰かの話としての知識を持っているだけであり、すぐ側に戦いがあるのかもしれない状況だと理解はしているが、本当の恐ろしさが今ひとつわからない。

自身が恐れているのは戦いではなく姫の代わりをしている事だ。

蘭はそう思いながら頷き、セルアは溜息混じりに続ける。

「俺だってそうは思いたくねえが、最悪の事も考えてはいる。それ

だけ俺達は二国が平和に話をするような環境を見て来ちゃいねえんだよ。今回の話で乗り合いも全部止まっちゃってるしな。いるのはほとんどアンヘリカの奴らだろう。シェラルドはわからねえが、おそらくウィルナと変わらず国民のほとんどを入れてはいないだろうな」

常ならばウィルナとアンヘリカの間を乗り合いが往復を続けている。数日置きではあるが確かな交通手段が準備されていたのだ。

しかし今回は姫がかなりの人数を連れてアンヘリカへ向かうと決まっている。今日に合わせて調整された日取りで乗り合いの往来は止められ、ウィルナの民は皆自国へと戻っているはずだった。

互いに会話をする事に納得はしたが、それでも両国民はアンヘリカへ近づけない。透けて見える状況を蘭は言葉に乗せる。

「どっちも最悪の事態を考えてるって事？」

「そういうこった。戦わないと表面上は言っているが、互いに信用なんてしちゃいねえ。むしろ信じたら負けそうな気もするな」

首をすくめて見せたセルアの表情を見る限り、シェラルドへの信頼など欠片も抱いていないように感じられた。

「信じたら負け……か。わたしは信じたいけどな」

あくまで自身の理想として蘭は呟いたのだが、耳にしたセルアは力無い笑みを浮かべる。

「俺もできるもんならそうしてみてえが、さすがに無理だ」

「そっか」

蘭もそれはそうだろうとも思う。ずっと戦いいがみ合って来た者同士、突然平和的になれるとは思えない。生まれた時から戦いはあり、お互いに敵だと認識して暮らしてきたのだ。二国の間にはだかる壁は随分と高く厚いようだった。

そして、自分が話す事でそれが解決するなど本当に夢物語ではないのかと、蘭は強く不安を感じうつむく。

この姿を見た為なのかどうか、セルアは珍しく蘭の両手を包み込むように掴む。どうしたのかと目を合わせれば、いつになく真剣な

眼差しがあった。

「今回は本当に危ない状況だ。俺達はランを守る為に目を光らせはするが、それでも不安は拭えねえ。油断をするなよ？ シェラルドの奴らを信用するのだけはやめろ」

セルアの発言は蘭を困惑させた。互いに信用する気もないまま同じ場に着き、意見をする。それでも今回アンヘリカへやって来た意味が感じられない。

全てを信用する事ができなくとも、わずかにでも互いを思えなければ話は進まないのではと蘭の疑問は深まる。

「信用しなければ、相手も返してはくれないんじゃないの？」

徐々に増していく不安に耐え切れない蘭が思わず口になると、セルアは諦めたように瞳を陰らせた。

「俺達はその信用を持ち合わせちゃいねえんだよ……ユージインの案に従いはしたが、俺は駄目だと思ってる。それを表に出しちゃったら、最初からシェラルドに負けている。だから強気な事も言うが、本心ではねえよ」

ここへ来る道中、セルアは誰よりも自信を持った発言をしており、蘭はそれに勇気を貰い信じて来た。それが、ただの虚勢だと言うのか。

「駄目だと思ってるって……ユージインだって」

シェラルドの人間だ。ここでの会話は乗り合いに施された術の為に外へは聞こえない。しかし、だからと言ってはつきりと口に出せる内容ではなかった。

「ユージインはあいつと一緒にいる所を見ているから……信用できるとは思っている。それはシェラルドとは別物だ」

ユージインと姫、二人を見て来たからこそセルアは信用している。それは互いを知るきっかけがあったからなのだろうと蘭は思う。

そして、そうしたきっかけを持たないシェラルドを信用する事はできないのだ。

「ユージインと一緒に少しでもシェラルドを信用しようとは思わな

い？」

わずかでも希望を持って欲しいと願う蘭へ、セルアはすぐに言葉を続ける。

「ここへ来た意味があると信じてえが、俺には無理なんだよ。それだけのものを見て来てる。現に今、外へ出ているユージインは戻って来ねえ。何かしら揉めてるってこった」

「揉めてる？」

確かにユージインはアンヘリカに到着してすぐに外へ出ていた。姫は全てが整った後に出て来れば良いのだからと、セルアを残し一人で出て行ったのだ。

「俺達の為に場を準備しているアンヘリカの奴と会っているはずだが遅過ぎる。まあ、最初からすんなり行くはずもねえがな」

セルアは蘭の両手を開放すると、不愉快そうに自身の髪をかき上げ大きく息を吐く。そして一呼吸置いた後に笑った。

「ランはもっと危機感を持て。ちよつとはましになっただろう？」

そうして見せる意地悪そうな顔はここへ来る道程でも目にしたものであり、蘭は目を数度瞬かせる。

「どこまでが本気なの？」

「全部が本気だ。俺達は博打をしてるって事を忘れるな」

表情は柔らかいものの、セルアの目は確かに笑ってはいないようだった。

普段のように他愛のない会話をする余裕もなく、蘭とセルアは乗り合いの中に座っていた。時折蘭が不安を口にし、セルアも否定はせずに危険を示唆する。

そうしていると外にいる兵がセルアを呼ぶ為に顔を覗かせ、蘭はただ乗り合いの主として堂々とくつろぐという芝居を必要とされた。どうやら誰かがやってきたらしく、身元の確認を求める発言にセルアが渋々立ち上がる。

面倒くせえと呟きながらセルアが乗り口の布から顔を覗かせれば、蘭の元へも聞き覚えがある声が届く。あくまで閉め切る事が前提であり、隙間さえ作ってしまえば外の音は聞こえるものだった。

「アンヘリカの使者としてラン姫へのお目通りを願います」

声は間近ではなく少々離れた位置から聞こえているらしい。セルアの後姿のみが見える為に状況はわからないが、すぐに助け船のような言葉がかけられる。

「そいつは確かに今回のアンヘリカの使者だ。俺もユージンも知っている。入れて構わないぞ？ 何かあったら俺がふっ飛ばすから気にするな」

セルアの発言により周囲がざわめいたらしい声が聞こえた。蘭はどうしたのだろうかと思いつつもおとなしく座り、見知った人物が入って来るのを待つ。

その後もいくつかのやり取りが聞こえ、どうやら本物らしいという台詞と共にようやくクロードが中へと顔を覗かせた。

「アンヘリカの使者としてこちらへ参りました。失礼させていただきます」

普段とは全く違う口調で話すクロードは、ゆっくりと乗り合いの中へ足を入れ膝を着く。

「お初にお目にかかります。ウィルナの姫ラン様」

そのまま丁寧な頭を垂れた姿を蘭はただ見つめる事しかできず、クロードは小さな笑い声と共に立ち上がった。

「お前、何やってんだ？」

セルアが驚いた表情を見せれば、クロードは不満そうに口元を歪める。そして、小声でこの声って外には聞こえるの？ と普段の調子で聞く。

中の声は聞こえねえよ、とセルアが返事をする。クロードは安心したと言わんばかりに背伸びをした。

「オレだって普段は仕事もしているし、それなりの事はできるよ。まあ、実際はウィルナの姫様にここまで丁寧な口を聞いたらマルタ

に怒られるかも。ランだから許されてるって感じかな？」

いたずらでもしたように笑みを浮かべるクロードへ、セルアが呆れたらしい眼差しを向ける。

「本当に何事かと思ったぞ。アンヘリカではあいつに対して膝を着く必要すらねえからな。まったくふざけやがって」

「折角ランが姫様の代わりをしてるんだし、オレもそれっぽく振る舞ってみたかっただけさ。乗り合いの中も全然違うし、気分的なものかな」

ウィルナ城の中へ入ってしまえば、姫のふりをしている蘭へは誰もが今のクロードと似た対応をしてきた。しかし、実際はアンヘリカの者はそうした動きをしないらしい。蘭には理解できない状況のまま二人の会話は続けられたが、クロードは突然こちらを向いた。

「ラン、いらっしゃい」

それは姫として振舞わざるを得ない蘭への唯一の歓迎の言葉だった。ここから先は誰もが蘭をウィルナのランとして扱うのであり、自分自身である事を主張できるのは今だけのはずなのだ。

「うん、五日ぶりだね」

まだ姫を演じる必要はないと蘭は素直に頷く。

今回の話はウィルナだけで準備を行なう事はできない。その為にもクロードは屋敷へ何度も訪れ話をしていた。さすがに全てを任せられるわけにはいかず城内へ入らねばならない時にはマルタも来てはいたが、クロードは重要な役目を請け負ってくれている。

「屋敷では見慣れていたけど、アンヘリカで見ると不思議な感じがするな。でも、今日は仕方ないしね」

クロードも状況が許さないとわかっているのだろう。口調は普段通りだが触れる動作は見られない。先程の堅苦しい印象ではないものの、アンヘリカの使者である立場は崩さないらしかった。

誰かが顔を覗かせる可能性も零ではない。やはり自分もある程度はランでいるしかないようだと言ったと姿勢を正す。

「何かあって来たんだろう？」

セルアが一つの座席を指差せば、クロードは素直にそこへ腰を下ろし頷く。

「現状報告ってとこかな。とりあえず、ヘンリック王子がごねてる」
そうして口にした内容は予想内のものであり、セルアが冷静に言う。

「やっぱりな。それで、どんな感じだ？」

「オレ達が準備した場所が気に入らないらしいよ」

ウィルナとシェラルドが会う為の場を用意する。それはアンヘリカとしてもかなり気を使うものだったらしい。どこへ不満をぶつけられるかがわからず、それを極力避ける為にはなるべく中立な状況を作り出すほかなかった。

まず、場所をどうするかとなり、二箇所ある入り口のどちらかへ極端に近くなるのは避けようと決まった。しかしアンヘリカはちょうど中心に位置する土地は広場しかない。両国との関係色々と考慮した結果、シェラルド側の門よりの広場に最も近い家屋を選び、住人には申しわけないが転居してもらったらしい。

「今回だけで終わるとも限らないし、しばらくの間は空いている家に入ってもらってるんだ」

そうして確保した室内へはどちらの国製でもないアンヘリカのテーブルや椅子を運び入れ、何かを隠す事ができるような物も置いたりはしない。

「なるべく文句が出ないように気を使っただけだね。危ない物なんて何も置いてないし、豪華さがないのは仕方がないと思わない？」

簡素過ぎると思える程に最低限の物しか入れない。それはその家屋へ足を踏み入れる者に対して害をなす物がなく、安心してテーブルを囲めると示す為であった。

それはシェラルド側にも伝わっているはずなのだが、ヘンリックは納得していないらしい。

「アンヘリカはウィルナ寄りだから信用できないって事か？」

「そういう事。本当は何かを隠してるんじゃないかって言ってる。」

ただ、難癖つきたいだけじゃないかな？」

足をぶらぶらと揺らしながら話すクロードは不満気であり溜息を付く。セルアも同じく表情をかんばしくないものへと変え、髪をかき上げた。

「面倒くせえ奴だな……それで、そっちは誰が対応してる？」

「マルタしかないよ。基本的に接点がないんだから」

積極的にアンヘリカへ交流を持ちかけたウィルナの者を見知っている人物はそれなりにいたが、シェラルドはヘンリックが気まぐれに訪れているだけである。面識はあったとしても友好的な部分は存在しない。

だからこそヘンリックへ顔を見せるのは代表者であるマルタとなり、こちらへはクロードが来るほかなかったらしい。

「こつちに来るのも本当はオレより適任な人がいるんだけど、今回はランの事があるからってマルタが押し通したんだ。向こうが片付いたらマルタも一度来るはずだよ？ さすがにオレだけとはいかないからね」

アンヘリカの中でクロードの位置取りは代表者のマルタと共に暮らしている人物というだけであり、決して代わりを務められるものではない。しかし、蘭が姫の代わりをしている事を知っているのはクロードとマルタのみ、他は使えなかったのだ。

「アンヘリカにもだいぶ負担をかけちゃってるな」

マルタの苦労を思っただけでセルアは表情を歪めるが、クロードはそんな事はないと首を横へ振る。

「それは構わないよ。マルタも始めは渋っていたけど、ランが代わりに出るのならそれもいいのかもしれないって言ったんだから」

「わたしが？」

蘭は黙って話を聞いているばかりだったが、思わぬところで自身の名を出され聞き返してしまう。

「そう。ランはアンヘリカの意志を読めたんだから、きっと良い事に繋がるんじゃないかって納得してる。周りには言っていないけど、

話を知ったらたぶん皆そう言うと思うよ」

「そう……なんだ」

笑って話すクロードを見つめながらも蘭は考える。ウィルナの人々が先視みの力と共に姫を信じるように、ここの人々は遠い昔から伝わるアンヘリカの意志を読めた蘭を信じているのだろう。

（ただ、板に刻まれた契約文字を読んだだけなのに）

蘭は自分がウィルナだけの代表ではなく、アンヘリカでも同じなのだと嫌でも思わされる。

「そんな顔をしないでラン。オレは側にはいられないけど、何かがあれば助けるよ。アンヘリカとしてよりも個人として」

どんな顔をしていたのかはわからないままに、蘭はクロードへ瞳を向け笑みを浮かべようと努めた。

「ありがとう。でも、何も起きないのが一番だけどね」

「確かにね」

そう言うのとクロードは立ち上がり、今度はセルアへ視線を向けた。その表情は嫌に真剣であり、蘭は何事かと見上げてしまう。

「ここへ来る前にユージンと話したけど、最悪外で会う事になるかも……って言ってた」

帰るのかと見せかけながら思わぬ事を口にしたクロードに対し、セルアも立ち上がり声を荒げる。

「外だと？　むしろそっちの方が危ねえだろうが！　向こうが何か考えてるって事か？」

「ユージンも同意見だったよ。マルタがかけ合うだけじゃ望みは薄いかもしれない、気をつけて」

そう告げるとクロードはこちらへ一瞬だけ笑みを向け、厳しい面持ちで乗り合いから出て行ってしまう。

その姿を呆然と眺めていた蘭は、アンヘリカへ着けばどうにかなるだろうと考えていた事が甘かったのだとうつむく。

「……やっぱり上手くはいかないんだね」

セルアは苛付いているらしい足取りで座席へ腰を据え直し、片手

で頭を押さえる。

「いや、まだ始まったばかりだろう？　簡単に話が進む間柄じゃねえんだ。だがな……」

どのような状況でヘンリクと対面するのか、蘭の不安は増すばかりだった。

相当な時間を置いてユージンは戻って来た。

アンヘリカとの打ち合わせや同行して来た兵の配置を決める為に行動していたらしいユージンは、はっきりと疲れの見える様子で腰を下ろす。普段の余裕の笑みが見られないのだ。

「大丈夫？」

お帰りなさいや、どうだった？　と聞くよりも先に蘭の口からはこの言葉が飛び出し、ユージンは表情をわずかにだが普段のものへと近づけた。

「色々あるものですね。私の責任が大きいとはいえ、ヘンリクには困られます」

溜息混じりの発言に、セルアが聞く。

「何があった？」

するとユージンは困ったように視線を泳がせた後に告げる。

「さすがに表で会う事になるうとは思いませんでしたね」

それだけは避けたいと思っていた事が現実になったと蘭は声を上げた。

「クロードが言ってた通りなの？」

「伝えてくれていましたか」

「ああ、最後の最後にさらっと言って帰りやがった」

セルアの言葉を聞いたユージンは、仕方ありませんよと苦笑する。

「ある程度の覚悟を決めてもらう為に私が言付けたのですが、時期を計るのが難しかったのでしょうね」

「あの時点で決まっていたのか？」

覚悟を決める為にと言ったユージンへセルアが鋭い視線を向けたが、返って来るのは穏やかな笑みだ。

「いいえ。あの時点ではまだマルタがかけ合っていました」

首をほぐすような動きをしているユージンへセルアが強く言う。「それでもほぼ本決まりだと思ってたんだろう？」

「おそらくそうなるのだろうとは思いましたね、今言われるよりはずっと良いでしょう？」

「そうかもしれないけど」

蘭はそう呟きながらも、戸惑いは隠せない。

わずかでも早く聞いた事で心を構える時間があつたようには思える。しかし事態が大きく変わりもしないのだ。

「どっちもどちな気もするがな。なら、場所は決まったのか」

こちらの気持ちを汲み取ったかのようなセルアの台詞に、蘭は思わず頷いてしまう。

「これでも気は使ったのですよ？」

ユージンはそう言いながら、一枚の紙を懷から取り出し三人の中心に来るように広げた。両手を広げた程の大きさのアンヘリカの地図であり、ユージンは一箇所をしっかりと指差す。

「ヘンリクはこの町の中で最も開けた場所、ここで民を集めた上なら会おうと言っています」

「アンヘリカの民を集める？ 何の為にだ？」

地図を覗き込み、ユージンへ目を向ける事なくセルアは告げる。

「何の為かはわかりません。とにかく私達とヘンリク達の周りを囲ませるようですね」

「囲む……か、互いの兵は？」

「その中には入れないそうです。代表の数は互いに五人となっています」

話をしながらもセルアの瞳は指差された場所以外へも向けられ、何かを考えているらしかった。指が地図上をなぞるように動き、そ

れは時折止まり、また動き出す。

「五人か、俺達以外は誰になる？」

「サイラスとデールになりますかね」

「妥当なところだな、それなら文句も出ねえだろ」

この場合の文句を言う人物とは、ウィルナ王宮内の者を指していた。姫を中心に上手く配置されているのだろうと蘭は思っていたのだが、どうしても不満を表す人間は出てくるらしい。

その事例ならばこうなるはずだと口を挟む、セルアに言わせると頭の固い連中となる人達の事だった。

「これは罠だぞ？ それでも行くのか？」

「そう思いますか？」

はつきりと言ったセルアへユージインが聞き返すと、明らかに苛付いた声が放たれる。

「明らかにそうだろうが！ アンヘリカの奴らが人質になる可能性が高い。それを楯にヘンリクは何を要求してくるか……ってところか？」

「それがわかっているのにアンヘリカの人達を集めるの？」

危険を知りながらも集める行為は無謀なのではないかと告げれば、ユージインはただ笑みを返してきた。

「マルタがそうと決めれば出ないわけにはいかないでしょう。彼女は断ると思いますか？」

蘭は思わず押し黙ってしまう。

アンヘリカの意志を読んだ自分がいる限り、マルタはそれに賭ける可能性が高いだろうと思わざるを得ない。今回の話を受け入れた理由は、蘭がいるからなのだと先程クロードが言っていたのだ。

ユージインは何も言う事のできない蘭へ言葉を続ける。

「ランはアンヘリカの意志を知り、何かを成すと考えているようです。きっと皆が集められる事でしょう。おそらく危険は承知していると思いますよ？」

「わたしがいるから……」

予想はしていても、蘭にとっては重荷だった。いったい自分に何ができるのか？ どうしてもただここにいるだけだと思ってしまう。

「ユージン、あまりランに負担をかけるな」

表情を曇らせた蘭を見たセルアが告げれば、ユージンも言い返す。

「しかしこれが現実なのですよ？ アンヘリカの民は過去にいたというアンヘリカの意志を大切にしている。長く受け継がれていた板の契約文字を読んだ事により、どうやら指示しているのはランらしいと認識したのです。ならばそれにすがるのでしょうか。二国の先視みと同じように」

国を治める者が持つ未来を知る力。それと同じように信じられて
いるアンヘリカの意志。

全く違うもののように見えて、これらに関わりはあるのだろうか
と蘭は考える。なぜアンヘリカの人々はあんなにも小さな板を信じる
事ができるのか。

「先視みと同じ……」

呟きながら地図を眺める蘭の頭をセルアが乱暴に撫でた。どうし
たのかと見上げれば、随分とつらそうな表情が浮かんでいる。

「何もかもがランに集まる今の状況は、本当に意味があるのか？
ユージンの先視みはどうなってる？」

セルアの言う全てが蘭に集まっているという表現は正しいのだろ
うか？ 確かに自分をきっかけに物事が動き、今この場にはいる。
だがそれはセルアもユージンにも当てはまるのではないのか？

心配そうに見つめてくるセルアを見上げながら蘭は疑問を抱いた
が、それを口にする前にユージンが言った。

「私も……未来が陰るのならば止めたいのですが、ランにもセルア
にも未来は明るく見えます。先視みを信じるなら、これは正しい流
れなのでしょ」

ぼんやりと遠くを見るように、こちらへ顔を向けているユージ
ンの瞳には何が映っているのだろうか。明るい未来とは先視みとは

何を指し示しているのか、意味までを図り知る事はできない。

先視みが大丈夫だと表すのなら、信じるほかはない。それはウィルナもシェラルドも同じであって、アンヘリカの意志を信じるこの土地の人々にも通ずるものだ。

「本当に先視みを信じていいの？」

見えないものを崇める行為に蘭が不安を漏らすと、ユージンも困ったように眉を下げた。

「信じたいですね。ですが、これから会うヘンリクの未来が陰っているのは少々気になります」

瞼を閉じ考えるユージンへ、セルアが疑うような眼差しを向ける。

「さっきヘンリクを見たって事か？」

すると、はつきりと首を横へ振ってユージンは答えた。

「いえ、以前会った時に変わらぬ未来を持っていたので、今日も変わらないのであろうと思っているだけです」

「悪い未来を持っている人間に会う事は、本当に正しいのか？」

セルアの意見は最もだった。全員の未来が明るいのであれば先へ進めるのだろうと思える。しかし、ヘンリクの未来は暗いという。

それが何を意味するのかとセルアは問うが、誰も答えなど知りはない。

ユージンもその件に関しては引っかかりを覚えているらしく、すぐに言葉を返してはこない。

じゅうぶんな時間を置き、呼吸を整えるように一息ついてから告げた。

「……ヘンリクは生まれながらにして陰っていた存在です。あれは環境が要因であり、変える事が可能だと私は思っています。ランとセルア、二人の未来が陰らなければ大丈夫だとは思いませんか？」

見える本人ですら確信が持てないらしい内容に、セルアは呆れた表情を浮かべる。

「思いませんかじゃねえだろうが！ 見えもしねえ俺達にはわから

ない」

「そうですね」

ユージンもそれを承知しつつ引く事もしない。

「何と言われても未来は明るく見えるのです。それを……信じてはくれませんか？」

蘭とセルアの未来は素晴らしく確かな先を抱いていると、ユージンには思えるらしかった。

九章・集う孤は楔（終）

アンヘリカの中で最も広い場所は、中程ではなく少しばかりシェラルド側へ進んだ位置だった。ここでは湖を中心に家屋があり、更にそれらを囲むように木々が生える。以前蘭が奥まった所にある墓地を気にしていた位置に近い場所へ、アンヘリカの人々は集められていた。

広場の端に沿って円を描くように立たされている民は、理由も分からぬまま呼ばれたのか誰もが口々に不満を漏らしている。

こうも危険な時に何故こんな事をしなければならぬのか。シェラルドは何を考えている。マルタもどうしてこの話を受けた。

そして、その中には蘭に対する疑問もある。あれは別人ではないのか？ 誰かが口にする声が聞こえる。すると、ウィルナの姫によく似ているらしいから当たり前だと言う声も聞こえた。

はっきりと名を上げられていないのは、確信を持ってないからなのかもしれない。蘭があ衣服を着ているはずがないと、疑う部分もあるらしかった。

話の槍玉にあげられているマルタも円の中に入る事は許されていない。ちょうどウィルナとシェラルドが出会う真横の位置にクロードと共に立っており、今はこちらへ視線だけを向けていた。

本来ならば立ち会う予定だったのだが、ヘンリクはそれすらも受け入れはしなかったらしい。

止まる気配のないざわめきを耳にしながら蘭は足を進める。隣にユージンとセルア、一步下がった位置にサイラスとデール。指定された五人という人数ではこうするほかはない。

ここへ向かう前に乗り合いの中で五人で会話をした。確実に罠がある中に向かっていく事。それでも目指しているのは平和的な結果であり、争いは望まない。

否定的な意見も飛び出しては来たが、もう引く事はできなかった。

ウィルナから出した話ではあるが発端はシェラルドにある為、全員がこの状況に疑惑を覚えている。何の思惑があり、このような場を仕立てたのかと疑いは深くなるばかりだ。室内を拒み外で会するという事態をどうにもできないまま、静かに足を運ぶ。

今回、アンヘリカに集うという話を持ちかけたのがウィルナである為、シェラルドも同じように疑ったのだろうとは思っている。しかし、そうだとしてもわからない事は多分にあり、何か嫌な予感が蘭の心に付きまとう。

「ラン様、足元にお気をつけて」

ユージインが先に見える段差へ目を向け言った為、蘭もそちらへと視線を動かした。

決して平らではないアンヘリカの土を歩く事に蘭は慣れている。しかし、姫はアンヘリカへ訪れた事はあるものの、このような場所へは足を運ばなかったのかもしれない。

「わかつている、そなた達も同じように」

背後からわかっておりますとデールの声が聞こえ、蘭は本当に何の事情も知らない二人はどう思っているのかと、今度はそちらへ意識が奪われる。

これまでも時期を待ち、蘭が行動する度に新たな何かを知る事ができた。だが、今の状況は本当にそうなのだろうか？ 動かなければと思う気持ちや、ウィルナ、アンヘリカの人々が信じる先視みや意志、全てを抱えなくてはならない不安と共に蘭は足を前へ進める。あと二十も歩みを進めれば、ヘンリックの元へ辿り着く。彼は真っ白なコートをまとい、円の中心に立っていた。周りには四人の従者を置き、腰には以前と同じく剣がぶら下がる様は蘭の記憶と寸分の変わりもない。

近づくにつれ見えてきたヘンリックの表情は、鋭い瞳と不気味な薄笑いを浮かべる口元が特徴的だ。この土地でユージインへ見せた瞳ではなく、自分を斬り付けたあの時に近いと蘭は認識する。

思う事があってもユージインやセルアに相談する事はできない。

姫としてならば構わないのだろうが、浮かぶのは蘭としての疑問ばかりであり、それをうまく話そうとするにはどうしても時間が必要になるのだ。

「あれがシェラルドの第二王子」

サイラスの呟く声が聞こえる。本当に書状以外ではやり取りを行っていないらしく、シェラルドの人間を見知っている者が極端に少ない。どうやら、初めて目にするヘンリクの姿に思うところがあるらしかった。

「本当に話などできるのでしょうか？」

デールがサイラスに話しかける。二人は小声でお互いの不安をわずかに伝え合っていたが、それもすぐに終わりを告げた。

ヘンリク一行があと二歩ばかりの位置に迫ったからだ。

まずはユージンが足を進め口を開いた。

「この度は我が国の提案に賛同していただきありがとうございます」
そうして慣例だと思われる文言を続けたユージンに答えるのは、おそらく同じような立場の人間なのだろう。

「いえ、こちらこそ本日は平和的な会話ができておられます」
丁寧な言葉を返す姿を見ながら、その割にはこんな場所かよとセルアなら言いそうだと蘭は考える。

この男は前回にはいなかった者だ。今、ヘンリクの周りにいるのは誰もが見た事のない男達であり、それが何を意味しているのかと蘭は目を走らせる。

蘭は理由があるからこそセルア、ユージンと行動を共にしているのだ。公にはできない、大きな秘密があるからこそ側に置ける人間に限られてくる。そうでなければ、本物の姫でさえあれば他の者という事も可能なはずではあった。

ならばヘンリクもそうなのだろう。しかし、全てが変わる必要はあるのだろうか？

上辺だけの会話が続くのかと思っていると、ヘンリクが待ちきれないとばかりに蘭に向けて声を発した。

「お初にお目にかかるウィルナのラン姫。こうしてまみえる機会が来るとは思いもしませんでした」

明らかに笑ってはいない瞳を細めるヘンリクの姿を見た蘭も、応じなければならぬ。

「こちらこそお初にお目にかかります、シェラルドのヘンリク王子。今日は良いお話ができる事でしょう」

先程のクロードが言ったように、ウィルナとシェラルドの間でも頭を垂れるような仕草は必要としていなかった。ただ眼前にいるヘンリクへ必要な言葉向けさえすれば構わないらしい。

相手は違えどもこちらは笑んでいようと、蘭はこれから始まるであろう会話に備えた表情を作ろうとしていた。しかし正面にいるヘンリクの顔つきが一変する。

偽りだとわかる笑みではなく、何かどうでもいいものを見るようなつまらなそうな瞳を浮かべこちらを眺め始めたのだ。

いったいどうしたのかと蘭が瞳を瞬かせると、この仕草を見たヘンリクは更に嫌そうに眉を潜め、今度は歪んだ口元からくつくつと笑い声が漏れた。

何がおかしいのか、ヘンリクは一人笑いながら蘭を見据え口を開く。

「何が良い話だ。貴女はラン姫ではないだろうか？」

一度出会っている人物の前に出る事が甘くないとは思っていたが、やはりそうなるかと蘭はヘンリクを真っ直ぐに見つめた。ここで焦ってはならない。

「姫ではないとは、どういった意味かお教え願えますか？」

負けるわけにはいかないのだ、例え偽者だとしても強気に言葉を返す以外はない。

「堂々と私を謀るおつもりか？ 貴女……いや貴様はここであつた娘だろう？ 何がウィルナの姫だ」

確信を持って言葉を紡ぐヘンリクへ、黙って状況を見つめていたサイラスが声を荒げる。

「先程から何の疑いをラン様にかけていらっしやるのか？　まるでそこらにいる者のように扱うとは何事か！」

挨拶もそこそこに放たれた無礼な言葉に対する怒りをはつきりと表しているサイラスへも、ヘンリクは冷めた目を向けた。

「ほう……国の重鎮であろう位置の者すらも謀っているのか？　それともウィルナの姫はこうも下々の者のような存在なのか、兄上？」

何かが始まる以前に本題を切り出したヘンリクの言葉に周囲がざわつく。

蘭を姫ではないと言い、ユージインを兄と呼ぶ。それは、知らぬ者にとってはどれだけの衝撃をもたらしたのだろうか。

「何をおっしゃるのでしょうかヘンリク王子、この者は我が国に仕える人間ですぞ」

ふざけた事を言っているとサイラスは口にしていたが、蘭がちらりと視線を動かせば瞳はユージインをしっかりと捕らえ疑いの色を見せている。

シェラルドが示して来た人物は本当にいるのかと、そしてそれがユージインなのかと確信を得ようとしているようにすら感じられてしまう。

「本当に信用できぬのなら、そのような事を言うべきではないでしような」

暗い闇を秘めているような瞳が楽しそうに細められ、ヘンリクはけたけたと笑い声を上げた。何がそうも楽しいのか、疑問を覚えるよりも蘭は驚いてしまう。

そのまま体をくの字に曲げ、更に大きくなったヘンリクの笑い声が辺りに響き渡る中で、周りはまだ呆氣に取られて見守る事しかできない。

そう長い時間ではなかったのかもしれないが、ヘンリクの行動はじゅうぶんに周囲を引き付けた。

口々に不満を漏らしまとまりを見せなかったアンヘリカの民の視

線が集中し、その中に蘭やヘンリック達がいる。

先程よりも確実に、こちらの会話へ民が耳を傾けるのであろう状況が整っていた。

笑い声を潜めたヘンリックが一步蘭へ近づく動きを見せた為、セルアが間に入るように移動する。さすがに全てを覆うわけにはいかずセルアの右腕が蘭を隠すのみだが、ヘンリックは阻まれ足を止めた。邪魔なものを見るようにヘンリックの瞳がセルアへと向く。

「貴様も以前に会っているな。術師だとは思っていたが……金色か」「それがどうした」

背丈が違う為、セルアが見下ろす格好になりながら会話は進められる。

「ウィルナも平和的に会話をする気はなかったという事だろう？
こうも危険な術師を連れてきているのだ。最初からこの場は成り立ってはいなかった」

「術師がここにいて何が悪い？ 俺は姫付きの役も担っている、間違っただけじゃないねえよ」

すでに真つ当な会話ができるとも思わなかったのか、セルアは普段と変わらぬ口調でヘンリックへ答えており、誰もがそれに何を言おうともしていない。

「互いに信用してはいないものを、何故このような機会を作ったのか」

鼻で笑うようにしながら、ヘンリックの目が急に蘭へと向く。

「この娘には以前会っている。右腕を晒して見せるがいい、私がつけた傷跡が必ずあるはずだ」

赤い衣装は腕を隠さぬ為、蘭の肩には薄い布がかけられていた。ヘンリックの憎々しげな眼差しを受けつつも、蘭はただ見据え続けるだけだ。

ざわつく人垣の中から、蘭だと確信するような声が聞こえた。身近な人までもが騙される程に蘭と姫は似過ぎている。しかし、この人は蘭をより知るのだ。姫だと思う方が難しいはずだった。

どれだけの数があれば蘭ではないのかと疑問を覚えていた事だろう。それを今まではっきりと口に出さぬままにいてくれただけでも良いのかもしれない。

そう思いながら蘭はヘンリクと対峙する。

先程よりも更に近い距離で、あと一步踏み出せばぶつかりそうな位置にヘンリクはおり、蘭は何を口にする事がここでの正解なのかと必死に考えた。

「どうした。腕を見せる事はできぬか？ 忌々しくはあるが私と同じ位置に貴様は傷を負っているはずだ」

己の右腕を左手で抑えるヘンリクへ、ユージインの声がかかる。

「そこまでにしておきなさい。ヘンリク」

はっきりと弟の名を呼んだ姿に、全員の視線が集まった。

「……ユージイン」

声を発したのはデールであり、蘭が目を向ければ呆然と信じられないようなものを見たといわんばかりに瞳を見開いていた。

その姿を認めたユージインは申しわけなさそうに口を開く。

「先程呼ばれた時点で無理だと思いましたので、素直に認めましょう。確かに私はシェラルドのマティアスです」

はっきりと正体を口にしたユージインに対する反応は様々だった。どよめく群集、全てを知っているからであろう平然としているシェラルドの従者。そして、得意気な笑みを浮かべて見せたヘンリク。

中でも焦りを見せるのが、サイラスとデールだ。

しかし、すぐにお前かという状況にはならないらしい。先刻の疑いの目はどうしたのかと思える程に取り乱す。

「ユージインがシェラルドの王子ですと？」

まさかと言いたげにサイラスが告げれば、ユージインは頷く。

「ええ。ですが、ウィルナのユージインとしての立場も確かな者だと思っておりますよ」

特に気にする事もないようにユージインが笑いかけると、サイラスからかすれた声が漏れる。

「何を……」

啞然としている姿に、隣にいるデールが言葉を繋いだ。

「本気で言っているのですか？」

サイラスと同じように驚きを隠せない表情のままだが、どうにか冷静になろうとしているらしい。自身で己の腕を強く掴んでいる仕草が目についた。

「ようやく認めていただけましたか、兄上」

ヘンリクが上機嫌で言葉を挟むと、ユージンが眉を潜めて目を向ける。

「貴方が何を思いこした事を言い出したのかはわかりませんが、認めるほかはないでしょう？」

返事をする兄を見たヘンリクは、全ての陰りが取り払われたと思える程に嬉しそうな笑みを浮かべた。以前、蘭がユージンの正体を知った時に見たものと同じ、憧れの者を見るような眼差しだ。

「何を、とは？ 私は兄上に戻っていただきたい。それだけです」

だが、ヘンリクを見つめるユージンの瞳は逆に冷めたものへと変化する。ウィルナでは見る事のできないシェラルドのマティアスとしての顔なのだろうか。

「まだ、その時ではないと伝えただけですが？」

「もう五年以上も経つのですよ？ 私だけではシェラルドは支え切れないのです。お戻りください」

すがるような声を上げるヘンリクだったが、ユージンは受け入れはしない。

「私はただ維持する事を望んだでしょう？ 何故壊すような真似をする」

語尾をきつくしたユージンの言葉にヘンリクの表情が憂いを帯びる。何故伝わらないのか、そう言っているように見える表情を浮かべ、悔しそうに唇を噛んだ。

そうすると、突然その首が蘭の方へと向き憎しみを含んだ鋭い視線が突き刺さって来る。

「それは本当に姫という立場にいる者なのですか？ 私には庶民じみた娘にしか見えない」

ヘンリクの言葉は当たっていた。蘭は決して姫と呼べるような存在ではない。この世界ではないが、ごく普通の庶民的な生活を送って来た人間なのだ。王となるべく教育をされたわけでもなく、驍の行き届いた暮らしをしてきてもない。

しかし、ユージンが肯定するはずはなかった。

「私の仕えるお方に向かって、そのような口を利くのは止めていた
だきたいですね」

家臣である事を止めはしないとユージンの口調は常と変わらず、ヘンリクが酷く衝撃を受けたように更に唇を噛む。そして血の滲んだ口元から、憎々しげに声を絞り出す。

「その娘が本物であるか？」

「ええ」

当然だと返事をしたユージンへ、ヘンリクが初めて兄へ憎むような瞳を向けた。

「ならば……本物だとして、兄上はそれがお気に召したのでしょうか？ だから、命を奪う事なくのうのと暮らしていच्छやるのか！」

どうしてシェラルドへ帰って来ないのか、原因は蘭にあるのではないかとヘンリクは口にする。

「お気に召したかと？ ふざけるなよお前」

姫を愚弄する事に対してなのか、それとも蘭を蔑むような言葉に我慢がならなかったのか、セルアの口調は荒い。

「黙れ！ ふざけているのはどちらだ。金色とはいえども先程から無礼な口を……」

「無礼なのはお前の方だろう？ ウィルナの姫を偽者呼ばわりしているのに比べれば大した事でもねえよ」

するとヘンリクの瞳は暗いままに激しい怒りを灯したらしい。忌々しげに言い放つ。

「貴様を封じる手立てはすでに施してあるのだ！ 何もわかりもせずにもそのような口を利くな！」

まるで子供の癩癩のように喚くヘンリクを見るセルアの口元には微かな笑みが浮かんでおり、これまでの発言は目的を持っていたのかとすら思えた。

「何をする気だ？」

だが、ヘンリクはセルアの表情など気に留めてもいないらしい。自信たっぷりにアンヘリカの民を見回した。

「貴様が下手に動くとその者達が死に至る」

この発言には人垣となった人々がざわめき、散り散りになろうと動き始める。しかし、どうした事か誰もが見えない壁に阻まれるように一定の場所から進めないでいるのだ。押し合うように行き交う人の中を移動する事はできるらしいが、その外側へも内側へも向かう事ができない。輪状の見えない何かがアンヘリカの民を取り囲んでいるようだった。

輪の内側でまるでガラスにでも張り付いているかのようになった者が、後ろから押し寄せる力に無理だと声を上げる。しかし一度もたふされた混乱は容易に静まるはずもない。逃れられないという嘆きと共に激しさを増すばかりだった。

「そうして押し合う事でも傷付くかもしれないな。ウィルナがおかしな動きを見せぬ限りは、ただ囲われているだけだ。おとなしくさえしていれば怪我をする事もないだろう」

押し合う人々を見ながらヘンリクが薄笑いを浮かべ告げれば、人垣の中はわずかに落ち着きを取り戻したようにも見える。マルタが声を張り上げている姿も見え、そこで発された内容に蘭は思わず息を飲んだ。

「どうしてこの話を受けたのか、あんたらもじゅうぶんにわかっただろう？ あたしはアンヘリカの意志を尊重する」

はっきりと言葉にはしないが、マルタは蘭がいるからこそ人垣を作る事に同意したと告げているのだ。ウィルナの姫ではなく、アン

ヘリカの救い主となるはずの蘭がいるからこそ許した。

するとアンヘリカの民の視線はこちらへ集中してしまう。あの場にいるのが蘭ならば、何かが起こるのではないか？ 期待を含んだ眼差しが突き刺さるように向かってくる。

(……どうして)

ただ一枚の板を読んだだけだというのに、何故そこまでアンヘリカの意志というものを信じる事ができるのか。そうなのだろうと覚悟を決めたつもりではいたが、蘭は己に課せられたものの重さと不確かさが恐ろしくなる。

マルタの発言は、アンヘリカの民と蘭とセルアとユージンにのみ伝わるものだ。ヘンリクは驚く程に静まった人々へ眼を向けると、満足気に笑んだ。おそらく自身の言葉が伝播したと捉えたのだろう。「想像通り、こいつらは人質か」

罠に違いないと足に向けてはきたが、セルアは知らされた事実に眉を寄せているらしい。口調と視線がヘンリクへの嫌悪をはっきりと表した。

「自国の民ではないが、ウィルナとアンヘリカは随分と懇意にしているのだろうか？　ここへ呼び出したのはウィルナであり、これだけの命が奪われる状況を作り出した責任はそちらにあるというもの……貴様が何かをするなら、これらの朽ちる姿を楽しんでもらう」

ヘンリクにとってアンヘリカの者に嫌われる事など、気にかかる必要もないようだ。ただアンヘリカの民の命はウィルナのせいで危機にさらされていると告げる。

そしてそのまま狂ったような大きな笑い声が立てられ、周囲の視線は一気にヘンリクへと注がれた。ユージンもよく笑みを浮かべている姿から、笑うという点は似ているとも考えられるがさすがに何かが違っている。ヘンリクは何故こうも笑い続けられるのかと、蘭はただ視線を向け続け姫であろうとしていた。

この状況をお前にはどうする事もできないだろう？　そう言いたげなヘンリクの瞳が向けられ、セルアは更に眉を寄せる。

「この話はウィルナとシェラルドのものであって、あくまでアンヘリカは中立の立場だ。関係のない者を巻き込むな。いったいそっちに何の得があると言える？」

当然の主張はヘンリクには響かないのだろう。嫌な笑みを引っ込めると言い切った。

「関係のないものか。どうせこの話は決裂する。そうなれば、戦いが起こり皆死ぬだろう？　それが少しばかり早まるだけの事だ。嫌ならば兄上をこちらへ引き渡せ」

「お前の望みはそれか」

セルアの言葉にヘンリクは口端を吊り上げる。

本当に兄を取り戻す為だけに起こした事態と認める様子に、黙って流れを見つめていたユージンが重く口を開いた。

「私は今、シェラルドへ戻るつもりはありません」

「ならば、これらは全て駄目になります」

ヘンリクは譲るつもりがないらしい。だが、ユージンもそのまま聞き入れはしなかった。

「それを許すわけにもいきません。セルア、貴方ならばあの術をはね返せるでしょう？」

蘭の前に立つセルアは、ぐると周囲を見渡しながら告げる。

「できなくはないが、向こうの術師の命は保証できねえぞ」

セルアの表情は明らかに嫌がっていたが、答えるユージンの瞳に迷いは見られない。

「それでも構いません。これだけの人数を質にしようとしたのですから、相応の報いを受けていただきます」

「……………何十人の術師がいるかは知らねえが、アンヘリカの人数と比べれば少ねえもんだ。そっちが仕かけて来るなら返すって事でいいか？」

自らは攻撃しようと思っていならしいセルアへ、ユージンも頷く。

「構いません」

「だが、そうになると俺はランを守れねえ。三人でやれるか？」

言葉を聞いてすぐに蘭の前に立ったユージン、そしてサイラスとデールが両脇に足を進める。全員が腰に剣をぶら下げており、手をかけながら頷く。

「するほかはないでしょうね」

ユージンが告げると、蘭の右隣にいるデールが口を開いた。

「ユージンの正体がどうと言っている場合ではない、姫もアンヘリカも守るべき時ですね。サイラス殿？」

「異存はない。全てはここが終わってからでも遅くはないようですな。しかし我々は随分と問わねばならぬ事があるようですぞ？ いったい姫は何を考えておられるのか、困ったものですね」

左隣にいるサイラスもしっかりとシェラルド側を見つめている。

マティアスと名乗りながらも、確かにユージンはユージンのままだったと蘭は己を取り囲む三人を見た。

疑問を抱きつつも今すべき事の為には共に立ち向かう。敵と味方の線引きはいったいどこにあるというのか、共に過ごす事で得た信頼がそこにはあった。

ただ、それがウィルナとシェラルドの間にはないだけではないのかとも思えるのだが、どうしたなら状況を変えられるのか蘭には思い浮かばない。

「なら、任せた」

セルアはそう告げると、蘭の前に伸ばしていた腕を下ろし、わずかに離れると座り込んだ。地面に片手を置き、何かを探るように手のひらを動かして見せる。

こちらの状況を認めたらしいヘンリクが小声で何かを言うと、周りを囲んでいた従者達が動き始めた。全員が剣を持ち、こちらへと素早く足を向ける。

サイラスとデールが一人ずつ、そしてユージンへは二人が刃を向けたが、こちらは先から身構えていたのだ。受け止める事はできなかった。

そうなるに残されるのは守られている蘭と、この光景を眺めているヘンリクだけになる。

満足気に目を細めたヘンリクの眼差しを受け、蘭の背筋に寒いものが走った。剣を持つ全員が牽制しあう状況を避けるように、ヘンリクがゆっくりとこちらへ足を向けてくる。

ウィルナはシェラルドの者を傷つける事も許しはしない。蘭は姫としてはっきり告げていたのであり、誰もがそれを守ろうとしているはずだった。自身の正体を疑うような発言をヘンリクには向けられているが、はっきりとした答えが示されているわけではない。サイラスもデールも姫が先視みによって成そうとしている何かを信じて行動しているはずだった。

（どうするべきなんだろう）

このままでは危険だと承知してはいるが、蘭の体は強張るばかりで思うように動きそうもない。側にいた三人も剣を扱う為もあり最低限の空間を必要としている。確かな守りがあるわけでもない蘭へ、ヘンリクは悠然と足を向ける事が可能だった。

自分以外の者の手が塞がれている状態で、蘭は何一つ身を守る物を手にしていない。未来を信じるという不思議な状態のまま、ウィルナの姫の姿をしているだけなのだ。魔力を体に溜め込んではいないものの、術を使う方法などは知らず自身の非力さを痛感させられる。本物のウィルナのランならば、己の髪を使い術で対抗しなくてはならない。しかし、そこまでの代役は無理なのだと、ただ立ち尽くしヘンリクを見つめる。

「貴女が本物ならば、術をお使いになるのだろうか？ 随分と顔色が悪いようだが、いかがなされたか？」

いつかのようにヘンリクの剣先が眼前へ向けられ、蘭は一步足を引いた。

「結局狙いはそれか……」

このままでは無理と判断したのかセルアが声を上げ、目を向ければ地から手を離そうとしている姿が認められる。しかしヘンリクが

許すはずもなく、アンヘリカの民の命を示された。

「そこを離れればこちらは術を発動する」

「どっちもさせはしねえよ」

先程とは逆に見上げる格好になったセルアは鋭い眼差しをたたえていたが、ヘンリクは余裕があるらしく軽く口端を上げるばかりだ。

「ほう、無理な事を口にするな。ならばやるまで」

ヘンリクが空いた片手を上げると、ユージインの手を止めていた従者の一人が剣を下ろし、人垣に向かって足を伸ばす。

「あれが起動させるぞ？ それでも手を離すか？」

言葉と共に近づく男の姿にアンヘリカの人々はざわめいた。間近に迫っている死に怯え恐怖におののきながらひしめく姿は、止められそうもない。

このままでも怪我人が出るであろう状況に、手を離す事ができないらしいセルアは憎々しげに口元を引き結んだ。するとそこでユージインが声を上げる。

「ヘンリク、この者の剣を下ろさせなさい」

残された一人と対面しつつも言葉を発したユージインへ、ヘンリクが目を向けた。

「兄上はウィルナへと身を墮とされてしまわれた。私には聞き入れる事はできません」

もう憧れを含む瞳を見せはしないらしい。失望と憎しみが混ざり合あったような奇妙な表情のヘンリクへ、ユージインはただ同意する。

「なるほど……私がマティアスの名を捨てたと判断しましたか。まあ、ここまでの状況を作るにはそこまで思わせる必要があったのでしょうか」

「何故、否定なさない。兄上はシェラルドの王でなくてはならなかったというのに！ どうしてウィルナを愛される」

二人の会話は互いに顔を付き合わせるでもなく続けられた。ヘンリクは蘭に向かい剣を構え、ユージインは目前にいる自身の家臣で

あるべき男と剣を持ち牽制しあっている。

「私がウィルナを愛している？ 本当にシェラルドを捨てたと思っ
ていると？ 私はいまだにシェラルドでの地位を捨てた覚えはあ
りませんよ。先視みの力を持って命じる。下がれ」

ユージインはヘンリックに語りかけるようで、目の前の男にも言葉
を向けていたらしい。唐突な命令は何かをもたらしたい、ユー
ジインはあっさりと敵対する者の戦意を削いだ。

そうして振り返ったユージインは、何故かヘンリックへは目を向け
ず蘭をしつかりと見据えてくる。

「ヘンリック、貴方はあくまで私の代理なのですよ。先視みは私が手
にしているのであり、生死を決める事すら許されるのです。幼少の
頃より悪しき未来を持つと言われた貴方よりも、私は信じられるべ
きでしょう。さあ、貴方は私に刃を向けるべきではなく、そこにい
るウィルナの術師の動きを確実に止めなさい」

言葉の後半はシェラルドの者に向けられ、これまでユージインへ
刃を掲げていたはずの男が迷いなくセルアの首へ剣を構えた。

「ユージイン……お前」

地に手を着いたまま見上げたセルアの瞳は揺らいでいるように見
える。蘭自身も今の状況へうまく頭が追いついていけない気がしなか
った。

ユージインはいったい何をしようとしているのか。ウィルナでの
身分を捨てぬままにマティアスへ成るとは告げていたが、今の彼は
どちらなのかわかりはしない。

「どうしました？ 私はユージインでありマティアスでもあると言
ったでしょう？ 立场上こうなる事は仕方がありません」

サイラスとデールは身動きが取れないままであり、蘭は今ヘンリ
クに剣を向けられていた。セルアも同じく命を危機にさらされてい
るのであり、ユージインと術を起動できるらしいシェラルドの男一
人が自由の身になっている。

「仕方がねえだど？」

首元に刃を突きつけられまませルアが声を上げたが、ユージインは言葉を返す気がないらしい。

「金色に動かれては困りますからね。いつでもアンヘリカの民を殺す術を発動できるように身構えていなさい」

全員の動きが決まり、ただ一人自由にしているとユージインは足を進める。視線だけはこちらに向けていたユージインが蘭の側へ近づき、ヘンリックとの間で笑みを浮かべた。

「お二人共、随分と困惑されているようですね？　ヘンリック、剣を下ろしなさい」

表情を見るだけならば、彼はユージインと呼ぶべきなのだろう。しかし状況はとんでもないが、ウィルナの為とは言えそうもない。

「兄上は何をお考えなのか！」

混乱は特にウィルナだけに与えられたものでもないらしく、ヘンリックが剣を下ろせという発言に逆らうように更に蘭へと刃を近づける。

「この状況になってもわからないと告げるつもりなのですか？」

「兄……上？」

しかしユージインはおかしな発言を続けるのであり、ヘンリックもはつきりと戸惑いを浮かべた視線を兄へと向けた。するとユージインは眉を潜めながら冷めた笑みを浮かべる。

「ヘンリック、貴方は今何を望んでいますか？」

「……兄上がシェラルドへお戻りになられる事こそを望んでおります」

何故問われているのかもわからないと不思議そうにヘンリックが告げれば、ユージインは更に表情を厳しくさせた。

「私は、今を聞いているのですよ？」

「ならば、そのウィルナの姫と呼ばれる娘を斬り捨てたいと心より願っております」

このわざとらしい質問は何なのかと、蘭は目前にある切っ先におのきつつも聞き入っていれば同じように問われる。

「そうですか。ラン、貴女は今何を願っていますか？」

「わたしが？」

理解できないままに聞き返せば、ユージインに小さく笑われた事がわかった。

「そう怖い顔をしないでください。現状で貴女は何を願っているのか、教えていただけますか？」

このユージインが何をしようとしているのかもわからない現状で、いったい何を望めるというのだろうか。ユージインとヘンリクを除く人物の動きは封じられ、おかしな会話ばかりが続いていく。

「今、この場がどうなって欲しいのか、ですよ？」

決して未来ではなく今についてを語れとユージインは言っているのだろう。ヘンリクにもユージインがシェラルドへ戻るという点ではなく、こちらを斬り捨てたいという考えを口にさせているのだ。同じように現状に対する感情を吐き出す必要があると考えた。

（何か、意味があるって事？）

ユージインは先視みの力にすぐるとさえ告げたのだ。蘭とセルアの未来は陰っていないのであり、それを信じて道を探そうとしているはずだった。

（ユージインは本当に姫様が戻ってくる事を望んでいる）

信じ切れない状況にはなってしまうているが、ユージインは結果を得る為に今を作り上げたのかもしれないと蘭は口を開く。

「わたしは……ここに居る全員が無事でいて欲しいと思ってる。そして、早く姫様に帰ってきて欲しい。今こそがその時じゃないの？」
セルアやサイラス、デールというウィルナの人物。そして、魔力によって身動きを封じられたアンヘリカの人々。こちらの動きを牽制する為に準備されたらしいシェラルドの従者達。

蘭の視界で知る事ができる部分だけではなく、そう遠くもない場所にはたくさんのウィルナの者達がいた。それはシェラルドも変わらないはずであり、だからこそ人質を留める為の術を使う事が叶っているはずだった。

ユージインはヘンリクを殺さなくてはならないという感情で、シエラルドを飛び出してきたのだと告げた。そして、アンヘリカを手に入れなくてはならないという恐ろしい感情からも逃れてウィルナへやってきた。

そして姫はアンヘリカの土地を潤おそうとしながら、ウィルナの国土を広げる為の道を探していたのだ。

アンヘリカの人々もアンヘリカの意志を信じ、救いというものを求めている。

誰もが戦うという状況を強く望んではないのだと蘭は考えた。

「戦う事が目的じゃなくて、わたし達だけが生き残るのでもなくて、みんなが平和に暮らせる為に動いてきたはずでしょう？ それは誰も変わらないはずなの」

きっかけとなった事柄は違うが、目指しているものはそう変わりもしないはずなのだと言えればユージインの瞳は随分と優しく微笑んだ。

「ようやく、目的を達成できそうですね。二人の願いは違っていても、未来は決して悪くはない。ヘンリク、貴方が行動し何かが変わるかもしれません、彼女を追ってみなさい。そして、ランはどうにか生き延びようと頑張ってみてください」

しかし投げかけられた言葉は、表情とは全く似つかわしくない恐ろしいものだった。

「ユージイン？」

「兄上？」

間逆の立場である蘭とヘンリクが思わず名を呼べば、ユージインはわざとらしい笑みを浮かべて見せる。

「先視みにより、私はヘンリクがランを追うべきなのだと判断したのですよ。貴女は真剣に逃げる必要があります、ヘンリクは確実に彼女の命を奪うという覚悟を見せるべきなのでしょう」

あまりにもおかしい発言に、蘭は身動きも取れずにユージインへと視線を向けてしまっていた。だがこちらへ刃を向けているはずの

ヘンリックも、兄の不思議な言葉に戸惑ってしまったらしい。特に何かをする気配は感じられなかった。

「ラン、とにかくそこから離れろ！」

セルアの声が降りかかり、蘭はユージインに向けられた内容をはつきりと受け止める。

（そうだ、逃げなきゃ）

ユージインは先視みにより蘭は逃げるべきであり、ヘンリックは追うべきと結論づけたのだ。

これまでも命が危機にさらされるような事態にはなったが、蘭は全てをどうにかやり過ごしてきた。今回も同じように自身で新たな何かを掴まねばならないのだと、とにかく身を翻した。

刃を構えたまま兄に意識を捕らわれているヘンリックの手から逃れる事が、今自分のすべき事なのだと蘭は生き延びる為の道を探そうと足を踏み出す。

だが、この空間は蘭がどこかへ行こうとしても円状に囲われてしまっているのだ。隠られるような場所もなく、以前のようにクロードが間に割って入る事も叶わない。セルアもアンヘリカ全員の命を抱えた上に、首に剣をあてがわれてしまっている。

逃げたくとも逃げられるような場所は存在すらしていなかった。

とにかく走らねばと足を進めていると、ヘンリックも兄の言葉を理解したのか蘭へと足を向けてくる。元より蘭を斬りたいと公言しているのだ。何を迷う必要があるのかと、獲物を見るような鋭い瞳が振り返った蘭の目には映る。

（いったい、ユージインは何を考えているの？）

身動きの取れない者ばかりがいる中で、蘭はひたすらに円の中を駆けるという行為と共に考えを巡らせた。

だが答えなど見つかるはずはない。ユージインは目的を達成できそうだと口にはしたが、果たして内容は蘭やセルアが望んでいたものと同じだったのだろうか。アンヘリカでユージインからマティアスに成ると告げた中に潜んでいる真実が現状と考えるなら、一つで

はなく全てを選ぶにはこうした流れは本当に必要と言えるのか。

（本当に……先視みは今でも良い未来を映し出しているの？）

蘭は今姫としての衣服をまとっているのであり、足元はブーツに覆われ決して走りやすいとは言いがたかった。そしてあまり運動が得意とは言えず、更に砂の上は非常に身動きが取りづらいものなのだ。

細身とはいえヘンリクも体力がないわけではないらしい。小柄と言えどこちらよりも長身であり、歩幅の差が徐々に蘭との間合いを縮めていく。

（このままじゃいけない）

自身に危機が迫っている事はわかっている。このまま駆ける事で逃れられるのならば、そうしたかった。しかしどんなに足を進めても、蘭はヘンリクから遠く離れる事はできなかった。

必死に走りながら蘭は考えようとする。どうしたら、この状況は変わるのか？

しかし、解決するような名案が浮かぶ事はない。

透明な囲いの中を永遠に走り続ける事などできるはずもなく、蘭の息は切れ、足はもつれがちになった。

「貴様さえいなければ……」

間近に迫った声に恐怖を覚えながら、蘭は倒れ込むように壁にぶつかる。両手を着いた透明な壁の向こうにはマルタとクロードの姿があり、互いの瞳が一瞬だけ邂逅した。

「ラン！」

クロードが発した声の響きから背後の危険を察知する。どうにか体を反転させると、目の前には予想通りヘンリクがおり、剣先がこちらへと向けられていた。

「もう、逃げぬのか？」

何が楽しいのだろうかと思う程にヘンリクは口端を上げて蘭を見下げる。これからするであろう行為に対する疑問は特に持ち合わせていないのだろうか、蘭は瞬きもできないままに壁に背を押し付

けヘンリクを見つめ返した。

走った事と恐怖からくるものなのか、蘭の喉は乾き声が出せるような状況ではない。

ただ正面にいるヘンリクを見据え、はやる胸の鼓動を感じながら壁に体を預けるだけだ。

「答える気はないのだな」

以前はソニアと共に見た景色とよく似た場面は、蘭に妙な懐かしさを抱かせる。あの時も死を感じてはいたが、今回こそは逃れられないのかと恐怖に身が包まれた。

「ヘンリク、待ちなさい」

するとそこにユージンが声を挟み、ヘンリクは剣をこちらへ構えたままに首のみを動かす。

「どうやら金色が言いたい事があるようです。聞く時間を惜しむ必要もないでしょう？」

何故か弟へ瞳を向けるユージンは冷めた表情ばかりを見せる。

決して優しい笑みを浮かべはせぬままに、セルアの現状を口にした。

「ユージン、お前は何を考えてる？」

蘭と同じようにたくさんの疑問を抱えているのだろう。地に手を着くセルアは、迷いを感じさせる視線をユージンへ向けていた。だが現在のユージンがそちらへ目を向ける事はなく、随分と恐ろしい笑みと共にヘンリクへ言葉を放つ。

「何を考えているかと問われれば、先視みの行く先を信じて行動しているとなりますね。今、この囲われた空間の中に未来の悪い者は存在しません。ヘンリク、貴方にも理解できるでしょう？」

この時、蘭には発言の意味がすぐにはわからなかった。しかし、目前にいるヘンリクが驚いたように目を見開いた後に、呆然と言葉を紡ぐ姿に理解する。

「……私の未来が、良い……と？」

ユージンはヘンリクの悪しき未来から逃れる為にシェラルドを飛び出したのだ。それが今、本当に先視みが存在しているのならば、

何かを変えてしまったのだろうか。

信じられないと兄を見据えているヘンリクへ、ユージインは不気味な笑みで頷く。

「ええ、ここへ辿り着くまでに随分と苦勞をさせましたね。貴方の未来は確かに悪しきものから変化しつつある。私の願いは一つ叶ったと言えるでしょう。そして、これだけで終わらせるつもりもないのですよ。セルア、もし貴方が命を失う事態となれば、ウィルナの姫も同じ末路を辿るでしょう?」

突然に言葉の矛先を変えたユージインは、蘭にとっては初耳である内容を口にした。もしもセルアが死んでしまったならば、姫すらも命を落とすのだとおかしな事を告げる。

「お前、何をする気だ?」

だがセルアも否定はしない。ただユージインの発する内容に恐れを抱いたように声を荒げる。

それと共にサイラスとデールも混乱したままに意見をぶつけてきたが、ユージインは全てを一蹴するように蘭へ瞳を向け口を開く。

「私はこれから貴方が最も嫌がるであろう道を選びます。その為にはセルアが身を挺して彼女を救う事を避けたかった。偶然なのか必然なのか、たくさんの贅を貴方は抱え込んでしまったでしょう? ウィルナの姫と命運を共にし、アンヘリカの民を失う事による損害もじゅうぶんに理解できる立場にいる。動けるはずがないでしょう? ヘンリク、よく私の意図を汲んでくれましたね」

いつからユージインはこの状況を予見していたのだろう。いや、もしかするとシェラルドと何かしら情報のやりとりをしていたのかもしれない。書状には契約文字でマティアスに向けた言葉が込められていた可能性も拭いきれず、事実だとしても本人以外には知りようがなかった。

「お前……ユージインじゃなかったのかよ!」

セルアは信じた者に裏切られたと声を上げ、蘭もユージインの真意がわからないと同意すらしそうになる。しかし当人はまるでユー

ジインのような柔らかな笑みを浮かべ、こちらへと足を運んできた。「何を言っているのです？ 私はユージンであり、マティアスでもあるのですよ。決して間違った事を口にはしているとは思いません」ヘンリックから逃れようとして追いつまれた蘭の前へ姿を見せたユージンは、本当にマティアスになってしまったようだと思わされる。

そうして見慣れたようで知らぬ空気をまとったまま、ユージンは更に恐ろしい事を口にする。

「ランも未来を信じると言ったでしょう？ どうやら先視みは貴女の命を欲しているようです。せめて苦しむ時間を減らす事が、私にできる最後の仕事でしょうか」

首を傾げて笑む姿は見知っているが、まさかこちらの命を奪うと告げられるとは思えない。

「ユー……ジン？」

乾き切った喉から微かに声を出す事は叶ったが、こちらを眺めるユージンは表情も変えずに笑んでいるだけだ。

「私が兄上の願いを叶えてみせます。是非とも役目を」

ヘンリックがマティアスの為にと熱望し、兄は仕方がないと言っても言いたげに苦笑する。

「ならば、お願いしましうか——ヘンリック」

ユージンは面を一度ヘンリックへ向けると、やけに嬉しそうな表情で蘭を見つめ直し告げた。

「申しわけありませんが、死んでいただけですか？」

その言葉と共にヘンリックが腕を振るう。

戦う術を持たぬ蘭が剣を受け止める事は不可能だった。

一瞬とも思える出来事が何故か不思議な程ゆったりと、まるで全てがこま送りかのように蘭の目には映る。

向かってくる刃。

危ないとわかってはいるが動く事のできない自分。

透明な壁に背中を預け、行き場の無い己を嫌という程に実感しな

がら煌く刃を眺め続ける。

そのまま剣が胸元を刺し貫くと共に、蘭は目を大きく見開き勢いに抗う事もできぬまま背後にもたれかかるように崩れる。

ずるずると体が下へ滑り、目の前にあったヘンリクの姿ではなく高く青い空が蘭の瞳には映り込んでいたはずだった。

しかし見えるのはこの世界ではなく、自身が生まれ育った場所の景色だ。幼い頃からの記憶がまざまざと蘇り、蘭はそれらをゆっくりと眺めるようにしていた。

長い、随分と長い時間に感じられた。

だが、それと共に訪れた衝撃は確かに蘭に激しい痛みを与え、顔は苦痛に歪む。

周りで様々な声が聞こえているような気はしたが、それが誰のものであり何を言っているのかを考える余裕など全くない。

ただ、どうしようもない絶望感が浮かび、どうする事もできない自身を悟ってしまう。

（わたしは死ぬ？）

そう思う中でふと脳裏に浮かんだのはセルアの事であり、蘭はそれが何を意味しているのかと考えようとしたが、薄れ行く意識は許そうともしない。

何故ここへ足を伸ばしたのか？　そう思える程に何もできないまま、蘭の意識はぶつりと途切れた。

終章・君がいる世界

「蘭！」

何度も自身を呼ぶ声に、蘭はもやがかったようにぼんやりとした頭で考えた。何故こんなにも必死に名を呼ばれているのかわからない。

何か酷く疲れているような気がし瞼を開ける事すらも億劫だと、蘭は再び眠りに引きずり込まれそうなまま声の主の名を呼んだ。

「セルア？」

「どこか痛いとかはねえのか？ 大丈夫か？」

これまで何をしていたのかもはっきりとしないまま、蘭は心配そうにかけられた声に驚く。

側にはセルアがいるのだとばかり思っていたが、どうやら違うらしい。不慣れな発音で言葉を紡ぐ相手は誰なのかと、慌てて瞳を開く。

「だ……れ？」

必要があり呼びかけられていると思える声と共に、蘭はのぞき込まれていたようだ。自分よりも焼けているらしいが似た肌色に、黒髪と濃茶の瞳を持った人物が随分と間近でこちらの様子をうかがっている。

（知らない人……だよな？）

どこか覚えがあるような気もしたが、特徴と合致する者を思い出せない。蘭は真上にある顔を見つめながら瞬く。

すると相手は酷く眉を寄せながら言葉を返してくる。

「誰とはなんだよ？ 俺に決まってるだろうが」

眉を潜める仕草がやけに見慣れたものに思え、蘭は確かめるように瞳を動かす。あまりに近い為に顔以外を確認する事はできないが、どうもセルアに似ているように感じられた。しかし明らかな違いがあるからこそ、言葉もないままに相手を見つめる。

「どうした？」

蘭は仰向けに寝転んだまま、かけられた言葉すらも無視して相手を眺め続けた。こちらへ向けられている表情は心配しているであろう事がはっきりとわかるものであり、例えば色が違えどもこの人物はセルアなのだろうかと思ひ始める。

しかし、あまりにも見慣れぬ色合いが蘭に不安を抱かせる。

「大丈夫か？ 蘭」

男から発せられた台詞はどこか発音が不自然であり、名を呼ぶ時だけが耳慣れたものに聞こえた。ずっとお前呼ばわりだったはずの、いつの間にか蘭と呼んでいた声が自身に向けられているように感じられてしまう。

浅黒い肌に鋭い碧の瞳、そして癖のある金髪が見知ったセルアの姿だった。しかし目の前にあるのは、蘭とあまり変わらぬ肌の色を持ち、髪は黒く瞳は濃茶の人物なのだ。

「何……？ セルアなの？」

まるで別人ではないかと思いつつも名を呼べば、目の前にある顔がはたと気付いたとばつが悪そうに変わった。同時に右手が髪をかき上げる仕草も見慣れたものであり、やはりこれはセルアなのかと蘭は考える。

「悪い、色が変わってるんだった」

ユージンも色を変え城内へ入ったと告げていたのであり、ここでは可能なものだった。顔形はセルアと合致する人物が言うのだから、色を変えたという事なのかもしれないと蘭は問う。

「……どうして色が違うの？ 肌もだし……話し方も変だよ？」

「ああ、色々あってな」

蘭が変化を認識したからだろうか、間近にあったセルアの顔が遠ざかり起き上がると共に上半身が目に入る。それがまたとてつもない驚きをもたらした。

セルアは服装も違っており、蘭の目には黒いTシャツにジーンズ姿というあり得ないものが映っている。

「ちよつ、ちよつと待つて！」

慌てて体を起こし周囲を見渡せば、またもあり得ない光景が蘭の瞳には飛び込んでくる。

ウィルナやアンヘリカでは建物は基本的に石で造られており、四角く切り出した物を積み上げて形成されなくてはならなかった。しかし今ある光景は、ある意味蘭が見慣れたと思わなくてはならない造りをしている。

室内はどうやら八畳程のフローリングであるらしい。テレビやソファ、テーブルが置かれている。思いもしない状況に自身がどこにいるのかと確認をすれば、蘭はパイプベッドの上におりセルアが載せられた布団の端に腕を着く格好でこちらを眺めていた。

「な……な、な、なんで？」

壁に押し付けられるように置かれているベッドからは、身を起こしていれば簡単に窓の外を眺める事ができる。

サッシの入ったガラス越しに見える景色は明らかに住宅街であり、ここはマンションか何かの一室なのかと思われた。

蘭は何も言えぬまま窓の外へと目を向け続ける。今度は目先だけではなく体をベッドの端へと移動させ、窓際からしっかりと景色を見た。ウィルナやアンヘリカでは見受けられない風景は、蘭のよく知るものだ。アスファルトで舗装された道があり、塀があり家屋が並ぶ、アパートやマンションの姿も見え、どうやらここは本当に住宅街の一角らしいと認識する。

本来自身がいるべき世界と確信せざるを得ない光景に、蘭はわずかに持ち上げていた腰を力なくベッドへ落とし掠れた声を漏らした。

「帰って来た……の？」

見知らぬ世界で目覚め、帰る事をずっと目標としてきたはずなのだ。願いが叶ったと言える状況ではあるが、蘭はただ混乱するばかりだった。

（わたしはさっきまで何をしてた？）

眠りから覚めたと理解しているが、それ以前がすぐには思い浮か

んで来ない。

(どうして帰ってきてるの?)

優先すべき事柄がわからず、とにかく色々と考えを巡らせようとしても蘭の頭はうまく働いてはくれなかった。無意識に長い己の髪を掴み、眉根を寄せて考える。

追いつけない自身の気持ちをとにかく落ち着けなければと、深く呼吸を繰り返す。

そうしてゆっくりと一つ一つを考え始め、はっと脳裏に浮かんだ映像と共に蘭は呟いた。

「わたし……アンヘリカで」

ヘンリク達と会い、刺されたのだ。まざまざと蘇った記憶に蘭は息が止まりそうになる。

恐る恐る胸元に目を落とすと、衣服が破れ肌が見えていた。あまり大きくはない穴に手を差し込んでみたが、肌は傷一つなく滑らかだ。

おかしいと蘭は首を捻る。

嫌な感覚がはっきりと記憶に残っているのだ。

確かに自分は刺されていると蘭は服の中を何度も覗き込むが、やはり傷は見受けられない。布自体は破けているのにどういう事かと考えていると、同じように覗き込んでいるセルアに気付く。いつの間にかベッドに上がり隣に並んでいたらしい。

「ちょっと、何で見てるのよ!」

慌てて胸元を隠すと、不満そうな表情が目に入った。

「別にいいだろうが、俺だって心配してんだ」

この口ぶりにああやはりセルアだな、と思いつつも蘭は改めて聞く。

「……本当にセルア? それにここって」

窓の外に見える景色から答えがわかっている気はしたが、聞かずにはいられなかった。セルアは口端をしっかりと上げた後に答える。

「俺はセルアだ、ここではこの方が暮らしやすいからな。そして、

間違いなく蘭がいた世界だ」

黒く変わった己の髪を軽く摘んで見せたセルアに、蘭は聞き返そうとしたが上手く言葉が出て来ない。驚いているのか喜んでいるのか、よくわからない感情に戸惑い一つもどうにかセルアを見つめ続ける事で何かを訴えた。

「あり得ねえと思えるだろう？　だがな、これが現実なんだよ」

そうして返って来た言葉と表情はやはりセルアのものであり、蘭は不思議に感じつつもやはり納得するほかはないのかと思わされてしまう。

「でも、わたし刺されて……」

嫌な衝撃がはつきりと思い出せる程、それは記憶に刻み込まれている。だが証明する衣服の破れはあるものの、いくら確かめようと中身の蘭自身には傷一つない。

あの時確かに自分は死ぬと思ったのだ。鋭い刃に貫かれ、走馬灯のような思い出を見つつ意識を手放した。飛び交う様々な声をうまく聞き入れる事もできないままに絶望していたはずだった。

セルアは何も言わずにこちらを見つめていたが、しばらくの間を置いた後小さく呟くように告げる。

「死んだ。蘭は胸を刺され、死んだんだ」

酷く暗い表情は本当にこちらが命を失う場面を見たと感じられる気もしたが、どうしてもおかしさは拭えない。

「死んだ？」

ならばどうして自分は動いているのか。死を迎えたのならば、何故こうして話をしているのかがわからないと聞き返す。

「おかしいと思うだろ？　俺だってそうだ」

あぐらで座るセルアは片手を伸ばすと、確かめるように隣にいる蘭の髪に触れた。

「だが、すぐに蘭に溜まっていた魔力が噴き出した」

「噴き出す？」

暴発したという事かと思うと、どうやら違うらしかった。

「元に返したってどこか、見ていた俺でもはっきりとは説明できねえ」

セルアが言うには、蘭は刺されて確かに絶命したらしい。地面に倒れこんだ蘭をセルアとユージン、クロードや周りにいた人々は確かに見た。剣に貫かれたまま鼓動を止めた蘭の姿をたくさんの人が目撃していたらしいのだ。

だがそれも一瞬の事であり、蘭の体からはまばゆい光を帯びた魔力が噴き出し誰もが目を開けられない事態に陥ったという。

「とんでもねえ光と風で、あの状況をしっかり見ていた奴なんて一人もいないはずだ」

これを聞いた蘭はやはり魔力の暴発なのではないかと思う。セルアが暴発した際に浴びた風も目を開けられない程に強いもので、蘭は体に細かな傷をいくつも負ったのだ。

しかしセルアはあっさりと否定をする。

「誰も怪我なんかしちゃいねえよ。風は強かったが、俺の暴発とは別物だ。次に目を開けた時にはアンヘリカ中、いやウィルナからシエラルドまでの間、全てが植物に覆われていたんだからな」

「植物？」

今度は何を言い出したのかと蘭は驚くばかりだが、セルアにふざけた様子は一切見られない。

「ああ、そうだ。砂ばかりだったはずの土地が、緑豊かな土地に一瞬で変わっちゃったんだ。砂が土になり、木が生い茂る。後から調べてわかったんだが、水脈すら増えてたみてえだな」

セルアの話す内容をただ聞いているだけではわからない事ばかりだった。自分が刺され、魔力が噴き出し、緑が生い茂る。

「どういう事……？」

更に詳しい内容を知りたいと蘭は口を開いたのだが、セルアは軽く笑っただけだった。

「俺にだってよくはわからねえよ、ユージンだろうが誰だろうが、はっきりとした事は知らねえ。その後にあったのは、蘭が倒れてい

た場所には違うランがいただけだからな」

「違う………蘭」

一つ呟いた後に、それは本来いるべき姫の事なのだろうと蘭は気付く。

「姫様が帰って来たの？」

蘭が身を乗り出した為にセルアに掴まれていた髪がするりと手から抜け落ちる。

セルアは大きく頷くと、何を思い出したのか随分と顔をしかめた。
「ああ、あいつは何事もなかったみてえに立ち上がり、こっちに向かって言いやがった」

ようやく帰れたようだ。

その一言だけでもセルアとユージィンは蘭ではなくランだと気付いたらしい。

溜息をこぼしながらもセルアは言葉を続ける。

「見た目も声も一緒だが、蘭とあいつは全然違う。まあ、あの光景のおかげで後々楽な部分もあったんだがな」

「楽？」

「人が死んだと思ったら光り、そして普通に起き上がって話したんだぞ？ 周りの驚きようはとんでもねえって話だ」

詳しい情景を思い浮かべる事はできないが、とにかく倒れたであろう自身が起き上がる様を蘭は想像した。

「それを上手く利用した結果、あいつはもう神様扱いだ。ウィルナとアンヘリカとシェラルドを救った女神様って事になる」

蘭の常識とはかけ離れた世界ではあったが、さすがに一人が蘇る姿は人知を超えたものに映ったのだろうと頷けばセルアは面白そうに笑う。

「ちなみに蘭を知っている奴らは皆、お前が神様だと思ってるぞ」

「わたしが？」

思いもしない発言に蘭は疑問を口にし、セルアは更に笑い声を上げた。

「アンヘリカでは蘭がいて、世界を救って帰ったって事になってる。実際に話してる奴らもたくさんいるしな。子供達に違う世界から来たって言ったんだろ？」

確かにアンヘリカで子供達と遊んだ際に、そのような事があった
なと蘭は思い返す。

「そうは言ったけど……」

あの時はまさか自分が神様扱いをされるとは思いもせず口にした
内容だった。帰る事ができるのかもはっきりとしないまま、何気な
く伝えた言葉に意味があるとは思ひもしない。

セルアの話す内容が嘘だとは思わないが、どうにも納得できない
と蘭は表情を曇らせる。

「俺は嘘なんてついてねえぞ？　あとは、実際に見た光景のせいだ
な。蘭はこの為にアンヘリカへ来たんだってクロードに言ってる姿
は見物だったな」

「クロードに？」

突然、話が変わった事に蘭は首を傾げる。

「俺とユージインはどっちも知っているが、クロードは違う。蘭が
ランに変わった事もわからないで話しかけて相当驚いてたな。その
後は傍目にもわかるくらいに取り乱しやがって……まあ、時間が経
って最終的には子供達に宥められたってわけだ」

どんな状況を思い出したのかはわからないが、セルアは己の記憶
を楽しんでいるようだった。だが、表情が突然真顔に変わる。

「まあ、それ以外にも色々あったがな。目の前で蘭が死んじまっ
たんだ、わかるだろ？」

死という単語で思い出される出来事がクロードにはあった。以前、
アンヘリカで蘭が斬りつけられた際に見せた行動は、確かに死に関
係しているのだろうと皆が結論付けている。

理由がなくとも人の死には驚かされ悲しみを覚えるものだ。だが、
クロードはそれだけではない何かを抱えている。

「何かあったの？」

クロードの身に何が起きたのかと聞けば、セルアは表情を少々困ったものへと変えた。

「ないとは言えねえな。だが、蘭はクロードにも変わる機会を与えたって事なんだろう。俺も蘭に出会い変わり、世界も変わった。クロードも一緒だ」

あまりに大雑把な説明に蘭は不満をはっきりと口にする。

「よくわかんないよ」

しかしセルアはクロードに関する詳しい話をしようとはしない。自分の死を見て何かしらの影響を受けた事はわかったが、それがどのように変化したかを教える気はないらしかった。

食い下がるような蘭を見た為か、セルアは仕方がなさそうに髪をかき上げて言う。

「俺はあのクロードに蘭が会わなくて安心してるってこった」

「安心？ そんなに大変なの？」

会わせられるような状態ではないのかと聞けば、違うとセルアは苦笑する。

「……こう言うのは気にいらねえが、あのクロードを見ると少し自信がなくなりそうなんだよ。負けるとは思っちゃいねえけどな」

意味のわからない蘭は酷く眉を寄せてしまう。

「どういう意味？」

煮え切らないセルアに蘭は何度も聞き返したが、どうしてもはぐらかされてしまう。しまいには頭を乱暴に揺さぶられ、蘭は眉を吊り上げる。

「なんなの！」

「そんなもん自分で考えろ。クロードはたぶん、いや確実にアンヘリカを仕切るようになるんだろうな」

諦めたのかどうか、わずかばかりの情報を与えてくれたセルアへ蘭は更に聞く。

「マルタみたいに代表になるの？」

「おそらくな。あいつがアンヘリカと二国を取り持つ気がする」

何故かはわからないがクロードがアンヘリカの代表になるのだらうと蘭はひとまず頷く。どうやらセルアは詳しく話す気がないようなので、これ以上を教えてもらえとも思えない。

とにかくアンヘリカの代表になれるとセルアが言い切るのならば、決してクロードの状況は悪くはないのだろう。

もう少しはつきり知りたいものだと思いながら視線を落とすと、クロードに貫った腕輪はいまだに蘭の手首にはまっていた。腕を動かすとしゃらしゃらと音を奏でる姿を見ながら、ふと飛び込んで来た事実疑問が浮かぶ。

胸には傷がないが、右腕には傷跡がはつきりとあるのだ。

アンヘリカでは薄い布を羽織っていたが、どうやらなくしてしまったらしい。ヘンリクから逃れる為に駆けつけた際にでも落としてしまったのかと思いながら、晒された右腕に視線は固定される。

「どうした？」

セルアが心配そうに声をかけて来ているのはわかっていたが、蘭はすぐには答えず無言のまま視線を向けた。

「なんだ？」

不思議そうに目を合わせてくるセルアに蘭は疑問を素直にぶつける。

「結局わたしはどうして向こうに行ったの？ 突然、向こうに行って一年近くも過ごして、そして今度は急に帰って来た。傷は腕にはあるのに胸にはないし……わからない事だらけだよ？ それにセルアはここにいないけれど、何か方法が見つかったって事？」

畳みかけるような言葉にセルアは目を大きく見開いたが、すぐに表情を戻しはつきりと言う。

「向こうに行けるかと言ったら、それはもう無理だ」

「……そう」

理由を聞かずともセルアの口調から蘭は本当に無理なのだろうと思った。すると、セルアはまた別の質問への答えを口にする。

「蘭が何の為に向こうへ行ったかの理由は、結果的に言えば魔力を

溜めて魂を返す事か？」

「魔力を溜めて、魂を返す……」

疑問系であった言葉を同じように繰り返した蘭の頭を優しく撫でながら、セルアは更に続けた。

「絶対ではないが、俺とユージンとあいつの意見では蘭は死ぬ為にウィルナへ来たんじゃないかねえかって事になってる」

「死ぬ為？」

思わず声を荒げた蘭へセルアは沈んだ表情を見せ、口にはしたものの決して言いたい内容ではなかったらしい事が窺えた。

「実際に死んではないないが、向こうにあるべき魂の欠片は死を迎えたのかもしれないねえ」

小さく返された内容に、蘭は疑問を抱く。

「魂の欠片？」

どれだけ口にしたのかを覚えていない程に、魂の欠片という言葉は蘭の側に付いてまわっていた。それが何なのかをはっきりと形で知る事はできなかったが、魂の欠片を返す為に自分は死を迎えたという。忘れる事のできない身を貫いた嫌な感触を改めて思い出し、蘭は体を震わせる。

セルアは蘭の動きに気付き、優しく肩を抱くようにしてこちらを落ち着かせようとしてくれたらしい。それでも蘭の体はすぐに震えを止めはしなかったが、話は続けられる。

「正直、蘭が死ぬ為に来たって事には俺も納得はしちやいねえ。だが、帰るきっかけはそれだったとも思えるんだよ」

時期を待ち、何か動くと言って行動してきた自分達。蘭はどうしても思わずにはいられない。

「なら、死ぬ為に行ったのに、死ななかったから一年も経ったの？」
素朴な疑問だった。クロードにさらわれヘンリックには腕を斬り付けられたりと、蘭は確かに命が危機にさらされる状況に出会ってきたのだ。セルアの暴発もおそらくではあるがこちらが咄嗟に腕を掴まなければ、恐ろしい結末を迎えていた可能性がある。

しかしセルアは随分と嫌そうな表情を浮かべ、優しく触れていたはずの手で今度は蘭の頭を小突く。

「そんな事言うんじゃないよ。おそらくだが、ただ死ねばいいってもんじゃなかったんだ。蘭がいたからアンヘリカとの関係も良くなり、シエラルドとも不本意な状況ではあったが場を共にする事ができた。それらが全て集まったから上手くいったんだろうよ」

あまり良い発言ではなかったのかもしれないが、どうしても納得のできない蘭は不満げにセルアを見上げる。

「上手くいったって？」

「ウィルナ、シエラルド、アンヘリカの人間が揃った状態で起きた出来事だからこそ、誰もが否定できねえんだよ。ウィルナの姫によって奇跡が起きたって事に……。結果的にウィルナとシエラルドとアンヘリカは一つにまとまるきっかけを持った」

「一つにまとまる？」

ユージインは姫と自身の間の子をきっかけに、ウィルナとシエラルドに繋がりを持たせようとしていた。それが叶ったという事だろうかと蘭は驚かずにはいられない。

「ああ、俺は蘭がいなくなりあいつが戻って来てから半年位を見たんだけど、あのままならいずれは一つの国になるのかもしれない。そこまでは時間にかかるだろうが、戦いをするような状況からは脱していたと言えるな」

隠されていた赤い本には先視みはただ一つのものであり、決して分けてはならなかったと記されていた。蘭はウィルナ、シエラルドは元は一つの国だったのかとすら考える。先視みが関わる何かがかきつけで分かれ、再び戻る機会を得たという事ではないのだろうか。（それにウィルナとシエラルドが一つになるだけじゃなくて、アンヘリカまで）

初めからアンヘリカに住んでいた者もいたのだろうが、あの土地は二国の者が共に暮らす為に移住する場所でもあったのだ。戦いにさらされると知りながらも国を捨てるという覚悟を持った人々がい

る町だった。

ユージインはマティアスであると正体をさらしてしまっており、おそらく国をまとめ上げるには苦勞もあるのだろう。しかしウィルナでのユージインである事も変わりはないと、どちらも捨てはしないと強く告げていたのだ。

ウィルナのユージインであり、シェラルドのマティアスでもあるからこそできる事。そして、そこにアンヘリカも加わりあの世界は変わって行く。何より、誰よりも望まれていたウィルナの姫であるランが姿を現しているのだ。

おそらくだが、ユージインならば全てをやったのけるのではないかと蘭は思う。

蘭はウィルナで目覚め、アンヘリカへ行き、シェラルドと関わりを持った。その間に幾つも危険な目に会っていたと思い出しながらも告げる。

「じゃあ……わたしが行った事は無駄ではないんだね」

何となくではあるが、無意味ではない。そう思えた蘭は、帰って来て初めて笑みを浮かべる事ができた。今後も忘れられないような恐ろしい体験もしたが、こうして生きていると実感する事が叶っている。

「無駄なんて言えねえよ、蘭は体を張ってまであの世界を変えたんだよ。何もしてないわけじゃねえだろう？」

セルアも笑顔を見せ、そっと労わるように蘭の右腕に触れる。

「これがシェラルドと関わるきっかけだったもんね」

薄れはしても消える事はないであろう傷痕を見た蘭が告げると、セルアも頷いた。

「これがと言うよりは、全てがきっかけだったのかも……俺もその一人だ」

「セルアも？」

「蘭があっちの世界に行った事自体。そして、向こうで会った奴全てが何かのきっかけなんだろうよ。ユージインもクロードも必要が

あつて出会ってるんじゃないのか？」

蘭から腕を離れたセルアは己の髪をかき上げながら言うと、今度は肩を抱くようにしてこちらを強く引き寄せる。

「だが、俺はそれだけじゃなくて蘭に惹かれたんだからな？　先視みのせいとか言うなよ？」

「ちよっと、急に何？」

耳元に迫ったセルアの頭を押し退けるように片腕を伸ばせば、簡単に空いている手で抑えられてしまう。

「別にいいだろうが魔力を移すって事だ。しかし、蘭に会う為にわざわざここまで来たものの、言葉が違うのには驚いた」

魔力を移すと言われれば断れないと蘭は抵抗を止めたが、それ以上セルアの言葉に捕らわれる。

「言葉が違う？」

「ああ、蘭とは普通に話していたから気にもせずに来たが、さっぱりだった」

苦々しい表情を浮かべるセルアへ蘭は眉を潜めた。

「だって、わたしは普通に喋ってたじゃない」

文字を読む事はできなかったが、蘭が会話に困る事はなかったのだ。すると、セルアは溜息を一つ零す。

「魂の欠片を持っていたから、だろうな」

「魂の欠片……」

またも現れた言葉に蘭は繰り返す事しかできず、セルアは苦笑しながら続けた。

「先視みの力を持っている代わりに魂の一部がない。その一部を持っていたのが蘭、理由ははっきりしねえがそれがあるから会話も成り立ってたって事だろう。蘭が向こうへ行ってる間に、いなくなった姫のランはこっちに来てたんだよ。あいつはこの言葉を理解できちゃいなかった。何の知識もないままに知らない言語を喋れる蘭が特殊なんだろうな」

一人納得しているらしいセルアだったが、気になる内容は話せる

という事実だけではなかった。

「姫様がいたの？」

あれだけどこへ消えてしまったのかと思っていたウィルナの姫は、自身と入れ替わるようにこちらへ来ていたのかと蘭は声を上げる。

「ああ、あいつは俺がどうにか連れ出してここで過ごさせた」

「連れ出して？」

「あいつが蘭の家にいて家族と会ったらどうなると思うんだよ？」

警備会社とかに入っていないなくて助かった、どうにか部屋に入り込めたからな」

淡々と疑問に答えるセルアへ、蘭はまた驚きの声を発してしまう。

「わたしの部屋に入ったの？」

するとセルアは困ったように眉を下げながら言った。

「問題はそこじゃねえだろうが。あいつをここに連れてくるのが重要だったんだよ。蘭だってその格好で家族の前に出れるのか？」

確かに蘭が今まどっているのはウィルナの赤い衣服である。とてもではないがこれで外に出る事も、誰かの前へ立つ事もできるとは思えない。何より髪が有り得ない程に伸びてしまっているのだ。

どうやらすぐに帰宅はできないらしいと考えながら、蘭はとにかく疑問を口にする。

「でも、なんでわたしと入れ替わりでここへ来た姫様とセルアが会えるの？ おかしくない？」

その時、蘭は向こうでセルアと一緒にいるのだ。どう考えても不自然に思えた。

セルアもこちらの言わんとしている事がわかるらしい、大きく頷く。

「それは俺にもよくわからねえ。とにかく、俺はこっちに来たかった。あいつにもこっちが向いてるから行けっちは言われたんだがな、蘭が残して行った教本にはこっちの文字が書き込んであっただろ？」

困るはずだから絶対に覚えていけど、半年間嫌になるくらいに強要されたんだよ」

何やら随分と酷い目にあったようにセルアは告げていくが、蘭は再び驚くだけだ。

「向いてるって姫様が言ったの？」

蘭と入れ替わるようにやって来た姫と出会っているセルアが、姫の意見を受けてこちらへやって来ている。どうにもおかしい状況を理解する事ができない。

「ここには魔力がねえからな、溜まる事がない。俺が過ごすにはいいって言われたんだ。あいつが知っているなら何とか移動できるんじゃないかと術を使って、たまたま成功したってとこだ」

「たまたま？」

「術で世界を移動するなんて考えた事もねえ、向こうにいる時だった一瞬で場所を移動しようなんて思いもしなかった。だが、やってみればどうにかなるもんだな」

セルアの口に行っている内容はとてもではないが信じられるようなものではなかった。しかし、蘭は実際に向こうの世界へ行き、帰って来ているのだ。それだけでも移動する事が不可能ではないと証明してしまっている。

「それが成功した？」

何とも不確定な状況でやって来たらしいセルアへ聞けば、曖昧な笑みが返された。

「そういうこった。まあ、三年も前に着いちまったのは失敗だったが……どうにかなったしな」

どうもあまり良い口ぶりではないセルアに蘭は詰め寄るように問う。

「どうにかって、危なかったんじゃないの？」

しかしセルアは後悔してはいないらしい、はっきりと言い切った。「試してみなきゃわからねえんだ、俺は上手くいく事に賭けた。そして、こうしてまた蘭と会っている。問題ねえだろう？」

「問題ないって、もし……」

ここへ辿り着く事ができなかったならば、セルアの身はどうなっ

ていたのか。おそらくではあるが、酷い結果が待っているような気がする」と口にはできないまま蘭はうつむく。

「そうやって蘭が俺を心配してくれるなら、来た甲斐があるってんだ」

何故か嬉しそうな声を上げたセルアへどうしたのかと目を向けると、真剣な瞳がこちらを見つめていた。

「俺がここへ来たのには他にも理由がある」

間近にいるセルアがどこか苦しそうな表情で言葉を搾り出す。

「蘭が最後に俺の名前を呼んだからだ」

「わたしが……名前を？」

真っすぐに見据えてくるセルアを瞳に映しながらも蘭は、その瞬間を思い出そうとした。

「覚えてねえのか？ 崩れ落ちながら、蘭は俺の名前を呼んだんだよ」

しかし蘭にとっては全く記憶にない出来事だった。確かにあの時セルアの姿が思い浮かんだとは思ったが、それを言葉に出していたのかまではわからない。

何故自分はセルアを思い出したのだろうか？ 蘭はそれすらに疑問を覚えつつも、手繰り寄せるように記憶を辿る。

そうして思い当たった感情と共に目の前にいるセルアを見た途端、蘭は顔を真っ赤に染めた。

これまでは帰れるのか帰れないのかもわからぬままであり、答えを出す事などできないのだとまるで自身に言い聞かせるように考えてきていたのだ。しかし状況は変わってしまった。はっきりと答えを出せると言える現状で、蘭は己の想いに行き当たってしまった。

セルア自身はもう帰れないのだと言い切っており、蘭のように曖昧な存在ではない。何より己の意思でこちらへ来る事を選んだのであり、迷いなど持っているはずもないのだ。

「どうした？」

聞き返して来るセルアの瞳がどこか面白がっているようにも見えた蘭は、大慌てで否定をした。

「な、なんでもないよっ。それよりもその後は？」

熱い顔を戻さなくてはと思いつつ早く話を進めようとすれば、つまらなそうに言葉が返ってくる。

「その後はさっき説明した通りだ。蘭の魔力によって世界は変わった。ユージインはランと婚約し、シェラルドとウィルナは時期を見て統合される。そこまでは何年もかかるだろうが、先視みがなくなっちゃったんだ。かえって悪い方向へは進まないだろうな」

それでもセルアはしっかりとした内容を教えてくれ、更なる事実
に蘭はまたも驚く。

「先視みがなくなったの？」

「蘭が持っていた魂の欠片が戻った事で、先視みの力は綺麗になくなっちゃったらしい。まあ、あるべきものが返って来た事により、与えられていた力が失われたって納得はしてたぞ。二人共、それで良かったみてえだ。力を持った奴にしかわからねえが、とにかくあれは不要だと言っていた。あれがある限りは平和でいられる気がしねえだよ」

ユージインなのか、それとも帰った姫が言ったのかは分からないが、蘭はその言葉で思い出す。

「平和でいられる気がしない、か。確かにユージインは先視みが嫌いだったもんね」

最後の最後に頼ろうとはしたが、決して良い力だとは思っていないとユージインは告げていた。振り回されてしまうような感情を与える先視みの力をなくした事をきくと喜んでいる。蘭はそんな風に考えてしまう。

思わず笑みをこぼした蘭へセルアも口端を上げる。

「あの世界は今、発展に向けて進んでいるはずだ。当分は陰る事もねえだろうな」

理由も忘れる程の長い間、いがみ合って来たウィルナとシェラル

ド。そして、その狭間で多くの血を流し続けてきたアンヘリカ。三つがまとまる事ができる、それはきつと良い未来なのだろうと蘭は問う。

「戦いが起こる心配って本当じゃない？」

先程も戦うような状況ではないとセルアは告げていたが、改めて聞けば少々悩ませたらしい。わずかな時間が置かれた。

「ん、小競り合いくらいはあるんじゃないか。全部が仲良くなんてはできねえだろうからな。だが、規模は違う。前に比べれば可愛いもんだろ？」

「そう言われると、そうだね」

全てが良くなるとは言いい切れないが、未来に向けてあの世界は動き出しているのだろうと蘭は納得する。

するとセルアは体の向きをわずかに変えて、蘭を更に引き寄せようとした。無理に胸元へと抱き寄せられた蘭は、両手を使って押し戻すように抵抗する。

「何？ どうしたの」

しかし、それでも離してはくれないセルアを不思議に思いながら、今までのやり取りのおかしな点に気付く。

「待って！ ちょっと待って」

「何だ？」

激しい声を上げた事を気にしたのか、セルアの腕が緩み蘭は胸元から抜け出す。そして、大きく離れる必要もないだろうと、改めて正面に座りなおし口を開いた。

「魔力がないならくつつく必要もないじゃない」

魔力を移す為だと言われ納得していたものの、この世界には魔力がないと告げられていたのだ。張り付かれている意味がないのだと蘭は訴える。

「俺がそうしたいんだからいいだろうが？」

しかしセルアはそんな事は気にしていないらしい。蘭の片手を掴むと、その甲にうやうやしく唇を落とす。

「な……な、何？」

再び蘭の顔は熱くなり、話がどこへ向かっているのかがわからな
いと混乱してしまう。

そんな様子に満足したのだろうか。セルアは蘭の手の側で嬉しそ
うに口端を上げながら、瞳だけをこちらへ向けてくる。

「向こうは向こうで上手く収まったってこった。で、こっちはこっ
ちで上手くやっていけるだろ？」

そうして当然のように紡いだ言葉へ、蘭は聞き返す。

「何？　どういう事？」

するとセルアは信じられないものを見るようにあんどりと口を開
けた。だが、すぐに言葉は放たれる。

「俺の名を呼んだくらいだ。結果を出したって事だろうか？」

「……そ、それはそうなんだけど」

思わず飛び出した自身の言葉に蘭は慌てて掴まれた腕を引っ込め、
両手で口を覆う。何故そう答えてしまったのかと思いながらもセル
アを見れば、満面の笑みが浮かんでいた。

「なら、いいだろう」

改めてこちらへにじり寄って来そうな雰囲気、蘭は両手を伸ば
しセルアを遮る。

「ま、待って！　今は無理、もう少し待って、もうちょっと」

「何だよ？　いつまで待たせる気だ」

不満そうな顔がこちらを見つめてくるが、受け入れる事はできな
い。

「いつまでって、わたしはさっき気付いたんだもん……まだ、何て
言うか……うん、とにかくお願いだから待って」

苛ついた声にどうしたものかと蘭は思ったが、よく考えると自分
は本当にまだ気付いたばかりなのだ。どうにも心の準備ができてい
ないというか、追いついて行けない。

だが、セルアもすぐに引いてはくれないらしい。

「俺は向こうだけじゃなく、こっちで三年待ったんだぞ？」

自信有りげに言い切る姿に思わず溜息が出そうになったが、蘭はどうにか押しとどめる。そうだと認めてしまったのだから仕方はないのだが、何かを言わねばと考えを巡らせた。

「ちゃんと家に帰って落ち着いてからにするからね？」

明らかに不機嫌そうな顔をしているセルアへそう告げながら、蘭は不在だった期間に気付く。

「向こうに行って……一年経ってるんだよね」

「一週間だ」

呟いた蘭へセルアが返した内容は予想外のものだった。何が一週間なのだろうか、蘭は聞き返す。

「一週間？」

「向こうには一年いたが、こっちでは一週間ってこった」

特にならかうような雰囲気もなくセルアは告げており、うまく理解のできない蘭はやはり聞き返す事しかできない。

「何が？」

「理由はわからねえが、蘭は一年、あいつは一週間を過ごしてる」
そうしてセルアが室内に置いてあるカレンダーを指差したので、蘭の視線はそちらを向く。すると、自分がいなくなったであろう年の五月と印刷されている。

「じゃあ、わたしは本当に一週間しかいなくなってるの？」

半信半疑で問う蘭へ、セルアは大きく頷く。

「そういうこった。ああ、悪いが一度だけ使わせてもらったからな」
セルアは立ち上がると、テーブルの上に置いてあった物を手にし引き返してくる。蘭は手渡された品をただ眺め首を傾げた。

随分と懐かしく感じるそれは、見知ったストラップをぶら下げている自身の携帯電話だった。ベッドサイドに置いてあったものをセルアが持ってきたのだろうか、と蘭は問う。

「どうして、携帯？」

受け取ったものの、全く意味がわからない。

「ただいなくなったら問題だろうか？　だからメールを一度送った」

「誰に？」

「蘭の母親にだ」

「お母さんに？」

セルアの言葉を聞きながら電源ボタンを押し、ゆっくりと起動する画面を見つめる。なかなか操作のできない様子にこんなにも遅いものだったかと思いつながら蘭は、送信フォルダを開いた。

最新の履歴は確かに母に宛てたものであり、いなくなったであろう日に送られている。蘭はその内容を確認した。

一週間、出かけてきます。心配しないでね。

ただ、それだけだった。

呆然と画面を見つめる蘭へ、セルアははたと思い出したと口を開く。

「送ってすぐに電源は切ってるからな。他は何もいじってないし、見てないぞ」

勝手に携帯電話を使われる事は確かに嫌なのだが、今はそこを重視する時なのかと疑問を覚えつつ蘭は眉を潜める。

一年間いなくなっていたのではなく、一週間だった。それはありがたような気もしている。しかし、短いとはいえたった一通のメールで家を出てしまった事には変わりがない。

現にメールを開いている状態の為に着信音は鳴らないが、サーバーに保管されていたのであろうメールを大量に受信しているのだ。

ちかちかとランプを点滅させながら画面に表示される送り主は、父と母の二人だけではなく親しい友人達までもが含まれていた。開く事がないままでも想像できる内容に蘭の顔は青ざめる。

「どこにいたのか……何て言おう」

確かに理由があつて姿を消したのではあるが、信じてもらえないと思えない。異世界の存在など誰一人、いやセルアはいるのだが通常は理解されないはずだ。

そんな蘭を見つめているセルアは、何故か自信ありげに笑う。

「そこで俺を出せばいいだろうが」

「セルアを？」

「またも意味が分からないと目を向ければ、笑みを浮かべたままセルアは告げる。」

「一緒に行つて、ここにいたつて言えればいい」

「ええつ、待ってよ」

それはまた別の問題を抱えてしまいそうな予感がし、蘭はすぐに否定をする。するとセルアは眉を潜め、大きな溜息をつく。

「さっきから待て待てつて、俺は待ちくたびれてんだよ」

「何でそこで怒るのよ？ 私だって好きで待たせてるんじゃないわ！ 少し前に死んで来たのよ？ 普通じゃないでしょ？」

ふと口にした、死んで来たという台詞に蘭は思わず笑ってしまう。そんな姿をセルアは不思議に思ったのだろう、訝しげに見つめてくる。

「どうした？」

「ううん、わたしは生きてるんだなつて改めて思つただけ」

携帯電話を握り締めたままようやくこの世界へ戻つて来た安堵感を覚えた蘭へ、セルアはしっかりと頷いてくれた。

「ああ、無事で良かった。確かめるまでに随分とかかったからな。何より……俺は守ると言つたのに蘭を見殺しにしたんだ。悪い」

そのまま暗い表情を浮かべたセルアを見ながらも蘭は考える。

「罠だと知りながら先視みの力を信じた結果がこれなのだ。あの時、セルアが地面から手を離し蘭を助けようとしたならば、アンヘリカの人々が惨事に見舞われた。更にはセルアの首には剣が向けられていたのであり、死ねば姫すらも命を失うとユージンは告げていた。抱えていたものは多分にあり、蘭一人と多数とを選び、先視みすらも考慮して悩んだ末の決断だったのだろう。」

そして、それは間違つてはいなかった。だからこそ蘭はこの世界へと帰り、あの世界は救われたのだ。

「怖かったけど……あれが必要な事だったんだよ。そうでしょ？」
様々な出来事で感覚が麻痺してしまっているのかもしれないが、

蘭は不思議と全てを受け入れる事ができ冷静に言葉を向ける。
するとセルアは頭を抱えるようにしながら顔をしかめ呟く。

「心臓に悪いどころじゃねえ光景だったけどな」

「わたしだって、凄く怖かったんだから」

物事が動く時はいつも突然であり、蘭自身もいまだに戸惑ったままであるとは言えた。しかし現状が全ての結果だと思うほかはないのだ。

まだこの部屋の外へ出たわけではないが、セルアがわざと嘘をついているという事もないだろう。確かに自身の携帯電話があり、中身を見ればウィルナへいなくなる直前まで使用していた痕跡が残っている。腕にはヘンリクに斬られた傷が残り、クロードからの贈り物である腕輪も存在していた。

驚く程に長い髪のままに蘭は、色を変えてしまったセルアの側に座っているのだ。

決して夢ではなかったと思える証拠があり、だからこそ蘭はセルアの目の前で絶命したのだろう。

自分が死んだ後にセルアがどう思ったのかはわからない。三年という月日をこちらで過ごしてきた内容もまだ詳しく耳にするまでには至らない。それでもこうして大切そうに蘭の頬に触れ、瞳を合わせてくる想い人が目の前にはいる。

「さすがにもう、危険な目には合わせねえからな？」

セルアは少年の姿のまま、こちらを見つめるクロードから蘭を守ろうとしてくれていたのだ。ユージンでなくては叶わなかったと、先視みの力によって敢えて状況を作ろうとしなければ全ては動き出しもしなかった。

もしかすると蘭は、セルアに出会わなければもっと酷い目にあったのかも知れないのだ。魔力を使い果たしてまでアンヘリカへ現れ、何かがあればいつも側にいてくれた。

大人の姿に変わったり暴発したりと驚かされる事や危険な場面も多かったのかもしれない。それでも蘭は、ずっとセルアの隣で過ご

し続けてきたのだ。

（いつからなんだろう？）

向こうでは何故セルアがこちらを気に入ってくれているのかと不思議に思っていたが、蘭は自身の感情がどこで変化したのかすらもわからなかった。

どうせ帰るのだからと初めは深く考えもしなかったはずが、いつの間にか不安定な立場に置かれている自身の状況に悩んでいたのだ。いるべき場所が決まってさえいれば答えは出せると、その時はすでに蘭の中では何かが変わってしまったのだろう。

（はっきりと区切りがつくものじゃないのかもしれない）

おそらく自覚した時が線引きではないのだと、蘭はようやく認める事の許される状況で無言のままにセルアを見つめる。

「どうした？」

返事もせずに視線を向けているのが不自然だとはわかっていた。

しかしお願いだから待って欲しいと告げてしまっている手前、今更想いを吐き出しても良いのかと蘭はどうにも面倒な自分自身に戸惑ってしまう。

（だって、本当に急なんだもの）

蘭にとつてはあつという間の出来事が、相手にとっては三年以上というおかしな状況が更に頭を悩ませてくるのだ。本当に随分と待たせてしまっているらしいという気持ちも現れてしまうところが困りものだった。

（まあ、言葉ではまだ言わないって事にすればいいかも）

不思議そうに瞳を向けてくるセルアは、蘭の頬に触れながら言葉を待っているように見える。危険な目には合わせないのだと、守ってくれるのだと真剣に想いをぶつけてくれるのだ。

ならばこちらも何かをぶつけようと、蘭は布団へ両手を付くと力を入れ体を浮かす。そしてそのまま思い切ってセルアに抱きつく、慌てる声が上がった。

「何だ？」

側にいる事は当然だったが、蘭が自らセルアに触れるという事態は珍しいのだ。もう心は決まっていると蘭は初めてセルアの胸に飛び込み、返ってきた反応に喜ぶ。今までは驚かされるばかりだったが、逆の立場になる事も可能らしい。

「ねえ、本当にもう何年も待たせたりはしないから、少しだけ待ってくれる？」

セルアの首に両腕を回し蘭が笑い声交じりに告げると、目の前の眉がこれでもかと寄せられるのがわかる。

「この状態で待って言うのか？」

「いいじゃない。わたしはやつと決められる場所に帰ってこられたの」

態度ですでに表してしまっているようにも思えたが、蘭はこれからこちらの世界でやるべき事があるのだ。あちらにいた期間を考えると一週間などわずかなものだが、それなりに必要とされる事象が存在しているはずだった。

そして、向こうで起きた出来事をもっと時間をかけて聞き、受け止めて納得をしたいとも思えた。

全てを落ち着かせてからでも大丈夫と言える状況であるはずなのだ、蘭はただセルアの温もりを楽しんでみる。

「鬼か」

表情も言葉も嫌そうではあったが、セルアはすぐに応えるように蘭の背中へ腕を回す。どうやらこちらへやって来て覚えたらしい発言を耳にしつつも蘭はまた笑う。

「セルア、ありがとう」

答えはすでに出ていたとしても、蘭が口に出せるのはもう少し先になりそうだった。

終章・君がいる世界（後書き）

「君がいる世界」を読んでもくださりありがとうございます。

これにて蘭の物語は終了となりますが、ユージン、セルア、クロードと主人公を変えながら先視みのある世界の物語は続きます。

携帯サイトにて二作目である「君が視る世界」が完結済ですので、もし良かったらそちらもお付き合いいただけると嬉しいです。（小説家になろうへの掲載も考えてはいますが、現在は時間の捻出が難しく時期は未定です）

あとがきまでも読んでくださり、本当にありがとうございます。

2011年9月11日 みなわ彌生

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9904t/>

君がいる世界【改稿版】

2011年10月11日23時33分発行